

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第26集

# 宮下遺跡Ⅲ

2018

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財報告書 第26集

みや した い せき  
宮 下 遺 跡 III

2018

埼玉県熊谷市教育委員会



## 序

平成17年10月1日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成19年2月13日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約20km、東西約14kmにわたり、面積は159.88km<sup>2</sup>、人口は20万人を越えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の2大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、新市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市宮下遺跡調査会において平成28・29年に発掘調査を行った宮下遺跡について報告するものであります。本遺跡からは、古くは縄文時代早期、奈良・平安時代、室町時代等の人々の営みが確認され、その中でも奈良・平安時代については、集落が8世紀から11世紀にわたって存続し、小鍛冶を行っていた痕跡がみつかった等の成果が判明しています。また、調査地点周辺は埼玉県指定史跡である寺内廃寺が所在しており、本遺跡との関連性は当時の男衾郡を解明する上で重要な手掛かりであり、本市の歴史的発展を考証する上でも非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました株式会社ヤオコ様並びに地元関係者には厚くお礼申しあげ、発刊のあいさつといたします。

平成30年3月

熊谷市教育委員会  
教育長 野原 晃



# 例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市千代字宮下703番1ほかにある宮下遺跡（埼玉県遺跡番号65-013）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査に係る費用は株式会社ヤオコーが負担した。
- 3 本調査は物流センター建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、発掘作業を熊谷市宮下遺跡調査会が、整理・報告書作成作業を熊谷市教育委員会が実施したものである。
- 4 本事業の組織は、第1章3のとおりである。
- 5 発掘調査期間は平成28年1月22日から平成30年3月31日までである。  
発掘作業は平成28年1月22日から平成28年3月31日まで熊谷市教育委員会 長谷川一郎、原野真祐、平成28年4月1日から平成29年5月31日まで熊谷市教育委員会 蔵持俊輔、大野美知子、島村範久、武部喜充が担当した。  
整理・報告書作成作業は平成29年4月17日から平成30年3月31日に行い、遺構・遺物整理作業及び報告書執筆・編集は、蔵持、大野、島村、武部が行い、「V 調査のまとめ」の執筆は1～3大野、4武部、5・6蔵持、7島村が担当した。縄文土器に係る文章は森田安彦氏に御協力いただいた。附編1については、清水康守氏、小川政之氏、引間章夫氏、小勝幸夫氏より玉稿を賜った。骨の鑑定について、梶ヶ山真理氏に実見いただき御見解を賜った。
- 6 発掘調査のうち、発掘作業における図面作成及び空中写真撮影、整理等作業における遺物の一部の実測・トレース作業及び遺構データ処理の一部と、第46号竪穴建物跡から出土した鍛冶関連遺物の仕分け分類を株式会社航空研究所に委託した。また、発掘作業における地中レーダー探査を株式会社技術に委託した。
- 7 発掘調査に係る写真撮影は、蔵持、大野、島村、武部、長谷川、原野が行った。
- 8 遺物の写真撮影は、吉田哲夫氏に御協力をいただいたほか、蔵持、島村が行った。また、赤外線写真及びレントゲン写真は公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団より御協力・御提供いただいた。
- 9 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 10 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜りました。









（敬称略、五十音順）

株式会社ヤオコー 株式会社安藤・間 株式会社鹿島道路

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 株式会社東都文化財研究所

浅野晴樹 赤熊浩一 幾島 審 内田勇樹 大井教寛 小川政之 小野美代子 折原洋一  
梶ヶ山真理 金子直行 坂本和俊 澤口和正 清水康守 菅谷浩之 瀧瀬芳之 宅間清公  
田中広明 富田和夫 蛭間健悟 福田 聖 松本富雄 水口由紀子 村山 卓 森田安彦  
山崎 武

# 凡 例

- 1 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。  
全測図割図…1/300 遺構平面図・断面図…1/30・1/60・1/80・1/100  
遺構の略記号は次のとおりである。  
SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SY：土取り遺構 SE：井戸跡  
FP：炉穴 SZ：火葬跡 SK：土坑 SN：畝跡 SX：性格不明遺構 P：ピット  
各遺構ごとに順次番号を付したが、ピットだけは基数が膨大なため10m方眼のグリッドごとに順次付した。本文及び挿図中の表記例はBN-A0グリッド内の第2号ピットの場合「BN-A0 G P2」とした。
- 2 遺構挿図中のスクリーンは次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。  
 = 地山  = 粘土  = 焼土化  = 還元化
- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、竪穴建物跡掘方の線は灰色で表示した。また、遺構断面左脇に示したローマ数字は地山の基本土層（第23図参照）である。
- 4 遺構挿図中、土層注記のうち、以下については略号を用いた。  
B：ブロック L：ローム LB：ロームブロック
- 5 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。  
土器・陶磁器・土製品…1/4 石器・石製品・鉄滓・金属製品…1/3
- 6 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。  
縄文式土器・土師器・酸化焰焼成の須恵器・須恵系土師質土器・ロクロ土師器・土師質土器=白抜き  
還元焰焼成の須恵器=黒塗り 灰釉陶器=  
また、底部調整は回転系切りが「d」、回転ヘラケズリは「\」で示した。  
遺物挿図中の断面箇所以外のスクリーンは次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。  
 = 油煙・墨・羽口滓化箇所  = 黒色処理・赤彩  
 = 摩耗範囲・鉄分付着・羽口還元化箇所
- 7 遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。
- 8 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。  
分量の単位はcm、gである。( ) が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。  
A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質  
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫
- 9 写真図版の遺構・遺物の縮尺は、すべて任意である。また、第109～111図版に示した墨書土器に係るカラー写真・赤外線写真は、明度・コントラストについて任意に補正を加えてある。
- 10 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 遺跡の概要	
1 調査の方法	8
2 検出された遺構と遺物	8
3 基本土層	31
IV 遺構と遺物	33
1 竪穴建物跡	33
2 掘立柱建物跡	222
3 溝跡	242
4 土取り遺構	293

5 井戸跡	299
6 炉穴	307
7 火葬跡	314
8 土坑	315
9 畝跡	376
10 性格不明遺構	377
11 ビット	386
12 谷地形	389
13 遺構外出土遺物	399
V 調査のまとめ	414
VI 附編	442
1 宮下遺跡の地形・地質	442
2 宮下遺跡における地中レーダー探査	451

# 挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査地点位置図	9
第4図 グリッド設定図	10
第5図 等値線図	12
第6図 全測図配置図	15
第7図 全測図割図(1)	16
第8図 全測図割図(2)	17
第9図 全測図割図(3)	18
第10図 全測図割図(4)	19
第11図 全測図割図(5)	20
第12図 全測図割図(6)	21
第13図 全測図割図(7)	22
第14図 全測図割図(8)	23
第15図 全測図割図(9)	24
第16図 全測図割図(10)	25
第17図 全測図割図(11)	26
第18図 全測図割図(12)	27
第19図 全測図割図(13)	28
第20図 全測図割図(14)	29
第21図 全測図割図(15)	30
第22図 テストビット配置図	31

第23図 土層柱状図	32
第24図 竪穴建物跡分類模式図	33
第25図 第1号竪穴建物跡	34
第26図 第1号竪穴建物跡出土遺物	34
第27図 第2号竪穴建物跡	35
第28図 第2号竪穴建物跡出土遺物	36
第29図 第3号竪穴建物跡	37
第30図 第3号竪穴建物跡出土遺物	38
第31図 第4号竪穴建物跡	39
第32図 第4号竪穴建物跡出土遺物	39
第33図 第5号竪穴建物跡1	40
第34図 第5号竪穴建物跡2	40
第35図 第5号竪穴建物跡出土遺物	41
第36図 第6号竪穴建物跡	43
第37図 第6号竪穴建物跡出土遺物	44
第38図 第7号竪穴建物跡	45
第39図 第7号竪穴建物跡出土遺物	46
第40図 第8号竪穴建物跡	47
第41図 第8号竪穴建物跡出土遺物	48
第42図 第9号竪穴建物跡	50
第43図 第9号竪穴建物跡出土遺物	50
第44図 第10号竪穴建物跡1	51



第45図	第10号竪穴建物跡2	52	第105図	第34号竪穴建物跡2	108
第46図	第10号竪穴建物跡出土遺物	52	第106図	第34号竪穴建物跡出土遺物	109
第47図	第11号竪穴建物跡	54	第107図	第35号竪穴建物跡	110
第48図	第11号竪穴建物跡出土遺物	54	第108図	第35号竪穴建物跡出土遺物	111
第49図	第12号竪穴建物跡	55	第109図	第36号竪穴建物跡	112
第50図	第12号竪穴建物跡出土遺物	55	第110図	第36号竪穴建物跡出土遺物	113
第51図	第13号竪穴建物跡	57	第111図	第37号竪穴建物跡	115
第52図	第13号竪穴建物跡出土遺物	57	第112図	第37号竪穴建物跡出土遺物	115
第53図	第14・15号竪穴建物跡	59	第113図	第38号竪穴建物跡	116
第54図	第14号竪穴建物跡出土遺物	60	第114図	第38号竪穴建物跡出土遺物	117
第55図	第15号竪穴建物跡出土遺物	61	第115図	第39号竪穴建物跡	118
第56図	第16号竪穴建物跡1	62	第116図	第39号竪穴建物跡出土遺物	118
第57図	第16号竪穴建物跡2	63	第117図	第40号竪穴建物跡1	119
第58図	第16号竪穴建物跡出土遺物	64	第118図	第40号竪穴建物跡2	120
第59図	第17号竪穴建物跡1	65	第119図	第40号竪穴建物跡出土遺物	121
第60図	第17号竪穴建物跡2	66	第120図	第41号竪穴建物跡1	122
第61図	第17号竪穴建物跡出土遺物1	67	第121図	第41号竪穴建物跡2	122
第62図	第17号竪穴建物跡出土遺物2	68	第122図	第41号竪穴建物跡出土遺物	123
第63図	第18号竪穴建物跡1	70	第123図	第42号竪穴建物跡	124
第64図	第18号竪穴建物跡2	70	第124図	第42号竪穴建物跡出土遺物	125
第65図	第18号竪穴建物跡出土遺物1	71	第125図	第43号竪穴建物跡1	126
第66図	第18号竪穴建物跡出土遺物2	72	第126図	第43号竪穴建物跡2	127
第67図	第19号竪穴建物跡1	74	第127図	第43号竪穴建物跡出土遺物	127
第68図	第19号竪穴建物跡2	75	第128図	第44号竪穴建物跡1	128
第69図	第19号竪穴建物跡出土遺物1	76	第129図	第44号竪穴建物跡2	129
第70図	第19号竪穴建物跡出土遺物2	77	第130図	第44号竪穴建物跡出土遺物	130
第71図	第20号竪穴建物跡1	78	第131図	第45号竪穴建物跡1	131
第72図	第20号竪穴建物跡2	78	第132図	第45号竪穴建物跡2	132
第73図	第20号竪穴建物跡出土遺物	79	第133図	第45号竪穴建物跡出土遺物1	133
第74図	第21号竪穴建物跡1	81	第134図	第45号竪穴建物跡出土遺物2	134
第75図	第21号竪穴建物跡2	82	第135図	第46号竪穴建物跡1	135
第76図	第21号竪穴建物跡3	82	第136図	第46号竪穴建物跡2	136
第77図	第21号竪穴建物跡出土遺物	83	第137図	第46号竪穴建物跡出土遺物1	137
第78図	第22号竪穴建物跡	84	第138図	第46号竪穴建物跡出土遺物2	138
第79図	第22号竪穴建物跡出土遺物	85	第139図	S146 鉄関連遺物グリッド毎出土量	141
第80図	第23号竪穴建物跡	86	第140図	S146 鉄関連遺物グラフ(1)	143
第81図	第23号竪穴建物跡出土遺物	86	第141図	S146 鉄関連遺物グラフ(2)	144
第82図	第24号竪穴建物跡	87	第142図	第47・79号竪穴建物跡	145
第83図	第24号竪穴建物跡出土遺物	88	第143図	第47号竪穴建物跡	145
第84図	第25号竪穴建物跡	89	第144図	第47号竪穴建物跡出土遺物1	147
第85図	第26号竪穴建物跡	90	第145図	第47号竪穴建物跡出土遺物2	148
第86図	第26号竪穴建物跡出土遺物	91	第146図	第79号竪穴建物跡出土遺物	149
第87図	第27号竪穴建物跡	91	第147図	第48号竪穴建物跡	149
第88図	第27号竪穴建物跡出土遺物	92	第148図	第48号竪穴建物跡出土遺物	150
第89図	第28号竪穴建物跡1	93	第149図	第49号竪穴建物跡	151
第90図	第28号竪穴建物跡2	94	第150図	第49号竪穴建物跡2	151
第91図	第28号竪穴建物跡出土遺物	95	第151図	第49号竪穴建物跡出土遺物	152
第92図	第29号竪穴建物跡1	97	第152図	第50号竪穴建物跡1	153
第93図	第29号竪穴建物跡2	98	第153図	第50号竪穴建物跡2	154
第94図	第29号竪穴建物跡出土遺物	99	第154図	第50号竪穴建物跡3	155
第95図	第30号竪穴建物跡	100	第155図	第50号竪穴建物跡出土遺物	156
第96図	第31号竪穴建物跡1	101	第156図	第51号竪穴建物跡1	158
第97図	第31号竪穴建物跡2	101	第157図	第51号竪穴建物跡2	159
第98図	第31号竪穴建物跡出土遺物	102	第158図	第51号竪穴建物跡出土遺物	159
第99図	第32号竪穴建物跡1	103	第159図	第52号竪穴建物跡1	160
第100図	第32号竪穴建物跡2	103	第160図	第52号竪穴建物跡2	161
第101図	第32号竪穴建物跡出土遺物	104	第161図	第52号竪穴建物跡3	162
第102図	第33号竪穴建物跡	106	第162図	第52号竪穴建物跡出土遺物	163
第103図	第33号竪穴建物跡出土遺物	107	第163図	第53号竪穴建物跡1	164
第104図	第34号竪穴建物跡1	107	第164図	第53号竪穴建物跡2	165

第165 图	第53号竖穴建物踏出土遺物	166	第225 图	第76号竖穴建物踏出土遺物	218
第166 图	第54号竖穴建物跡1	168	第226 图	第77号竖穴建物跡	219
第167 图	第54号竖穴建物跡2	169	第227 图	第78号竖穴建物跡	219
第168 图	第54号竖穴建物踏出土遺物	170	第228 图	第80号竖穴建物跡・第7号性格不明遺構	220
第169 图	第55号竖穴建物跡1	171	第229 图	第80号竖穴建物踏出土遺物	221
第170 图	第55号竖穴建物跡2	172	第230 图	第1号竪立柱建物跡	223
第171 图	第55号竖穴建物踏出土遺物	173	第231 图	第2号竪立柱建物跡	224
第172 图	第56号竖穴建物跡	174	第232 图	第3号竪立柱建物跡	225
第173 图	第56号竖穴建物踏出土遺物	175	第233 图	第4号竪立柱建物跡	226
第174 图	第57号竖穴建物跡	176	第234 图	第5号竪立柱建物跡1	227
第175 图	第57号竖穴建物踏出土遺物	176	第235 图	第5号竪立柱建物跡2	228
第176 图	第58号竖穴建物跡1	177	第236 图	第6号竪立柱建物跡	229
第177 图	第58号竖穴建物跡2	178	第237 图	第7号竪立柱建物跡	230
第178 图	第58号竖穴建物踏出土遺物	178	第238 图	第8号竪立柱建物跡	231
第179 图	第59号竖穴建物跡1	180	第239 图	第9号竪立柱建物跡	232
第180 图	第59号竖穴建物跡2	181	第240 图	第10号竪立柱建物跡	233
第181 图	第59号竖穴建物踏出土遺物	182	第241 图	第11号竪立柱建物跡	234
第182 图	第60号竖穴建物跡1	184	第242 图	第12号竪立柱建物跡	235
第183 图	第60号竖穴建物跡2	185	第243 图	第13号竪立柱建物跡	236
第184 图	第60号竖穴建物踏出土遺物	186	第244 图	第14号竪立柱建物跡	237
第185 图	第61号竖穴建物跡	187	第245 图	第15号竪立柱建物跡	238
第186 图	第61号竖穴建物踏出土遺物	188	第246 图	第16号竪立柱建物跡	239
第187 图	第62号竖穴建物跡1	189	第247 图	第15・16号竪立柱建物跡	240
第188 图	第62号竖穴建物跡2	190	第248 图	第4・9・11・16号竪立柱建物踏出土遺物	241
第189 图	第62号竖穴建物踏出土遺物	191	第249 图	第1~8号溝跡	243
第190 图	第63号竖穴建物跡	192	第250 图	第9号溝跡	247
第191 图	第63号竖穴建物踏出土遺物	193	第251 图	第11号溝跡	247
第192 图	第64号竖穴建物跡1	193	第252 图	第10・12号溝跡	250
第193 图	第64号竖穴建物跡2	194	第253 图	第13~20号溝跡	250
第194 图	第64号竖穴建物踏出土遺物	194	第254 图	第21・22号溝跡	252
第195 图	第65号竖穴建物跡1	196	第255 图	第23~40号溝跡	255
第196 图	第65号竖穴建物跡2	196	第256 图	第41・58・59号溝跡	261
第197 图	第65号竖穴建物踏出土遺物	197	第257 图	第42~54・57号溝跡	265
第198 图	第66号竖穴建物跡1	198	第258 图	第55・78・79号溝跡	268
第199 图	第66号竖穴建物跡2	199	第259 图	第55号溝跡 掘削痕	269
第200 图	第66号竖穴建物踏出土遺物	199	第260 图	第55号溝跡ピット群	271
第201 图	第67号竖穴建物跡1	200	第261 图	第56号溝跡	272
第202 图	第67号竖穴建物跡2	201	第262 图	第33・60~71号溝跡	275
第203 图	第67号竖穴建物踏出土遺物	202	第263 图	第72~77号溝跡	279
第204 图	第68号竖穴建物跡1	203	第264 图	第1~12・21・22・41・49・56・58号溝跡	281
第205 图	第68号竖穴建物跡2	204	第265 图	第13~20・23~26・32・33・40号溝跡	282
第206 图	第68号竖穴建物踏出土遺物	204	第266 图	第26~31・33~40・72~77号溝跡	283
第207 图	第69号竖穴建物跡1	205	第267 图	第43・55・78・79号溝跡	284
第208 图	第69号竖穴建物跡2	206	第268 图	第42~54・56・57号溝跡	285
第209 图	第69号竖穴建物踏出土遺物	207	第269 图	第33・60~71号溝跡	286
第210 图	第70号竖穴建物跡1	208	第270 图	第3・9・14・15・17・18・23・24・43・48・49号溝跡出土遺物	287
第211 图	第70号竖穴建物跡2	209	第271 图	第55号溝跡出土遺物1	288
第212 图	第70号竖穴建物踏出土遺物	209	第272 图	第55号溝跡出土遺物2	289
第213 图	第71号竖穴建物跡	210	第273 图	第56号溝跡出土遺物	290
第214 图	第71号竖穴建物踏出土遺物	210	第274 图	第1・2号土取り遺構	294
第215 图	第72・74号竖穴建物跡	211	第275 图	第1号土取り遺構出土遺物	295
第216 图	第72号竖穴建物跡	212	第276 图	第1~4号井戸跡	300
第217 图	第72号竖穴建物踏出土遺物	213	第277 图	第5・6号井戸跡	302
第218 图	第74号竖穴建物跡	214	第278 图	第7号井戸跡	303
第219 图	第74号竖穴建物踏出土遺物	214	第279 图	第7号井戸跡出土遺物1	304
第220 图	第73号竖穴建物跡	215			
第221 图	第73号竖穴建物踏出土遺物	216			
第222 图	第75号竖穴建物跡	217			
第223 图	第75号竖穴建物踏出土遺物	217			
第224 图	第76号竖穴建物跡	218			

第280図	第7号井戸跡出土遺物2	305
第281図	第1～5号炉穴	311
第282図	第6～11号炉穴	312
第283図	第12～14号炉穴	313
第284図	第2号炉穴出土遺物	313
第285図	第1・2号火葬跡	314
第286図	土坑形状分類模式図	315
第287図	第1～11号土坑	321
第288図	第12～22号土坑	322
第289図	第23～35号土坑	323
第290図	第36～46号土坑	324
第291図	第47～57号土坑	325
第292図	第58～70号土坑	326
第293図	第71～81号土坑	327
第294図	第82～93・109号土坑	328
第295図	第94～107号土坑	329
第296図	第108・110～117号土坑	330
第297図	第118～128・151・152号土坑	331
第298図	第129～137・139・140号土坑	332
第299図	第141～150、153・154号土坑	333
第300図	第155～165号土坑	334
第301図	第166～177号土坑	335
第302図	第178～190号土坑	336
第303図	第191～202号土坑	337
第304図	第203～213号土坑	338
第305図	第214～226号土坑	339
第306図	第227～238号土坑	340
第307図	第239～250号土坑	341
第308図	第251～263号土坑	342
第309図	第264～272号土坑	343
第310図	第273～285号土坑	344
第311図	第286～291、293～298号土坑	345
第312図	第299～311号土坑	346
第313図	第312～321号土坑	347
第314図	第322～333号土坑	348
第315図	第334～345号土坑	349
第316図	第346～354・356・357・488号土坑	350
第317図	第358～368号土坑	351
第318図	第369～381号土坑	352
第319図	第382～390号土坑	353
第320図	第391～401号土坑	354
第321図	第402～415号土坑	355
第322図	第416～426号土坑	356
第323図	第427～436号土坑	357
第324図	第437～447・449・450号土坑	358
第325図	第7・11・16・18・21・25・31・32・63・69・71・79号土坑出土遺物	365
第326図	第80・90・100・108・114・119・130号土坑出土遺物	366
第327図	第130～132・134・135・137・144・150・151・154・159・162・163号土坑出土遺物	367
第328図	第164・165・168・172・185・198・203・206・218・222・223・241・243号土坑出土遺物	368
第329図	第243・251・263号土坑出土遺物	369
第330図	第264・266・269号土坑出土遺物	370
第331図	第270・273・278・282号土坑出土遺物	371
第332図	第275・288・290・301・304号土坑出土遺物	372
第333図	第327・328・349・350・366・377・379・380・381・425・442・444・449・450号土坑出土遺物	373

第334図	第1号品跡	376
第335図	第1号品跡出土遺物	377
第336図	第1号性格不明遺構	378
第337図	第2号性格不明遺構	379
第338図	第3号性格不明遺構	381
第339図	第4号性格不明遺構	381
第340図	第5号性格不明遺構	382
第341図	第6号性格不明遺構	382
第342図	第8号性格不明遺構	383
第343図	第9号性格不明遺構	383
第344図	第10号性格不明遺構	384
第345図	第4号性格不明遺構出土遺物	385
第346図	ビット	387
第347図	ビット出土遺物	388
第348図	西谷土層断面図	391
第349図	東谷土層断面図1	392
第350図	東谷土層断面図2	393
第351図	東谷出土遺物1	394
第352図	東谷出土遺物2	395
第353図	東谷出土遺物3	396
第354図	西谷出土遺物	398
第355図	遺構外出土遺物1	399
第356図	遺構外出土遺物2	400
第357図	遺構外出土遺物3	401
第358図	遺構外出土遺物4	402
第359図	遺構外出土遺物5	403
第360図	遺構外出土遺物6	404
第361図	遺構外出土遺物7	405
第362図	遺構外出土遺物8	406
第363図	遺構外出土遺物9	407
第364図	遺構外出土遺物10	408
第365図	遺構外出土遺物11	409
第366図	桑痕文期の遺構分布	415
第367図	古代の土器編年図1	417
第368図	古代の土器編年図2	419
第369図	調査区北西側古代の遺構 時期別配置図	421
第370図	墨書・刻書集成図	432
第371図	第55号溝とその周辺	437
第372図	浅間Aテフラを含まない遺構	439
第373図	浅間Aテフラを含む遺構	440
第374図	宮下遺跡調査地点5000分1	442
第375図	迅速測図「熊谷」	443
第376図	宮下遺跡周辺の江南台地	443
第377図	台地構成層の様子	444
第378図	台地構成層の地質柱状図	444
第379図	T P - 1南壁	445
第380図	T P - 1の地質柱状図	445
第381図	T P - 5南壁	445
第382図	T P - 6南壁	445
第383図	東谷土層	446
第384図	東谷の地質柱状図	446
第385図	黒色表土層	446
第386図	関東ローム層の諸分析	447
第387図	平板状火山ガラス	448
第388図	大宮台地のAT火山ガラス	448
第389図	完新世の火山灰	449
第390図	個数による礫層組成と礫径個数分布	450
第391図	地中レーダー探査位置図	452
第392図	地点別断面図(抜粋)	453

# 挿 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覽表	5
第2表	第1号竪穴建物跡出土遺物觀察表	34
第3表	第2号竪穴建物跡出土遺物觀察表	36
第4表	第3号竪穴建物跡出土遺物觀察表	38
第5表	第4号竪穴建物跡出土遺物觀察表	39
第6表	第5号竪穴建物跡出土遺物觀察表	42
第7表	第6号竪穴建物跡出土遺物觀察表	45
第8表	第7号竪穴建物跡出土遺物觀察表	46
第9表	第8号竪穴建物跡出土遺物觀察表	49
第10表	第9号竪穴建物跡出土遺物觀察表	50
第11表	第10号竪穴建物跡出土遺物觀察表	53
第12表	第11号竪穴建物跡出土遺物觀察表	54
第13表	第12号竪穴建物跡出土遺物觀察表	56
第14表	第13号竪穴建物跡出土遺物觀察表	58
第15表	第14号竪穴建物跡出土遺物觀察表	61
第16表	第15号竪穴建物跡出土遺物觀察表	61
第17表	第16号竪穴建物跡出土遺物觀察表	63
第18表	第17号竪穴建物跡出土遺物觀察表	69
第19表	第18号竪穴建物跡出土遺物觀察表	73
第20表	第19号竪穴建物跡出土遺物觀察表	77
第21表	第20号竪穴建物跡出土遺物觀察表	80
第22表	第21号竪穴建物跡出土遺物觀察表	83
第23表	第22号竪穴建物跡出土遺物觀察表	85
第24表	第23号竪穴建物跡出土遺物觀察表	86
第25表	第24号竪穴建物跡出土遺物觀察表	88
第26表	第26号竪穴建物跡出土遺物觀察表	91
第27表	第27号竪穴建物跡出土遺物觀察表	92
第28表	第28号竪穴建物跡出土遺物觀察表	96
第29表	第29号竪穴建物跡出土遺物觀察表	98
第30表	第31号竪穴建物跡出土遺物觀察表	102
第31表	第32号竪穴建物跡出土遺物觀察表	105
第32表	第33号竪穴建物跡出土遺物觀察表	106
第33表	第34号竪穴建物跡出土遺物觀察表	109
第34表	第35号竪穴建物跡出土遺物觀察表	111
第35表	第36号竪穴建物跡出土遺物觀察表	114
第36表	第37号竪穴建物跡出土遺物觀察表	116
第37表	第38号竪穴建物跡出土遺物觀察表	117
第38表	第39号竪穴建物跡出土遺物觀察表	118
第39表	第40号竪穴建物跡出土遺物觀察表	120
第40表	第41号竪穴建物跡出土遺物觀察表	123
第41表	第42号竪穴建物跡出土遺物觀察表	125
第42表	第43号竪穴建物跡出土遺物觀察表	128
第43表	第44号竪穴建物跡出土遺物觀察表	129
第44表	第45号竪穴建物跡出土遺物觀察表	134
第45表	第46号竪穴建物跡出土遺物觀察表	139
第46表	第47号竪穴建物跡出土遺物觀察表	148
第47表	第79号竪穴建物跡出土遺物觀察表	149
第48表	第48号竪穴建物跡出土遺物觀察表	150

第49表	第49号竪穴建物跡出土遺物觀察表	152
第50表	第50号竪穴建物跡出土遺物觀察表	157
第51表	第51号竪穴建物跡出土遺物觀察表	159
第52表	第52号竪穴建物跡出土遺物觀察表	162
第53表	第53号竪穴建物跡出土遺物觀察表	167
第54表	第54号竪穴建物跡出土遺物觀察表	169
第55表	第55号竪穴建物跡出土遺物觀察表	173
第56表	第56号竪穴建物跡出土遺物觀察表	175
第57表	第57号竪穴建物跡出土遺物觀察表	176
第58表	第58号竪穴建物跡出土遺物觀察表	179
第59表	第59号竪穴建物跡出土遺物觀察表	183
第60表	第60号竪穴建物跡出土遺物觀察表	185
第61表	第61号竪穴建物跡出土遺物觀察表	188
第62表	第62号竪穴建物跡出土遺物觀察表	191
第63表	第63号竪穴建物跡出土遺物觀察表	193
第64表	第64号竪穴建物跡出土遺物觀察表	195
第65表	第65号竪穴建物跡出土遺物觀察表	197
第66表	第66号竪穴建物跡出土遺物觀察表	199
第67表	第67号竪穴建物跡出土遺物觀察表	202
第68表	第68号竪穴建物跡出土遺物觀察表	204
第69表	第69号竪穴建物跡出土遺物觀察表	207
第70表	第70号竪穴建物跡出土遺物觀察表	209
第71表	第71号竪穴建物跡出土遺物觀察表	210
第72表	第72号竪穴建物跡出土遺物觀察表	213
第73表	第74号竪穴建物跡出土遺物觀察表	214
第74表	第73号竪穴建物跡出土遺物觀察表	216
第75表	第75号竪穴建物跡出土遺物觀察表	217
第76表	第76号竪穴建物跡出土遺物觀察表	218
第77表	第80号竪穴建物跡出土遺物觀察表	221
第78表	第4・9・11・16号 掘立柱建物跡出土遺物觀察表	241
第79表	溝跡出土遺物觀察表	290
第80表	第1号土取り遺構出土遺物觀察表	295
第81表	第7号井戸跡出土遺物觀察表	306
第82表	第2号炬穴出土遺物觀察表	313
第83表	土坑計測表	359
第84表	土坑出土遺物觀察表	374
第85表	第1号高跡遺構出土遺物觀察表	377
第86表	第4号性格不明遺構 出土遺物觀察表	385
第87表	ビット出土遺物觀察表	388
第88表	東谷出土遺物觀察表	397
第89表	西谷出土遺物觀察表	398
第90表	遺構外出土遺物觀察表	410
第91表	宮下連跡生業間連遺物組成表	422
第92表	鉄・銅製品時期別集成表	428
第93表	竪穴建物跡一覽表	429

# 図版目次

- 図版 1 調査区全景  
図版 2 調査区遺景 1 調査区遺景 2  
図版 3 (BB-AO G ~ BT-AU G) 空中写真 (AP-AL G ~ BA-AO G) 空中写真  
図版 4 (CB-AM G ~ CB-AQ G) 空中写真 (BN-AJ G ~ CB-AP G) 空中写真  
図版 5 (BI-AL G ~ BP-AN G) 空中写真 (BO-AN G ~ BV-AP G) 空中写真  
図版 6 (BL-AS G ~ BT-AV G) 空中写真 (BA-AP G ~ BL-AR G) 空中写真  
図版 7 (AW-AN G ~ BE-AP G) 空中写真 (AR-AL G ~ AW-AM G) 空中写真  
図版 8 (AP-AV G ~ AV-AM G) 空中写真 (AK-AP G ~ AV-AT G) 空中写真  
図版 9 第 1 号竪穴建物跡 同掘方 第 2 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 第 3 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
図版 10 第 5 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2 第 6 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
第 7 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況  
図版 11 第 8 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2 第 9 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況  
第 10 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2  
図版 12 第 11 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 第 12 号竪穴建物跡 同遺物出土状況 1・2  
同礫出土状況 第 13 号竪穴建物跡 同遺物出土状況  
図版 13 第 14 号竪穴建物跡 同遺物出土状況 1~3 第 15 号竪穴建物跡掘方  
第 16 号竪穴建物跡 同掘方 同遺物出土状況  
図版 14 第 17 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3 同鍛冶炉と鉄床石出土状況 第 18 号竪穴建物跡掘方  
第 19 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
図版 15 第 20 号竪穴建物跡遺物出土状況 同カマド 第 21 号竪穴建物跡 同遺物出土状況  
第 22 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1~3  
図版 16 第 23 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~4 第 25 号  
竪穴建物跡 第 26 号竪穴建物跡  
図版 17 第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況 同遺物出土状況 1・2 同炉遺物出土状況 同掘方  
第 28 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2  
図版 18 第 29 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3 同堀方 P03 土層断面 同掘方遺物出土状況 1  
同堀方 P04 遺物出土状況 2 第 30 号竪穴建物跡 同カマド  
図版 19 第 31 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3 第 32 号竪穴建物跡 同遺物出土状況 1・2  
第 33 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
図版 20 第 34 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1~3 第 35 号竪穴建物跡 同掘方 同遺物出土  
状況 1・2  
図版 21 第 36 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2  
第 37 号竪穴建物跡 第 38 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~4  
図版 22 第 39 号竪穴建物跡 同土層断面 第 40 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 同掘方  
第 41 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
図版 23 第 42 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 第 43 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
第 44 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2 同 P01 遺物出土状況  
図版 24 第 46 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~4 同鍛冶炉鉄滓出土状況 同鍛冶炉  
同 P10 遺物出土状況 同掘方  
図版 25 第 45 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 同炉土層断面  
第 47 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3 第 48 号竪穴建物跡遺物出土状況 同カマド  
図版 26 第 49 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
第 50 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 同掘方 第 51 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
図版 27 第 52 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1~3  
第 53 号竪穴建物跡・第 4 号掘立柱建物跡検出状況 第 53 号竪穴建物跡掘方  
同遺物出土状況 1・2  
図版 28 第 54 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3 第 55 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2  
第 56 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
図版 29 第 57 号竪穴建物跡 同 P01 遺物出土状況 第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 同掘方  
第 59 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況 1・2  
図版 30 第 60 号竪穴建物跡掘方 第 60 号竪穴建物跡棚状遺構と粘土構築物 同カマド土層断面  
同遺物出土状況 1・2 第 61 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
図版 31 第 62 号竪穴建物跡 同掘方 同遺物出土状況 同カマド袖石出土状況 第 63 号竪穴建物跡  
第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 1~3  
図版 32 第 65 号竪穴建物跡遺物出土状況 同カマド 第 66 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2  
第 67 号竪穴建物跡遺物出土状況 1・2 第 68 号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況

- 図版 33 第69号竪穴建物跡遺物出土状況 同張出ビットP01遺物出土状況 同土器埋納ビットP02遺物出土状況 第70号竪穴建物跡 同カマド 同遺物出土状況1・2 第71号竪穴建物跡
- 図版 34 第72号竪穴建物跡 第72・74号竪穴建物跡掘方  
第72号竪穴建物跡北東隅角壁周溝土層断面 第72・74号竪穴建物跡遺物出土状況1・2  
第72号竪穴建物跡遺物出土状況1・2 第74号竪穴建物跡カマド南脇遺構出土状況
- 図版 35 第73号竪穴建物跡遺物出土状況1・2 第75号竪穴建物跡遺物出土状況  
第76号竪穴建物跡遺物出土状況 同鍛冶炉1検出状況 同鍛冶炉2検出状況  
同鍛冶炉2土層断面 同竪穴建物跡
- 図版 36 第77号竪穴建物跡土層断面 同竪穴建物跡 第78号竪穴建物跡 第79号竪穴建物跡  
同南壁際土層断面 第80号竪穴建物跡掘方 同遺物出土状況1・2
- 図版 37 第1号掘立柱建物跡検出状況 同掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡 第3号掘立柱建物跡  
第4号掘立柱建物跡・第53号竪穴建物跡検出状況  
第4号掘立柱建物跡 第5号掘立柱建物跡 第6号掘立柱建物跡
- 図版 38 第7号掘立柱建物跡 第8号掘立柱建物跡 第9号掘立柱建物跡 第10号掘立柱建物跡  
第11号掘立柱建物跡 第12号掘立柱建物跡 第13号掘立柱建物跡 第14号掘立柱建物跡
- 図版 39 第9・10・11号溝跡 同 第18号溝跡 第23・24号溝跡  
第55号溝跡1～3 同底面の工具痕
- 図版 40 第55号溝跡土層断面 同遺物出土状況1・2 第43号・49～52号溝跡  
第56号溝跡遺物出土状況1・2 同土層断面
- 図版 41 第1・2号土取り遺構 同土層断面 同遺物出土状況 第3号土取り遺構 第4号土取り遺構  
第5号土取り遺構土層断面 同土取遺構 第6号土取り遺構
- 図版 42 第7号土取り遺構礫出土状況 第8号土取り遺構 第9号土取り遺構 同遺物出土状況  
第10号土取り遺構 第11号土取り遺構 第12・13・14号土取り遺構  
第13号土取り遺構土層断面
- 図版 43 第1号井戸跡 第2号井戸跡 第3号井戸跡 第4号井戸跡  
第5号井戸跡 第6号井戸跡 第7号井戸跡 同遺物出土状況
- 図版 44 第1～5号炉穴 第1号炉穴遺物出土状況 第2号炉穴 同土層断面  
同遺物出土状況1・2 第3号炉穴 第4号炉穴
- 図版 45 第5号炉穴 同土層断面 第6号炉穴 同土層断面 同遺物出土状況  
第7号炉穴 同床面断面 同土層断面
- 図版 46 第9号炉穴 第8号炉穴遺物出土状況 第9号炉穴 第10号炉穴  
同遺物出土状況 第11号炉穴 第12号炉穴 第13号炉穴
- 図版 47 第1号火葬跡 同遺物出土状況 第2号火葬跡 同炭・灰・焼土出土状況  
第7号土坑遺物出土状況1・2 第10号土坑土層断面 第11号土坑
- 図版 48 第18号土坑遺物出土状況 第25号土坑遺物出土状況 第31号土坑遺物出土状況  
第32号土坑遺物出土状況 第71号土坑遺物出土状況 第100号土坑土層断面1・2  
同遺物出土状況
- 図版 49 第130号土坑遺物出土状況 第135号土坑遺物出土状況 第136号土坑遺物出土状況  
第137号土坑遺物出土状況 第144号土坑遺物出土状況 第168号土坑遺物出土状況  
第218号土坑遺物出土状況 第251号土坑遺物出土状況
- 図版 50 第264号土坑遺物出土状況 第269号土坑遺物出土状況1・2  
第270号土坑遺物出土状況 第273号土坑遺物出土状況  
第275号土坑遺物出土状況 第282号土坑遺物出土状況 第288号土坑遺物出土状況
- 図版 51 第301号土坑遺物出土状況 第304号土坑遺物出土状況  
第329号土坑遺物出土状況 第375・376号土坑 第389号土坑土層断面  
第390号土坑土層断面 第389・390号土坑遺物出土状況 第423号土坑
- 図版 52 第1号高跡 第1号性格不明遺構 第2号性格不明遺構 第3号性格不明遺構  
第4号性格不明遺構 第5号性格不明遺構 第8号性格不明遺構 第9号性格不明遺構
- 図版 53 AP-AS G P01遺物出土状況 AX-AR G P01遺物出土状況 BK-AL G P01遺物出土状況1・2  
東谷
- 図版 54 西谷 東谷南壁土層断面 東谷北壁土層断面 西谷中央部トレンチ土層断面1・2
- 図版 55 第26図1 第26図2 第26図3 第28図1 第28図2 第28図4 第28図5 第28図6  
第28図7 第30図5 第30図1 第30図2 第30図3 第30図6 第32図1 第32  
図2 第30図7 第32図3 第32図4 第32図7 第32図6 第32図5
- 図版 56 第35図1 第35図2 第35図4 第35図5 第35図6 第35図8 第35図11 第35図13  
第35図3 第35図7 第35図10 第35図12 第35図14 第35図16 第35図17  
第37図1 第37図2 第37図5 第37図6 第37図7 第37図8 第37図13 第37図  
10
- 図版 57 第39図1 第39図3 第39図4 第37図15 第37図16 第39図6 第39図5 第41  
図3 第41図4 第41図5 第41図7 第41図10 第41図12 第41図11 第41図13

- 第41圖14 第41圖8 第41圖9 第41圖15
- 圖版58 第41圖2 第41圖16 第43圖2 第43圖1 第46圖1 第46圖2 第46圖4 第46圖5 第46圖6 第46圖7 第46圖10 第46圖11 第46圖12 第46圖14 第48圖1 第50圖2 第50圖3 第46圖24 第46圖15 第50圖5 第50圖4
- 圖版59 第50圖6 第52圖1 第52圖2 第52圖3 第52圖4 第52圖5 第52圖6 第52圖7 第52圖8 第52圖10 第52圖14 第52圖13 第54圖1 第54圖2 第54圖3 第54圖4 第54圖5 第54圖6 第54圖7 第54圖8 第54圖9
- 圖版60 第54圖10 第54圖11 第54圖12 第54圖13 第54圖14 第54圖15 第55圖1 第58圖2 第58圖6 第58圖3 第58圖7 第58圖8 第58圖1 第58圖10 第58圖4 第58圖9
- 圖版61 第58圖11 第58圖13 第58圖12 第61圖1 第61圖2 第61圖4 第61圖5 第61圖7 第61圖6 第61圖8 第61圖9 第61圖10 第61圖11 第61圖12 第61圖13 第61圖14 第61圖15 第61圖16 第61圖17
- 圖版62 第61圖18 第61圖19 第61圖20 第62圖21 第62圖22 第62圖23 第62圖24 第62圖25 第62圖36 第62圖37 第62圖38 第62圖39
- 圖版63 第65圖1 第65圖2 第65圖4 第65圖6 第65圖7 第65圖8 第65圖9 第65圖10 第65圖11 第65圖12 第65圖13 第65圖14 第65圖15 第65圖16 第65圖17 第65圖18 第65圖19 第65圖20 第65圖21 第65圖22 第65圖23 第65圖26 第65圖31 第65圖33
- 圖版64 第66圖41 第66圖35 第66圖36 第66圖39 第66圖40 第66圖37 第66圖34 第66圖42 第66圖43 第69圖1 第69圖2 第69圖3 第69圖4 第69圖5
- 圖版65 第69圖6 第69圖7 第69圖8 第69圖9 第69圖12 第69圖15 第69圖13 第69圖14 第69圖16 第70圖18 第70圖17 第73圖1 第73圖2 第73圖4 第73圖6 第73圖7 第73圖12 第73圖10 第73圖11 第73圖13
- 圖版66 第73圖14 第73圖15 第73圖17 第77圖1 第73圖16 第73圖18 第77圖3 第77圖2 第77圖4 第77圖5 第77圖7 第77圖8 第77圖12 第77圖9 第77圖11 第79圖1 第79圖2 第79圖3
- 圖版67 第79圖4 第79圖9 第79圖10 第79圖11 第79圖12 第79圖14 第79圖15 第83圖1 第79圖16 第81圖1 第83圖2 第83圖3 第83圖4 第83圖5 第83圖7 第83圖10 第83圖11 第83圖12 第83圖13
- 圖版68 第83圖8 第86圖1 第86圖2 第88圖4 第91圖1 第86圖3 第88圖7 第88圖3 第88圖5 第88圖6 第91圖2 第91圖3 第91圖4 第91圖5 第91圖6 第91圖8 第91圖9 第91圖12 第91圖14 第91圖7 第91圖11 第91圖10
- 圖版69 第91圖19 第94圖1 第91圖16 第91圖17 第94圖2 第94圖3 第94圖5 第94圖4 第94圖6 第94圖7 第94圖8 第94圖9 第94圖10 第94圖11 第94圖14 第94圖17 第94圖15 第94圖16 第94圖19
- 圖版70 第94圖20 第98圖6 第98圖1 第98圖5 第98圖4 第98圖3 第101圖3 第101圖1 第101圖2 第101圖4 第101圖5 第101圖6 第101圖10 第101圖7 第101圖9 第101圖8
- 圖版71 第101圖11 第103圖1 第103圖2 第106圖3 第103圖3 第106圖1 第106圖4 第106圖5 第106圖6 第106圖7 第108圖1 第108圖2 第108圖4 第108圖3 第108圖7 第108圖6 第108圖8
- 圖版72 第108圖5 第108圖9 第108圖10 第108圖11 第108圖12 第108圖13 第108圖14 第108圖15 第108圖16 第110圖1 第110圖2 第110圖3 第110圖4 第110圖5 第110圖6 第110圖7 第110圖9 第110圖10 第110圖11 第110圖13 第110圖14 第112圖1 第112圖2 第112圖3 第114圖1 第114圖2 第114圖3 第114圖4 第114圖5
- 圖版73 第114圖8 第114圖7 第114圖9 第116圖1 第116圖2 第116圖3 第119圖1 第119圖2 第119圖4 第119圖5 第119圖6 第119圖7 第119圖10 第122圖1 第122圖2 第122圖3 第122圖4 第122圖5
- 圖版74 第122圖6 第122圖7 第124圖1 第124圖2 第124圖3 第124圖4 第124圖5 第124圖6 第124圖7 第124圖8 第124圖9 第124圖11 第124圖12 第124圖10 第127圖1 第127圖2
- 圖版75 第127圖3 第127圖4 第127圖5 第127圖6 第127圖7 第127圖8 第127圖10 第127圖11 第130圖1 第130圖2 第130圖3 第130圖4 第130圖5 第130圖6 第130圖7 第130圖8
- 圖版76 第130圖9 第130圖10 第130圖11 第130圖12 第130圖13 第130圖14 第130圖15 第130圖16 第133圖1 第133圖2 第133圖3 第133圖4 第133圖7 第133圖12 第133圖14 第133圖11 第133圖9 第133圖16 第133圖17
- 圖版77 第133圖18 第133圖19 第134圖23 第137圖1 第137圖2 第137圖3 第137圖4

- 第137图5 第137图6 第137图7 第137图9 第137图11 第137图13 第137图14  
第137图16 第137图17 第137图18 第137图19 第137图20 第137图21 第137  
图23
- 图版78 第137图22 第137图24 第138图26 第138图28 第137图25 第138图29 第138  
图30 第144图1 第144图2 第144图3 第144图4 第144图5 第144图6 第144  
图7
- 图版79 第144图8 第144图9 第144图10 第144图11 第144图12 第144图15 第144图  
18 第144图19 第144图20 第144图21 第145图22 第144图17 第148图1 第  
148图2
- 图版80 第151图1 第151图2 第151图3 第151图4 第151图9 第145图24
- 图版81 第151图6 第151图7 第151图5 第155图2 第155图1 第155图3 第155图4  
第155图5 第155图6 第155图8 第155图9 第155图10 第155图11 第155图12  
第155图13 第155图15 第155图16 第155图17
- 图版82 第155图18 第155图19 第155图20 第155图21 第155图22 第155图23 第155  
图14 第155图31 第158图1 第158图2 第158图6 第158图7 第158图8
- 图版83 第162图1 第162图2 第162图3 第162图4 第162图5 第162图6 第162图7  
第162图8 第162图9 第162图10 第158图9 第162图11 第162图12 第162图  
14 第165图1 第165图2 第165图4
- 图版84 第165图5 第165图7 第165图9 第165图6 第165图11 第165图12 第165图8  
第168图3 第168图1 第168图2 第168图4 第168图5 第168图6 第168图7  
第168图10 第168图8 第168图9 第168图11
- 图版85 第168图12 第168图13 第168图14 第168图15 第168图16 第171图1 第171图  
4 第171图6 第173图2 第173图4 第171图8 第173图5 第175图1
- 图版86 第178图1 第178图2 第178图5 第178图7 第178图8 第178图9 第178图13  
第181图1 第181图2 第181图3 第181图4 第181图5 第181图6 第181图7  
第181图8 第181图9 第181图10 第181图11 第181图12
- 图版87 第181图13 第181图14 第181图15 第181图17 第181图18 第181图19 第184  
图1 第184图2 第184图3 第184图4 第184图5 第184图7 第184图8 第184  
图9 第184图10 第184图11 第184图12
- 图版88 第184图13 第184图15 第184图18 第184图20 第184图16 第186图1 第186图  
2 第186图3 第186图4 第186图5 第189图1 第189图2 第186图6 第189图3  
第189图4 第189图5 第189图8 第189图9
- 图版89 第189图10 第191图1 第194图1 第189图12 第191图2 第194图2 第194图3  
第194图4 第194图5 第194图6 第194图4 第194图10 第194图7 第194图9  
第194图11 第197图1 第197图2 第197图3 第197图4 第197图5 第200图1
- 图版90 第200图2 第200图3 第200图5 第197图6 第203图8 第203图9 第203图10  
第203图1 第203图2 第203图3 第203图4 第203图5 第203图7 第206图1  
第206图2 第206图3 第206图4 第206图5 第206图6
- 图版91 第206图7 第212图3 第212图4 第209图4 第209图6 第212图1 第212图2  
第212图5 第212图6 第212图7 第214图1 第217图1 第217图2 第217图4  
第217图3 第217图5 第217图6 第217图7 第217图8 第217图9
- 图版92 第217图10 第217图11 第221图6 第221图1 第221图2 第221图3 第221图4  
第221图5 第219图1 第223图1 第223图2 第219图2 第225图1 第225图2  
第146图1 第229图1 第229图2 第229图3 第229图4
- 图版93 第248图1~3 第248图4~7 第270图1·2·9·10、11~14、17·19、18·20·21  
第248图8 第270图4 第271图23~26·28、29·30·27 第271图31~34、35、39·  
36~38 第271图40~42、43·第272图44 第270图3·5·8、6·7 第272图51~54  
第272图45~47、48~50
- 图版94 第272图57~59 第270图15·16 第272图60 第273图61·62·67、66·63·64·68  
第273图65 第273图70 第273图69·71·72、74·73 第275图1 第275图2 第273  
图75~78、79 第275图3 第275图4
- 图版95 第279图2·1·3、4·5、6·7 第279图10~13、14·17·18、19 第279图20·21、  
22·23 第279图9 第280图32 第280图29~31·33、34·35、36~38 第279图  
15·16 第279图24~26、27·28 第280图40~42
- 图版96 第279图8 第325图25-1 第325图69-1·32-1·21-1·11-1、71-1·16-1·63-1·79-1·  
69-2 第328图172-1·165-2·168-1·206-1·2·241-1、185-1·164-1·243-4·3·222-2·1·3、  
218-1·164-2·203-1·198-1·164-3·4、165-1·223-1 第330图269-1·6·2·4、269-  
3·266-1·269-7~11 第329图251-3·2·5、251-1、243-12·8·251-6·4 第325图7-1
- 图版97 第326图80-1~3·90-1·100-1·2、100-3·6、100-7、108-1·2·114-1·119-1、130-  
8·1~3、100-8·130-4~7 第325图31-1 第327图144-1 第327图131-1·132-1·



- 137-1·135-2·131-2·135-1、154-1·150-1、137-2·130-9·134-1·151-1、162-1·159-1·144-2 第330图269-5 第330图264-1 第331图282-1·2·270-1、282-3、278-1·282-4~6
- 图版98 第332图290-1·2·391-1·301-2·3、301-4·304-1·301-5、301-6·275-1·288-1、304-2·288-2 第333图327-1·350-1·379-1·366-1·379-2·377-1·380-1、449-1~4、381-1·328-1·425-1·422-1·450-1·349-1 第328图243-1 第328图243-2 第328图243-3 第328图243-4 第328图243-5 第284图1~5、6~9 第328图243-6 第329图243-10 第329图263-1
- 图版99 第329图263-2 第335图1 第345图1 第347图1·2 第347图9 第347图6·8·11、13·14·18 第347图4 第347图5·7·10·12、15·17·16 第352图12 第352图13
- 图版100 第352图14 第352图15 第352图16 第352图17 第352图18 第352图19 第352图20 第352图21 第352图22 第352图23 第352图25 第352图24 第352图26 第352图27 第352图28 第352图29 第352图30 第352图31 第352图32 第352图33 第352图34 第352图35 第352图36 第352图37
- 图版101 第351图1~3、4~6 第351图8·7、10·9 第352图11·38、40·39 第354图8·9、12~14 第353图41~43、45·47·48、46·44·49·50 第354图10 第354图11 第355图1~4 第354图1~4、5~7
- 图版102 第356图5~9、10·11、14~16·18~20、21·23~25 第356图26~28·30·31、33~39、44·45、40~43·46·47 第356图12·13·17、32·29·22 第357图48~52、55·54·53·56·57、58~65、66~69 第357图70~74、75~78、79~81 第358图82~85、87·92·88·90·89·86、91·94·93·95~97、98·99 第359图100~104、105~110、112~114 第360图117·116、119·118 第361图126
- 图版103 第361图121~123、124·125·128 第360图115 第359图111 第360图120 第361图127 第362图131 第362图134·137·140、133·136·139、129·130·132·135·138 第363图143 第363图141 第363图144 第363图147 第363图150 第363图157·154·156、163·162、148·142·151·152·158、146·145·161、149·159·155·153
- 图版104 第363图160 第364图170~172、173、174~176 第364图177~180、181·185、182~184 第364图164~166、167~169 第364图186~188 第364图189·190 火葬跡件
- 图版105 第46图17·16·19·第62图30·32·31·第91图18·第94图22、第122图8·第134图20·第138图31~33·第145图23·第155图27·26、第189图11·第328图164-5·第365图193·194·192·195 第46图23·21·第52图12·第62图27·26、第94图21·第138图34·35、第155图24·第162图13、第173图7·6·第178图12·11·10、第181图20·第184图21·第331图、273-1·第365图200 第41图18·第46图18·第50图7·第52图11·第62图29、第62图28·第134图21·第138图37·36·第155图29、第272图22·第225图4
- 图版106 第41图19·第122图9、第122图10·第217图12·第327图163-1 第200图4·第365图203·202、第325图18-1·第280图39·第365图201 第46图20·第365图198·第98图7·第46图22、第353图51·第41图17·第119图9·8·第155图28·第365图196·197、第155图25·第365图191·第138图27·第272图55
- 图版107 第62图34·第138图40·45·42、第134图22·第138图47·41·46、第138图39、第272图56·第62图35·第328图164-6·第365图199 第62图33 第46号竖穴建物跡 鍛造剥片 F-6 5mm 同鍛造剥片 F-6 1mm 同鍛造剥片 F-6 3mm 同鍛造剥片 D-6 1mm 同鍛造剥片 D-6 3mm
- 图版108 第46号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 5mm (1) 同粒状滓 D-5 5mm (2) 同粒状滓 D-5 1mm (1) 同粒状滓 D-5 1mm (2) 同粒状滓 D-5 3mm (1) 同粒状滓 D-5 3mm (2) 同鍛造剥片 D-7 1mm 同鍛造剥片 D-7 3mm 同鍛造剥片 D-7 5mm 同鍛造剥片 D-6 5mm
- 图版109 第363图① 第184图④ 第209图② 第94图③ 第162图⑤ 第112图⑥ 第168图⑦ 第83图⑧ 第73图⑨ 第206图⑩
- 图版110 第186图⑪ 第171图⑫ 第94图⑬ 第347图⑭ 第32图⑮ 第101图⑯ 第162图⑰ 第65图⑱ 第83图⑲
- 图版111 第184图⑳ 第133图㉑ 第119图㉒ 第61图㉓ 第275图㉔ 第184图㉕ 第65图㉖ 第65图㉗ 第94图㉘ 第363图㉙ 第184图㉚ 第347图㉛
- 图版112 第162图14 第52号竖穴建物跡出土線刻砥石

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

平成27年10月27日付け事務連絡にて、熊谷市産業振興部企業活動支援課長より熊谷市千代地内における土地利用に関する計画書の確認について提出がなされ、埋蔵文化財の取り扱いについて協議があった。企業誘致により株式会社ヤオコーが進出を計画しており、物流センターを建設する予定であったため、熊谷市教育委員会では保存策が講じられない場合は、発掘調査による記録保存の措置が必要である旨を回答した。その後、株式会社ヤオコー代表取締役社長川野澄人より平成28年1月13日付けで埋蔵文化財発掘の届出が提出され、事業者と保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置が適当であるとの結論に至った。この結果を踏まえて、平成28年1月20日付け熊教社埋発第610号にて発掘調査の措置が適当である旨副申し、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付した。その後、事業者あてに埼玉県教育委員会教育長から、平成28年1月28日付け教生文第4-1466号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査の指示がなされた。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には定例議会での補正予算の承認が必要であり、待機期間が発生する状況であった。そのため、熊谷市教育委員会では早急に発掘調査を実施するため、平成27年11月11日付けで埋蔵文化財に関する協定を事業主と締結したうえで、平成27年12月7日に熊谷市宮下遺跡調査会を設立し、発掘調査を平成28年1月22日から実施した。熊谷市宮下遺跡調査会会長は、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査の届出を平成28年1月20日付け熊宮遺発第3号で埼玉県教育委員会教育長へ提出した。これに対し、平成28年2月15日付け教生文第2-55号で発掘調査について通知があった。

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は、平成28年1月22日から平成29年5月31日にかけて実施した。当初の調査面積は、物流センター建設によって破壊を受ける23,700㎡であった。しかし、発掘調査の進行による状況把握が進んだこと及び建設計画の変更等により、記録保存を必要とする面積が広がることが判明した。そのため、平成28年12月中に事業者である株式会社ヤオコーと熊谷市教育委員会は協議を重ねた結果、最終的な調査面積は31,183.79㎡となることが確認された。

調査の手順は、重機により遺構確認面まで表土を除去し、人力による遺構検出作業を行った。その後、現場時点で設定した調査区ごとに、検出した遺構を順次精査し、遺構平面図・断面図等を作成した。また随時、個別に遺構や遺物出土状況等の写真撮影を行った。調査区全景の撮影は、マルチコプターを用いた空中写真撮影を実施した。併せて、空中写真測量も行っている。図面作成及び空中写真撮影については、鞆東京航業研究所に委託した。前述の手順により調査を進め、平成29年5月31日には器材等を撤収して現場における作業を終了した。台風・大雪により調査区が水没・凍結するなどの被害があり、埋没谷より湧水が調査期間中に絶えず発生し、調査に少なからず影響があった。

### (2) 整理・報告書作成作業

整理作業は平成29年4月1日から平成30年3月31日にかけて実施した。

遺構については、図面整理を通して内容の精査を行った。報告書ベースのデジタル処理について、業務の一部を株式会社東京航業研究所に委託している。遺物については、最初に洗浄・注記・接合・復元作業を行った後、分類を行い、実測作業を開始した。一部の遺物について、実測・トレース業務を株式会社東京航業研究所に委託している。次に、図版作成を行ったが、遺構についてはデジタルトレース、遺物については手作業によりトレース・拓本採取を実施した。そして、遺物の写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を経て3月31日に本報告書を刊行した。

### 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

平成27・28・29年度 発掘調査

主 体 者	熊谷市宮下遺跡調査会		
会 長	野原 晃	(熊谷市教育委員会教育長)	
副 会 長	米澤 ひろみ	(熊谷市教育委員会教育次長 (H27・28))	
理 事	正田 知久	(熊谷市教育委員会教育次長 (H29))	
	菅谷 浩之	(熊谷市文化財保護審議会会長)	
監 事	小柴 清	(熊谷市文化財保護審議会委員)	
	増田 啓良	(熊谷市総合政策部産業振興部企業活動支援課長 (H27・28))	
	萩野 順偉	(熊谷市総合政策部産業振興部商工業振興課長 (H29))	
	長谷川 正	(株式会社ヤオコー)	
	正田 知久	(熊谷市教育委員会参事兼教育総務課長 (H27))	
	鯨井 敏朗	(熊谷市教育委員会教育総務課長 (H28・29))	
	内田 百合子	(熊谷市会計管理者 (H27・28))	
	小林 教子	(熊谷市総合政策部財政課長 (H27・28)、熊谷市会計管理者 (H29))	
	三友 孝司	(熊谷市総合政策部財政課長 (H29))	
	八木橋 博亮	(株式会社ヤオコー)	
事務局長	山崎 実	(熊谷市教育委員会社会教育課長 (H27・28))	
事務局次長	鶴田 敏男	(熊谷市教育委員会社会教育課長 (H29))	
	森田 安彦	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事 (H27・28))	
事務局員	吉野 健	(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事 (H29))	
	吉野 健	(熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長 (H27・28))	
	端 健	(熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長 (H29))	
	松田 哲	(熊谷市教育委員会社会教育課主査)	
	小島 洋一	(熊谷市教育委員会社会教育課主査)	
	藏持 俊輔	(熊谷市教育委員会社会教育課主査)	
	腰塚 博隆	(熊谷市教育委員会社会教育課主任)	
	山下 祐樹	(熊谷市教育委員会社会教育課主任)	
	金子 正之	(熊谷市教育委員会社会教育課主任)	
	長谷川一郎	(熊谷市教育委員会社会教育課事務員 (H27))	
原野 真祐	(熊谷市教育委員会社会教育課事務員 (H27))		
大野美知子	(熊谷市教育委員会社会教育課事務員 (H28)、主事 (H29))		
島村 範久	(熊谷市教育委員会社会教育課事務員 (H28)、主事 (H29))		
武部 喜充	(熊谷市教育委員会社会教育課事務員 (H28)、主事 (H29))		
山崎 和子	(熊谷市教育委員会社会教育課事務嘱託 (H28・29))		

平成29年度 整理調査

主 体 者	熊谷市教育委員会		
教育長	野原 晃		
教育次長	正田 知久	主査	星 祥子
社会教育課長	鶴田 敏男	主査	藏持 俊輔
社会教育課		主任	腰塚 博隆
文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健	主任	山下 祐樹
社会教育課		主事	大野 美知子
副課長兼文化財保護係長	新井 端	主事	島村 範久
主査	松田 哲	主事	武部 喜充
主査	小島 洋一	事務嘱託	山崎 和子

## II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向けて流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がり、さらに南側は比企丘陵が続く（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がっている。新期荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。荒川右岸は3つに地形区分ができ、北より荒川右岸沖積地、和田吉野川と和田川にはさまれた江南台地、南側の比企丘陵である。江南台地は寄居町金尾付近から、熊谷市楊井付近まで伸びる東西17km、南北3kmを測る東西に発達した舌状の洪積台地である。標高は上流の寄居町木持付近で140m、熊谷市楊井付近で45mを測り、上流から下流へ向かい下ってゆく地形である。

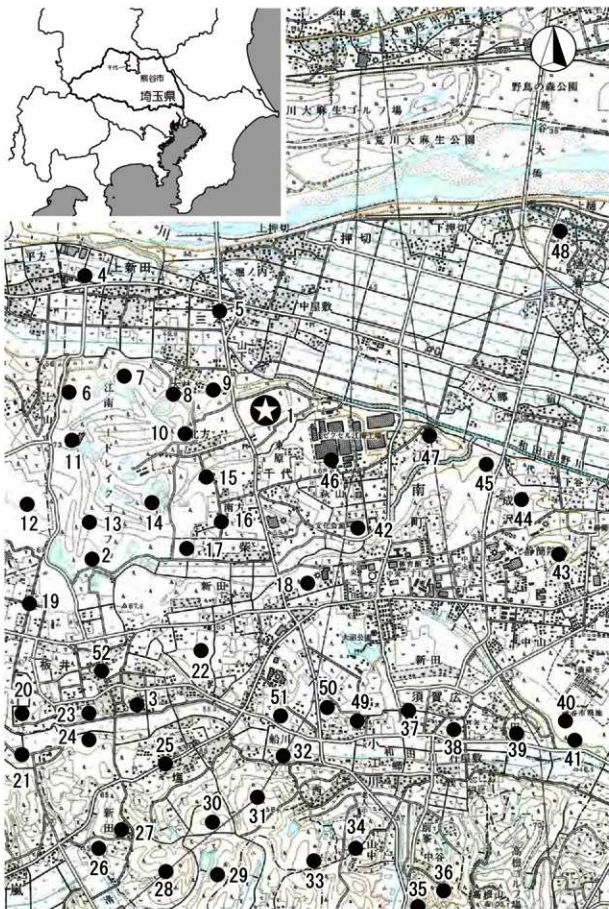
今回報告する宮下遺跡は江南台地北東端縁辺部に立地し、標高は55～59mを測り、北方眼下に荒川右岸沖積低地が広がり、比高差は約10mである。また、遺跡はJR高崎線熊谷駅の南西約4.7km、荒川から南へ約1.0kmの距離にある。現地表から遺構確認面までの深さは、おおよそ20cm程度の比高差がみられ、埋没谷が検出されるなど、台地上に開析谷が入り込む起伏がある地形といえる。

次に、本遺跡を中心に周辺の歴史的環境について概観する。（第2図）

江南台地は、森林資源が得やすく河川が近くにある立地により、古い時代から人々の営みが確認される。旧石器時代は、寺内(2)・山神(13)・千代西原(11)・鹿嶋(地図未記載。以下、未とする。)・萩山(42)・上前原(47)・向原(未)・天神(19)の各遺跡から石器が見つかった。特に深谷市白草遺跡(未)では、削片系の細石刃・細石刃核・荒屋型彫刻刀型石器が出土しており、北方系細石刃石器群として注目される。



第1図 埼玉県の地形図（宮下遺跡位置図）



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	宮下遺跡	縄文 古墳 奈良 平安	27	塩古墳群	縄文 古墳
2	寺内遺跡(麻寺)	縄文 奈良 平安	28	鎌ヶ谷遺跡	古墳
3	出雲乃伊波比神社	-	29	神田遺跡	縄文 古墳
4	新田裏遺跡	古墳 奈良 平安	30	塩丸山遺跡	旧石器 縄文 古墳 奈良 平安 中世 近世
5	新屋敷遺跡	中世	31	新山遺跡	縄文 古墳 中世 近世
6	姥ヶ沢遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安	32	船川遺跡	縄文 古墳
7	富士山遺跡	縄文 古墳	33	富士塚遺跡	中世 近世
8	権現坂輪窯跡群	縄文 古墳	34	釜場遺跡	古墳 中世 近世
9	権現坂塚群	縄文 奈良 平安 中世 近世	35	前谷石切場跡	中世 近世
10	北方遺跡	縄文 古墳	36	高根横穴墓群	古墳
11	千代西原遺跡	旧石器 縄文 奈良 平安 中世	37	田村降屋跡	古墳 中世 近世
12	百済木遺跡	旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	38	須賀広宮館遺跡	古墳 奈良 平安
13	山神遺跡	中世	39	本田東台遺跡	縄文 古墳 奈良 平安 中世 近世
14	天神谷遺跡	縄文 奈良 平安	40	野原遺跡	旧石器 縄文 古墳
15	南方遺跡	縄文 中世 近世	41	野原古墳群	縄文 古墳 中世
16	山神東遺跡	縄文	42	萩山遺跡	旧石器 縄文 中世
17	西遺跡	縄文 奈良 平安	43	合羽山遺跡	縄文 中世
18	原谷遺跡	古墳	44	代遺跡	縄文 中世
19	天神遺跡	旧石器 縄文 奈良 平安 中世	45	行人塚古墳群	古墳
20	立野遺跡	縄文 古墳 奈良 平安	46	東原遺跡	縄文
21	北田遺跡	古墳	47	上前原遺跡	縄文 古墳
22	山ノ神遺跡	縄文 奈良 平安	48	平山館	中世 近世
23	岩比田遺跡	古墳 奈良 平安	49	小江川下原遺跡	縄文 古墳 奈良 平安
24	向比遺跡	古墳	50	小江川上原遺跡	古墳
25	塩西遺跡	旧石器 縄文 古墳 奈良 平安 中世 近世	51	田中遺跡	古墳 奈良 平安
26	塩新田遺跡	縄文 古墳	52	長命寺跡	近世

縄文時代草創期は、荒川右岸に着目すると、原谷遺跡(18)で多縄文系土器群が確認されたほか、上前原・船川遺跡(32)では多縄文系土器群の薄片が出土している。このほか深谷市沢口遺跡・寄居町打越遺跡(いずれも未)では爪形文土器が出土している。

早期は、燃糸文期になり、江南台地東部において遺跡数の増加が認められる。萩山・南方(15)・野原宮脇(未)・鹿嶋・船川の各遺跡において住居跡が確認され、特に萩山遺跡では、燃糸文期前半の住居跡が20軒検出されており、当該期における大規模集落跡として注目されている。周辺地域の遺跡では、深谷市四反歩遺跡(未)で、燃糸文期後半の住居跡が検出されている。条痕文期になると、江南台地西部にも遺跡が認められるようになる。北方(10)・富士山(7)・丸谷(未)・深谷市白草・四反歩の各遺跡で土坑等の遺構が確認されており、本遺跡においても炉穴・土坑を検出した。遺物の散布は、姥ヶ沢(6)・寺内・向原・山神・野原丸山(未)・熊野(未)・本田東台(39)・岩比田(23)・塩西(25)・深谷市船山(未)・北條場(未)の各遺跡で確認されている。

前期は江南台地西部において遺跡が増加し、近接して集落が存在する傾向が認められる。本遺跡の近隣では富士山遺跡で諸磯式期の住居跡が、姥ヶ沢・富士山・権現坂輪窯跡群(8)・北方の各遺跡からは花積下層式土器の散布が認められ、東原遺跡(46)は黒浜式期の集落跡と考えられる。周辺地域の遺跡では寄居町南大塚遺跡(未)で関山～黒浜式期にかけての大規模な集落跡が確認されている。

中期は加曾利E式期に最も遺跡数が増加し、大規模な環状集落も確認されている。代(44)・神田(29)の各遺跡で遺物が採集され、姥ヶ沢・富士山・権現坂(9)・寺内・上原原の各遺跡で遺構が認められる。特に、西原遺跡では、加曾利E式後半の住居跡が59軒検出されており、大規模短期間集落として注目されている。

後期になると台地上での遺跡数は、堀之内式期を境にして著しく減少する。これとは対称的に、荒川兩岸の低位段丘・妻沼低地において遺跡が集中する傾向が見られる。近隣では、萩山遺跡で称名寺式期、姥ヶ沢・富士山の各遺跡及び本遺跡で堀之内式期の遺構が検出されている。周辺の遺跡では、荒川左岸に位置する桶ノ下遺跡(未)で、後期初頭から前葉にかけての住居跡13軒が検出されており、本地域周辺において、最も大規模な集落跡が考えられている。

晩期になると江南台地上においては、遺構は確認されていないが、遺物は野原遺跡(40)で浮線網状文系土器の破片、和田川上流の嵐山町北田遺跡(21)で当該期破片が検出されている。

弥生時代の遺跡は、本遺跡の近隣において、姥ヶ沢・富士山遺跡の2か所のみ確認されている。また、江南台地の北縁部の深谷市域では、白草遺跡の他、四反歩遺跡・万願寺遺跡・円阿弥遺跡・焼谷遺跡(いずれも未)などにおいて、いずれも弥生時代後期の遺構・遺物が検出・採集されている。

古墳時代の遺跡については、前期では五領式期の集落跡が、姥ヶ沢・富士山遺跡で確認されている。近隣では、滑川左岸の釜場遺跡(34)から焼失住居跡11軒を検出している。和田川右岸では塩丸山(30)・塩西遺跡で遺構を検出し、塩西遺跡では祭祀土坑から40個体以上の遺物を確認した。周辺地域の遺跡では、深谷市白草・円阿弥遺跡(未)から住居跡が検出されている。

中期では唯一、塩新田遺跡(26)において、初現的な要素をもつカマドを備えた住居跡が1軒検出され、周辺地域の遺跡では、深谷市白草遺跡で同期の住居跡8軒が検出されている。

後期になると江南台地及び周辺地域においても集落、古墳が増加する。近隣では、本田東台・岩比田・権現坂の各遺跡及び本遺跡より住居跡が確認されている。なかでも本田東台遺跡には6世紀後半を中心に8世紀代まで営まれた大規模な集落があり、近接する野原古墳群と関わりがあると考えられている。また、和田川の対岸には鬼高式期の集落跡とみられる滑川町門正寺遺跡(未)や門正寺(未)・山中古墳群(未)・天神山横穴墓群(未)等が所在する。後期の古墳は群集墳として形成されている。江南台地上をみると、和田吉野川流域では天神山(未)・立野(20)・小江川下原(49)の各遺跡及び野原古墳群が、滑川流域左岸の塩古墳群内荒井支群(未)・西原支群(未)が分布する。周辺地域では深谷市大塚(未)・清水山古墳群(未)がある。比企丘陵においても古墳群が丘陵上に点在する。荒川右岸沖積地では河岸段丘上に立地する古墳群として深谷市箱崎・塚原・鹿島古墳群(以上未)などがある。これらの古墳群には近接して集落跡が検出されるほか、各地域に点在する群集墳関連の生産遺跡として、姥ヶ沢遺跡・権現坂埴輪窯跡群が点在し、両遺跡とも多数の窯跡、工房跡、粘土採掘土坑が検出されている。

奈良・平安時代では、7世紀後半から8世紀前半頃の集落遺跡として桜山(未)・鹿嶋・荒神脇(未)・野原宮脇・岩比田・塩西遺跡があり、桜山・荒神脇遺跡では遺跡内及びその周囲に古墳が存在している。8世紀中頃から後半には新田裏(4)・富士山遺跡が集落として形成されていく。9世紀に入ると、遺跡が増加傾向になる。要因として挙げられるのが、寺内遺跡・寺内廃寺(2)の存在である。寺内廃寺は8世紀前半には創建されたと推定され、9世紀中頃から後半には最盛期を迎える。寺地内からは基壇建物跡、掘立柱建物跡、多数の住居跡が検出されている。出土物には、瓦や塼像など寺に直接関連す

る遺物、「花寺」・「石井寺」・「東院」・「上院」など寺の名称や施設等に関連する墨書土器が出土している。寺内廃寺の東に隣接する天神谷遺跡(14)では、須恵器長頸瓶を専門とした窯跡が検出され、隣接する深谷市百済木遺跡(12)から平安時代中頃とされる銅製天部像が出土している。その周辺の新田裏・熊野(未)・岩比田・野原宮脇・丸山(未)・立野・西遺跡(17)などで9世紀代の集落跡が確認されている。岩比田遺跡からは須恵器の円面硯や棹秤の鎌などが出土している。10世紀代になると、遺跡の数は極端に減少する。塩西遺跡では土師器羽釜・坏が住居跡から出土し、本遺跡からは羽釜及び土釜が出土している。その他、採集遺物などから奈良・平安時代の集落の存在が推定される遺跡は、下新田(未)・丸山浦(未)・山神東(16)・須賀広宮脇(38)の各遺跡などがある。また、江南台地周辺では特徴として、製鉄にかかる痕跡が多いことが挙げられる。本遺跡の近隣では、古くは行人塚遺跡(45)で5世紀初頭、本田東台遺跡で6世紀中頃の鍛冶跡が確認され、当該期では、熊野・向比(24)・塩西・鹿嶋及び本遺跡で鍛冶の痕跡が確認されている。また市内板井地区の出雲乃伊波比神社(3)周辺には「金山」の地名が伝承され、耕作中に椀形鍛冶滓が採取されるなど、製鉄に関わる事例は多い。近隣地での大鍛冶の痕跡は未発見であるが、周辺地をみると、寄居町末野に所在する箱石遺跡(未、7世紀末から8世紀初頭)、寄居町赤浜に所在する出雲乃伊波比神社(未)の対岸にあたる荒川左岸深谷市台耕地遺跡(未、9世紀後半)、寄居町用土に所在する中山遺跡(未、9世紀末から10世紀)から大鍛冶の痕跡が確認されており、注目に値する。

中世になると、武蔵七党や在地武士団の館跡が散在するようになるが、実態については不明なものが多い。江南台地周辺では、古い緑泥石片岩製板碑が多く確認され、記年名のある最古の「嘉禄三年」(1227)銘板碑が近隣の大沼に所在していた。土塁や堀などが一部遺存している館跡が存在し、上杉館跡・成沢館跡・谷緑館跡・堀ノ内館跡・三本館跡・平山館跡・増田館跡・常安寺館跡・塩館跡(いずれも未)などがある。また、寺院跡として元八幡遺跡・金胎寺跡・能満寺跡・神力寺跡(いずれも未)などがあり、板碑をともなう中世墳墓跡として新田裏遺跡・合羽山遺跡(43)がある。中世遺構は、溝跡や室町時代前期の板碑を検出した萩山遺跡、土坑墓から永楽通宝や銅環が出土した鹿嶋遺跡、貞和五年(1349)や延徳四年(1492)紀年銘の板碑が採集された天神遺跡、集石土坑・火葬墓跡が検出された宿遺跡(未)のほか、熊野(未)・本田東台・富士山遺跡等がある。本遺跡からは葉研堀形状の大溝と溝の法面及び掘方縁辺に無数のピットが伴う状況が確認された。これと同じ状況の溝跡を検出した南方遺跡が近隣に所在する。

近世になると、陣屋跡として寛永年間稲垣若狭守の陣屋と知られる田村陣屋跡(37)、寺院跡では、県内の有力な修験寺院で明治に廃寺となった長命寺跡(52)、観音菩薩を本尊として明治初年に廃寺となった聖観寺跡(未)などがある。また、塚群として和田吉野川右岸に位置する権現坂塚群(9)・行人塚群(45)、和田川右岸に位置する新山塚群(31)、滑川左岸に位置する富士塚群(33)がある。新山塚群では5号塚下層から河原石などを敷きつめた集石遺構及び混在して銭貨「祥符通宝」、「寛永通宝」が検出されている。祭祀遺跡としては、比企丘陵北縁の高根山から派生する西尾根上に近年まで角塔婆が建てられ、祭祀的な場所として認識されていた観音岩祭祀場跡(未)などがある。近世遺構が検出されている遺跡は、山神遺跡や高根社跡(未)等がある。また、滑川流域左岸では、白色細粒凝灰岩の石切場遺跡として前谷石切場跡(35)・片尻石石切場跡(未)が確認されており、古くは古墳の石室石材として、近世以降は井戸の石材として使用が確認されている。



### III 遺跡の概要

#### 1 調査の方法

今回報告するのは、物流センター建造物及び付帯設備箇所 31,183.79 m<sup>2</sup>についてである。

発掘調査の手法は、下記のとおり設定した一辺 10 m のグリッド方式を用いた。座標は、周辺地における過去の調査事例と整合を容易にする為、日本測地系を用いた基準点測量で示している。

本報告で示すグリッドについて、過去刊行された『宮下遺跡Ⅱ』（熊谷市宮下遺跡調査会 2010）では、宮下遺跡を網羅し、東・北角を頂点とする一辺 5 m とするグリッドが設定されている。しかし、本調査は面積が広大であったことから、5 m グリッドでは基準杭が林立し、発掘作業上で調査に支障をきたす恐れがあった。そのため本調査では、前回の設定を基本として、一辺 10 m とするグリッドにて調査の実施をせざるを得なかった。よって、本報告におけるグリッドは、第 4 図に示すとりの設定を用いている。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が AK ~ CD（旧グリッド 20 ~ 110）、南北が AD ~ AZ（旧グリッド 8 ~ 51）である。

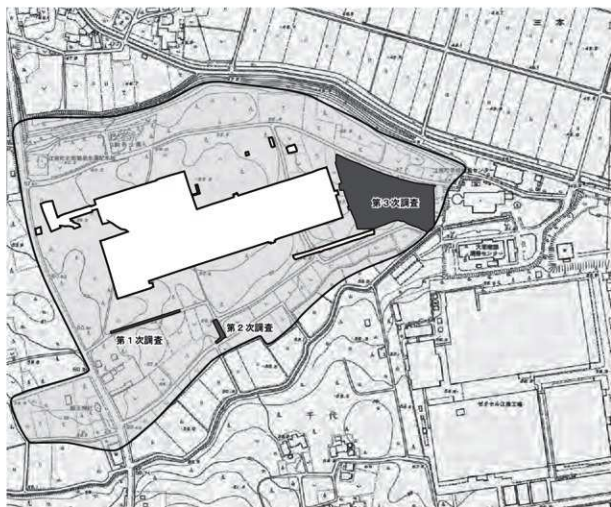
#### 2 検出された遺構と遺物

今回の調査地点は遺跡範囲の中央部分とその周辺である。調査区の地形は北が高く南が低い。また、調査区の東側（東西グリッド AV ~ AX、南北グリッド AJ ~ AT 周辺）及び西側（東西グリッド BK ~ BU、南北グリッド AR ~ AV 周辺）の 2 か所に埋没谷を検出した。それぞれ、東谷、西谷として呼称している。現地形は東谷、西谷とも窪地となり南側へ続く。

今回の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が竪穴建物跡 80 軒、掘立柱建物跡 16 棟、溝跡 80 条、土取り遺構 14 基、井戸跡 7 基、炉穴 14 基、火葬跡 2 基、土坑 447 基、畝跡 1 箇所、性格不明遺構 10 基、ピット 1,392 基及び谷状地形 2 箇所である。出土した遺物は、縄文時代では縄文土器、石器がみられ、奈良・平安時代では土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石製品、金属製品、鍛冶関連遺物がみられ、鎌倉・室町時代では青磁、陶器、石製品が確認されている。このほかわずかながら弥生土器、埴輪、近世陶磁器などが出土している。

時代別にみると、縄文時代は、遺構として早期末頃の炉穴 14 基、土坑 83 基を検出した。炉穴からは条痕文系の縄文土器を検出しており、野島式段階のものが確認された。土坑は覆土に特徴があり、白色軽石粒を含み硬質な黒褐色土ブロックを含んでいる。遺構は、地形が高まる調査区中央から北寄りに分布がみられる。また、東谷の覆土からは、縄文土器が出土しているほか、時期不明ながら溝跡を複数検出している。その他、調査地区内から早期の燃系系文系土器、条痕文系土器、前期の関山式土器、諸磯式土器、中期の五領ヶ台式土器、勝坂式土器、加層利 E 式土器、連弧文系土器、曾利系土器、後期の称名寺式土器、堀ノ内式土器、安行式土器が出土した。石器は石鏃、石匙、スタンプ形石器、打製石器、磨製石斧、磨石、石皿が出土した。

弥生時代は、後期後半の吉ヶ谷式とみられる破片を採取している。

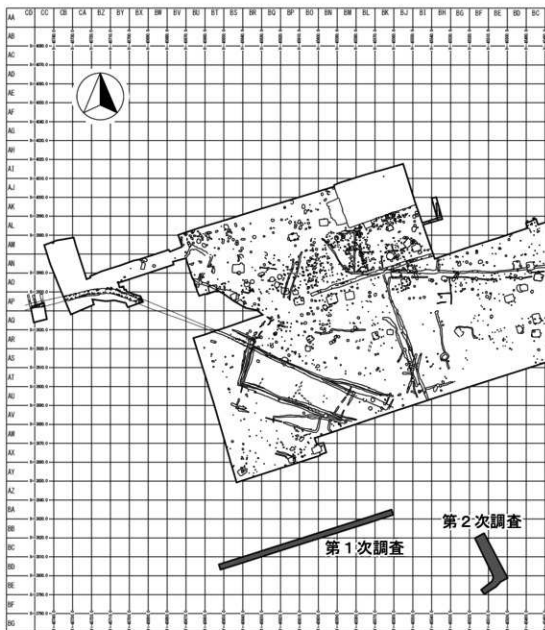


第3図 調査地点位置図

古墳時代は、第218号土坑1基だけで前期五領式の高塚が出土した。また第55号溝跡より円筒埴輪片及び人物埴輪の顔面下半部を検出したが、遺構に伴うものではない。本遺跡北西隣接の権現坂遺跡(埴輪窯跡)よりの流れ込みと判断される。

奈良・平安時代は、竪穴建物跡80棟、掘立柱建物跡13棟、土取り遺構14基、溝跡1条、土杭108基等を検出し、本遺跡の主体を占める成果が挙がっている。時期をみると、出土遺物からは8世紀中頃から11世紀前半まで存続した集落と考えられる。遺構の分布は調査区全面にわたり、竪穴建物跡は広範囲に検出したが、掘立柱建物跡はB0-A0グリッド周辺に集中する傾向がみられ、第4号掘立柱建物跡を除き竪穴建物跡との重複はみられなかった。

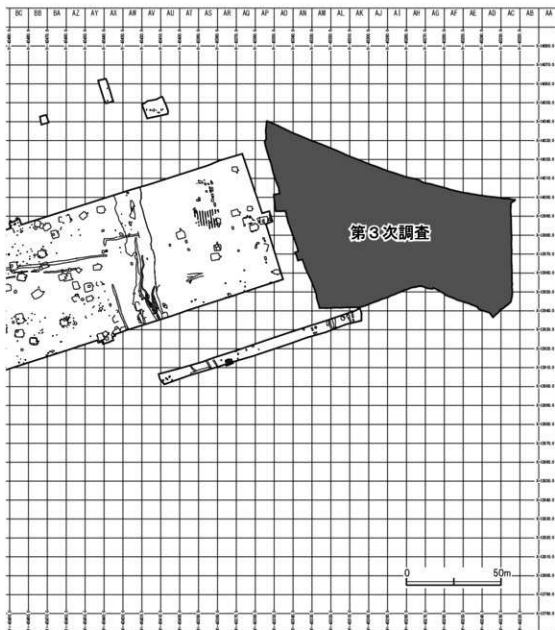
竪穴建物跡はカマドの構築に特徴があり大別すると、北カマドのもの、東カマドのもの、南寄りの東カマドのものが確認され、カマドの造り直しがなされたものも確認されている。南寄りの東カマドの竪穴建物では、緑泥石片岩をカマドの骨材として使用が確認されている。また、第19号竪穴建物跡では、土師器長胴甕を煙道に利用していた。特筆すべきは、小鍛冶の痕跡が検出されており、竪穴建物跡うち、第17号及び第46・76号は工房の痕跡が明確に残っていた。規模・平面形状は住居跡と考えられるものと然程変わらず、同様にカマドを備えている。いずれも屋内に鍛冶炉を検出したが、遺存状態は悪く炉下部にあたる床面のみの検出であり、炉内は部分的に還元化がみられた。出土遺物のうち製鉄に係るも



第4図 グリッド設定図

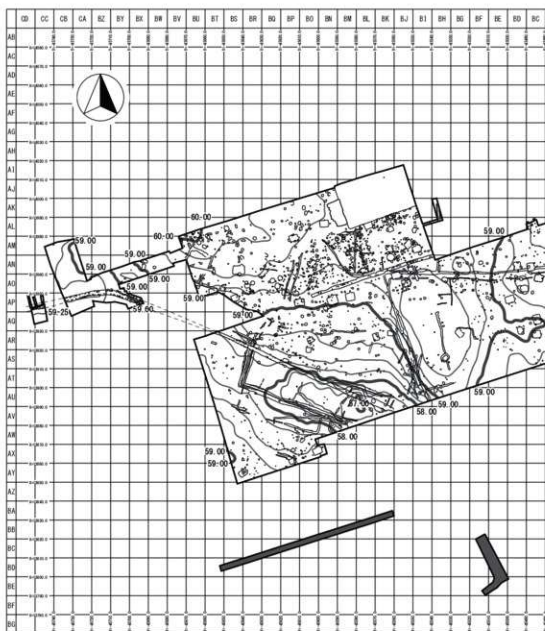
のは、製品として鉄釘、製作に係るものとして羽切、金床石、作業工程で排出される鉄滓のうち、椀形滓、粒状滓、鍛造剥片を検出した。このことから、小鍛冶のうち、鍛造鍛冶がなされたことが確認された。土器等の出土遺物からは、9世紀後半が2軒、11世紀前半が1軒の工房と考えられる。このほか、検出状況から生業不詳ではあるが、何らかの工房跡とみられる堅穴建物跡が10軒（S112・27・45・47・49・50・57・59・64・74）確認された。S112粘土塊多量に含むピットの直上に緑泥片岩板石と土器出土・S127地床炉・S145地床炉・S147床面近くで完形の須恵器大甕・S149粘土が充填されたピット・S150カマド3回の造り替えと床下に大型ピット多数・S157地床炉・S159地床炉とカマド袖状の粘土と欄状遺構・S164地床炉・S174北東隅角に地床炉状の被熱痕跡を確認した。

掘立柱建物跡は、規格をみると2間×2間のもの、2間×3間のものを検出し、総柱または束床構造



となる第5号を除き、全て側柱式の構造である。主軸方位は概ね $N-70^{\circ}-E$ を示すが、第12号のみ $N-29^{\circ}-W$ を示し、時期差があるものと考えられる。分布傾向は前述のとおりだが、第1号がBC-ALグリッド、第2号がAC-ATグリッド、第3号がBE-A0グリッドと散在するものがある。掘立柱建物跡の集中するB0-A0グリッド地点では、4棟が検出され、そのうち2間×2間の規格である第9号は、桁間の柱穴が深く特殊な検出状況みられた。また、同じ2間×2間の規格である第11号は、四隅の柱穴が深く検出された。

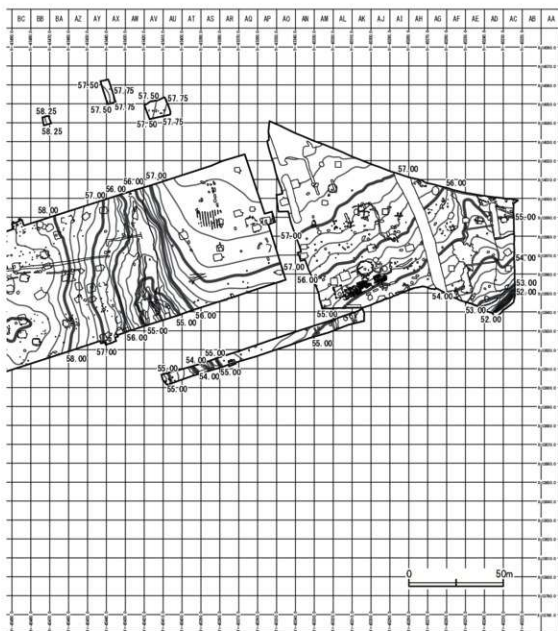
土取り遺構は、いずれも竪穴建物跡内より検出した。竪穴建物跡の床面から掘削することにより、目的土層までの掘削を省力化を図ったと考えられる。第1・2号は白色粘土層中までの掘削がなされているが、そのほかは白色粘土層をわずかに削る程度で掘削は留まる。このことから、採取の目的は白色粘



第5図 等値線図

土層上層の粘性のハードローム層と考えられ、この層中には地点により酸化マンガン粒が含まれるが、竪穴建物跡のカマドの袖から酸化マンガン粒が確認されたものもあり、使用の一端がうかがえた。

当該期の出土遺物については、土師器・須恵器が主体であり、須恵器は南比企産及び末野産が確認され、8世紀代は南比企産が主体であるが、9世紀代以降は末野産が主体となる傾向がある。器種をみれば、坏・埴・蓋・瓶・甕等の供膳具・貯蔵具が大半である。土師器も同様で、供膳具・貯蔵具に甕・鉢等の煮炊具が加わり、10世紀以降は羽釜や土釜がみられる程度で、集落でみられる一般的な構成である。坏・埴は北武蔵型が主流で少数の暗文系統のものがみられたほか、内黒土器がわずかに加わるが、有段口縁坏や比企型坏は確認されなかった。特殊なものを挙げると、須恵器のうち鉄鉢形土器、高盤、転用硯等が挙げられ、転用硯は坏が主体だが1点のみ甕の底部を利用したものが確認されている。鉄製品で



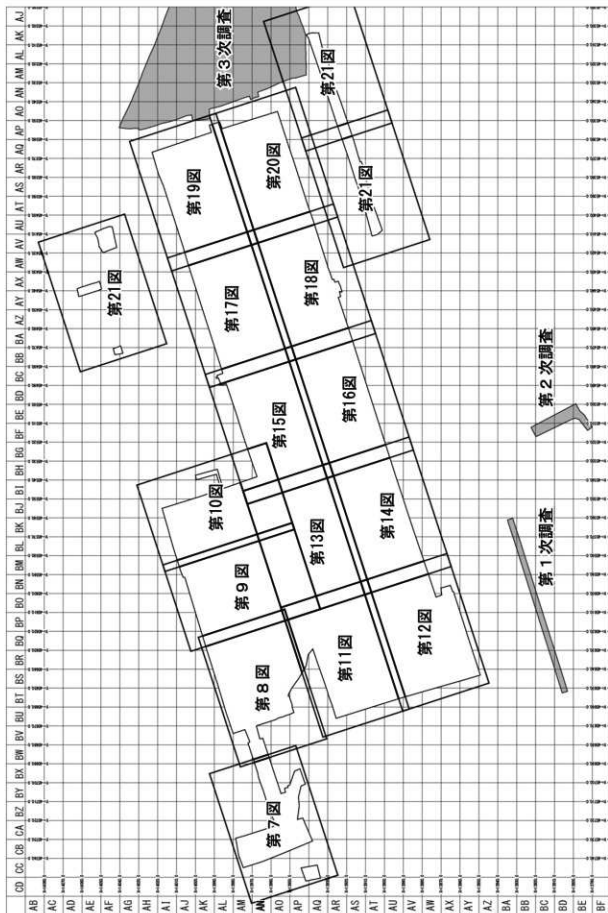
は、刀子、釘、鎌が多いが、蝶番の部片も検出されている。総論的に述べるならば、集落的な遺物が主体であるが、特殊なものとして、鍛冶に係るもの、官衙的要素をもつもの、寺に係るものが含まれるといえる。また、墨書された土器は30点検出され、確認できた文字の種類は16点に及ぶ。『宮下遺跡Ⅱ』で確認された「ト之」は本調査で多く確認された。また、僧名の可能性がある「道口(円カ)」の墨書が地鎮祭祀に関わる埋納土器として検出された。

中世の遺構として、室町時代にあたる長大な第55号溝跡及び付随するビット群を検出した。第55号溝跡は逆台形・V字状を呈し、縁辺及び法面から無数のビットが列状に検出された。流路は、調査区北西より東へ進み、BY - APグリッド付近で屈曲し、西谷地形に沿って南へ斜行し調査区外へ至る。出土遺物は、15世紀代の古瀬戸盤類が検出されている。

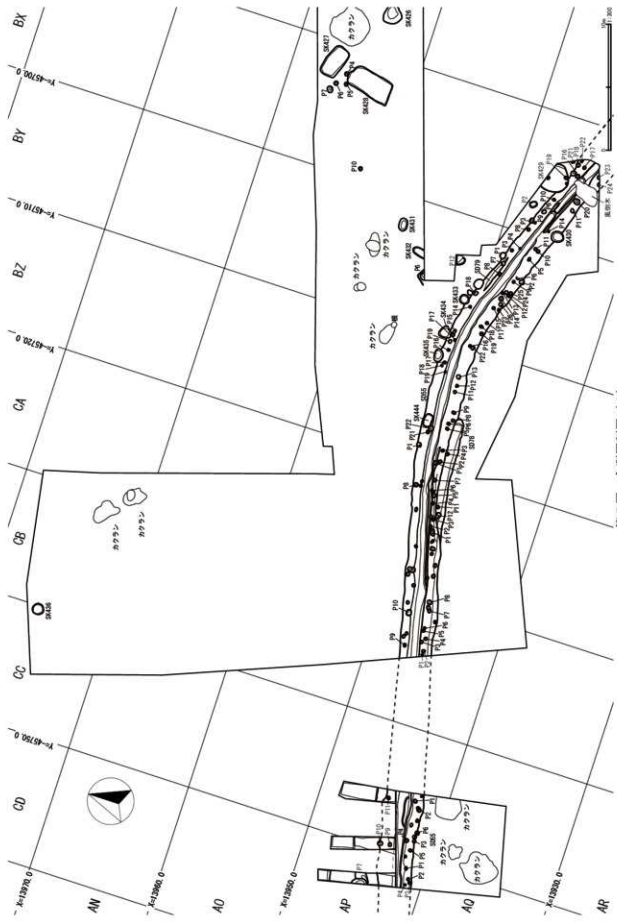
時期不明な遺構を取り上げておくと、溝跡は数多く検出したが、現代の公園上に残る赤道とほぼ合致する状況もあり、これらの溝跡は遡っても近世ぐらいまでのものが大半と考えられる。調査区を東西に横断し、屈曲して南北を縦断する第23・24号は一連の溝跡と考えられ、道路に付随する側溝の用途があったものと考えられる。井戸跡は、白色粘土層までの掘込みがみられ、不透水層を底面とする、地山より浸透した地下水を貯留する構造のものと考えられる。唯一古代に帰属するとみられる第6号井戸は簡易な素掘りの井戸とみられる。近世に帰属する井戸は平面方形の井戸側が埋め込まれていたとみられる。大きな円形プランは井戸側を埋め込んだ掘方と考える。

火葬跡は調査区東側で検出したが、いずれも小振りで遺存状態が不良である。覆土中に炭化物とわずかに骨片が遺存し、壁面が良好に焼化していた。土坑は幅広い時代にわたって検出されたと考えられ、掘方断面をみると底面がわずかにオーバーハングする形状のものが数多く確認された。BI-ASグリッド周辺には長方形を呈する土坑がまぎれとっており、状況からは土室としての用途が想定される。畝跡は畝間の掘込みがわずかに残存する程度である。性格不明遺構は、10基確認されたが、概要は以下の通りである。第7号が竪穴状のものである。第1・2・3・5号は東谷で確認されたが、横長の形状を呈しており、炭化物の出土と焼土が確認された。立地が、わずかだが集落から離れた窪地であり、検出状況からは炭窯の可能性を考えておきたい。その操業は、地下水位が下がる冬場が想定され、この時期は北～西風が吹く時期であり、集落の方へ延焼の恐れが低いと考えられる。また、特殊な形状をした第8号も炭窯と判断した。長方形の土坑から4本の溝が平行して延びており、溝先には筒状の竹が埋め込まれていた。溝跡は、覆土に多量の炭化物が含まれ、焼化面が残っており、竹筒の根元にはタール状の凝固した炭化物が充填していた。竹の有機質が遺存していたことから、遡っても近代ぐらいのものと考えられる。

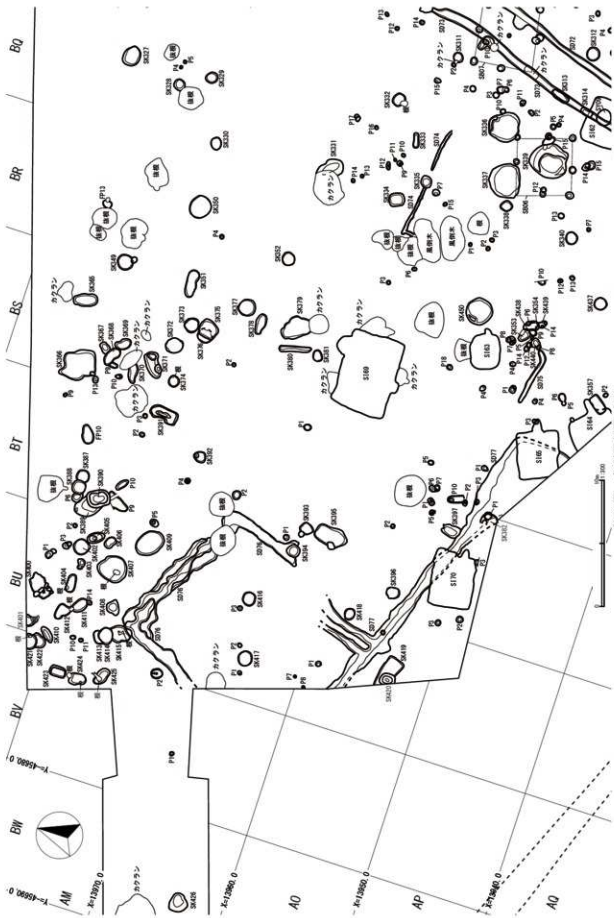
谷状地形について、東谷は南北に延び、台地内部の南側に下る地形である。調査区外南側には東流する用水路があるが、台地上を流れた旧河川の名残とみられ、この旧河川により開析されたものと推定される。東谷の堆積土中には、浅間B軽石が確認され、その下層からは土師器・須恵器が少量ながら散布した状況で検出している。また、最下層より複数の重複する溝跡を検出しているが、走行方向は概ね谷形状に沿っている。西谷について、その成立は東谷と同様と推測される。西谷の堆積土中からも須恵器が少量ながら散布した状況で検出している。西谷上では上層より複数の溝跡が重複して検出され、方形に巡るものなどもあるが、走行方向はほぼ同じで、谷形状に沿うものか直交方向のものに限られる。前述の赤道とほぼ合致する傾向がみられることから、これらの溝跡は遡っても近世ぐらいまでのものが大半と考えられる。



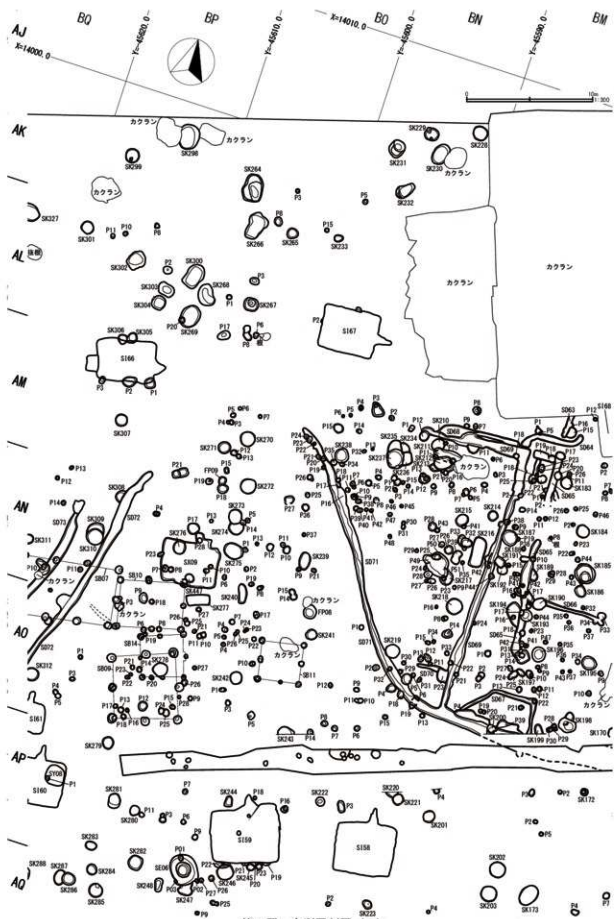




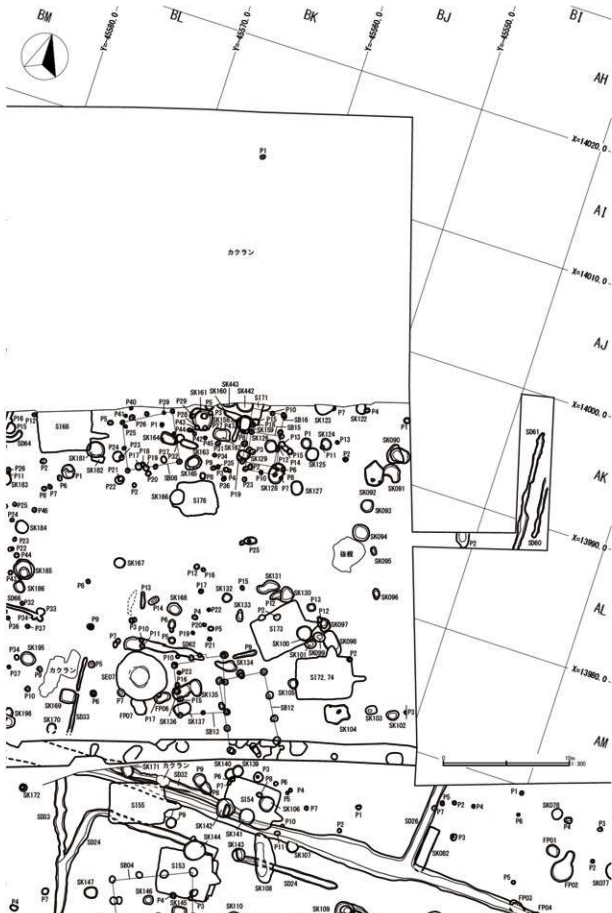
第7圖 全洲園劃圖(1)

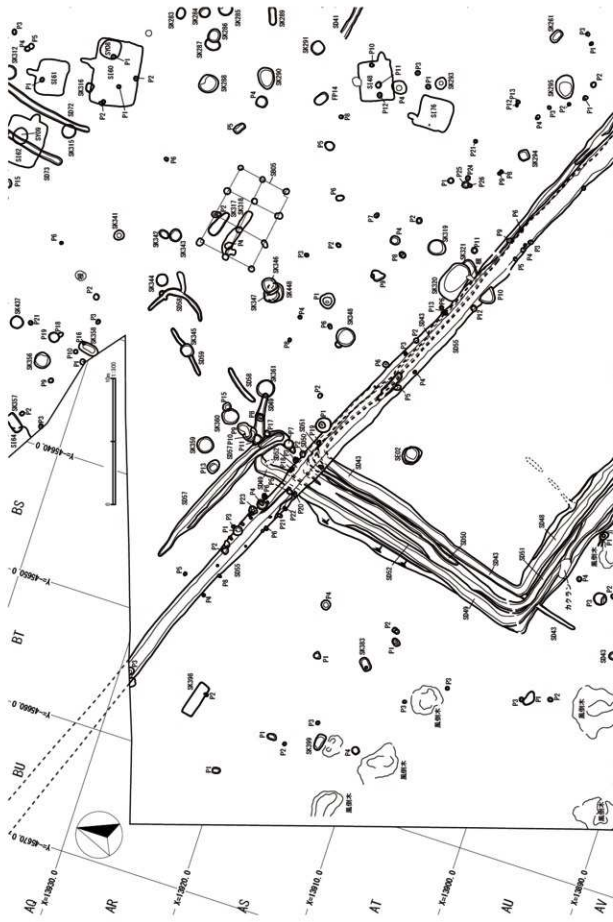


第8圖 全洲區劃圖(2)

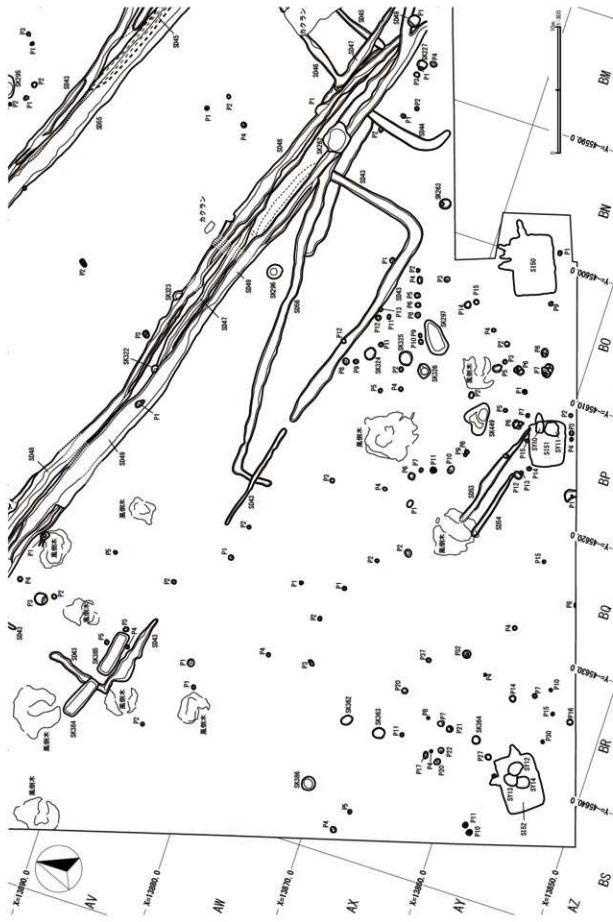


第9図 全測図割図(3)





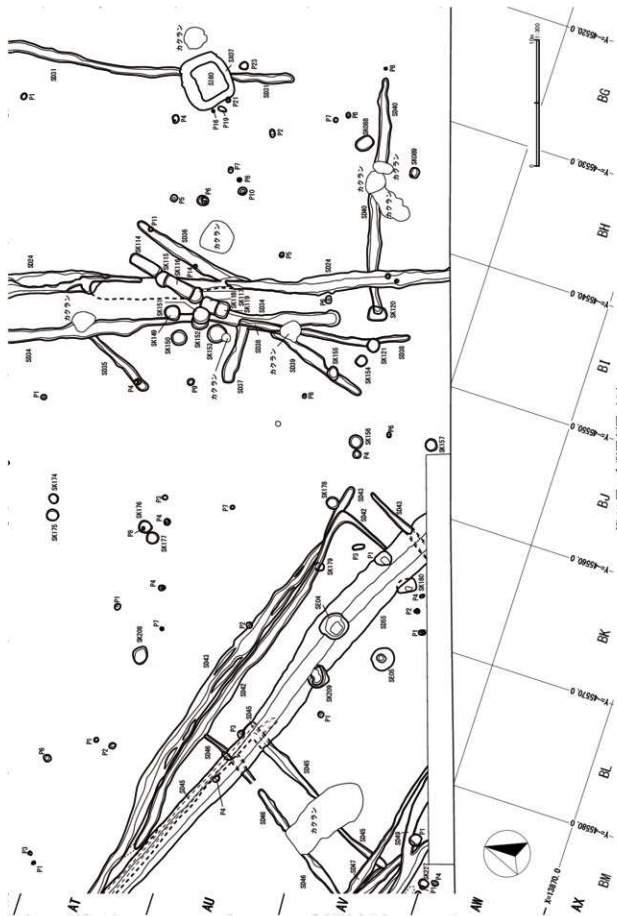
第11圖 金洲國庫圖(5)



第 12 図 全洲図割図 (6)



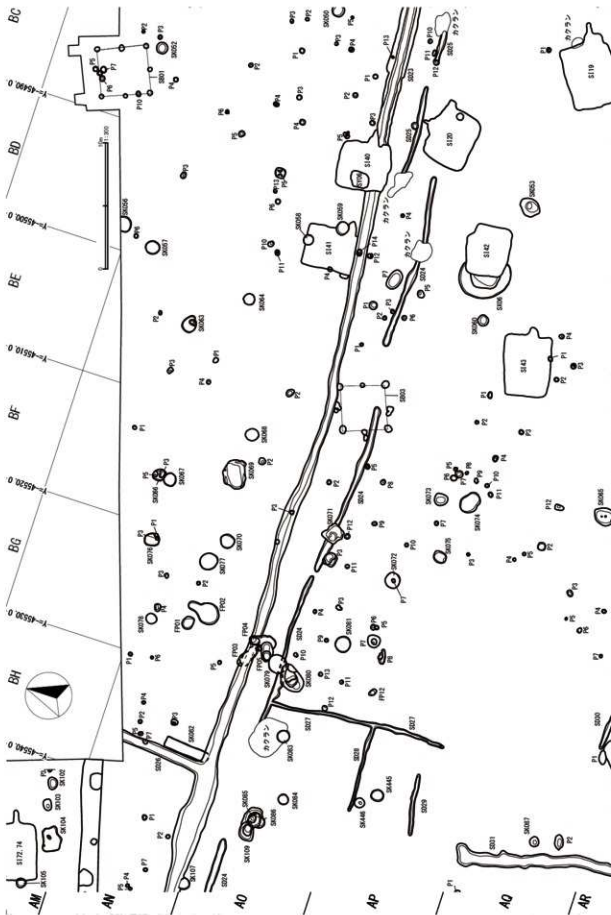
第13圖 全洲圖割圖(7)



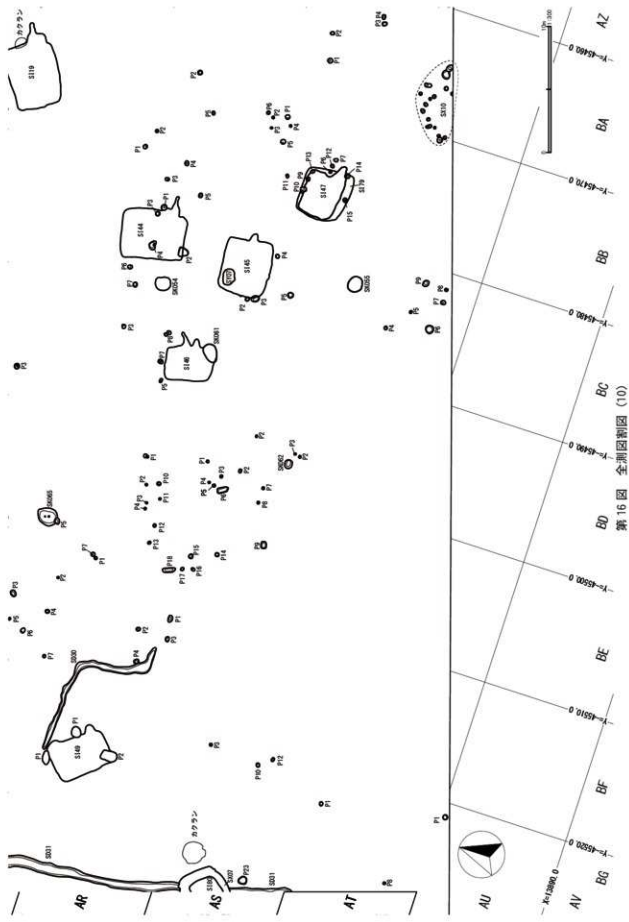
第14回 全洲図割図(8)







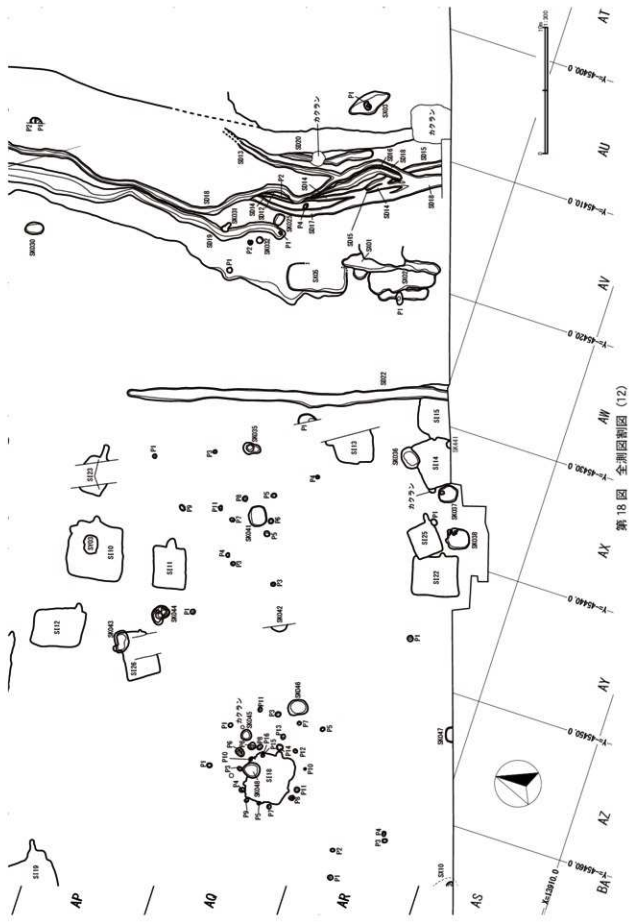
第15図 全洲図割図(9)



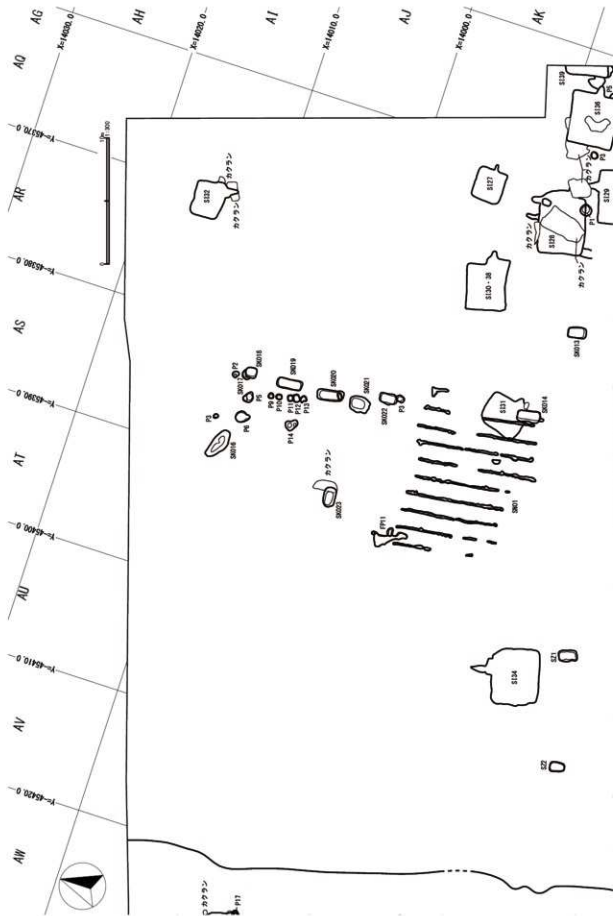
第 16 図 全測区劃図 (10)



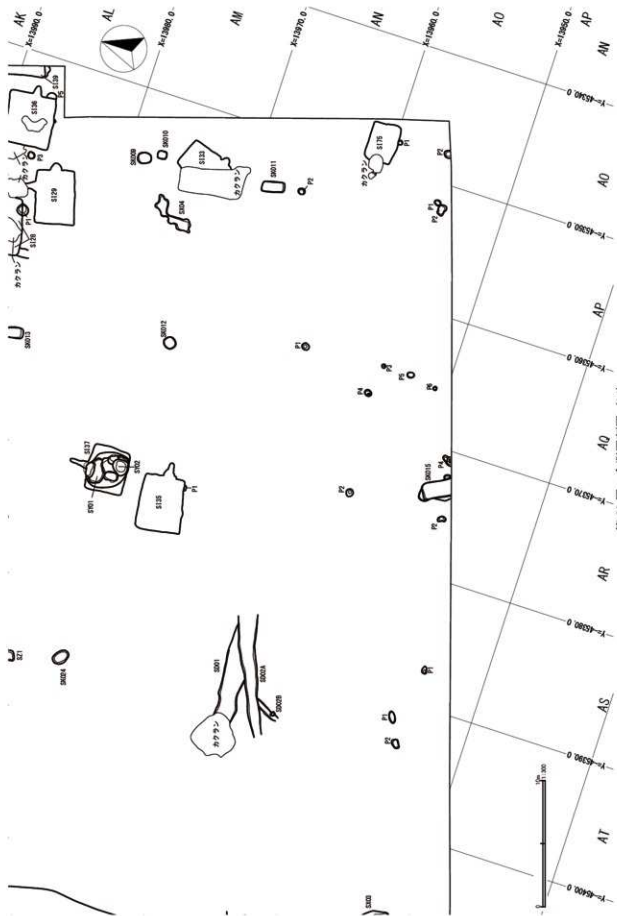
第 17 図 全洲図割図 (11)



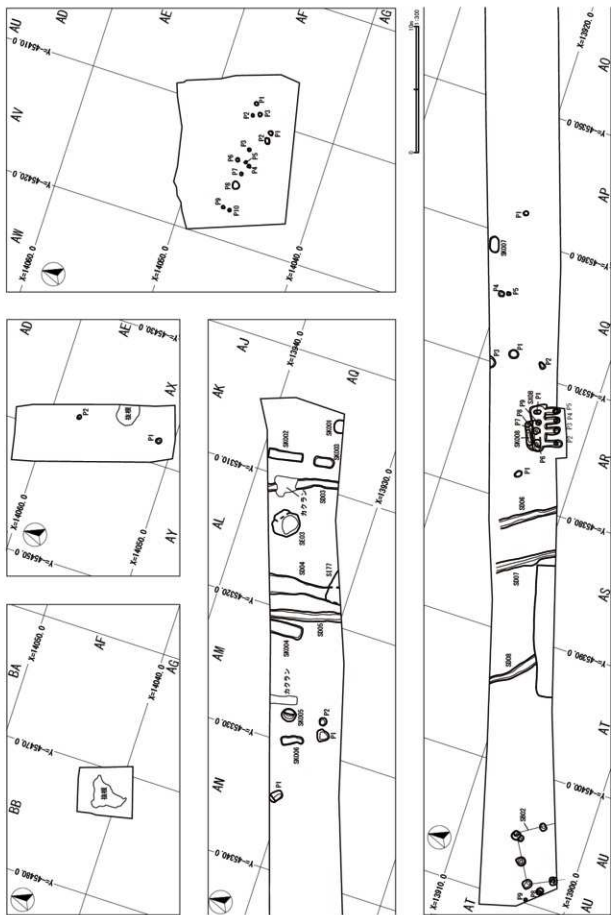
第 18 回 全洲圖割図 (12)



第 19 図 全洲図割図 (13)



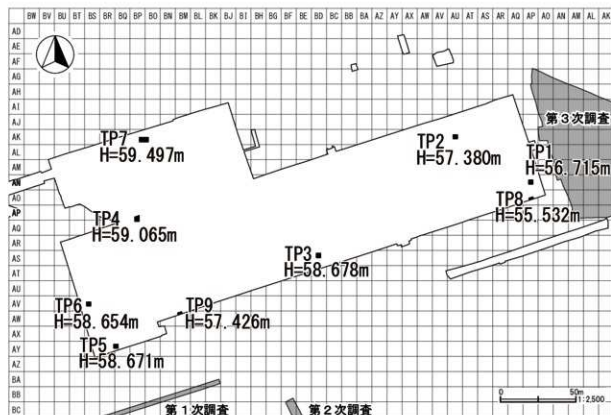
第 20 図 全洲園劃圖 (14)



第 21 圖 全洲圖附圖 (15)

### 3 基本土層

宮下遺跡は江南台地の北東端縁辺に位置し、東に向かって尾根上に突出した台地上に立地する。平成20年に発掘された宮下遺跡Ⅱの調査区は前述した台地上先端部に立地し、さらにその西側に延びる地点が今回の調査区である。調査区は大きく台地平坦部と2か所の谷部とに分けられる。基本土層は9地点で作図した。TP1～7は台地上の7地点で作図し、TP8は東谷、TP9は西谷でそれぞれ作図した。今回の調査区は駐車場などに利用されて削平されており、台地上の遺構確認はⅠ・Ⅱ層或いはⅢ層上面となった。東谷の基本土層は黒色土を基調とし、⑤層と⑥層の中間層に浅間Bテフラが確認された。遺構確認は第9・11・12号溝が④層上面、第10・17・18号溝が⑥層上面、第14～16号溝が⑦層上面である。西谷の基本土層は黒褐色土を基調とし、遺構確認は第55・56号溝が③層上面である。



第22図 テストピット配置図

#### TP1～7土層説明

- I 暗褐色マムル新断面
- II 黄褐色マムル
- III 明黄褐色マムル層 62～2mmの風化したねんど色軽石含
- IV 黄褐色マムル
- V 暗褐色マムル 炭色帯
- VI 灰白黄褐色マムル
- IX 褐色粘質土マムル
- X 褐色粘質土マムル φ20mm大のワゴン粒少量含
- XI-1 褐色粘質土マムル φ20mm大のワゴン粒少量含
- XI-2 灰黄褐色粘質土マムル φ20mm大のワゴン粒多量含
- Ⅻ 黄褐色粘質土マムル
- XIII 灰白色粘土 疎層入

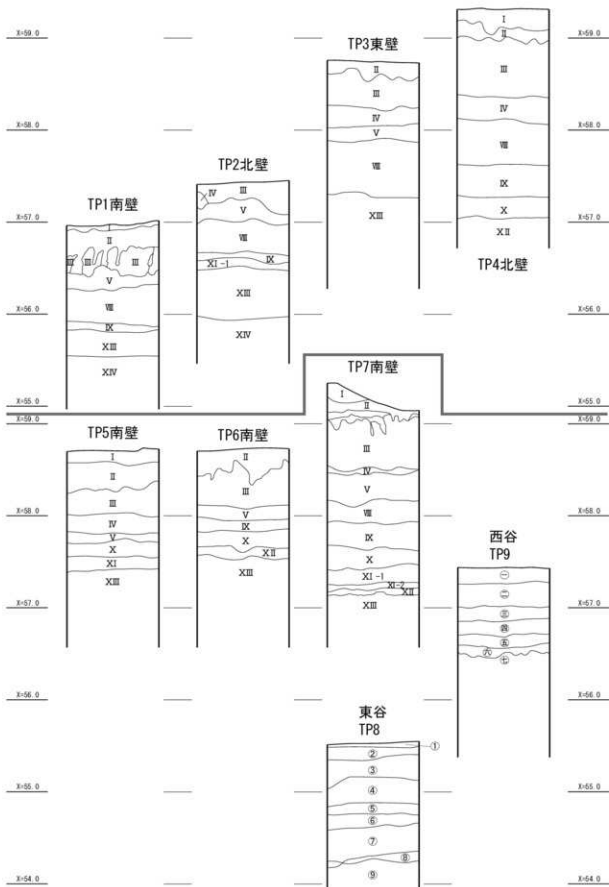
#### TP8土層説明(東谷)

- ① 砂石
- ② 礫土
- ③ 101K3/4 暗褐色土 粘性弱 しまり強 LR(φ10～20mm)・鉄分粒多量含 焼土粒少量含
- ④ 101K2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 LR(φ20mm)・L粒・鉄分粒多量含
- ⑤ 101K3/4 暗褐色土 粘性弱 しまり強 L粒多量含 焼土粒・炭化粒・ワラ少量含
- ⑥ 101K2/2 暗褐色土 粘性弱 しまり強 LR(φ10～10mm)・L粒少量含 焼土粒微量含
- ⑦ 101W1/7/1 黒色土 粘性強 しまり強 鉄分粒少量含 L粒・焼土粒微量含
- ⑧ 101K1/1 褐色土 粘性弱 しまり強 小石(φ5mm)・砂多量含
- ⑨ 101K8/2 灰白色粘土 粘性強 しまり強 礫(φ20～50mm)多量含 Ⅻ層下層に相当

#### TP9土層説明(西谷)

- ① 101K2/2 黄褐色土 粘性弱 しまり強 L粒・焼土粒微量含
- ② 101K2/2 黄褐色土 粘性強 しまり強 L粒・LR(φ10mm)・焼土粒微量含
- ③ 101W1/7/1 黒色土 粘性強 しまり強 L粒・炭化粒微量含
- ④ 101K3/4 暗褐色土 粘性弱 しまり強 L粒多量含 鉄分粒少量含
- ⑤ 7.5層2/2 黄褐色土 粘性強 しまり強 L粒・ワラ多量含 LR(φ10～20mm)少量含
- ⑥ 101K2/2 黄褐色土 粘性強 しまり強 LR(φ10～50mm)多量含
- ⑦ 101K8/4 浅黄褐色粘土 粘性強 しまり強 Ⅻ層に相当





第 23 图 土層柱状图

## IV 遺構と遺物

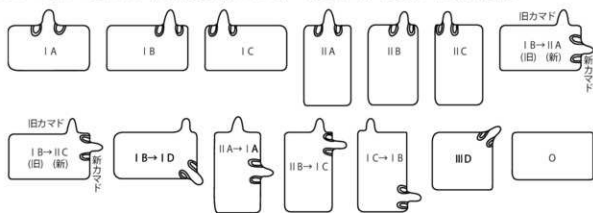
### 1 竪穴建物跡

宮下遺跡の今回の調査では80軒の竪穴建物跡が確認された。

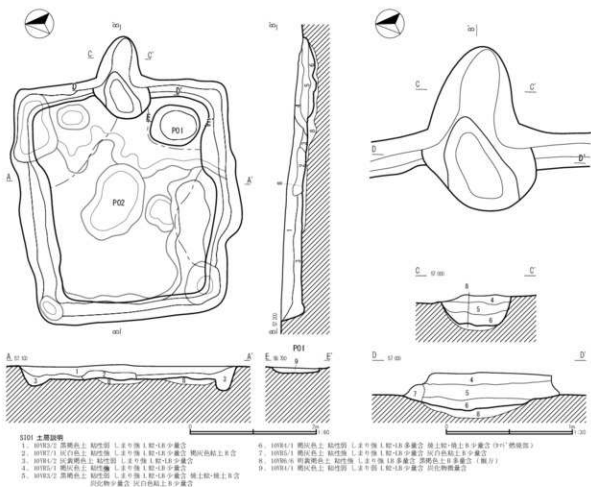
竪穴建物跡は8世紀中頃から11世紀前半に帰属する遺物が出土しており、本書では7期区分した。初現であるⅠ期は8世紀中頃で3軒、Ⅱ期は8世紀後半で22軒、Ⅲ期は9世紀前半で29軒、Ⅳ期は9世紀後半で10軒、Ⅴ期は10世紀前半で5軒、Ⅵ期が10世紀後半で3軒、Ⅶ期が11世紀前半で6軒である。

平面形は長軸・短軸の比率はあるもののほとんどの竪穴建物跡はいずれも長方形である。ここでは平面形状、カマド付設位置、主軸方向で分類を試みた。尚、本分中での主軸及び主軸方向はカマド煙道部に沿った軸方向を指す。また、カマドが2基以上付設されている場合は最初に構築されたカマド煙道部に沿った軸を主軸方向として採用した。

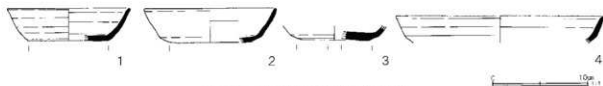
主軸が短軸の長方形をⅠ、主軸が長軸の長方形をⅡ、カマド付設位置の変更(改築)によって主軸が短軸から長軸に換わった長方形をⅠ→Ⅱ、前述の理由によって主軸が長軸から短軸に換わった長方形をⅡ→Ⅰ、正方形なものをⅢ、カマド付設の無いものを○とした。なお、カマド付設の無いものは長軸方向を主軸として分類した。確認された80軒のうち、Ⅰが31軒、Ⅱが33軒、Ⅲが2軒、Ⅰ→Ⅱが4軒、Ⅱ→Ⅰが4軒、○が6軒である。カマド付設辺の位置により、付設辺中央をA、付設辺右寄りをB、付設辺左寄りをC、隅角をDとした。カマド付設の竪穴建物跡74軒のうち、Aが15軒、Bが44軒、Cが7軒、Dが3である。建物跡床面積により5㎡未満を1、5～9.9㎡を2、10～14.9㎡を3、15㎡以上を4、大部分が調査区外だったり、大きく攪乱されたりして計測不能なものを5とした。80軒のうち、1は7軒、2が26軒、3が30軒、4が5軒、5が12軒である。カマド煙道に沿った主軸方向により、N-10° - E～N-10° - Wをa、N-50～69° - Eをb、N-70～90° - Eをc、N-10～30° - Wをd、N-70～90° - Wをe、4分類に当てはまらない主軸方向をfとした。80軒のうち、aは15軒、bが11、cが36軒、dが7軒、eが6軒、fが5軒である。本文中で竪穴建物跡の形状タイプ別分類は上記の4項目を組み合わせて「ⅡA3c」のように表記した。また、遺物の総量で整理収納箱は54.5×34.5×14.5cm、ポリ大袋は規格の13号、中袋は9号、小袋は6号を使用した。



第24図 竪穴建物跡分類模式図



第25図 第1号竪穴建物跡



第26図 第1号竪穴建物跡出土遺物

第2表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 杯	(13.0)	(3.4)	(8.4)	ABBGM	こぶい黄緑	不良	2%	南比金産
2	須恵器 杯	(13.9)	(3.6)	(8.7)	BFGM	灰白	不良	2%	南比金産
3	須恵器 杯	-	(1.5)	6.6	ABCFM	灰白	良好	破断片	南比金産 糸切隆周辺へ少崩り
4	須恵器 杯	(21.9)	(2.4)	-	AFGH	灰	良好	口縁部片	南比金産 口縁部短く外反する

第1号竪穴建物跡(第25図)

位置 AX-AK、AY-AK グリッドの台地緩斜面に位置する。

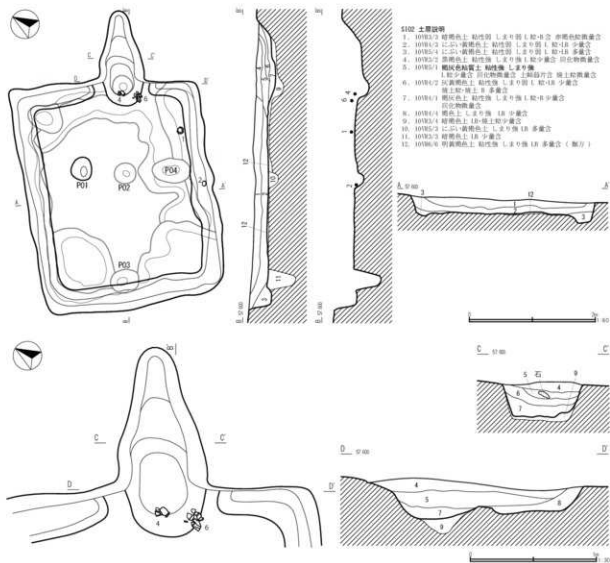
規模 長軸 3.71m×短軸 3.49m、床面積 10.16㎡、確認面からの壁高は0.21m、主軸方向はN-90°-E、形状タイプはⅡ A3cである。

概要 東側すくに東谷が在り、本跡東側は谷勾配によって自然削平されている。しかし、遺存状況は概

ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ11cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は確認されなかった。袖部は崩壊流失し形状としては捉えることはできなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上るとみられるが上部削平のため、全容は不明である。壁周溝は全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡発掘時のピットは南東隅角の方形で浅いP01のみである。掘方は中央部と建物隅角4ヵ所に浅い掘込みが確認された。遺物出土状況はカマド内と南壁際に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に1袋分で、1は掘方内から出土している。

**遺物（第26図、第2表）** 須恵器環を4点掲載した。1～4は南比企産の須恵器環である。3の底部は糸切り後周辺ヘラ削りである。

**時期** 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



## 第2号竪穴建物跡(第27図)

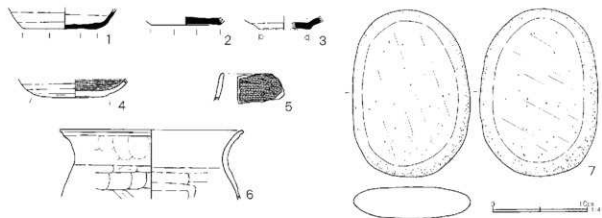
位置 AY-AK, AZ-AK・ALグリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸3.52m×短軸2.94m,床面積8.93㎡,確認面からの壁高は0.22m,主軸方向はN-50°-E,形状タイプはII B2bである。

概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ12cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は確認されなかった。袖部は崩壊流失し形状としては捉えることはできなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁から確認された先端まで1.10mを測る。壁周溝はカマド下を除き全周する。床面は平坦で全面にわたって踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは中央北寄りで深さ15cmのP01のみである。掘方は建物四隅の浅い掘込みと3基のピットが確認された。カマドと対峙する西壁際のP03は床面から45cmの深さである。遺物出土状況はカマド内にやや集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に1袋分で、いずれもカマド内と床面直上から出土した本跡に伴う遺物である。

遺物(第28図、第3表) 須恵器環3点、土師器環2点、土師器甕1点、磨石1点を掲載した。1～3は須恵器環である。1・2は南比企産で底部が糸切り後周辺へラ削りである。3は末野産で底部が糸切り後無調整である。4・5は土師器環である。南比企産で内面が黒色処理し、後横方向に磨いている。6は土師器甕である。「く」の字裏であるが、屈曲は弱い。7は磨石である。石材は閃緑岩で楕円礫をそのまま利用している。

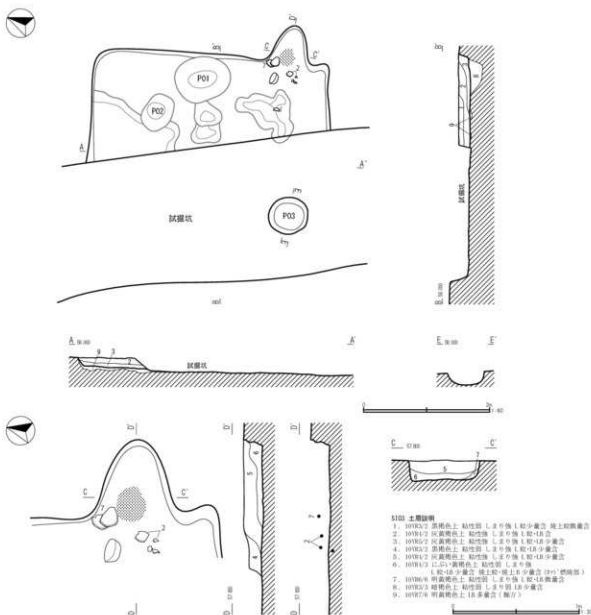
時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



第28図 第2号竪穴建物跡出土遺物

第3表 第2号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 環	-	(2.2)	7.9	ABFM	青	不良	0%	南比企産 糸切り後周辺へラ削り
2	須恵器 環	-	(0.8)	7.4	ABFH	こぶい模	不良	破断片	南比企産 糸切り後周辺へラ削り
3	須恵器 環	-	(1.4)	5.1	ABIM	灰	良好	破断片	末野産 糸切りのみ
4	土師器 環	-	(2.0)	8.0	F	こぶい模	不良	0%	南比企産 内面黒色処理 第24図4と同一個体方
5	土師器 環	-	(2.5)	-	ABF	こぶい模	不良	破断片	南比企産 内面黒色処理 第24図4と同一個体方
6	土師器 甕	(18.4)	(7.3)	-	ADM	こぶい模	良好	0%	
7	石製 磨石	長径17.7cm 幅12.4cm 厚さ3.4cm							石材閃緑岩



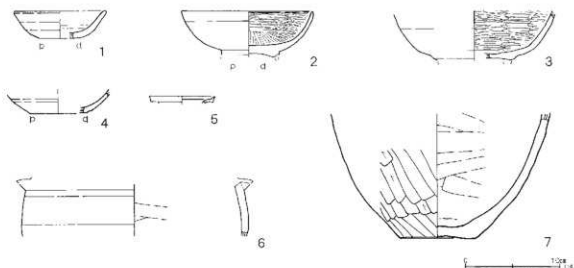
**第3号竪穴建物跡（第29図）**

**位置** AZ—AK・ALグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 西側が試掘時に大きく削平されており、遺存状況は不良である。

**規模** 全容は不明であるが、長軸 3.77 m×短軸 1.46 m以上、床面積 4.67 m<sup>2</sup>以上、確認面からの壁高は 0.18 m、主軸方向は N - 72° - E、形状タイプは I B5c である。

**概要** 西側半分が試掘時に床面下まで削平されているが、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形とみられる。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央から南寄りに位置し、燃焼部が壁外に 2/3 突出する。床面からの燃焼部覗込みはないが、火床部の被熱は顕著でローム地山が赤褐色に変化している。床面は硬化した部分のみならず軟弱である。壁周溝は検出されず、掘方は深さ 0.20 ～ 0.26 m のピットが 3 基確認された。遺物はカマド内に集中のみ見られる。遺物



第30図 第3号竪穴建物跡出土遺物

第4表 第3号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 杯	(9.7)	2.9	(4.3)	ABJM	こぶい織	不良	40%	糸切のみ
2	ロクロ土師器 高台碗	13.9	(4.9)	-	ABJMN	こぶい織	不良	70%	糸切のみ 内面土方キ
3	ロクロ土師器 高台碗	-	(5.3)	(7.9)	ABOJMN	こぶい織	不良	40%	糸切のみ 内面土方キ
4	ロクロ土師器 杯	-	(2.5)	(0.9)	ABFM	暗灰黄	良好	断面片	糸切のみ
5	灰軸陶器 小瓶	(0.6)	(0.6)	-	AB	灰黄	良好	口縁部片	口唇部がつまみあげられる 内面施釉
6	土師質土器 羽釜	-	(0.6)	-	ABIM	こぶい赤織	不良	断面片	
7	土師質土器 羽釜	-	(13.2)	0.9	ABJMN	こぶい織	普通	胴～底部片	輪積み成形 内面横位ヘラナデ 外面縦位ヘラ削り

の総量はポリ大袋に2袋分である。

遺物(第30図、第4表) ロクロ土師器杯2点、ロクロ土師器高台碗2点、灰軸陶器小瓶1点、土師質土器羽釜2点を掲載した。1はロクロ土師器杯である。2・3はロクロ土師器の高台碗である。高台部分が剥落している。黒色処理されていないが、体部内面を横方向に磨いている。4はロクロ土師器杯である。底部が糸切り後無調整である。5は灰軸陶器小瓶である。6・7は土師質土器羽釜である。6はロクロ成形で、7は非ロクロ成形である。

時期 11世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期

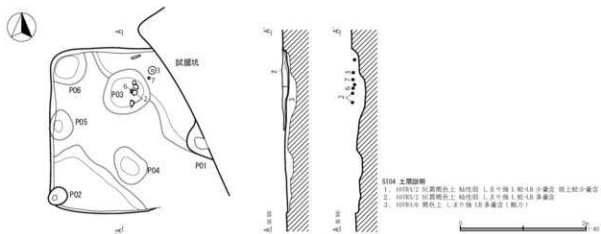
#### 第4号竪穴建物跡(第31図)

位置 BA—ALグリッドの台地平坦面に位置する。

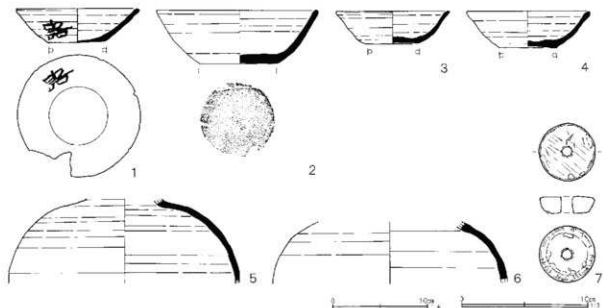
重複 北東側が試掘時に削平されており、遺存状況は不良である。

規模 全容は不明であるが、長軸2.65m以上×短軸2.62m、床面積6.55㎡以上、遺構確認面からの壁高は0.10m、主軸方向はN-90°-E、形状タイプはⅡB5cである。

概要 北東側1/3が試掘時に削平されているが、平面形はカマドに沿った主軸方向が長軸となる方形とみられる。覆土堆積は不詳である。カマドは東壁中央南寄りに位置するが、燃焼部から煙道部にかけて削平され、焚口部とみられる6cm掘り窪めたP01がわずかに確認されただけで、明瞭な被熱痕はみられなかった。床面は硬化した部分がみられず軟弱である。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のピット



第31図 第4号竪穴建物跡



第32図 第4号竪穴建物跡出土遺物

第5表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	12.7	3.5	6.2	ABDGM	褐灰	良好	90%	実野焼 糸切のみ 体部外面・正位垂書「跡」
2	須恵器 碗	16.9	5.6	6.2	ABFGHM	にぶい橙	不良	90%	南比金産 糸切縁全周へ少削り
3	須恵器 坏	11.8	3.4	5.6	AFG	黄灰	不良	100%	南比金産
4	須恵器 坏	(12.9)	3.8	(6.1)	ABDFGHM	褐灰	不良	90%	南比金産 糸切のみ
5	須恵器 長頸瓶	-	(9.0)	-	ABFGHM	灰黄褐	良好		頸～胴部片
6	須恵器 長頸瓶	-	(9.0)	-	ABDGM	灰	良好		胴部片
7	石製品 紡錘車	長さ4.4cm	幅4.3cm	厚さ1.3cm	重量33.5g	径4.3cm	孔径0.8cm		胴部に放射状のキズあり

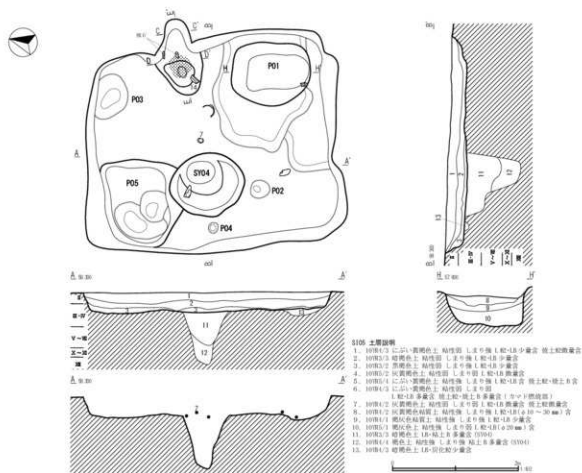
は南西隅角で深さ0.26 mのP02、掘方ピットはP03～06の4基でカマドと対峙する西壁際のP05は深さ0.36 mである。遺物出土状況は北側と掘方P03に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

遺物(第32図、第5表) 須恵器坏、須恵器碗、須恵器長頸瓶、石製紡錘車が出土した。

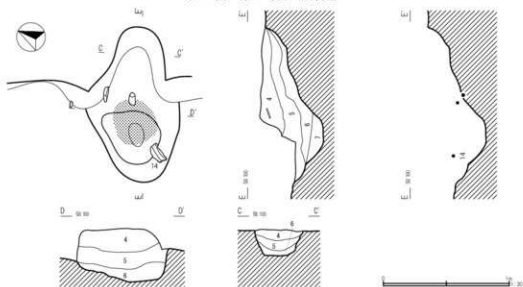


1・3・4は須恵器坏である。2は須恵器埴である。1は末野産で体部外面に墨書がある。2～4は南比企産である。5・6は須恵器長頸瓶の胴部破片である。7は石製紡錘車である。石材は滑石である。

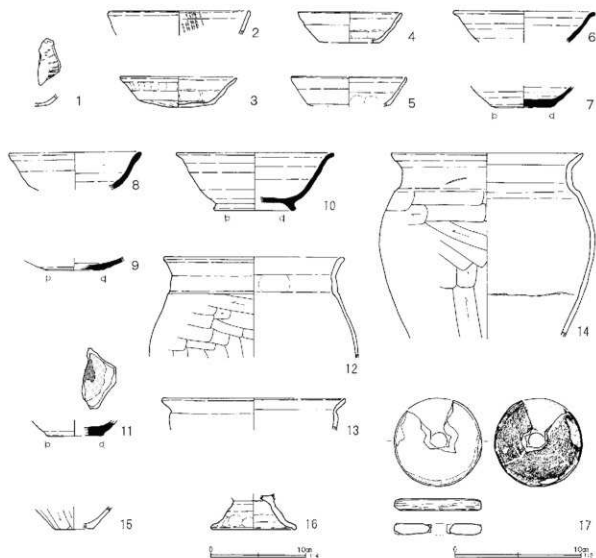
時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第33図 第5号竖穴建物跡1



第34図 第5号竖穴建物跡2



第35図 第5号竪穴建物跡出土遺物

#### 第5号竪穴建物跡（第33・34図）

**位置** BA-AL・AMグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 中央部西側で第4号土取り遺構と重複しており、本跡のほうが新しい。

**規模** 長軸3.95m×短軸3.41m、床面積10.18㎡、遺構確認面からの壁高は0.27m、主軸方向はN-71°-E、形状タイプはI C3cである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央やや北寄りに付設されている。燃焼部は壁外へ1/4突出し、掘込みは床面から深さ18cmである。燃焼部内の火床面は被熱痕が著しく、細長い自然礫が立位で2点検出され、それぞれ支脚と袖石に利用されていたとみられる。袖部は検出されなかったが、カマド脇の廃絶時間口P01の上層から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。床面はほぼ平坦でカマド前に硬化部分がみられた。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のピットは南東隅角のP01と北西隅角のP05で、いずれも方形で箱形に掘込まれたピットである。掘方ピット

第6表 第5号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.5)	-	AB	こぶい焼	良好	体一部断片	底部へう削り 内面放射状焼文 北武蔵型坏
2	土師器 坏	(14.8)	(2.4)	-	AB	こぶい焼	良好	口縁断片	内面放射状焼文 北武蔵型坏 内外裏焼れている
3	土師器 坏	12.3	3.2	(8.0)	ABE	焼	良好	90%	底部へう削り 体部内外裏焼圧痕 平底
4	土師器 坏	(18.8)	3.2	(8.3)	ADJ	焼	良好	口縁~体部断片	底部へう削り 体部内面焼痕圧痕 平底
5	土師器 坏	(12.0)	(3.1)	-	ABD	焼	良好	口縁~体部断片	底部へう削り 体部内面焼痕圧痕 平底
6	須恵器 坏	(14.7)	(3.3)	-	ABHJ	焼灰	良好	口縁断片	末野産
7	須恵器 坏	-	(2.3)	(8.5)	ABFGM	灰黄焼	良好	90%	南比企産 糸切のみ
8	須恵器 坏	(13.6)	(4.0)	-	ABDFGM	こぶい焼	不良	口縁~体部断片	南比企産
9	須恵器 坏	-	(1.4)	(8.3)	ABDGM	灰	良好	断片	末野産 糸切のみ
10	須恵器 高台壇	(18.6)	6.1	(8.1)	ABDG	こぶい黄焼	不良	90%	末野産 糸切のみ
11	須恵器 坏	-	(1.4)	(8.1)	ABG	こぶい黄焼	不良	断片	末野産 糸切のみ 内面鉄分付着
12	土師器 甕	(18.8)	(10.6)	-	ABIM	こぶい赤焼	良好	口縁~胴部断片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 内面焼痕圧痕
13	土師器 甕	(18.2)	(3.4)	-	ABDI	焼	良好	口縁断片	
14	土師器 甕	20.0	(19.4)	-	ABGHKM	明赤焼	良好	90%	外面上部横位へう削り 中部横位へう削り 下部縦位へう削り
15	土師器 甕	-	(2.2)	(4.1)	AB	黄焼	良好	断片	外面下部縦位へう削り
16	土師器 台付甕	-	(3.4)	(8.6)	ABM	焼	良好	胴部断片	外裏焼痕圧痕
17	土製品 紡錘車	長さ 6.7cm	幅 6.8cm	厚さ 0.8cm	重さ 37.2g	径 6.8cm	孔径 1.2cm		須恵器坏の底部転用 外周断部糸切り痕あり

トは5基確認された。P02は深さ0.28m、カマドと対峙する西壁際のP04は0.36mである。遺物はカマド内にやや集中がみられるが、全体的には散在している。遺物の総量はポリ大袋に3袋分である。

**遺物（第35図、第6表）** 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台壇、土師器台付甕、土師器甕、転用紡錘車が出土した。1～5は土師器坏である。1・2は放射状の暗文が施されている。3～5は口縁が広がりつつ立ちあがり、平底である。6～9は須恵器坏である。10は須恵器高台壇、11は須恵器坏である。7・9・11は底部が糸切り後無調整である。11は底部内面に鉄分が付着している。7・8は南比企産で、6・9～11は末野産である。12～15は土師器甕である。12・14は口縁が「コ」の字であり、13は口縁が短く「く」の字状に屈曲している。16は土師器台付甕脚部断片である。17は須恵器坏の底部を再利用した紡錘車である。縁辺をヘラで加工している。

**時期** 9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期

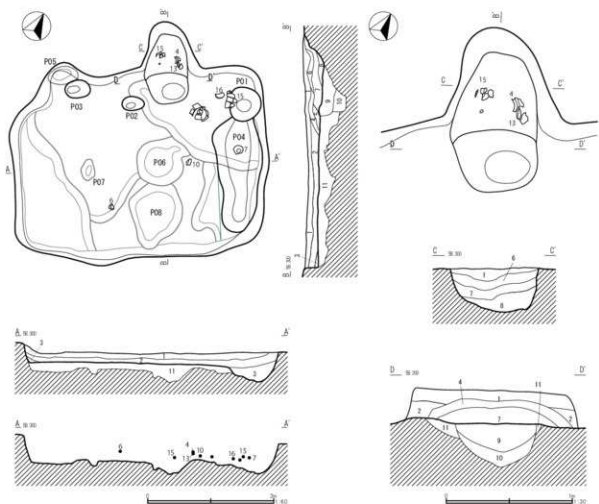
### 第6号竪穴建物跡（第36図）

**位置** BA—AL、BB—ALグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 北西側で第049号土坑と重複し、本跡のほうが新しい。

**規模** 長軸4.01m×短軸2.97m、床面積9.55㎡、遺構残存面からの壁高は0.17m、主軸方向はN-28°-W、形状タイプはI B2dである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央やや東寄りに付設されており、燃焼部は壁外へ1/3突出し、掘込みは床面から深さ4cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部も検出されなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられ



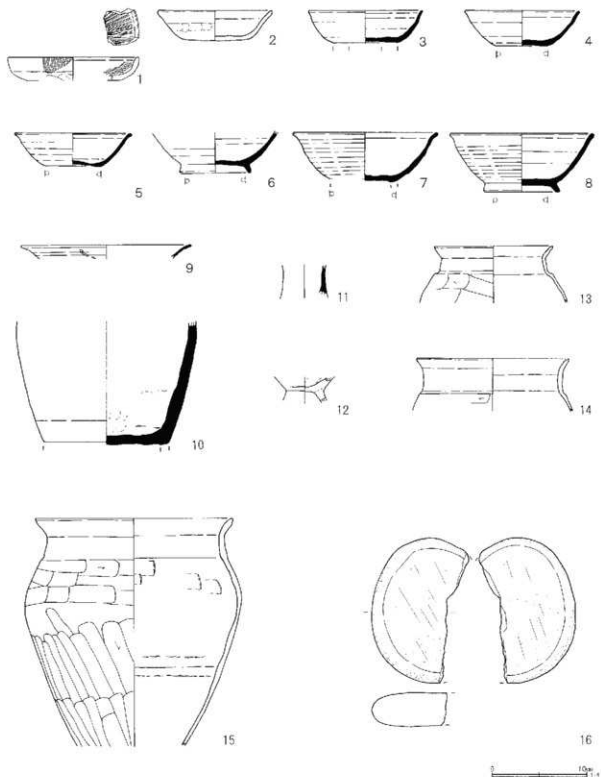
3104 土器図説

1. 10132/2 黒褐色土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土少量含
2. 10134/2 灰黄褐色土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含
3. 10136/6 灰黄褐色土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含
4. 10134/1 褐色粘土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含
5. 10132/1 褐色粘土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含
6. 10134/1 褐色粘土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含 (口縁部)
7. 10132/1 褐色粘土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含
8. 10134/2 灰色黄褐色土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含
9. 10134/1 褐色粘土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含 同化物含
10. 10132/1 黒褐色土 粘性强 しまり強 L 軟-LB 少量含 焼土軟土B 少量含 同化物少量含
11. 10136/6 灰黄褐色土 粘性强 しまり強 LB 少量含 (口縁)

第 36 図 第 6 号竪穴建物跡

る。床面はほぼ平坦でほぼ全面にわたって硬化面が確認された。壁周溝は東壁際のみ検出されたが、幅が広く通常のものとは形状が異なる。廃絶時のピットは北側に位置する深さ 24～36cm の PO1～PO3 の 3 基、掘方ピットは深さ 25～40cm の 4 基である。また、カマド燃烧部下に深いピット状の堀込みを有する。遺物はカマド内と北東隅角に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物 (第 37 図、第 7 表)** 土師器杯、須恵器杯、須恵器高台壇、須恵器長頸瓶、土師器甕、土師器台付裏、磨石が出土した。1・2 は土師器杯である。1 は内面に放射状の暗文が施されている。外面に油煙が付着し、平底風である。2 は口縁が広がりつつ立ちあがり、平底である。3～5 は須恵器杯、6～8 は須恵器高台壇、3 は底部が糸切り後周辺へラ削りである。4～7 は底部が糸切り後無調整である。3・4 は南比産産で、5～9 は末野産である。9 は須恵器皿である。体部外面に油煙が付着している。10・11 は須恵器長頸瓶である。12 は土師器台付裏の接合部片である。13～15 は土師器甕である。口縁は「コ」



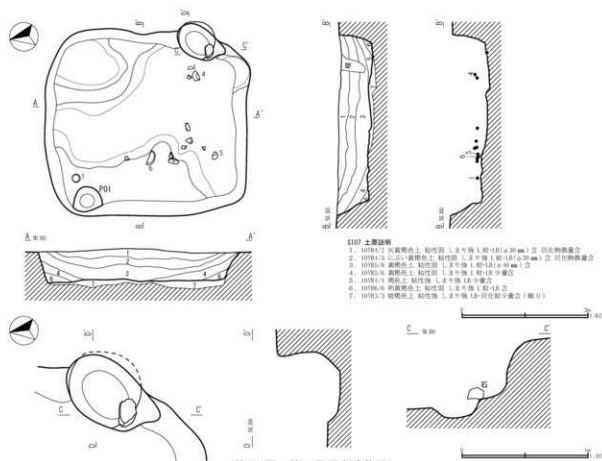
第37図 第6号竪穴建物跡出土遺物

の字裏に近い。16は磨石である。石材は閃緑岩で扁平な楕円礫をそのまま利用している。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

第7表 第6号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.8)	(2.5)	-	AB	こぶい赤褐色	良好	0%	底部へう割り 内面放射線文 平底裏 外面油煙付着
2	土師器 杯	(12.0)	(3.2)	-	ABDG	褐色	良好	0%	体部外面指痕旺盛 平底
3	須恵器 杯	(12.0)	3.4	(6.8)	ABFGM	緑灰	良好	0%	南比金庫 糸切後周辺へう割り
4	須恵器 杯	(12.0)	3.7	(5.4)	ABFGM	黄灰	良好	40%	南比金庫 糸切のみ
5	須恵器 杯	(12.0)	3.5	(6.0)	AGHM	灰	良好	0%	末野産 糸切のみ
6	須恵器 高台皿	-	(4.2)	7.0	ABGKM	黄灰	良好	40%	末野産 糸切のみ
7	須恵器 高台皿	15.1	(5.2)	7.1	ABIMN	灰白	不良	90%	末野産 糸切のみ
8	須恵器 高台皿	15.0	6.2	7.9	ABGKM	黄灰	良好	90%	末野産 糸切のみ
9	須恵器 皿	(17.7)	(1.5)	-	ABIM	こぶい橙	不良	口縁部片	末野産 外面油煙付着
10	須恵器 長頸瓶	-	(13.0)	(13.2)	M6	緑灰	良好	胴～底部片	末野産 高台取り付け部周辺ナナ 体部下半～底部指痕旺盛 内面紅土粒の混入
11	須恵器 長頸瓶	-	(3.7)	-	ABF	緑灰	良好	頸部片	
12	土師器 台付壺	-	(2.8)	-	ABGK	褐色	良好	結合部片	
13	土師器 小型壺	(12.4)	(6.0)	-	ABDI	褐色	良好	口縁～頸部片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り
14	土師器 壺	(16.0)	(5.5)	-	ABDI	明赤褐色	良好	口縁～頸部片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り
15	土師器 壺	20.8	(24.1)	-	ABDM	明赤褐色	良好	90%	コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り 下部縦位へう割り
16	石器 磨石	長さ15.5cm 幅(10.2)cm 厚さ3.6cm 重さ600.0g							石材閃緑岩

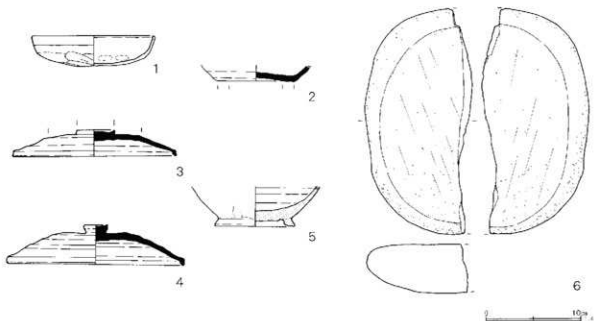


第38図 第7号竪穴建物跡

第7号竪穴建物跡(第38図)

位置 BB-ALグリッドに位置する。

重複 南東側で第49号土坑と重複し、本跡のほうが新しい。



第39図 第7号竪穴建物跡出土遺物

第8表 第7号竪穴建物跡出土遺物観察表

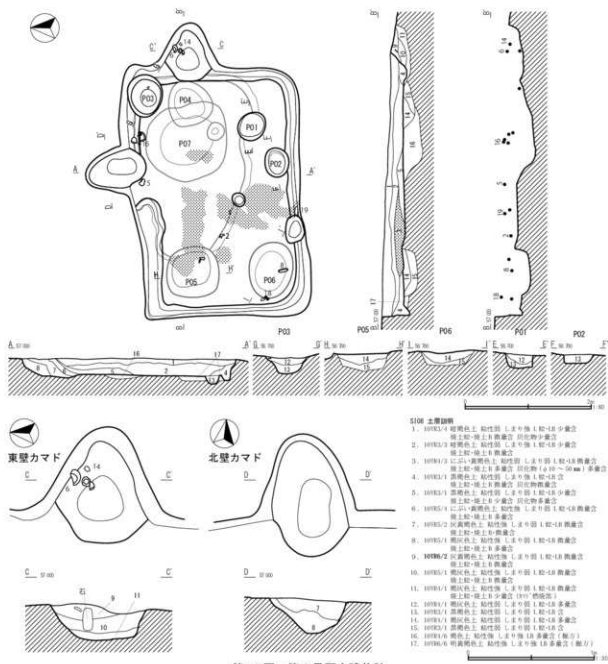
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	12.8	3.2	-	ABGJK	褐色	良好	100%	底部外側へラ削り 内面輪縁直 丸底
2	須恵器 坏	-	(1.7)	8.0	ABFGN	赤い粉	不良	一部片	南比企産 糸切後周辺へラ削り
3	須恵器 蓋	17.1	2.7	径径1.9	ABFGM	黄灰	良好	10%	南比企産 糸切後周辺へラ削り
4	須恵器 蓋	(18.6)	4.1	径径(1.9)	ABFGM	黄灰	良好	40%	南比企産 天井部周辺面輪へラ削り
5	灰釉陶器 瓶	-	(4.3)	8.4	ABDMN	緑灰	普通	一部片	外面面輪
6	石器 磨石	長さ(23.9)cm	幅(11.3)cm	高さ5.2cm	重さ1999.0g				石材閃緑岩

**規模** 長軸3.19m×短軸2.85m、床面積6.80㎡、遺構残存面からの壁高は0.64m、主軸方向はN-80°-W、形状タイプはI B2eである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の南寄りに付設されており、燃焼部は壁外へ1/3突出し、掘込みは床面から深さ6cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部も検出されなかったが、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、カマド内の礫は袖石とみられる。床面はほぼ平坦でほぼ全面にわたって硬化面が確認された。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のピットは北西隅角のP01のみである。南東隅角に壁を掘込んだカマド形状に似た掘方がみられる。遺物は全体に散在する。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物** (第39図、第8表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋、灰釉陶器瓶、磨石が出土した。1は土師器坏である。口縁が直立しつつ立ちあがり、丸底である。2は須恵器坏である。南比企産で底部糸切り後周辺へラ削りである。3・4は須恵器蓋である。摘みは釘頭状で南比企産である。天井部糸切り後周辺へラ削りである。5は灰釉陶器瓶である。6は石材が閃緑岩の磨石である。

**時期** 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



第40図 第8号竪穴建物跡

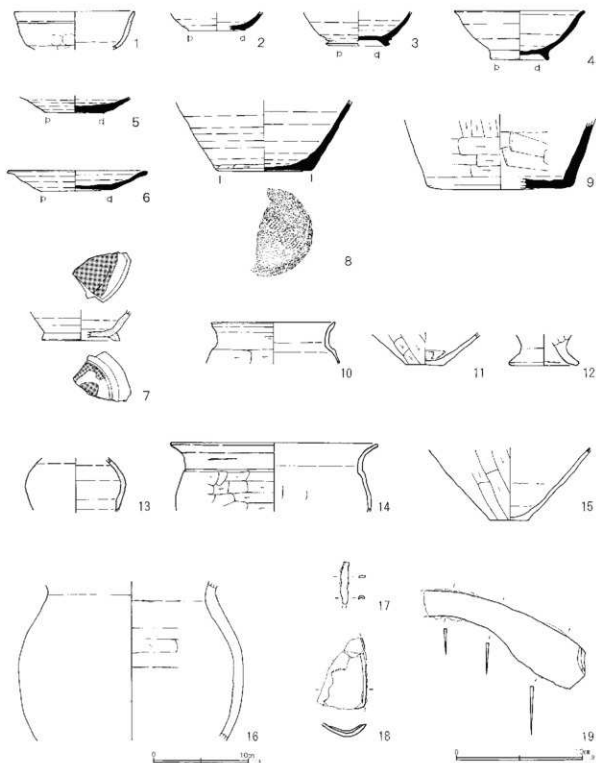
### 第8号竪穴建物跡(第40図)

**位置** AY—AN グリッドの台地平坦面に位置する。

**規模** 長軸 3.94 m×短軸 2.65 m、床面積 9.54 m<sup>2</sup>、遺構残存面からの壁高は 0.27 m、主軸方向は N-3°-W、形状タイプは I B→II C2a である。

**概要** 遺存状況は良好で、平面形は廃絶時に使用していた北カマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。本跡全城に厚さ 5~16cm の焼土や炭化材が確認された。床面に 4・5 層が堆積した後に焼土層である 3 層が確認されたことから本跡廃絶後に火が付けられたものとする。焼土層直上の 2 層はローム土などの塊を多く混在するため火を消そうとした投入土とみられる。カマドは 2 基付設されており、廃絶時に使用されていたのが北壁カマド、古いほうが東壁カマドである。カマドは 2 基とも燃焼部が壁





第41図 第8号竪穴建物跡出土遺物

外へ1/2突出し、掘込みも床面から深さ6cmである。また、いずれも燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部も検出されなかったが、北壁カマド前の床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、東壁カマド内の礫は袖石とみられる。床面はほぼ平坦でほぼ全面にわたって硬化面が確認された。壁周溝は全周する。廃絶時のピットは5基、掘方ピットは4基である。遺物は全体に散在する。遺物の総量はポリ大袋に3袋分である。

第9表 第8号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(12.5)	(4.0)	-	ABD	黄	良好	口縁部片	底部へう削り
2	須恵器 坏	-	(2.0)	(6.0)	ABC1	にぶい黄橙	良好	鉢～底部片	末野産 糸切のみ
3	須恵器 高台壇	-	3.7	5.8	ABOHLM	灰	良好	40%	末野産 糸切のみ
4	須恵器 高台壇	13.6	5.2	6.0	ABOGLMN	灰黄	良好	40%	末野産 糸切のみ
5	須恵器 皿	-	(1.8)	(6.2)	ABOHLMN	にぶい黄橙	不良	鉢～底部片	末野産 糸切のみ
6	須恵器 皿	14.5	2.1	7.4	ABOHLN	にぶい橙	不良	100%	末野産 糸切のみ
7	灰軸陶器 瓶	-	(3.3)	(8.0)	ABFG	灰黄褐	良好	底部片	内外裏油煙付着
8	須恵器 甕	-	(7.5)	16.2	ABOHLMN	褐灰	良好	胴～底部片	末野産 糸切線跡らなへう削り
9	須恵器 甕	-	(7.8)	(15.4)	ABC1LN	褐灰	良好	胴～底部片	末野産 底部へう削り
10	土師器 甕	(13.0)	(4.4)	-	AB1L	黄	良好	口縁部片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう削り
11	土師器 甕	-	(3.5)	4.0	AB1JK	褐	良好	胴～底部片	外面下部縦位へう削り
12	土師器 台付甕	-	(3.3)	(6.6)	AB	明赤褐	良好	脚部片	
13	灰軸陶器 小瓶	-	(5.8)	-	AB	褐黄灰	良好	胴部片	外面油煙
14	土師器 甕	(21.9)	(7.2)	-	AB1J	黄	良好	口縁部片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう削り
15	土師器 甕	-	(7.7)	4.0	AB1JK	にぶい橙	良好	胴～底部片	外面下部縦位へう削り
16	土師器 土釜	-	(16.0)	-	ABOHLM	にぶい黄橙	不良	胴～胴部片	
17	鉄製品 棒状金具	長さ3.41cm 幅0.8cm 厚さ0.2cm 重さ1.9g							
18	鉄製品 不明	長さ5.61cm 幅3.91cm 厚さ0.4cm 重さ37.1g	骨又は手押の可能性 二枚に重なり合う						
19	鉄製品 鎌	長さ13.8cm 幅3.9cm 厚さ0.3cm 重さ48.6g							

遺物(第41図、第9表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台壇、須恵器皿、須恵器甕、灰軸陶器瓶、灰軸陶器小瓶、土師器甕、土師器土釜、鉄製品が出土した。1は土師器坏で、口縁が直立しつつ立ちあがる。2は末野産の須恵器坏である。3・4は末野産の須恵器高台壇である。5・6は須恵器皿である。末野産で底部が糸切後無調整である。8・9は末野産の須恵器甕である。7・13は灰軸陶器で、7は瓶の底部破片、13は小瓶の胴部片である。7は底部の内外面に油煙が付着している。10・11・14・15は土師器甕である。10・14は「コ」の字甕である。12は台付甕の脚部片である。16は土師器土釜である。17～19は鉄製品である。17は棒状金具、18は不明鉄製品、19は鎌である。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

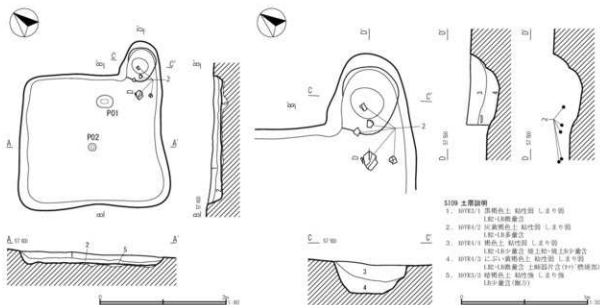
特徴 本跡はカマドを作り替えた改築建物で、廃絶後に火災焼失している。

### 第9号竪穴建物跡(第42図)

位置 AZ-ANグリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸2.22m×短軸2.06m、床面積3.83㎡、遺構残存面からの壁高は0.14m、主軸方向はN-50°-E、形状タイプはⅢD1bである。

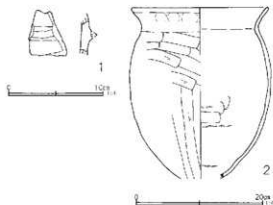
概要 遺存状況は良好で、平面形はほぼ正方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東隅角に付設され、燃焼部はほとんど壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ5cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部も検出されなかったが、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は削平されて確認できなかった。床面はほぼ平坦で全体的に軟弱である。壁周溝は検出されなかった。掘方ピットは2基で、いずれも小形でP01が深さ17cm、P02が14cmである。遺物はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋



第 42 図 第 9 号竪穴建物跡

第 10 表 第 9 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師質土器 羽蓋	-	(4.5)	-	ABDM	暗	良好	羽蓋銅部片	
2	土師器 壺	21.8	(27.4)	-	ABDM	暗	良好	10%	外面上部横位へラ削り 下部縦位へラ削り



第 43 図 第 9 号竪穴建物跡出土遺物

に 1 袋分である。

遺物(第 43 図、第 10 表) 土師器壺、土師質羽蓋  
 が出土した。1 は土師質羽蓋の銅部片である。2 は  
 土師器壺である。「く」の字裏である。

時期 10 世紀前半、宮下遺跡 V 期

特徴 平面形は正方形で隅角カマドである。

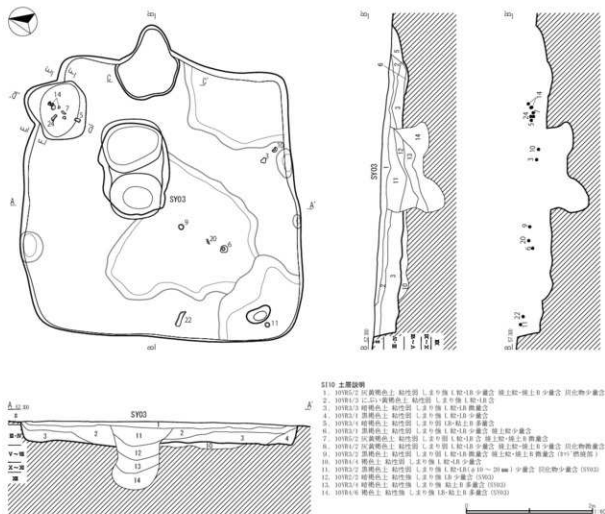
第 10 号竪穴建物跡(第 44・45 図)

位置 AY—A0 グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 中央部北東側で第 3 号土取り遺構に切られており、本跡のほうが古い。

規模 長軸 4.20 m × 短軸 4.18 m、床面積 15.09 m<sup>2</sup>、遺構残存面からの壁高は 0.34 m、主軸方向は N  
 - 78° - E、形状タイプは IIc → IB4c である。

概要 遺存状況は良好で、平面形は改築前の東壁カマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。カマ  
 ドは 2 基付設されており、廃絶時に使用されていたのが北壁カマド、改築前が東壁カマドである。2 基  
 とも燃焼部が壁外へ 1/5 程若干突出し、掘込みも床面から深さ 3 cm 程と浅い。また、いずれも燃焼部  
 内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部も検出されなかったが、北壁カマド前の床面直上から灰黄褐色  
 粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、東壁カマド内の礫は袖石とみられる。床面



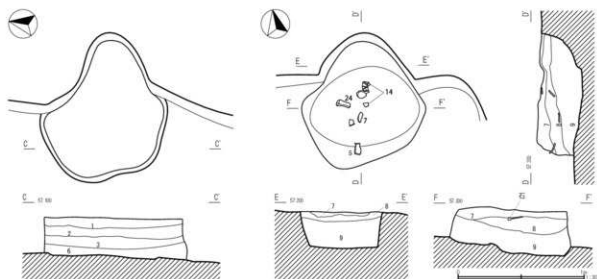
第44図 第10号竈穴建物跡1

はほぼ平坦で全体的に軟弱である。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のピットは1基、掘方ピットは3基である。遺物は北壁カマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に3袋分である。

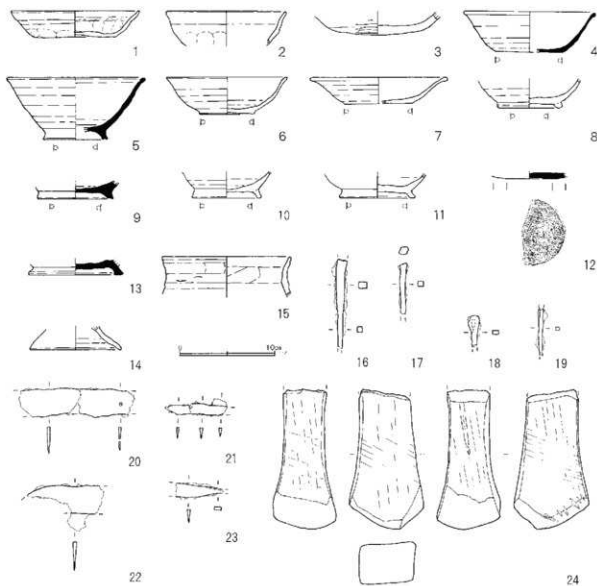
**遺物(第46図、第11表)** 土師器環、土師器鉢、須恵器壇、須恵器高台壇、須恵系土師質土器壇、須恵系土師質土器皿、須恵系土師質土器高台壇、須恵器環、須恵器長頸瓶、土師器台付甕、鉄製品、磁石が出土した。1・2は土師器環である。口縁が広がりながら直立し立ちあがり、平底である。3は土師器鉢である。4は須恵器壇、5・9は須恵器高台壇、6は須恵系土師質土器壇、7は須恵系土師質土器皿、8・10・11は須恵系土師質土器高台壇である。底部は糸切り後無調整である。12は須恵器環で南比企産である。底部は糸切り後周辺へラ削りである。底部内面に摩耗痕がみられ、底部外面にへラ書きがみられる。13は須恵器長頸瓶である。14・15は土師器台付甕である。15は口縁が直立しつつ立ちあがる。16~23は鉄製品である。16~19は釘、20は穂摘み具、21・23は刀子である。22は鎌である。24は凝灰岩製の磁石で、被熱している。

**時期** 10世紀前半、宮下遺跡V期

**特徴** 本跡はカマドを造り替えた改築建物である。



第 45 图 第 10 号竖穴建物跡 2



第 46 图 第 10 号竖穴建物跡出土遺物

第11表 第10号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坪	13.5	2.6	6.6	ABH	こぶい焼	良好	40%	体部内外面指圧痕 平底
2	土師器 坪	(12.5)	(3.4)	-	ABD	こぶい焼	良好		口縁部片 体部外面指圧痕 平底
3	土師器 鉢	-	(2.4)	10.7	ABD	焼	良好	破部片	体部外面へう割り
4	須恵器 埴	(13.8)	(4.2)	(7.0)	ABGH	灰白	良好	30%	末野面 糸切のみ
5	須恵器 高台埴	(14.8)	(6.5)	(6.6)	ABGHMN	灰	良好	40%	末野面 糸切のみ
6	須恵系土師器土師 埴	12.7	3.9	5.8	ABGHLMN	こぶい黄焼	不良	90%	末野面 糸切のみ
7	須恵系土師器土師 埴	(13.9)	(2.8)	(7.2)	ABGHLMN	こぶい黄焼	不良	30%	末野面 糸切のみ
8	須恵系土師器土師 高台埴	-	(3.1)	6.9	ABDKL	焼	不良	破部片	末野面 糸切のみ
9	須恵器 高台埴	-	(1.8)	7.8	ABGH1JLN	こぶい黄焼	不良	破部片	末野面 糸切のみ
10	須恵系土師器土師 高台埴	-	(2.9)	(7.2)	ABGHLM	こぶい黄焼	不良	破部片	末野面 糸切のみ
11	須恵系土師器土師 高台埴	-	(2.4)	7.6	ABGH1KN	焼	不良	体～破部片	末野面 糸切のみ
12	須恵器 坪	-	(0.8)	7.6	ABFHM	焼灰	良好	破部片	南比企産 糸切縁周辺へう割り 破部内黄焼跡あり 破部外面へう割き(口)
13	須恵器 長頸瓶	-	(1.4)	9.8	ABGHJM	焼灰	良好	破部片	南比企産
14	土師器 台付壺	-	(3.6)	(9.6)	AB	こぶい焼	普通	破部片	
15	土師器 台付壺	13.4	(4.2)	-	ABGHM	焼	良好		口縁部片
16	鉄製品 釘	長さ(7.6)cm	幅1.3cm	厚さ0.6cm	重さ7.3g				
17	鉄製品 釘	長さ(4.6)cm	幅0.8cm	厚さ0.5-0.6cm	重さ2.4g				
18	鉄製品 釘	長さ(2.5)cm	幅1.0cm	厚さ0.3cm	重さ2.0g				
19	鉄製品 釘	長さ(3.7)cm	幅0.8cm	厚さ0.3cm	重さ1.3g				
20	鉄製品 種柄具	長さ(9.1)cm	幅2.3cm	厚さ0.2cm	重さ10.4g				
21	鉄製品 刀子	長さ(4.7)cm	幅(0.4)cm	厚さ0.3cm	重さ4.8g				
22	鉄製品 鎌	長さ(3.6)cm	幅6.1cm	厚さ0.4cm	重さ10.0g				
23	鉄製品 刀子	長さ(3.7)cm	幅0.6-1.0cm	厚さ0.3cm	重さ4.8g				
24	石製品 磁石	長さ(11.0)cm	幅5.6cm	厚さ3.3cm	重さ380.0g				石材砂岩 平面彫形 前後長方形 方向直線多数 4面使用一部表面化

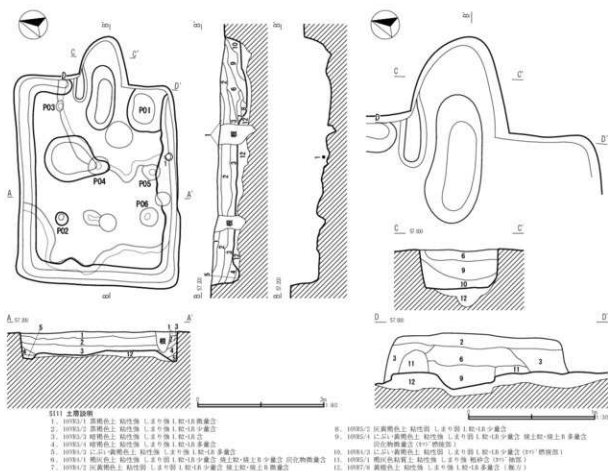
## 第11号竪穴建物跡(第47図)

位置 AY-APグリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸3.20m×短軸2.51m、床面積7.28㎡、遺構残存面からの壁高は0.29m、主軸方向はN-74°-E、形状タイプはII A2cである。

概要 木の根が深く入り込んでいるが遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の中央に付設されており、燃焼部は壁外へ1/3突出し、掘込みは床面から深さ6cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕がなく、袖部は北側だけ検出された。構築材は粗砂を混入する褐灰色粘質土である。床面は南側が北側に比べ約5cm高くなるが、凹凸は少なく、ほぼ全面にわたって硬化面が確認された。壁周溝はほぼ全周する。廃絶時のピットは3基で南東隅角のP01は床面から深さ25cm、方形で箱形の掘込みである。掘方ピットは5基検出され、P04～P07は対角線上に並ぶ。いずれも床面から16～18cmの深さである。遺物は特に集中した箇所は見られない。遺物の総量はポリ中袋に1袋分である。遺物(第48図、第12表) 土師器坪が出土した。1は土師器坪である。口縁部がやや直立しつつ立ちあがり、平底風である。

時期 8世紀後半、宮下遺跡II期



第47図 第11号竪穴建物跡

第12表 第11号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土銅器 杯	32.7	3.6	10.3	ABSQJAM	にぶい青	良好	90%	口縁わずかに内湾 縁部隆起状 平底裏



第48図 第11号竪穴建物跡出土遺物

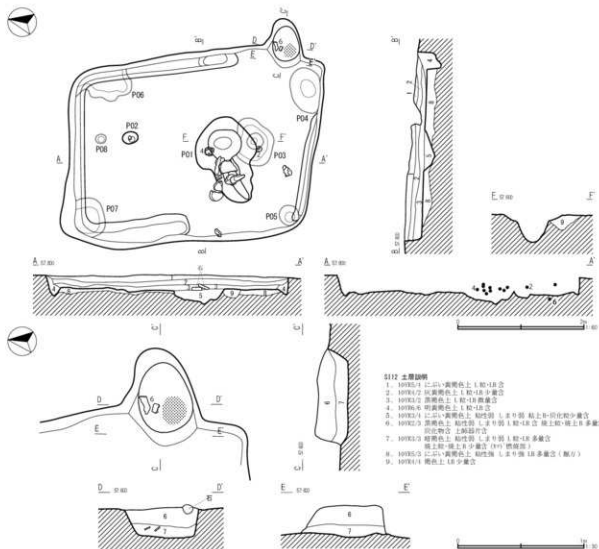
第12号竪穴建物跡(第49図)

位置 AZ-A0 グリッドの台地平坦面に位置する。

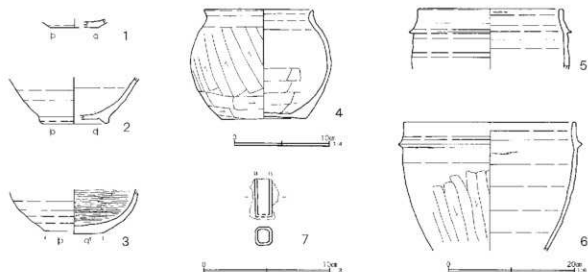
規模 長軸 3.86 m × 短軸 2.97 m、床面積 9.87 m<sup>2</sup>、

遺構残存面からの壁高は0.20 m、主軸方向はN-80°-E、形状タイプはI B2cである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の南東隅角に寄って付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ4 cmと浅い。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕があるが、袖部は崩壊流失し形状としては検出されなかった。床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は削平されて確認できなかった。床面はやや凹凸があり、カマド前に明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は西壁隙を除きほぼ全周する。廃絶時のビットは2基確認され、そのうち中央南側で検出されたP01は床面から深さ45 cmのビットと深さ16 cmの小溝が一体になったものである。小溝の直上に大きな円礫と緑泥片岩の板石が覆い被さるような状況で出土し、ビットの覆土中に焼土塊や炭が混入していることから、何らかの工房跡とも考えられる。掘方ビットは6基で、



第49图 第12号竖穴建物跡



第50图 第12号竖穴建物跡出土遺物



第13表 第12号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 坏	-	(0.9)	(5.9)	ABE1	褐色	不良	一部片	本野原 糸切のみ
2	ロクロ土師器 高台埴	(13.7)	(4.9)	(6.7)	ABDHM	こぶい焼	不良	2/3	本野原
3	ロクロ土師器 高台埴	(13.6)	(4.7)	(6.0)	ABDHM	こぶい赤焼	不良	90%	本野原 糸切後周辺へう削り 内面横位ミガキ
4	土師質土器 短頸壺	11.4	11.6	6.7	ABDM	褐色	良好	2/3	外面上部横位ミガキ 中部縦位へう削り 下部横位へう削り 内面底部横位のヘラミガキ
5	土師質土器 羽釜	(23.0)	(9.4)	-	ABDHJLM	こぶい焼	良好	口縁部片	ロクロ成形
6	土師質土器 羽釜	(27.4)	(29.4)	-	ABDHM	褐色	不良	2/3	ロクロ成形
7	鉄製品 不明	長さ (3.2) cm	幅 1.3cm	厚さ 1.4cm	重さ 20.5g				①13の11と同一個体とみられる。

P03 が深さ 26cm、P04 が 36cm、P05 が 28cm、P06 が 12cm、P07 が 16cm、P08 が 22cm である。P03 は P01 の覆土と近似している。遺物は P01 に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物 (第 50 図、第 13 表)** ロクロ土師器坏、ロクロ土師器高台埴、土師質土器短頸壺、土師質土器羽釜、不明鉄製品が出土した。1 はロクロ土師器坏で、底部は糸切り後無調整である。2・3 はロクロ土師器高台埴である。黒色処理されていないが、体部内面は横方向に磨いている。4 は土師質の非ロクロ成形の短頸壺である。5・6 は土師質土器羽釜である。ロクロ成形で口縁が直立し、胴部がわずかに内湾する。7 は袋状、断面形状が方形で、不明鉄製品とした。

**時期** 11 世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期

**特徴** ビットと小溝が一体になった施設が中央南側に検出され、本跡は何らかの工房跡だったとみられる。

### 第 13 号竪穴建物跡 (第 51 図)

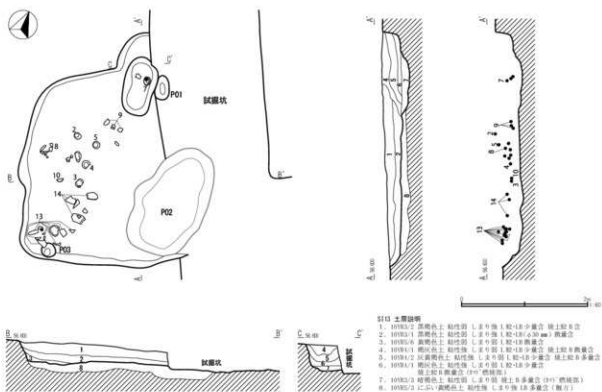
**位置** AX-AQ グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 東側が試掘時に大きく削平されており、遺存状況は不良である。

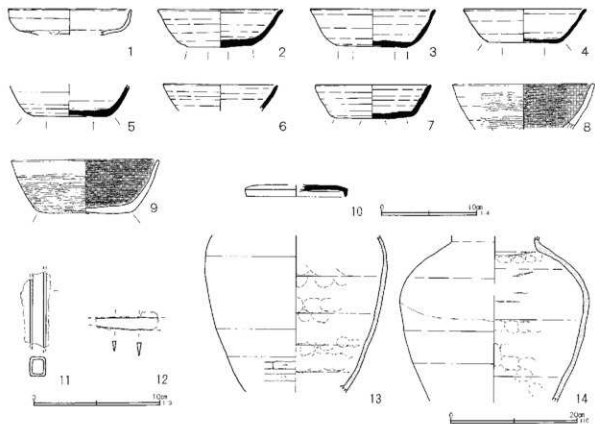
**規模** 全容は不明であるが、長軸 3.19 m×短軸 2.34 m 以上、床面積 5.31 m<sup>2</sup> 以上、遺構残存面からの壁高は 0.26 m、主軸方向は N-18°-W、形状タイプは II A5d である。

**概要** 東側半分が試掘時に床面下まで削平されているが、カマドに沿った主軸方向が短軸となる長方形の可能性がある。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 9 cm である。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は確認されず、袖部は崩壊流失し形状としては検出されなかったが、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は削平されて確認できなかった。床面はやや凹凸があり、カマド前に明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のビットはカマド東脇深さ 12cm の P01、掘方ビットは南側の浅く大きな P02 が確認された。遺物はカマド内と南西隅角付近に集中がみられるが、本跡に伴う出土状況のものは遺物 N0. 3・7・9 だけで他は覆土上層からの出土で後世の流れ込みとみられる。遺物の総量はポリ大袋に 3 袋分である。

**遺物 (第 52 図、第 14 表)** 土師器坏、須恵器坏、土師器埴、須恵器短頸壺蓋、灰釉陶器瓶、不明鉄製品、鉄製刀子が出土した。1 は北武蔵型の土師器坏である。口縁部がやや直立つつ立ちあがり、平底風である。2～7 は須恵器坏である。いずれも南比企産で糸切り後周辺へう削りである。8・9 はロクロ成形の土師器埴で、内面を黒色処理し、体部内外面を横方向に磨いている。10 は短頸壺蓋で、自然釉が



第 51 圖 第 13 号竖穴建物跡



第 52 圖 第 13 号竖穴建物跡出土遺物

第14表 第13号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考	
1	土師器 坏	(12.9)	(2.7)	-	ABJK	黄	良好	20%	底部ヘラ削り 平底履	
2	須恵器 坏	(13.0)	4.8	6.9	ABFGH	灰黄	良好	20%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り	
3	須恵器 坏	13.1	4.8	7.3	ABFGM	灰白	良好	30%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り	
4	須恵器 坏	12.9	3.6	7.4	ABFIN	灰	良好	30%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り	
5	須恵器 坏	-	(3.4)	7.8	ABFIM	灰白	良好	碎～底部片	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り	
6	須恵器 坏	(12.0)	(2.8)	-	ABF	灰白	良好	口縁部片	南比企産	
7	須恵器 坏	12.2	3.4	7.3	ABFGM	灰白	良好	100%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り	
8	土師器 罎	(14.8)	(4.8)	-	ABIM	黄	不良	口縁部片	内外露口口整形後横位ミガキ 内面黒色結核	
9	土師器 罎	15.5	5.4	9.8	ABIK	黄	不良	20%	糸切後全面ヘラ削り 内外露口口整形後横位ミガキ 内面黒色結核	
10	須恵器 短頸壺蓋	(10.5)	(1.2)	-	ABM	灰黄	良好	30%	外周自然焼付着	
11	鉄製品 不明	長さ(8.6)cm 幅1.3cm 厚さ1.5cm 重さ27.6g								112の7と同一体とみられる。
12	鉄製品 刀子	長さ(4.8)cm 幅(0.6-1.0)cm 厚さ0.3-0.4cm 重さ5.2g								
13	灰陶器 瓶	-	(25.1)	-	ABGM	黄灰	良好	胴部片	8-14から8-90新段階か 溝ヶ谷築跡群産 外周黒焼 灰被物・黒色粘土量	
14	灰陶器 瓶	-	(27.0)	-	ABGM	黄灰	良好	胴部片	8-14から8-90新段階か 溝ヶ谷築跡群産 外周黒焼 灰被物・黒色粘土量	

かかっており、摘み部分が剥落している。東海産の搬入品である。11・12は鉄製品である。11は袋状で断面形が方形の不明鉄製品である。12は刀子の刃部である。13・14は灰陶器瓶である。覆土上層の流れ込みである。

時期 8世紀中頃、宮下遺跡1期

#### 第14号竪穴建物跡(第53図)

位置 AX-AQ・ARグリッドの台地平坦面に位置する。

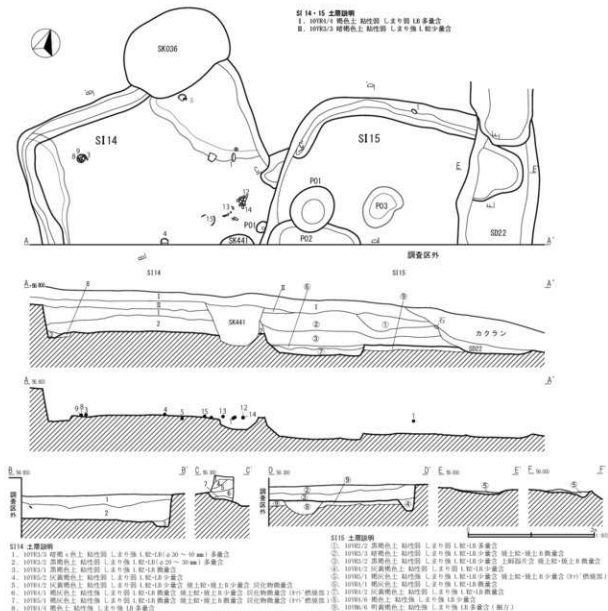
重複 南側は調査区外となり本跡北側半分だけの調査となった。また、東側を第15号竪穴建物、北東側を第036号土坑、南東側を第441号土坑と重複し、いずれも本跡が切られている。

規模 全容は不明であるが、長軸3.75m×短軸2.55m以上、床面積7.47㎡以上、遺構残存面からの壁高は0.38m、主軸方向はN-43°-E、形状タイプはI B5fである。

概要 平面形の全容は南側が調査区外につき不明だが、カマドに沿った主軸方向が短軸となる長方形の可能性ある。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁に付設され、燃焼部の半分以上が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ18cmである。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕は確認されず、袖部は崩壊流失し形状としては検出されなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は第15号竪穴建物に切られて確認できなかった。床面は平坦で、全面にわたって明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は南西側で検出された。掘方は北東側と西壁際で浅い掘込みが確認された。遺物は東側のカマド前に集中がみられ、遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

遺物(第54図、第15表) 土師器坏、須恵器坏、土師器台付裏、土師器裏が出土した。

1～5は土師器坏である。1は深坑形態となる土師器暗文坏で、口縁から底部にかけて、3段に螺旋状の暗文が施されている。平底風である。2は大型で口縁が内湾している。3～5は北武蔵型の土師器坏で、口縁が直立しつつ立ちあがり、丸底である。6～9は須恵器坏である。南比企産で8は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。6・7は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。10と11は台付裏である。10は口



**第 53 図 第 14・15 号竪穴建物跡**

縁から胴部、11 は脚部である。12～15 は土師器甕である。いずれも「く」の字状甕である。

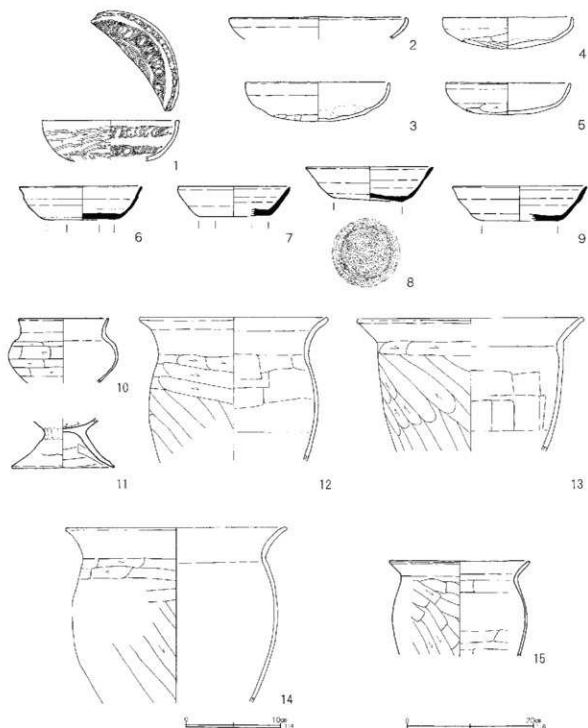
**時期** 8 世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

**特徴** 床面直上で出土した須恵器坏 6 は本跡から 4 m 北側に位置する第 13 号竪穴建物跡覆土中より出土した破片と接合した。本跡度絶時には第 13 号竪穴建物跡は完全埋没の状況では無かったと窺える資料である。

**第 15 号竪穴建物跡 (第 53 図)**

**位置** AW—AQ, AX—AQ グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 南側は調査区外となり本跡北側半分だけの調査となった。また、西側を第 14 号竪穴建物、東側を第 22 号溝と重複し、本跡が第 14 号竪穴建物より新しく、第 22 号溝より古い。



第54図 第14号竪穴建物跡出土遺物

**規模** 全容は不明であるが、長軸2.34m以上×短軸1.91m以上、床面積3.55㎡以上、遺構残存面からの壁高は0.21m、主軸方向はN-74°-E、形状タイプはI C5cである。

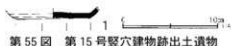
**概要** 平面形の全容は南側が調査区外につき不詳である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは東壁の北東隅角に寄って付設されている。燃焼部の掘込みは床面から深さ8cmで、火床面に明瞭な被熱痕は確認されず、袖部は崩壊流失し形状としては検出されなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は第22号溝に切られて確

第15表 第14号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	14.5	4.3	-	AB1K	褐色	良好	30%	腰部へう割りのちミカキ 腰部内面3段構成の螺旋状模文 平直底
2	土師器 杯	(18.4)	(2.2)	-	ABD1	褐色	良好	10%	口縁部片
3	土師器 杯	15.1	4.1	-	B1K	こぶい楕	良好	90%	底部へう割り 底部内面指圧痕 丸底
4	土師器 杯	(13.6)	(3.4)	-	ABD1M	褐色	良好	30%	底部へう割り 底部内面指圧痕 丸底
5	土師器 杯	13.0	3.3	-	ABD11JKM	褐色	良好	90%	底部へう割り 丸底
6	須恵器 杯	(12.8)	3.6	7.1	ABFGH	灰	良好	90%	南北全産 糸切後周辺へう割り
7	須恵器 杯	(11.8)	3.2	(7.4)	AB	黄灰	良好	90%	南北全産 糸切後周辺へう割り
8	須恵器 杯	13.4	3.5	7.3	ABFHM	灰白	良好	90%	南北全産 糸切後全産へう割り
9	須恵器 杯	(14.0)	(3.4)	(8.0)	ABF	灰白	良好	90%	南北全産
10	土師器 小型台付罐	(8.4)	(6.6)	-	AB1JM	褐色	良好	30%	コの字に屈曲する 外面横位へう割り
11	土師器 台付罐	-	(5.2)	10.4	AB	こぶい楕	良好		内面底部・脚縁横位へう割り
12	土師器 罐	(19.8)	(15.3)	-	ABD1	こぶい赤褐	良好		コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
13	土師器 罐	(23.8)	(14.1)	-	AB1	こぶい楕	良好		コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
14	土師器 罐	23.2	(18.4)	-	AB1	こぶい赤褐	良好		コの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
15	土師器 罐	(22.4)	(15.2)	-	ABD1	こぶい楕	良好		コの字に屈曲する 外面上部斜位へう割り 中部斜位へう割り

第16表 第15号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 杯	-	(1.1)	7.8	ABFG	黄灰	良好		南北全産 糸切後周辺へう割り



第55図 第15号竪穴建物跡出土土物

認でできなかった。床面は平坦で、全面にわたって明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は北側で検出された。

廃絶時のピットは西壁際に深さ23cmのP01、P01に切られる形状で深さ14cmのP02、掘方ピットは中央に深さ21cmのP03が確認された。出土土物は僅少で特に集中した箇所はみられない。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

遺物(第55図、第16表) 須恵器杯が出土した。1は須恵器杯である。南北全産で底部が糸切後周辺へう割りである。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

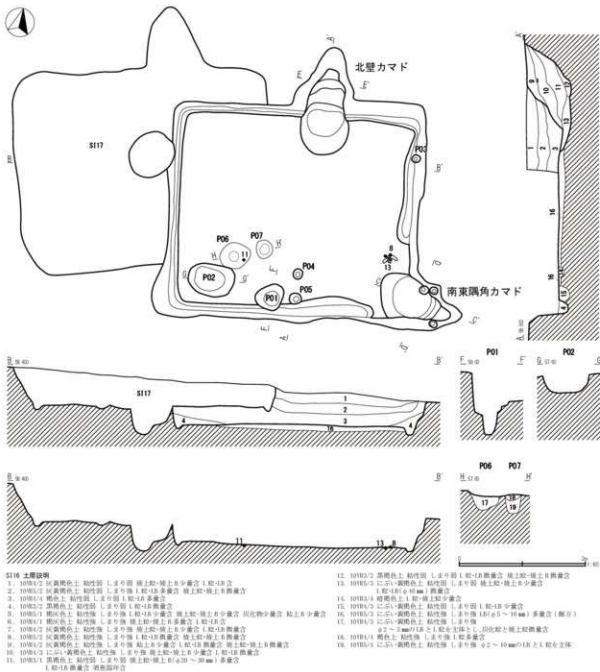
#### 第16号竪穴建物跡(第56・57図)

位置 AZ-AN・A0グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 北西側で第17号竪穴建物と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸3.98m×短軸3.40m、床面積10.56㎡、遺構残存面からの壁高は0.67m、主軸方向はN-10°-W、形状タイプはIB→Ⅲ3aである。

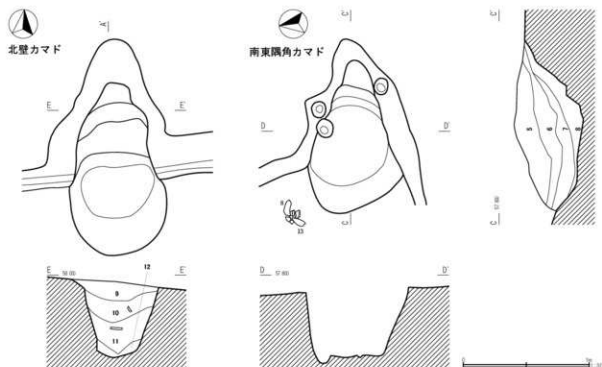
概要 北西側を第17号竪穴建物に切られているが遺存状況は概ね良好で、2基のカマドを有する改築建物である。平面形は改築前のカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。廃絶時のカマドは南東隅角に付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ20cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド7層と床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃焼部から煙道部にかけて約40°の勾配で立ち上がり、煙道部



第 56 図 第 16 号竪穴建物跡 1

両側に小ビット 3 基が確認された。改築前のカマドは北壁中央東寄りに付設され、燃焼部の約 1/2 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 8 cm、火床面の被熱痕は明瞭ではない。煙道部は燃焼部から約 40° の勾配で立ち上がり、壁から煙道部先端まで 90 cm を測る。床面はほぼ平坦で、全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝は南東隅角を除き全周する。廃絶時のビットは 8 基で、大半は深さ 8 ~ 15 cm の小形のビットである。掘方ビット P06・P07 の 2 基で、いずれも少量であるが焼土と炭化物を混入する。遺物はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 2 袋分である。

**遺物 (第 58 図、第 17 表)** 土師器杯、須恵器杯、土師器小型壺、土師器甕が出土した。1・5 は土師器杯である。1 は放射状の暗文が施されている。口縁が直立しつつ立ち上がり、平底風である。2 ~ 4、



第 57 図 第 16 号竪穴建物跡 2

第 17 表 第 16 号竪穴建物跡出土遺物観察表

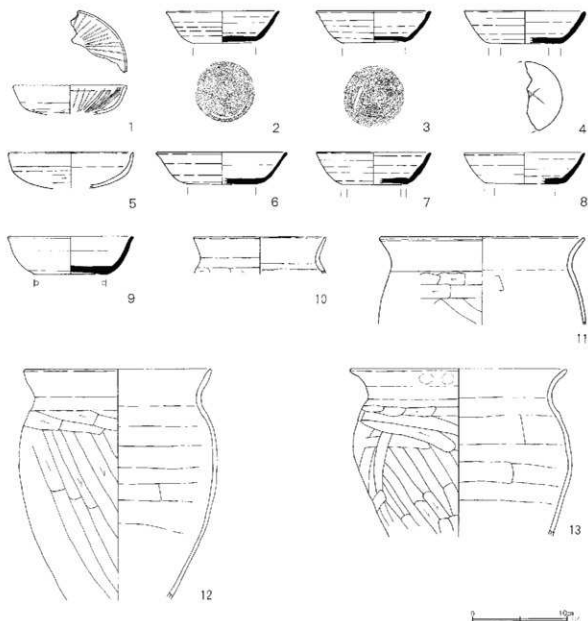
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(11.8)	(3.1)	-	AB1LM	こぶい織	良好	20%	底部へう削り 内面放射線文 平底産
2	須恵器 坏	11.8	3.4	6.8	ABFGM	黄灰	良好	90%	南北企産 糸切後全面へう削り
3	須恵器 坏	12.0	3.3	6.7	ABFGM	黄灰	良好	90%	南北企産 糸切後全面へう削り
4	須恵器 坏	(12.8)	(3.4)	(7.6)	ABFGM	黄灰	良好	90%	南北企産 糸切後周辺へう削り 底部内面磨痕あり 底部外面へう書立「コ」
5	土師器 坏	(13.0)	(3.8)	-	AB1K	滑	良好	10%	底部へう削り
6	須恵器 坏	(13.6)	3.4	(7.2)	ABFG	こぶい黄粉	不良	20%	南北企産 糸切後周辺へう削り 内面磨痕あり
7	須恵器 坏	12.0	3.4	6.8	ABFGH	黄灰	良好	20%	南北企産 糸切後周辺へう削り 底部内面磨痕あり
8	須恵器 坏	(12.6)	3.1	(8.6)	AB1LM	黄灰	良好	10%	末野産 糸切後周辺へう削り 内面磨痕あり
9	須恵器 坏	(13.0)	4.0	7.6	AB1DL	灰白	普通	70%	南北企産 糸切のみ 底部内面磨痕あり
10	土師器 小型壺	(13.7)	(3.9)	-	AB1M	滑	良好	口縁部片	外面上部横位へう削り
11	土師器 壺	(21.4)	(9.2)	-	AB1J	明織	良好	口縁部片	外面上部横位へう削り
12	土師器 壺	(18.8)	(24.3)	-	ABM	こぶい赤織	良好	口縁～胴部片	コの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 中部縦位へう削り
13	土師器 壺	22.8	(17.7)	-	AB1J	こぶい織	良好	70%	コの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 中部縦位へう削り

6～9は須恵器坏である。基本的に南北企産で、8は末野産である。2・3は底部が糸切後全面へう削りである。4・6～8は底部が糸切後周辺へう削りである。9のみ底部が糸切後無調整である。4は底部外面へう書きがみられる。6～9は底部内面に磨痕がみられる。10は土師器小型壺、11～13は土師器壺である。11・12は「く」の字状襷だが屈曲が弱い。13は屈曲が弱い「コ」の字状口縁である。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

特徴 本跡は新旧カマド2基の改築竪穴建物跡である。





第58図 第16号竪穴建物跡出土遺物

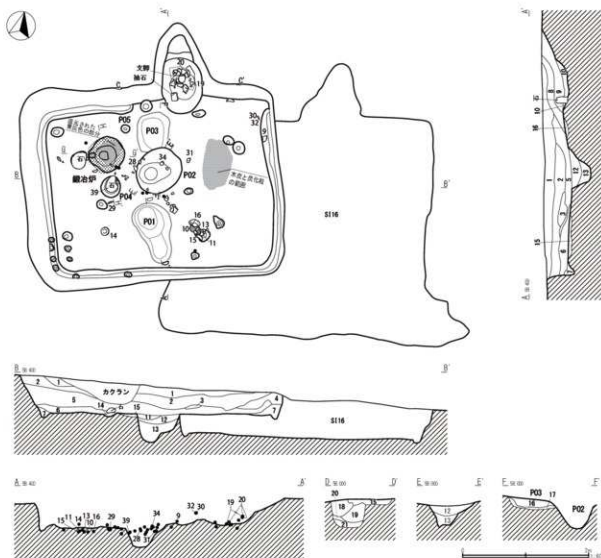
### 第17号竪穴建物跡(第59・60図)

**位置** BA—AN・A0グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 南東側で第16号竪穴建物と重複し、本跡のほうが新しい。

**規模** 長軸4.08m×短軸3.14m、床面積9.57㎡、遺構残存面からの壁高は0.55m、主軸方向はN-16°-W、形状タイプはI B2dである。

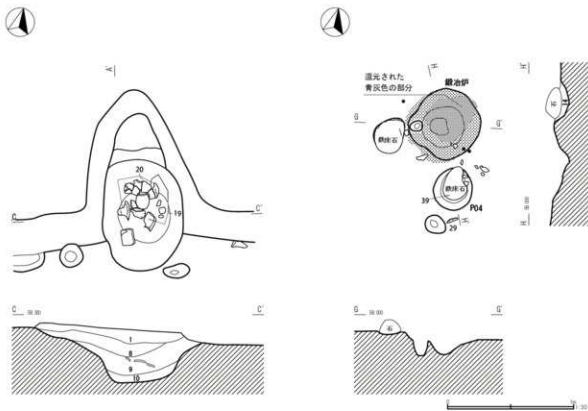
**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央東寄りに付設され、燃燒部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ8cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド9層と床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃燒部から緩やかに立ち上がり、壁から煙道部先端ま



第59図 第17号竪穴建物跡1

で0.90 mを測る。床面はほぼ平坦で、全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝は北東隅角を除き全周する。北西側に円形で皿状の掘込み形状である鍛冶炉を検出した。規模は南北軸55cm、東西軸57cm、深さ13cm、明確な羽口挿入痕は捉えられなかったが鍛冶炉内の酸化・還元部分は記録出来た。廃絶時のピットは22基で、大半は深さ8～26cmの小形のピットである。P02は深さ45cmで覆土中に焼土塊・木炭のほか鍛冶滓・鍛造剥片などの鍛冶関連遺物も多く混入する。P04は鉄床石の真下に掘り込まれた浅いピットで、鍛冶剥片と粒状滓を多く混入する。掘方ピットはP01・P03の2基で、いずれも少量であるが鍛冶滓などの鍛冶関連遺物を混入する。遺物はカマド内と中央部に集中し、鍛冶関連の遺物は中央部に集中がみられる。鉄滓・椀形滓は鍛冶炉内とP02、鍛造剥片・粒状滓はP02・P04と鍛冶炉周辺の床面直上に集中している。また、鍛冶炉の南側と西側に鉄床石が床面直上で検出された。カマド燃焼部内に礫が立位で2個出土し、それぞれ支脚と袖石に使用されていたとみられる。東側床面直上で木炭の集中箇所がみられた。遺物の総量は整理収納箱で1箱分である。

遺物(第61・62図、第18表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台埴、須恵器皿、須恵器長頸瓶、灰釉

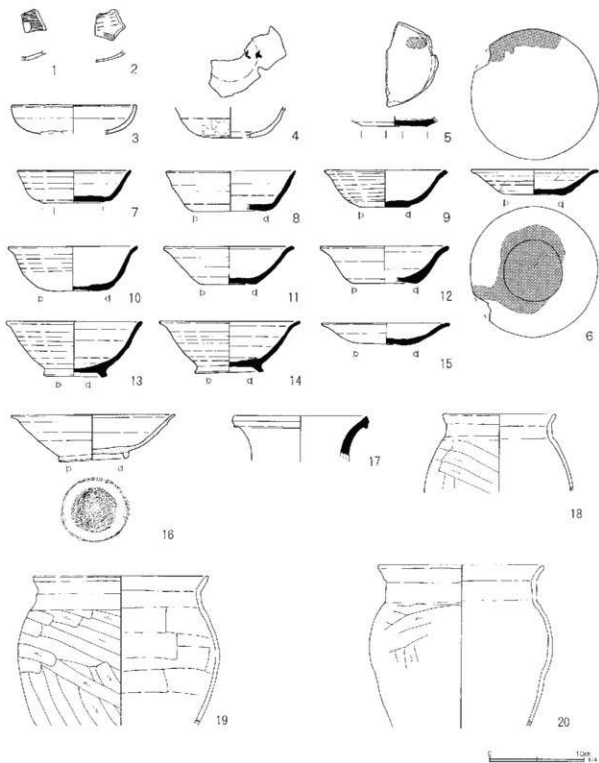


第17 主要図解

- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 10983/3 赤褐色土 粘性弱 しまり肌 焼土粒・焼土少量含む 1段・1段層を含む 同化物多量含む</p> <p>2. 10982/2 灰黄褐色土 粘性弱 しまり肌 焼土粒・焼土少量含む 1段・1段少量含む 同化物(6.20~30mm)含む</p> <p>3. 10985/9 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 焼土層 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>4. 10983/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>5. 7.3181/2 褐色土 粘性強 しまり肌 焼土粒・焼土少量含む 同化物多量含む (25化層) 1段・1段層を含む</p> <p>6. 10985/4 土に引く黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>7. 10985/4 土に引く黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>8. 10981/1 褐色土 粘性弱 しまり肌 1段・1段少量含む 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>9. 10982/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 焼土粒・焼土少量含む 1段・1段少量含む</p> <p>10. 10985/9 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 焼土粒・焼土少量含む 同化物多量含む(19') 焼土層</p> <p>11. 10983/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む 焼土粒・焼土少量含む</p> | <p>12. 10982/2 黒褐色土 粘性弱 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>13. 10982/1 黒褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>14. 10982/2 黒褐色土 粘性強 しまり肌 焼土層 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>15. 10982/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>16. 10983/9 褐色土 粘性強 しまり肌</p> <p>17. 10983/1 土に引く黄褐色土 しまり肌 2.0~10mm程度の焼土と焼土質の粒とを同化物少量含む</p> <p>18. 10982/1 黒褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段層を含む 焼土粒・焼土少量含む</p> <p>19. 10982/2 灰黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>20. 10985/9 黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> <p>21. 10985/9 黄褐色土 粘性強 しまり肌 1段・1段少量含む</p> |
|---|---|

第 60 図 第 17 号竪穴建物跡 2

陶器高台壇、灰軸陶器広口瓶、灰軸陶器瓶、土器転用紡錘車、羽口、鉄製品、石製品が出土した。1～4は土師器環である。1・2は体部内面に放射状暗文が施されている。1は緻密な暗文が施され、2は北武蔵型の土師器環である。3は口縁が直立しつつ立ちあがり、丸底である。4は底部内面に墨書がある。5・7～12は須恵器環である。13・14は須恵器高台壇である。6・15は須恵器皿である。5・7・8は南比企産、6・9～15は末野産である。5・7は底部が糸切後周辺ヘラ削りである。6・8・9～15は底部が糸切後無調整である。5は内面に、6は内外面に油煙が付着している。16は灰軸陶器高台壇である。かなり歪んでいるが、胎土が灰色に近く東遠江産と考えられる。形態は猿投窯福年の黒笹90号窯式新段階に併行すると考えられる。17は須恵器長頸瓶である。18～20は土師器甕である。いずれも「コ」の字裏と考えられる。21・22は灰軸陶器瓶である。横方向の刷毛塗り施釉であり、胎土、形状から同一個体と考えられるが、接合しなかった。23は須恵器環の底部を再利用した紡錘車である。縁辺をヘラで加工している。24・25は羽口である。26～35は鉄製品である。26・27は刀子であり、30～32は釘である。28は口金、29は不明鉄製品である。33～35は鍛冶滓で、33・35は炉底滓、34は椀形滓である。36～38は砥石である。36は軽石製、37・38は砂岩製で被熱している。39は鉄床石である。石材は閃緑岩で大型の楕円礫をそのまま使用し、最大長が約28.0cm、重量が約7.5kgで表面

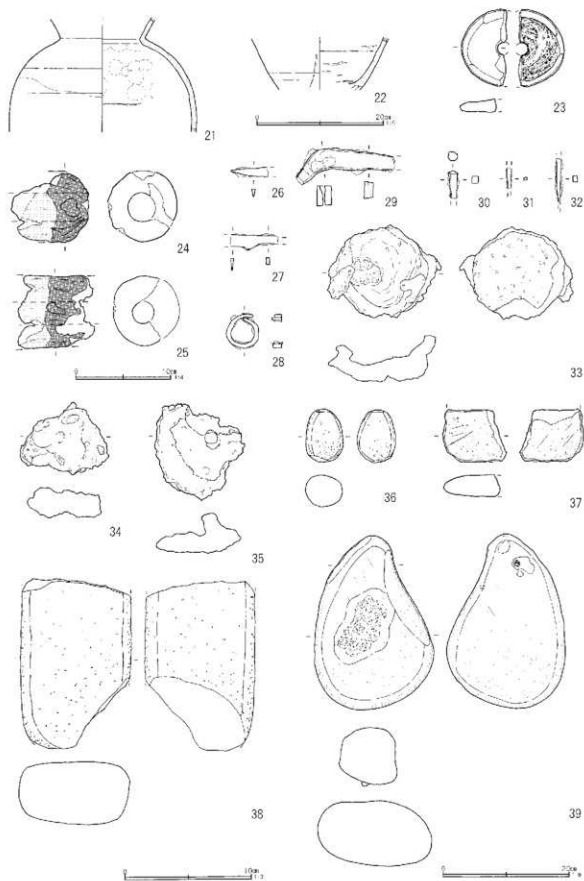


第61図 第17号竪穴建物跡出土遺物1

は中央が敲打によってわずかに凹んでいる。裏面は鉄塊が付着している。

時期 9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期

特徴 本跡は多量の鍛冶関連遺物が出土した鍛冶工房である。



第 62 图 第 17 号竖穴建物跡出土遺物 2

第18表 第17号竖穴建物跡出土遺物観察表

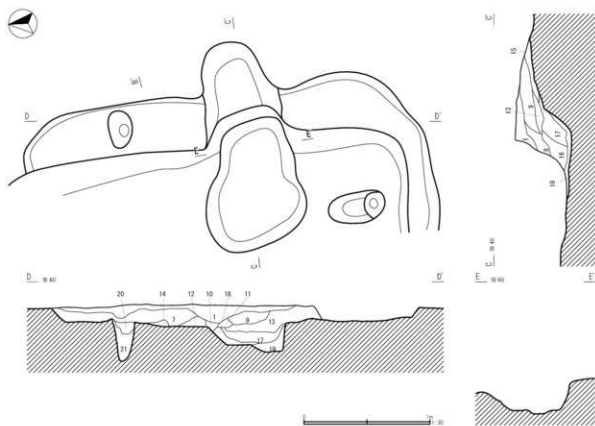
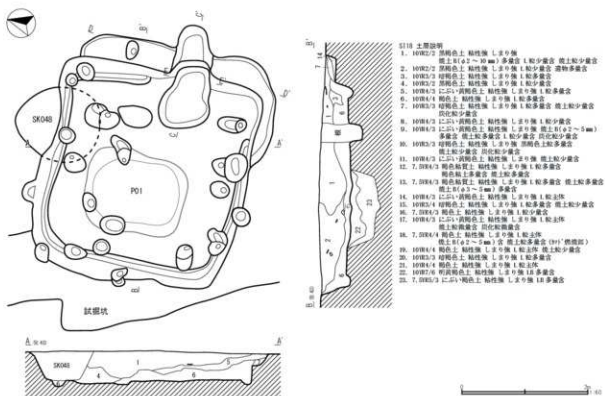
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	-	(1.0)	-	AB1	明赤褐	良好	体部片	外周体部底部へう削り 内面放射状喰文
2	土師器 杯	-	(1.1)	-	AB1JK	赤褐色	良好	体部片	体部外周へう削り 内面放射状喰文 平底
3	土師器 杯	(13.0)	(3.0)	-	AB1JK	こぶい糖	良好	20%	底部へう削り 丸底
4	土師器 杯	-	(3.2)	(8.8)	AB1	糖	良好	20%	底部へう削り 体部外周縁直線 底部内面書畫「口」
5	須恵器 杯	-	(1.0)	(7.0)	ABFM	灰黄	良好	底部片	南比奈産 糸切後周辺へう削り 内面油埴付着
6	須恵器 皿	13.3	2.7	6.3	ABDM	灰	良好	100%	木野産 糸切のみ 内面油埴付着
7	須恵器 杯	11.9	3.4	6.4	ABFDM	黄灰	良好	90%	南比奈産 糸切後周辺へう削り
8	須恵器 杯	(13.6)	4.2	(8.9)	ABF	灰白	良好	40%	南比奈産 糸切のみ
9	須恵器 杯	12.4	3.9	5.3	ABDM	褐灰	良好	100%	木野産 糸切のみ
10	須恵器 杯	13.3	4.7	7.5	AB1KLM	黄灰	不良	90%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
11	須恵器 杯	13.4	4.0	5.8	ABDM	糖	不良	90%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
12	須恵器 杯	(13.4)	3.9	(7.0)	ABDR1LMN	糖	不良	40%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
13	須恵器 高台碗	14.2	5.9	6.8	ABG1JLM	褐灰	良好	90%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
14	須恵器 高台碗	14.6	5.4	7.2	ABDM	こぶい黄糖	不良	90%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
15	須恵器 皿	13.3	2.2	6.7	ABDLM	灰黄赤	不良	100%	木野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
16	灰釉陶器 高台碗	17.2	5.0	7.3	ABG	灰白	良好	90%	※90年代後半発行 遠江地域産々々窯跡群産 糸切り 内外器脚 赤土・灰被物・黒色粒多量
17	須恵器 高台碗	(14.0)	(4.8)	-	ABDM	褐灰	良好	口縁部片	木野産
18	土師器 壺	(11.8)	(8.2)	-	AB1	こぶい糖	良好	口縁～体部片	コの字に屈曲する 外面上部縁位へう削り 中部縁位へう削り 縁部割取
19	土師器 壺	16.2	16.0	-	ABN	明赤褐	良好	口縁～体部片	コの字に屈曲する 外面上部縁位へう削り 中部縁位へう削り 内外面二文様成て割取
20	土師器 壺	(17.4)	(17.3)	-	ABG	こぶい糖	良好	20%	※90年代前半 遠江地域産々々窯跡群産 外周縁輪 灰被物・ 黒色粒多量 外周部赤土塗り
21	灰釉陶器 広口瓶	-	(18.4)	-	ABDRJLN	黄灰	良好	頸～胴部片	※90年代後半 遠江地域産々々窯跡群産 外周縁輪 灰被物・ 黒色粒多量 外周部赤土塗り
22	灰釉陶器 瓶	-	(8.4)	-	ABGJLN	黄灰	良好	胴部片	※90年代後半 遠江地域産々々窯跡群産 外周縁輪 灰被物・ 黒色粒多量 外周部赤土塗り
23	土師器用 紡錘車	長さ(8.7)cm 幅(3.5)cm 高さ1.0cm 重さ19.1g 測定径(6.0)cm 測定孔径(1.0)cm	紡錘車用の底部を利用した転用紡錘車 周辺へう状工具で削られている						
24	須口	長さ(8.2)cm 幅(7.5)cm 重さ184.7g 外径(7.4)cm 内径(3.0)cm	鉱物:ABDM 糖						
25	須口	長さ(8.1)cm 幅7.7cm 重さ198.4g 外径(7.0)cm 内径位4.0cm	鉱物:AB こぶい糖						
26	鉄製品 刀子	長さ(2.8)cm 幅(1.2~6.7)cm 厚さ0.3cm 重さ1.2g							
27	鉄製品 刀子	長さ(2.8)cm 幅(0.6~1.0)cm 厚さ0.2~0.3cm 重さ3.0g							
28	鉄製品 口金	長さ2.9cm 幅2.6cm 厚さ0.9cm 重さ6.9g	内面に木質付着						
29	鉄製品 不明	長さ3.0cm 幅7.7cm 厚さ0.6~1.2cm 重さ45.4g	磨蝕時に亀裂						
30	鉄製品 釘	長さ(2.2)cm 幅0.9cm 厚さ0.5cm 重さ2.1g							
31	鉄製品 釘	長さ(1.7)cm 幅0.5cm 厚さ0.2cm 重さ6.5g							
32	鉄製品 釘	長さ(3.6)cm 幅0.7cm 厚さ0.3cm 重さ1.8g							
33	銅形滓	長さ7.3cm 幅0.9cm 厚さ1.6cm 重さ123.0g	伊豆産						
34	銅形滓	長さ5.7cm 幅0.7cm 厚さ2.3cm 重さ92.0g							
35	銅形滓	長さ7.6cm 幅1.1cm 厚さ3.1cm 重さ55.2g	伊豆産						
36	石製品 碇石	長さ4.1cm 幅3.0cm 厚さ2.5cm 重さ18.7g	石材砂岩 平面積内形に近いが上下端部をやや扁平している						
37	石製品 碇石	長さ(4.1)cm 幅(5.0)cm 厚さ1.6cm 重さ38.5g	石材砂岩						
38	石製品 碇石	長さ(13.3)cm 幅(8.6)cm 厚さ(5.0)cm 重さ780.0g	石材砂岩						
39	石製品 鉄床石	長さ27.8cm 幅19.9cm 厚さ10.6cm 重さ7418.0g	石材閃緑岩						

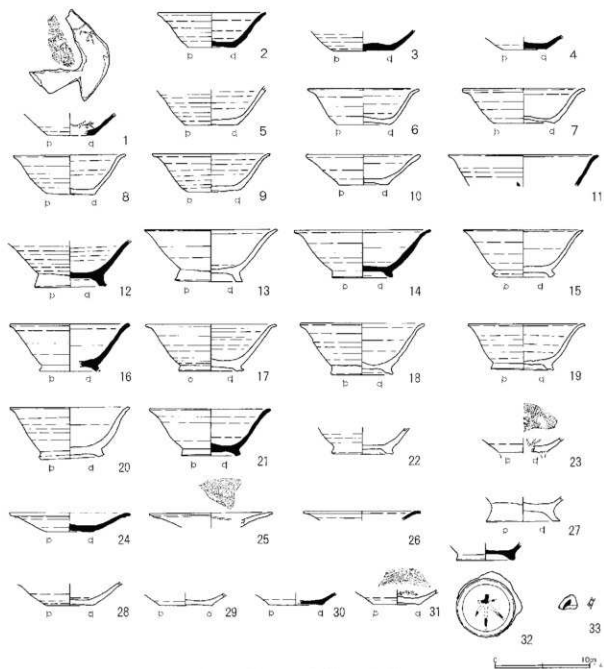
## 第18号竖穴建物跡(第63・64図)

位置 AZ-1AQ、BA-1AQ グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 西側を試掘時に削平され、北側で第048号土坑と重複し、本跡が切られている。

規模 長軸3.29m×短軸3.18m、床面積9.93㎡、遺構残存面からの壁高は0.45m、主軸方向はN-87°-E、形状タイプはII A2cである。

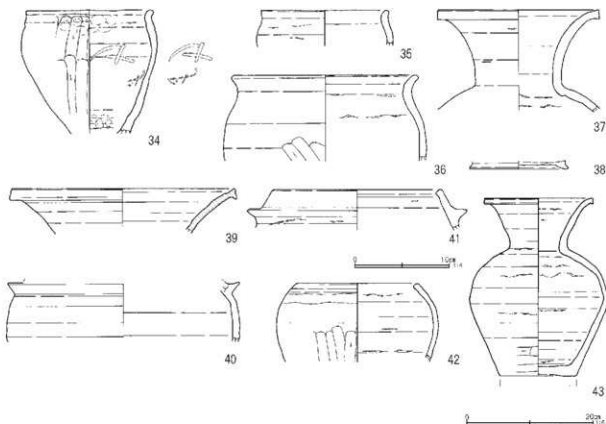




第 65 図 第 18 号竪穴建物跡出土遺物 1

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土は床面に近い4～6層はレンズ状堆積であるが、上部の1～3層は投入した堆積である。実際、1・2層中から大量の遺物が出土している。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の1/5が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cmと浅く、火床面に明瞭な被熱痕が確認された。袖部は崩壊流失し形状を捉えることはできなかったが、カマド12・13層と床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から26cm上がったところから緩やかに立ち上がる。東壁から南壁の東側までL字状に棚状施設が確認された。床面から約25cm上がった壁外に幅22～40cmの平坦部が造り出されている。床面はほぼ平坦で、全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝は南東隅角を





第 66 図 第 18 号竪穴建物跡出土遺物 2

除き全周する。廃絶時のピットは深さ 8～26cm でいずれも小形のものが多い。掘方ピットは中央西寄り方形で箱形の掘込みである P01 が確認された。遺物は覆土上部である 1・2 層中から大量の遺物が出土した。他からの投棄遺物とみられる。遺物の総量は整理収納箱で 3 箱分である。

**遺物 (第 65・66 図、第 19 表)** 須恵器杯・高台埴・皿、須恵系土師質土器杯・高台埴・皿、土師質土器長頸瓶・羽釜・土釜、灰釉陶器広口瓶が出土した。1～4・11 は須恵器杯である。33 は須恵系土師質土器杯である。末野産で底部が糸切り後無調整である。1 は体部内面に刻書がある。11 は体部外面に、33 は体部内面に墨書がみられる。5～10 は須恵系土師質土器杯である。末野産で底部が糸切り後無調整である。12・14・16・21・32 は須恵器高台埴である。32 は底部外面に墨書がある。13・15・17～20・22・23・27 は須恵系土師質土器高台埴である。23 は体部内面に刻書がある。24・26・30 は須恵器皿、25・28・29・31 は須恵系土師質土器皿である。31 は体部内面に刻書がある。34 は土師質土器土釜で還元化され、非ロクロ成形と判断したが、ゆるい回転台を使った可能性もある。胴部内面に棒状工具によるヘラ書きがみられる。35・36 は土師質土器土釜で、非ロクロ成形である。37・38・43 は土師質土器の瓶である。39 は灰釉陶器瓶、40～42 は土師質土器羽釜である。ロクロ成形で口縁から胴部にかけて内湾する。42 は鈔が剥落し胴部下外面ヘラ削りである。

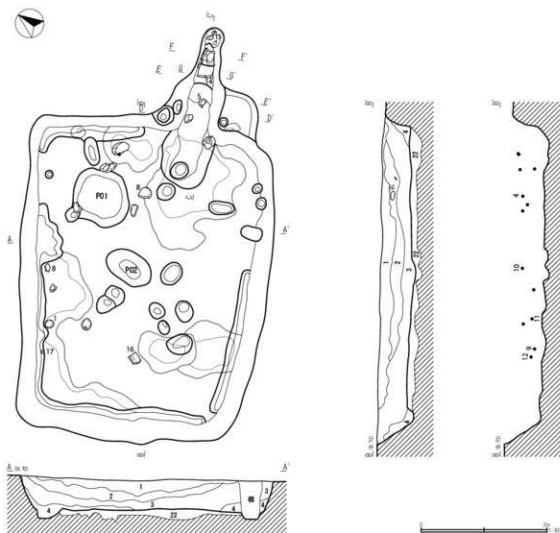
**時期** 10 世紀前半、宮下遺跡 V 期である。覆土 1・2 層の投棄とみられる遺物は 11 世紀前半、宮下遺跡 VII 期に比定されるものである。

**特徴** 覆土上部で投棄遺物が出土した。11 世紀前半に帰属し、本跡から 20 m 北側に位置する第 12 号

第19表 第18号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	-	(2.2)	(5.0)	ABD1	褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ 内面割書「口」
2	須恵器 坏	(11.2)	3.7	5.0	ABDH	褐色	良好	30%	美野産 糸切のみ
3	須恵器 坏	-	(2.1)	6.0	ABDM	こぶい黄褐色	不良	底部片	美野産 糸切のみ
4	須恵器 坏	-	(1.4)	4.6	ABDJL	褐色	良好	條~底部片	美野産 糸切のみ
5	須恵系土師製土器 坏	-	(3.7)	5.5	ABG1	こぶい褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ
6	須恵系土師製土器 坏	(11.6)	(3.3)	(5.5)	ABGKM	褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
7	須恵系土師製土器 坏	(12.0)	3.4	(6.4)	ABJM	こぶい褐色	不良	40%	美野産 糸切のみ
8	須恵系土師製土器 坏	11.6	4.1	5.0	ABGHM	明褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
9	須恵系土師製土器 坏	12.3	4.0	5.5	ABIKM	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
10	須恵系土師製土器 坏	(11.7)	3.3	5.1	ABGM	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
11	須恵器 坏	(15.8)	(3.4)	-	ABGHM	黄灰	良好	口縁~底部片	美野産 体部外面割書「口」
12	須恵器 高台皿	-	(4.8)	7.4	ABGHJLM	褐色	良好	條~底部片	美野産 糸切のみ
13	須恵系土師製土器 高台皿	13.8	5.5	6.0	ABGHJLN	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
14	須恵器 高台皿	(14.1)	(5.0)	(6.4)	ABGJLM	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
15	須恵系土師製土器 高台皿	(12.4)	(5.0)	(5.5)	AB	黄褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
16	須恵器 高台皿	(12.4)	(5.0)	(6.0)	ABJM	褐色	良好	30%	美野産 糸切のみ
17	須恵系土師製土器 高台皿	(13.4)	4.9	6.6	ABGHJL	褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
18	須恵系土師製土器 高台皿	(13.0)	5.4	(6.2)	ABGJMN	灰褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
19	須恵系土師製土器 高台皿	12.3	4.6	6.6	ABGJM	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
20	須恵系土師製土器 高台皿	(12.4)	5.4	(6.0)	ABGM	こぶい褐色	不良	30%	美野産 糸切のみ
21	須恵器 高台皿	12.6	4.9	5.4	ABFGM	こぶい黄褐色	良好	30%	美野産 糸切のみ
22	須恵系土師製土器 高台皿	-	(2.8)	6.3	ABGKM	褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ
23	須恵系土師製土器 高台皿	-	(1.6)	-	ABDHJ	こぶい褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ 体部内面割書「口(記号A)」
24	須恵器 皿	(12.4)	(2.0)	(4.8)	ABGKM	褐色	良好	30%	美野産 糸切のみ
25	須恵系土師製土器 皿	(12.8)	(1.5)	-	ABJL	黄褐色	不良	口縁部片	美野産 内面割書「口」
26	須恵器 皿	(12.2)	(1.0)	-	ABGM	褐色	良好	口縁部片	美野産
27	須恵系土師製土器 高台皿	-	(2.4)	7.8	ABJM	こぶい黄褐色	不良	底部片	美野産 糸切のみ
28	須恵系土師製土器 皿	-	(1.3)	4.9	ABEJM	褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ
29	須恵系土師製土器 皿	-	(1.3)	(5.6)	ABGJM	こぶい褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ
30	須恵器 皿	-	(1.2)	(5.6)	ABJMN	褐色	普通	條~底部片	美野産 糸切のみ
31	須恵系土師製土器 皿	-	(1.4)	5.0	ABGJL	こぶい褐色	不良	條~底部片	美野産 糸切のみ 内面割書「木」A
32	須恵器 高台皿	-	(1.0)	(6.1)	ABGM	灰黄褐色	良好	底部片	美野産 糸切のみ 底部外面割書「木」A
33	須恵系土師製土器 坏	-	-	-	AB	こぶい赤褐色	不良	底部片	美野産 体部内面割書「口」
34	土師製土器 土蓋	13.2	(13.0)	-	ABLM	灰黄	良好	30%	輪縁みで成形(非ロクロ成形) 内面クサヘラ書き「口」「口」
35	土師製土器 土蓋	(13.4)	(3.8)	-	ABLM	褐色	不良	口縁部片	非ロクロ成形
36	土師製土器 土蓋	(18.2)	(9.1)	-	ABGHJLMN	灰白	良好	口縁~底部片	非ロクロ成形
37	土師製土器 甕	(16.6)	(16.4)	-	ABJL	こぶい褐色	不良	口縁~底部片	ロクロ成形
38	土師製土器 甕	-	-	10.2	ABDHLM	こぶい褐色	不良	底部片	美野産
39	灰物陶器 広口瓶	(23.4)	(4.7)	-	ABGH	褐色	良好	口縁部片	か53古段階か 三河地域の二川窯跡産 内外黄褐色
40	土師製土器 羽釜	-	(6.2)	-	ABFHKM	灰黄褐色	良好	胴部片	美野産 口クロ成形
41	土師製土器 羽釜	(17.6)	(4.5)	-	ABGHKM	黄褐色	不良	口縁部片	口クロ成形
42	土師製土器 羽釜	(18.2)	(12.5)	-	ABDHJL	こぶい褐色	不良	口縁~胴部片	厚割産
43	土師製土器 甕	17.3	(28.5)	(12.2)	ABGHJL	こぶい褐色	不良	30%	美野産

竪穴建物跡から投棄された可能性が強く、本跡が廃絶してから百年近くも窪地のまま放置されていたものと考えられる。



319 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量
2. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量
3. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 多量 褐色粘土より同化物 (φ1~5mm) 少量
4. 10YR4/9 にみ・黄褐色土 粘性強 しまり強 1 土塊
5. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量
6. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 粒上 (φ2~5mm) 少量 粒上粒少量 (30% 程度)
7. 7.5YR4/2 暗褐色土 粘性強 しまり強 灰白色粘土より多量 粒上粒少量
8. 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 粒上 (φ2~20mm) 多量 粒上粒少量 1 粒少量 (30% 程度)
9. 7.5YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 粒上 (φ2~10mm) 多量 粒上粒少量 1 粒少量 同化物 (φ1~2mm) 少量 (30% 程度)
10. 10YR2/3 にみ・黄褐色土 粘性強 しまり強 1 土塊 7.5YR4 暗褐色土粒少量 粒上 (φ2~3mm) 少量 粒上粒少量 同化物 (φ1~2mm) 少量

31. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 粒上粒少量
32. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量
33. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 1R (φ3~5mm) 少量
34. 10YR2/3 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 粒上粒少量
35. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1R (φ3~5mm) 少量
36. 7.5YR4/2 暗褐色土 粘性強 しまり強 粒上 (φ2~5mm) 多量 粒上粒少量
37. 10YR2/3 にみ・黄褐色土 しまり強 1R (φ3~30mm) 多量 1 粒少量 同化物少量 粒上粒少量
38. 10YR4/4 褐色土 粘性強 しまり強 1R (φ3~30mm) 全土体とし、1 粒少量
39. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 1R (φ2~5mm) 少量
40. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 粒上粒少量
41. 10YR2/4 暗褐色土 粘性強 しまり強 1 粒少量 1R (φ3~30mm) 多量
42. 10YR4/4 褐色土 粘性強 しまり強 1R (φ3~30mm) 全土体とし、1 粒少量 (粒上)

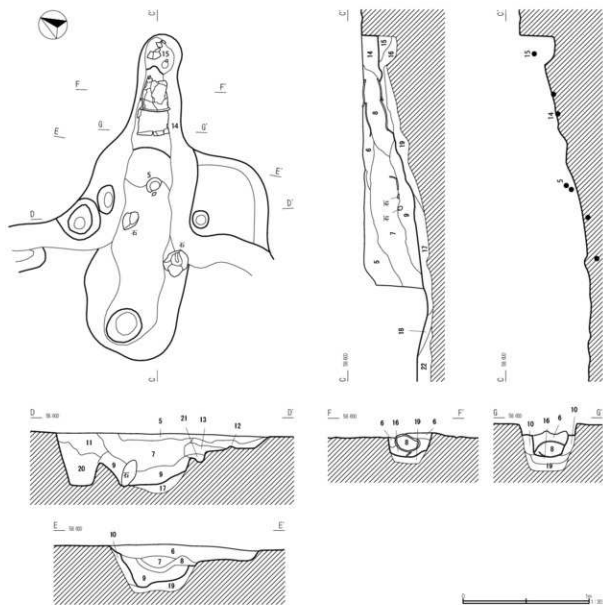
第 67 図 第 19 号竪穴建物跡 1

第 19 号竪穴建物跡 (第 67・68 図)

位置 BB-A0・AP グリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸 5.09 m×短軸 3.61 m、床面積 14.40 m<sup>2</sup>、遺構残存面からの壁高は 0.47 m、主軸方向は N-62°-E、形状タイプは II B3b である。

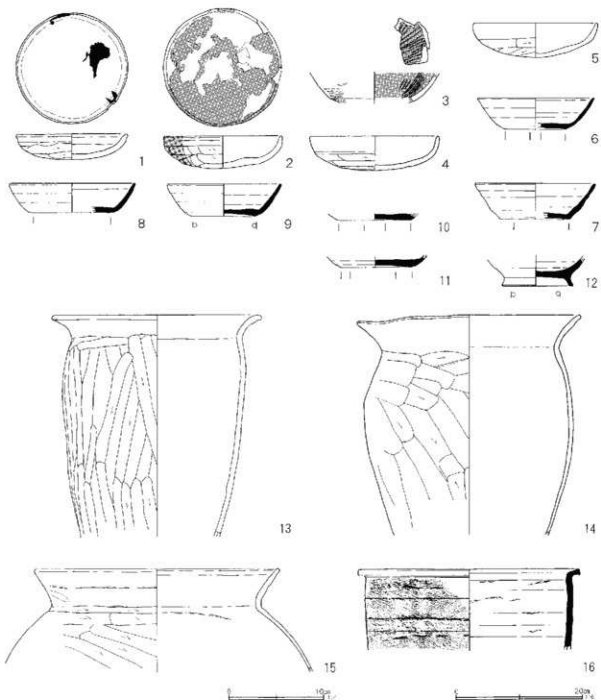
概要 遺存状況は良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の中央南寄りに付設され、燃焼部の約 1/2 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 8 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド 7 層と床面直上から灰白色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁から煙道



第 68 図 第 19 号竪穴建物跡 2

部先端まで 1.60 m を測る。煙道には土師器甕 2 個体を横位の入れ子状に設置し、先端部には小ビットを有する。カマド南脇に小規模な棚状施設が確認された。床面から約 30cm 上がった壁外に奥行 60cm の平坦部が造り出されている。床面はほぼ平坦で、全面にわたって明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は南東隅角と北壁際の一部を除きほぼ全周する。廃絶時のビットは 19 基確認され、そのうち北東側で確認された P01 は床面から深さ 12cm、P02 は深さ 10cm である。掘方は床面から 3～14cm の深さでほぼ全面に及ぶ。遺物出土状況は北側にやや集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 3 袋分である。

**遺物** (第 69・70 図、第 20 表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台坏、須恵器甕、土師器甕、石製品が出土した。1～5 は丸底の土師器坏で、1・2 は内面に油煙が付着し、口縁付近を外側に屈曲させている。3 は体部内面に赤彩、および放射状の暗文が施されている。体部外面は横方向に磨いている。4・5 は口縁から直立しつつ立ちあがっている。6～11 は須恵器坏である。いずれも南比企産である。6・7・

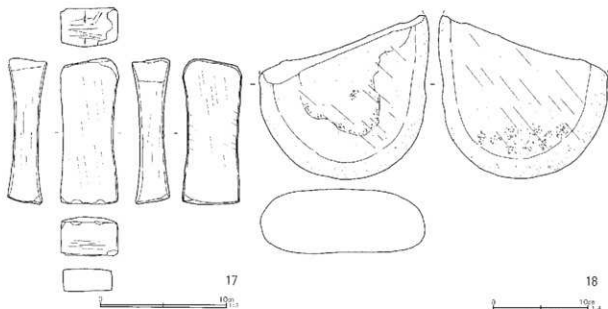


第69図 第19号竪穴建物跡出土遺物1

10・11は底部が糸切後周辺ヘラ削りである。9は底部が糸切り後無調整である。12は末野産の須恵器高台坏である。13・14は土師器甕である。屈曲が強く、「く」の字状甕と考えられる。15は屈曲が強く胴が張った土師器丸甕である。16は須恵器甕である。17は凝灰岩製の砥石である。18は鉄床石である。石材は閃緑岩で表面は中央が敲打によってわずかに凹んでいる。

時期 8世紀中頃、宮下遺跡I期

特徴 土師器甕2個体を容れ子状に設置してカマド煙道部を造り出している。



第70図 第19号竪穴建物跡出土遺物2

第20表 第19号竪穴建物跡出土遺物観察表

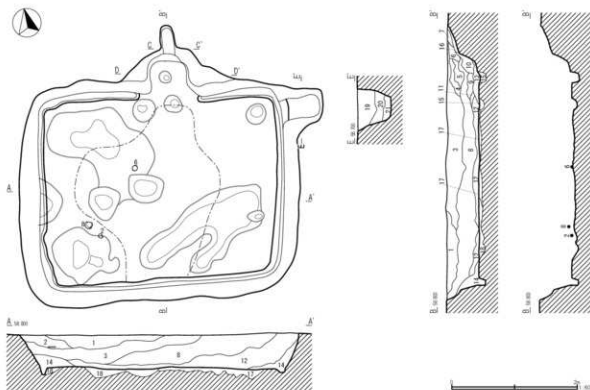
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	11.6	2.7	-	ABDGH/JKLM	黄	良好	100%	体部～底部へう割り 縄文系無文片 丸底 内面油煙付着
2	土師器 杯	12.4	3.5	-	ABDGIN	こぶい赤褐色	良好	100%	体部～底部へう割り 丸底 内面油煙付着
3	土師器 杯	-	(3.4)	-	AB/I/J	赤褐色	良好	体～底部片	体部～底部外面横位ミガキ 内面放射状縄文 丸底 内面赤彩
4	土師器 杯	13.5	3.6	-	ABG/K	こぶい黄	良好	90%	体部～底部へう割り 丸底
5	土師器 杯	12.8	3.7	-	ABIK	こぶい褐	良好	90%	体部へう割り 丸底
6	須恵器 杯	(12.2)	(3.3)	(6.4)	ABDFGM	オリーブ灰	良好	40%	南北全産 糸切後周辺へう割り
7	須恵器 杯	(12.4)	(3.8)	(7.2)	ABFGM	黄灰	良好	40%	南北全産 糸切後周辺へう割り
8	須恵器 杯	(13.2)	(3.1)	(8.2)	ABFGJM	褐灰	良好	20%	南北全産
9	須恵器 杯	(11.8)	3.4	(6.8)	ABFGM	褐灰	良好	50%	南北全産 糸切のみ
10	須恵器 杯	-	(0.7)	7.6	ABFGM	灰黄	良好	底部片	南北全産 糸切後周辺へう割り
11	須恵器 杯	-	(1.2)	7.5	ABFG	こぶい黄褐色	良好	底部片	南北全産 糸切後周辺へう割り
12	須恵器 裏台片	-	(3.0)	7.3	ABGHM	灰白	良好	底部片	未野産 糸切のみ
13	土師器 壺	21.6	(21.3)	-	ABG	灰褐	良好	90%	くの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り 下部縦位へう割り
14	土師器 壺	(23.6)	(23.2)	-	ABIM	こぶい黄	普通	70%	くの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り 下部縦位へう割り
15	土師器 丸壺	(25.7)	(11.0)	-	ABIM	こぶい赤褐色	良好	口縁～体部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう割り 内面器底剥落
16	須恵器 甕	(25.0)	(12.9)	-	ABFHKM	褐灰	良好	口縁～胴部片	南北全産 外面平行引き
17	石製品 礎石	長さ11.4cm	幅4.5cm	高さ3.0cm	重さ200.5g				石材種不明 平置長方形 前面長方形 刃物痕上下差多数 9面 縁起している 全面黄褐色化
18	石製品 鉢床石	長さ(17.3)cm	幅17.5cm	厚さ6.9cm	重さ2665.9g				石材砂岩 笠形による黄褐色化 縁起による割傷あり 縁起の両方 付着・磨耗痕あり

第20号竪穴建物跡(第71・72図)

位置 BC-A0 グリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸4.48m×短軸3.52m、床面積10.21㎡、遺構残存面からの壁高は0.56m、主軸方向はN-10°-E、形状タイプはI A3aである。

概要 遺存状況は良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は1・2層が一気に埋めたブロック状堆積、それ以下はレンズ状堆積である。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部は方形な箱形の掘込み形状で約2/3が壁外へ突出する。燃焼部内の火床面は床面と同一レベルで、

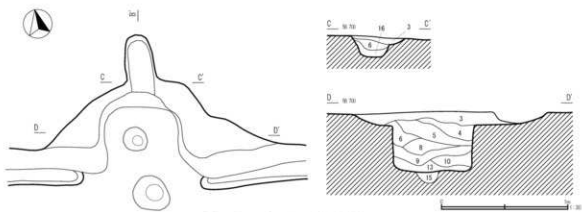


1120 土層説明

1. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 13~4 配 (a1~5mm) 多量含
2. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 13~4 配 (a1~5mm) 少量含
3. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 13~4 配 (a1~5mm) 少量含
4. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含 炭化灰・炭 230 少量含
5. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含 焼土配少量含
6. 10194/4 比色・炭焼土 粘性焼 しまり焼 焼土 B(a2~10mm) 多量含 焼土配多量含  
二色・炭焼土配少量含 炭化灰少量含 (a2~10mm) 少量含
7. 10194/4 焼土 粘性焼 しまり焼 焼土 B(a2~5mm) 多量含 焼土配多量含
8. 10192/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 13~4 配 (a1~10mm) 少量含
9. 10194/4 比色粘焼土 粘性焼 しまり焼 焼色・焼土 B(a2~10mm) 少量含
10. 10194/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 焼土 B(a2~5mm) 多量含 焼土配多量含  
二色・炭焼土粘焼土配少量含

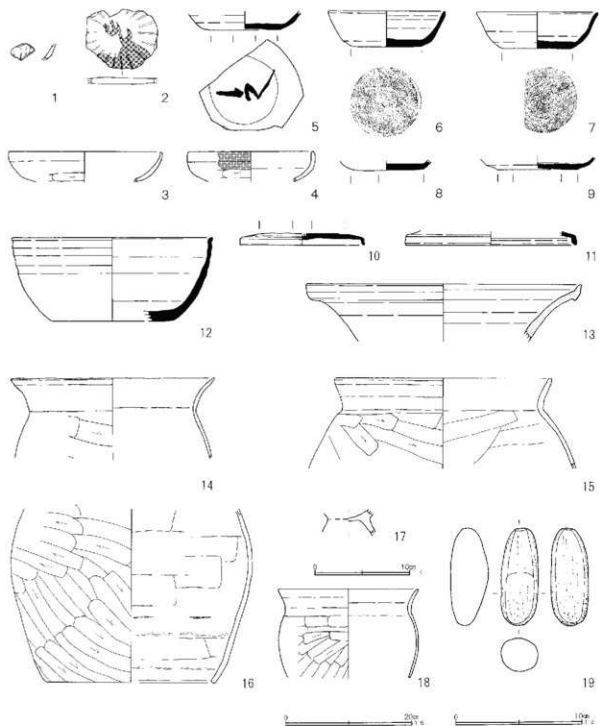
11. 10194/3 焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含 同化物 (a2~3mm) 少量含
12. 10194/4 粘焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含
13. 2. 10194/4 赤焼土 粘性焼 しまり焼 焼土中 焼土配 (a3~5mm) 多量含 (11) 焼土層
14. 1. 10194/4 焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含
15. 10192/3 赤焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含 炭化灰少量含 焼土配少量含 上面に炭焼土 (a2)
16. 1. 10194/4 焼土 しまり焼 1 配土主体 焼土 B(a1~3mm) 少量含 焼土配少量含 (11) 炭焼土層
17. 10194/4 焼土 → 1. 土 716 少量含 炭化灰少量含
18. 10194/4 焼土 → 1. 土 少量含 炭化灰少量含
19. 10192/3 粘焼土 粘性焼 しまり焼 1 配少量含
20. 10194/4 焼土 粘性焼 しまり焼 1 配土主体 (赤味あり)
21. 1. 10194/4 焼土 粘性焼 しまり焼 1 配土主体 (赤味あり)

第 71 図 第 20 号竪穴建物跡 1



第 72 図 第 20 号竪穴建物跡 2

所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。燃焼部幅は 0.62 m で、掛け口 2 口横並びも可能性な数値である。覆土 15 層の小ビットは支脚埋込みの痕跡か。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド 9 層と床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から急角度で 35cm 上がったところから緩やかに立ち上がる。東壁北端で東に 0.60 m 掘込んだ箱形の張出しが確認された。張出しの底面レベルは床面と同一である。床面はほぼ平坦で、カマド前



第73図 第20号竪穴建物跡出土遺物

に明瞭な硬化面を確認したが全体的には軟弱である。壁周溝はカマド下を除き全周する。廃絶時のピットは存在せず、掘方ピットが10基確認された。出土遺物は特に集中した箇所はみられない。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物**（第73図、第21表）土師器坏、須恵器坏、須恵器盖、須恵器鉢、灰釉陶器瓶、土師器甕、土師器甗、土師器台付甕、石製品が出土した。1～4は土師器坏である。1・2は体部内面にいずれも放射状の暗文が施されている。2の暗文は太く、内面に油煙が付着している。3・4は口縁が直立し、平底



第21表 第20号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.7)	-	AB1J	褐色	良好	鉢部片	鉢部ヘラ削り 内面放射状縄文
2	土師器 坏	-	(0.8)	-	ABCC	こぶい實縄	良好	底部分片	内面放射状縄文 内面波打付着
3	土師器 坏	(16.0)	(3.2)	-	AB1K	明赤縄	良好	口縁~鉢部片	鉢部ヘラ削り 平底履
4	土師器 坏	(13.0)	(3.2)	-	AB1K	褐色	良好	口縁~鉢部片	鉢部ヘラ削り 平底履 外周波打付着
5	須恵器 坏	-	(2.0)	(7.0)	ABFM	こぶい實物	良好	底部分片	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り 底面外周墨書「卜之」
6	須恵器 坏	(12.2)	(3.0)	7.5	ABFGM	黄灰	良好	90%	南比企産 糸切後全周ヘラ削り
7	須恵器 坏	(12.0)	3.9	(7.4)	ABFGM	黄灰	良好	90%	南比企産 糸切後全周ヘラ削り 内面摩耗痕あり
8	須恵器 坏	-	(1.0)	(7.7)	ABFGM	灰白	良好	底部分片	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り
9	須恵器 坏	-	(1.4)	(8.4)	ABFG1KM	こぶい實物	不良	底部分片	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り
10	須恵器 蓋	(13.0)	(1.2)	-	ABFGM	黄灰	良好	50%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り 内面摩耗痕あり
11	須恵器 蓋	(18.0)	(1.5)	-	ABF	灰黄	良好	口縁部片	南比企産
12	須恵器 鉢	(21.2)	(8.8)	(13.0)	ABFGM	黄灰	良好	50%	南比企産 糸切後全周ヘラ削り
13	灰軸陶器 瓶	(28.0)	(6.0)	-	ABGM	灰黄	良好	口縁片	内外周波輪 糸切か 溝江産
14	土師器 壺	(21.4)	(8.5)	-	ABD1	明赤縄	良好	口縁片	くの字に屈曲する 外周上部横位ヘラ削り
15	土師器 丸壺	(22.8)	(9.0)	-	AB1K	明赤縄	良好	口縁~周部片	くの字に屈曲する 外周上部横位ヘラ削り
16	土師器 瓶	-	(18.4)	(17.3)	AB1J	こぶい実縄	良好	胴部~底部分片	外周中部横位ヘラ削り 外周下部縦位ヘラ削り
17	土師器 台付壺	-	(2.7)	-	ABD1K	褐色	良好	縁部片	
18	土師器 壺	(22.4)	(14.3)	-	ABD1KM	褐色	良好	口縁~胴部片	外周上部横位ヘラ削り 中部斜位ヘラ削り
19	石製品 砥石	長さ7.6cm 幅2.9cm 厚さ2.6cm 重さ30.5g							平直長楕円形 断面内形 表面の一端を扁平にしている

風のものである。4は土煙が付着している。5～9は須恵器坏である。南比企産である。5は底部外面に墨書がある。8・9は底部が糸切後周辺ヘラ削りである。6・7は底部が糸切後全面ヘラ削りである。10・11は須恵器蓋である。10は糸切り後周辺ヘラ削りである。12は須恵器鉢である。第77図8と胎土、形状が似ており、同一個体の可能性もある。13は灰軸陶器瓶の口縁から頸部、覆土上層出土の流れ込みである。14・18は土師器壺である。14・18は「く」の字裏である。14は口縁がわずかにふくらみ「く」から「コ」への移行期のものと考えられる。15は土師器丸壺である。16は土師器瓶である。土師器壺を再利用したもので、底部を切り離し、破片部を研磨したものである。17は台付壺の接合部である。19は石製品の砥石である。楕円形礫の平坦部を使用している。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

### 第21号竪穴建物跡(第74～76図)

位置 BB-AM・ANグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南西隅角が第5号土取り遺構に切られている。

規模 長軸4.00m×短軸3.40m、床面積10.61㎡、遺構残存面からの壁高は0.55m、主軸方向はN-5°-W、形状タイプはⅢB3aである。

概要 遺存状況は概ね良好で、平面形は廃絶時の東壁カマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは東壁と北壁に付設され、東壁カマドが廃絶時のものとなり新しい。東壁カマドは東壁の中央南寄りに付設され、燃焼部の約1/5が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ18cm、火床面に著しい被熱痕みられる。両袖とも遺存し、構築材は褐色粘質土である。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち、壁から先端まで1.00mを測る。北壁

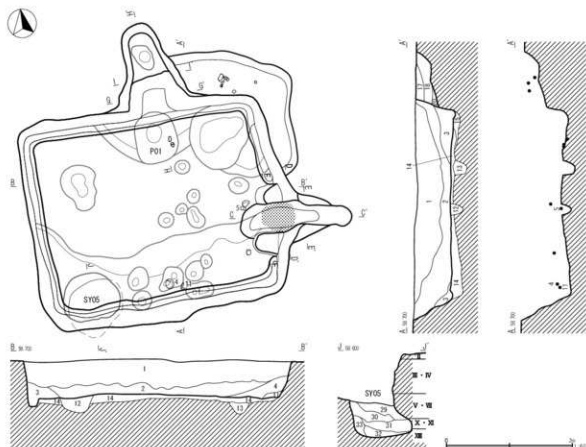


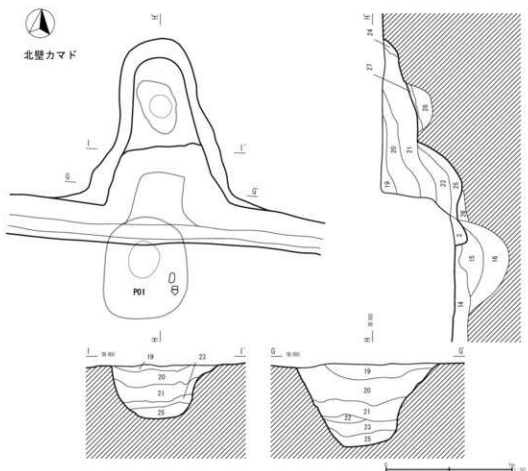
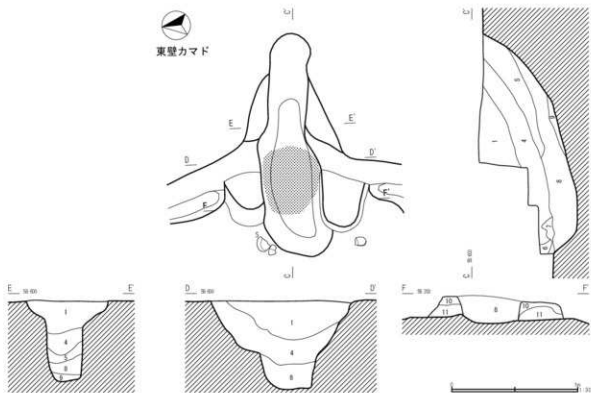
図21 土器図

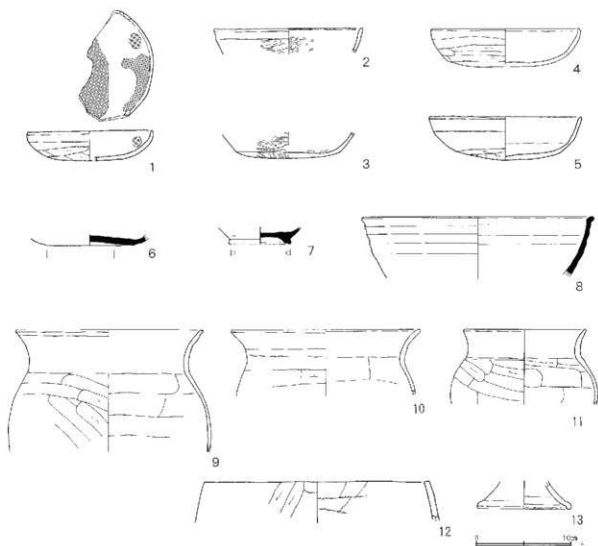
- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 10YR5/3 暗褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 多量遺<br/>         2. 10YR5/3 暗褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 多量遺<br/>         3. 10YR5/8 褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         4. 10YR5/3 に2.5-黄褐色土、粘性強、しまり層 0.5-1R土床<br/>         5. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 焼土粒(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         6. 10YR5/8 褐色土、焼土粒、しまり層 焼土粒(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         7. 7.5YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 焼土粒少量遺、焼土粒(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺<br/>         8. 2.5YR5/3 暗褐色土、焼土粒、しまり層 焼土粒(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺<br/>         9. 10YR5/3 に2.5-黄褐色土、粘性強、しまり層 焼土粒(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         10. 7.5YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 少量(4.0~5.0mm) 多量遺(10% 程度)<br/>         11. 10YR5/8 褐色土、焼土粒、しまり層 少量(4.0~5.0mm) 少量遺(10% 程度)<br/>         12. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺<br/>         13. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺<br/>         14. 10YR5/8 褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺(焼土)<br/>         15. 10YR5/3 暗褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺<br/>         16. 2.5YR5/3 暗褐色土、焼土粒、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         17. 10YR5/8 に2.5-黄褐色土、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺</p> | <p>18. 10YR5/8 褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         19. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺<br/>         20. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         21. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         22. 7.5YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         23. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         24. 10YR5/3 に2.5-黄褐色土、粘性強、しまり層 焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         25. 10YR5/3 に2.5-黄褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         26. 10YR5/3 に2.5-黄褐色土、焼土粒、しまり層 少量(4.0~5.0mm) 少量遺<br/>         27. 7.5YR5/3 褐色土、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         28. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R(4.0~5.0mm) 少量遺、焼土粒少量遺、焼土粒少量遺<br/>         29. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、SYOS<br/>         30. 10YR5/3 暗褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、SYOS<br/>         31. 10YR5/3 灰色褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、SYOS<br/>         32. 10YR5/3 褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、SYOS<br/>         33. 10YR5/8 褐色土、粘性強、しまり層 1R少量遺、焼土粒少量遺、SYOS</p> |
|--|--|

第 74 図 第 21 号竪穴建物跡 1

カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 5cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は改築時に壊され、形状として捉えることはできなかった。また、煙道部は燃焼部から急角度で 27cm 上がったところで緩やかに立ち上がり、先端に小ピットを有する。北壁カマド脇から東壁の北側まで L 字状に棚状施設が確認された。床面から約 25cm 上がった壁外に幅 40~65cm の平坦部が造り出されている。床面はほぼ平坦で、東壁カマド前から中央部にかけてに顕著な硬化面を確認した。壁周溝は全周する。廃絶時のピットは存在せず、掘方ピットが 15 基確認され、全体的には南側と北東側に深さ 5~12cm の浅い掘方が広がっている。遺物はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物(第 77 図、第 22 表)** 土師器杯、須恵器杯、須恵器高台杯、須恵器鉢、土師器カマド形土器、土師器壺、土師器台付裏が出土した。1~5 は土師器杯である。1 は油煙が付着している。2 は内面に螺旋状の暗文が施され、体部外面がへら削り後磨いている。3 は体部内外面を磨いている。内面が非常に





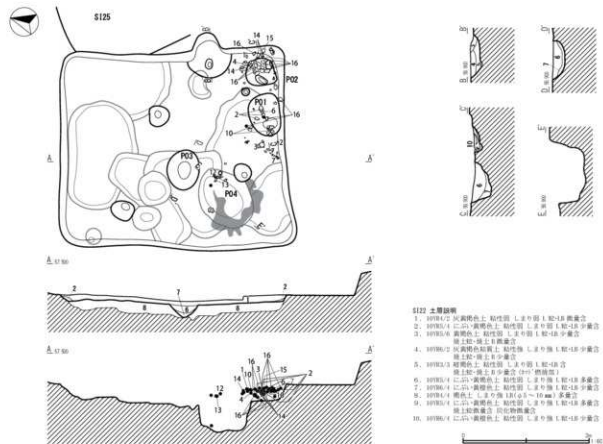
第 77 図 第 21 号竪穴建物跡出土遺物

第 22 表 第 21 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.0)	(3.1)	-	AB1J	褐色	良好	40%	鉢部～底部ヘラ削り 内面油埴付着
2	土師器 杯	(15.6)	(2.7)	-	ABK	明赤褐色	良好	口縁部片	内面螺旋状縄文 外裏ニ方キ
3	土師器 杯	-	(2.8)	-	AB1K	明赤褐色	良好	鉢～底部片	内外裏ニ方キ
4	土師器 杯	(15.5)	4.1	-	AB1K	赤褐色	良好	80%	鉢部ヘラ削り
5	土師器 杯	15.8	4.5	-	AB1KM	褐色	良好	80%	底部ヘラ削り 丸底
6	須恵器 杯	-	(1.1)	(9.0)	ABFM	灰黄	良好	底部片	南北全産 糸切後周辺ヘラ削り 底部内面磨粒痕あり
7	須恵器 高台杯	-	(1.8)	5.4	ABFG	灰黄	良好	底部片	南北全産 糸切のみ
8	須恵器 鉢	(24.0)	(6.4)	-	ABFGM	黄灰	良好	口縁部片	南北全産
9	土師器 壺	(19.8)	(13.0)	-	ABC1M	こぶい黄褐色	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外面横位ヘラ削り 中部斜位ヘラ削り
10	土師器 壺	(19.8)	(7.6)	-	AB1	こぶい褐色	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り
11	土師器 小型壺	(12.6)	(6.6)	-	AB1	こぶい褐色	良好	口縁～胴部片	外面上部横位ヘラ削り
12	土師器 カマド形土器	-	(4.2)	(23.8)	ABC1J	褐色	良好	底部片	外面下部縦位ヘラ削り 第83図12と同一個体あり
13	土師器 台付壺	-	(2.8)	(9.8)	AB1	こぶい赤褐色	良好	底部片	

粗れている。口縁は4がわずかに内湾し、5がやや直立しつつ立ちあがり、丸底風である。6は須恵器  
 坏で、底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。内面に摩擦痕がみられる。7は須恵器高台杯、底部が糸切  
 り後無調整である。8は須恵器鉢である。第73図12と胎土、形状が似ており、同一個体の可能性もある。  
 いずれも南比企産である。9～11は土師器甕であるが、「く」の字裏としては屈曲が弱く、移行期  
 のものと考えられる。12は土師器カマド形土器である。第83図12と同一個体の可能性がある。13は  
 台付甕の脚部である。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第78図 第22号竪穴建物跡

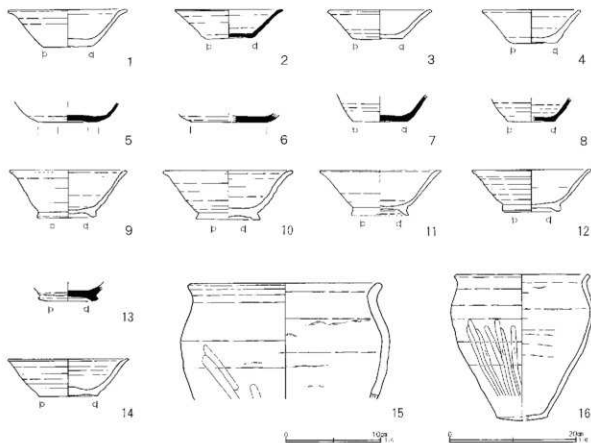
### 第22号竪穴建物跡(第78図)

位置 AY-AR グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 北東隅角で第25号竪穴建物と重複し、本跡のほうが新しい。

規模 長軸3.59m×短軸3.04m、床面積9.80㎡、遺構残存面からの壁高は0.07m、主軸方向はN-74°-E、形状タイプはI B2cである。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の中央南寄りに付設され、燃焼部の約1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ18cm、火床面には被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド4層と床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がるとみられるが上部削平のため、全容は不明である。



第 79 図 第 22 号竪穴建物跡出土遺物

第 23 表 第 22 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵系土師製土器 杯	(12.4)	(3.3)	(5.4)	AB/KM	こぶい橙	不良	90%	木野産 糸切のみ
2	須恵器 杯	11.2	3.1	5.2	ABM	灰黄褐	不良	90%	木野産 糸切のみ
3	須恵系土師製土器 杯	(10.7)	3.9	5.3	AB/KMN	灰黄褐	不良	90%	木野産 糸切のみ
4	須恵系土師製土器 杯	10.3	3.5	4.8	ABGH/M	こぶい黄橙	不良	90%	木野産 糸切のみ
5	須恵器 杯	-	(2.2)	6.4	ABFG	灰黄	良好	鉢～底部片	南比金産 糸切縁周辺へラ削り
6	須恵器 杯	-	(0.9)	(0.9)	ABFG	黄灰	良好	底部片	南比金産 糸切縁周辺へラ削り
7	須恵器 杯	-	(2.9)	5.6	ABG/M	雑灰	良好	鉢～底部片	木野産 糸切のみ
8	須恵器 杯	-	(2.3)	(3.9)	AB/KM	こぶい黄	普通	鉢～底部片	木野産 糸切のみ
9	須恵系土師製土器 臺台皿	12.1	5.0	5.6	AB/KM	灰	普通	70%	木野産 糸切のみ
10	須恵系土師製土器 臺台皿	13.2	5.1	5.5	AB/L	こぶい橙	不良	90%	木野産 糸切のみ
11	須恵系土師製土器 臺台皿	12.6	4.8	5.8	AB/M	こぶい黄橙	不良	90%	木野産 糸切のみ
12	須恵系土師製土器 臺台皿	12.3	4.5	5.8	AB/M	こぶい黄橙	不良	70%	木野産 糸切のみ
13	須恵器 臺台皿	-	(2.0)	(0.1)	ABFG/K	灰黄	普通	底部片	木野産 糸切のみ
14	須恵系土師製土器 杯	12.5	3.9	6.9	ABJ	こぶい緑	不良	90%	木野産 糸切のみ
15	土師製土器 土釜	(19.8)	(12.2)	-	ABGH/JLMN	黄灰	不良	土師一胴部片	非ロクロ成形
16	土師製土器 土釜	(21.0)	(23.3)	(0.2)	ABM	こぶい黄橙	不良	70%	外面中部位へラ削り 内面へラナデ 非ロクロ成形

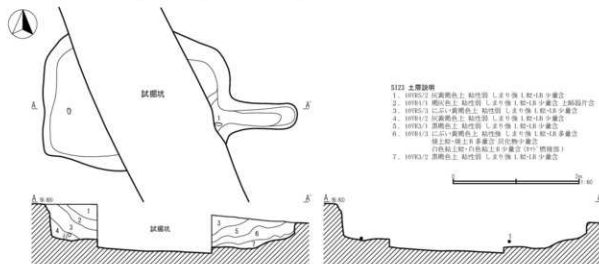
床面はほぼ平坦で、全面にわたって軟弱な面である。壁周溝は無い。廃絶時のピットは7基確認された。掘方は様々な形状のピットが重なり合っている状況である。南西側で確認されたP04は床面から深さ53cmで覆土中に径3～6cm大の灰白色粘土塊を多量に含む。遺物は南東隅角に集中がみられる。遺

物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物(第79図、第23表)** 須恵器環・高台壇、須恵系土師質土器環・高台壇、土師質土器土釜が出土した。2・5～8は須恵器環である。1・3・4・14は須恵系土師質土器環である。9～12は須恵系土師質土器高台壇である。13は須恵器高台壇である。1～4・7～14は底部が糸切り後無調整である。5・6は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。15・16は土師質土釜である。非ロクロ成形で内面に粘土紐痕がみられる。5・6・15・16は覆土上層から出土した流れ込みである。

**時期** 10世紀前半、宮下遺跡Ⅴ期

**特徴** 床下ピットが多数重なり、粘土塊を多量に含む大型ピットの存在から何らかの工房跡とみられる。



第80図 第23号竪穴建物跡

第24表 第23号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 環	12.0	3.3	-	AB12	暗	良好	100%	底部へ糸切り 平底皿 内外面油塗り付

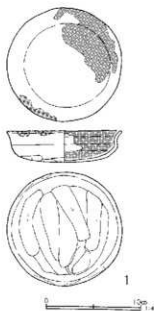
### 第23号竪穴建物跡(第80図)

**位置** AY-A0 グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 中央部が試掘時に大きく削平されており、遺存状況は不良である。

**規模** 全容は不明であるが、長軸 2.91 m × 短軸 1.98 m、床面積 3.78 m<sup>2</sup>、遺構残存面からの壁高は 0.55 m、主軸方向は N-88° - E、形状タイプは II A1c である。

**概要** 平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面とほぼ同一レベルで、火床面には被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。煙道部は燃焼部から緩やかに推移し、先端で垂直気味に立ち上がる。また、壁から煙道部先端まで 1.20 m を測る。

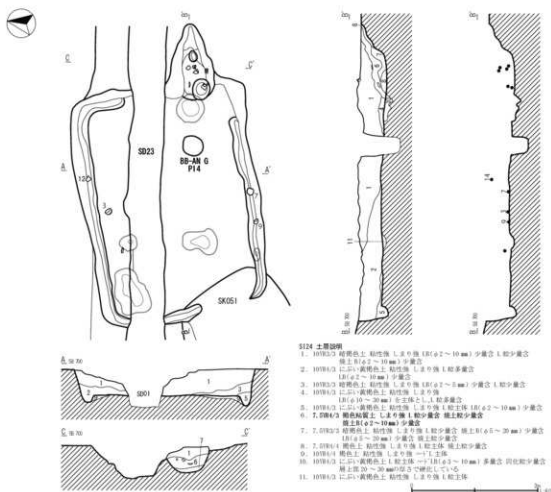


第81図 第23号竪穴建物跡出土遺物

壁周溝は及びピットは確認できなかった。遺物は特に集中した箇所はみられない。

**遺物（第81図、第24表）** 土師器が出土した。1は土師器である。口縁部が外反しつつ立ちあがり、平底風である。内外面に油煙がかなり付着している。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第82図 第24号竪穴建物跡

### 第24号竪穴建物跡（第82図）

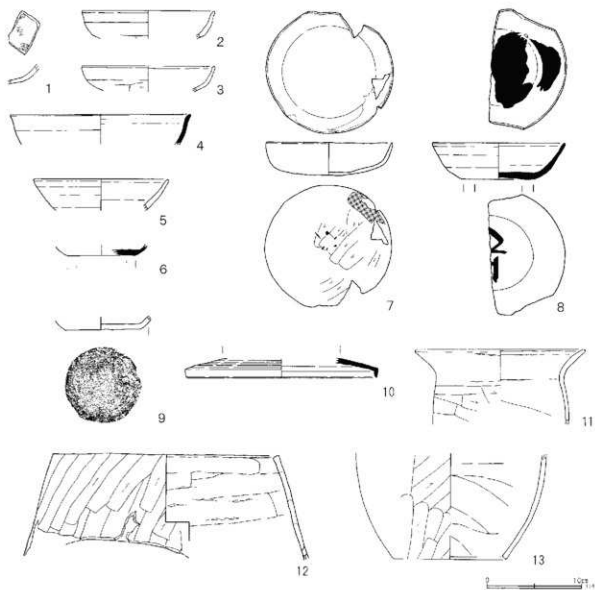
**位置** BA-AN、BB-ANグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 中央を第23号溝が縦断し、南西側で第51号土坑と重複し、本跡のほうがいずれも古い。

**規模** 全容は不明であるが、長軸3.67m×短軸2.79m、床面積7.98㎡、確認面からの壁高は0.42m、主軸方向はN-70°-E、形状タイプはⅡB2cである。

**概要** 遺存状況は不良であるが、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ6cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、カマド6層と床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から急角度で22cm上がったところから緩やかに立ち上





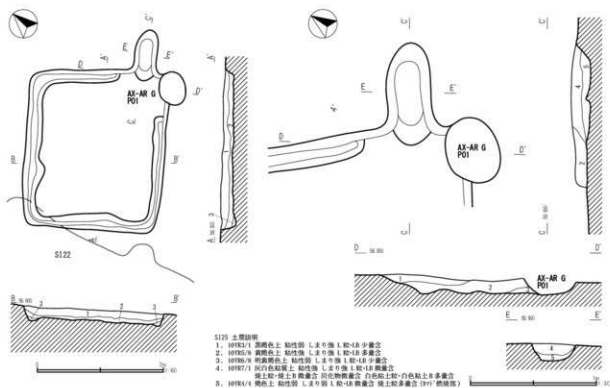
第83図 第24号竪穴建物跡出土遺物

第25表 第24号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	-	(2.2)	-	ABD/J	明赤褐	良好	破～断面片	鉢部・底部へ少削り 内面放射状施文
2	土師器 杯	(13.8)	(3.0)	-	AB1	褐色	良好	口縁部片	底部へ少削り
3	土師器 杯	(13.8)	(2.7)	-	AB1	こぶい織	良好	9%	底部へ少削り
4	須恵器 杯	(19.1)	(3.2)	-	ABFM	暗灰黄	良好	口縁片	南北全度
5	須恵器 杯	(14.2)	(3.2)	-	ABFM	こぶい黄橙	不良	口縁片	南北全度 還元不良
6	須恵器 杯	-	(1.2)	(7.0)	AB1	暗灰	不良	断面片	未野度 未切縁周辺へ少削り
7	土師器 杯	13.2	3.5	-	ABG/K	褐色	良好	9%	底部外面磨き「口」丸底 底部外面油押痕
8	須恵器 杯	(14.0)	(3.9)	(7.4)	ABFM	灰白	良好	4%	南北全度 未切縁周辺へ少削り 内面全体に磨痕 磨料痕あり 底部外面磨き「口」丸底
9	須恵器 杯	-	(1.4)	7.9	ABFM	こぶい黄橙	不良	断面片	南北全度 未切縁周辺へ少削り 還元不良
10	須恵器 蓋	(20.0)	(2.1)	-	ABGH	こぶい黄褐	不良	口縁部片	南北全度
11	土師器 壺	(17.6)	(6.0)	-	ABC1	こぶい赤褐	良好	口縁～断面片	くの字に屈曲する 外面上部横位へ少削り
12	土師器 カマド形土器	-	(10.8)	(23.8)	AB1	こぶい織	良好	胴～断面片	外面下部縦位へ少削り 膝口・焚口を伴わず
13	土師器 甕	-	(11.2)	(11.6)	AB1	褐色	良好	胴～断面片	外面下部縦位へ少削り

がる。床面はほぼ全面にわたって踏み固めた硬化面が確認された。壁周溝は南東隅角を除きほぼ全周する。掘方ピットは5基確認された。遺物はカマド内に集中がみられ、総量はポリ大袋に2袋分である。遺物(第83図、第25表) 土師器環、須恵器環、須恵器蓋、土師器甕、土師器甗、土師器カマド形土器が出土した。1~3・7は土師器環である。1は底部内面に放射状の暗文が施されている。7は底部外面に墨書があり、外面に油煙が付着している。丸底である。4~6・8・9は須恵器環である。8は底部外面に墨書があり、内面に墨痕と摩耗痕もみられ、転用甗の可能性もある。6・8・9は底部が糸切後周辺へラ削りである。10は須恵器蓋である。6は末野産でほかは南比企産である。11は土師器甕である。「く」の字裏と考えられる。12は土師器カマド形土器である。掛口と焚口を作り出している。第77図12と同一個体の可能性がある。13は土師器甗である。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



第84図 第25号竪穴建物跡

### 第25号竪穴建物跡(第84図)

位置 AX-AR、AY-ARグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南東隅角でP01(AX-ARグリッド)と重複し、本跡が古い。

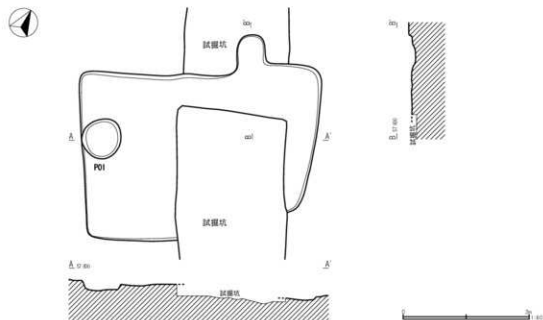
規模 長軸2.55m×短軸2.20m、床面積3.84㎡、確認面からの壁高は0.16m、主軸方向はN-50°-E、形状タイプはII B1bである。

概要 遺存状況は良好で、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁の南東隅角寄りに付設され、燃焼部の約3/4が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ6cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から灰白色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。床面は若干凹凸があるが、ほぼ全面

にわたって踏み固めた顕著な硬化面が確認された。壁周溝は南東隅角を除きほぼ全周する。ピットは廃絶時も掘りも含めて確認されなかった。出土遺物は僅少で、特に集中した箇所もみられなかった。

**遺物** 出土遺物はいずれも小破片で図示はできなかった。

**時期** 重複関係にあるP01内から宮下遺跡Ⅱ期に帰属する土師器杯（第347図4）が出土しており、本跡は出土した小破片の土器も加味して一段階古い宮下遺跡Ⅰ期の年代観を与えた。



第85図 第26号竪穴建物跡

#### 第26号竪穴建物跡（第85図）

**位置** AZ-APグリッドの台地平坦面に位置する。

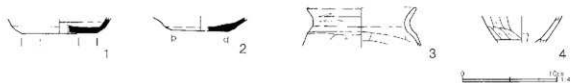
**重複** 中央部が試掘時に大きく削平されており、遺存状況は不良である。

**規模** 全容は不明であるが、長軸3.70m×短軸2.61m、床面積8.94㎡、確認面からの壁高は0.05m、主軸方向はN-31°-W、形状タイプはI B2fである。

**概要** 平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は不詳である。カマドは北壁中央東寄りに付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ4cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。床面はほぼ平坦で、全体に軟弱である。壁周溝は検出されなかった。P01は廃絶時のピットで、平面形は円形で底面は平坦である。遺物の集中する箇所はみられず、出土総量はポリ中袋に1袋分である。

**遺物**（第86図、第26表） 須恵器杯、須恵器皿、土師器小型壺、土師器台付壺が出土した。1は須恵器杯である。南比企産で底部が糸切後周辺へラ削りである。2は須恵器皿である。末野産で底部が糸切後無調整である。3は土師器小型壺である。「コ」の字壺としては屈曲が弱く、移行期と考えられる。4は土師器台付壺の底部片である。

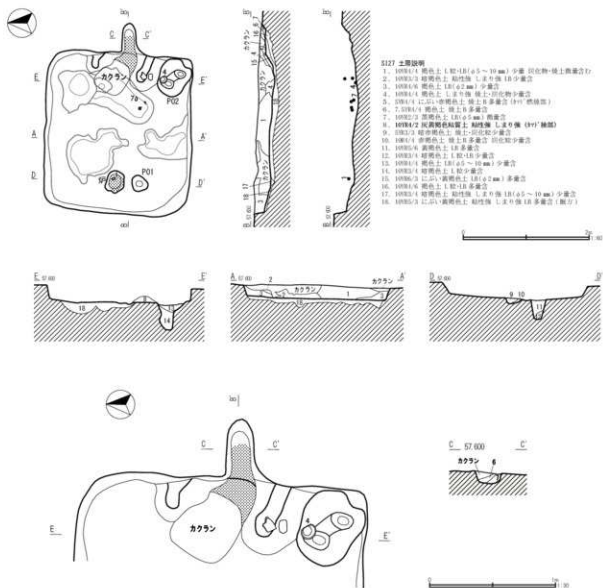
**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



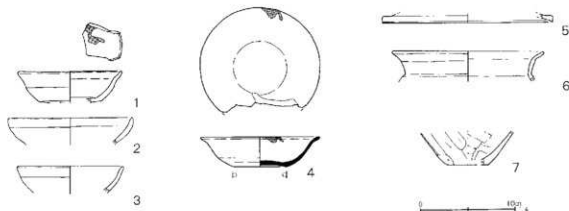
第 86 図 第 26 号竪穴建物跡出土遺物

第 26 表 第 26 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	浅鉢器 坏	-	(1.42)	(8.0)	ABDFGH	褐灰	良好	底面片	南北金属糸切後周辺へ少割り
2	浅鉢器 皿	-	(1.5)	(8.0)	ABDG1	こぶい黄褐色	不良	底面片	実野底 糸切のみ
3	土師器 小型器	(11.4)	(4.1)	-	AB	黄	良好	口縁部片	コの字に屈曲する 外面上部破損へ少割り
4	土師器 台付器	-	(2.40)	-	AB1	こぶい黄	良好	底面片	外面下部破損へ少割り



第 87 図 第 27 号竪穴建物跡



第 88 図 第 27 号竪穴建物跡出土遺物

第 27 表 第 27 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(10.6)	(3.3)	-	AB1	暗	良好	20%	底部へう削り 平底 内面油煙付着
2	土師器 坏	(13.0)	(2.0)	-	AB1K	明赤褐	良好	口縁部片	
3	土師器 坏	(11.0)	(2.6)	-	AB	こぶい暗	良好	口縁部片	
4	須恵器 坏	12.5	3.1	5.9	AB1W	暗	不良	10%	末野産 糸切のみ 内面油煙付着
5	土師器 蓋	(17.8)	(0.0)	-	ABM	灰白	不良	口縁部片	末野産
6	土師器 小型甕	(15.8)	(3.3)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	口縁部片	コの字に底倉する
7	土師器 甕	-	(3.0)	(4.4)	AB1JM	暗赤灰	良好	破部片	外面下部斜位へう削り

### 第 27 号竪穴建物跡 (第 87 図)

位置 AQ-AK グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無いが、カマド前と本跡西側を大きく攪乱され、遺存状況は不良である。

規模 長軸 2.54 m × 短軸 2.32 m、床面積 4.77 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.22 m、主軸方向は N-89° -E、形状タイプは II Alc である。

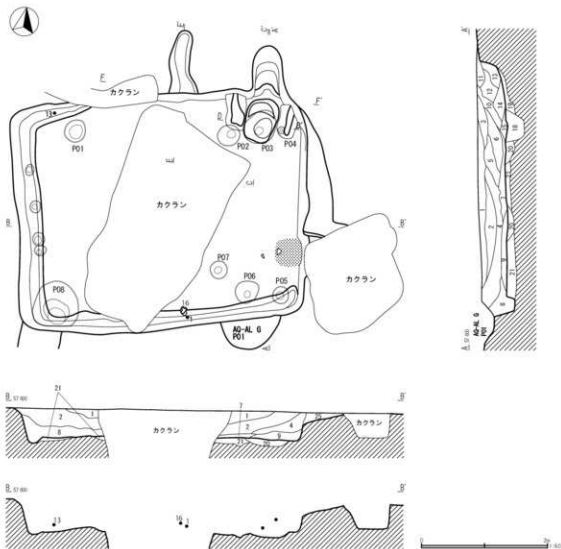
概要 平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。全体に大きく攪乱されているが、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の壁外への突出はほとんど無く、掘込みは床面から深さ 5 cm、火床面には明瞭な被熱痕が確認された。両袖とも遺存し、灰黄褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は燃焼部から 15 cm 上ったところで緩やかに立ち上がる。床面は東側が若干下がりが気味で、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化面を確認した。カマドと対峙する西側に地床炉が検出された。規模は東西軸 0.37 m、南北軸 0.28 m、深さ 0.11 m、断面皿状、底面のローム地山が被熱で赤褐色に変化している。廃絶時のピットは P01・02 の 2 基、掘方は中央部と西側の 4 ヲ所に浅い掘込みが確認された。遺物はカマド前に集中がみられ、出土総量はポリ中袋に 1 袋分である。

遺物 (第 88 図、第 27 表) 土師器坏、須恵器坏、土師器蓋、土師器小型甕、土師器甕が出土した。

1～3 は土師器坏である。1 は外に開きつつ立ちあがり、平底である。油煙が付着している。2・3 は腰を持ちつつ直立する。4 は須恵器坏である。内面に油煙が付着している。末野産で底部が糸切後無調整である。5 は土師器蓋である。6・7 は土師器小型甕・甕である。6 は「コ」の字甕と考えられる。

時期 9 世紀前半、宮下遺跡 III 期

特徴 地床炉の存在から紡織生産などに関連した工房跡と考えられる。



528 土層図説

1. 1070/2 暗褐色土 L 粘少量 焼土粒と石灰粘層
2. 1070/4 褐色土 φ2~3mm/L 粘少量 焼土粒と石灰粘層
3. 1070/2 暗褐色土 L 粘少量 焼土粒粘層
4. 7. 530/6 明褐色土 粘性強 しまり強  
φ5~10mm/L 粘土 L 粘少量上 L 粘少量 焼土粒と石灰粘層 灰褐色粘質土少量
5. 7. 530/5 L 25/L 褐色土 粘性強 しまり強 焼土粒(φ2~10mm)少量 灰褐色粘質土少量
6. 1070/6 褐色土 粘性強 しまり強 φ5~10mm/L 粘土 L 粘少量
7. 1070/6 褐色土 L 粘少量 石灰粘少量 石灰粘層
8. 1070/2 暗褐色土 L 粘 φ2~3mm/L 少量 焼土粒と石灰粘少量
9. 1070/4 L 25/L 暗褐色土  
焼土粒(φ5~10mm)少量 灰褐色粘質土少量
10. 石灰粘層 石灰粘少量(灰質? 灰質?)
11. 1070/6 明褐色土 焼土粒(φ5~10mm)少量 石灰粘少量
12. 1070/4 L 25/L 暗褐色土 L 粘 φ2~3mm/L 少量 石灰粘少量 石灰粘少量
13. 1070/2 L 25/L 暗褐色土 粘性強 しまり強  
φ5~10mm/L 粘土 L 粘少量 灰褐色粘質土少量 石灰粘少量
14. 1070/4 L 25/L 暗褐色土 粘性強 しまり強  
焼土粒(φ5~10mm)少量 灰褐色粘質土少量 石灰粘少量
15. 1070/2 灰褐色土 焼土粒(φ5~10mm)少量 灰褐色粘質土石灰粘少量
16. 7. 530/2 灰褐色粘質土 粘性強 しまり強 粘少量 (灰質? A 粘層)
17. 1070/2 暗褐色土 粘土粒(石灰粘少量 石灰粘少量) C 粘層
18. 1070/2 L 25/L 暗褐色土 暗褐色粘質土少量 焼土粒(φ2~10mm)少量
19. 1070/4 褐色土 焼土粒(φ2~3mm)少量 石灰粘少量
20. 1070/2 L 25/L 暗褐色土 L 粘 φ5~10mm) L 粘土 L 粘少量
21. 1070/2 L 25/L 暗褐色土 φ2~10mm/L 粘土 L 粘少量 石灰粘少量(粘層)
22. 1070/6 褐色土 粘性強 しまり強  
L 粘 φ5~10mm) 少量 石灰粘少量
23. 1070/6 明褐色土 焼土粒(φ5~10mm)少量 石灰粘少量 石灰粘少量
24. 2. 511/2 暗褐色土 粘性強 しまり強  
灰褐色粘質土少量 焼土粒(φ2~10mm)少量 (灰質? A 粘層)

第 89 図 第 28 号竪穴建物跡 1

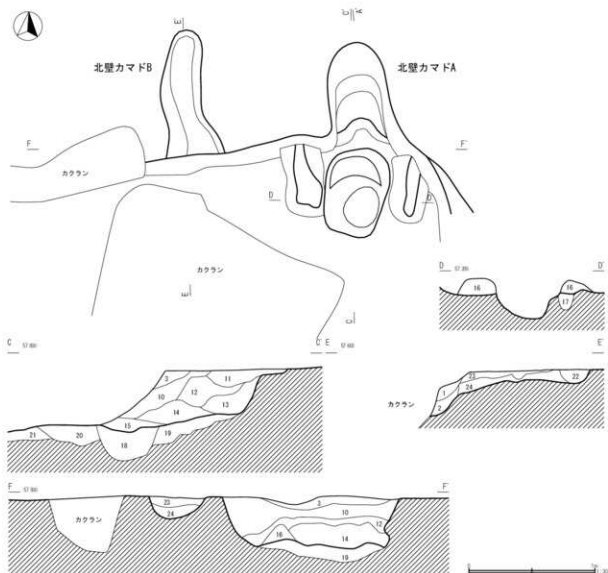
第 28 号竪穴建物跡 (第 89・90 図)

位置 AQ—AL グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南東隅角で P01 (AQ—AL G) と重複し、本跡が古い。また、中央部と東壁カマドが現代の掘削によって深く壊されており、遺存状況は不良である。

規模 全容は不詳であるが、長軸 4.56 m × 短軸 3.62 m、床面積 14.09 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.45 m、主軸方向は N - 80° - E、形状タイプは II B3c である。

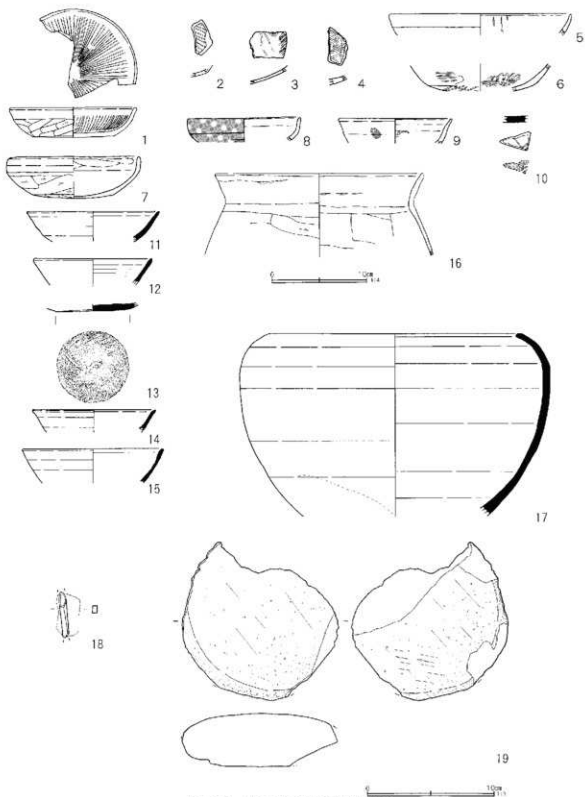
概要 平面形は改築前の東壁カマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは 3 基確認され、廃絶時使用で最も新しい北壁 A カマド、



第90図 第28号竪穴建物跡2

北壁Bカマド、東壁カマドの順に古くなるとみられる。北壁Aカマドは北壁の北東隅角寄りに付設され、燃焼部の1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。両袖とも遺存し、褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は燃焼部から急角度で36cm上がったところから緩やかに立ち上がる。北壁Bカマドは北壁中央に付設され、壁外への燃焼部突出は確認されなかった。煙道部は緩やかに立ち上がり、壁から先端部まで約1.00mを測る。東壁カマドは東壁南寄りに付設され、燃焼部の掘込みは床面から深さ8cm、火床面には明瞭な被熱痕が確認された。床面はほぼ平坦とみられ、検出された面は全面に顕著な硬化が確認された。壁溝は北東部を除き周る。掘方ビットは12基確認され、P04は北壁Aカマド袖部下から掘り込まれている。遺物は特に集中した箇所はみられない。遺物の出土総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物** (第91図、第28表) 土師器坏、須恵器坏、土師器甕、須恵器鉄鉢型土器、鉄製品、石製品が出土した。1～9は土師器坏である。1～6は内面に暗文が施されている。1・2・5は放射状、4・6は螺旋、3は螺旋と放射状の暗文である。1・7は口縁部がやや直立つつ立ちあがり、平底風である。



第91図 第28号竪穴建物跡出土遺物

8は外面に赤彩が施されている。9は外面に油煙が付着している。10～15は須恵器坏である。11は木野産でほかは南比企産である。10・13は底部外面にヘラ書きされている。13は糸切り後全面ヘラ削りである。16は土師器甕である。「く」の字裏にしては屈曲が弱く、移行期と考えられる。17は須恵器鉄鉢型土器である。18は鉄製品の釘である。19は石製品の砥石である。



第 28 表 第 28 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.4)	3.2	-	AB1L	褐色	良好	40%	体部・底部へう割り 内面放射状文 平底底
2	土師器 杯	-	(1.2)	-	AB	赤赤褐色	良好	体一部片	体部・底部へう割り 内面放射状文
3	土師器 杯	-	(1.9)	-	AB1	褐色	良好	体一部片	体部・底部へう割り 内面放射状文 線状文
4	土師器 杯	-	(9.9)	-	AB1K	こぶい褐色	良好	底部片	内面線状文
5	土師器 杯	(19.1)	(2.3)	-	AB1	褐色	良好	口縁部片	内面放射状文
6	土師器 杯	-	(2.9)	(11.9)	AB1K	黒	良好	体一部片	内面線状文
7	土師器 杯	13.6	4.4	8.7	AB1JK	褐色	良好	90%	体部・底部へう割り 内面口縁模倣ヘラナデ 平底底
8	土師器 杯	(11.6)	(2.5)	-	AB1	褐色	良好	口縁一部片	外面赤彩
9	土師器 杯	(11.8)	(2.7)	-	AB1M	褐色	良好	口縁部片	外面油塗付着
10	須恵器 杯	-	-	-	ABDFH	緑灰	良好	底部片	南比企産 底部外面へう書き「口」
11	須恵器 杯	(13.8)	(3.2)	-	ABN	灰	良好	口縁一部片	赤野焼
12	須恵器 杯	(12.4)	(2.8)	-	ABF	灰黄	良好	口縁部片	南比企産
13	須恵器 杯	-	(9.8)	(7.8)	ABFG	灰黄	良好	底部片	南比企産 赤切縁全面へう割り 底部内面線状文あり 底部外面へう書き「ハ」ナ
14	須恵器 杯	(13.0)	(2.4)	-	ABF	灰	良好	口縁部片	南比企産
15	須恵器 杯	(14.8)	(3.6)	-	ABFG	こぶい褐色	不良	口縁部片	南比企産
16	土師器 壺	(21.8)	(8.8)	-	AB1	褐色	良好	口縁部片	くの字に屈曲する 外面上部模倣へう割り
17	須恵器 鉄鉢型土器	(18.4)	(14.4)	-	ABDFGM	こぶい黄褐色	良好	90%	
18	鉄製品 釘	長さ(3.6)cm	幅0.6cm	厚さ0.4cm	重さ11.4g				
19	石製品 磁石	長さ(12.5)cm	幅(12.4)cm	厚さ4.2cm	重さ700.0g				石材砂岩 焼熱により一部赤色化と黒色化している

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

特徴 カマドを東壁から北壁に造り替えた改築竪穴建物跡である。仏具である鉄鉢形須恵器が出土した。

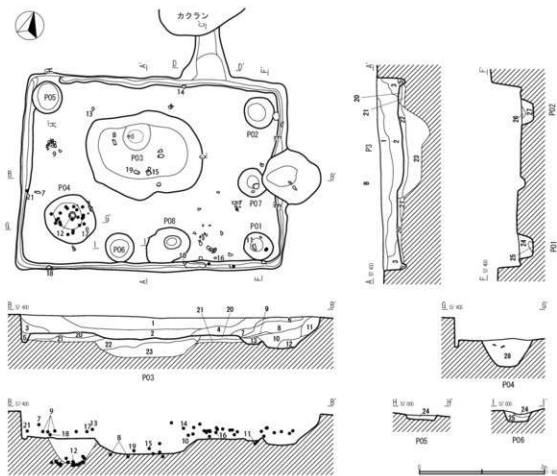
### 第 29 号竪穴建物跡（第 92・93 図）

位置 AP-1AL、AQ-1AL グリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸 4.24 m×短軸 3.12 m、床面積 11.55 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.29 m、主軸方向は N-15°-W、形状タイプは I B→II A3d である。

概要 北カマドの煙道先端部が擾乱されているが、遺存状況は概ね良好である。平面形は改築前の北カマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは廃絶時使用の新しい東カマド、改築前の古い北カマドの 2 基確認された。東カマドは東壁中央に付設され、燃烧部の約 1/2 は壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 18cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上からマンガング粒を含む褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃烧部から約 45°の勾配で立ち上がる。北カマドは北壁中央東寄りに付設され、燃烧部の約 1/2 は壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 6 cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。煙道部は燃烧部から約 30°の勾配で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、東カマド前から本跡南側にかけて硬化面を確認した。壁周溝は全周する。P03 以外は廃絶時のピットで、円形で播鉢状の P04 内から多量の遺物が出土した。本跡全面にわたって深さ 12～15cm の深さで均一掘方ピット P03 は底面平坦で大形な長方形ピットである。遺物はカマド内と南壁際に集中がみられる。遺物の出土総量はポリ大袋に 2 袋分である。

遺物（第 94 図、第 29 表） 土師器杯、須恵器杯、須恵器長頸瓶、土師器壺、土師器小型壺、土師器台付裏、

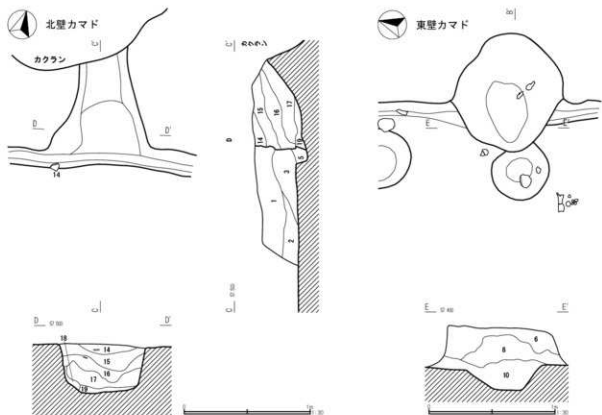


5129 主要部図

1. 10Y14/4 褐色土 φ5~10mmのL粒とL粒多量層
2. 10Y12/4 暗褐色土 φ2~5mmのL粒とL粒多量層 φ2~3mmの焼土Rと同化粒少量層
3. 10Y16/3 に近い黄褐色土 L粒多量層
4. 10Y15/6 黄褐色土 粘性强しまり層 φ5~30mmのL粒とL粒を主体とし、暗褐色土少量層 焼土粒と同化粒少量層
5. 2. DYS1/4 に近い褐色土 LB(φ2~10mm)多量層
6. 10Y15/4 に近い黄褐色土 φ2~5mmのL粒とL粒多量層 焼土Rと粘土少量層
7. 10Y14/6 褐色土 LB-焼土R-粘土少量層
8. 10Y16/1 褐色粘質土 粘性强しまり層 褐色粘土多量層 同化粒少量層 φ1~10mmの砂粒少量層 焼土R(φ2~5mm)微量層
9. 10Y12/2 灰褐色土 粘性强しまり層 褐色粘土を主体とし、焼土R(φ2~5mm)少量層
10. 10Y16/5 明黄褐色土 粘性强しまり層 焼土R(φ5~20mm)少量層 灰褐色粘土少量層 φ1~10mmの砂粒少量層 焼土Rは灰身内部の隙間か(裏壁側)付焼痕跡
11. 10Y16/8 暗褐色土 粘性强しまり層 焼土R(φ5~20mm)多量層 灰褐色粘土少量層 同化粒微量層 暗褐色土灰身内部の隙間を受けた部分の跡面か
12. 10Y12/6 暗黄褐色土 粘性强しまり層 焼土R(φ2~5mm)少量層 灰土少量層 同化粒少量層(裏壁側)付焼痕跡
13. 10Y12/4 に近い暗褐色土 LB(φ2~5mm)少量層 φ2~3mmの焼土Rと同化粒少量層
14. 2. DYS1/6 暗褐色土 φ2~10mmのL粒とL粒多量層 粘土と同化粒微量層
15. 10Y14/6 褐色土 粘性强しまり層 褐色粘土少量層 焼土R(φ2~5mm)微量層 LB(φ2~10mm)多量層
16. 2. DYS1/2 赤褐色土 粘性强しまり層 褐色粘土多量層 焼土R(φ2~5mm)少量層
17. 2. DYS1/4 に近い黄褐色土 粘性强しまり層 褐色粘土少量層 同化粒少量層 灰土付焼痕跡した焼土R多量層(表壁側)付焼痕跡
18. 10Y15/4 に近い黄褐色土 粘性强しまり層 褐色粘土少量層 L粒を主体とする
19. 2. DYS1/2 暗黄褐色土 粘性强しまり層 焼土R(φ5~10mm)少量層 同化粒少量層 同化粒少量層(表壁側)付焼痕跡
20. 10Y16/6 明黄褐色土 粘性强しまり層 φ5~30mmのL粒とL粒を主体とし、焼土粒少量層 本層上面の跡面となる(裏方)
21. 2. DYS1/3 暗褐色土 粘性强しまり層 φ2~5mmのL粒とL粒多量層 焼土粒と同化粒微量層(裏方)
22. 2. DYS1/5 に近い褐色土 粘性强しまり層 φ15~10mmのL粒とL粒多量層
23. 2. DYS1/4 暗褐色土 粘性强しまり層 LB(φ5~20mm)少量層 焼土R(φ2~10mm)少量層 同化粒(φ2~5mm)少量層 層上土層や灰土以上 10Y16/4の上
24. 10Y12/3 暗褐色土 同化粒と焼土粒少量層 L粒少量層
25. 10Y14/6 褐色土 粘性强しまり層 φ15~10mmのL粒とL粒多量層
26. 10Y13/2 黄褐色土 LB(φ1~10mm)微量層
27. 10Y13/3 暗褐色土 粘性强しまり層 φ5~20mmのL粒とL粒多量層
28. 10Y13/3 暗褐色土 LB(φ5~20mm)少量層 φ2~5mmの焼土Rと同化粒少量層

第 92 図 第 29号竪穴建物跡 1

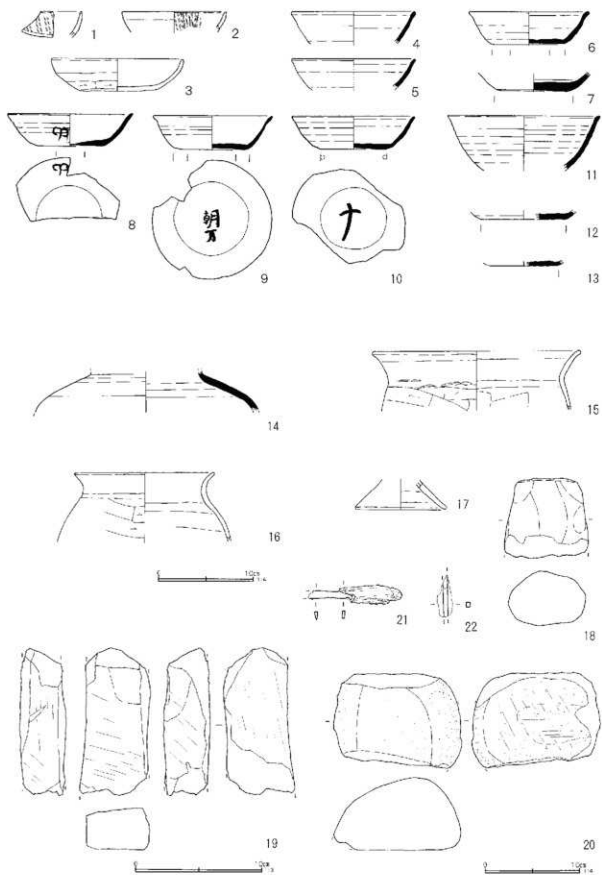
土製支脚、石製品、鉄製品が出土した。1~3は土師器環である。1・2は暗文が施されている。3は口縁が直立するように立ちあがり、平底風である。4~13は須恵器環である。7は底部が糸切り後全面へら削りである。6・8・9は底部が糸切り後周辺へら削りである。10は底部が糸切り後無調整である。8は体部外面、9・10は底部外面に墨書がある。14は須恵器長頸瓶である。11は木野産である。他は南比企産である。15・16は土師器甕・小型甕である。口縁部が「く」の字裏のなかでも外側に湾曲するように反外する。17は土師器台付甕の脚部である。18は土製支脚、19・20は石製品の底石である。



第93図 第29号竪穴建物跡2

第29表 第29号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	-	(2.0)	-	AB1JK	明赤褐	良好	口縁一体部片	体部へう削り 内面放射状模文
2	土師器 杯	(11.0)	(2.2)	-	AB1	暗	良好	口縁一体部片	内面放射状模文
3	土師器 杯	(13.8)	3.4	(8.2)	AB1	明赤褐	良好	20%	体部へう削り 平底裏
4	須恵器 杯	(13.0)	(3.5)	-	ABFGM	黄灰	良好	口縁片	南北全産
5	須恵器 杯	(13.0)	(3.2)	-	ABF	灰白	良好	口縁片	南北全産
6	須恵器 杯	12.6	3.5	7.7	ABDFGHM	明赤褐	不良	90%	南北全産 糸切縁周辺へう削り
7	須恵器 杯	-	(2.0)	(8.3)	ABFGM	こぶい物	不良	破部片	南北全産 糸切縁全周へう削り 破部内面摩耗痕あり
8	須恵器 杯	(13.0)	3.4	(7.0)	ABFG	灰	良好	20%	南北全産 糸切縁周辺へう削り 破部内面摩耗痕あり 内外面火傷 破部外周・底面磨蝕「口縁身」
9	須恵器 杯	12.5	3.6	7.9	ABDFGHM	暗	不良	20%	南北全産 糸切縁周辺へう削り 破部外周磨蝕「破方」
10	須恵器 杯	(12.8)	3.5	7.0	ABFGLN	灰黄	良好	40%	南北全産 糸切のみ 外面火傷 破部外周磨蝕「ナ」または「X」
11	須恵器 杯	(16.0)	(5.8)	-	ABDGHLL	灰オリーブ	普通	口縁一体部片	木野産
12	須恵器 杯	-	(1.8)	(8.0)	ABFM	灰黄	良好	破部片	南北全産
13	須恵器 杯	-	(8.5)	(7.0)	ABF	灰黄	良好	破部片	南北全産 破部内面摩耗痕あり
14	須恵器 長頸瓶	-	(4.2)	-	ABFM	暗灰黄	良好	胴部片	南北全産
15	土師器 壺	(21.8)	(6.2)	-	ABD1	こぶい赤褐	良好	口縁部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り
16	土師器 小型壺	(16.8)	(7.2)	-	AB1	明赤褐	良好	口縁～胴部片	外面上部横位へう削り
17	土師器 台付壺	-	(3.1)	(9.6)	AB1	こぶい褐	良好	脚部片	
18	土製品 支脚	長さ(8.3)cm	幅(6.9)cm	高さ(4.4)cm	重さ144.7g				平面長方形 前面直角形 工具などによってナゲている
19	石製品 碇石	長さ(11.5)cm	幅(5.0)cm	高さ(3.3)cm	重さ298.8g				石材凝灰岩 焼熟し全体が黒化している 縦面は4面
20	石製品 碇石	長さ(10.1)cm	幅(11.5)cm	高さ(7.8)cm	重さ1600.0g				焼熟している
21	鉄製品 刀子	長さ(7.4)cm	幅(1.5～0.6)cm	厚さ0.3cm	重さ5.1g				基部分木質付着
22	鉄製品 釘	長さ(3.3)cm	幅(0.4)cm	厚さ(0.4)cm	重さ2.7g				

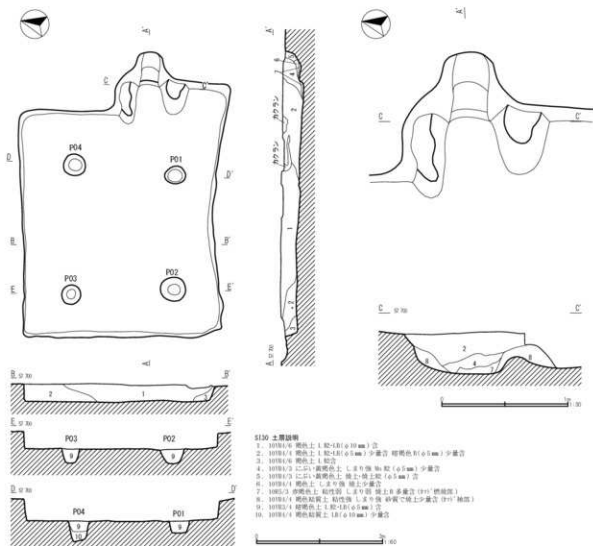


第 94 圖 第 29 号竖穴建物跡出土遺物

21・22は鉄製品で、21は刀子、22は釘である。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 カマドを北壁から東壁に造り替えた改築竪穴建物跡である。



第95図 第30号竪穴建物跡

### 第30号竪穴建物跡（第95図）

位置 AQ—AL、AR—ALグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 第38号竪穴建物と重複し、本跡のほうが新しい。両跡はカマドも壁もほぼ同じ位置にあるため、同一建物改築の可能性がある。

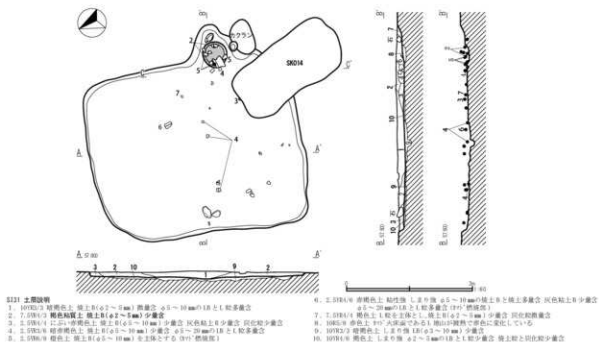
規模 長軸4.14m×短軸3.06m、床面積10.23㎡、確認面からの壁高は0.29m、主軸方向はN-75°-E、形状タイプはⅡB3cである。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。また、東壁の南側は北側に比べて、60cm東側に張出す段違い壁となる。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。両袖も遺存し、褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は燃

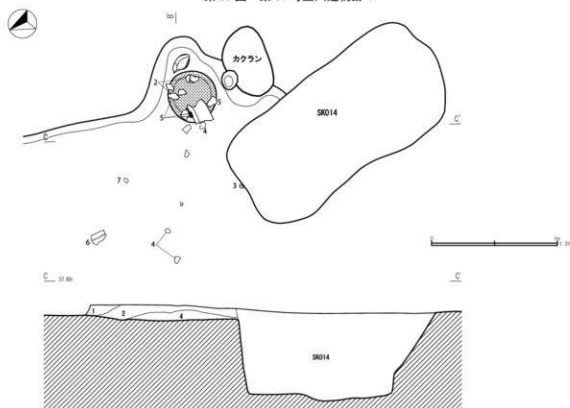
焼部から垂直気味に立ち上る。床面はほぼ平坦で全体に軟弱な面である。廃絶時のピットは対角線上に配置されたP01～04の4基である。支柱穴とみられる。掘り方は確認されなかった。出土遺物は僅少で集中した箇所もみられない。遺物の総量はポリ袋に1袋分である。

**遺物** 出土遺物はいずれも小破片で図示は出来なかった。

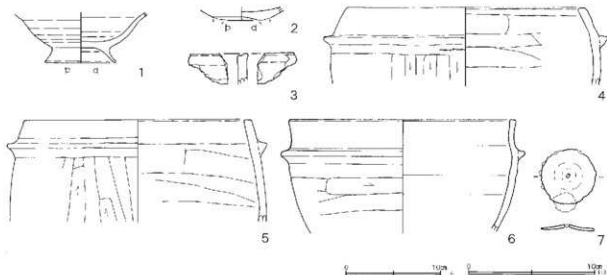
**時期** 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



第96図 第31号竪穴建物跡1



第97図 第31号竪穴建物跡2



第98図 第31号竪穴建物跡出土遺物

第30表 第31号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 高台坪	-	(3.3)	(1.4)	AB/KM	黄	不良	40%	糸切のみ
2	ロクロ土師器 高台坪	-	(1.4)	-	ABG/JKM	黄	不良	断面片	糸切のみ
3	土師質土器 羽釜	-	(3.2)	-	ABDG	黄灰	不良	口縁部片	
4	土師質土器 羽釜	(13.8)	(12.1)	-	ABJ	明黄褐	良好	口縁～胴部片	外面上部縁位へう割り
5	土師質土器 羽釜	(13.8)	(10.8)	-	ABD/K	こぶい黄褐	良好	口縁～胴部片	外面上部縁位へう割り
6	土師質土器 羽釜	(13.0)	(8.7)	-	AB/K	こぶい黄褐	良好	口縁部片	外面上部縁位へう割り
7	鉄製品 紡錘車	長さ4.5cm	幅5.0cm	厚さ0.1～0.2cm	重さ11.6g				

第31号竪穴建物跡(第96・97図)

位置 AR-AL、AS-ALグリッドの台地平坦面に位置する。

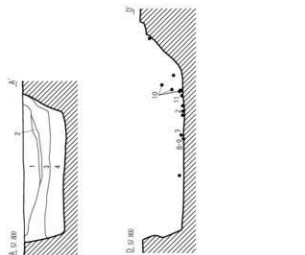
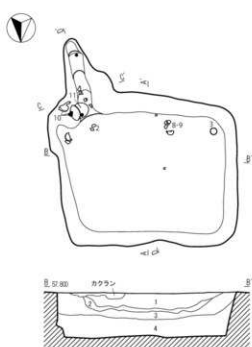
重複 南東隅角で第14号土坑と重複し、本跡が古い。

規模 長軸3.36m×短軸2.69m、床面積7.01㎡、確認面からの壁高は0.11m、主軸方向はN-73°-W、形状タイプはI B2eである。

概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ2cmと浅く、火床面には顕著な被熱痕がみられる。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。壁周溝及びピットは検出されなかった。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。床面下の掘方は深さ2～5cmで全域に及ぶ。遺物はカマド内と北側に集中がみられ、総量はポリ袋に1袋分である。

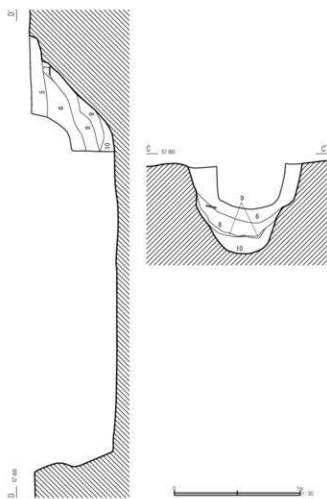
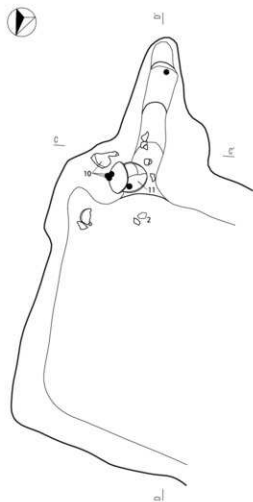
遺物(第98図、第30表) ロクロ土師器高台坪、土師質土器羽釜、鉄製品が出土した。1・2はロクロ土師器高台坪である。高台が「ハ」の字状に広がるものである。3～6は土師質土器羽釜である。4・5は非ロクロ成形で4は口縁から内湾しており、5は内湾が弱い、6はロクロ成形で口縁が直立し、鈎から内湾する。7は鉄製品の紡錘車である。

時期 11世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期



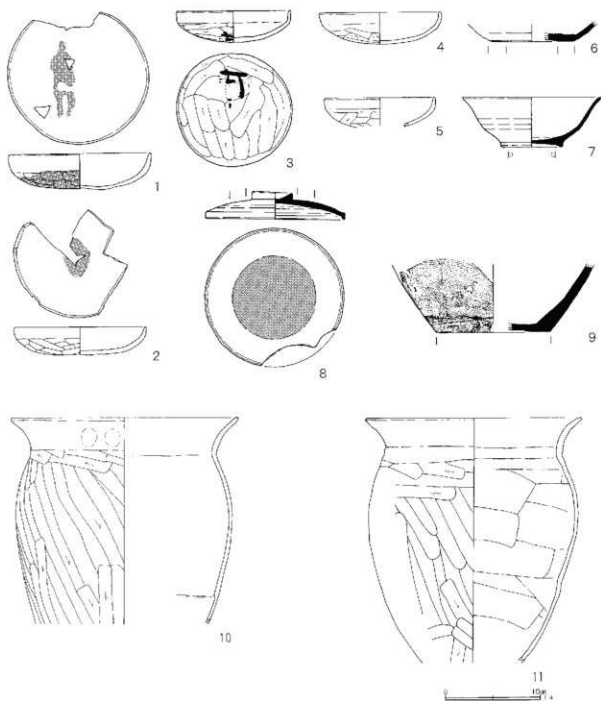
- 532 土層説明
1. 10FR1 褐色土 1 相層遺存
  2. 10FR2 赤褐色土 1 相 (L1:0.30mm) 遺 17H 跡入
  3. 10FR3 土灰・黄褐色土 (L1:0.3mm) 遺層遺
  4. 10FR4 暗褐色土 粘土質 粘土 (L1:0.3mm) 少量遺 (L1:0.3mm) 遺層遺
  5. 10FR5 土灰・黄褐色土 灰土・粘土質少量遺
  6. 10FR6 暗褐色土 (L1:0.5mm) 遺層遺 積土遺層遺
  7. 10FR7 褐色土 1 相遺
  8. 7. 20R1/3 褐色粘質土 粘性物 しまり強 褐色土物 粘 (L1:0.5mm) 遺層遺 積土 (L1:0.5mm) 少量遺
  9. 50R5/6 明赤褐色土 灰土の褐色面 粘土質 粘土 少量遺
  10. 7. 20R1/4 褐色土 1 相・粘性物層遺 (17H) 遺層遺

第 99 図 第 32 号竪穴建物跡 1



第 100 図 第 32 号竪穴建物跡 2





第101図 第32号竪穴建物跡出土遺物

第32号竪穴建物跡(第99・100図)

位置 AQ-AI、AR-AI グリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸 2.84 m × 短軸 2.38 m、床面積 4.37 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.67 m、主軸方向は N - 5° - W、形状タイプは I Dia である。

概要 遺存状況は良好で、平面形は東西方向が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは南壁南東隅角寄りに付設され、燃焼部の約 2/3 が壁外へ突出し、火床面は床面と同一レベルで明瞭な被熱痕はみられない。袖部は崩壊流失し形状として捉えること

第31表 第32号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	15.0	3.9	-	ABDGHN	褐色	良好	90%	底部へう削り 底部内外面油塗付着
2	土師器 坏	(13.8)	3.8	-	ABDGI	褐色	良好	80%	縁部・底部へう削り 内面油塗付着
3	土師器 坏	12.0	3.3	-	ABDJKL	褐色	良好	100%	底部へう削り 底部外面磨痕「口(井)」あり
4	土師器 坏	12.7	3.4	-	ABJ	こぶい赤褐	良好	90%	縁部へう削り 平底産
5	土師器 坏	(11.8)	(3.1)	-	ADIK	明赤褐	良好	75%	縁部へう削り
6	須恵器 坏	-	(2.2)	(5.8)	ABFGHM	灰青	良好	縁一部削片	南比企産 糸切後周辺へう削り
7	須恵器 高台埴	(14.4)	5.3	(6.6)	ABGJIKLM	こぶい黄褐色	不良	破断片	末野産 糸切のみ
8	須恵器 蓋	14.5	2.8	-	ABFM	灰白	良好	90%	南比企産 糸切後周辺へう削り 転用破 環状つまみ
9	須恵器 蓋	-	(7.3)	(12.0)	ABFM	緑灰	良好	縁一部削片	南比企産 糸切後全蓋へう削り
10	土師器 蓋	(23.8)	(21.8)	-	ABCI	こぶい緑	良好	口縁一部削片	くの字に磨痕する 外面上部縁位へう削り 中部縁位へう削り
11	土師器 蓋	(22.8)	(26.6)	-	ABGJK	こぶい黄褐	良好	90%	くの字に磨痕する 外面上部縁位へう削り や・下部縁位へう削り

はできなかったが、カマド8層床面直上からマンガン粒を含む褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から約40°の勾配で立ち上がり、上部で平坦部を持ちながら先端で垂直気味に立ち上がる。煙道部主軸は竪穴建物短軸より20°東に振れる。壁周溝及びピットは検出されなかった。床面はほぼ平坦で、全体に軟弱である。床面下の掘方は確認されなかった。遺物はカマド内と南壁際に集中がみられる。遺物の総量はポリ袋に2袋分である。

**遺物(第101図、第31表)** 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台埴、転用硯、須恵器甕、土師器甕が出土した。1～5は土師器坏で、1～3・5は丸底である。1は内外面に、2は内面に油煙が付着している。3は底面外面に墨書がある。4は口縁がわずかに内湾しながら立ちあがるが、ほかの坏は直立しつつ立ちあがる。平底風である。6は須恵器坏で、底部が糸切り後周辺へう削りである。7は須恵器高台埴である。末野産である。8は環状つまみの須恵器蓋でそのまま転用硯として利用したものである。内面に摩耗痕と墨痕がみられる。9は須恵器蓋である。6・8・9は南比企産である。10・11は土師器甕である。「く」の字甕である。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

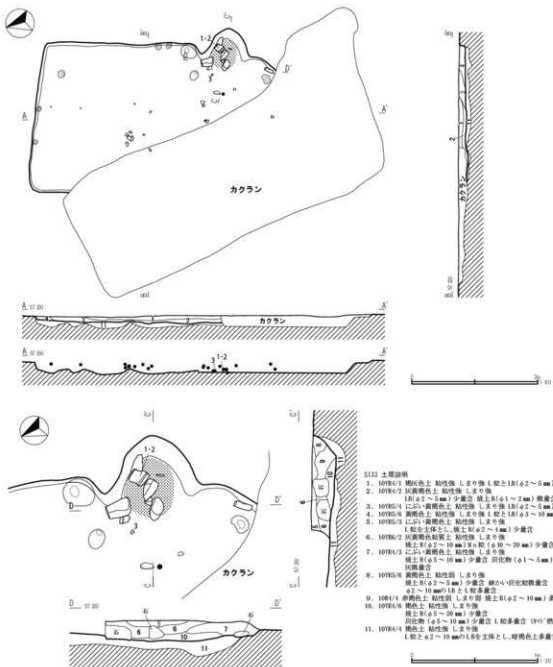
### 第32号竪穴建物跡(第102図)

**位置** AP-AMグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 重複は無いが、南西側が大きく掘乱され、遺存状況は悪い。

**規模** 全容は不詳であるが、長軸3.40m以上×短軸2.53m、床面積4.87㎡以上、確認面からの壁高は0.08m、主軸方向はN-65°-W、形状タイプはI B5fである。

**概要** 平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はほぼレンズ状堆積に近く、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ2cmと浅く、火床面には顕著な被熱痕が確認された。袖部は北袖に部分的な地山造り出しが確認されたが、本来の袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。しかし、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。壁周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦で、カマド前に踏み固めとみられる硬化部分を確認した。床面下の掘方は深さ2～6cmで全域に及ぶ。床面から深さ8～14cmの掘方小ピット



第102図 第33号竪穴建物跡

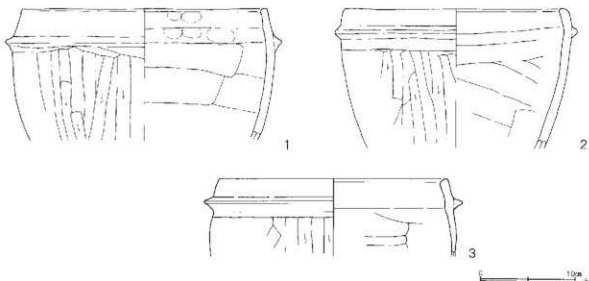
第32表 第33号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師質土器 羽釜	(25.8)	(13.8)	-	ABD1N	こぶい黄褐	良好	口縁~胴部片	外面上部縦位へう折り 非ロク口成形
2	土師質土器 羽釜	(23.8)	(14.8)	-	ABC1N	こぶい褐	良好	口縁~胴部片	外面上部縦位へう折り 非ロク口成形
3	土師質土器 羽釜	(24.2)	(8.3)	-	AB1	こぶい褐	良好	口縁部片	外面上部縦位へう折り 非ロク口成形

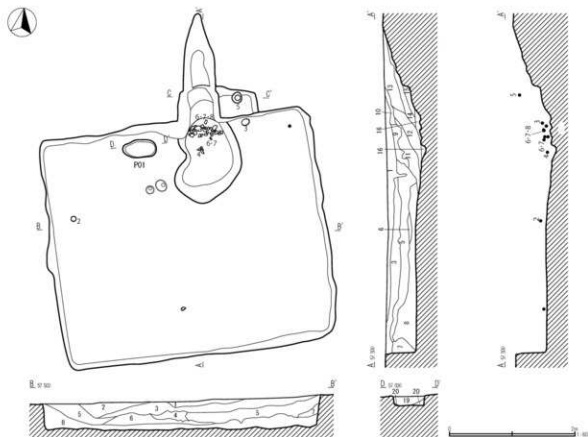
が壁際などから8基検出された。遺物はカマド内と中央部に集中がみられ、総量はポリ袋に1袋分である。

遺物(第103図、第32表) 土師質土器羽釜が出土した。1~3はいずれも非ロク口成形で銜部から口縁部にかけて内湾するものである。

時期 10世紀後半、宮下遺跡VI期



第103図 第33号竪穴建物跡出土遺物

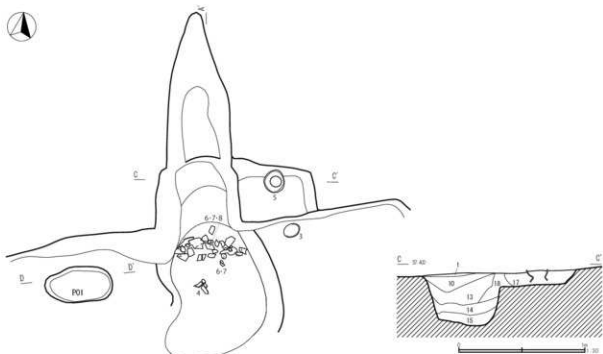


5134 土層説明

1. 1078/2 灰褐色粘土 L 粒少量 焼土粒と同化粒少量
2. 1078/4 灰色黄褐色土 φ2~5mmのL粒とL粒多量
3. 1078/2 硬褐色土 L 粒少量 焼土粒と同化粒少量
4. 1078/4 硬褐色土 L 粒と焼土粒少量 同化粒少量
5. 1078/4 褐色土 φ5~10mmの同化粒とφ2~10mmのL粒とL粒少量 焼土粒少量
6. 1078/2 黒褐色土 灰化層(φ5~30mm)多量 φ2~10mmのL粒と焼土粒少量
7. 1078/4 褐色土 φ5~10mmのL粒とL粒多量 同化粒少量
8. 1078/6 黄褐色土 φ2~10mmのL粒とL粒を主体とし、焼土粒(φ1~2mm)散在
9. 7. 2078/2 灰褐色土 φ2~10mmの焼土と褐色粘土少量
10. 1078/4 褐色土 粘性强 L 主層 φ2~5mmの焼土と褐色粘土少量

11. 1078/7 褐色粘質土 粘性強 L 主層 φ2~10mmの焼土と褐色粘土同化粒とL粒少量 同化粒少量
12. 5195/4 灰色黄褐色土 粘性弱 L 主層 焼土粒(φ5~30mm)多量 褐色粘土少量 灰色土と同化粒少量
13. 7. 5195/4 灰色土 焼土粒(φ2~10mm)少量 同化粒少量 (95% 焼土)
14. 2. 5195/4 灰色土 焼土少量 同化粒とL粒少量 (95% 焼土)
15. 2. 5195/6 黄褐色土 焼土少量 同化粒とL粒少量 (95% 焼土)
16. 1078/4 褐色土 焼土少量 同化粒少量 (95% 焼土)
17. 1078/4 褐色土 L 粒少量
18. 2. 5195/2 灰褐色粘質土 粘性強 L 主層 L 粒とL粒少量
19. 1078/2 硬褐色土 L 主層 φ2~5mmのL粒とL粒少量 焼土粒と同化粒少量
20. 1078/4 灰色黄褐色土 L 粒を主体とし、焼土粒と同化粒少量

第104図 第34号竪穴建物跡1



第105図 第34号竪穴建物跡2

#### 第34号竪穴建物跡（第104・105図）

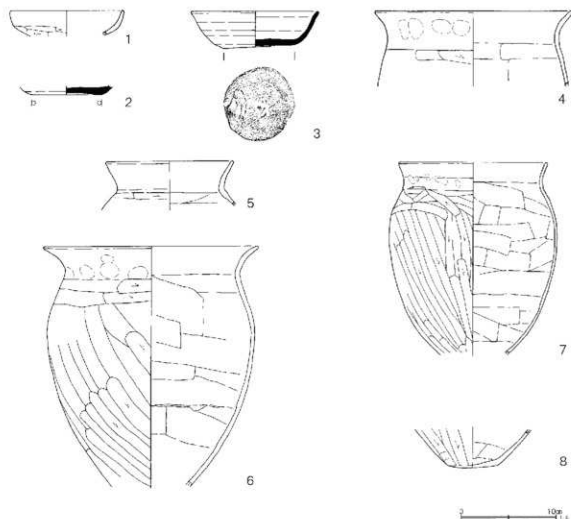
**位置** AT-AL・AM、AU-AL・AM グリッドの台地平坦面に位置する。

**規模** 長軸 4.48 m×短軸 3.76 m、床面積 14.26 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.43 m、主軸方向は N-13° -W、形状タイプは I B3d である。

**概要** 遺存状況は良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は 4～6 層中に焼土と炭化物が確認された。それ以降の 1～3 層はレンズ状に堆積している。カマドは北壁の中央東寄りに付設され、燃焼部の約 1/4 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 6 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上からマンガン粒を含む褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁から煙道部先端まで 1.70 m を測る。カマド東脇に小規模な棚状施設が確認された。床面から約 40 cm 上がった壁外に奥行 42 cm の平坦部が造り出され、土師器小型壺上半が逆位で出土した。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化面を確認した。壁周溝は検出されなかった。廃絶時のピットは P01 の 1 基、掘方小ピットはカマド西脇の 2 基である。遺物はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に、1 袋分である。

**遺物（第106図、第33表）** 土師器坏、須恵器坏、土師器壺が出土した。1 は土師器坏である。口縁が直立しつつ立ちあがる。2・3 は須恵器坏である。南比企産である。2 は底部が糸切り後無調整である。3 は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。4～8 は土師器壺である。4～6 は「く」の字壺である。7 は「く」の字壺にしては口縁がゆるやかに立ちあがる。

**時期** 9 世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第 106 図 第 34 号竪穴建物跡出土遺物

第 33 表 第 34 号竪穴建物跡出土遺物観察表

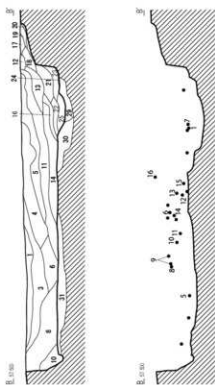
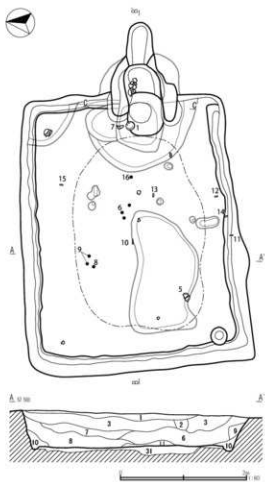
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(11.8)	(2.7)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	90%	縁部へう削り
2	土師器 杯	-	(1.0)	7.4	ABFG	こぶい黄橙	良好	破断片	南社金庫 未切込み 底部内面厚層灰あり
3	土師器 杯	13.4	3.8	7.5	ABFGM	こぶい橙	不良	90%	南社金庫 未切込みへう削り 底部内面厚層灰あり
4	土師器 鉢	(18.0)	(8.0)	-	ABC1	こぶい赤褐	良好	口縁部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り
5	土師器 小型壺	13.4	(5.3)	-	AB1N	こぶい橘	良好	口縁部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 二次焼成
6	土師器 鉢	22.6	(25.5)	-	ABC1	明赤褐	良好	70%	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 中部縦位へう削り 下部縦位へう削り
7	土師器 鉢	(25.7)	(30.0)	-	ABC1N	明赤褐	良好	口縁～底部片	外面上部横位へう削り 中部縦位へう削り 下部縦位へう削り
8	土師器 鉢	-	(4.2)	5.3	AB1	こぶい橘	普通	破断片	外裏下部縦位へう削り

第 35 号竪穴建物跡 (第 107 図)

位置 AR-AM・AN, AS-AM・AN グリッドの台地平坦面に位置する。

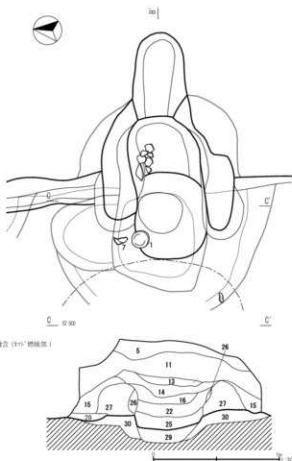
規模 長軸 4.45 m × 短軸 3.50 m, 床面積 12.56 m<sup>2</sup>, 確認面からの壁高は 0.52 m, 主軸方向は N・85° - E, 形状タイプは II B3c である。

概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の

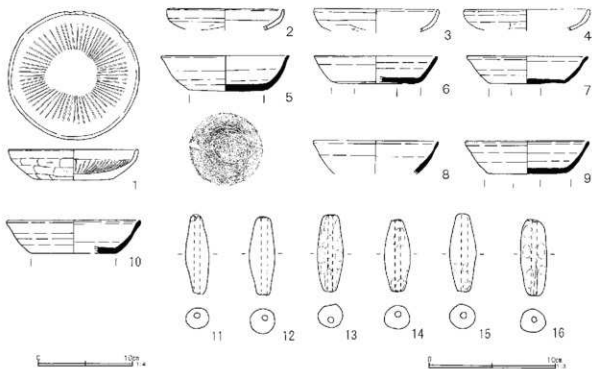


第35 土層説明

1. 101R2-1 砂礫土上、 $h=4$  階層含 L1 砂少量
2. 7. 101R2-4 砂礫土上、高砂が薄く L1( $\phi 3 \sim 10$  mm) 多量
3. 7. 101R2-5 砂礫土上、 $\phi 5 \sim 20$  mm $\phi$  L1 土、粘土主体とし、砂礫土多量、同比較少層土砂少量
4. 101R2-6 黄褐色土、 $\phi 10 \sim 20$  mm $\phi$  L1 土、粘土主体とし、砂礫土少量、同比較少層土砂少量
5. 101R2-1 黄褐色土、 $\phi 2 \sim 10$  mm $\phi$  L1 土、粘土多量
6. 101R2-1 砂礫土上、 $\phi 10 \sim 20$  mm $\phi$  L1 土、粘土多量
7. 101R2-1 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土多量、層土砂少量 L1( $\phi 5 \sim 10$  mm) 多量
8. 101R2-6 黄褐色土、 $\phi 5 \sim 20$  mm $\phi$  L1 土、粘土主体とし、砂礫土多量、同比較少層土砂少量
9. 101R2-6 黄褐色土、 $\phi 2 \sim 10$  mm $\phi$  L1 土、粘土多量、同比較少層土砂少量
9. 101R2-6 黄褐色土、粘性強、土中層 L1( $\phi 5 \sim 20$  mm) 粘土主体とし、砂礫土多量
10. 7. 101R2-1 土砂、粘性土、粘土 L1( $\phi 2 \sim 10$  mm) 多量
11. 101R2-4 土砂、黄褐色土、 $\phi 2 \sim 20$  mm $\phi$  L1 土、粘土多量、層土砂少量
12. 101R2-2 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、層土 R( $\phi 2 \sim 5$  mm) 少量、L1 粘土多量
13. 101R2-1 土砂、黄褐色土、 $\phi 2 \sim 10$  mm $\phi$  L1 土、粘土主体とし、粘性粘土少量、層土砂少量
14. 101R2-6 黄褐色土、粘性強、土中層 L1( $\phi 10 \sim 20$  mm) 粘土主体とし、砂礫土少量
16. 7. 101R2-3 土砂、粘性土、L1 多量、層土砂少量
17. 7. 101R2-2 黄褐色土、層土、同比較少層土
18. 7. 101R2-3 土砂、粘性土、層土砂多量、同比較層含 (30%) 標準層
19. 101R2-6 明砂礫土上、層土砂多量、同比較少層含 (30%) 標準層
20. 7. 101R2-6 黄褐色土、層土、同比較少層含
21. 101R2-2 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、層土 R( $\phi 2 \sim 10$  mm) 少量
22. 101R2-1 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土多量、層土 R( $\phi 5 \sim 10$  mm) 少量、L1( $\phi 2 \sim 8$  mm) 少量、天岸部
23. 101R2-1 土砂、粘性土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、層土 R( $\phi 5 \sim 10$  mm $\phi$ ) 粘性土砂少量、同比較層含 (30%) 標準層
24. 7. 101R2-1 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較少層含 (30%) 標準層
25. 101R2-2 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 L1( $\phi 5 \sim 20$  mm) 少量含 (30%) 標準層
26. 101R2-6 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 L1( $\phi 5 \sim 20$  mm) 少量含 (30%) 標準層
27. 101R2-1 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 (30%) 標準層
28. 101R2-1 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 (30%) 標準層
29. 101R2-6 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 (30%) 標準層
30. 101R2-3 黄褐色土、粘性強、土中層、粘性粘土少量、同比較層含 (30%) 標準層
31. 101R2-3 土砂、黄褐色土、粘土主体とし、粘性粘土多量、層土 R 及び粘性粘土 (層土)



第 107 图 第 35 号竖穴建物跡



第108図 第35号竪穴建物跡出土遺物

第34表 第35号竪穴建物跡出土遺物観察表

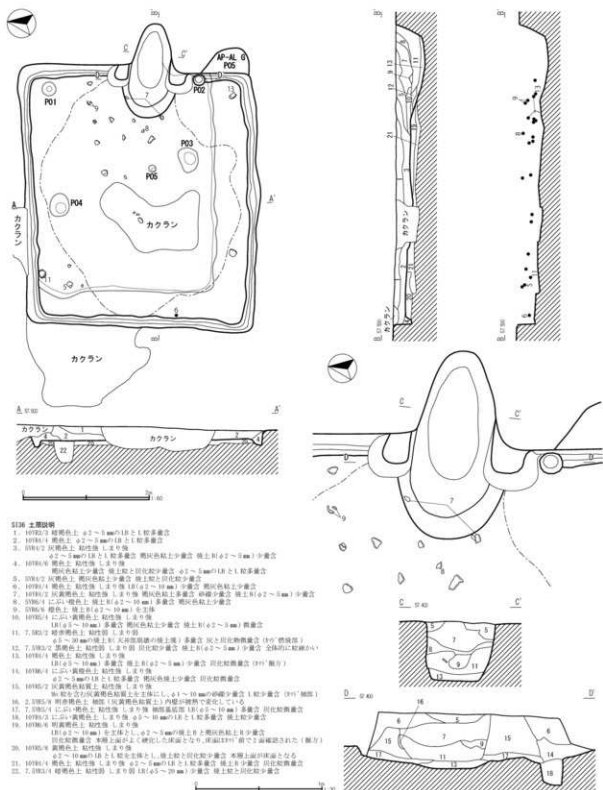
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.6)	3.3	-	ASL	明赤褐	良好	100%	体部・底部へう削り 内面放射線直 平底底
2	土師器 杯	(12.2)	(2.2)	-	ASD12	にぶい黄褐	良好	10%	体部・底部へう削り
3	土師器 杯	(13.0)	(2.4)	-	AB1	にぶい赤褐	良好	口縁部片	体部・底部へう削り
4	土師器 杯	(12.0)	(2.2)	-	AB1	にぶい赤褐	良好	口縁部片	底部へう削り
5	須恵器 杯	13.4	3.7	7.9	ABFDM	灰白	良好	95%	南北全度 糸切縁全面へう削り 底部外側へう書き「口」 底部内面磨痕あり
6	須恵器 杯	(12.9)	2.9	(8.0)	ABFG	灰	良好	10%	南北全度 糸切縁周辺へう削り 底部内面磨痕あり
7	須恵器 杯	12.8	2.9	7.9	ABFGM	灰	良好	95%	南北全度 糸切縁周辺へう削り
8	須恵器 杯	(13.0)	(3.5)	-	ABFGM	灰黄	良好	口縁部片	南北全度
9	須恵器 杯	(13.0)	3.5	(8.0)	ABFGM	灰オリーブ	良好	10%	南北全度 糸切縁周辺へう削り 内面磨痕あり
10	須恵器 杯	(14.0)	3.5	(8.0)	ABFGM	灰黄	良好	10%	南北全度
11	土製品 土鏝	長さ(8.1)cm	重さ15.3g	最大径1.0cm	孔径0.4cm				胎土:ABJM 色調:明赤褐
12	土製品 土鏝	長さ8.1cm	重さ14.0g	最大径2.0cm	孔径0.4cm				胎土:ABGM 色調:にぶい黄褐
13	土製品 土鏝	長さ6.0cm	重さ21.6g	最大径2.0cm	孔径0.4cm				胎土:ABGM 色調:暗 磨痕圧痕あり
14	土製品 土鏝	長さ5.6cm	重さ20.6g	最大径2.1cm	孔径0.4cm				胎土:AB 色調:にぶい黄褐 上下端部を平削りに加工している 磨痕圧痕あり
15	土製品 土鏝	長さ8.1cm	重さ22.3g	最大径2.0cm	孔径0.5cm				胎土:ABGM 色調:にぶい黄褐 磨痕圧痕あり
16	土製品 土鏝	長さ6.0cm	重さ25.1g	最大径2.0cm	孔径0.4cm				胎土:ABGM 色調:にぶい黄褐 磨痕圧痕 粘土板の合わせ目

約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ12cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。両袖とも遺存し、灰色粘土で構築されている。また、煙道部は燃焼部から垂直気味に30cm上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで1.40mを測る。壁周溝はカマド下を除きほぼ全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる顕著な硬化部分を確認した。深さ16cmの廃絶時ビットが1基礎確認された。掘方は主にカマド下で確認された。被熱によってルーム地山のひび割れを防止する役目をしていただ可能性が窺われる。また、本跡中央部に深さ5~8cm小ビット、

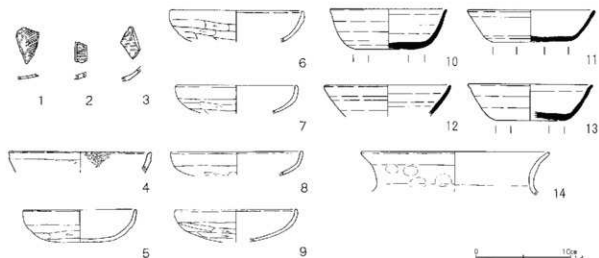


北東隅角と西側にそれぞれ深さ 12cm, 15cm の底面平坦な掘込みを確認した。遺物出土状況はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物 (第 108 図、第 34 表)** 土師器坏、須恵器坏、土錘が出土した。1～4 は土師器坏である。1 は口縁が直立し、平底風である。2～4 はわずかに内湾し、腰をもつ。1 は内面に放射状の暗文が施され



第 109 図 第 36 号竪穴建物跡



第110図 第36号竪穴建物跡出土遺物

ている。2～4は口縁部がわずかに内湾している。5～10は須恵器坏である。南比企産である。5は底部が糸切り後全面へら削りである。底面にへら書きがみられる。6・7・9は底部が糸切り後周辺へら削りである。5・6・9は内面に摩耗痕がみられる。11～16は土鍾である。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

#### 第36号竪穴建物跡（第109図）

位置 AP-AL グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南東隅角でP05(31-236)と重複し、本跡が古い。また、中央部と北西側が大きく擾乱され、遺存状況は不良である。

規模 長軸4.13m×短軸3.75m、床面積13.65㎡、確認面からの壁高は0.24m、主軸方向はN-81°-E、形状タイプはⅡB3cである。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cm、火床面に所々被熱痕みられるが明瞭ではない。両袖とも遺存し、マンガング粒を含む灰黄褐色粘質土で構築されている。また、燃焼部から煙道部まで垂直気味に30cm上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで1.40mを測る。壁周溝はカマド下を除きほぼ全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のビットはカマド南袖脇のP02のみである。掘方は5～8cmの深さで全域に及び、さらに北東側で深さ4～7cmの一段下がった掘込みを確認した。平面形は廃絶時の壁に沿って一回り小さい長方形、規模は長軸3.58m短軸2.93m、床面積10.48㎡で底面は平坦である。本跡は同一建物拡張の可能性がある。また、掘方ビットは3基確認された。遺物は特に集中した箇所はみられず、総量はポリ大袋に1袋分である。

遺物（第110図、第35表） 土師器坏、須恵器坏、土師器裏が出土した。1～9は土師器坏である。1は螺旋と放射状、2・3は放射状、4は螺旋状の暗文が施されている。6～8は直立しつつ立ちあがる。9はわずかに内湾しつつ立ちあがり、丸底である。10～13は須恵器坏である。南比企産で、10・

第35表 第36号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	-	(0.5)	-	AB/M	明赤褐	良好	体～底部片	体部・底部ヘラ削り 内面放射状環文 螺旋状環文
2	土師器 杯	-	(0.8)	-	AB1	灰褐	良好	体～底部片	底部ヘラ削り 内面放射状環文
3	土師器 杯	-	(1.5)	-	AB1	こぶい織	良好	体～底部片	底部ヘラ削り 内面放射状環文
4	土師器 杯	(14.8)	(2.2)	-	AB	明赤褐	良好	口縁部片	内面螺旋状環文
5	土師器 杯	(11.8)	3.5	-	AB1	こぶい織	良好	20%	体部・底部ヘラ削り
6	土師器 杯	(14.0)	(3.2)	-	AB1	滑	良好	10%	体部ヘラ削り
7	土師器 杯	(12.6)	(3.0)	-	AB1	こぶい織	良好	20%	体部ヘラ削り 丸底
8	土師器 杯	(13.6)	(2.5)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	10%	体部ヘラ削り 丸底
9	土師器 杯	(12.6)	(3.5)	-	AB1	赤褐	良好	20%	体部・底部ヘラ削り 丸底
10	須恵器 杯	(12.3)	(4.3)	(7.6)	ABFM	灰白	良好	20%	南比企産 糸切縁周辺ヘラ削り
11	須恵器 杯	13.2	3.4	7.9	ABFM	褐灰	良好	20%	南比企産 糸切縁周辺ヘラ削り
12	須恵器 杯	(13.2)	(3.3)	-	ABFM	黄灰	良好	口縁部片	南比企産
13	須恵器 杯	(13.0)	(3.8)	(7.2)	ABFM	褐灰黄	良好	40%	南比企産 糸切縁周辺ヘラ削り
14	土師器 壺	(9.8)	(4.5)	-	AB	明赤褐	良好	口縁部片	

11・13は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。14は土師器甕である。口縁部が外反し、「く」よりも「コ」に近い形状である。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 本跡は掘方形状から南側と西側を拡張した建物跡の可能性はある。

### 第37号竪穴建物跡(第111図)

位置 AR-AM、AS-AMグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡のほぼ全域を第1・2号土取り遺構に壊されている。

規模 全容は不明であるが、長軸3.61m×短軸2.98m、床面積8.71㎡、確認面からの壁高は0.36m、主軸方向はN-3°-E、形状タイプはI A2aである。

概要 遺存状況は極めて悪く、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土堆積状況は不明である。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部から煙道部まで緩やかに立ち上り、先端に小ピットを有する。壁から煙道部先端まで1.85mを測る。壁周溝は確認されなかった。遺物は特に集中した箇所はみられない。遺物の総量は僅少でポリ中袋に1袋分である。

遺物(第112図、第36表) 須恵器杯、須恵器蓋が出土した。1・2は須恵器杯である。内面摩耗痕がみられる。1は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。体部外面に墨書が書かれている。3は須恵器蓋である。南比企産である。

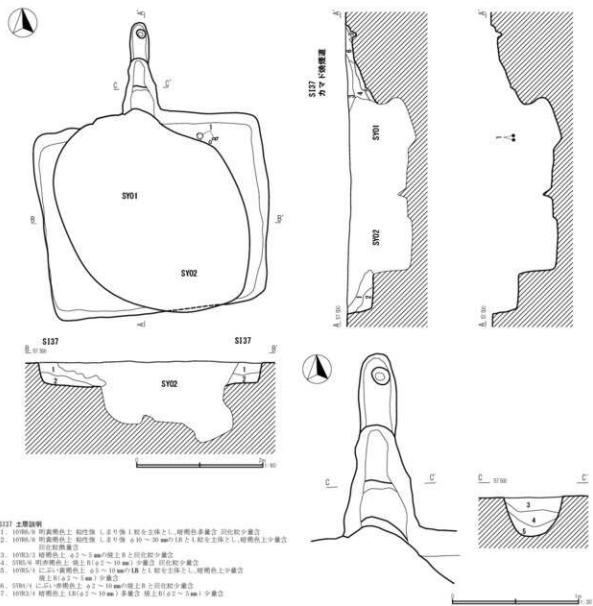
時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

### 第38号竪穴建物跡(第113図)

位置 AQ-AL、AR-ALグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 第38号竪穴建物と重複し、本跡のほうが古い。両跡はカマドも壁もほぼ同じ位置にあるため、同一建物改築の可能性はある。

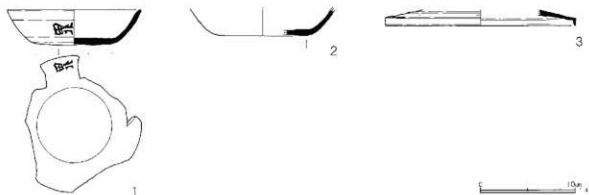
規模 長軸3.82m×短軸3.00m、床面積8.57㎡、確認面からの壁高は0.48m、主軸方向はN-75°-E、



S137 本層説明

1. 10796.9 明表層面上 起性強、しまり強、L 粘土主体とし、軽褐色多量含、団粒状少量含
2. 10796.9 明表層面上 起性強、しまり強、 $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$  の L と L 粘土主体とし、軽褐色上少量含、団粒状少量含
3. 10792.3 軽褐色土、 $\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$  の粒上 B と団粒状少量含
4. 10792.9 明表層面上、塊上 B ( $\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$ ) 少量含、団粒状少量含
5. 10793.3 上土、軽褐色土、 $\phi 5 \sim 10 \text{ mm}$  の L と L 粘土主体とし、軽褐色上少量含、塊上 B ( $\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$ ) 少量含
6. 10791.4 上土、軽褐色土、 $\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$  の粒上 B と団粒状少量含
7. 10793.4 軽褐色土、L B ( $\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$ ) 多量含、塊上 B ( $\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$ ) 少量含

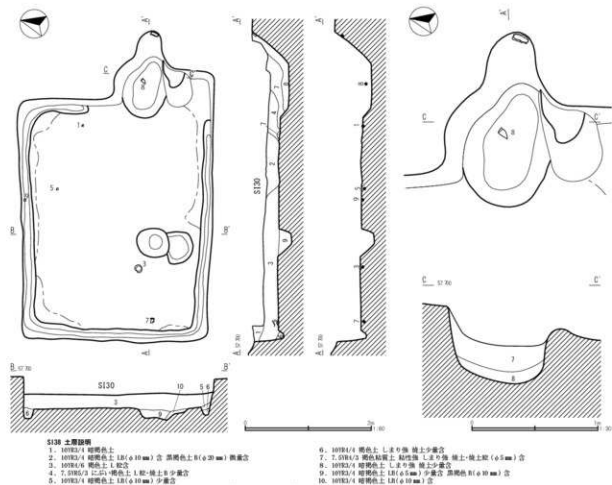
第 111 図 第 37 号竪穴建物跡



第 112 図 第 37 号竪穴建物跡出土遺物

第36表 第37号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 杯	(14.0)	3.8	8.0	ABFGH	灰白	良好	40%	南比企産 糸切縁面沿へず削り 底部内面厚残あり 体部外周に壁位置量「直口(北点)」
2	須恵器 杯	-	(3.0)	(8.0)	ABFG	灰白	普通	跡一底部片	南比企産 糸切縁全葉へず削り 底部内面厚残あり
3	須恵器 蓋	(20.0)	(1.7)	-	ABFGM	焼灰	良好	口縁部片	南比企産

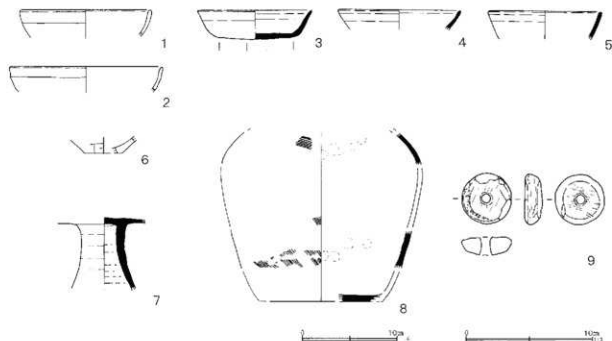


第113図 第38号竪穴建物跡

形状タイプはII B2cである。

**概要** 遺存状況は良好で、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。また、東壁の南側は北側に比べて、55cm 東側に張出す段違い壁となる。覆土はブロック状堆積で一気に埋め戻した埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃烧部の約2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ13cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は南袖が地山造り出で、本来の袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。しかし、床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃烧部から垂直気味に立ち上る。壁周溝はカマド下を除き全周する。床面は平坦で、本跡全城で硬化部分を確認した。廃絶時のピットは2基である。掘方は確認されなかった。遺物は特に集中した箇所はみられない。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物(第114図、第37表)** 土師器杯、須恵器杯、須恵器高盤、須恵器甕、土師器甕、石製品が出土した。1・2は土師器杯である。口縁が直立つつ立ちあがる。3～5は須恵器杯である。3は底部が糸切り



第 114 図 第 38 号竪穴建物跡出土遺物

第 37 表 第 38 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.0)	(2.0)	-	AB1	こぶい赤褐色	良好	口縁部片	
2	土師器 杯	(16.0)	(2.0)	-	AB1	こぶい赤褐色	良好	口縁部片	
3	須恵器 杯	11.9	3.8	7.8	ABFG	灰	良好	95%	南比企産 糸切跡南辺へラ削り
4	須恵器 杯	(12.0)	(2.1)	-	ABFG	灰オリーブ	良好	口縁部片	南比企産
5	須恵器 杯	(11.0)	(3.0)	-	ABFG	灰	良好	口縁部片	南比企産
6	土師器 罐	-	(1.0)	(4.0)	AB1JM	焼灰	良好	蓋部片	
7	須恵器 高盤	-	(7.0)	-	ABF	焼灰	良好	脚部片	南比企産
8	須恵器 罐	-	(27.0)	(19.5)	ABFM	焼灰	良好	胴～底部片	南比企産 外裏平行切ぎ
9	石製品 紡錘車	長さ4.0cm	幅4.0cm	厚さ1.4cm	重さ32.7g	径4.0cm	孔径0.7cm		石臼薄石

後周辺へ外削りである。6は土師器甕である。7は須恵器高盤である。8は須恵器甕である。いずれも南比企産である。9は石製紡錘車である。

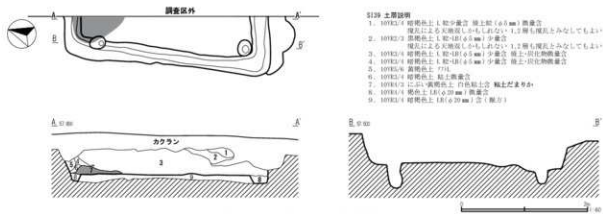
時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

### 第 39 号竪穴建物跡 (第 115 図)

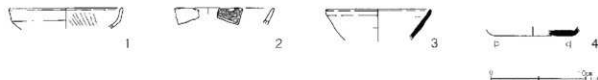
位置 AP-AK、AP-AL グリッドの台地平坦面に位置する。

規模 全容は不明であるが、長軸 3.36 m × 短軸 0.71 m 以上、床面積 1.81 m<sup>2</sup> 以上、確認面からの壁高は 0.48 m、主軸方向は N-14° - W、形状タイプは 05d である。

概要 東側が調査区外となり、本跡の 1/5 程の調査となった。平面形は方形になるとみられる。覆土は 7 層に焼土と炭化物を多量に含み、全体にブロック状堆積で一気に埋め戻した埋没と考えられる。調査出来た部分で壁周溝は全周する。床面はほぼ平坦である。本跡鹿絶時のピットが北西と南西の隅角に 1 基ずつ確認された。遺物は特に集中した箇所はみられない。また、覆土 3・7 層の床面直上で鉄滓と鍛



第115図 第39号竪穴建物跡



第116図 第39号竪穴建物跡出土遺物

第38表 第39号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(11.8)	(2.2)	-	ABIK	こぶい赤褐	良好	口縁~体部片	内面放射状文様
2	土師器 坏	-	(1.8)	-	AB	こぶい黄褐	不良	口縁部片	内面横粒ミナキ 内面黒色処理
3	須恵器 坏	(11.0)	(3.3)	-	ABFGM	緑灰黄	良好	口縁部片	南比企産
4	須恵器 坏	-	(0.9)	(8.0)	ABF	灰白	不良	底面片	南比企産 糸切のみ

造刺片が検出された。遺物の総量はポリ中袋に1袋分である。

**遺物（第116図、第38表）** 土師器坏、須恵器坏が出土した。1・2は土師器坏である。体部内面に放射状の暗文が施されている。口縁が直立しつつ腰をもって立ちあがる。体部内面を黒色処理し、横方向に磨いている。3・4は須恵器坏である。4は糸切り後無調整である。南比企産である。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 部分的な調査となったが、焼土と炭化物の検出から火災焼失建物の可能性が窺われる。また、鍛冶炉は確認されなかったが、床面直上から鉄滓と鍛造刺片が検出されたことから、宮下遺跡で最古の鍛冶工房跡とみられる。

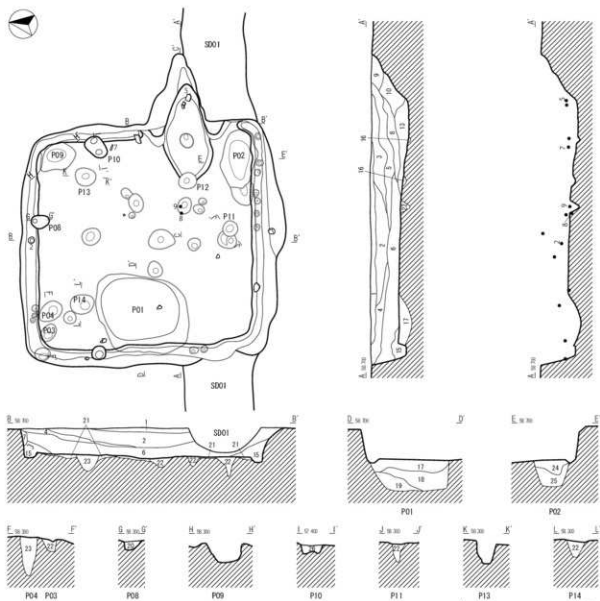
#### 第40号竪穴建物跡（第117・118図）

**位置** BC—ANグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 南側で第23号溝と重複し、本跡ほうが古い。

**規模** 長軸4.21m×短軸3.66m、床面積12.63㎡、確認面からの壁高は0.47m、主軸方向はN-81°-E、形状タイプはI B3cである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央やや南寄りに付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ6cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖とも基部を地山造り出して形成しているが、本来の構築材は崩壊流失し形状として捉えること



S140 土層説明

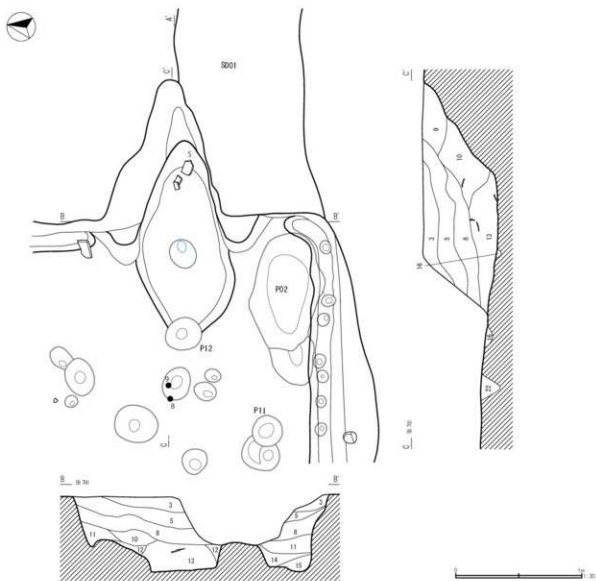
1. 10YR3/1 黄褐色土、しまり強、 $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ の灰化物と粘土粒散在
2. 10YR3/2 黄褐色土、しまり強、1粒以上の灰化物( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )散在
3. 10YR3/3 黄褐色土、しまり強、1粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )多数含、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の灰化物と粘土粒散在
4. 10YR4/1 黄褐色土、しまり強、1粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )多数含、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の灰化物と粘土粒散在
5. 7.5YR5/2 に近い黄褐色土、しまり強、1粒多数含、粘土粒( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )少量含
6. 10YR3/1 黄褐色土、しまり強、1粒( $\phi 5\text{mm}$ )少量含、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の粘土粒と灰化物少量含
7. 10YR4/1 黄褐色土、しまり強、 $\phi 5 \sim 20\text{mm}$ の1粒を主体とし、粘土粒と灰化物少量含
8. 7.5YR5/2 に近い黄褐色土、粘性强、しまり強、粘土粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )少量含、灰化物と粘土粒少量含
9. 5YR6/1 黄褐色土、しまり強、粘土粒( $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ )少量含、灰化物少量含(10%程度部)
10. 2.5YR5/1 粘厚褐色土、しまり強、粘土粒( $\phi 5 \sim 20\text{mm}$ )多数含、1粒少量含、灰化物少量含(10%程度部)
11. 7.5YR5/1 に近い黄褐色土、粘性强、しまり強、灰化物と粘土粒少量含、粘土粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )少量含
12. 10YR2/1 に近い黄褐色土、しまり強、1粒( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ )を主体とし、粘土粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )少量含
13. 5YR5/1 に近い黄褐色土、粘性强、しまり強、粘土粒( $\phi 5 \sim 20\text{mm}$ )少量含、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の1粒に近い黄褐色土少量含(10%程度部)

14. 7.5YR4/3 黄褐色土、しまり強、1粒( $\phi 5 \sim 20\text{mm}$ )多数含、粘土粒( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )少量含
15. 10YR4/3 に近い黄褐色土、しまり強、 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ の1粒を主体とし、粘土粒と灰化物( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )少量含
16. 10YR3/3 黄褐色土、粘性强、しまり強、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の1粒と灰化物少量含
17. 10YR3/2 黄褐色土、しまり強、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の粘土粒と灰化物少量含、1粒少量含
18. 10YR3/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、1粒( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )少量含、粘土粒少量含
19. 10YR4/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の1粒と1粒少量含、粘土粒と灰化物少量含
20. 10YR4/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、 $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ の1粒と1粒少量含、灰化物と粘土粒少量含
21. 7.5YR5/2 に近い黄褐色土、しまり強、1粒を主体とし、粘土粒( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ )少量含
22. 10YR3/2 に近い黄褐色土、粘性强、しまり強、粘土粒少量含
23. 10YR4/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、1粒少量含
24. 10YR4/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、1粒少量含
25. 10YR4/1 黄褐色土、粘性强、しまり強、1粒少量含
26. 10YR3/2 黄褐色土、粘性强、しまり強、1粒少量含

第 117 図 第 40 号竪穴建物跡 1

はできなかった。しかし、カマド8層と床面直上から灰褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃焼部から煙道部にかけて約35°の勾配で立ち上り、壁から煙道部先端まで110cmを測る。壁周溝はカマド下を除き全周する。床面は平坦で、本跡全域で顕著な硬化部分を確認した。掘方ビットは35基で半分は壁際面に掘り込まれた深さ5～14cm小ビットである。P01は長方形で掘込みが箱型の大形ビットである。覆土はブロック状堆積で一気に埋め戻した埋没と考えられる。遺物は特に集中した箇所はみられない。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

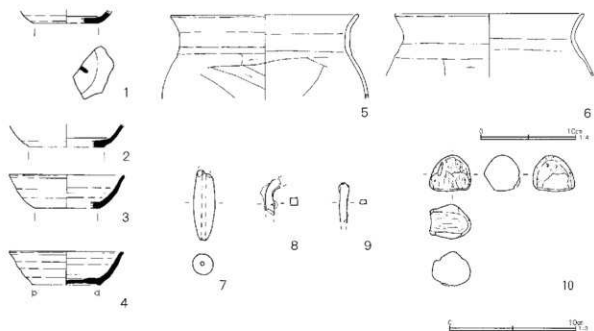




第118図 第40号竪穴建物跡2

第39表 第40号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	流懸器 坏	-	(1.4)	(6.8)	ABFG	灰黄	良好	破断片	南比金産 底部内部厚残あり 底部外周磨光(口)
2	流懸器 坏	12.0	3.5	7.1	ABGHLM	灰	良好	90%	未野焼、糸切のみ
3	流懸器 坏	(12.0)	(3.5)	(6.6)	ABFJM	灰白	良好	90%	南比金産
4	流懸器 坏	-	(2.5)	(6.9)	ABDFGM	灰黄	良好	破断片	南比金産
5	土師器 壺	(19.8)	(6.9)	-	ABCI	明赤褐	良好	口縁~胴断片	外周上部横位へラ削り 中部縦位へラ削り
6	土師器 壺	(19.8)	(6.7)	-	ABGM	にふい赤褐	良好	口縁断片	外周上部横位へラ削り
7	土製品 土埴	長さ(5.4)cm	重さ14.4g	最大径: 7cm	孔径0.3cm				灰物:ABGM 色調: にふい壺
8	鉄製品 釘	長さ(2.9)cm	幅0.7cm	厚さ0.6cm	重さ3.3g				ビス状の金具が刺さる
9	鉄製品 釘	長さ(3.2)cm	幅0.6cm	厚さ0.3cm	重さ3.1g				
10	石製品 碇石	長さ2.8cm	幅1.2cm	厚さ2.8cm	重さ8.8g				石材軽石



第119図 第40号竪穴建物跡出土遺物

遺物(第119図、第39表) 須恵器環、土師器甕、土錘、鉄製品、石製品が出土した。1～4は須恵器環である。1は底部外面に墨書がある。1・3・4は南比企産である。2は末野産で糸切り後無調整である。5・6は土師器甕で、「ク」の字よりも「コ」の字裏に近いと考えられる。7は土錘、8・9は鉄製品の釘、10は石製品の砥石である。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

#### 第41号竪穴建物跡(第120・121図)

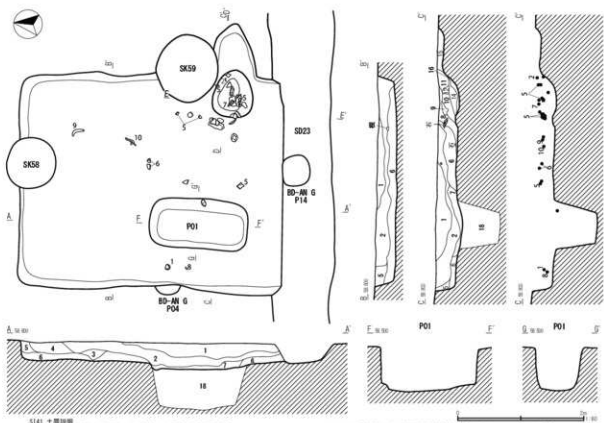
位置 BD-ANグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 第58・59号土坑と重複しいずれも本跡のほうが古い。また、第23号溝に南壁を壊されている。

規模 全容は不明であるが、長軸4.27m以上×短軸3.35m、床面積13.33㎡以上、確認面からの壁高は0.30m、主軸方向はN-88°-E、形状タイプはI B5cである。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁南寄りに偏って付設され、燃焼部の約1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ7cm、火床面に所々被熱痕みられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。しかし、カマド17層と床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃焼部から煙道部にかけて急角度な勾配で立ち上り、床から20cm上がったところから緩やかな立ち上がりになる。壁周溝は無い。床面は平坦で、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。本跡発掘時のビットはP01の1基だけである。P01は長方形で掘込みが箱型の大形ビットである。覆土はブロック状堆積で一気に埋め戻した埋没と考えられる。掘方は確認されなかった。遺物はカマド内に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

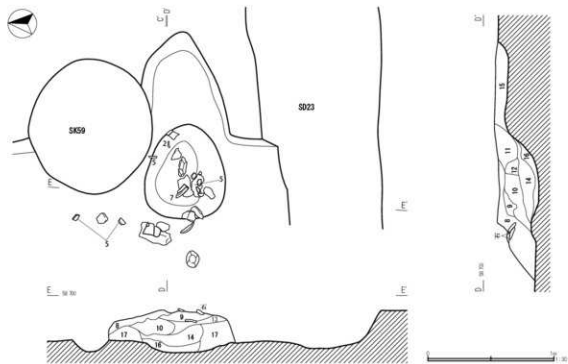
遺物(第122図、第40表) ロクロ土師器環、ロクロ土師器小皿、ロクロ土師器碗、土師質土器羽釜、



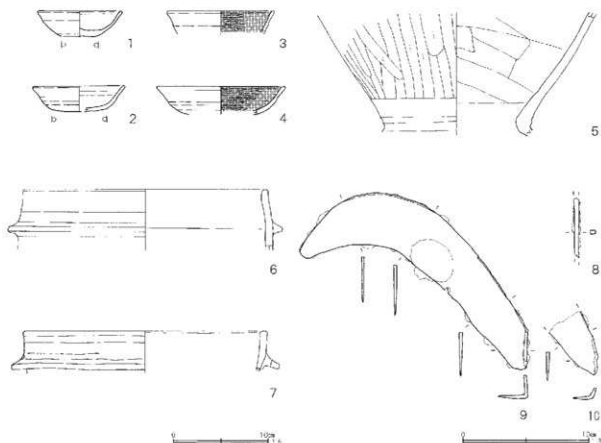
120

1. 10YR2/3 褐色土 しまり強 77%少量含 1. 粘土少量含 焼土和灰層含
2. 10YR2/3 褐色土 しまり強 77%少量含 1. 粘土少量含 多量含 1. 粘土少量含 焼土和灰層含 同化和焼層含
3. 10YR/6 黄褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 7.5% (φ10mm) 少量含 同化和焼層含
4. 10YR/4 褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 同化和焼層含 焼土和灰層含
5. 10YR/6 黄褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 黄土 (φ10~20mm) 少量含
6. 10YR/6 黄褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 1. 1.5% (φ10~20mm) 少量含
7. 10YR/2 二色黄褐色土 しまり強 同質性多量含 1. 粘土少量含
8. 10YR/4 黄褐色土 しまり強 焼土和灰層含 1. 粘土少量含
9. 7.5YR/4 褐色土 しまり強 焼土和灰層含 1. 粘土少量含
10. 7.5YR/4 褐色土 しまり強 焼土和灰層含 白色粘土 (φ10~20mm) 少量含 同化和焼層含
11. 7.5YR/2 黄褐色土 しまり強 同化和焼層含 1. 粘土少量含 焼土和灰層含
12. 7.5YR/4 褐色土 しまり強 1. 粘土少量含
13. 7.5YR/4 褐色土 しまり強 焼土和灰層含 1. 粘土少量含 同化和焼層含
14. 10YR/6 黄褐色土 しまり強 焼土和灰層含 1. 粘土少量含
15. 10YR/4 褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 1.5% (φ10mm) 少量含
16. 2.5YR/4 二色黄褐色土 同質性 しまり強 焼土多量含 (37% 燃焼層)
17. 10YR/2 同質性粘質土 粘性質 しまり強 36%粘土含 27% 粘粒の可能性がある
18. 10YR/6 黄褐色土 しまり強 1. 粘土少量含 1.5% (φ10~20mm) 多量含 (31% 内PO1)

第120図 第41号竪穴建物跡1



第121図 第41号竪穴建物跡2



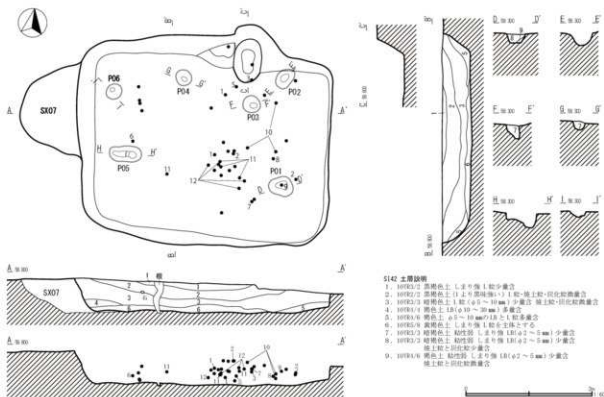
第122図 第41号竪穴建物跡出土遺物

第40表 第41号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 小皿	8.8	2.7	4.9	AB	こぶい焼	不良	9%	糸切のみ
2	ロクロ土師器 小皿	(8.6)	(2.7)	(5.3)	ABC1A	焼	不良	9%	糸切のみ
3	ロクロ土師器 埴	(11.2)	(2.5)	-	ABD	焼	不良	口縁部片	内面横位ミガキ 内面黒色処理
4	ロクロ土師器 坏	(13.6)	(2.4)	-	ABE1	こぶい焼	不良	口縁部片	内面横位ミガキ 内面黒色処理
5	土師質土器 甕	-	(13.0)	-	ABD1KN	こぶい焼	良好	胴~底部片	外面下部縦位へう割り 非ロクロ成形
6	土師質土器 羽釜	(25.8)	(8.5)	-	ABD1N	こぶい赤焼	良好	口縁部片	ロクロ成形
7	土師質土器 羽釜	(25.8)	(4.3)	-	ABD1	こぶい赤焼	良好	口縁部片	非ロクロ成形
8	鉄製品 釘	長さ(4.7)cm	幅0.4cm	厚さ0.3cm	重さ2.1g				
9	鉄製品 鉄鎌	長さ19.7cm	幅4.1cm	厚さ0.2~0.3cm	重さ94.1g				
10	鉄製品 鉄鎌	長さ(4.9)cm	幅2.5cm	厚さ0.3cm	重さ8.1g				

土師質土器甕、鉄製品が出土した。1・2はロクロ土師器小皿である。3はロクロ土師器埴である。4はロクロ土師器坏である。1・2は底部が糸切り後無調整である。3・4は内面が黒色処理され、横方向に磨かれている。5は土師質土器甕である。非ロクロ成形で、孔部がラッパ状に開くものである。6・7は土師質土器羽釜である。6はロクロ成形で、7は非ロクロ成形である。口縁からわずかに内湾する。8～10は鉄製品である。8は釘で、9・10は鎌である。

時期 10世紀後半、宮下遺跡VI期



第123図 第42号竪穴建物跡

#### 第42号竪穴建物跡(第123図)

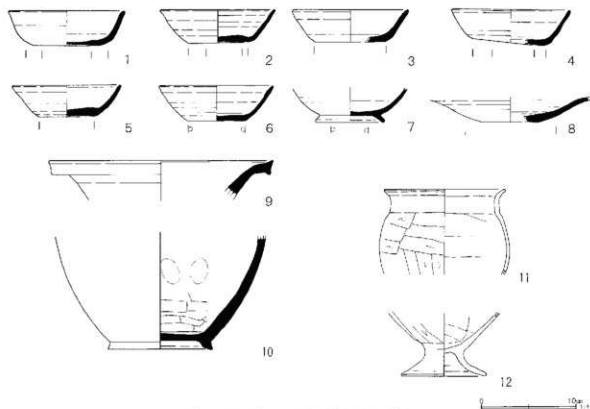
位置 BC-A0、BD-A0グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 西側で第7号性格不明遺構と重複し、本跡のほうが新しい。

規模 長軸4.01m×短軸3.38m、床面積9.55㎡、確認面からの壁高は0.48m、主軸方向はN-9°-W、形状タイプはI R2aである。

概要 遺存状況は良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cm、火床面と推測される箇所には被熱度が全く確認できなかった。袖部は西袖だけローム地山を造り出しているが、構築材を用いた痕跡は確認できなかった。燃焼部から煙道部にかけて約45°の勾配で立ち上る。壁周溝は無い。床面はほぼ平坦であるが、顕著な硬化部分は確認できなかった。掘方ピットは6基である。P01は長方形で掘込みが箱型の大形ピットである。覆土はブロック状堆積で一気に埋め戻した埋没と考えられる。遺物は中央南東寄りに集中がみられるが、いずれも床面から上がった覆土中からの出土である。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

遺物(第124図、第41表) 須恵器杯、須恵器高台壇、須恵器皿、須恵器長頸瓶、土師器台付甕が出土した。1~6は須恵器杯である。1・2・4は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。6は底部が糸切り後無調整である。4~6は内面に摩擦痕がみられる。7は須恵器高台壇である。8は須恵器皿である。底部は糸切り後無調整である。9・10は須恵器長頸瓶である。9は口縁から頸部片で内面に黒色付着物がみられる。1・3~5・7~9は未野産、2・6・10は南比企産である。11・12は土師器台付甕である。11は口縁から胴部で、「コ」の字裏である。



第124図 第42号竪穴建物跡出土遺物

第41表 第42号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	環形器 鉢	(12.3)	3.7	(7.0)	ABOHL	黄灰	良好	40%	未野焼 糸切縁周辺へ少削り
2	環形器 鉢	12.0	3.6	6.3	ABFHM	黄灰	良好	30%	南比全産 糸切縁周辺へ少削り
3	環形器 鉢	(12.0)	(3.4)	(7.4)	ABGJ	黄灰	良好	20%	未野産
4	環形器 鉢	12.4	3.5	7.8	ABOHW	褐灰	良好	30%	未野産 糸切縁周辺へ少削り 底部内外黒摩粒痕あり
5	環形器 鉢	(11.4)	3.2	5.8	ABOHLMN	灰白	良好	70%	未野産 糸切縁全面へ少削り 底部内外黒摩粒痕あり
6	環形器 鉢	(12.0)	3.7	(6.0)	ABFOM	黄灰	良好	40%	南比全産 糸切のみ 縁部下黒摩粒痕あり
7	環形器 高台皿	-	(3.4)	(6.8)	ABOM	にぶい黄褐色	良好	縁～底部片	未野産 糸切のみ
8	環形器 皿	-	(2.4)	(6.0)	ABOIM	にぶい黄褐色	良好	30%	未野産 糸切のみ
9	環形器 長頸瓶	(23.4)	(4.2)	-	ABOHW	褐灰	良好	口縁部片	未野産 内面黒色付着物あり
10	環形器 長頸瓶	-	(12.5)	11.0	ABFON	褐灰	良好	縁～底部片	南比全産
11	土師器 台付壺	(12.6)	(9.0)	-	ABOH	にぶい赤褐色	良好	口縁～胴部片	この字に屈曲する 外面上部僅位へ少削り
12	土師器 台付壺	-	(6.4)	8.8	ABOIK	明赤褐色	良好	胴下半～胴部片	外面下部僅位へ少削り

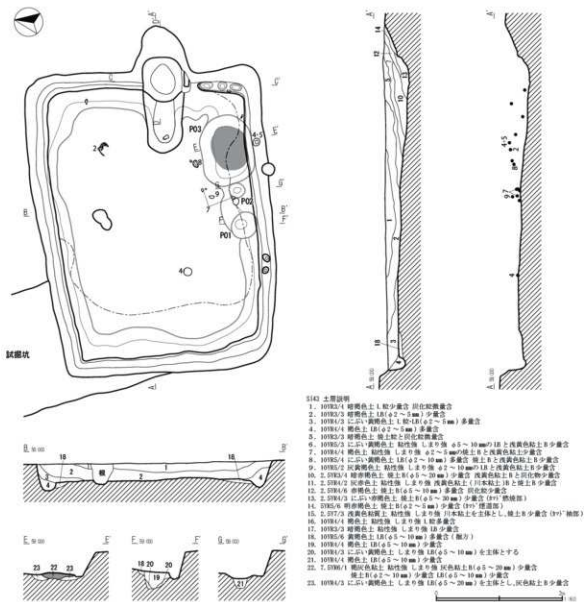
時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 ローム地山をカマド袖として造り出す段階まで竪穴建物を構築しながら、それ以降の使用痕跡が全くみられない。構築途中で廃棄された可能性も考えられる。

#### 第43号竪穴建物跡（第125・126図）

位置 BD-AP、BE-APグリッドの台地平坦面に位置する。

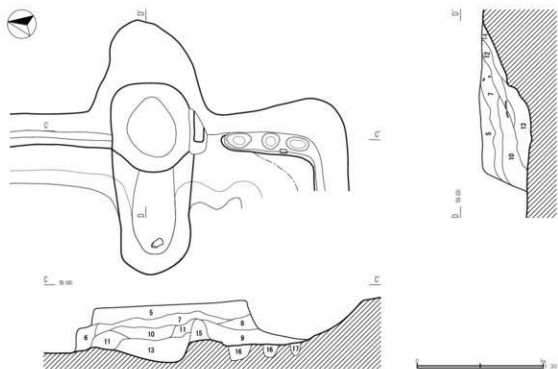
規模 長軸4.84m×短軸3.72m、床面積13.63㎡、確認面からの壁高は0.35m、主軸方向はN-72°-E、形状タイプはII B3cである。



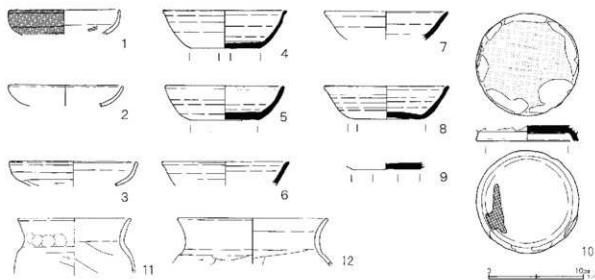
第 125 図 第 43 号竪穴建物跡 1

**概要** 北西側が試掘時に削平されているが、遺存状況は概ね良好である。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 6 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は南袖のみが遺存し、浅黄色粘土が構築材として使用されている。また、煙道部は床面から 15 cm 上がったところで 25° の緩やかな勾配で立ち上がる。壁周溝は全周する。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは壁周溝内の小ピット 2 基だけである。掘方ピットは 6 基で、P03 は長方形で掘込みが浅い箱形のピットである。覆土に灰白色粘土が詰め込まれている。壁隙四囲に浅い掘方が確認された。遺物は南側に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分と中袋に 1 袋分である。

**遺物 (第 127 図、第 42 表)** 土師器環、須恵器環、土師器裏、転用硯が出土した。1~3 は土師器環である。口縁部がやや直立しつつ立ちあがる。1 は平底風であり、油煙が付着している。4~9 は須恵



第126図 第43号竪穴建物跡2



第127図 第43号竪穴建物跡出土遺物

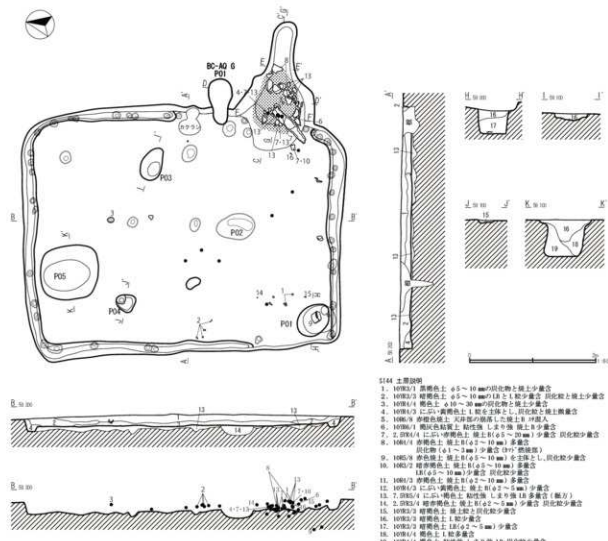
器坏である。南比企産である。4・5・8・9は口縁が内湾しつつ立ちあがり、底部が糸切り後周辺へラ削りである。6・7は体から口縁部が斜めに立ちあがる。8・9は底部内面に摩耗痕がみられる。10は末野産の須恵器長頸瓶の底部を再利用したもので一部に墨痕や摩耗痕がみられるため、転用碗と考えた。11・12は土師器甕である。口縁から直立に立ちあがる。「く」の字裏から「コ」の字裏への移行期のものと考えられる。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第 42 表 第 43 号竪穴建物跡出土物観察表

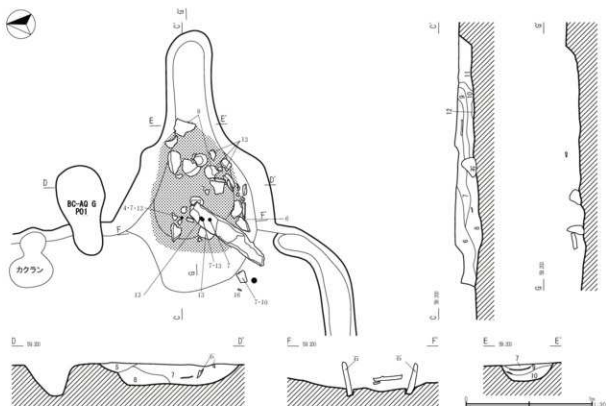
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(11.7)	(2.6)	-	AB1	黄緑	良好	口縁~体部片	底部へう割り 平底裏 内外裏油塗付着
2	土師器 坏	(12.0)	(2.7)	-	ABG(1)	こぶい曜	良好	口縁部片	
3	土師器 坏	(13.4)	(2.6)	-	ABG(1K)	暗	良好	10%	底部へう割り
4	須恵器 坏	(12.8)	(4.0)	(7.2)	ABFG	灰黄	良好	10%	南北金産 糸切後周辺へう割り 底部内面厚料痕あり
5	須恵器 坏	12.5	3.6	7.2	ABFM	緑灰	良好	100%	南北金産 糸切後周辺へう割り
6	須恵器 坏	(13.4)	(2.5)	-	ABFM	黄灰	良好	口縁部片	南北金産
7	須恵器 坏	(13.0)	(3.0)	-	ABFLM	黄灰	良好	口縁部片	南北金産
8	須恵器 坏	(13.0)	3.5	6.2	ABFG	灰黄	良好	10%	南北金産 糸切後周辺へう割り 底部内面厚料痕あり
9	須恵器 坏	-	(0.7)	(7.2)	ABFLM	緑灰	良好	底部片	南北金産 糸切後周辺へう割り 底部内面厚料痕あり
10	須恵器 長頸瓶	-	(1.7)	10.7	ABG(JMN)	こぶい黄緑	不良	底部片	実野産 糸切後全量へう割り 底部内面厚料痕あり 胎土痕 底部内面裏面あり
11	須恵器 小型壺	(11.8)	(5.8)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	口縁~胴部片	外面上部縁位へう割り
12	土師器 壺	(15.8)	(5.0)	-	AB1	明赤褐	良好	口縁部片	外面上部縁位へう割り



第 128 図 第 44 号竪穴建物跡 1

第 44 号竪穴建物跡 (第 128・129 図)

位置 BC-AQ グリッドの台地平坦面に位置する。



第129図 第44号竪穴建物跡2

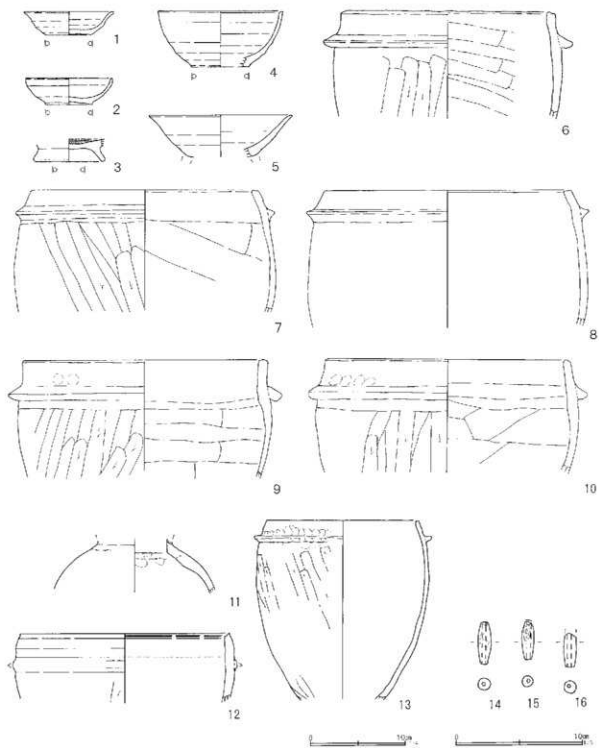
第43表 第44号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 小皿	8.4	2.5	4.9	ABD1L	物	不良	70%	糸切のみ
2	ロクロ土師器 小皿	(8.0)	(2.8)	(5.0)	ABDM	明赤褐	良好	90%	糸切のみ
3	ロクロ土師器 高台碗	-	(2.4)	(7.2)	ABDCL	物	不良	底部片	糸切のみ 内面縦位ミガキ 内面黒色粘厚
4	ロクロ土師器 椀	(13.0)	(5.8)	(8.0)	ABDHM	物	不良	90%	糸切のみ
5	ロクロ土師器 高台碗	(15.0)	(4.4)	-	ABDIM	物	不良	0%	糸切のみ
6	土師質土器 羽釜	(21.1)	(11.2)	-	ABG1AM	こぶい赤褐	良好	口縁部片	胴部外面縦位へう削り 胴部内面横位へうナデ
7	土師質土器 羽釜	(23.8)	(12.8)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	口縁～胴部片	外面中部縦位へう削り非ロクロ成形
8	土師質土器 羽釜	(25.8)	(14.2)	-	ABC1N	こぶい赤褐	普通	口縁～胴部片	二次焼成で器面荒れている 非ロクロ成形
9	土師質土器 羽釜	(25.8)	(12.4)	-	AB1	灰褐	良好	口縁～胴部片	外面中部縦位へう削り 外置スス 非ロクロ成形
10	土師質土器 羽釜	(25.4)	(12.0)	-	ABGH	こぶい橙	良好	口縁～胴部片	外面中部縦位へう削り 非ロクロ成形
11	土師質土器 壺	-	(5.7)	-	ABGHM	物	不良	底部片	
12	土師質土器 羽釜	(22.0)	(7.2)	-	ABM	黒褐	良好	口縁～胴部片	
13	土師質土器 羽釜	(24.1)	(28.7)	-	ABDM	物	不良	口縁～胴部片	外置スス付着 非ロクロ成形
14	土製品 土埴	長さ3.3cm 重さ2.3g 最大径1.3cm 孔径0.2cm	埴物A 色調：灰褐						
15	土製品 土埴	長さ(3.0)cm 重さ2.4g 最大径0.9cm 孔径0.2cm	埴物A-B 色調：橙						
16	土製品 土埴	長さ(2.7)cm 重さ2.6g 最大径1.0cm 孔径0.3cm	埴物A-B 色調：黒褐						

重複 東壁でP01(BC-AQ G)と重複し、本跡が古い。

規模 長軸5.05m×短軸3.89m、床面積17.14㎡、確認面からの壁高は0.21m、主軸方向はN-80°-E、形状タイプはI B4cである。

概要 遺存状況は良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁南寄りに付設され、燃焼部の約2/3が



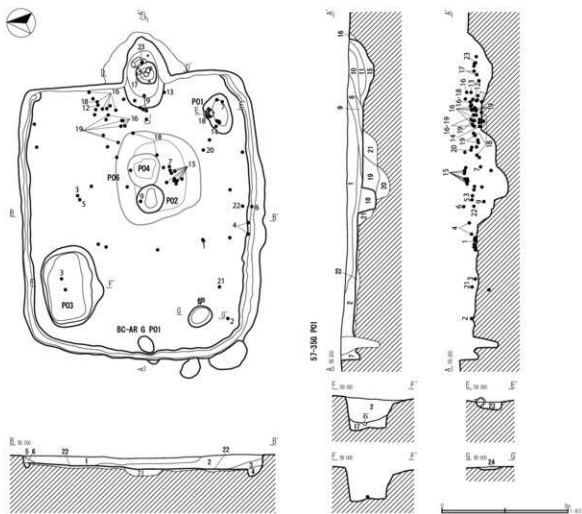
第130図 第44号竪穴建物跡出土遺物

壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cm、被熱で火床面であるローム地山が赤褐色に変化している。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から褐灰色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃焼部内で緑泥片岩の板石が出土し、出土状況から袖と天井に懸架していたとみられる。煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、壁から煙道部先端まで1.50mを測る。壁周溝は南西と北西の隅角を除きほぼ全周する。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて顕著

な硬化部分を確認した。本跡発掘時のビットは4基である。掘方ビットは48基で大半が壁周溝内の小ビットである。遺物はカマド内とP01内に集中がみられ、総量はポリ大袋に3袋分である。

**遺物(第130図、第43表)** ロクロ土師器小皿、ロクロ土師器碗、ロクロ土師器高台碗、土師質土器羽釜、土師質土器壺、土錘が出土した。1・2はロクロ土師器小皿である。1は外反しつち立ちあがる。2は体部から内湾しつち立ちあがる。3・5はロクロ土師器高台碗である。3は内面を黒色処理し、横方向に磨いている。5は体部から斜めに立ちあがり、口縁部で外反する。4はロクロ土師器碗で、体部から内湾しつち立ちあがる。6~10・12・13は土師質土器羽釜である。9は口縁が外反し、12は口縁が直立するほかは口縁が内湾する。12はロクロ成形で他は非ロクロ成形である。11は土師質土器壺である。頸部から胴部である。14~16は土錘である。

**時期** 11世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期

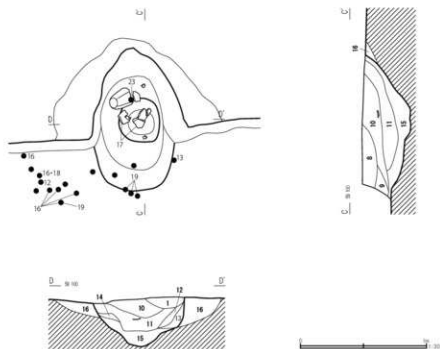


**5146 土器説明**

1. 309R/3 褐色土上、しまり肌、1.粘土多量、焼土多量、灰化粘土多量、白色粘土多量
2. 309R/4 褐色土上、しまり肌、1.粘土多量、白色粘土多量、IR(6.20~40mm)少量
3. 309R/6 褐色土上、しまり肌、白色粘土多量、IR(6.20~40mm)少量
4. 309R/6 褐色土上、しまり肌、IR(6.20~30mm)少量
5. 309R/6 褐色土上、しまり肌、IR(6.10~30mm)少量、赤色粘土多量、1.粘土多量
6. 309R/6 褐色土上、しまり肌、IR(6.10~30mm)多量、白色粘土多量
7. 309R/4 褐色土上、しまり肌、IR(6.20~40mm)多量、白色粘土多量
8. 309R/4 褐色土上、しまり肌、IR(6.10~30mm)少量、1.粘土多量、灰化粘土多量、焼土多量
9. 2.09R/6 褐色粘土上、しまり肌、1.粘土多量、灰化粘土多量、IR(6.10~30mm)少量、焼土多量
10. 2.09R/6 褐色粘土上、しまり肌、焼土多量、1.粘土多量、灰化粘土多量
11. 2.09R/4 褐色土上、しまり肌、焼土多量、1.粘土多量、灰化粘土多量
12. 2.09R/6 褐色土上、しまり肌、焼土多量、1.粘土多量、灰化粘土多量

13. 309R/4 褐色土上、しまり肌、1.粘土多量、IR(6.10~30mm)少量
14. 2.09R/4 褐色土上、IR(6.20~30mm)少量、焼土多量
15. 2.09R/6 褐色土上、しまり肌、焼土多量、1.粘土多量、灰化粘土多量
16. 309R/4 褐色土上、しまり肌、IR(6.10~30mm)少量、赤色粘土多量、1.粘土多量
17. 309R/6 褐色土上、しまり肌、IR(6.20~40mm)少量、1.粘土多量
18. 309R/3 2之5、褐色土上、しまり肌、焼土多量、IR(6.20~30mm)少量、灰化粘土多量
19. 309R/6 褐色土上、しまり肌、1.粘土多量、赤色粘土多量、IR(6.20~40mm)多量、褐色粘土多量
20. 309R/4 褐色土上、しまり肌、IR(6.10~30mm)少量、1.粘土多量
21. 309R/6 褐色土上、しまり肌、1.粘土多量、焼土多量
22. 309R/4 2之5、褐色土上、しまり肌、IR(6.5~20mm)多量、焼土多量(厚)
23. 309R/6 褐色土上、しまり肌、灰化粘土多量、焼土多量、1.粘土多量
24. 2.09R/4 褐色土上、しまり肌、焼土多量、1.粘土多量

第131図 第45号竪穴建物跡1



第 132 図 第 45 号竪穴建物跡 2

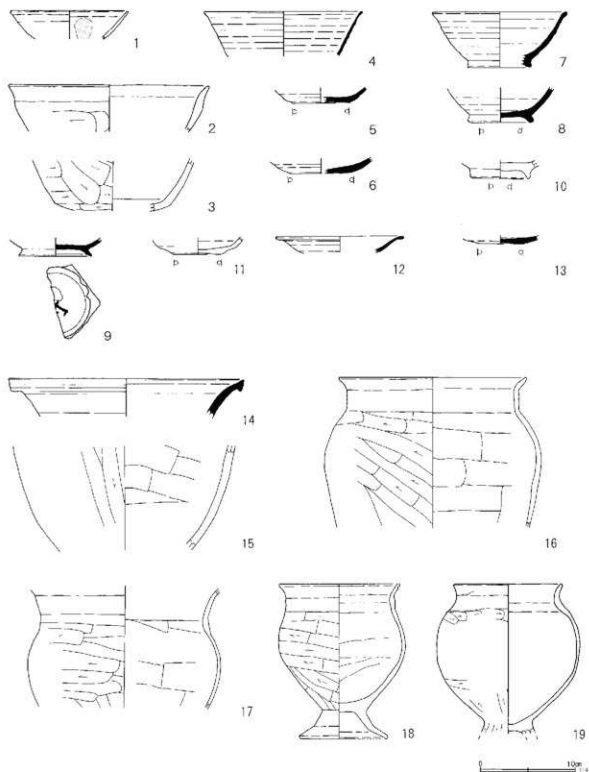
#### 第 45 号竪穴建物跡 (第 131・132 図)

**位置** BC—AR グリッドの台地平坦面に位置する。

**規模** 長軸 4.45 m × 短軸 3.84 m、床面積 14.09 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.17 m、主軸方向は N - 87° - E、形状タイプは II A3c である。

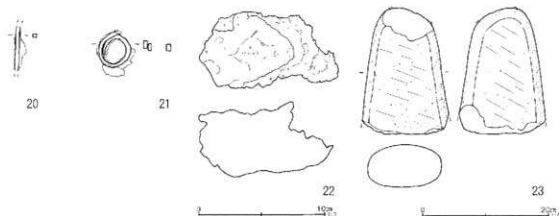
**概要** 遺存状況は良好で、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の約 1/2 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 9 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。壁周溝は東壁を除きほぼ全周する。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。南西隅角に地床炉が検出された。規模は東西軸 0.38 m、南北軸 0.32 m、深さ 0.05 m、断面皿状、底面のローム地山が被熱で赤褐色に変化している。本跡発掘時のピットは P01～03 の 3 基で、P01 は南東隅角に位置し、覆土に焼土を含み、土師器小型甕が出土している。P02 は覆土に灰白色粘土塊と焼土塊を含む。掘方ピットはカマド前の 2 基で、いずれも覆土に灰白色粘土塊を含む。カマド前で重複している P02・05・06 は箱形の大形ピットである P06 が最も古い。本跡西側に深さ 3～7 cm の浅い掘方が広範囲に確認された。また、カマドの壁外にも深さ 10～20 cm の掘方が確認された。遺物はカマド内と南東隅角の P01 に集中がみられる。

**遺物 (第 133・134 図、第 44 表)** 土師器杯、須恵器杯、土師器高台杯、須恵器高台杯、須恵器高台碗、須恵器皿、須恵器長頸瓶、土師器羽釜、土師器甕、土師器台付甕、鉄製品、石製品が出土した。1 は土師器杯で体部から斜め上方に立ちあがる。2・3 は杯というには量が多いことから鉢と考えた。4



第133図 第45号竪穴建物跡出土遺物1

は須恵器埴である。5・6は須恵器坏である。底部が糸切り後無調整である。7～9は須恵器高台埴である。9の底部外面には墨書がある。10は土師器高台坏である。11は土師器坏である。12・13は須恵器皿である。14は須恵器長頸瓶の口縁部である。末野産である。15は土師器羽釜である。16・17は土師器甕である。16は口縁から胴部で、「コ」の字裏である。18・19は土師器台付甕である。18は口縁



第 134 図 第 45 号竪穴建物跡出土遺物 2

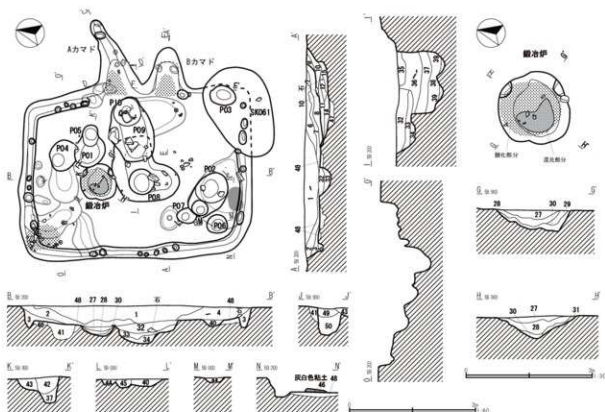
第 44 表 第 45 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 環	(12.4)	(3.4)	-	ABDM	褐色	良好	口縁部片	内面鉄分付着
2	土師器 鉢	(21.0)	(4.8)	-	ABDM	こぶい焼	良好	口縁部片	体部へう削り
3	土師器 鉢	-	(5.7)	(12.4)	ABD	褐色	良好	鉢一底部片	体部・底部へう削り
4	須恵器 埴	(16.8)	(4.8)	-	ABDM	黄灰	良好	2%	未野査
5	須恵器 環	-	(1.4)	(6.0)	ABLM	灰黄	不良	底部片	未野査 糸切のみ
6	須恵器 埴	-	(1.4)	(7.0)	ABDM	こぶい黄焼	不良	底部片	未野査 糸切のみ
7	須恵器 高台皿	(14.0)	5.9	(6.5)	ABLM	緑灰	良好	2%	未野査
8	須恵器 高台埴	-	(3.7)	(6.2)	ABLM	灰	良好	底部片	未野査 糸切のみ
9	須恵器 高台埴	-	(2.4)	(7.4)	ABDM	灰	良好	底部片	未野査 糸切のみ 底部外面着「コ」
10	土師器 高台埴	-	(2.4)	(6.0)	ABD	こぶい黄焼	不良	底部片	未野査 糸切のみ
11	土師器 環	-	(1.4)	(5.0)	こぶい焼	不良	不良	底部片	未野査 糸切のみ
12	須恵器 皿	(13.3)	(1.4)	-	ABDM	緑灰黄	良好	3%	未野査
13	須恵器 皿	-	(6.8)	(4.8)	ABDM	灰オリーブ	良好	底部片	未野査 糸切のみ
14	須恵器 長頸瓶	(24.8)	(4.4)	-	ABDM	灰	良好	口縁部片	未野査
15	土師器 羽蓋	-	(11.4)	-	ABDM	こぶい赤焼	良好	胴部片	外面下部縦位へう削り 非口ク口成形
16	土師器 壺	(18.8)	(16.4)	-	AB	赤焼	良好	口縁一胴部片	外面上部縦位へう削り 中部縦位へう削り
17	土師器 壺	-	(12.4)	-	AB	赤焼	良好	胴部片	外面上部縦位へう削り 下部縦位へう削り
18	土師器 台付壺	12.6	16.5	8.2	AB	こぶい焼	普通	口縁一胴部片	外面上部縦位へう削り 中部縦位斜位へう削り 下部縦位へう削り
19	土師器 台付壺	(11.4)	(15.4)	-	ABM	褐色	良好	口縁一胴部片	外面上部縦位へう削り 中部縦位へう削り 下部縦位へう削り
20	鉄製品 釘	長さ(3.5)cm 幅0.3cm 厚さ0.3cm 重さ1.7g							
21	鉄製品 口金	長さ2.8cm 幅2.5cm 厚さ0.8cm 重さ7.0g							
22	埴形埴	長さ8.1cm 幅10.9cm 厚さ5.5cm 重さ325.9g							
23	石製品 砥石	長さ(20.4)cm 幅(13.9)cm 厚さ7.0cm 重さ2666.9g							石付肉緑岩 縦面22面

がひらくように立ちあがり、「コ」の字状裏に近い形である。20～22は鉄製品である。20は釘で、21は環状の口金である。22は埴形埴である。23は石製品の砥石である。閃緑岩製の精肉礪を利用し、被熱している。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

特徴 本跡はカマドと地床炉が併存することから紡織生産に関わる工房跡とみられる。



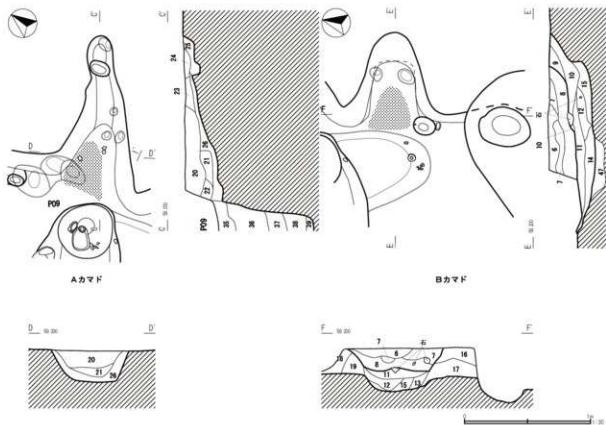
1346 主要説明

1. 107B/3 暗褐色土 しまり弱 1.粘多層含 堆土較少層含 灰化粘多層含
2. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~30mm)少層含 1.粘層含
3. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 1.粘多層含 灰化粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含
4. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含 1.粘多層含

5. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~30mm)少層含 堆土B(φ10~30mm)少層含
6. 107B/1 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 堆土較多層含
7. 107B/3 暗褐色土 しまり弱 1.粘少層含 灰化粘少層含 1.粘(φ10~20mm)少層含
8. 107B/3 2.灰黄褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘多層含 1.粘多層含
9. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘少層含 白色粘少層含 1.粘多層含
10. 107B/4 暗褐色土 しまり弱
11. 1.粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含 堆土較少層含 灰化粘少層含
12. 1.07B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘少層含 堆土B(φ10~30mm)少層含
13. 107B/4 褐色土 粘性強 しまり弱 灰色粘土
14. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 1.粘多層含 1.灰化粘土
15. 7.07B/3 暗褐色土 しまり弱 堆土較多層含 1.粘多層含
16. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~20mm)少層含 1.粘多層含 堆土較多層含
17. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 白色粘多層含 1.粘(φ20~30mm)多層含 (PVI) 積層
18. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含 堆土B(φ10~30mm)少層含
19. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘少層含 堆土較多層含
20. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 灰化粘多層含 1.粘多層含 堆土較多層含
21. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 灰化粘少層含 堆土較多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含
22. 107B/2 灰黄褐色粘質土 粘性強 しまり弱
23. 1.粘多層含 1.粘多層含 灰化粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含
24. 107B/3 暗褐色土 しまり弱 1.粘多層含 堆土B少層含 灰化粘少層含
25. 107B/6 赤褐色土 粘性強 しまり弱 堆土較多層含 1.粘少層含
26. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 白色粘多層含 堆土較少層含
27. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 (PVI) 積層
28. 2.07B/1 暗赤褐色土 しまり弱 堆土B-灰化粘-砂層少層含
29. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 灰化粘多層含 砂層-堆土少層含
30. 107B/3 暗褐色土 しまり弱 堆土B-灰化粘多層含 砂層少層含
31. 10B/3 暗赤褐色土 しまり弱 堆土B-灰化粘多層含 砂層少層含
32. 10B/2 灰赤褐色土 しまり弱 堆土B多層含
33. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 堆土較多層含 1.粘多層含 灰化粘多層含
34. 107B/3 2.灰黄褐色土 しまり弱 1.粘多層含 灰化粘多層含 堆土較多層含
35. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 1.粘(φ10~30mm)少層含 堆土較多層含 灰化粘多層含
36. 107B/3 暗褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~40mm)少層含 堆土較多層含 1.粘少層含 灰化粘多層含
37. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~30mm)多層含 堆土較多層含 1.粘多層含 堆土B(φ30~50mm)多層含-砂層多層含 灰化粘多層含-一度灰化して心層
38. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 1.粘多層含 灰化粘少層含
39. 107B/6 褐色土 しまり弱
40. 1.粘多層含 灰化粘多層含 堆土較多層含 1.粘(φ40~70mm)多層含 砂層多層含
41. 107B/4 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 灰化粘多層含 堆土較少層含
42. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘多層含 堆土B(φ10~30mm)少層含
43. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘少層含 1.粘多層含
44. 107B/4 褐色土 粘性強 しまり弱 灰色粘多層含 1.粘(φ20~50mm)多層含
45. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 灰化粘少層含 1.粘(φ10~40mm)少層含 堆土較少層含
46. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘少層含 1.粘少層含
47. 107B/2 暗褐色土 しまり弱 1.粘(φ10~30mm)多層含 堆土B少層含
48. 107B/3 2.灰黄褐色土 しまり弱 砂層含 1.粘(φ10~30mm)多層含 堆土B-灰化粘少層含
49. 107B/4 褐色土 しまり弱 堆土較多層含 灰化粘少層含 1.粘多層含 白色粘多層含
50. 107B/6 褐色土 しまり弱 1.粘多層含 堆土B-灰化粘多層含

第 135 図 第 46 号竪穴建物跡 1





第136図 第46号竪穴建物跡2

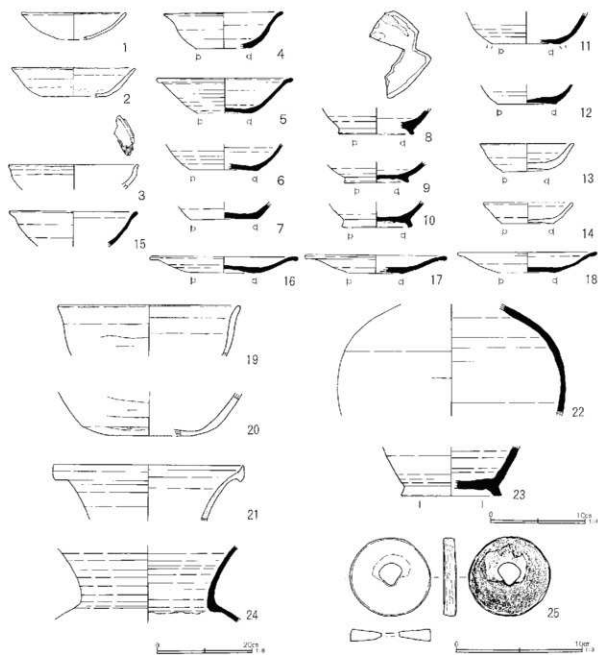
第46号竪穴建物跡（第135・136図）

位置 BD—AQ・ARグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南東隅角でSK061と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸3.69m×短軸2.67m、床面積7.57㎡、確認面からの壁高は0.24m、主軸方向はN-76°-E、形状タイプはI C2cである。

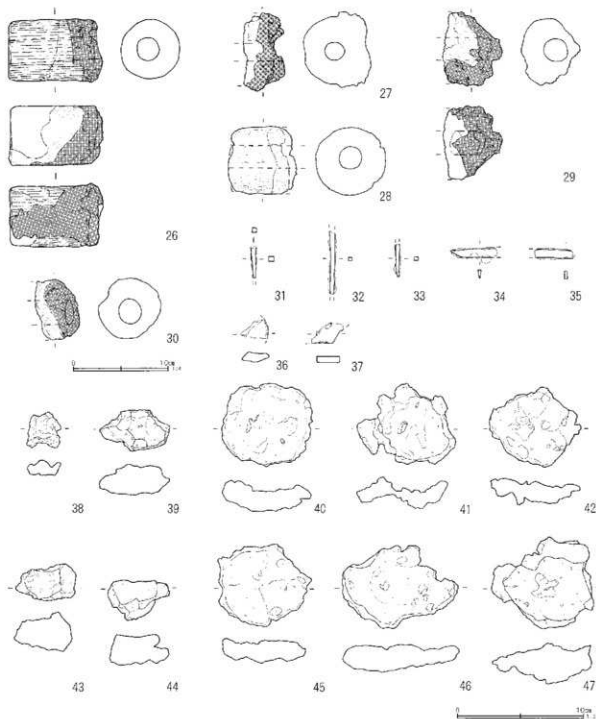
概要 平面形は改築前の東壁Bカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは廃絶時使用で新しい東壁Aカマド、改築前の古い東壁Bカマドの2基が確認された。東壁Aカマドは燃焼部の2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ6cm、被熱で火床面であるローム地山が赤褐色に変化している。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上からマンガン粒を多く含む灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上り、先端に小ピットを有する。煙道部の軸方向はN-43°-Eを指し、竪穴建物の主軸とは24°のズレがある。東壁BカマドはAカマドの南隣に付設され、燃焼部の2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ12cm、火床面には明瞭な被熱痕が確認された。壁周溝はほぼ全周する。床面は本跡中央部が緩やかに窪み、全体に凹凸がみられる。硬化した箇所が部分的にみられるが全体として硬化部分は明瞭ではない。本跡中央北寄りに地床炉が検出され、炉周辺から多量の鍛冶関連遺物が出土したことから鍛冶炉と考えられる。規模は東西軸0.56m、南北軸0.62m、深さ0.18m、断面皿状、底面のローム地山が被熱で赤褐色、部分的に還元で青灰色に変化している。また、炉上端に羽口の挿入痕とみられる窪みが2ヵ所確認された。本跡廃絶時の



第137図 第46号竪穴建物跡出土遺物1

ビットは34基で、大半は壁周溝内の小ビットである。カマド西側のP10は長方形で箱型の大形ビットである。底面から多量の鉄滓、鍛造剥片、羽口片が検出された。遺物は北西隅角、南東隅角、鍛冶炉、P02・08・10に集中がみられる。北西隅角は厚さ5cmの焼土粒とともに刀子などの鉄製品や羽口が出土、南東隅角には椀形滓の集中がみられる。遺物の総量は鉄滓なども含め整理収納箱で1箱分とポリ袋に3袋分である。

**遺物（第137・138図、第45表）** 土師器杯、須恵器杯、須恵器高台碗、ロクロ土師器杯、須恵器皿、土師器鉢、須恵器長頸瓶、土器転用紡錘車、羽口、鉄製品が出土した。1～3は土師器杯である。3は内面に油煙が付着している。4～7・12・15は須恵器杯、8～11は須恵器高台碗、13・14はロクロ土師器小皿である。底部が糸切り後無調整である。8は底部内面に鉄分が付着している。4・15は南比企産、



第138図 第46号竪穴建物跡出土遺物2

他は末野産である。16～18は須恵器皿である。末野産で底部が糸切り後無調整である。19・20は土師器鉢である。21は灰釉陶器長頸瓶である。22・23は須恵器長頸瓶である。23は末野産である。24は須恵器甕の頭から胴部である。25は土製の紡錘車である。須恵器環の底部を転用したものである。26～30は羽口である。26は完形で外面に棒状の工具痕が見られる。31～37は鉄製品である。31～33は釘、34・35は刀子、36・37は不明鉄製品で平面が菱形である。38～47は鍛冶の時の鉄滓で39～42・45～47は楕形滓である。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

特徴 本跡は鍛冶工房で、多量の鍛冶関連遺物が出土し、詳細な記録保存を残すことができた。

第45表 第46号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(110)	(29)	-	AB	橙	良好	口縁部片	
2	土師器 杯	(130)	(30)	(70)	ABD	橙	良好	20%	底部へう削り 体内内面僅存直 平底
3	土師器 杯	(138)	(26)	-	AB	明赤褐	良好	口縁～体部片	底部へう削り 内面直縁付着
4	須恵器 杯	(122)	(38)	(58)	ABCFGJN	こぶい實物	不良	30%	南比企産 糸切のみ 内外二次焼成の可能性
5	須恵器 杯	(142)	3.7	5.6	ABDEGJLMN	こぶい實物	不良	70%	木野産 糸切のみ
6	須恵器 杯	-	(28)	(70)	ABDGM	こぶい實物	不良	鉢～底部片	木野産 糸切のみ
7	須恵器 杯	-	(18)	(70)	ABGM	純白	良好	底部片	木野産 糸切のみ
8	須恵器 高台壇	-	(28)	(77)	AB	こぶい實物	普通	鉢～底部片	木野産 糸切のみ 内面鉄片付着
9	須恵器 高台壇	-	(22)	8.8	ADGJM	純灰	良好	底部片	木野産 糸切のみ
10	須恵器 高台壇	-	(27)	6.6	ABGJLMN	灰白	不良	底部片	木野産 糸切のみ
11	須恵器 高台壇	-	(34)	-	ABGLM	こぶい實物	不良	鉢～底部片	木野産 糸切のみ
12	須恵器 杯	-	(21)	(62)	ABDGM	こぶい實物	不良	鉢～底部片	木野産 糸切のみ 二次焼成の可能性
13	コクロ土師器 小皿	9.8	2.9	5.0	ABDM	こぶい實物	不良	90%	木野産 糸切のみ 上層への流れ込み 初期以降
14	コクロ土師器 小皿	9.4	2.2	5.4	ABD	橙	不良	90%	木野産 糸切のみ 上層への流れ込み 初期以降
15	須恵器 鉢	(134)	(37)	-	ABDFGM	灰白	普通	口縁～体部片	南比企産
16	須恵器 皿	(154)	1.7	(68)	ABGM	こぶい實物	不良	20%	木野産 糸切のみ
17	須恵器 皿	(148)	(19)	(59)	ABGLN	純灰	良好	30%	木野産 糸切のみ
18	須恵器 皿	(144)	(21)	(61)	ABLM	こぶい實物	良好	20%	木野産 糸切のみ
19	土師器 鉢	(190)	(54)	-	AB	橙	良好	口縁部片	鉢部へう削り 内面方角痕多数
20	土師器 鉢	-	(46)	-	ABH	こぶい實物	良好	鉢部～底部片	外面下部位へう削り
21	須恵器 長頸瓶	(200)	(59)	-	ABDGM	灰白	良好	口縁部片	K90断片高か 遠江地域清々谷家跡群内 内外直縁物 灰産物・灰産物多数
22	須恵器 長頸瓶	-	(118)	-	AB	純	良好	胴部片	自然剥付着
23	須恵器 長頸瓶	-	(52)	(104)	ABDGMH	純灰	良好	底部片	木野産
24	須恵器 壺	-	(164)	-	ABFGM	こぶい實物	普通	胴部片	南比企産
25	土師器用 鉢跡	長さ8.1cm 幅6.3cm 厚さ1.0cm 重さ379g 径6.2cm 孔径cm							須恵器の片断部を転用した鉢跡
26	引口	長さ9.9cm 幅6.7cm 重さ4170g 外径6.3cm 内径2.3cm							胎土ABGMN 色調：こぶい實物
27	引口	長さ43.0cm 幅8.3cm 重さ1618g 外径7.2cm 内径20cm							胎土ABMN 色調：純灰(燐元部分)
28	引口	長さ72cm 幅7.2cm 重さ2820g 外径7.2cm 内径24cm							胎土ABGMN 色調：橙
29	引口	長さ55.3cm 幅7.9cm 重さ1565g 外径cm 内径24cm							胎土ABM 色調：純灰
30	引口	長さ48cm 幅6.5cm 重さ1107g 外径6.6cm 内径26cm							胎土ABM 色調：こぶい實物
31	鉄製品 釘	長さ25cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm 重さ10g							
32	鉄製品 釘	長さ49cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm 重さ24g							
33	鉄製品 釘	長さ27cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm 重さ59g							
34	鉄製品 刀子	長さ33.7cm 幅(06～08)cm 厚さ0.2cm 重さ22g							
35	鉄製品 刀子	長さ32cm 幅(08)cm 厚さ0.2cm 重さ3.6g							
36	鉄製品 不明	長さ116cm 幅2.2cm 厚さ0.8cm 重さ59g							
37	鉄製品 不明	長さ116cm 幅2.5cm 厚さ0.5cm 重さ57g							
38	鉄滓	長さ2.8cm 幅2.7cm 厚さ1.2cm 重さ90g							
39	銅形滓	長さ3.3cm 幅5.5cm 厚さ2.5cm 重さ59.3g							
40	銅形滓	長さ6.5cm 幅7.7cm 厚さ2.4cm 重さ146.8g							
41	銅形滓	長さ6.3cm 幅7.7cm 厚さ2.5cm 重さ160.0g							
42	銅形滓	長さ6.3cm 幅7.2cm 厚さ2.0cm 重さ68.9g							
43	鉄滓	長さ4.7cm 幅2.9cm 厚さ3.1cm 重さ49.9g							
44	鉄滓	長さ3.2cm 幅4.8cm 厚さ2.4cm 重さ46.2g							
45	銅形滓	長さ6.5cm 幅7.4cm 厚さ1.9cm 重さ121.3g							
46	銅形滓	長さ6.5cm 幅9.2cm 厚さ2.2cm 重さ144.6g							
47	銅形滓	長さ7.2cm 幅8.0cm 厚さ3.2cm 重さ180.8g							

## SI-46 鉄関連遺物

### 1. 概要

本跡では、鍛冶に関連する遺物が数多く出土している。この内、点上げた遺物は761点で重量は6151.81gである。これらの鍛冶関連遺物を鍛冶滓・椀形鍛冶滓・羽口周辺滓・羽口・鉄塊系遺物・製品・焼成粘土塊・礫に分類して、重量計測及び磁着の有無について調べた。

また、これとは別に竪穴建物跡を50cm方眼に区切り、土壌を取り上げた。取り上げた土壌は移植ゴテで二・三杯を洗面器に移し、水を入れ攪拌し、上澄みを捨てる作業を15回ほど繰り返して底に残ったものを乾燥させ、篩に掛け鉄関連遺物を抽出した。篩は便宜的に5mm、3mm、1mm目で選別した。よって径1mm以下の遺物については、今回対象外となる。抽出にあたっては磁石を用い磁着するものを抽出したのち、遺漏したものや磁着しないものを肉眼で抽出し、グリッド毎に電子秤で重量を計測した。その結果、抽出できた鉄関連遺物は鍛造刮片945.90g、粒状滓110.71g、鍛冶滓4868.74g、製品27.42gで、合計重量は5952.77gである。

以下、点上げ遺物と土壌より抽出したものにそれぞれ特徴について述べる。

### 2. 点上げ遺物について（第139～141図）

#### （1）遺物の概要

前述のように、鍛冶に関する遺物で点上げたものは761点である。総計で見ると点数・重量のどちらでも、80%以上のものが磁着する。種別ではまず、鉄塊系遺物と製品が100%磁着する。次に磁着するものが多かったのは、鍛冶滓・椀形鍛冶滓で、点数・重量共に85～90%前後の比率である。

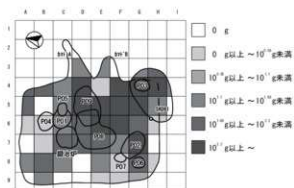
羽口周辺滓としたものは、磁着するものが75%程で、鍛冶滓・椀形鍛冶滓よりやや少ない。これは、二者に比べ羽口周辺に位置するため、温度が十分に上昇しガス化したものが多かったためであろう。羽口は他のものと比べ出土点数と重量で磁着の有無の比率が若干異なる。これは、粘土で作られた羽口に滓が付着することで磁着すると考えられ、磁着するものは滓が付着した分だけ、元の羽口よりも重くなったためと考えられる。磁着するもの35点、磁着しないもの30点でありその差がないことから、炉内に位置する羽口先端部と炉外に位置する部分との両者が破壊されたものと考えられる。

最後に磁着する比率が低いものとして、焼成粘土・礫があげられる。焼成粘土の表面を肉眼観察したが、滓は付着していないのに、磁着するものが2点ある。これは内部に滓を包含しているか、元々の粘土に若干の鉄分が含まれていたと思われる。礫はいずれも小破片で最大でも40.28gである。石材の多くはチャートが破碎されたもので、表面に鉄滓状のものが付着したのも認められる。

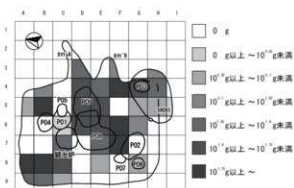
次に種別毎の最大・最小・平均重量をみてみると、鍛冶滓・椀形鍛冶滓・羽口周辺滓・羽口・鉄塊系遺物・礫で最大のものと最小のものとの重量比は、100倍を超え、焼成粘土で約80倍、製品で約11倍である。製品を除き、個体の重量に大きな差がみられる。多くの個体が磁着することから、鍛冶滓・椀形鍛冶滓での個体差の原因は、鍛冶行為終了後、炉内に残った鉄滓を打ち割り鉄を回収した結果、様々な大きさになったと考えられる。

今回鉄塊系遺物として分類したものは、表面に鉄が錆化したことに由来する膨らみやひび割れが見られるものを言う。粒状のものや板状・棒状のものがある。また、粒状のもの同士が複数結合したものや、粒状のものや板状・棒状のものが結合したものも認められた。板状・棒状のものは、劣化や破損した鉄

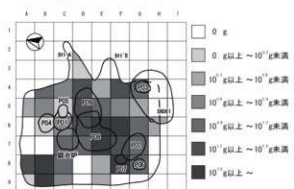
1. 鍛冶滓・椀形鍛冶滓・羽口周辺滓分布図（点上げ遺物）



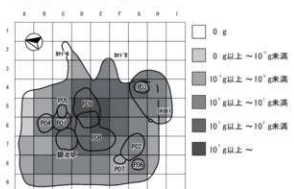
2. 羽口分布図（点上げ遺物）



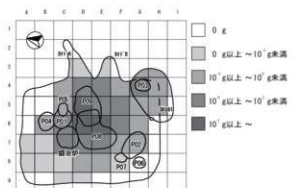
3. 鉄塊系遺物分布図（点上げ遺物）



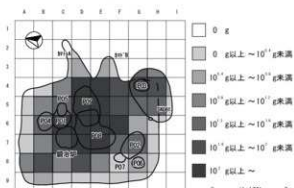
4. 鍛造剥片分布図（土壌より抽出）



5. 粒状滓分布図（土壌より抽出）



6. 鍛冶滓分布図（土壌より抽出）



第139図 S146 鉄関連遺物グリッド毎出土量

0 (1:100) 2m

製品を再利用するために集められたようである。重量の差は、本遺跡を含み周辺の集落から様々な種類の製品が集められた結果であろう。

## (2) 分布について

1が鍛冶滓・椀形鍛冶滓・羽口周辺滓を鉄滓としてまとめた。2が羽口、3が鉄塊系遺物の建物内での出土重量をグリッド毎に表示したものである。羽口は出土個体数が65点で、鉄滓487点、鉄塊系遺物140点に比べ出土数が少ないことや、先に見たように個体毎の重量の差が大きいことから、グリッドにより、その重量に差が出やすい。その中で、建物跡北西隅付近のA-8で140.33g、B-8で144.30gと高い出土重量を誇る。この地点は鍛冶炉の北西側にあたり、同様に鉄滓がA-8で15.61g、B-8で75.02gとやや高く、鉄塊系遺物はA-8で17.83g、B-8で32.69gである。鍛冶炉の周辺で

あることから注目される。

その一方で、鍛冶炉の北側で同地点に隣接するA-6・7、B-6・7の在り方は対照的である。羽口は出土せず、鉄塊系遺物はB-6で0.82gのみ出土し、他のグリッドでは出土していない。鉄滓はA-7では出土せず、A-6で0.64g、B-6で1.42g、B-7で3.46g出土している。同様にD-8でも出土していない。これらの鍛冶炉周辺で遺物の出土量が極端に違うのは、実際に作業を行う段階での人員の配置と関連していると考えられる。人が作業する場所は極力邪魔なものを排し、良好な作業空間を確保する必要があり、遺物の出土が希薄な部分を中心に実際の作業を行っていたものと考えられる。

鍛冶炉以外での遺物の分布状況を見ると、鉄滓は建物跡南東側のE~G-4~6で出土量が多く、同様に建物跡南東隅にかけても出土量が多い。羽口もF-5を除き、同様の傾向である。鉄塊系遺物は鉄滓の分布と重なりE-6で54.97g、F-6で最大量の80.13gであった。さらにその西側のE-7で出土量が多く、鉄滓と若干違う分布であった。後述する土壌より抽出した遺物の分布状況ともやや違う分布であった。鍛冶を行った際生じる鉄滓類と材料となる鉄塊系遺物では、その遺物として性格が大いに異なるため、建物内空間での保管場所も異なってしかるべきであるが、近似している。

### 3. 土壌より抽出 (第139~141図)

ここで対象とするのは鍛造剥片・粒状滓・鍛冶滓である。前述の様に50cmグリッド毎に土壌を取り上げ、水洗抽出を行った。A-4・C-2・H-9・I-6は取り上げを行っていないため、データは存在しない。

#### (1) 鍛造剥片

①特徴 前述のように5mm・3mm・1mm目で篩掛けを行った結果、以下の2種類の鍛造剥片が認められた。

I類：表面の色調は赤錆色を呈する。表面に気泡や凹凸が見られ、断面は厚い。

II類：表面の色調は黒色でにぶい光沢をもつ。表面は平坦で断面は薄い。

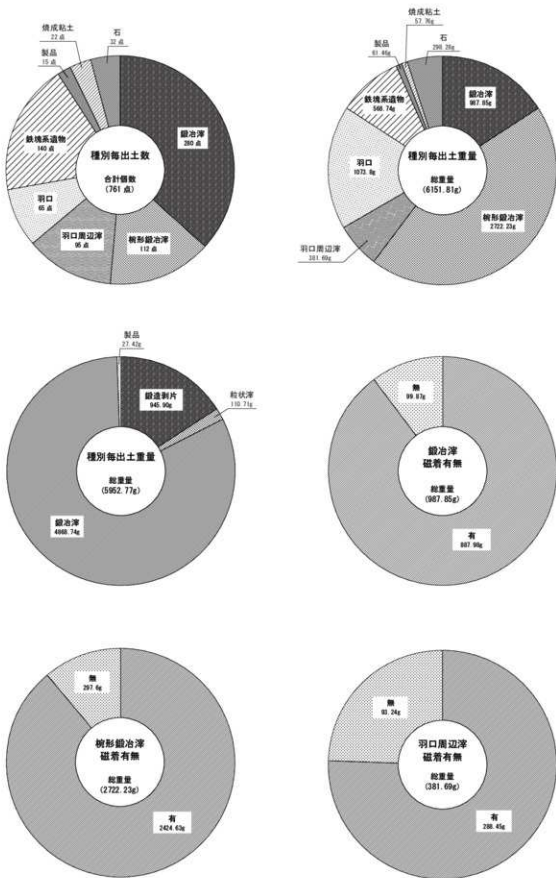
I類は破断面がギザギザしたものが多く、一部のもので表面が白色化したものも認められる。II類は薄いためか反り返ったものも認められた。5mmではI類が、3mmではI類とII類の両者が、1mmでII類を主体とし、破片化したI類も認められた。

②分布について 鍛造剥片は鍛冶滓同様に抽出したグリッドすべてで確認することができた。最大量はD-5の190.10gで最少量はA-5の0.04gである。建物跡中心部のE・F-5~7で高い出土重量を誇り、建物壁際に向かうにしたがい、出土量が減る。鍛冶炉の東・南・西側を囲うように出土している。

#### (2) 粒状滓

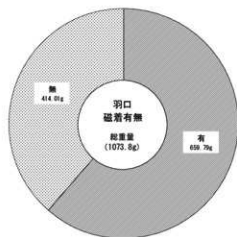
①特徴 粒状滓は大きさにかかわらず球形を呈するものを基本とする。このほかに長球状や、オタマジャクシ状を呈するものが認められる。また、二つの粒状滓が結合したのも認められる。表面は鍛造剥片と同様で、凹凸が認められるものと平坦のものがあり、相対的に平坦のものは粒径が小さい。両者の多くのもので、表面に細かな気泡の跡が認められる。また、中心部に大きな気泡があり内部が空洞化したものも認められる。凹凸が認められるものは、鍛造剥片と同様で、赤錆色を呈し、一部白色化したものもある。平坦のものの一部は表面に気泡が認められず、にぶい光沢の色調でメタル質のものが見られる。

②分布について 粒状滓は建物跡中央のD・E-5・6を中心として、同心円状に分布し、壁際に向かい出土量が減る。最大量はD-5で24.45g、抽出できた最少量はA-8で0.02gである。壁際付近のA-5・



第 140 図 S146 鉄関連遺物グラフ (1)





第141図 S146 鉄関連遺物グラフ (2)

6、B-4・5・9、D-2、E-9、F-3・9、G-8・9、H-6～8、I-5では出土していない。

### (3) 鍛冶滓

①特徴 色調は錆色を呈し、表面は凹凸があるが丸みを持つもの以外に轉状になっているものも認められる。大きさは様々で、磁力を持つものが殆どである。磁着しないものは、大きさに対して軽い。

②分布について 鍛造剥片・粒状滓と同様に建物跡中央のD-E-5・6を中心として同心円状に広がり、壁際に向かうにつれ、出土量が減る。ただし、東側のカマド付近と点上げ遺物の出土重量が多かったB

-8でも53.81gと高い出土量である。最大量はD-5で1093.45g、最小量はA-6で0.09gである。

### (4) 製品

抽出できたのは4点でそれぞれ、A-8で8.94g、B-8で4.25g、D-5で5.73g、E-6で5.58g、H-4で2.92gの合計27.42gが出土している。B-8は棒状製品で、断面形は長方形を呈し、最大幅が5mm程である。鉄鏃の軸には若干細く、全形は不明である。その他のものは、板状の製品の一部と思われるが、破断しており、形状は分からなかった。

鉄関連遺物種別毎集計表

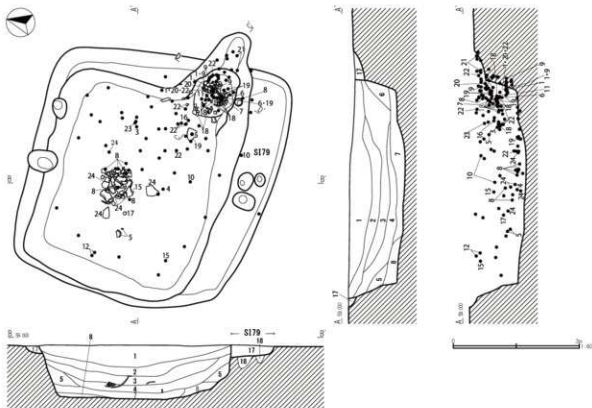
		鍛冶滓				椀形鍛冶滓				羽口周辺滓			
		出土数		出土重量		出土数		出土重量		出土数		出土重量	
		点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率
磁着	有	253	90.36%	887.98	89.89%	95	84.82%	2424.63	89.07%	73	76.84%	288.45	75.57%
	無	27	9.64%	99.87	10.11%	17	15.18%	297.6	10.93%	22	23.16%	93.24	24.43%
	合計	280	100.00%	987.85	100.00%	112	100.00%	2722.23	100.00%	95	100.00%	381.69	100.00%
磁着		羽口				鉄塊系遺物				製品			
		出土数		出土重量		出土数		出土重量		出土数		出土重量	
		点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率
有	35	53.85%	659.79	61.44%	140	100.00%	568.74	100.00%	15	100.00%	61.46	100.00%	
無	30	46.15%	414.01	38.56%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	
合計	65	100.00%	1073.8	100.00%	140	100.00%	568.74	100.00%	15	100.00%	61.46	100.00%	
磁着		焼成粘土				石				総計			
		出土数		出土重量		出土数		出土重量		出土数		出土重量	
		点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率	点数	比率	重量(g)	比率
有	2	9.09%	8.13	14.08%	4	12.50%	39.11	13.11%	617	81.08%	4938.29	80.27%	
無	20	90.91%	49.63	85.92%	28	87.50%	259.17	86.89%	144	18.92%	1213.52	19.73%	
合計	22	100.00%	57.76	100.00%	32	100.00%	298.28	100.00%	761	100.00%	6151.81	100.00%	

鉄関連遺物種別毎重量 (最大・最少・平均)

	鍛冶滓	椀形鍛冶滓	羽口周辺滓	羽口	鉄塊系遺物	製品	焼成粘土	礫
最大 (g)	32.39	180.63	27.09	161.71	33.17	9.64	8.75	40.28
最少 (g)	0.04	1.35	0.07	0.10	0.31	0.88	0.11	0.28
平均 (g)	3.53	24.31	4.02	16.52	4.06	4.10	2.63	9.32

鉄関連遺物種別毎集計表 (土壇抽出)

	鍛造剥片	粒状滓	鍛冶滓	製品	合計
重量 (g)	945.90	110.71	4868.74	27.42	5952.77

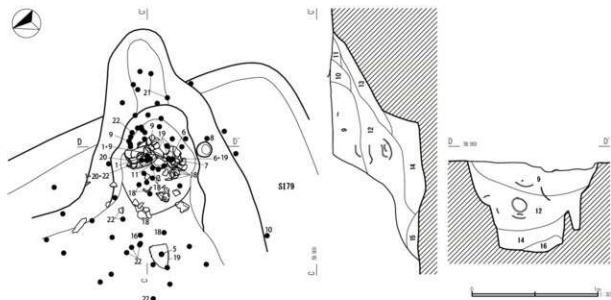


S147-79 土層説明

1. 107R2/3 黒褐色土、しまり強、I 砂多量含、同化砂少量含、焼土砂少量含
2. 107R3 黒褐色土、しまり弱、I 砂多量含、同化砂多量含、焼土砂少量含  
LB(φ10~30mm)少量含
3. 107R2/4 暗褐色土、しまり弱、I 砂少量含、同化砂少量含、焼土砂少量含
4. 107R2/4 暗褐色土、しまり弱、I 砂少量含、同化砂少量含
5. 107R4 褐色土、しまり弱、I 砂多量含、焼土砂少量含
6. 107R4 褐色土、しまり弱、I 砂多量含、焼土砂少量含、同化砂少量含  
LB(φ10~30mm)少量含
7. 107R4/4 褐色土、しまり弱、I 砂少量含、同化砂少量含
8. 107R4/6 褐色土、しまり弱、I 砂少量含、同化砂少量含、LB(φ10~30mm)少量含
9. 107R4/4 褐色土、しまり弱、I 砂少量含、焼土砂少量含、同化砂多量含  
同化物(φ5~10mm)少量含

10. T.57R4/4 褐色土、しまり弱、焼土砂多量含
11. 107R4/6 褐色土、しまり弱、焼土砂多量含
12. 107R4/3 以心・両褐色粘質土、しまり強、I 砂多量含、焼土砂少量含  
LB(φ10~50mm)少量含、同化砂少量含
13. T.57R4/6 褐色土、しまり弱、焼土砂多量含、同化砂少量含、I 砂少量含  
焼土B(φ20~50mm)少量含
14. T.57R4/6 褐色土、しまり弱、LB(φ20~30mm)多量含、同化砂少量含  
焼土B(φ20~50mm)多量含、焼土砂少量含
15. 107R4/4 褐色土、しまり弱、LB(φ20~50mm)少量含、焼土砂少量含
16. S17R4/6 赤褐色土、しまり弱、焼土砂多量含、I 砂多量含
17. 107R4/4 褐色土、しまり弱、I 砂少量含、LB(φ10~20mm)少量含、同化砂少量含  
焼土砂少量含
18. 107R4/6 褐色土、粘性質、しまり強、LB(φ2~5mm)多量含、焼土砂少量含

第142図 第47・79号竪穴建物跡



第143図 第47号竪穴建物跡

#### 第 47 号竪穴建物跡 (第 142・143 図)

**位置** BB-AR グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 第 79 号竪穴建物跡と重複し、本跡のほうが新しい。

**規模** 長軸 3.38 m×短軸 2.86 m、床面積 6.56 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.83 m、主軸方向は N-89°-W、形状タイプは II D2e である。

**概要** 平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは南東隅角に付設され、燃焼部の大半が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 6 cm、火床面に所々被熱痕みられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上からにぶい黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。火床面から約 70° の勾配で 30 cm 上がったところから、煙道部が約 30° の緩やかな勾配で立ち上る。壁から煙道部先端まで 1.30 m を測る。壁周溝及びピットは確認されなかった。床面は本跡中央部が緩やかに窪み、全体に軟弱な面となっている。掘方は確認されなかった。遺物はカマド内と本跡中央部に集中がみられる。中央部で須恵器大甕が正位で出土している。遺物の総量は整理収納箱で 1 箱分である。

**遺物 (第 144・145 図、第 46 表)** 土師器環、須恵器環、須恵器蓋、土師器台付甕、土師器甕、土師器鉢、鉄製品が出土した。1～12 は土師器環である。1～3 は内面に暗文が施されている。1 は体部に放射状で底部に螺旋状の暗文が、2・3 は放射状の上に口縁部に螺旋状の暗文が施されている。1・3 は内外面に赤彩が施されている。3・4 はわずかに外反しつつ立ちあがる。4 は内外面に黒色処理が施されている。5・7・9・11 は口縁が直立しつつ、立ちあがる。丸底である。10 は腰をもって内湾する。平底風である。8 は内湾して立ちあがる。丸底である。12 は外反し、内面に指頭圧痕がみられ、丸底である。13～15 は須恵器環である。13・14 は南比企産で、底部が糸切り後周辺へラ削りである。15 は末野産で、底部が糸切り後無調整である。16 は末野産で、須恵器蓋である。17 は台付甕の接合部である。18～21 は土師器甕である。いずれも「く」の字状甕である。20・21 は口縁部を撫でており、わずかに膨らむ。22 は土師器鉢である。頸部が短く、口縁がわずかに外反する。粘土紐を積み上げており外面が縦方向にへら削りをしている。23 は鉄製品の釘である。24 は末野産の須恵器甕である。器高が約 50.0 cm、最大径約 43.0 cm とかなり大型である。

**時期** 8 世紀後半、宮下遺跡 II 期

**特徴** 須恵器大甕が正位で出土していることから、本跡は容量の大きな甕を必要とする工房であったとみられ、他の竪穴建物跡より壁高の数値が大きいのも工房と関連があると考ええる。

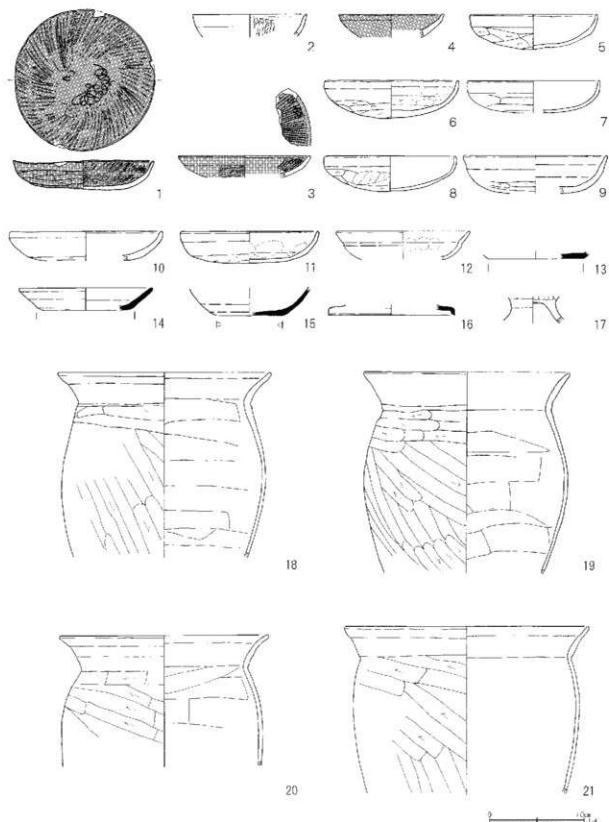
#### 第 79 号竪穴建物跡 (第 142 図)

**位置** BB-AR グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 第 47 号竪穴建物跡と容れ子状に重複し、本跡のほうが古い。

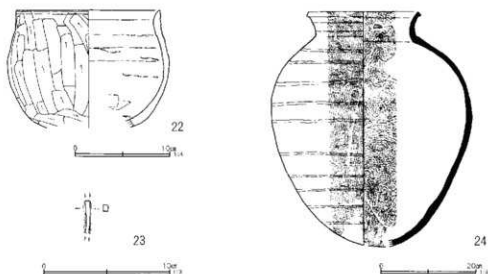
**規模** 全容は不詳であるが、長軸 4.00 m×短軸 3.81 m、床面積 13.33 m<sup>2</sup>、遺構確認面からの深さは 0.18 m、主軸方向は N-89°-W、形状タイプは O 3e である。

**概要** 本跡の大半が第 47 号竪穴建物跡に壊され、遺存状況はすこぶる不良である。平面形は東西を指す主軸が長軸となる長方形である。覆土はローム粒及びロームブロックを主体とする褐色土で、炭化粒



第144図 第47号竪穴建物跡出土遺物1

を少量、焼土粒を微量に混入するが、堆積状況などは不詳である。カマド及び壁周溝は確認されなかった。南壁の立ち上がりは垂直気味であるが、他の壁は緩やかな勾配で立ち上がる。床面は全体に中央へ



第 145 図 第 47 号竪穴建物跡出土遺物 2

第 46 表 第 47 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	14.9	3.1	-	AB	明赤褐	良好	90%	体部・底部へう割り 内面放射状織文 螺旋状織文 内外赤彩
2	土師器 坏	(11.9)	(2.4)	-	AB1	こぶい織	良好	口縁部片	内面放射状織文 螺旋状織文
3	土師器 坏	(13.8)	(2.3)	-	ABCM	明赤褐	良好	口縁～体部片	内面放射状織文 螺旋状織文 内外赤彩
4	土師器 坏	(11.0)	(2.5)	-	AB1	青褐	良好	口縁部片	内外黒色処理
5	土師器 坏	(13.2)	3.7	-	AB1	こぶい赤褐	良好	90%	体部へう割り 丸底
6	土師器 坏	13.9	4.6	-	AB1JK	黄	良好	90%	体部・底部へう割り 内面垂線圧痕
7	土師器 坏	(13.8)	3.4	-	AB1	黄	良好	90%	体部・底部へう割り 丸底
8	土師器 坏	(13.7)	3.7	-	AB1J	こぶい織	良好	40%	底部へう割り 丸底
9	土師器 坏	(15.0)	(4.4)	-	AB1K	こぶい織	良好	40%	体部・底部へう割り 丸底
10	土師器 坏	(16.0)	(3.1)	-	AB1JM	黄	良好	90%	底部へう割り 平底蓋
11	土師器 坏	14.4	3.4	-	AB1JK	黄	良好	90%	底部へう割り 内面垂線圧痕 丸底
12	土師器 坏	(14.0)	(3.4)	-	AB1	黄	良好	90%	体部ナゲ 内面垂線圧痕 平底
13	須恵器 坏	-	(9.8)	(19.4)	AB1M	灰白	普通	底部片	南北全度 糸切縁周辺へう割り
14	須恵器 坏	(14.0)	(2.4)	(8.8)	AB1M	灰黄	良好	90%	南北全度 糸切縁周辺へう割り
15	須恵器 坏	-	(3.9)	(7.9)	AB1M	こぶい織	不良	体～底部片	木野産 糸切のみ
16	須恵器 蓋	(13.2)	(1.1)	-	AB1M	灰白	普通	口縁部片	木野産
17	土師器 台付壺	-	(2.8)	-	AB1J	黄	良好	底部片	
18	土師器 壺	22.3	(19.8)	-	AB1J	こぶい赤褐	良好	口縁～胴部片	外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
19	土師器 壺	21.7	(21.4)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	90%	くの字に底着する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
20	土師器 壺	22.9	(14.4)	-	AB1M	明赤褐	良好	口縁～胴部片	くの字に底着する 外面上部縦位・横位へう割り
21	土師器 壺	(25.8)	(17.8)	-	AB1C1	明赤褐	良好	口縁～胴部片	くの字に底着する 外面上部横位へう割り 中部縦位へう割り
22	土師器 鉢	14.8	(12.4)	-	AB1J	明赤褐	良好	90%	外面上部横位ナゲ 中部縦位へう割り 下部横位へう割り 内面垂線ナゲ
23	鉄製品 釘	長さ 2.6cm	幅 0.4cm	厚さ 0.5cm	重さ 1.7g				
24	須恵器 壺	23.1	49.9	-	CG1M	灰	良好	100%	木野産 外面平行タテキ後力キ目 内面同心円状アケ真鍮

向かって下がり気味で、踏み固めによる硬化部分は確認できず、全体に軟弱な面となっている。廃絶時のピットは北壁際と南壁際に合計 5 基の小ピットが検出された。深さは 13 ~ 27cm である。遺物の出土状況に集中する箇所はみられない。総量はポリ小袋に 2 袋分である。

第47表 第79号竪穴建物跡出土文物観察表

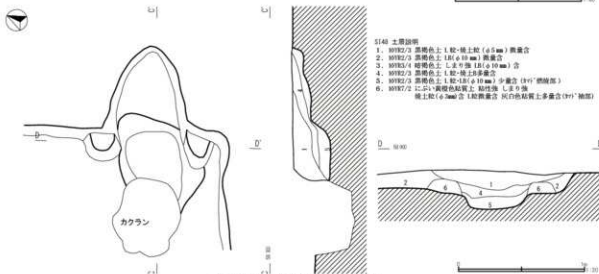
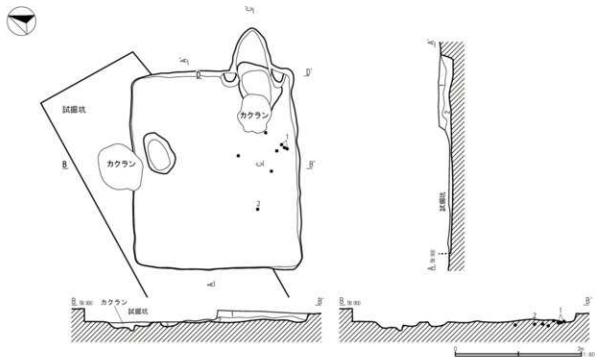
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器蓋	(14.8)	(0.9)	-	A8	灰白	不良	口縁部片	木野原

遺物(第146図、第47表) 1は末野産の須恵器蓋が出土した。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第146図 第79号竪穴建物跡出土遺物

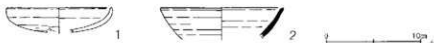


第147図 第48号竪穴建物跡

第48号竪穴建物跡(第147図)

位置 B0-AR グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無い。



第 148 図 第 48 号竪穴建物跡出土遺物

第 48 表 第 48 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(1.0)	(2.4)	-	AB1JK	黄	良好	75%	底部へ少附り丸底
2	須恵器 坏	(1.3)	(3.3)	-	AB1M	灰白	良好	口縁部片	

**規模** 長軸 3.17 m×短軸 2.65 m、床面積 7.55 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.20 m、主軸方向は N-67° - E、形状タイプは II B2b である。

**概要** 北西側が試掘時に削平され、カマド前や北壁が傾乱されており、遺存状況は悪い。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁南寄りに付設され、燃焼部の約 1/4 が壁外へ突出する。燃焼部の幅は 50cm、掘込みは床面から深さ 12cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖が遺存し、灰白色粘質土が構築材として使用されている。また、煙道部は火床面から 18cm 上がったところから緩やかな勾配で立ち上がる。壁周溝は無い。床面は凹凸がみられ、全体に軟弱な面となっている。本跡廃絶時のピットは北壁際の 1 基で、深さ 8cm の底面平坦な楕円形である。掘方は確認されなかった。遺物は南側にやや集中がみられる。遺物の総量はポリ中袋に 1 袋分である。

**遺物** (第 148 図、第 48 表) 土師器坏、須恵器坏が出土した。1 は土師器坏である。口縁部がやや直立しつつ立ちあがり、丸底である。2 は須恵器坏である。口縁から体部片である。

**時期** 8 世紀後半、宮下遺跡 II 期

#### 第 49 号竪穴建物跡 (第 149・150 図)

**位置** BG-AQ、BG-AR グリッドの台地平坦面に位置する。

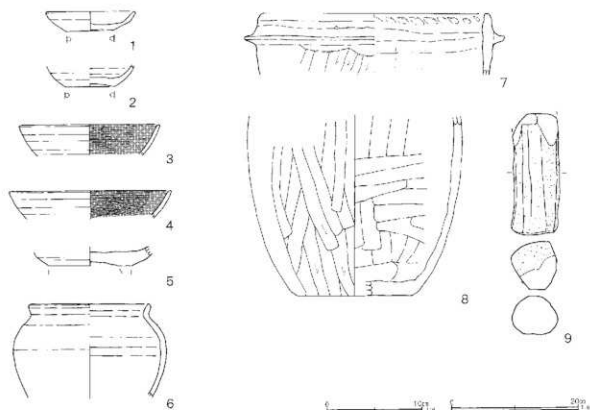
**重複** 南西隅角で P02 (BG-AR グリッド)、東壁で P01 (BG-AR グリッド)、北壁で P01 (BG-AQ グリッド) とそれぞれ重複し、いずれも本跡が古い。

**規模** 長軸 4.59 m×短軸 3.03 m、床面積 10.87 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.17 m、主軸方向は N-50° - E、形状タイプは I B3b である。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。本跡北側で炭化材や厚さ 5～12cm の焼土が確認された。いずれも床面直上に堆積する 3 層中からの出土で、炭化材は放射状に検出された。カマドは東壁南東隅角寄りに付設され、燃焼部の約 2/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 20cm である。被熱で火床面であるローム地山が赤褐色に変化しており、燃焼部内にも灰泥じりの焼土が厚く堆積している。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から灰黄褐色粘土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃焼部内で緑泥片岩の板石が出土し、出土状況から袖と天井に懸架していたとみられる。煙道部は上部が削平されており確認できなかった。東壁北端で壁外に 0.30 m 掘込んだ U 字形の張出しが確認された。張出しの底面レベルは床面と同一で、覆土には本跡西側と同じ炭化材と焼土が混入していた。壁周溝は検出されなかった。床







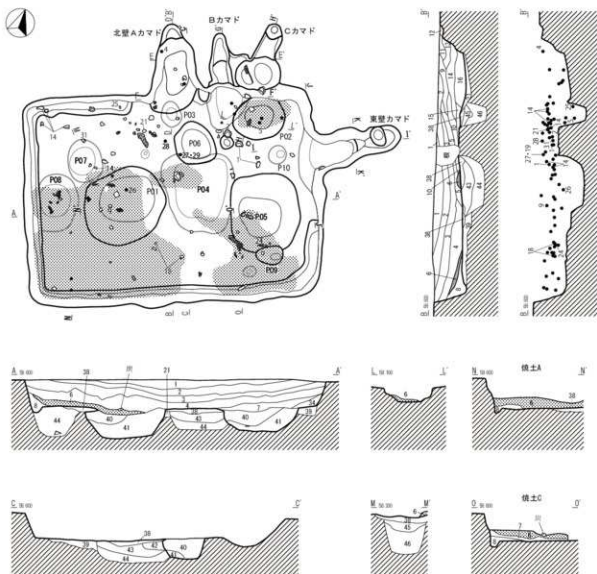
第151図 第49号竪穴建物跡出土遺物

第49表 第49号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	ロクロ土師器 小皿	9.2	2.1	5.9	AB1K	赤	不良	90%	糸切のみ
2	ロクロ土師器 小皿	-	(2.2)	5.2	AB1KM	こぶい焼	不良	口縁～体部片	糸切のみ
3	ロクロ土師器 坏	(14.6)	(3.2)	-	AB0JM	赤	不良	口縁部片	内面黒色処理
4	ロクロ土師器 坏	(17.0)	(2.9)	-	AB1LM	赤	不良	口縁部片	内面黒色処理
5	ロクロ土師器 高台壇	-	(2.8)	(8.9)	AB1KM	赤	不良	体部片	
6	土師質土器 土釜	(12.4)	(9.9)	-	AB0GH/LN	赤	不良	口縁～胴部片	酸化焙焼成 非ロクロ
7	土師質土器 羽釜	(23.9)	(6.5)	-	AB1N	灰青焼	良好	口縁部片	外面上部縦位へラ削り 酸化焙焼成 非ロクロ
8	土師質土器 羽釜	-	(18.0)	(12.0)	AB1JN	こぶい焼	良好	胴～底部片	外周中部縦位へラ削り 下部縦位へラ削り 非ロクロ
9	石製品 支脚	長さ19.40cm 幅(7.6)cm 厚さ7.7cm 重さ1039.0g							石材粘岩 焼熱で全体が割落 わずかに整形の痕跡がみられる

面は全体に緩やかな凹凸があり、所々硬化した部分を確認したが全体としては軟弱な面である。本跡発掘時のピットは4基で、P01は長方形で床面からの深さが52cm、箱形の掘込みである。自然埋没の様相で23層中より土師質土器長頭瓶5が出土した。南壁際のP02は灰白色粘土が充填されたピットである。本跡中央に位置するP03は覆土中に焼土を含み、底面に所々被熱痕がみられる。また、掘方は確認されなかった。遺物はカマド内と南壁際に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に3袋である。

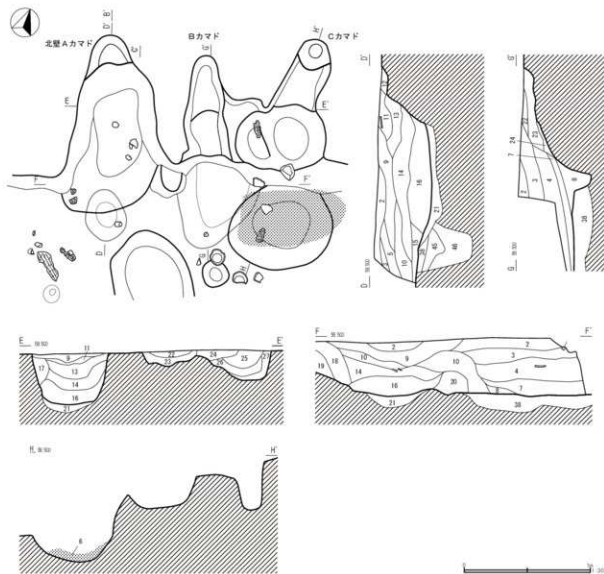
**遺物(第151図、第49表)** ロクロ土師器小皿、ロクロ土師器坏、ロクロ土師器高台壇、土師質土器土釜、土師質土器羽釜、石製支脚が出土した。1・2はロクロ土師器小皿、3・4は土師質土器坏である。1・2は体から口縁部にかけてわずかに「く」の字状に立ちあがる。底部が糸切り後無調整である。3・4は内面を黒色処理し・横方向に磨いている。5はロクロ土師器高台壇である。6は土師質土器土釜である。7・8は土師質土器羽釜である。口縁がほとんど内湾せず、直立しつつ立ちあがる。9は石製支脚



1/50 土層説明

1. 10R3/3 暗褐色土 粘性强 しまり強 1.0m 以上 粘土状軟弱多量
2. 10R3/2 暗褐色土 1.0m 以上 粘土状軟弱多量 1R(φ5~10mm) 少量 粘土状同化軟弱少量
3. 10R3/1 暗褐色土 1.0m 以上 1R(φ5~10mm) 少量 粘土状同化軟弱少量
4. 10R3/0 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ5~20mm/LB と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱少量
5. 10R3/3 暗褐色土 1.0m 以上
6. 10R3/2 暗褐色土 粘土状主体とし、同化軟弱少量 1R 少量
7. 10R3/4 暗褐色土 1R(φ2~10mm) 少量 同化物と粘土少量
8. 10R3/4 褐色土 1R(φ5~10mm) 少量 粘土少量
9. 10R3/4 褐色土 粘土状・粘土状同化軟弱少量
10. 10R3/4 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ10~20mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱多量
11. 10R3/4 褐色土 粘土 φ5~10mm 少量
12. 10R3/4 褐色土 粘土 φ5~10mm 少量
13. 10R3/3 暗褐色土 1R(φ5~10mm) 少量
14. 10R3/2 暗褐色土 粘性强 しまり強 φ5~20mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱多量
15. 7. 10R3/2 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ10~20mm/LB と 1.0m 以上
16. 10R3/4 褐色土 粘土 φ5~20mm 少量 (3' 程度)
17. 10R3/4 黄褐色土 φ5~10mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱少量
18. 7. 10R3/4 土壌・黄褐色土 1.0m 以上
19. 2. 10R3/2 暗褐色土 粘性强 しまり強 φ10mm/LB と 粘土少量
20. 10R3/1 黄褐色粘土 粘性强 しまり強 φ10mm/LB と 粘土少量 (3' 程度)
21. 10R3/2 黄褐色土 1R(φ5~20mm) 少量
22. 10R3/4 褐色土 粘性强 しまり強 φ5~10mm/LB と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱少量
23. 10R3/4 暗褐色土 φ5~10mm/LB と 粘土少量
24. 10R3/4 褐色土 粘土 φ5~20mm 少量
25. 10R3/3 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 1R(φ5~20mm) 少量 粘土状同化軟弱多量
26. 10R7/8 褐色土 粘土 φ5~20mm 少量
27. 7. 10R6/4 土壌・黄褐色土 1.0m 以上 少量
28. 10R6/4 土壌・黄褐色土 1.0m 以上 少量
29. 10R6/4 褐色土 粘土 φ5~20mm 少量
30. 10R5/1 土壌・黄褐色土 φ5~10mm/LB 粘土状・同化物少量
31. 10R3/3 暗褐色土 1R(φ5~10mm) 少量
32. 10R3/4 褐色土 粘性强 しまり強 1.0m 以上
33. 10R3/4 暗褐色土 粘土状同化物少量
34. 7. 10R6/4 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 1.0m 以上
35. 10R6/4 褐色土 粘土 φ5~20mm 少量
36. 7. 10R2/4 暗褐色土 1R(φ2~5mm) 少量
37. 7. 10R3/4 褐色土 1R(φ2~5mm) 少量 粘土少量
38. 10R5/3 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ5~10mm/LB と 1.0m 以上
39. 10R5/8 黄褐色土 1R(φ5~20mm) 少量
40. 10R7/8 明黄褐色土 粘性强 しまり強 φ5~20mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱多量
41. 7. 10R3/2 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ5~10mm/LB と 1.0m 以上
42. 10R3/4 褐色土 1.0m 以上
43. 10R3/8 黄褐色土 φ5~10mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱少量
44. 10R5/4 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 φ10~15mm/LB と 1.0m 以上 と 1.0m 以上 粘土状同化軟弱多量
45. 10R3/4 褐色土 粘性强 しまり強 1R(φ5~10mm) 少量 粘土状同化軟弱少量
46. 10R5/3 土壌・黄褐色土 粘性强 しまり強 1R(φ2~5mm) 少量 粘土状同化軟弱多量

第 152 図 第 50 号竪穴建物跡 1



第153図 第50号竪穴建物跡2

である。表面は被熱で剥落している。わずかに円柱状に加工していたようである。

時期 11世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期

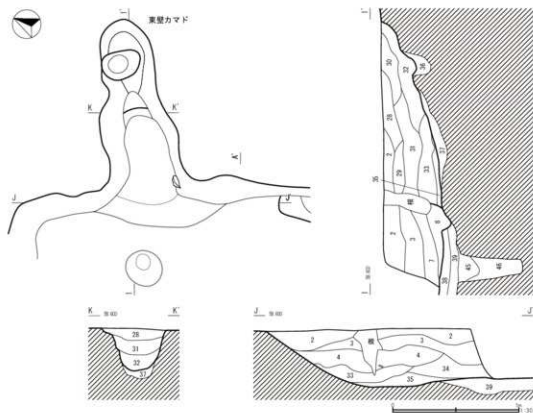
特徴 本跡は火災焼失建物跡である。また、粘土が充填されたP02と地床炉の様相を呈するP03から何等かの工房跡であったとみられる。

#### 第50号竪穴建物跡（第152～154図）

位置 BN-AX、B0-AXグリッドの台地平坦面に位置する。

規模 長軸4.83m×短軸3.37m、床面積13.03㎡、確認面からの壁高は0.45m、主軸方向はN-67°-E、形状タイプはⅡC→ⅠB→ⅠA3bである。

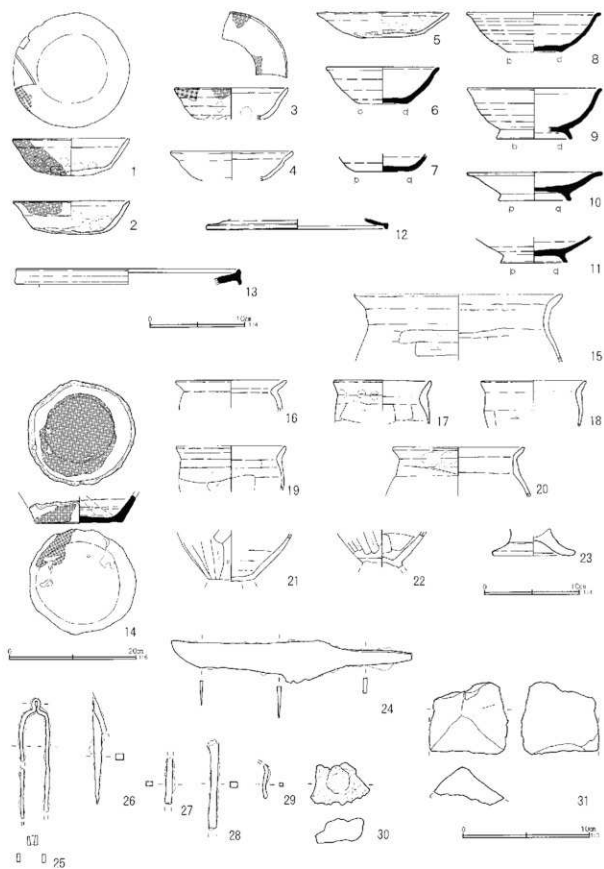
概要 遺存状況は概ね良好で、平面形は改築前の東壁カマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土は上部1～3層がレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。本跡全域に厚さ5～16cmの焼土や炭化材が確認された。床面に4・5層が堆積した後に焼土層である6層が確認されたこ



第154図 第50号竪穴建物跡3

とから本跡廃絶後に火が付けられたものと考えられる。焼土層直上の4層はローム土などの塊を多く混在するため火を消そうとした投入土とみられる。カマドは4基確認され、廃絶時使用で最も新しい北壁Aカマド、北壁Bカマド、北壁Cカマド、東壁カマドの順に古くなるとみられる。北壁Aカマドは北壁の北東隅角寄りに付設され、燃焼部の1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cm、火床面には明瞭な被熱痕はみられない。片袖だけ遺存し、褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は燃焼部から急角度で36cm上がったところから緩やかに立ち上る。北壁Bカマドは北壁中央に付設され、壁外への燃焼部突出は確認されなかった。煙道部は緩やかに立ち上がり、壁から先端部まで約1.00mを測る。東壁カマドは東壁北寄りに付設され、燃焼部の掘込みは床面から深さ8cm、火床面には明瞭な被熱痕が確認された。床面はほぼ平坦とみられ、検出された面は全面に顕著な硬化が確認された。壁溝は北東部を除き周る。本跡廃絶時のピットは6基で、P01とP05は床面から深さ約50cmで方形箱形である。北東隅角のP02は底面に焼土と炭が堆積し、底面の被熱痕も顕著である。P06は床面から約40cmの深さで底面は平坦である。掘方ピットは7基で、P04とP08は床面から深さ約40cmで方形箱形である。P07は床面からの深さ約60cmの深いピットである。遺物はカマド内と北壁際に集中がみられる。遺物の総量は整理収納箱で1箱分である。

**遺物(第155図、第50表)** 土師器壺・須恵器壺・高台埴・高台皿・蓋・甕・長頸瓶、土師器甕・小型甕・台付甕、転用硯、鉄製品、石製品が出土した。1～4は土師器壺、5は土師器皿である。口縁部が斜めに立ち上がり、平底である。1～3は油煙が付着している。6～8は末野産で須恵器壺、9は末野産で須恵器高台埴、10・11は末野産で須恵器高台皿である。底部が糸切り後無調整である。12は末



第155图 第50号竖穴建物跡出土遺物

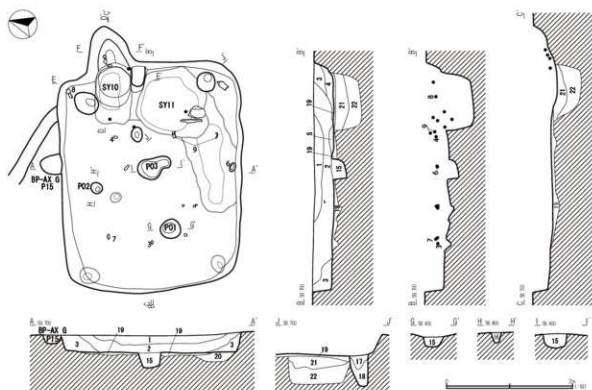
第50表 第50号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	12.4	4.0	-	ABD	褐色	良好	90%	体部ヘラ削り 内外裏面陥圧痕 平底 内外裏油塗付着
2	土師器 坏	12.2	3.5	-	ABDE	褐色	良好	80%	体部ヘラ削り 内外裏面陥圧痕 平底 内外裏油塗付着
3	土師器 坏	(11.8)	3.4	-	AB	にぶい褐色	良好	20%	体部ヘラ削り 内外裏面陥圧痕 平底 内外裏油塗付着
4	土師器 坏	(12.8)	(3.1)	-	ABF	褐色	良好	口縁~体部片	体部ナデ 平底
5	土師器 皿	13.8	2.7	8.2	ABD	褐色	良好	90%	体部ヘラ削り 内外裏面陥圧痕 平底
6	須恵器 坏	(11.8)	3.9	(5.2)	ABDM	灰青	良好	90%	木野篋 糸切のみ
7	須恵器 坏	-	(1.9)	(6.0)	ABD1	にぶい褐色	不良	破断片	木野篋 糸切のみ
8	須恵器 坏	14.0	4.2	5.9	ABE1LM	褐色	良好	90%	木野篋 糸切のみ
9	須恵器 高台皿	(14.0)	(5.4)	(7.6)	ABGLM	褐色	良好	20%	木野篋 糸切のみ
10	須恵器 高台皿	(14.0)	(3.0)	(7.6)	ABGLN	褐色	不良	40%	木野篋 糸切のみ
11	須恵器 高台皿	-	(2.8)	(7.0)	ABHLM	灰青	不良	縁~底部片	木野篋 糸切のみ
12	須恵器 蓋	(19.0)	(1.1)	-	ABD1K	灰青褐色	不良	口縁部片	木野篋
13	須恵器 椀	(23.4)	(1.7)	-	ABFH	褐色灰	良好	口縁部片	自然釉付着
14	須恵器 椀	-	(4.4)	(14.0)	ABFG	褐色	普通	破断片	南比企産 内裏面磨耗痕あり 転用疑
15	土師器 壺	(21.8)	(7.0)	-	ABD1	にぶい褐色	良好	口縁~胴部片	コの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り
16	土師器 小型壺	(11.0)	(3.2)	-	AB	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	くの字に屈曲する
17	土師器 小型壺	(16.0)	(4.8)	-	AB	にぶい褐色	良好	口縁~胴部片	外面上部横位ヘラ削り 内面横位ヘラナデ
18	土師器 小型壺	(11.0)	(4.8)	-	AB1	褐色	良好	口縁~胴部片	外面上部横位ヘラ削り
19	土師器 小型壺	(11.6)	(4.7)	-	AB1	にぶい褐色	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する
20	土師器 小型壺	(13.9)	(5.2)	-	AB1	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	コの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り
21	土師器 台付壺	-	(5.2)	-	AB	にぶい褐色	良好	胴部片	
22	土師器 台付壺	-	(3.7)	-	ABD1	にぶい褐色	良好	接合部片	
23	土師器 台付壺	-	(2.8)	(8.2)	AB	にぶい黄褐色	良好	脚部片	
24	鉄製品 刀子	長さ16.9cm 幅0.6~2.2cm 厚さ0.2~0.3cm 重さ40.5g							
25	鉄製品 鎌子状鉄製品	長さ(8.4)cm 幅2.6cm 厚さ0.3cm 重さ10.5g							
26	鉄製品 釘	長さ(8.6)cm 幅1.4cm 厚さ0.3~0.6cm 重さ3.9g	2個体の釘が癒着した状態						
27	鉄製品 釘	長さ(3.7)cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm 重さ2.4g							
28	鉄製品 釘	長さ(7.2)cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm 重さ3.1g							
29	鉄製品 釘	長さ(2.7)cm 幅0.3cm 厚さ0.3cm 重さ0.9g							
30	鉄滓	長さ3.4cm 幅4.7cm 厚さ2.0cm 重さ29.0g							
31	石製品 砥石	長さ(5.7)cm 幅(6.1)cm 厚さ(3.0)cm 重さ72.8g	石川凝灰岩 被熱の痕跡あり 断面22面						

野産で須恵器蓋、13は須恵器長頸瓶の口縁部片である。14は南比企産で、須恵器長頸瓶の胴部下半部を再利用したもので一部に墨痕や摩耗痕が見られるため、転用瓶と考えた。15~20は土師器壺である。16~20は小型で、砂質が少なく、土師器坏のような胎土を使用している。15・20は「コ」の字裏である。21~23は土師器台付壺である。16・19は「く」の字裏である。21・22は接合部、23は脚部である。24~29は鉄製品である。24は刀子である。25は鎌子状鉄製品である。26~29は釘である。26は釘2個体が癒着した状態で検出された。本跡構築材に使用されていない釘の可能性が大きい。30は鉄滓である。31は石製品の砥石である。凝灰岩で大部分が欠損し、被熱している。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

特徴 本跡は3回カマドを造り替えた改築建物跡で、廃絶後に火災焼失している。また、床下に大形ピットが6基確認され、うち3基は本跡廃絶時に開口している。多様な鉄製品の多さと砥石や灯明皿などの出土から何らかの工房跡とみられ、前述した大形ピットも関連すると考える。



#### 5151 土層説明

1. 101K2/2 暗褐色土 L1(φ2~5mm)少量 焼土粒と石灰質多量
2. 101K2/4 暗褐色土 L1(φ2~5mm)少量 焼土粒と石灰質少量
3. 101K4/4 暗褐色土 L1(φ2~10mm)少量
4. 101K2/2 暗褐色土 粘性物 L1(φ2~10mm)少量  
焼土粒と石灰質と褐色粘質土と少量
5. 101K4/2 暗褐色土 L1(φ2~10mm)少量 焼土粒と石灰質と少量  
6. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ2~10mm)少量 焼土粒と石灰質と少量  
7. 2. 51K5/4 灰色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
8. 7. 20K5/4 灰色土 L1(φ5~20mm)少量  
9. 7. 20K5/2 灰色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
10. 101K2/4 暗褐色土 焼土粒 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
11. 101K2/3 暗褐色土 焼土粒 L1(φ5~20mm)多量  
12. 101K2/3 暗褐色土 焼土粒 L1(φ5~20mm)多量  
13. 101K2/3 暗褐色土 焼土粒 L1(φ5~20mm)多量  
14. 101K2/3 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
15. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
16. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
17. 101K2/2 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
18. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
19. 101K2/4 灰色土 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
20. 7. 20K5/2 灰色土 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
21. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量  
22. 101K2/4 暗褐色土 粘性物 L1(φ5~20mm)多量 焼土粒と石灰質と少量

第156図 第51号竪穴建物跡1

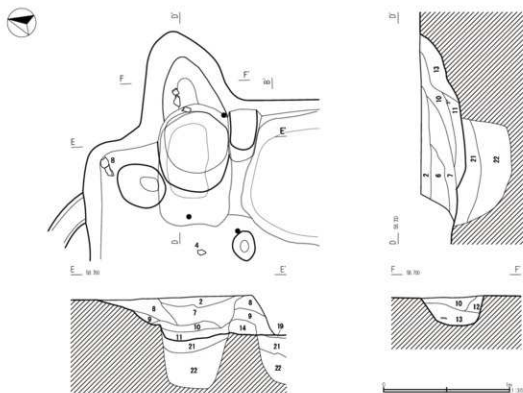
### 第51号竪穴建物跡(第156・157図)

位置 BP-AX・AYグリッドの台地平坦面に位置する。

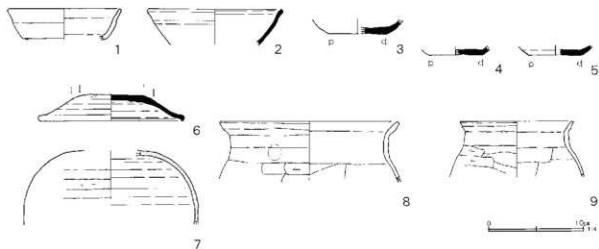
重複 第53号溝とP15(BP-AXグリッド)と重複し、いずれも本跡のほうが古い。また、本跡のカマド下と床面下から方形で深い掘込みを2基確認し、白色粘土層上面まで深く掘り込まれているため、本書では土取り遺構と判断しカマド下を第10号土取り遺構、南隣の床面下を第11号土取り遺構と命名した。いずれも本跡の粗掘り段階で掘り込まれたとみられる。

規模 長軸3.60m×短軸2.87m、床面積8.59㎡。確認面からの壁高は0.30m、主軸方向はN-71°-E、形状タイプはII C2cである。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁北寄りに付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ9cm、火床面に所々被熱痕みられるが明瞭ではない。袖部は南袖だけ遺存し、構築材はマンガング粒を含む褐色粘質土である。また、燃焼部から煙道部まで緩やかに立ち上る。壁周溝は検出されなかった。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡発掘時のピットは規模の小さな6基である。掘方は5~8cmの深さで全域に及び、さらに北東側で深さ4~7cmの一段下がった掘込みを確認した。掘方ピットは5基確認され、うち小ピットは3基で北西



第157図 第51号竪穴建物跡2



第158図 第51号竪穴建物跡出土遺物

第51表 第51号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(11.8)	3.3	-	AB	褐色	良好	10%	底部へラ削り、平底
2	須恵器 杯	(14.0)	(3.4)	-	ABOM	褐色	良好	口縁部片	未野産
3	須恵器 杯	-	(1.6)	(5.0)	ABC/M	こぶい黄褐色	不良	底部片	未野産、糸切のみ
4	須恵器 杯	-	(0.8)	(5.0)	ABFC	灰黄	良好	底部片	南社全産、糸切のみ
5	須恵器 杯	-	(1.1)	(5.5)	ABOM	褐色	良好	底部片	未野産、糸切のみ
6	須恵器 蓋	15.0	2.8	-	ABC/LMN	灰黄	良好	100%	未野産、糸切後周辺へラ削り
7	灰釉陶器 甕	-	(7.6)	-	ABC	灰白	良好	胴部片	糸切前後高か、濃江地域寛口家跡群産、外面胎輪、突縁物、褐色粒少量
8	土師器 壺	(18.9)	(5.2)	-	AB/M	こぶい褐色	良好	口縁部片	口の字に底倉する、外面上部横位へラ削り
9	土師器 壺	(11.9)	(5.9)	-	AB/J	赤褐色	良好	口縁～胴部片	口の字に底倉する、外面上部横位へラ削り



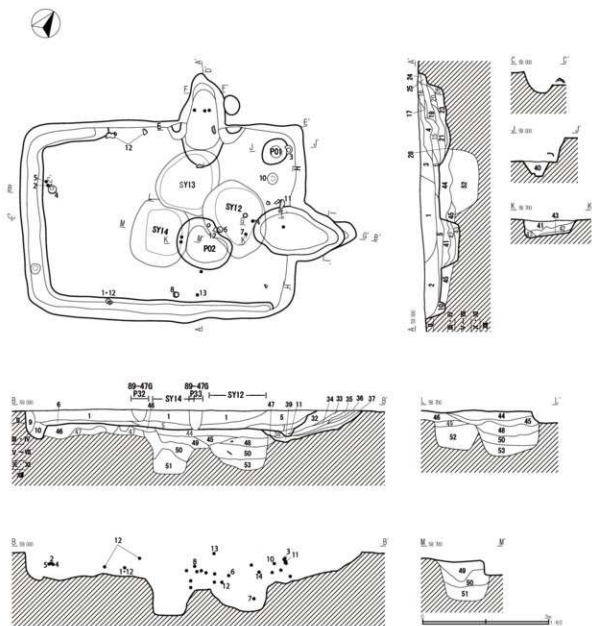
隅角と南西隅角に配置されている。遺物は全体に散在し特に集中した箇所はみられない。

**遺物** (第158図、第51表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器盖、灰釉陶器長頸瓶、土師器甕が出土した。

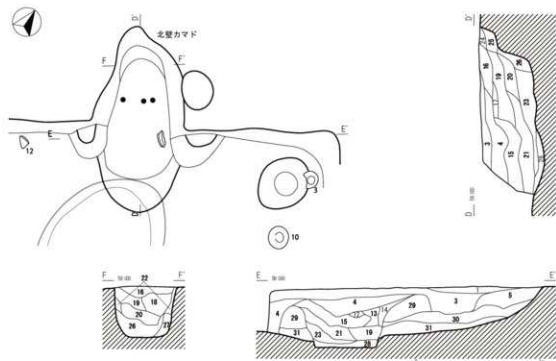
1は土師器坏である。口縁部が斜めに立ちあがり、平底である。2～5は須恵器坏である。底部が糸切り後無調整である。4は南比企産で他は末野産である。6は末野産の須恵器盖である。掴みのない形状である。7は灰釉陶器長頸瓶である。8、9は土師器甕である。「コ」の字甕である。

**時期** 9世紀後半、宮下遺跡IV期

**特徴** 本跡の粗掘り段階で第10・11号土取り遺構が掘込まれている。本跡のカマド構築材採取が目的だった可能性が高い。



第159図 第52号竪穴建物跡1



52号土層図例

1. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 白色粒少量含 同化粒少量含 焼土粒少量含
2. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含 焼土粒少量含 同化粒少量含
3. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
4. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含 同化粒少量含
5. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
6. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
7. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含 同化粒少量含
8. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 焼土粒少量含
9. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含
10. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含
11. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 焼土粒少量含 同化粒少量含 1.0多量含
12. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
13. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
14. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
15. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含
16. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
17. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
18. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
19. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
20. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
21. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
22. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含 1.0多量含 同化粒少量含
23. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
24. 1.0多量含 焼土粒少量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
25. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含 同化粒少量含
26. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 同化粒少量含 1.0多量含 焼土粒少量含
27. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 焼土粒少量含 同化粒少量含
28. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含 焼土粒少量含
29. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
30. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
31. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
32. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
33. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強
34. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
35. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
36. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 同化粒少量含 同化粒少量含 焼土粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
37. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 同化粒少量含 同化粒少量含 1.0多量含
38. 7.5YR3/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 同化粒少量含 焼土粒少量含
39. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含
40. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
41. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
42. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
43. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 焼土粒少量含
44. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
45. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
46. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含 焼土粒少量含
47. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 1R(6.30～30mm)少量含 同化粒少量含 同化粒少量含 1.0多量含 同化粒少量含
48. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
49. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強
50. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
51. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 同化粒少量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
52. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含
53. 10YR2/4 暗褐色土 しまり強 1.0多量含 同化粒少量含 同化粒少量含 1R(6.30～30mm)少量含

第 160 図 第 52 号竪穴建物跡 2

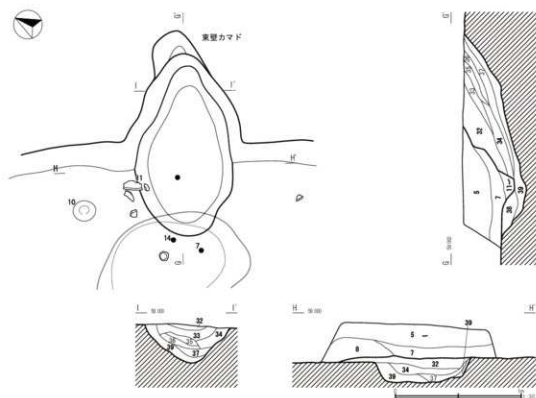
## 第 52 号竪穴建物跡 (第 159～161 図)

位置 BR—AY、BS—AY グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡中央部の床面下から深い掘込みを 3 基確認し、白色粘土層上面まで深く掘込まれているため、本書では土取り遺構と判断し東側から順に第 12・13・14 号土取り遺構と命名した。いずれも本跡の粗掘り段階で掘込まれたとみられる。

規模 長軸 4.50 m×短軸 3.16 m、床面積 11.84 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.30 m、主軸方向は N-58°-E、形状タイプは II B→I B3d である。

概要 平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね

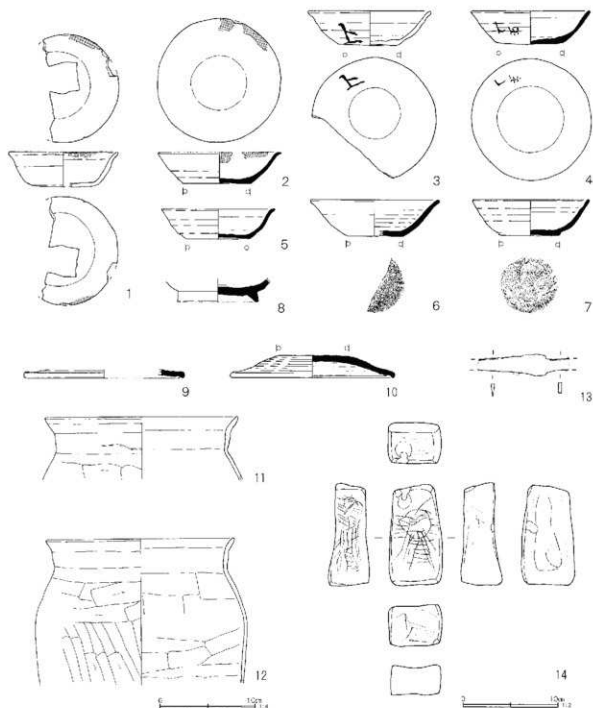


第161図 第52号竪穴建物跡3

第52表 第52号竪穴建物跡出土遺物観察表

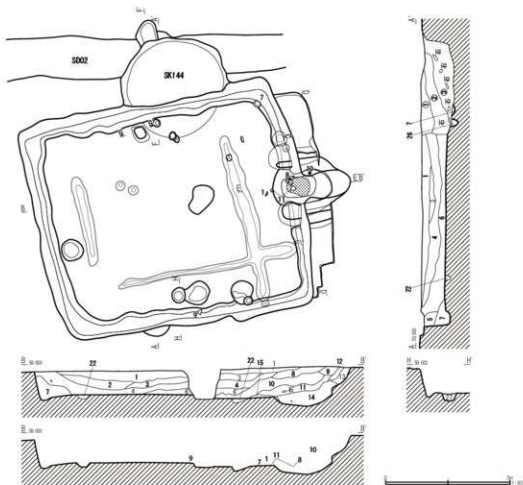
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(11.5)	(3.7)	-	ABDf	物	良好	100%	底部へラ削り 平底 内外面油煙付着
2	土師器 杯	12.8	3.4	7.1	ABLM	物	不良	100%	木野産 糸切のみ 内外面油煙付着
3	土師器 杯	(12.9)	3.6	6.1	ABf/LM	こぶい物	不良	70%	木野産 糸切のみ 底部外面・正位着「上」 未透光
4	土師器 杯	12.4	3.5	7.1	ABf/LM	こぶい黄物	普通	100%	木野産 糸切のみ 底部外面・横位着「口上(左上)方」
5	土師器 杯	11.8	3.3	6.6	ABDf/LM	編灰	良好	100%	木野産 糸切のみ
6	土師器 杯	(12.1)	3.8	6.4	ABDf/LM	灰黄	良好	40%	木野産 糸切のみ 底部外面外物痕あり
7	土師器 杯	(13.5)	(3.9)	(6.9)	ABDf	編灰	良好	100%	木野産 糸切のみ 底部外面外物痕あり
8	土師器 高台皿	-	(2.4)	(6.4)	ABDM	黄灰	良好	一部片	木野産 糸切のみ
9	土師器 蓋	(16.6)	(6.6)	-	ABDf/N	こぶい黄物	普通	口縁部片	木野産
10	土師器 蓋	17.0	2.3	-	ABDf/LMN	灰黄	良好	100%	木野産 糸切のみ
11	土師器 壺	(20.1)	(6.7)	-	ABf	編	良好	口縁部片	口の字に屈曲する 外面上部横位へラ削り
12	土師器 壺	18.7	(15.4)	-	ABf/N	編	良好	口縁→胴部片	口の字に屈曲する 外面上部横位へラ削り 中群縦位へラ削り
13	鉄製品 刀子	長さ(7.2)cm	幅(0.8~1.7)cm	厚さ0.2~0.3cm	重量10.7g				両側 刃部破れ減り顯著
14	石製品 磁石	長さ5.4cm	幅2.3cm	厚さ2.2cm	重量43.3g				石材凝灰岩 磁石の痕跡あり 磁質は5割 磁粒多数 表面周囲中央部(刃) 上部より方より穿孔痕あり

自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央東寄りと東壁中央に付設される改築建物跡である。廃絶時のカマドは北壁付設のもので燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。両袖とも遺存し、径10mm大のマンガン粒を含む褐色灰粘質土で構築されている。また、燃焼部から煙道部まで垂直気味に30cm上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで0.90mを測る。改築前の東壁カマドは燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊し形状として捉えることはできなかった。壁周溝は北東側を除き周る。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみら



第162図 第52号竪穴建物跡出土遺物

れる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは北東隅角のP01と本跡中央部のP02の2基である。掘方は10～18cmの深さで全域に及ぶ。遺物は北カマド内に集中がみられ、総量はポリ大袋に2袋分である。**遺物（第162図、第52表）** 土師器坏、須恵器坏、須恵器高台埴、須恵器蓋、土師器甕、鉄製品、石製品が出土した。1は平底の土師器坏である。2～7は須恵器坏である。底部は糸切り後無調整である。1・2は油煙が付着している。3・4は体部外面に墨書がある。6・7は底部外面に刃物痕がみられる。8は須恵器高台埴である。すべて末野産である。9・10は末野産の須恵器蓋である。摘みのない形状である。11・12は土師器甕である。「コ」の字甕である。13は鉄製品の刀子である。14は石製品の砥



535 土層説明

1. 10192/2 赤褐色土、L層、粘土粘層構造
2. 10194/4 褐色土、LRI(φ2~5mm)多量含、粘土粘と石灰化少量含
3. 10192/3 暗褐色土、LRI(φ2~5mm)少量含、粘土粘層構造
4. 10192/3 暗褐色土、L層土、LRI(φ2~5mm)少量含、粘土粘と褐色粘土層構造
5. 10192/3 暗褐色土、φ3~10mmのLRIとL層少量含
6. 10194/4 褐色土、φ2~5mmのLRIとL層少量含、粘土粘と褐色粘土層少量含
7. 10194/3 にLRI(暗褐色土、LRI(φ2~5mm)多量含
8. 7. 5359/4 にLRI(暗褐色土、LRI(φ2~5mm)と主体とし、褐色粘土層少量含
9. 7. 5359/2 暗褐色土、粘付層、L層少量含、褐色粘土層(φ10~10mm/LRI(φ2~10mm)少量含
10. 7. 5359/3 にLRI(暗褐色土、粘付層、L層少量含、LRI(φ10~40mm)多量含、粘土粘少量含
11. 7. 5359/2 にLRI(暗褐色土、粘付層、L層少量含、褐色粘土層(φ10~30mm)多量含、φ10~10mmのLRIとL層少量含
12. 7. 5359/4 赤褐色土、L層少量含、粘土粘、LRI(φ5~20mm)多量含、褐色粘土層少量含、石灰化少量含
13. 7. 5359/2 にLRI(暗褐色土、粘土粘、φ5~10mm)少量含、LRI(φ2~5mm)多量含
14. 7. 5359/3 にLRI(暗褐色土、L層少量含、粘土粘、LRI(φ10~30mm)多量含、褐色粘土層とL層少量含(黒型YI)埋没品
15. 7. 5359/2 暗赤褐色土、褐色粘土層と粘土粘と石灰化少量含(黒型YI埋没品口部)
16. 5357/6 褐色粘土、粘付層、L層少量含、粘土粘と主体とする、中に沖割のみみれる、YI埋没品内装
17. 10199/2 灰褐色土、粘付層、L層少量含、粘土粘と少量含、褐色粘土層(黒型YI埋没品)
18. 7. 5359/4 赤褐色土、粘付層、L層少量含、粘土粘と少量含、褐色粘土層少量含、褐色粘土層少量含
19. 7. 5359/4 褐色粘土、粘付層、L層少量含、LRI(φ2~5mm)少量含、粘土粘少量含
20. 10194/3 にLRI(暗褐色土、粘付層、L層少量含、粘土粘と少量含、褐色粘土層少量含、粘土粘と少量含)
21. 7. 5359/4 褐色土、L層少量含、粘土粘と石灰化少量含
22. 10192/3 にLRI(暗褐色土、L層少量含、石灰化少量含、褐色粘土層少量含(黒型YI埋没品)
23. 7. 5359/2 にLRI(暗褐色土、粘付層、L層少量含、LRI(φ2~5mm)少量含、粘土粘少量含、L層少量含(黒型YI埋没品)
24. 10194/4 褐色土、粘付層、L層少量含、粘土粘と石灰化少量含
25. 10194/4 褐色土、粘付層、L層少量含、LRI(φ2~5mm)多量含、粘土粘と石灰化少量含
26. 7. 5359/2 灰褐色土、粘付層、L層少量含、LRI(φ10~40mm)多量含、粘土粘少量含(黒型YI埋没品)
27. 10194/4 褐色土、L層少量含、φ3~10mmのLRIとL層少量含(SK144)
28. 10192/4 にLRI(暗褐色土、L層少量含、LRI(φ10~40mm)多量含(SK144)
29. 10192/3 褐色粘土、粘付層、L層少量含、LRI(φ5~20mm)少量含、φ100~300mmの円筒少量含、縁や上面は土層IIIとの境界とみられる(SK144)

第 163 図 第 53 号竪穴建物跡 1

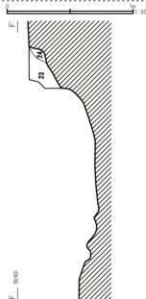
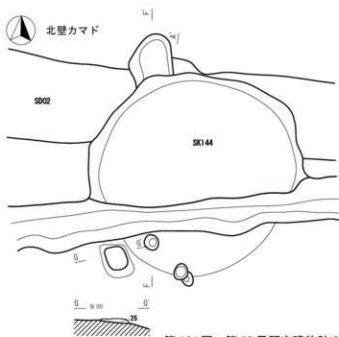
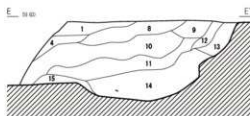
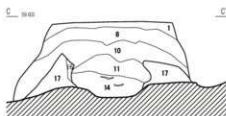
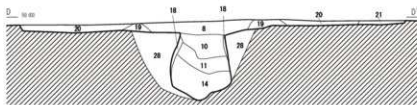
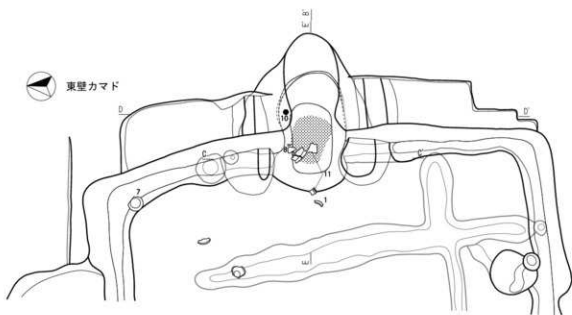
石である。凝灰岩製で表裏面の中央は凹み、2面に毛彫状の線刻が確認された。抽象的な形状であるが着衣の神像のようにも見える。上端に二方から穿孔痕がある。

時期 9世紀後半、宮下遺跡IV期

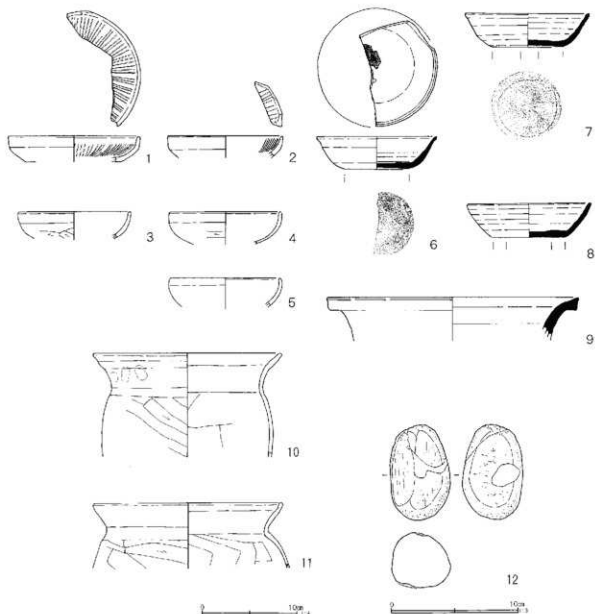
特徴 本跡はカマドを造り替えた改築建物跡で、本跡中央部の床面下に3基の土取り遺構が検出された。いずれも底面は灰白色粘土であるⅫ層上面で止まっている。因みに本跡の北壁付設カマドは構築材に地山Ⅺ層であるマンガン粒を含む褐色粘質土が用いられ、3基の土取り遺構のうちで最も重複関係が新しい第14号土取り遺構から採取された可能性が高い。なお、線刻底石は改築前のカマド内から出土した。

第 53 号竪穴建物跡 (第 163・164 図)

位置 B1-A0 グリッドの台地平坦面に位置する。



第164図 第53号竪穴建物跡2



第165図 第53号竪穴建物跡出土遺物

**重複** 本跡北壁で第144号土坑、南側で第4号掘立柱建物跡と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

**規模** 長軸4.28m×短軸3.60m、床面積12.55㎡、確認面からの壁高は0.38m、主軸方向はN-10°-W、形状タイプはI B→II A3aである。

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形は北カマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は上部の1～3層が一気に埋め戻したブロック堆積で4層以下はレンズ状に堆積している。カマドは北壁と東壁に確認された。東壁中央に付設されたカマドは燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ15cm、被熱で火床面であるローム地山が赤褐色に変化している。両袖とも遺存し、マンガン粒を多く含む灰黄褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は火床面から30cm上がったところで約50°の勾配で立ち上がり、平面形状は幅広なU字形である。壁から煙道部先端まで0.80mを測る。東壁に沿って棚状施設が確認された。床面から約30cm上がった壁外に幅36～40cmの平坦部が造り出されており、カマド袖から延びた灰黄褐色粘質土が棚を仕切るように東カマド両脇に積み上げられている。北壁に付

第53表 第53号竪穴建物跡出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(11.8)	2.7	-	ABG1	黄	良好	30%	内面放射状縄文 平底風
2	土師器 坏	(12.0)	(2.2)	-	ABCK	黄	良好	口縁~体部片	内面放射状縄文 平底風
3	土師器 坏	(11.8)	(2.6)	-	AB1	赤赤褐	良好	口縁~体部片	体部へラ削り 丸底
4	土師器 坏	(11.8)	(3.4)	-	AB1K	こぶい橙	良好	30%	体部へラ削り 丸底
5	土師器 坏	(11.5)	(3.1)	-	AB1K	黄	良好	口縁~体部片	丸底
6	須恵器 坏	(12.6)	(3.4)	(5.8)	ABFGM	灰黄	良好	40%	南比企産 糸切後全面へラ削り 墨痕 摩耗痕あり 転用硯
7	須恵器 坏	13.0	3.4	7.5	ABFGM	灰黄	良好	90%	南比企産 糸切後周辺へラ削り
8	須恵器 坏	(12.6)	(3.6)	(7.4)	ABFH1	灰黄橙	不良	40%	南比企産 糸切後周辺へラ削り 裏面内面摩耗痕あり
9	須恵器 罎	(26.2)	(4.4)	-	ABDH1M	灰黄	普通	口縁部片	未野産
10	土師器 罎	(19.7)	(11.0)	-	A1M	赤赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面中部縦位へラ削り
11	土師器 罎	19.8	(6.9)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部縦位へラ削り
12	石製品 砥石	長さ7.4cm 幅4.7cm 厚さ4.3cm 重さ59.9g							石材軽石

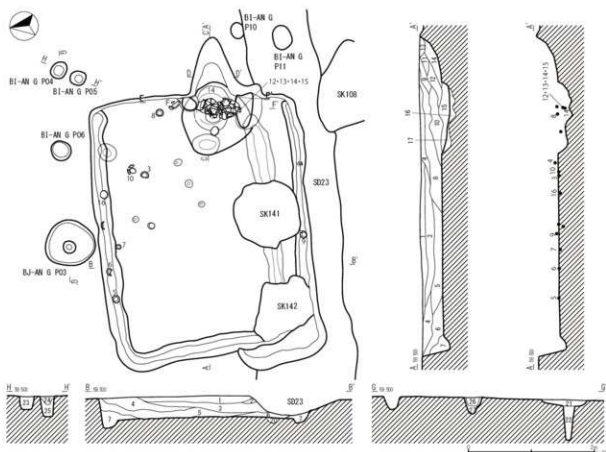
設されたカマドは中世に帰属する第144号土坑に壊され、長く延びた煙道部先端と袖部の西片方が確認されただけである。北壁から煙道部先端部まで1.40mを測る。袖構築材は東カマドと同じ灰黄褐色粘質土である。2基のカマドとも袖部が遺存していたということは本跡廃絶時まで同時に使用していた可能性が窺われる。壁周溝は全周する。床面は平坦で、全面にわたって踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは南壁際の小ピット3基だけである。掘方ピットは小ピットが5基確認された。また、三壁に沿うように走る壁周溝状の掘込みを確認した。間仕切りとも考えられるが、同一建物拡張の可能性もある。遺物は東カマド内に集中がみられる。出土総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物(第165図、第53表)** 土師器坏、須恵器坏、須恵器罎、土師器罎、転用硯、石製品が出土した。1~5は土師器坏である。1・2は内面に放射状の暗文が施されている。口縁が直立しつつ立ちあがり、平底風である。3~5はわずかに口縁が内湾しつつ立ちあがる。丸底である。6~8は南比企産の須恵器坏である。7・8は糸切り後周辺へラ削りである。6は須恵器坏で一部に墨痕や摩耗痕がみられるため、転用硯と考えた。糸切り後全面へラ削りである。8は内面に摩耗痕がみられる。9は未野産で須恵器罎の口縁部片である。10・11は土師器罎である。「くの字」の字彙としては屈曲が弱く、移行期のものと考えられる。12は石製品の砥石である。軽石製で精円礫をそのまま利用している。

**時期** 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

**特徴** 本跡は2基のカマドをもち、本遺跡では数少ない廃絶時同時使用の可能性がある。また、カマドの付設された東壁に棚状遺構、壁に沿った間仕切り状の溝など他遺構にはみられない施設が検出された。本跡の床面直上から出土した9須恵器罎が4m北東に位置する第54号竪穴建物跡の覆土中から出土したものと接合した。両者ともⅡ期に帰属し、主軸方向も大差ない建物跡である。また、本跡の覆土中から出土したものが2m北西に位置する第55号竪穴建物跡から床面直上で出土した6土師器罎と接合した。Ⅲ期に帰属する第55号竪穴建物跡とセットになると推定される第4号掘立柱建物跡に本跡が切られているため、BJ-A0、BI-ANグリッド周辺の遺構変遷は古い順に第53号竪穴建物跡→第54号竪穴建物跡→第55号竪穴建物跡と第4号掘立柱建物跡で推移するとみられる。古代集落の変遷と構成において興味深い資料である。





1654 土層説明

1. 30P2/2 礫焼土、しまり層、粘土少量
2. 30P2/4 礫土、粘土少量、焼土粘土少量
3. 30P2/5 礫焼土、1. 粘土少量、2. 焼土少量
4. 30P2/7 礫焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ10~10mm)、R2(φ5~10mm)少量
5. 30P2/7 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ10~10mm)、R2(φ5~10mm)少量
6. 30P2/1 礫土、φ5~10mmのR1と1. 粘土少量
7. 30P2/2 礫焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)、R2(φ5~10mm)少量
8. 30P2/2 礫焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)、R2(φ5~10mm)少量
9. 30P2/2 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
10. 30P2/7 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
11. 30P2/5 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
12. 30P2/9 礫土、粘土層、しまり層、粘土少量
13. 30P2/1 礫焼土、粘土層、しまり層、粘土少量
14. 30P2/4 礫土、粘土層、しまり層、粘土少量
15. 30P2/4 礫土、粘土層、しまり層、粘土少量
16. 30P2/3 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
17. 30P2/9 礫焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
18. 30P2/2 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
19. 30P2/2 石灰焼土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
20. 30P2/2 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
21. 30P2/2 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
22. 30P2/2 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
23. 30P2/4 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
24. 30P2/2 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
25. 30P2/4 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
26. 30P2/1 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量
27. 30P2/3 礫土、粘土層、しまり層、石灰色粘土、R1(φ5~10mm)少量

第166図 第54号竪穴建物跡1

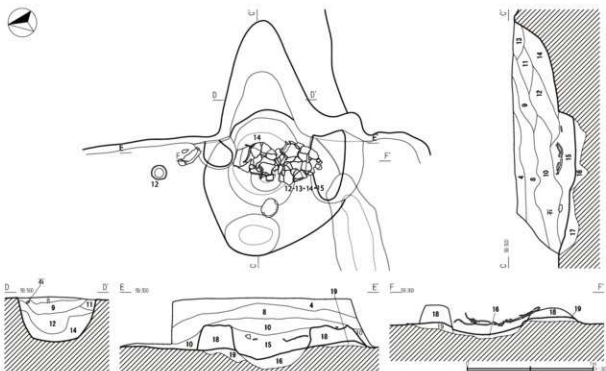
第54号竪穴建物跡(第166・167図)

**位置** BI-AN、BJ-ANグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 本跡の南側で第23号溝、第141・142号土坑と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

**規模** 長軸4.20m×短軸3.37m、床面積11.98㎡、確認面からの壁高は0.36m、主軸方向はN-89°-E、形状タイプはII B3cである。

**概要** 平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央やや南寄りに付設され、燃焼部の約1/4が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ9cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。両軸とも遺存し、灰黄褐色粘質土で構築されている。また、燃焼部から煙道部まで垂直気味に30cm上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで0.90mを測る。壁周溝は東壁を除きほぼ全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは確認されず、



第 167 図 第 54 号竪穴建物跡 2

第 54 表 第 54 号竪穴建物跡出土遺物観察表

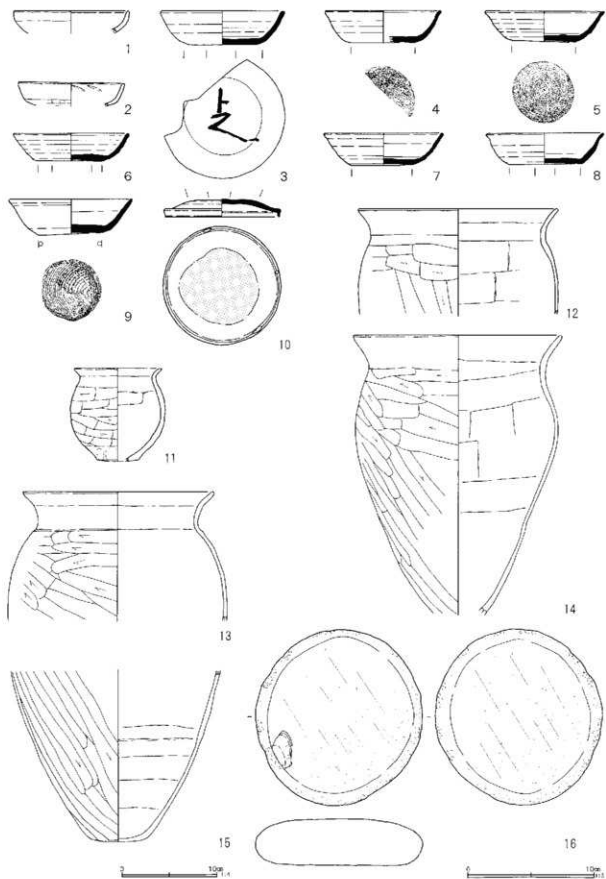
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(11.0)	(2.4)	-	AB1JK	褐色	良好	口縁～体部片	底部へラ削り 平底風
2	土師器 坏	(12.0)	(2.4)	-	AB1JK	こぶい物	良好	口縁～体部片	平底風
3	須恵器 坏	(13.0)	3.4	(8.2)	ABFGH	灰白	90%		南比企産 糸切後周辺へラ削り 底部内周縁片あり 底部外周縁片あり
4	須恵器 坏	12.0	3.4	(8.8)	ABFG	暗灰黄	良好	90%	南比企産
5	須恵器 坏	12.3	3.2	6.7	ABFGH	黄灰	良好	70%	南比企産 糸切後全面へラ削り
6	須恵器 坏	12.0	2.9	6.9	ABF	暗灰	良好	70%	南比企産 糸切後周辺へラ削り
7	須恵器 坏	(12.5)	3.4	6.4	ABFG	灰	良好	90%	南比企産 糸切後全面へラ削り
8	須恵器 坏	12.2	3.3	7.5	ABFGH	黄灰	普通	90%	南比企産 糸切後周辺へラ削り
9	須恵器 坏	12.6	2.7	6.7	ABGHM	こぶい黄物	良好	90%	末野産 糸切のみ 底部の一部に厚縁片あり
10	須恵器 蓋	12.0	(1.8)	-	ABFG	灰	良好	70%	南比企産 糸切後全面へラ削り 内面厚縁片あり 転用破
11	土師器 小型壺	(8.8)	(8.8)	(4.4)	ABE1JK	こぶい縞	良好	40%	外周上部縁位へラ削り 中部縁位へラ削り 下部縁位へラ削り
12	土師器 壺	(20.8)	(11.2)	-	AB1KM	褐色	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外周上部縁位へラ削り 中部縁位へラ削り
13	土師器 壺	20.0	(13.7)	-	ABM	明赤褐	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する(コの字の移行期) 外周上部縁位へラ削り 中部縁位へラ削り
14	土師器 壺	21.8	(28.6)	-	AB1	こぶい縞縞	良好	90%	くの字に屈曲する 外周上部縁位へラ削り 中部縁位へラ削り 下部縁位へラ削り
15	土師器 壺	-	(18.2)	6.0	AB1	こぶい縞	良好	胴～底部片	外周中部縁位へラ削り 下部縁位へラ削り
16	石製品 碇石	長さ13.9cm 幅13.1cm 厚さ2.8cm 重さ1140.9g							石村岡産

掘方の小ピットが5基と南壁に沿うように走る壁周溝状の掘込みを確認した。また、本跡北側に北辺に沿うように3基のピットが並んでいたため本図に示した。遺物はカマド内と北壁際に集中がみられる。掲載した4個体の土師器壺は容れ子状にしてカマド焚口上部に懸架したものとみられる。総量はボリ大袋に4袋分である。

遺物(第168図、第54表) 土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋、転用硯、土師器壺、石製品が出土した。

1・2は土師器坏である。直立しつつ立ちあがり、平底風である。3～8は南比企産の須恵器坏である。

3は糸切り後周辺へラ削りである。4・5・7は底部が糸切り後全面へラ削りである。9は末野産で糸

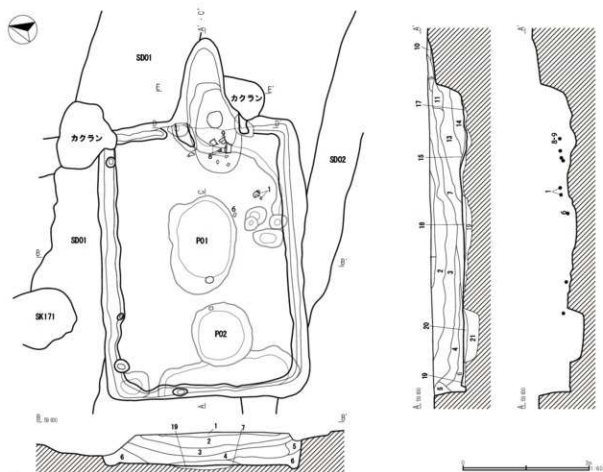


第168图 第54号竖穴建物跡出土遺物

切り後無調整である。3は内面に摩耗痕がみられ、底部外面に墨書がある。10は須恵器蓋の一部に墨痕や摩耗痕がみられるため、転用硯と考えた。11は土師器小型甕である。口縁が「く」の字状である。12～15は土師器甕である。「く」の字状甕であるが口縁付近を撫でている。16は石製品の砥石である。閃緑岩の円形礫をそのまま使用している。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

特徴 南壁に沿うように走る壁周溝状の掘込みは本跡拡張前の名残りの可能性も考えられる。また、本跡の出土遺物が4m南西の第53号竪穴建物跡から床面直上で出土した9須恵器甕と接合した。



5155 土層説明

- |   |   |
|---|---|
| <p>1. 10YR2/1 黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>1～2mmの黄褐色粘石を少量含む。灰少量含む。底面弱く。</p> <p>2. 10YR2/2 黄褐色土、粘性強、しまり強、灰少量含む。</p> <p>3. 10YR2/3 暗褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの黄褐色土を少量含む。灰少量含む。</p> <p>4. 10YR2/4 褐色土、粘性強、しまり強、灰少量含む。</p> <p>5. 10YR2/4 に近い黄褐色土、<math>\phi</math>2～10mmの粘石と少量含む。</p> <p>6. 10YR2/4 に近い黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>7. 10YR2/3 に近い黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>5～10mmの粘石と少量含む。灰少量含む。</p> <p>8. 10YR2/3 暗褐色土、<math>\phi</math>2～5mmの粘石と少量含む。</p> <p>9. 2.0kR1/1 に近い赤土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。底面弱く。</p> <p>10. 2.0kR1/1 に近い暗褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>11. 10YR2/3 に近い黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～10mmの粘石と少量含む。灰少量含む。</p> <p>12. 2.0kR1/1 褐色土、<math>\phi</math>2～3mmの粘石と少量含む。灰少量含む。</p> <p>13. 10YR2/3 に近い黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの粘石と少量含む。灰少量含む。</p> | <p>14. 10YR2/1 暗褐色土、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。粘石と少量含む。底面弱く。</p> <p>15. 2.0kR1/1 暗褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの粘石と少量含む。灰少量含む。底面弱く。</p> <p>16. 10YR2/2 黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの粘石と少量含む。灰少量含む。底面弱く。</p> <p>17. 10YR2/3 に近い黄褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>18. 10YR2/4 褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>19. 2.0kR1/1 に近い赤土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>20. 2.0kR1/1 に近い暗褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの多量含む。灰少量含む。</p> <p>21. 10YR2/3 暗褐色土、粘性強、しまり強、<math>\phi</math>2～3mmの粘石と少量含む。灰少量含む。</p> |
|---|---|

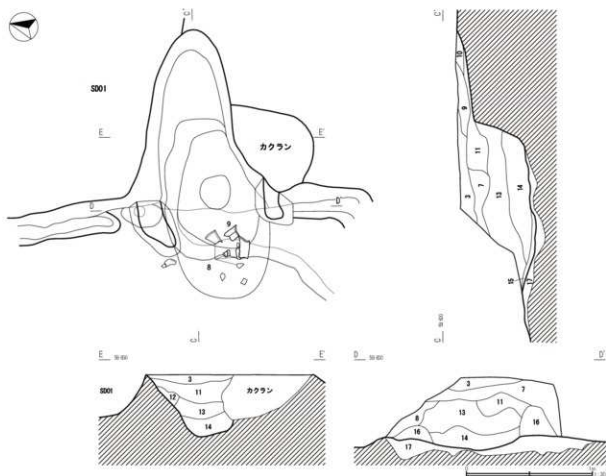
第169図 第55号竪穴建物跡1

第55号竪穴建物跡(第169・170図)

位置 BJ-AN・A0、BK-A0グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡北側で第23号溝、南側で第24号溝と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

規模 長軸4.38m×短軸3.20m、床面積12.02㎡、確認面からの壁高は0.49m、主軸方向はN-73°-E、形状タイプはII A3cである。



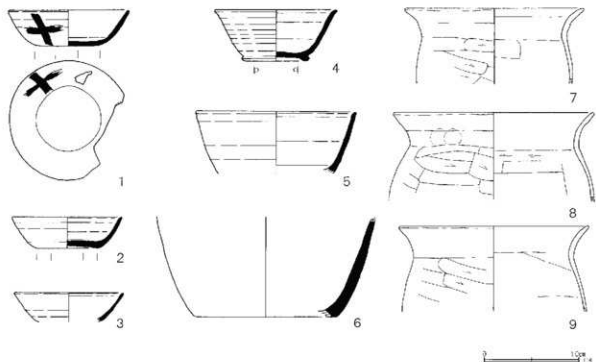
第170図 第55号竪穴建物跡2

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の約1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ11cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。両袖とも遺存し、灰黄褐色粘質土で構築されている。また、燃焼部から煙道部まで垂直気味に30cm上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで1.40mを測る。壁周溝はカマド下を除きほぼ全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットは壁際の小ピットが4基である。掘方は5～8cmの深さで東側に及び、掘方ピットは中央部のP01が深さ13cmの楕円形、西側のP02が深さ23cmの底面平坦な隅丸方形、さらに南壁際に深さ15～22cmの小ピット4基が重複している。遺物はカマド内に集中がみられ、総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物（第171図、第55表）** 須恵器杯、須恵器蓋、土師器甕が出土した。1～3は南比企産の須恵器杯である。1・2は底部が糸切り後周辺へ丸削りである。4は末野産で須恵器高台杯である。5は末野産で須恵器鉢である。6は須恵器鉢である。7～9は土師器甕である。「く」の字裏としては口縁付近を撫でている。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 4m南側に位置する第4号掘立柱建物跡の棟方向と本跡主軸が一致する。一戸単位のセットを想起させる位置関係である。また、本跡の床面直上から出土した6須恵器鉢が2m南東に位置する第53号竪穴建物跡の覆土中から出土したものと接合した。



第 171 図 第 55 号竪穴建物跡出土遺物

第 55 表 第 55 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	環形器 環	(12.0)	3.9	6.9	ABFLM	こぶい焼	不良	80%	南社金庫 糸切後周辺へラ削り 内面全体摩耗痕あり 体部外壁 正位磨痕(十)
2	環形器 環	(11.6)	(3.3)	(6.4)	ABFM	焼灰	良好	30%	南社金庫 糸切後周辺へラ削り
3	環形器 環	(11.4)	(3.1)	-	ABFM	灰黄	良好	口縁部片	南社金庫
4	環形器 高台杯	(12.7)	(5.5)	6.8	ABDH1	こぶい焼	不良	40%	米野産 糸切のみ
5	環形器 鉢	(16.7)	(6.0)	-	ABDM	焼灰	良好	口縁一体部片	米野産
6	環形器 鉢	-	(10.0)	(15.0)	ABDM	灰黄焼	普通	胴～底部片	内外磨削痕
7	土師器 壺	(16.0)	(8.0)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へラ削り 中節縦位へラ削り
8	土師器 壺	21.1	(8.4)	-	ABC1	こぶい焼	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へラ削り
9	土師器 壺	(20.0)	(8.1)	-	ABC	こぶい焼	良好	口縁～胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へラ削り

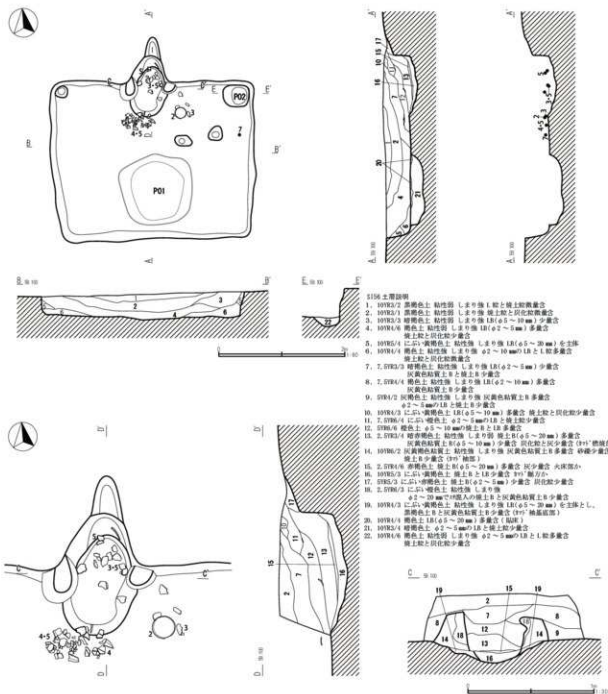
第 56 号竪穴建物跡(第 172 図)

位置 ⅡK-1R グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無い。

規模 長軸 3.25 m × 短軸 2.47 m、床面積 6.75 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.41 m、主軸方向は N - 6° - E、形状タイプは I A2a である。

概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 9 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。両袖とも遺存し、灰黄褐色粘質土で構築されている。また、燃焼部から煙道部まで垂直気味に 50 cm 上がり、先端部までは緩やかに立ち上る。壁から煙道先端まで 0.70 m を測る。壁周溝は検出されなかった。床面は若干凹凸があり、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡発掘時のピットは北東及び北西隅角の 2 基を含め合計 4 基で、いずれも浅い小ピットである。掘方ピットは

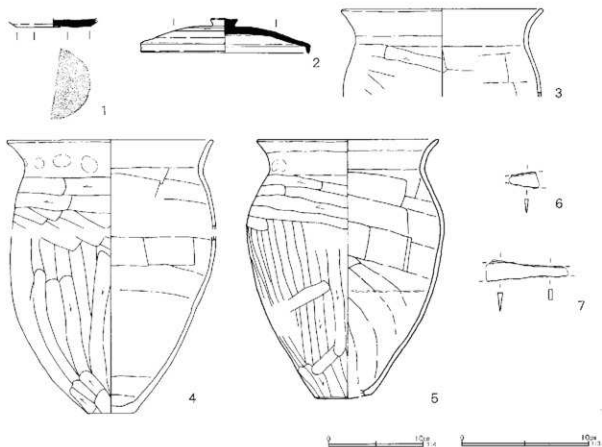


第172図 第56号竪穴建物跡

南側に方形で大形のが1基確認された。長軸1.10×短軸1.03m、深さ20cm、底面が平坦である。遺物はカマド内とカマド前に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物** (第173図、第56表) 須恵器環・須恵器蓋・土師器甕・鉄製品が出土した。1は南比企産の須恵器環である。底部が糸切り後周辺へラ削りである。底部内面に摩耗痕がみられ、底部外面に刃物痕がみられる。2は釘頭状の摘みをもつ須恵器蓋である。3~5は土師器甕である。「く」の字裏にしては口縁が外反している。6・7は鉄製品の刀子である。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期



第173図 第56号竪穴建物跡出土遺物

第56表 第56号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	-	(0.3)	(7.6)	ABFM	緑灰	良好	底面片	南比企産 未切縁周辺へう削り 扉裏中心に万物痕。底面内面皮剥離あり
2	須恵器 蓋	17.7	3.6	縁径2.6	ABFM	灰黄緑	普通	100%	南比企産 未切縁全蓋へう削り
3	土師器 壺	(21.2)	(9.3)	-	ABC1	こぶい織	良好	口縁～胴部片	外面上部斜位へう削り 中部縦位へう削り
4	土師器 壺	21.6	(28.2)	4.6	AB1M	こぶい赤織	良好	40%	くの字に屈曲する 外面上部縦位へう削り 中部縦位へう削り 下部縦位へう削り
5	土師器 壺	19.1	27.5	6.0	ABC1	こぶい赤織	良好	口縁～底面片	外面上部縦位へう削り 中部縦位へう削り 下部縦位へう削り
6	鉄製品 刀子	長さ(2.4)cm	幅(0.6~1.2)cm	厚さ0.2cm	重さ1.6g				
7	鉄製品 刀子	長さ(6.5)cm	幅(0.7~1.5)cm	厚さ0.3~0.4cm	重さ7.9g				

第57号竪穴建物跡(第175図)

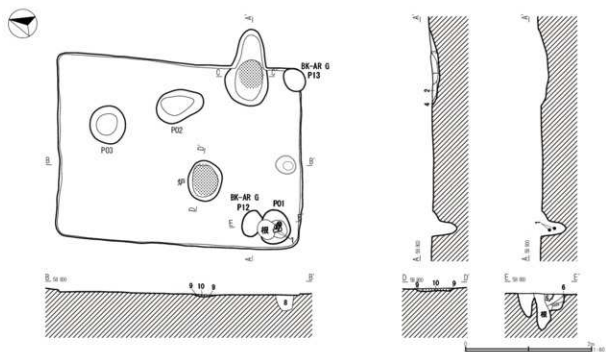
位置 BK-AR、BL-ARグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 南西隅角でP12(BK-ARグリッド)、南東隅角でP13(BK-ARグリッド)と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

規模 長軸3.84m×短軸2.89m、床面積10.60㎡、確認面からの壁高は0.03m、主軸方向はN-73°-E、形状タイプはI B3cである。

概要 後世の耕作などによって削平され、遺存状況はすこぶる悪い。平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はほとんど削平されており不明である。カマドは東壁南寄りに偏って付設され、燃焼部の約1/4が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ12cm、被熱痕が明瞭で火床面であるローム地山が赤褐色に変化している。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上

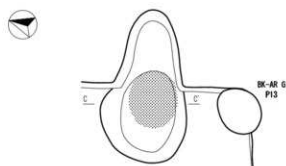




5157 土層説明

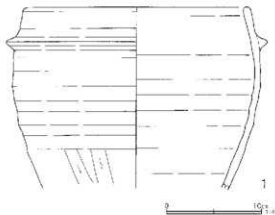
1. 灰褐色 粘性土 しまり強 粘多層状  $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$  の粒土 B と粒土粒少量
2. 100% 以上 中粘性土 粘性強 しまり強 粘多層状  $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$  の粒土 B と粒土粒少量
3. 2. 同様に 中粘性土 粘性強 しまり強 粘多層状 土中に 炭粒と 炭化物を 含む
4. 7. 20% 以上 中粘性土 粒土 B ( $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$ ) 多層状 灰少量 (3%) 炭粒多
5. 100% 以上 粘性土 粘多層状 粒土粒少量
6. 100% 以上 粘性土 粘性強 しまり強 (3) ( $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$ ) 多層状
7. 100% 以上 粘性土 粘性強 しまり強 粘多層状
8. 100% 以上 粘性土 粘性強 しまり強  $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$  の粒土 B と粒土粒少量
9. 100% 以上 粘性土 粘多層状 粒土 B ( $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$ ) 多層状 灰少量
10. 100% 以上 粘性土 粘多層状 粒土 B ( $\phi 2 \sim 5 \text{mm}$ ) 多層状 灰少量

第 174 図 第 57 号竪穴建物跡



第 57 表 第 57 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師瓦土器 羽釜	(23.6)	(18.4)	-	ABC12	こぶい赤褐色	良好	口縁～胴部	外面下部縦欠へう崩り 口ロク成形



第 175 図 第 57 号竪穴建物跡出土遺物

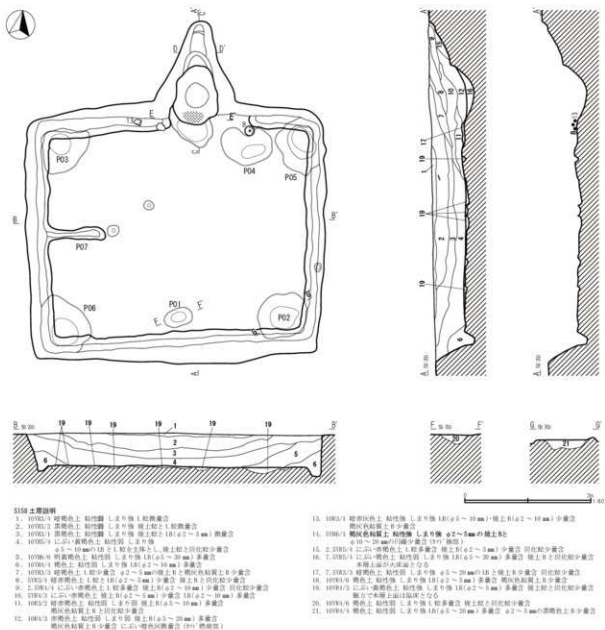
からにぶい黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、煙道部は上部削平のため検出されなかった。壁周溝も検出されなかった。床面はほぼ平坦で、カマド前で顕著な硬化部分を確認した。中央部南西寄りに地床炉が検出された。規模は東西軸 62cm、南北軸 53cm、深さ 6cm、断面皿状、底面のローム地山が被熱で赤褐色に変化している。本跡地絶時のピットは 3 基で、P01 は南東隅角に位置し、羽釜が出土している。P02・03 はいずれも深さ 6～8cm と浅く、覆土に焼土粒と炭化粒を少量含む。遺物はカマド内と南東隅角の P01 に集中がみ

られる。遺物の総量はポリ中袋に1袋分である。

**遺物(第175図、第57表)** 土師質土器羽釜が出土した。1はロクロ成形で、口縁からわずかに内湾する。胴部下半部にヘラ削りがみられる。

**時期** 10世紀後半、宮下遺跡VI期

**特徴** 本跡はカマドのほかに地床炉を有し、紡織生産に関連した工房だったとみられる。



第176図 第58号竪穴建物跡1

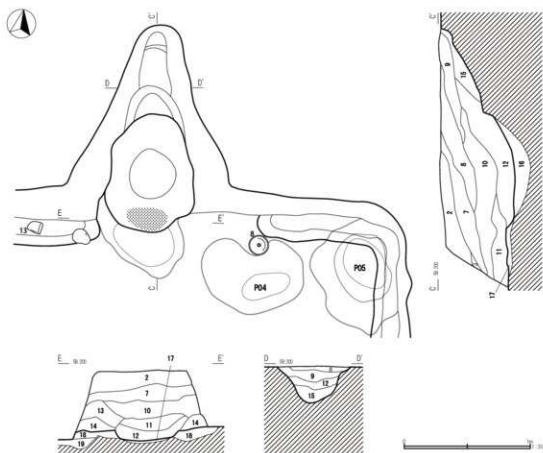
**第58号竪穴建物跡(第176・177図)**

**位置** BM-A0, BM-APグリッドの台地平坦面に位置する。

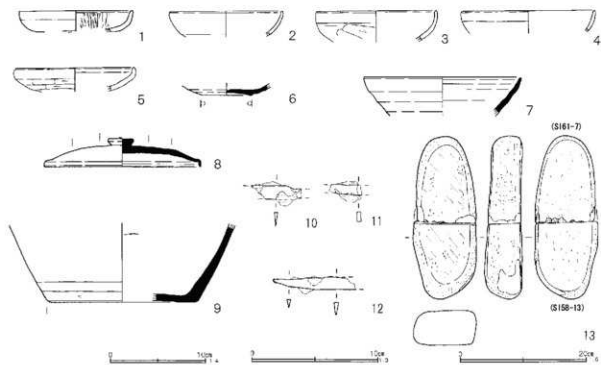
**重複** 重複は無い。

**規模** 長軸 4.70 m×短軸 3.88 m, 床面積 14.98 m<sup>2</sup>, 確認面からの壁高は 0.53 m, 主軸方向はN-9° -W,

形状タイプはI B3aである。



第 177 图 第 58 号竖穴建物跡 2



第 178 图 第 58 号竖穴建物跡出土遺物

第58表 第58号竪穴建物跡出土遺物観察表

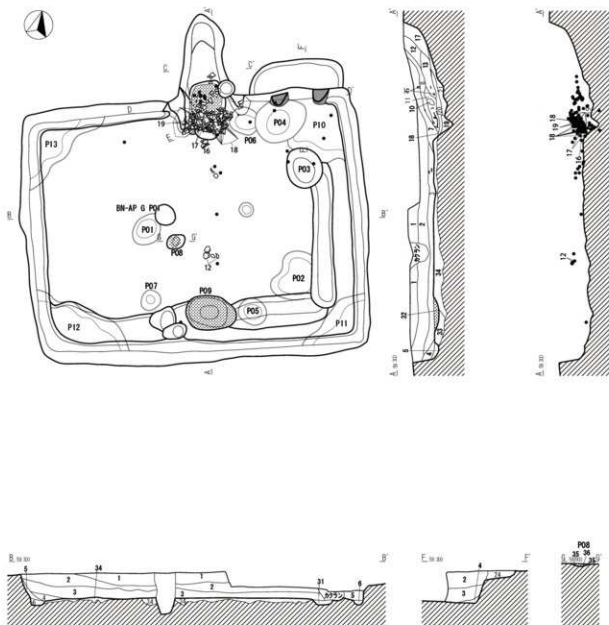
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(11.9)	(2.2)	-	AB1M	赤	良好	20%	内面放射状暗文 平底風
2	土師器 杯	(11.8)	(2.7)	-	AB1	明赤褐	良好	20%	
3	土師器 杯	(12.6)	(3.3)	-	AB1	こぶい織	良好		口縁～体部片 体部へう削り
4	土師器 杯	(14.0)	(2.2)	-	AB1	こぶい織	良好		口縁部片
5	土師器 杯	(12.8)	(2.5)	-	AB1	明褐	良好	10%	体部へう削り 平底風 暗文系無文杯
6	須恵器 杯	-	(1.2)	(5.4)	ABG	黄灰	普通		体部片 末野産 糸切のみ
7	須恵器 杯	(16.3)	(4.2)	-	ABOH	黄灰	良好		口縁部片 末野産
8	須恵器 蓋	16.5	3.1	-	ABF	灰白	良好	100%	南比企産 糸切縁周辺へう削り
9	須恵器 蓋	-	(8.3)	(16.0)	ABFM	褐灰	良好		体～底部片 南比企産
10	鉄製品 刀子	長さ(4.0)cm	幅(0.7～1.0)cm	厚さ0.2cm	重さ3.5g				木質付着
11	鉄製品 刀子	長さ(2.0)cm	幅(0.6～0.8)cm	厚さ0.3cm	重さ2.9g				木質付着
12	鉄製品 刀子	長さ(0.5)cm	幅(0.2～1.0)cm	厚さ0.3cm	重さ3.2g				
13	石製品 砥石	長さ25.1cm	幅10.1cm	厚さ6.1cm	重さ2462.9g				石材枅形 自然磨利面 縦断面 部分付着 1/61～7と接合

**概要** 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマド煙道部に沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の大半が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ6cmと浅い。燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕が確認された。袖部は両袖とも遺存していたが現地調査中に構築材の認識不足で平面形状の記録を残せなかった。構築材は褐色灰粘質土である。また、煙道部は燃焼部から20cm上がったところで緩やかに立ち上がる。壁から煙道部先端まで1.20mを測る。床面は若干凹凸があり、本跡の全域にわたって明瞭な硬化面を確認した。壁周溝はカマド下を除きほぼ全周する。廃絶時のピットは西壁中央から0.90mの長さで間仕切り状に延びるP07だけである。掘方ピットは9基確認され、P01はカマドと対峙する南壁際に入り口の階段ピットの可能性がある。P02・03・05・06は本跡四隅に位置し、いずれも深さ16～27cmの浅い掘込みである。遺物は北壁際に集中がみられる。13砥石は真っ二つに割れており北壁際の床面直上から出土した。この割れた砥石と第61号竪穴建物跡の中央部床面10cm上から出土した7砥石が接合した。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物(第178図、第58表)** 土師器杯、須恵器杯、須恵器蓋、須恵器裏、鉄製品、石製品が出土した。1～5は土師器杯である。1は放射状の暗文が施されている。口縁部がやや直立しつつ立ちあがり、平底風である。5は肉厚で腰をもつ、暗文系無文杯と考えられる。4は口縁が直立しつつ立ちあがる。2・3はわずかに内湾しつつ立ちあがる。6・7は末野産で須恵器杯である。6は底部が糸切り後無調整である。8は南比企産の須恵器蓋で、釘頭状の握みをもつ。9は南比企産の須恵器裏である。10～12は鉄製品の刀子である。13は石製品の砥石である。元々楕円形の大型のもので、2つに分割して出土した。上半部は第61号竪穴建物跡から出土している。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 本跡から出土した13砥石と第61号竪穴建物跡から出土した砥石が接合した。両者の間隔は25m、床面積の大小の違いはあるが主軸方向は同じである。いずれもⅢ期に帰属する建物跡で、遺物出土状況から第61号竪穴建物跡の7砥石埋没が遅かったとみられる。古代集落の変遷と構成において興味深い資料である。

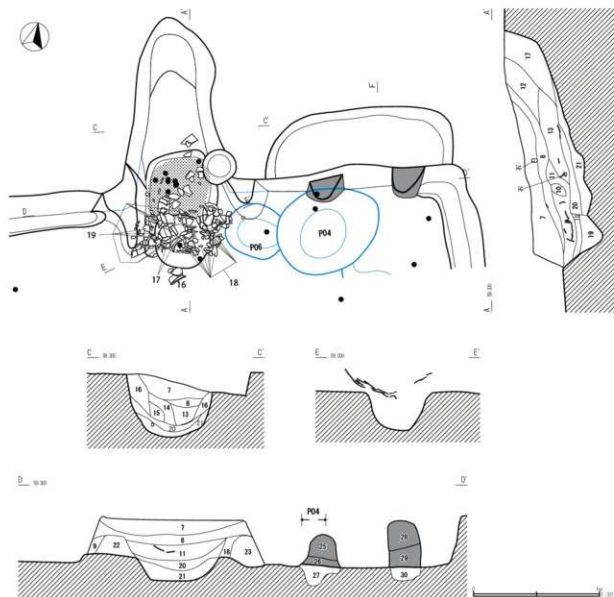


5159 土層説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 白色粒少量含
2. 10YR3/4 暗褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 灰化粒少量含
3. 10YR2/4 暗褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘多量含 灰化粒少量含
4. 10YR3/4 暗褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含
5. 10YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 IR(φ10~30mm) 少量含
6. 10YR3/4 暗褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含
7. 10YR4/4 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘多量含 灰化粒少量含 白色粒少量含
8. 10YR4/4 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 灰化粒少量含 L. 粘少量含
9. 10YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 灰化粒少量含
10. 10YR2/3 暗褐色土 L. 中~弱 L. 粘少量含 IR(φ10~30mm) 多量含 焼土粒少量含
11. 7.5YR4/6 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含
12. 7.5YR4/6 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 焼土粒φ10mm 多量含 L. 粘多量含
13. 10YR4/6 赤褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 灰化粒少量含 焼土粒φ30~60mm 多量含 L. 粘少量含
14. 10YR4/4 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 IR(φ10~30mm) 少量含 灰化粒少量含
15. 10YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含
16. 10YR4/4 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ10~30mm) 少量含
17. 10YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ10~30mm) 多量含 焼土粒少量含
18. 10YR2/4 暗褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘(φ30mm) 多量含 φ10~30mm内蔵片多量含

19. 10YR0/6 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含 灰化粒少量含
20. 7.5YR4/6 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含 灰化粒少量含
21. 7.5YR4/4 褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含 灰化粒少量含
22. 10YR0/2 灰黄褐色粘質土 L. 中~弱粘性弱 焼土粒少量含 焼土粒φ50~80mm 多量含(土質) 粘弱
23. 10YR0/2 灰黄褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含(土質) 粘弱
24. 10YR0/4 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 白色粒土R(φ10~50mm) 多量含 焼土粒少量含
25. 10YR0/2 褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含  
土質: 砂中~粘(φ10~50mm) 多量含
26. 10YR0/2 灰黄褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 L. 粘少量含 焼土粒少量含  
土質: 砂中~粘(φ30~300mm) 多量含 焼土粒φ70mm 少量含
27. 10YR0/6 褐色土 L. 中~弱 灰化粒少量含 焼土粒少量含 粘土粒φ10~30mm 少量含
28. 10YR0/2 褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 白色粒少量含 L. 粘少量含 焼土粒少量含
29. 10YR0/2 灰黄褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 灰化粒少量含
30. 10YR0/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ30~70mm) 多量含 焼土粒少量含
31. 10YR0/4 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ10~30mm) 少量含 灰化粒少量含
32. 10YR0/4 褐色粘質土 粘性强 L. 中~弱 焼土粒少量含 L. 粘少量含 灰化粒少量含
33. 10YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ10~30mm) 少量含 焼土粒少量含
34. 10YR0/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 IR(φ30~70mm) 多量含 焼土粒少量含(粘方)
35. 7.5YR4/6 褐色土 L. 中~弱 L. 粘多量含 焼土粒少量含 IR(φ10~30mm) 多量含
36. 10YR4/4 赤褐色土 L. 中~弱 焼土粒少量含 焼土粒φ10~70mm 多量含 L. 粘多量含 灰化粒少量含

第179图 第59号竪穴建物跡1



第180図 第59号竪穴建物跡2

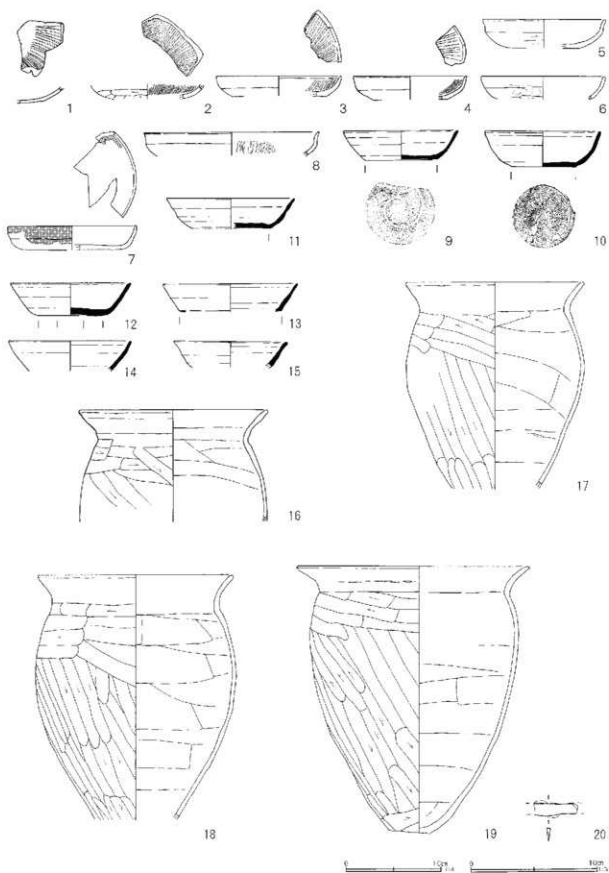
第59号竪穴建物跡（第179・180図）

位置 BM—AP、BN—APグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無い。

規模 長軸5.45m×短軸4.18m、床面積19.24㎡、確認面からの壁高は0.40m、主軸方向はN-20°-W、形状タイプはI B4dである。

概要 本跡東側が部分的に試掘坑と重なっているものの遺存状況は概ね良好である。平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cm、燃焼部内の火床面に明瞭な被熱痕が確認された。両軸とも遺存し、砂礫を混入する灰黄褐色粘質土で構築されている。また、煙道部は燃焼部から緩やかに20cm上がり、そこから先端部まで急角度で立ち上がる。壁から煙道部先端まで1.60mを測る。カマドより40cm東の壁面に砂礫を多量に混入した褐灰色粘土で構



第181图 第59号竖穴建物跡出土遺物

第59表 第59号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.7)	-	AB	褐色	良好	体一部破片	底部ヘラ削り 内面放射状暗文
2	土師器 坏	-	(1.6)	-	AB/K	褐色	良好	体一部破片	体部ヘラ削り 内面放射状暗文 平底
3	土師器 坏	(13.2)	(2.2)	-	AB1	褐色	良好	10%	体部ヘラ削り 内面放射状暗文 平底
4	土師器 坏	(11.8)	(2.5)	-	AB1	こぶい縞	良好	10%	体部ヘラ削り 内面放射状暗文 平底
5	土師器 坏	(12.8)	(3.0)	-	ABC1	褐色	良好	10%	体部ヘラ削り
6	土師器 坏	(13.0)	(2.4)	-	AB/K	褐色	良好	口縁一体部片	体部ヘラ削り 外面指環状文
7	土師器 坏	(13.6)	(2.5)	-	AB1	胡褐色	良好	10%	体部ヘラ削り 平底 油埋付着
8	土師器 坏	(16.4)	(2.6)	-	AB1	こぶい赤縞	良好	口縁一体部片	体部ヘラ削り 内面放射状暗文
9	須恵器 坏	(12.2)	(3.1)	(7.6)	ABDFGH	灰黄	良好	40%	南比企産 糸切後全蓋ヘラ削り
10	須恵器 坏	(12.0)	(3.8)	6.8	ABDFGH	灰黄	良好	10%	南比企産 糸切後全蓋ヘラ削り 底部内面摩耗痕あり
11	須恵器 坏	(13.4)	(3.2)	(8.0)	ABDFM	灰黄	良好	10%	南比企産 糸切後全蓋ヘラ削り
12	須恵器 坏	(12.8)	(3.4)	(6.8)	ABDFM	灰黄	良好	40%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り 底部内面摩耗痕あり
13	須恵器 坏	(14.0)	(2.9)	-	ABF	灰黄	良好	口縁部片	南比企産
14	須恵器 坏	(12.8)	(3.2)	-	ABDFM	灰白	良好	口縁部片	南比企産
15	須恵器 坏	(11.8)	(2.8)	-	ABDFM	灰白	良好	口縁部片	南比企産
16	土師器 壺	(19.8)	(11.8)	-	AB1N	こぶい縞	良好	口縁一胴部片	外面上部横位ヘラ削り 中部縦位ヘラ削り
17	土師器 壺	(16.8)	(21.8)	-	ABC1	こぶい赤縞	良好	口縁一胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り 中部縦位ヘラ削り 内面ヘラ削り
18	土師器 壺	20.4	(26.0)	-	AB1	こぶい縞縞	良好	口縁一胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り 外蓋中部縦位ヘラ削り 外蓋上部縦位ヘラ削り
19	土師器 壺	24.4	28.5	4.4	AB1N	胡赤色	良好	口縁一底部片	くの字に屈曲する 外面上部横位ヘラ削り 中部縦位ヘラ削り 下部縦位ヘラ削り
20	鉄製品 刀子	長さ(3.4)cm	幅(0.9~1.0)cm	厚さ0.3cm	重さ3.1g				片割

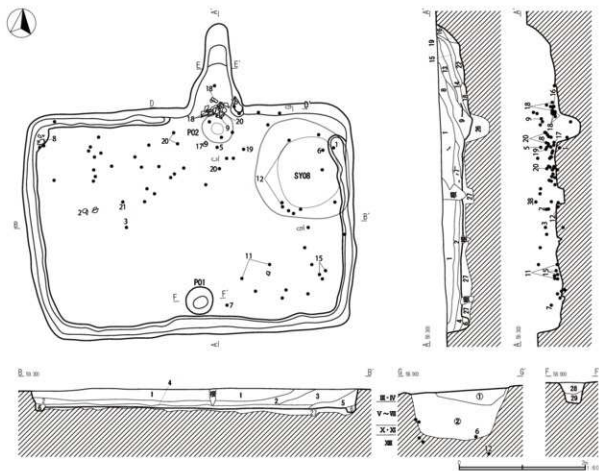
築付された袖状施設を確認した。被熱痕や燃焼部・煙道部のような掘込みは無い。北隣りに小規模な棚状施設が確認された。床面から約30cm上がった壁外に奥行50cmの平坦部が造り出され、覆土には袖状施設と同じ灰白色粘土塊がみられ、棚状施設と袖状施設は一体のものと判断した。本跡中央部とカマドと対峙する南側の2カ所に地床炉を確認した。中央部の炉P08は深さ6cmの小形で、南側の炉P09は東西軸96cm×南北軸66cm、深さ10cmの大形である。床面は若干凹凸があり、カマド前から中央部にかけて顕著な硬化面を確認した。壁周溝はカマド下を除きほぼ全周する。廃絶時のピットは3基、他に東壁と南壁に沿うように壁周溝状の溝が確認された。掘方は6~12cmの深さで本跡全域に及ぶ。掘方ピットは11基確認され、P10~13は本跡四隅に位置し、いずれも深さ21~26cmの浅い掘込みである。遺物はカマド内に土師器壺を主体とした膨大な量の集中がみられる。掲載した4個体の土師器壺は容れ子状にしてカマド焚口上部に懸架したものと考えられる。遺物の総量は整理収納箱で1箱分である。

**遺物(第181図、第59表)** 土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋、土師器壺、鉄製品が出土した。1~8は土師器坏である。1~4は放射状の暗文が施されている。1は北武蔵型坏に暗文が施されている。2~4は口縁が直立しつつ立ちあがり、平底風である。7は油煙が付着している。平底である。9~15は南比企産の須恵器坏である。9~11は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。12は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。10・12は底部内面に摩耗痕がみられる。16~19は土師器壺である。「く」の字状壺である。20は鉄製品の刀子である。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 北壁東側の棚状施設とその南に隣接した袖状施設やカマドに対峙する地床炉P09などの存在から何等かの工房跡とみられる。





5160 土層説明

1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(60～70mm) 少量合 凹化砂少量合 1. 砂少量合
2. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 凹化砂多層合 埴土砂少量合
3. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(40～50mm) 少量合 1. 砂少量合 凹化砂少量合
4. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 凹化砂多層合 埴土砂少量合
5. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂少量合 埴土砂少量合 凹化砂少量合
6. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂少量合 埴土砂少量合 凹化砂少量合
7. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(60～80mm) 少量合 凹化砂多層合 1. 砂少量合
8. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(40～50mm) 少量合 凹化砂少量合
9. 1976/4 埴野土 上・中層 凹化砂多層合 1. 砂多層合 埴土砂少量合
10. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 1. 砂多層合 凹化砂少量合
11. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合
12. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 凹化砂少量合
13. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(60～70mm) 少量合 凹化砂少量合 1. 砂少量合
14. 1976/4 上・中層 埴野土 上・中層 埴土砂少量合 埴土厚(40～70mm) 多層合 凹化砂多層合 (917) 埴野土
15. 1976/4 上・中層 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(40～50mm) 多層合 1. 砂少量合
16. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 1. 砂多層合
17. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(60～70mm) 多層合 凹化砂多層合 1. 砂多層合
18. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(40mm) 少量合
19. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂少量合 1. 砂少量合
20. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 埴土厚(40～50mm) 少量合
21. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 埴土厚(60～70mm) 多層合 1. 砂多層合
22. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 1. 砂多層合
23. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 1. 砂多層合 凹化砂少量合 (917) 埴野土
24. 1976/4 埴野土 上・中層 埴土砂多層合 1. 砂少量合 凹化砂少量合 (917) 埴野土
25. 1. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 埴土砂多層合 凹化砂多層合
26. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 凹化砂少量合 1. 砂少量合
27. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 白色砂多層合 1. 砂少量合
28. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 1. 砂少量合 1. 砂少量合 凹化砂少量合
29. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 1. 砂少量合 1. 砂少量合 凹化砂少量合
30. 1976/4 埴野土 上・中層 1. 砂多層合 1. 砂少量合 1. 砂少量合 凹化砂少量合

第 182 図 第 60 号竪穴建物跡 1

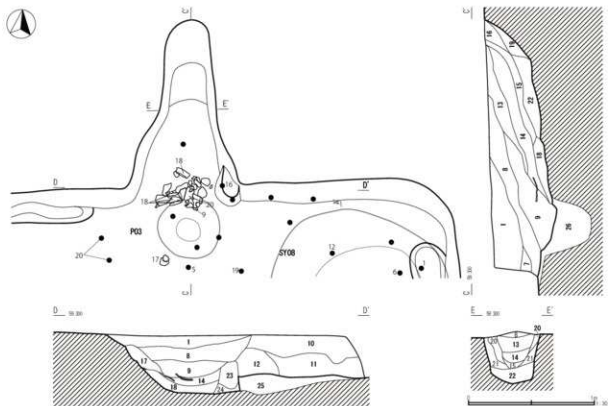
第 60 号竪穴建物跡 (第 182・183 図)

位置 B0-AP、BP-AP グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡北東隅角の床面下から大形で深い掘込みを確認し、白色粘土層である XⅢ層上面まで深く掘込まれているため、本書では土取り遺構と判断し第 8 号土取り遺構と命名した。本跡の粗掘り段階で掘込まれたとみられるため、重複は無い。

規模 長軸 5.24 m×短軸 3.51 m、床面積 15.48 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.30 m、主軸方向は N-5° -W、形状タイプは I B4a である。

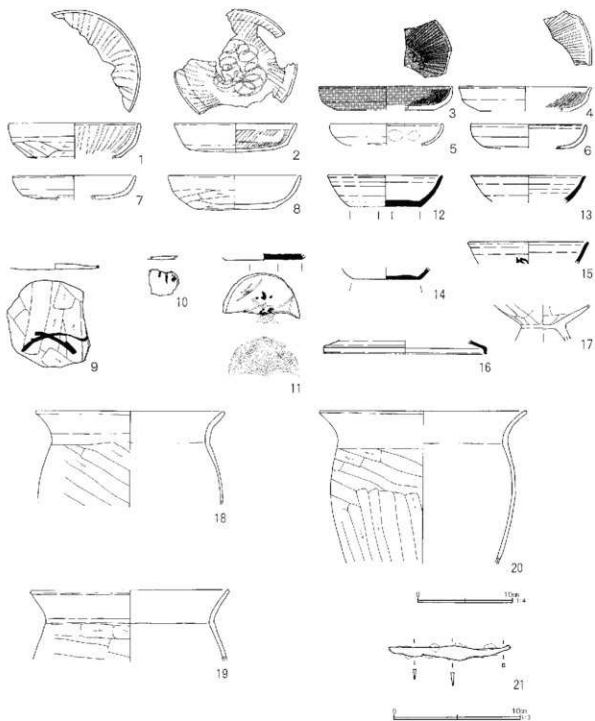
概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。カマドは北壁中央やや東寄りに付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 9 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。東側の形軸だけが遺存し、構築材はマンガン粒を含む褐色粘質土である。また、煙道部は燃焼部より幅を狭め約 45° の勾配で立ち上がる。壁周溝は東壁を除きほぼ全



第183図 第60号竪穴建物跡2

第60表 第60号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.8)	(3.7)	-	AB1K	赤	良好	30%	体部へう削り 内面放射状堆文 平産層
2	土師器 杯	12.8	3.1	-	AB2L	にぶい黄緑	良好	口縁~底部片	体部へう削り 内面放射状堆文 縦線状堆文 平産層 北武蔵型
3	土師器 杯	(14.2)	(2.5)	-	AB	赤	良好	30%	体部へう削り 内面放射状堆文 縦線状堆文 平産層 内外黄赤色
4	土師器 杯	(13.8)	(2.7)	-	AB1	赤	良好	口縁~底部片	体部へう削り 内面放射状堆文 平産層
5	土師器 杯	(11.8)	(2.3)	-	AB1	明赤褐	良好	20%	底部へう削り 内面縦筋圧痕 平産層
6	土師器 杯	12.2	2.5	-	AB1	赤	良好	30%	底部へう削り 平産層
7	土師器 杯	(13.0)	(2.5)	-	AB1	にぶい赤褐	良好	30%	底部へう削り
8	土師器 杯	(13.8)	3.7	(8.6)	AB2I	灰褐	良好	30%	体部へう削り
9	土師器 杯	-	0.8	-	AB1K	明赤褐	良好	底部片	底部へう削り 底部外面磨き「X」
10	土師器 杯	-	-	-	AB1	にぶい緑	良好	底部片	底部外面磨き「□」
11	深鉢器 杯	-	(9.4)	8.0	AB2M	灰オリーブ	良好	底部片	南北全産 糸切地内へう削り 底部外面磨き「□」 南北全産 糸切地内へう削り 底部外面磨き「小口(縦線)」
12	深鉢器 杯	(12.0)	(3.3)	(7.4)	AB2M	灰	良好	30%	南北全産 糸切地内へう削り
13	深鉢器 杯	(12.0)	(2.8)	-	AB2NM	灰オリーブ	良好	口縁底部片	未野焼
14	深鉢器 杯	-	(1.3)	(7.0)	AB2	灰黄	良好	底部片	南北全産 糸切地内へう削り
15	深鉢器 杯	(12.4)	(2.3)	-	AB2	灰	良好	口縁底部片	南北全産 体部外面磨き「□(万)」
16	深鉢器 蓋	(17.0)	(1.5)	-	AB2M	オリーブ灰	良好	口縁底部片	南北全産
17	土師器 柱付蓋	-	(3.9)	-	AB1J	明赤褐	良好	縁底部片	外面下部縦位へう削り
18	土師器 罐	(19.7)	(8.9)	-	AB1J/M	明赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部縦位へう削り 中部斜位へう削り
19	土師器 罐	(21.0)	(7.4)	-	AB1M	にぶい赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部縦位へう削り
20	土師器 罐	(21.8)	(16.3)	-	AB1M	明赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部縦位へう削り 中部斜位へう削り
21	鉄製品 刀子	長さ9.6cm	幅0.3~1.1cm	厚さ0.2cm	重25.4g				両側 刀部残存し鈍重



第184図 第60号竪穴建物跡出土遺物

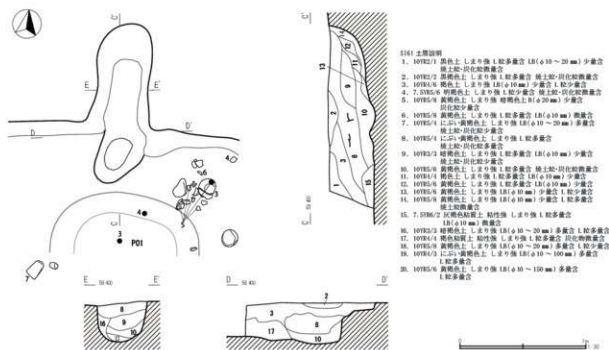
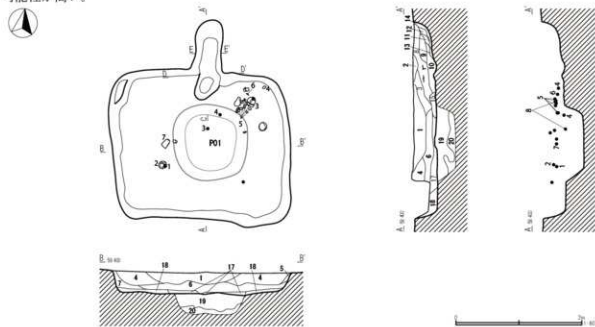
周する。床面は若干凹凸があり、本跡全城にわたって顕著な硬化部分を確認した。本跡廃絶時のピットはカマドと対峙する1基のみである。掘方は5～13cmの深さで本跡全城に及ぶ。遺物はカマド内と南東隅角のP01に集中がみられ、総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物（第184図、第60表）** 土師器環、須恵器環、須恵器蓋、土師器甕、土師器台付甕、鉄製品が出土した。1～10は土師器環である。1～4はいずれも平底風で内面に暗文が施され、1・4は放射状、2・3は体部に放射状、底部に螺旋状である。1～4は直立かわずかに外反する。5・6はわずかに内

湾し、平底風である。9・10は底部外面に墨書がある。11～15は須恵器環である。11・12は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。14は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。11は底部内面に摩擦痕がみられ、底部外面に墨書と弧状のヘラ書きされている。15は底部外面に墨書がある。13は未野産で、他は南比企産である。16は須恵器蓋である。17は土師器台付裏の接合部である。18～20は土師器甕である。「く」の字状甕である。21は鉄製品の刀子である。

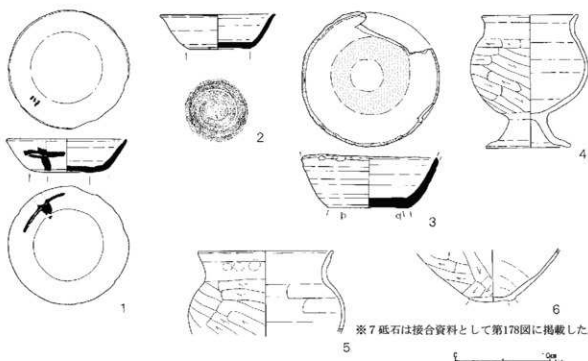
時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 本跡の粗掘り段階で第8号土取り遺構が掘込まれている。本跡のカマド構築材採取が目的だった可能性が高い。



第185図 第61号竪穴建物跡

- 51(1) 土層説明
1. 10YR2/1 黄褐色土、しまり強、L(砂多層) L8(φ10～20mm) 少量含、埴土跡・灰化跡多量含
  2. 10YR2/2 暗褐色土、しまり強、L(砂多層) 埴土跡・灰化跡多量含
  3. 10YR4/6 褐色土、しまり強、L8(φ10mm) 少量含、L(砂多層) 少量含
  4. 7.5YR5/6 明褐色土、しまり強、L(砂多層) 埴土跡・灰化跡多量含
  5. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、埴土跡・灰化跡少量含
  6. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L(砂多層) L8(φ10～10mm) 少量含
  7. 10YR2/1 に比べ黄褐色土、しまり強、L8(φ10～20mm) 多量含
  8. 10YR5/6 に比べ黄褐色土、しまり強、L(砂多層) 埴土跡・灰化跡多量含
  9. 10YR2/2 暗褐色土、しまり強、L(砂多層) L8(φ10mm) 少量含
  10. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L(砂多層) 埴土跡・灰化跡多量含
  11. 10YR4/1 褐色土、しまり強、L(砂多層) L8(φ10mm) 少量含
  12. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L(砂多層) L8(φ10mm) 少量含
  13. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L8(φ10mm) 少量含、L(砂多層) 少量含
  14. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L8(φ10mm) 少量含、L(砂多層) 埴土跡多量含
  15. 7.5YR6/2 灰褐色粘質土、粘性強、しまり強、L(砂多層) L8(φ10mm) 少量含
  16. 10YR2/3 暗褐色土、しまり強、L8(φ10～20mm) 多量含、L(砂多層) 少量含
  17. 10YR4/1 褐色粘質土、粘性強、しまり強、L(砂多層) 埴土跡多量含
  18. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L8(φ10～20mm) 多量含、L(砂多層) 少量含
  19. 10YR4/3 に比べ黄褐色土、しまり強、L8(φ10～100mm) 多量含、L(砂多層) 少量含
  20. 10YR5/6 黄褐色土、しまり強、L8(φ10～100mm) 多量含、L(砂多層) 少量含



第 186 図 第 61 号竪穴建物跡出土遺物

第 61 表 第 61 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	環形器 環	12.5	3.5	8.2	ABFGH	こぶい焼	不良	100%	南北断面 糸切線周辺へ少なり 縁部外周正位断面「十」 内部内周横位断面「三」
2	環形器 環	12.0	3.6	6.7	ABGIM	灰黄	不良	100%	本野盤 糸切線全面へ少なり
3	環形器 瓶	(13.9)	(5.4)	-	ABGHJKL	灰白	良好	10%	本野盤 断面内周縁部あり 断面部分のみを再整形 転用疑
4	土師器 台付壺	(11.0)	14.0	8.7	ABIK	こぶい焼	普通	口縁～胴部片	口縁その他 外周上部横位へ少なり 中部斜位へ少なり 内周之は付着
5	土師器 壺	(14.0)	(8.8)	-	ABJL	こぶい焼	良好	口縁～胴部片	外周上部横位へ少なり
6	土師器 台付壺	-	(5.5)	-	ABJLM	こぶい黄焼	良好	縁～底部片	外周下部横位へ少なり

### 第 61 号竪穴建物跡（第 185 図）

位置 BP-A0・AP グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無い。遺存は概ね良好。

規模 長軸 2.83 m × 短軸 2.30 m、床面積 4.94 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.33 m、主軸方向は N - 8° - W、形状タイプは I A1a である。

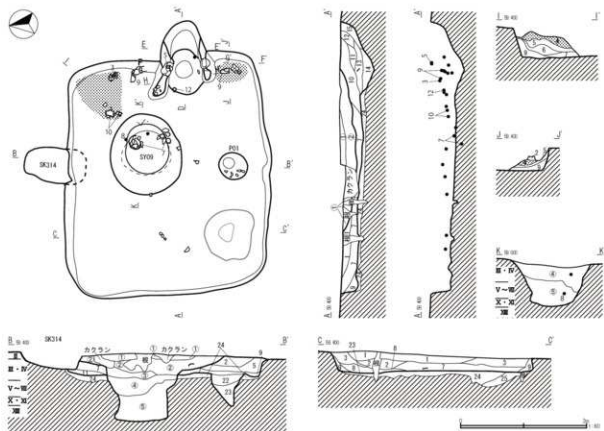
概要 遺存状況は概ね良好で、平面形はほぼ正方形である。覆土は上部の 1～4 層が一気に埋め戻したブロック堆積で 5 層以下はレンズ状に堆積している。カマドは北壁中央に付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 3 cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から灰黄褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。煙道部は先端部急角度で立ち上がり、壁から煙道先端まで 0.85 m を測る。壁溝は検出されなかった。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。廃絶時のピットは検出されず、本跡中央の床面下から方形で大型の掘方ピットが 1 基検出された。床面からピット底面までの深さは 35 cm である。覆土は黄褐色土塊を含む一気に埋め戻したブロック堆積であったが、灰白色粘土塊は含まれず、掘込みもⅢ層には達していなかったため掘方ピットとしたが、

土取り遺構の可能性は否定できない。遺物は本跡北東隅角から中央部にかけて集中がみられ、その大半は床面直上かそれに近い出土状況である。出土総量はポリ大袋に3袋分である。

**遺物(第186図、第61表)** 須恵器環、須恵器瓶、土師器甕、土師器台付甕が出土した。1・2は須恵器環である。1は南比産で体部内外面に墨書がある。底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。2は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。3は末野産で須恵器瓶の胴下半部を再利用している。破損面は研磨した痕跡がみえる。一部に摩耗痕がみられるため、転用甕と考えた。5は土師器甕である。4・6は土師器台付甕である。4・5は口縁が直立しつつ立ちあがり「コ」の字裏に近い。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

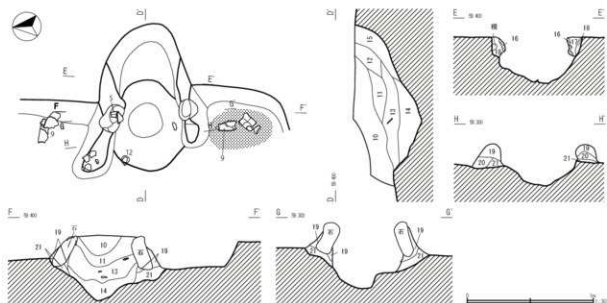
**特徴** 本跡出土の7砥石と第58号竪穴建物跡出土の13砥石が接合した。両者の間隔は25m、床面積の大小の違いはあるが主軸方向は同じである。いずれもⅢ期に帰属する建物跡で、遺物出土状況から本跡の砥石埋没が遅かったとみられる。古代集落の変遷と構成において興味深い資料である。



**58号土器説明**

1. 59W2/7 褐色土、しまり焼、1枚多量産、77少量産
2. 59W2/2 黄褐色土、しまり焼、1枚少量産
3. 59W1/4 褐色土、しまり焼、1枚少量産、177少量産
4. 59W5/6 赤褐色土、灰白色(φ10~30mm)少量産
5. 7.59W1/4 黄褐色土、しまり焼、1枚少量産、187(φ10mm)少量産
6. 59W1/4 黄褐色土、しまり焼、1枚少量産
7. 59W5/6 黄褐色土、しまり焼、1枚少量産、181(φ10mm)少量産
8. 59W1/2 二色黄褐色土、しまり焼、1枚少量産、181(φ10~100mm)少量産
9. 59W1/4 黄褐色土、しまり焼、1枚少量産、181(φ10~30mm)多量産
10. 59W1/4 褐色土、しまり焼、1枚少量産、焼土炊飯器蓋
11. 7.59W1/2 黄褐色土、しまり焼、  
径1.8(φ10mm)少量産、径上炊少量産、径上炊少量産
12. 7.59W1/2 黄褐色土、しまり焼、径上(φ10mm)多量産、径上炊多量産、径上炊飯器蓋
13. 7.59W1/2 黄褐色土、しまり焼、径上(φ10~20mm)多量産、径上炊少量産、径上炊少量産
14. 7.59W1/2 二色黄褐色土、しまり焼、  
径上(φ10mm)少量産、径上炊多量産、径上炊少量産、  
181(φ10mm)少量産、181(φ10~40mm)少量産、181(φ10~100mm)少量産、181(φ10~100mm)少量産、181(φ10~40mm)少量産、181(φ10~100mm)少量産、181(φ10~100mm)少量産
15. 59W5/6 黄褐色土、しまり焼、径上炊少量産
16. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、径上炊少量産
17. 7.59W1/2 褐色土、しまり焼、径上炊多量産、1枚少量産
18. 59W5/6 黄褐色土、しまり焼、黄褐色土、径上(φ10mm)少量産、径上炊少量産、1枚少量産
19. 59W1/2 二色黄褐色土、粘り性、しまり焼、  
黄褐色土、径上(φ10~20mm)多量産、径上炊少量産、径上炊飯器蓋(191)炊飯器
20. 59W1/2 二色黄褐色土、粘り性、しまり焼、  
黄褐色土、径上(φ10~20mm)少量産、径上炊飯器蓋(191)炊飯器
21. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、径上炊少量産、径上炊飯器蓋(191)炊飯器
22. 59W1/4 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)少量産、1枚少量産
23. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
24. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
25. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
26. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
27. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
28. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
29. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
30. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
31. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
32. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
33. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
34. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
35. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
36. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
37. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
38. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
39. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
40. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
41. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
42. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
43. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
44. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
45. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
46. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
47. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
48. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
49. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
50. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
51. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
52. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
53. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
54. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
55. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
56. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
57. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
58. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
59. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
60. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
61. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
62. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
63. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
64. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
65. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
66. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
67. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
68. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
69. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
70. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
71. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
72. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
73. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
74. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
75. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
76. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
77. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
78. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
79. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
80. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
81. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
82. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
83. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
84. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
85. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
86. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
87. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
88. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
89. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
90. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
91. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
92. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
93. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
94. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
95. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
96. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
97. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
98. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
99. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産
100. 59W1/6 黄褐色土、しまり焼、181(φ10~20mm)多量産、1枚少量産

第187図 第62号竪穴建物跡1



第188図 第62号竪穴建物跡2

#### 第62号竪穴建物跡（第187・188図）

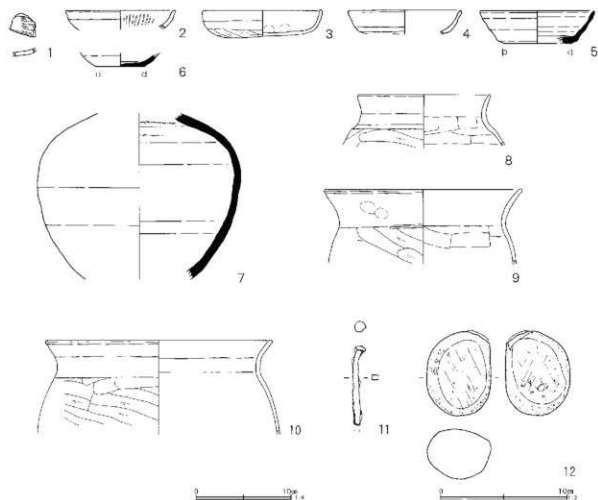
**位置** BP-A0・APグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 北壁で第314号土坑、本跡中央で第9号土取り遺構と重複し、いずれも本跡が古い。第9号土取り遺構は本跡確認時から検出されている。本跡上部は削平されているが、恐らく本跡が完全埋没する前段階で土取り遺構が掘込まれたと考える。

**規模** 長軸3.73m×短軸3.27m、床面積9.96㎡、確認面からの壁高は0.24m、主軸方向はN-87°-W、形状タイプはⅡB2eである。

**概要** 他遺構との重複があったり擾乱を受けたりして、遺存状況は良好ではない。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央やや南寄りに付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cmである。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖とも遺存し、灰黄褐色粘質土で構築されている。また、細長い円礫を立てその上部に須恵器環を逆位に被せて袖部の芯材としている。煙道部は火床面から緩傾斜で20cm上がったところで約70°の急勾配で立ち上がり、平面形状は幅広いU字形である。壁から煙道部先端まで0.50mを測る。本遺跡のなかでもすこぶる遺存状態のいいカマドで天井部の焼土塊中に切り藁を混ぜたスサ痕が明瞭に観察出来た。床面はやや凹凸があり、カマド前に明瞭な硬化面を確認した。壁周溝は確認されなかった。廃絶時のピットは1基確認され、そのうち中央南側で検出されたP01は床面から深さ45cmである。本跡東側に炭化物を混入する厚さ6～12cmの焼土層が確認された。ある程度埋没してからの焼土層なので本跡廃絶後に窪地を利用した焼却によるものとみられる。遺物は本跡北東隅角から中央部にかけて集中がみられ、その大半は床面直上かそれに近い出土状況である。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物（第189図、第62表）** 土師器環、須恵器環、須恵器瓶、土師器甕、鉄製品、石製品が出土した。1～4は土師器環である。1・2は体部内面に放射状の暗文が施されている。2・4は口縁が広がるよ



第189図 第62号竪穴建物跡出土遺物

第62表 第62号竪穴建物跡出土遺物観察表

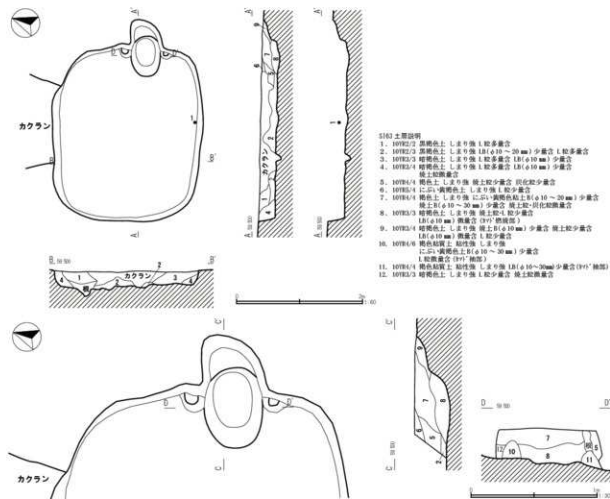
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(0.4)	-	AB1	こぶい赤褐	良好	体~底部片	体部~底部へラ削り 内面放射状曜文
2	土師器 坏	(11.4)	(2.1)	-	AB1J	赤	良好	口縁~体部片	内面放射状曜文
3	土師器 坏	12.4	2.8	-	AB1	灰褐	良好	90%	底部へラ削り 平底黒
4	土師器 坏	(11.8)	(2.4)	-	AB1KM	明赤褐	良好	口縁~体部片	平底
5	須恵器 坏	(12.0)	(3.4)	(7.3)	AB0M	灰	良好	90%	末野産 糸切のみ
6	須恵器 坏	-	(1.5)	5.3	AB0M	緑灰	良好	底部片	末野産 糸切のみ
7	須恵器 長頸瓶	-	(17.4)	-	AB0FM	明褐灰	良好	胴部片	南比企産
8	土師器 甕	(13.8)	(5.5)	-	AB1KM	こぶい赤褐	良好	口縁部片	外面上部横位へラ削り
9	土師器 甕	(20.6)	(8.1)	-	ABM	こぶい赤褐	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へラ削り
10	土師器 甕	(23.6)	(10.4)	-	ABM	赤	良好	口縁~胴部片	外面上部横位へラ削り
11	鉄製品 釘	長さ(8.7)cm 幅0.3cm 厚さ6.5cm 重さ4.6g							
12	石製品 砥石	長さ6.6cm 幅5.0cm 厚さ4.0cm 重さ72.2g							石材野石

うに立ちあがる。3が平底風で、4が平底である。5・6は末野産で須恵器坏である。底部は糸切り後無調整である。7は南比企産の須恵器長頸瓶である。8～10は土師器甕である。9は「く」の字であるが、8・10は口縁付近を撫でており、移行期と考えられるものである。11は鉄製品の釘である。12は石製品の砥石である。軽石製の円形礫をそのまま使用している。



時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 本跡廃絶後に掘削された土取り遺構と厚い焼土の堆積は本跡埋没途中段階における窪地利用が興味深い。また、坏をカマド袖石に被せる様相はカマド祭祀を想起させる。



第190図 第63号竪穴建物跡

第63号竪穴建物跡(第190図)

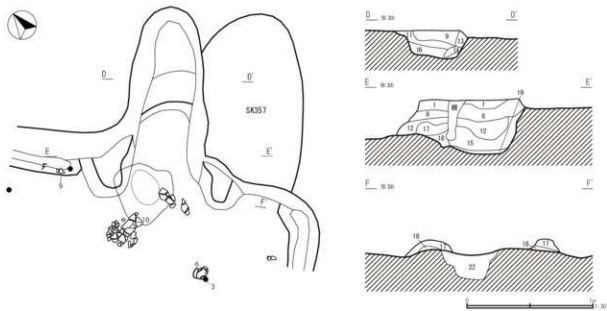
位置 BR-A0グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 重複は無い。遺存は概ね良好。

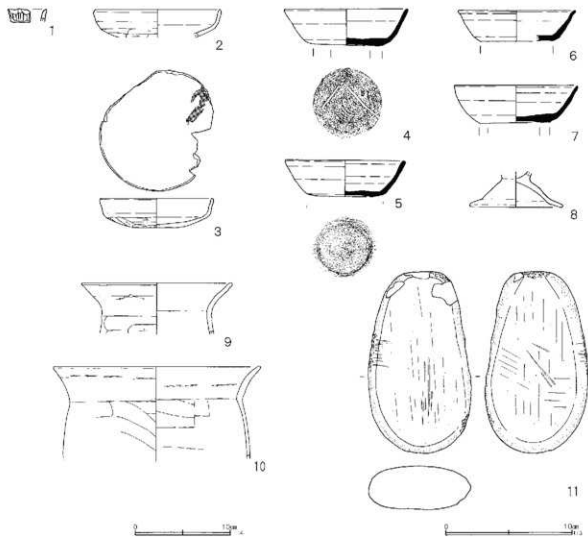
規模 長軸 2.81m×短軸 2.39m、床面積 4.67㎡、確認面からの壁高は0.25m、主軸方向はN-70°-E、形状タイプはII B1cである。

概要 本跡北西側を部分的に擾乱されており、遺存状況は良好ではない。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる隅丸長方形である。覆土は上部の1~3・5・6層が一気に埋め戻したブロック堆積で4層とそれ以下はレンズ状に堆積しているとみられる。カマドは東壁中央南寄りに付設され、燃焼部の1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cmである。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖とも遺存し、褐色粘質土で構築されている。煙道部は燃焼部から急勾配で10cm上がったところで緩やかに立ち上がる。床面は凹凸があり、顕著な硬化面は確認できなかった。壁周溝やピットは確認されなかった。遺物は特に集中はみられない。遺物の総量はポリ中袋に1袋分である。





第193图 第64号竖穴建物跡2



第194图 第64号竖穴建物跡出土遺物

第64表 第64号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.4)	-	AB1	黄	良好	口縁部片	内面放射状刻文
2	土師器 坏	(13.2)	(3.0)	-	AB1K	こぶい赤褐	良好	20%	縁部ヘラ削り
3	土師器 坏	(11.8)	3.1	-	AB1K	こぶい黄褐	良好	90%	縁部ヘラ削り 内面油塗付着
4	須恵器 坏	13.0	3.8	7.3	ABGHM	灰黄	良好	100%	糸切後周辺ヘラ削り ヘラ書き「ハ」 口縁部自然輪付着
5	須恵器 坏	(12.4)	(3.0)	(6.0)	ABFM	灰	良好	70%	南比企産 糸切後全面ヘラ削り 裏面内面障材痕あり
6	須恵器 坏	(12.2)	(3.3)	(7.8)	ABFM	灰	良好	20%	南比企産
7	須恵器 坏	12.9	4.0	7.5	ABFM	灰	良好	90%	南比企産 糸切後周辺ヘラ削り 裏面内面障材痕あり
8	土師器 台付甕	-	(3.8)	(3.8)	ABM	こぶい赤褐	良好	脚部片	内面ヘラナデ・ナデ
9	土師器 甕	(15.7)	(5.5)	-	ABM	明赤褐	良好	口縁部片	くの字に彫造する 外面上部緑色ヘラ削り
10	土師器 甕	(21.8)	(9.9)	-	AB1M	明赤褐	良好	口縁～脚部片	くの字に彫造する 外面上部緑色ヘラ削り
11	石製品 砥石	長さ14.3cm 幅6.1cm 厚さ3.5cm 重さ645.0g							石材頁岩 表面数ヶ所刃物痕あり

**概要** 平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となるとみられる長方形である。覆土は上部の1・2層が一気に埋め戻したブロック堆積で3層以下はレンズ状に堆積している。カマドは東壁中央やや南寄りに付設され、燃焼部の2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ5cmである。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖とも遺存し、浅黄橙色粘質土で構築されている。煙道部は燃焼部から45°の急勾配で28cm上がったところで緩やかに立ち上がる。壁から煙道部先端まで1.20mを測る。本跡中央部で深さ2cmと浅い小形の地床炉を確認した。床面はほぼ平坦で調査できた部分では全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝も調査できた部分ではカマド下を除き全周する。廃絶時のピットは2基、掘方ピットは3基確認された。遺物はカマド前に集中がみられ、他は全体に散在する。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物(第194図、第64表)** 土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋、土師器甕、土師器台付甕、石製品が出土した。1～3は土師器坏である。1は体部内面に放射状の暗文が施されている。口縁が直立しつつ立ちあがる。3は油煙が付着している。4～7は南比企産の須恵器坏である。4は底部外面にヘラ書きがみられる。5は底部が糸切り後全面ヘラ削りである。4・7は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。9・10は土師器甕である。「く」の字状である。8は台付甕の脚部である。11は石製品の砥石である。頁岩の楕円形礫を利用する。一部に敲打痕が見える。平坦部に刃物痕を多数残している。

**時期** 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

**特徴** カマドと地床炉を併設することから紡織生産などに関連した工房跡とみられる。

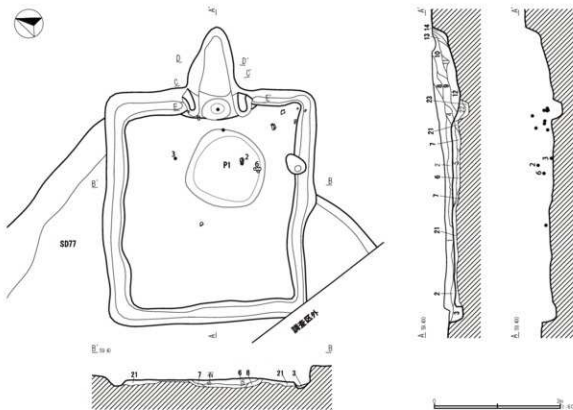
#### 第65号竪穴建物跡(第195・196図)

**位置** BS-APグリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 本跡西側の大半で第77号溝と重複し、本跡のほうが古い。

**規模** 長軸3.71m×短軸3.27m、床面積9.83㎡、確認面からの壁高は0.16m、主軸方向はN-68°-E、形状タイプはⅡA2bである。

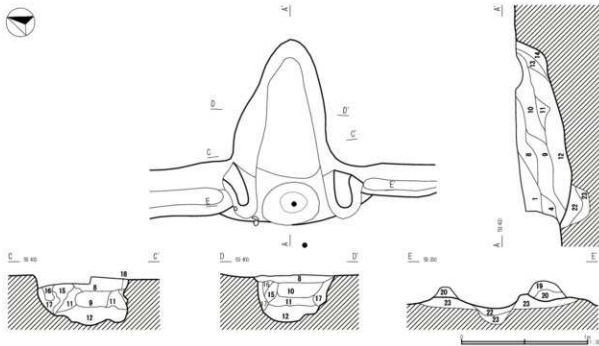
**概要** 第77号溝に上部を切られているが、遺存状況は概ね良好である。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土は掘込みが浅く不詳である。カマドは東壁中央に付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ15cmである。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられ



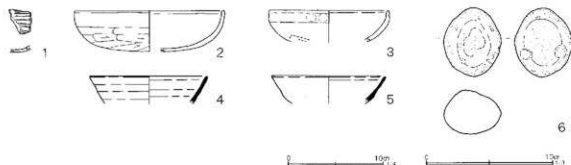
5165 土层剖面

1. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 7 个陶器含 1 枚少骨器
2. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器 1 枚多骨器
3. 30PK3 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器 1 枚少骨器
4. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1 枚多骨器 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器
5. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 多骨器 1 枚多骨器
6. 30PK3 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 多骨器 1 枚多骨器
7. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 10 mm) 少骨器 墙上灰少骨器
8. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1 枚少骨器 同位物 墙上灰少骨器
9. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 10 枚骨-墙上灰少骨器
10. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 同位物-墙上灰少骨器 土-1 层物粘土上 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器
11. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 墙上灰少骨器 土-2 层物粘土上 1.81 (ø 20 mm) 少骨器
12. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 墙上灰 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 多骨器 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器  
同位物少骨器 19 个陶器
13. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 墙上灰 1.81 mm) 少骨器 墙上灰少骨器 同位物陶器
14. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1 枚少骨器 墙上灰陶器
15. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 墙上灰少骨器 墙上灰 1.81 (ø 10 ~ 30 mm) 少骨器
16. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 墙上灰少骨器 1 枚少骨器
17. 土-2 层物 粘土 粘物 土中夹 小 (ø 10 mm) 少骨器 墙上灰少骨器
18. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 墙上土
19. 30PK4 同位物粘土, 土中夹
20. 30PK4 灰褐色粘土, 同位物 粘土 (ø 10 mm) 少骨器 1 枚陶器 (19 个陶器)  
1.81 (ø 10 mm) 少骨器
21. 30PK2 灰褐色土, 粘物 土中夹 1 枚少骨器 墙上灰陶器 (19 个陶器)
22. 30PK2 灰褐色土, 土中夹 1.81 (ø 20 mm) 少骨器 1 枚少骨器
23. 30PK4 灰褐色土, 土中夹 小 (ø 10 mm) 少骨器 1.81 (ø 10 mm) 陶器 1 枚陶器

第 195 图 第 65 号竖穴建物跡 1



第 196 图 第 65 号竖穴建物跡 2



第197図 第65号竪穴建物跡出土遺物

第65表 第65号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(0.7)	-	AB1	明赤褐色	良好	鉢-蓋部片	鉢部・蓋部へう削り 内面放射状暗文
2	土師器 坏	(15.6)	4.1	-	AB1	にぶい赤褐色	良好	DB	鉢部へう削り 丸底
3	土師器 坏	(12.6)	3.3	-	AB1	にぶい赤褐色	良好	DB	鉢部へう削り 丸底
4	須恵器 坏	(12.4)	(2.8)	-	ABFC	灰黄	良好	口縁部片	南比企産
5	須恵器 坏	(12.0)	(2.8)	-	ABFCM	灰黄	良好	口縁部片	南比企産
6	石製品 砥石	長さ5.4cm	幅4.5cm	厚さ3.5cm	重さ47.2g				石材軽石

るが明瞭ではない。袖部は両袖とも遺存し褐色粘質土で構築されている。煙道部は燃焼部から65°の急勾配で立ち上がり、壁から先端まで0.95mを測る。床面は凹凸があり本跡全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝もカマド下を除き全周する。廃絶時のピットは南壁際に1基、掘方は5～10cmの深さで本跡全域に及ぶ。掘方ピットはカマド燃焼部下に17cmのものと中央部に深さ11cmで底面平坦な大形ピットが確認された。遺物は本跡南東側に集中がみられ、総量はポリ中袋に2袋分である。**遺物**（第197図、第65表）土師器坏、須恵器坏、石製品が出土した。1～3は土師器坏である。1は内面に放射状の暗文が施されている。2・3は直立しつつ立ちあがる。丸底である。4・5は南比企産の須恵器坏である。6は石製品の砥石である。軽石製の円形礮をそのまま使用している。

時期 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

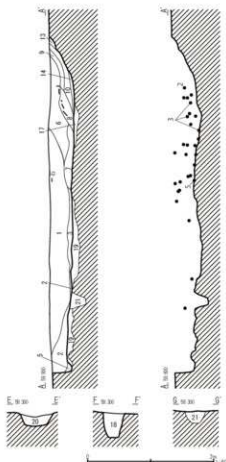
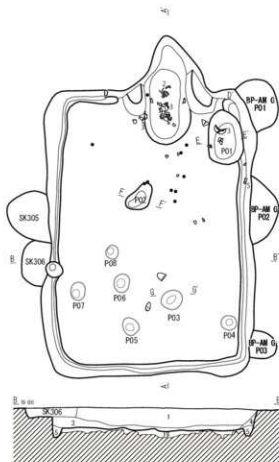
#### 第66号竪穴建物跡（第198・199図）

位置 BP-AL・AMグリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡北壁で第305・306号土坑、南壁でP01～03（BP-AMグリッド）と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

規模 長軸4.55m×短軸3.18m、床面積11.88㎡、確認面からの壁高は0.36m、主軸方向はN-77°-E、形状タイプはⅡB3cである。

概要 土坑やピットに切られているが遺存状況は概ね良好である。平面形はカマドに沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土は上部の1層が一気に埋め戻したブロック堆積で2層以下はレンズ状に堆積している。カマドは東壁中央や南寄りに付設され、燃焼部の1/2が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cmと浅い。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は両袖とも遺存し、褐色粘質土で構築されている。煙道部は燃焼部から30°の緩やかな勾配で立ち上がる。床面は凹凸



5190 土層説明

1. 101R2/2 黒褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒多量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 少量 焼土粒少量
2. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 白色粒少量 1R( $\phi 10 \sim 50 \text{ mm}$ ) 少量
3. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 1R( $\phi 30 \sim 50 \text{ mm}$ ) 多量
4. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 白色粒少量 1R( $\phi 30 \sim 50 \text{ mm}$ ) 多量
5. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 1R( $\phi 30 \sim 50 \text{ mm}$ ) 多量
6. 101R2/2 黒褐色土 しまり目 土粒多量 同化粒少量 焼土粒少量 白色粒多量
7. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 同化粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 同化粒少量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 少量
8. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 同化粒少量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量
9. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 同化粒少量 同化粒少量
10. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 同化粒少量 同化粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 少量
11. 101R/4 褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 同化粒少量
12. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒多量 白色粒少量
13. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量
14. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 同化粒少量 (171) 焼灰
15. 101R/1 褐色粘質土 粘性強 しまり目 土粒多量 同化粒少量 焼土粒多量 同化粒少量 (171) 焼灰
16. 101R/4 褐色粘質土 粘性強 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 (171) 焼灰
17. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 30 \sim 50 \text{ mm}$ ) 多量
18. 101R2/2 黒褐色土 しまり目 土粒多量
19. 101R/4 暗褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 1R( $\phi 10 \sim 30 \text{ mm}$ ) 多量 褐色粒少量 (焼灰)
20. 101R2/3 暗褐色土 しまり目 土粒多量 1R( $\phi 10 \sim 50 \text{ mm}$ ) 多量 焼土粒多量 同化粒少量
21. 101R2/2 黒褐色土 しまり目 土粒多量 焼土粒少量 白色粒多量 同化粒少量

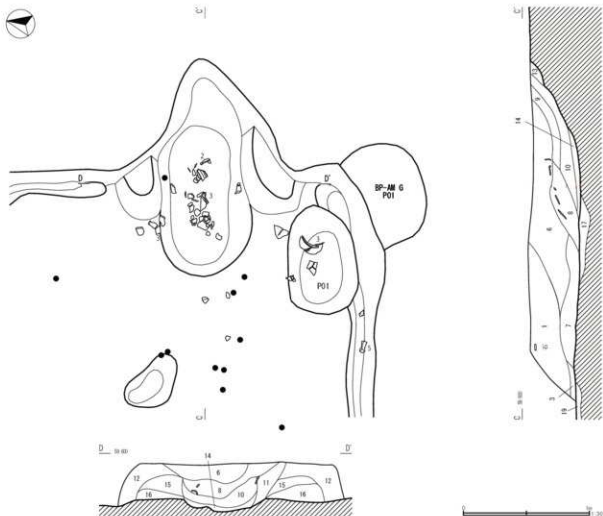
第 198 図 第 66 号竪穴建物跡 1

があり本跡全面にわたって顕著な硬化面を確認した。壁周溝もカマド下を除き全周する。廃絶時のピットは南東隅角に P01、中央部に深さ 46cm の P02 の 2 基である。P01 は覆土に多量の焼土が含まれ、底面も所々被熱痕がみられる。掘方は 5 ~ 10cm の深さで本跡全城に及ぶ。掘方ピットは本跡西側に深さ 17 ~ 24cm の小ピットが 6 基確認された。遺物はカマド内とカマド前に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 2 袋分である。

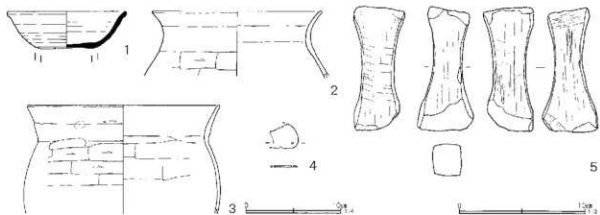
**遺物 (第 200 図、第 66 表)** 須恵器坏、土師器甕、銅製品、石製品が出土した。1 は末野産で須恵器坏である。底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。2・3 は土師器甕である。屈曲が弱く、移行期のものと考えられる。4 は銅製品の帯金具である。丸鞘の裏板部分である。5 は石製品の砥石である。凝灰岩製で多数の刃物痕がみられる。

**時期** 9 世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 本跡から出土した銅製帯金具は本遺跡の古代集落における役人の存在を想起させる遺物である。



第199図 第66号竪穴建物跡2

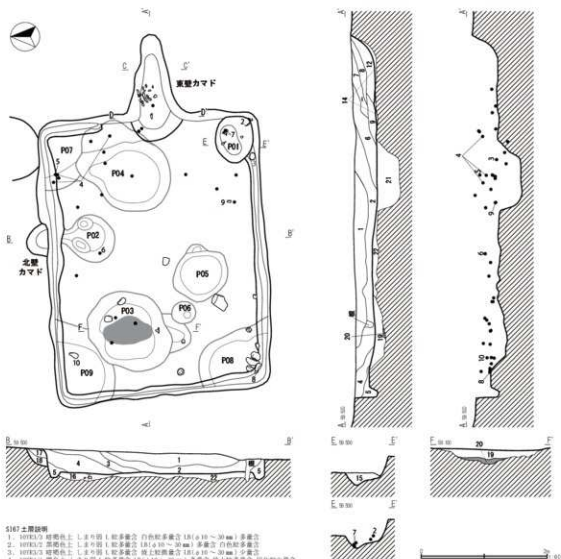


第200図 第66号竪穴建物跡出土遺物

第66表 第66号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	酒器 杯	(12.4)	3.9	(8.6)	ABDM	灰黄褐	良好	75%	木野庵 糸切後用辺へラ削り
2	土師器 壺	(17.8)	(7.2)	-	AB1	明赤褐	良好	口縁~胴部片	外面上部横位へラ削り
3	土師器 壺	(20.2)	(11.5)	-	AB1M	明赤褐	良好	口縁~胴部片	外面上部横位へラ削り中部縦位へラ削り
4	押形 丸鉢	長さ(2.2)cm	幅(1.9)cm	厚さ0.2cm	量さ1.3g				製製品
5	石製品 碇石	長さ9.7cm	幅4.3cm	厚さ3.6cm	量さ156.3g				石材層況岩 破面は4面 万物痕跡あり 破断の痕跡あり





5167 土器説明

1. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、白色粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量
2. HVE1/2 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、白色粘土層
3. HVE1/2 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量
4. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、焼土粘土層、灰化粘土層
5. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、焼土粘土層
6. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、灰化粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量、焼土粘土層、白色粘土層
7. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量
8. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、焼土粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、1. 粘土層
9. HVE1/4 埴輪粘土、1. 粘土層、灰化粘土層、焼土粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量 (31#) 焼土層
10. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量、焼土粘土層、灰化粘土層
11. HVE1/4 埴輪粘土、1. 粘土層、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量 (31#) 焼土層
12. T-031/2 埴輪粘土、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、焼土粘土層、焼土粘土層 (31#) 焼土層
13. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、焼土粘土層 (31#) 焼土層
14. HVE1/4 埴輪粘土、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量、焼土粘土層
15. HVE1/3 埴輪粘土、しまり目、焼土粘土層、焼土粘土層
16. HVE1/3 埴輪粘土、1. 粘土層、焼土粘土層、灰化粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量
17. HVE1/4 埴輪粘土、1. 粘土層、1. 粘土層、焼土粘土層、焼土粘土層 (31#) 焼土層
18. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、灰化粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量
19. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量
20. HVE1/4 埴輪粘土、1. 粘土層、1. 粘土層
21. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層、焼土粘土層、焼土粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 多量、埴輪粘土 (31#) 多量
22. HVE1/4 埴輪粘土、しまり目、1. 粘土層 (L1:  $\phi 10 \sim 30$  mm) 少量 (31#)

第 201 図 第 67 号竪穴建物跡 1

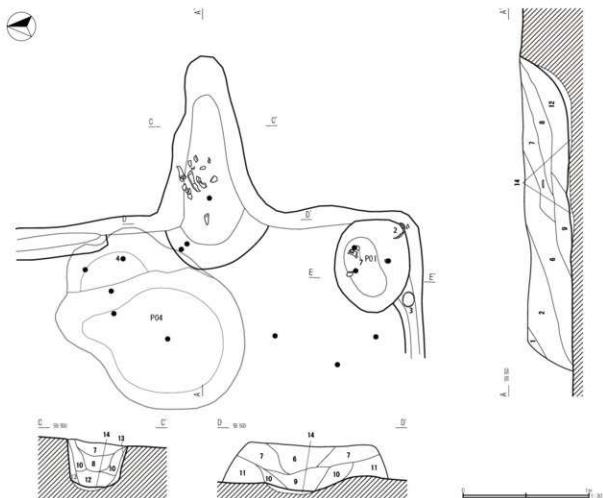
第 67 号竪穴建物跡 (第 201・202 図)

位置 BN—AL グリッドの台地平面に位置する。

重複 重複は無い。

規模 長軸 4.54 m × 短軸 3.43 m、床面積 14.18 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.32 m、主軸方向は N-6° -W、形状タイプは I B → II A3a である。

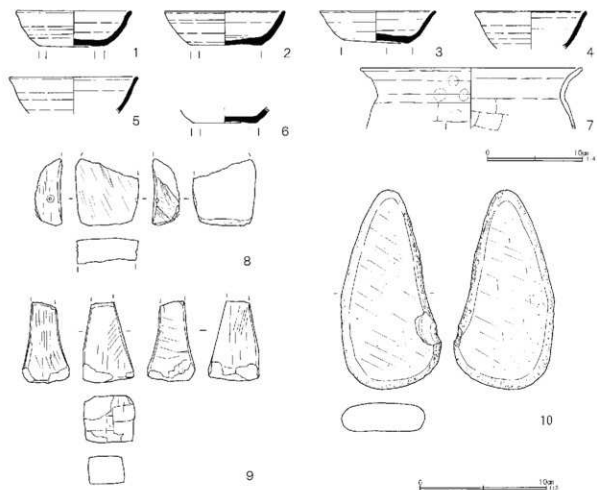
概要 平面形は改築前の北カマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は上部の 1・2 層がレンズ状、本跡北西側に堆積する 3・4 層が一気に埋め戻したブロック堆積、5 層以下はレンズ状に堆積



第 202 図 第 67 号竪穴建物跡 2

している。4層は多量の焼土と炭化物を含み、本跡廃絶直後に北西側を主体に廃材などの焼却が行われた可能性が高い。カマドは東壁中央と北壁中央の2カ所に付設され、東カマドは改築後、北カマドは改築前のものである。東カマドは燃焼部の2/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ3cmと浅い。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状を捉えることはできなかったが、床面直上から褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。煙道部は燃焼部から急な勾配で立ち上がり、壁から煙道部先端まで1.25mを測る。北カマドの燃焼部は掘方ビットP02で壁外への突出はほぼ見られない。燃焼部の掘込みは床面から深さ12cm、両脇に床面から深さ25～28cmの小ビットを有する。燃焼部内の火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊し形状として捉えることはできなかった。壁から煙道部先端まで0.30mを測る。壁周溝は南東隅角とカマド下を除き全周する。床面はやや凹凸がありカマド前から本跡中央部にかけて顕著な硬化面を確認した。掘方は6～9cmの深さで本跡全域に及ぶ。掘方ビットは9基確認され、深さ16～22cmのP07～09は本跡四隅に位置する。本跡西側のP03は底面に厚さ7cmで混入物の無い灰オリーブ色粘土が堆積している。遺物はカマド内と南東隅角P01に集中、総量はポリ大袋に2袋分である。

**遺物（第203図、第67表）** 1～6は須恵器環である。1～3・6は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。1・6は南比企産で、2～5は末野産である。3・6は底部内面に摩耗痕がみられる。7は土師器甕で



第203図 第67号竪穴建物跡出土遺物

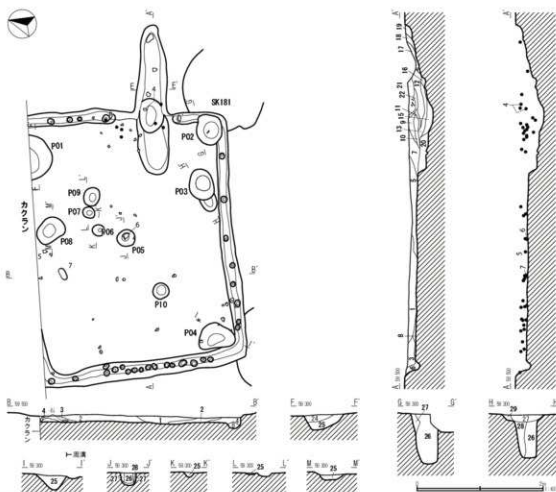
第67表 第67号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	漆器跡 环	(12.0)	3.8	6.7	ABFGH	灰黄	不良	90%	南北金産 糸切縁周辺へ少削り
2	漆器跡 环	12.8	3.8	7.4	ABIM	灰黄	良好	90%	木野産 糸切縁周辺へ少削り
3	漆器跡 环	12.2	3.3	6.6	ABGM	雑灰	良好	90%	木野産 糸切縁周辺へ少削り 底部内面磨耗痕あり
4	漆器跡 环	(11.6)	(4.0)	-	ABLM	雑灰	良好	口縁部片	木野産
5	漆器跡 环	(11.4)	(3.9)	-	ABLM	雑灰	良好	口縁部片	木野産
6	漆器跡 环	-	(1.7)	(7.0)	AFGK	にぶい雑	不良	底部片	南北金産 糸切縁周辺へ少削り 底部内面磨耗痕あり
7	土師器 罐	(23.2)	(6.0)	-	ABIM	明赤褐	良好	口縁~胴部片	コの字に底面する 外面上部横位へ少削り
8	石製品 砥石	長さ(5.3)cm	幅(1.0)cm	厚さ(2.2)cm	重さ60.9g	石材凝灰岩 硬質は4割 雑物の痕跡有り 左側面に管線 の穿孔あり			
9	石製品 砥石	長さ(6.3)cm	幅(4.0)cm	厚さ(3.7)cm	重さ93.5g	石材凝灰岩 硬質は5割 雑物の痕跡有り 下面に工具痕あり			
10	石製品 砥石	長さ15.6cm	幅7.8cm	厚さ2.4cm	重さ336.9g	石材砂岩 自然礫を利用したもの 硬質は2割(表・裏面) 右 側面は磨打と磨蝕がみられる			

ある。「コ」の字状裏である。8～10は石製品の砥石である。8・9は凝灰岩製で、上半部が欠損する多数の刃物痕が残っている。8は大部分が欠損している。左側縁部に穿孔しようとした痕跡がみられる。10は扁平な楕円礫を使用し、縁辺に敲打痕が残されている。

時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

特徴 本跡はカマド造り替えの改築建物跡である。また、掘方P03の底面に厚さ7cmで混入物の無い灰オリーブ色粘土の堆積を確認した。



SK181 土層図説

1. 2.000/3 凝結礫土 粘り質 しまり強 厚味強 C 石灰灰 (φ2~5mm) 多量
2. 1000/4 凝結礫土 LRI (φ2~5mm) 少量 石灰灰と壁土粘り強
3. 1000/4 礫土 φ2~5mm/1.8と粘り強
4. 1000/4 礫土 LRI (φ2~5mm) 多量 石灰灰と壁土粘り強
5. 1000/4 凝結礫土 LRI (φ2~5mm) 少量 壁土と粘り強と粘り強
6. 1000/5 土に多い凝結礫土 LRI (φ2~10mm) 多量 石灰灰少量
7. 1000/5 凝結礫土 粘り強 しまり強 粘り強と壁土少量
8. 1000/3 土に多い凝結礫土 LRI (φ2~10mm) 多量
9. 1000/4 礫土 LRI (φ2~10mm) 多量 礫石の壁土と壁土粘り強
10. 2.000/3 凝結礫土 粘り強 しまり強 礫石の壁土と壁土粘り強
11. 2.000/3 凝結礫土 粘り強 しまり強 壁土少量 壁土と壁土粘り強 石灰灰少量
12. 1000/4 礫土 粘り強 しまり強 壁土 LRI (φ2~20mm) 多量 礫石の壁土と壁土粘り強
13. 1000/4 土に多い凝結礫土 しまり強 LRI (φ5~10mm) 多量 壁土少量 石灰灰少量
14. 1000/4 礫土 LRI (φ2~5mm) 少量 φ2~5mmの壁土と石灰灰少量
15. 1000/4 凝結礫土 LRI (φ5~10mm) 多量
16. 1000/6 凝結礫土 LRI (φ5~10mm) 多量
17. 1000/4 礫土 壁土 LRI (φ10~20mm) 多量 石灰灰少量
18. 1000/4 礫土 φ2~5mmの壁土と石灰灰少量
19. 1000/4 土に多い凝結礫土 φ2~5mmの壁土と石灰灰少量
20. 1000/3 凝結礫土 粘り強 しまり強 φ2~5mm/LRIと壁土及び石灰灰少量 半壁土に石灰灰少量
21. 2.000/4 土に多い凝結礫土 φ5~10mmの壁土と壁土粘り強と壁土少量
22. 1000/4 礫土 壁土 LRI (φ5~20mm) 少量 石灰灰少量
23. 1000/4 礫土 壁土 LRI (φ5~20mm) 少量 石灰灰少量
24. 1000/4 土に多い凝結礫土 粘り強 しまり強 LRI (φ10~20mm) 多量
25. 1000/3 土に多い凝結礫土 粘り強 しまり強 LRI (φ2~5mm) 少量 石灰灰少量
26. 1000/3 凝結礫土 粘り強 しまり強 LRI (φ2~5mm) 少量 石灰灰少量
27. 1000/4 礫土 粘り強 しまり強 LRI (φ2~5mm) 多量
28. 2.000/4 土に多い凝結礫土 粘り強 しまり強 LRI (φ2~5mm) 多量 石灰灰少量
29. 1000/2 凝結礫土 粘り強 しまり強 φ2~5mm/LRIと石灰灰少量

第204図 第68号竪穴建物跡1

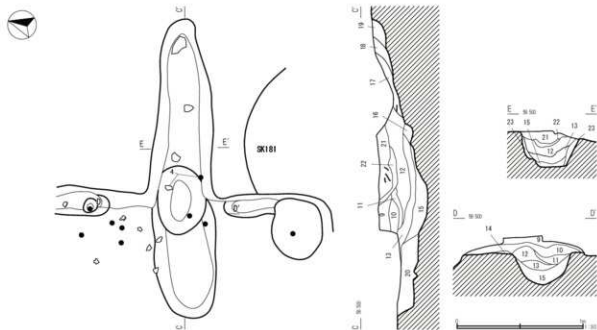
第68号竪穴建物跡(第204・205図)

位置 Ⅷ-ALグリッドの台地平坦面に位置する。

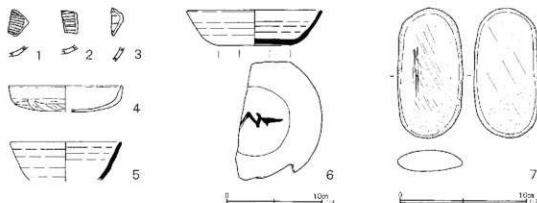
重複 北東隅角で第181号土坑と重複し、本跡のほうが古い。また、北壁が攪乱され消滅している。

規模 長軸4.35m×短軸3.15m以上、床面積12.30㎡以上、確認面からの壁高は0.12m、主軸方向はN-66°-E、形状タイプはⅡB5bである。

概要 遺存状況は良好ではない。平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土は掘込みが浅く不詳である。カマドは東壁南寄りに偏って付設され、燃焼部の約1/3が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ16cm。火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊消失し形状として捉えることはできなかったが、床面直上から灰褐色粘質土が検出され、これがカマド構築材とみられる。煙道部は燃焼部から緩やかな勾配で立ち上がり、壁から煙道部先端まで1.45mを測る。壁周溝は調査された部分ではカマド下を除き全周する。また、壁周溝内から壁板の固定を想起させる多数



第205図 第68号竪穴建物跡2



第206図 第68号竪穴建物跡出土遺物

第68表 第68号竪穴建物跡出土遺物観察表

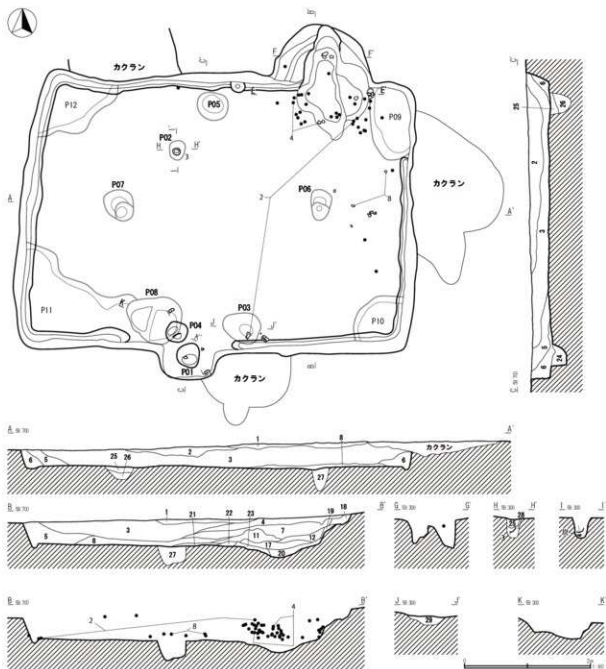
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.1)	-	AB/K	赤赤褐	良好	鉢部片	鉢部へラ削り 内面放射状暗文
2	土師器 坏	-	(0.9)	-	AB1	赤褐	良好	鉢部片	鉢部へラ削り 内面放射状暗文
3	土師器 坏	-	(1.5)	-	AB/L	赤赤褐	良好	鉢部片	内面放射状暗文
4	土師器 坏	(11.8)	2.8	-	AB1	広い黄褐	良好	30%	鉢部へラ削り 平底風
5	須恵器 坏	(11.6)	(4.1)	-	AB	灰	良好	口縁部片	
6	須恵器 坏	(14.0)	3.7	(7.5)	ABGH/LN	灰白	良好	40%	南比企産 糸切地周辺へラ削り 底部内面磨粒あり 底部外面磨量(1.5)
7	石製品 砥石	長さ20.8cm 幅10.4cm 厚さ3.4cm 重さ1282g							石材砂岩 砥石は1面 多数の万物痕と磨粒痕がみえる

の小ビットが確認された。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる顕著な硬化部分を確認した。席絶時のビットは10基確認された。P02・03は深さ80cm以上を測る深いものである。遺物はカマド周辺に集中、総量はポリ大袋に1袋分である。

遺物(第206図、第68表) 土師器坏、須恵器坏、石製品が出土した。1~4は土師器坏である。1~3は放射状暗文が施されている。4は直立しつ立ちあがる。平底風である。5・6は須恵器坏である。6は南比企産で底部外面に墨書がある。7は石製品の砥石である。扁平礫をそのまま利用している。

平坦面は摩耗痕と刃物痕がみられる。

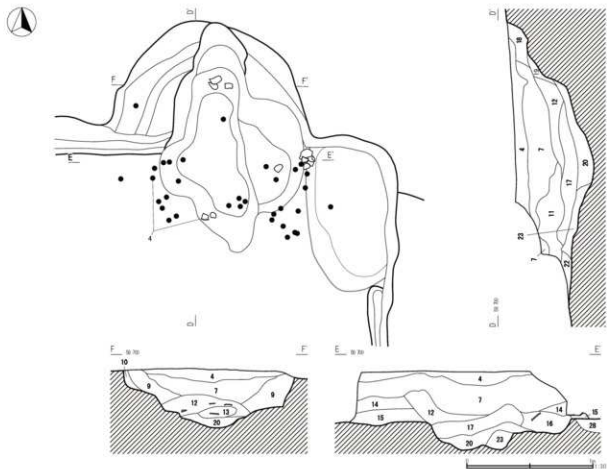
時期 8世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期



5169土層説明

1. 2.00E/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺
2. 10R/2/3 暗褐色土 1R(φ2~5cm)少量遺 2~3cmの硬土粒散在
3. 10R/2/6 暗褐色土 粘性弱 しまり強  
1R(φ2~5cm)少量遺 φ3~20mmの黒褐色土粒少量散在 硬土粒と泥状粘散層遺  
硬土粒中砂粒層が形成されたため本跡全域に及び、C
4. 10R/2/3 暗褐色土 1R(φ2~5cm)少量遺 硬土粒散在 泥状粘散層土粒少量散在
5. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺
6. 10R/2/4 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺
7. 2.00E/2 土粒子褐色土 1R(φ2~5cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在  
本跡全域に及び、砂層の土層である
8. 10R/2/3 土粒子褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
9. 2.00E/2 褐色土 1R(φ2~10cm)多量遺 φ2~10mmの硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
10. 10R/2/4 土粒子褐色土 1R(φ2~10cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
11. 2.00E/2 暗褐色土 粘性強 しまり強 1R(φ2~5cm)硬土粒(φ2~10cm)多量遺 泥状粘散層土粒多量遺
12. 10R/2/4 土粒子褐色土 1R(φ2~10cm)多量遺 φ3~10mmの硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
13. 2.00E/2 赤褐色土 φ2~20mmの硬土粒(砂粒層)を主体とする
14. 2.00E/2 暗褐色土 φ2~5cmの硬土粒(砂粒層)を主体とする
15. 2.00E/2 灰褐色土 φ2~5cmの硬土粒少量散在 泥状粘散層土粒少量散在
16. 2.00E/2 土粒子褐色土 φ10~30mmの硬土粒少量散在 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在 土層片散在
17. 2.00E/2 暗褐色土 粘性弱 しまり強 φ5~20mmの硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在  
硬土粒と泥状粘散層遺 焼痕散在
18. 2.00E/2 褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~10cm)多量遺 硬土粒(φ2~10cm)少量遺
19. 10R/2/4 灰褐色土 粘性弱 しまり強  
φ2~10mmの硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在 泥状粘散層土粒少量散在
20. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺
21. 10R/2/2 土粒子褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
22. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
23. 10R/2/4 褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~10cm)多量遺 硬土粒と泥状粘散層土粒少量散在
24. 10R/2/4 土粒子褐色土 1R(φ2~10cm)多量遺 硬土粒(φ2~10cm)散在
25. 10R/2/4 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~10cm)多量遺 泥状粘散層土粒少量散在
26. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~10cm)少量遺
27. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺
28. 10R/2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)少量遺 泥状粘散層遺
29. 10R/2/3 土粒子褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5cm)多量遺

第 207 図 第 69 号壁穴建物跡 1



第 208 図 第 69 号竪穴建物跡 2

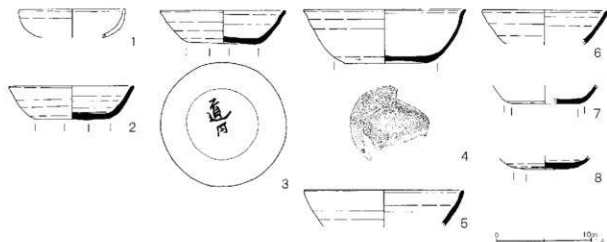
#### 第 69 号竪穴建物跡（第 207・208 図）

**位置** BR—AN、BS—AN グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 重複は無いが上部は所々擾乱されている。遺存は概ね良好である。

**規模** 長軸 6.30 m×短軸 4.44 m、床面積 23.85 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.32 m、主軸方向は N-4°-E、形状タイプは I B4a である。

**概要** 平面形は主軸が短軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積している。カマドは北壁東寄りに偏って付設され、燃烧部の約 1/2 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 13cm、火床面に所々被熱痕がみられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。しかし、床面直上から灰白色粘土が検出され、これがカマド構築材とみられる。また、燃烧部から煙道部にかけて急角度な勾配で立ち上り、床から 25cm 上がったところから緩やかな立ち上がりになる。壁周溝はカマド下と張出ピットを除いて全周する。床面はほぼ平坦で、本跡全域にわたって顕著な硬化部分を確認した。南壁を壁外に方形に掘込み、さらに深さ 55cm の P01 を掘込む所謂張出ピットが確認された。本跡廃絶時のピットは P01 と隣接する P04 の 2 基である。掘方ピットは 10 基確認され、深さ 12～18cm の P09～P12 は本跡四隅に位置する。P02 は深さ 40cm、底面から 10cm 浮いた位置で須恵器坏が正位で 1 点出土し、ピット埋土中に少量の炭化物も検出された。不規則な配列ではあるが P05～P07 は柱穴状で、P06・07 はともに柱建替えのような形状である。遺物はカマド内と南壁際に集中がみられる。張出ピット



第 209 図 第 69 号竪穴建物跡出土遺物

第 69 表 第 69 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(11.0)	(3.0)	-	AEIK	こぶい織	良好	0%	丸底
2	須恵器 杯	13.0	3.5	7.9	ABFDL	灰	良好	80%	南比企産 未切縁周辺へラ削り
3	須恵器 杯	13.0	3.4	7.7	ABFDM	灰	良好	100%	南比企産 未切縁周辺へラ削り 底部外裏墨書「道口(円カ)」
4	須恵器 埴	(17.0)	5.7	8.6	ABFG	灰	良好	80%	南比企産 未切縁全面へラ削り(体部～底部まで)
5	須恵器 杯	(16.6)	(3.4)	-	ABFM	灰	良好	口縁部片	南比企産
6	須恵器 杯	(13.0)	(3.4)	-	ABFM	灰白	良好	口縁一体部片	南比企産
7	須恵器 杯	-	(2.0)	(7.0)	ABFH	灰黄	良好	底部片	南比企産 未切縁周辺へラ削り 底部内裏摩耗痕あり
8	須恵器 杯	-	(1.4)	(8.4)	ABFW	灰白	良好	底部片	南比企産 未切縁周辺へラ削り

トから土師器甕、P02 内から底部外面に「道口(円カ)」と墨書された須恵器杯が正位で 1 点出土した。地鎮のために埋納されたと考える。総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物(第 209 図、第 69 表)** 土師器杯、須恵器杯・埴が出土した。1 は土師器杯でわずかに内湾し立ちあがり、丸底である。2・3・5～8 は南比企産の須恵器杯である。3 は底部外面に墨書がある。4 は体部下端と底部全面を回転へラ削りした大振りな須恵器埴である。2・3・7・8 は底部が糸切り後周辺へラ削りである。7 は底部内面に摩耗痕が見られる。

**時期** 8 世紀後半、宮下遺跡Ⅱ期

**特徴** 本跡は宮下遺跡の竪穴建物跡中でも最大の床面積であり、張出ビットや地鎮のために墨書土器を埋納したビットなど特殊施設が存在が際立つ。首長の人物の存在を想起させる建物跡である。

#### 第 70 号竪穴建物跡(第 210・211 図)

**位置** BT-A0・AP グリッドの台地平坦面に位置する。

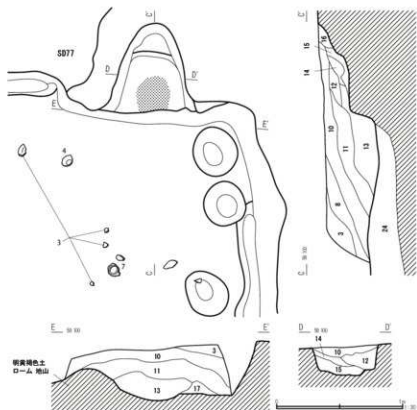
**重複** 本跡北東側で第 77 号溝と重複し、本跡のほうが古い。遺存は概ね良好である。

**規模** 長軸 4.42 m×短軸 3.44 m、床面積 11.79 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.26 m、主軸方向は N-83°-E、形状タイプは II B3c である。

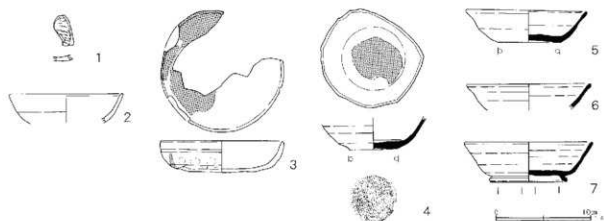
**概要** 平面形はカマド煙道部に沿った主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁南寄りに偏って付設され、燃焼部の約 1/2 が壁外へ突出し、







第211図 第70号竪穴建物跡 2



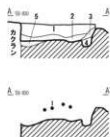
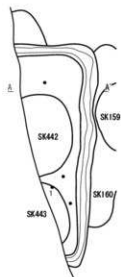
第212図 第70号竪穴建物跡出土遺物

あがり、丸底である。3は油煙が付着している。4は南比企産の須恵器環で一部に墨痕や摩耗痕が見られるため、転用碗と考えた。5・6は南比企産の須恵器環である。7は南比企産の須恵器高台環である。4・5は底部が糸切り後無調整である。7は底部が糸切り後周辺へラ削りである。

時期 9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期

第70表 第70号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	-	(3.8)	-	ABIK	黄	良好	鉢～底部片	鉢部・裏部へラ削り 内面放射状模文
2	土師器 杯	(11.8)	(3.1)	-	ABI	にぶい赤褐色	良好	95%	丸底
3	土師器 杯	12.8	3.4	-	ABK	明赤褐色	良好	95%	鉢部へラ削り 丸底 内面油煙付着
4	須恵器 環	-	(3.4)	5.2	ABFQHJ	灰白	良好	底～体部片	南比企産 糸切りのみ 裏部内面墨痕 裏部外側刃物痕 転用碗
5	須恵器 杯	12.6	3.4	6.6	ABFM	灰	良好	100%	南比企産 糸切りのみ 傘がみ重しい
6	須恵器 杯	(13.8)	(2.8)	-	ABF	黄灰	良好	口縁片	南比企産
7	須恵器 高台環	(13.4)	(4.2)	6.2	ABFM	灰	良好	40%	南比企産 糸切り後周辺へラ削り



第71号竪穴

1. 1970年 黄褐色土、しまり物、1.80×1.00m 多量土、1.80m 多量土
2. 1970年 黄褐色土、しまり物、1.80×1.00m 多量土、1.80m 多量土
3. 1970年 黄褐色土、しまり物、1.80m 多量土
4. 1970年 黄褐色土、しまり物、1.80×1.00m 多量土、1.80m 多量土
5. 1970年 黄褐色土、粘り物、しまり物、1.80m 多量土

0 10 20

第 213 図 第 71 号竪穴建物跡

第 71 表 第 71 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	(13.0)	(3.2)	-	ABF1	黄	不良	口縁部片	南比企産



第 214 図 第 71 号竪穴建物跡出土遺物

第 71 号竪穴建物跡 (第 213 図)

位置 BJ-1AK、BK-1AK グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡北側の大半が攪乱され、なおかつ多数の土

坑と重複し、いずれも本跡のほうが古い。

規模 全容は不明であるが、長軸 3.53 m × 短軸 0.97 m 以上、床面積 2.36 m<sup>2</sup> 以上、確認面からの壁高は 0.26 m、主軸方向は N-88° - E、形状タイプは O 5c である。

概要 遺存状況は極めて悪く、本跡南側 1/4 程度の調査となった。カマドは確認できなかった。残存する南辺を平面形主軸として数値計測を行った。覆土の堆積は不詳であり、他遺構との関連は確認面での重複観察に頼った。壁周溝は調査した部分では全周する。床面は凹凸があり、軟弱である。遺物出土状況は、遺物の集中はみられない。

遺物 (第 214 図、第 71 表) 1 は南比企産の須恵器坏である。体部から斜めに立ちあがる。

時期 9 世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

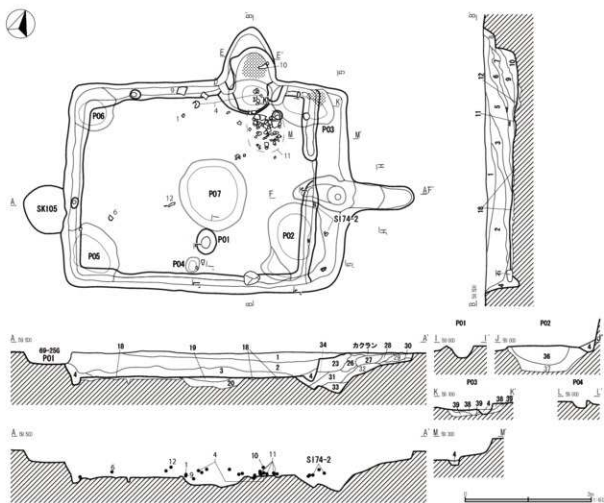
第 72 号竪穴建物跡 (第 215・216 図)

位置 BI-1AM、BJ-1AM グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 第 74 号竪穴建物跡と重複し、本跡のほうが新しいが、元々本跡は第 74 号竪穴建物跡を減築してカマドを造り替えた改築建物とみられる。また、西壁で第 105 号土坑と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸 4.01 m × 短軸 3.33 m、床面積 11.67 m<sup>2</sup>、遺構確認面からの深さは 0.39 m、主軸方向は N-20° - W、形状タイプは II A → I B3d である。

概要 カマド煙道部に沿った平面形主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、

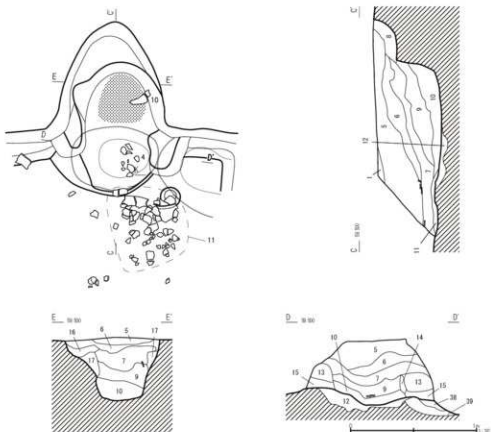


SI72・74 土層説明

1. 10FR2/3 赤褐色土 粘性質 しまり層 1段と同化部層露出
2. 10FR2/3 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量
3. 10FR2/3 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量 壁土(粘・団化砂・砂質粘土)と露出
4. 10FR2/3 褐色土  $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$ 1段と1段少量
5. 10FR2/2 赤褐色土  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と壁土上(褐色砂質粘土)と少量
6. 7. 53R4/2 灰褐色土 粘性質 しまり層
7. 7. 53R4/2 灰褐色土 粘性質 しまり層  
 $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出 壁土(粘 $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$ )少量
8. 10FR2/3 粘褐色土 粘性質 しまり層  
 褐色粘質土と少量露出 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )少量 天溝部の掘削した層が  
 10. 10FR2/3 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量
9. 7. 53R4/4 土壌(砂質粘土) 粘性質 しまり層  
 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )と壁土上、褐色粘質土と少量露出 天溝部の掘削した層である
10. 7. 53R4/4 砂質赤褐色土 粘性質 しまり層 壁土と砂質粘質土(少量)と露出
11. 53R2/3 粘褐色土 粘性質 しまり層 壁土と砂質粘質土(少量)と露出
12. 7. 53R4/4 褐色土 1.81 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$  少量 壁土と砂質粘質土(少量)
13. 10FR2/4 褐色粘質土 粘性質 しまり層 壁土 $\phi$ 10 $\sim$ 20mm $\phi$ 少量露出 (19 $\phi$ ) 埋没
14. 7. 53R4/3 土壌(砂質粘土) 粘性質 しまり層 壁土と砂質粘質土(少量)と露出
15. 7. 53R4/3 粘褐色土 粘性質 しまり層  $\phi$ 10 $\sim$ 20mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出 (19 $\phi$ ) 埋没
16. 7. 53R4/3 粘褐色土 粘性質 しまり層  $\phi$ 10 $\sim$ 20mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出 (19 $\phi$ ) 埋没
17. 7. 53R4/4 褐色土 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )と壁土上
18. 10FR2/4 褐色土 粘性質 しまり層 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )と少量露出
19. 10FR2/3 土壌(砂質粘土) 粘性質 壁土と砂質粘質土(少量)と露出
20. 10FR2/4 褐色土 粘性質 しまり層  $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ 1段と $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出
21. 10FR2/4 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量 同化部層露出
22. 10FR2/3 粘褐色土  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ の壁土と1段少量
23. 10FR2/3 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量 同化部層露出
24. 10FR2/4 土壌(砂質粘土)  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と少量露出
25. 10FR2/3 灰褐色土 1.81 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$  少量 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )少量
26. 10FR2/4 褐色土 褐色粘質土と少量露出 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )少量
27. 7. 53R4/3 粘褐色土  $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出 1.81 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ 少量  
 本層は天溝部で(面)に掘削を受けている
28. 53R2/3 土壌(砂質粘土) 粘性質 しまり層 壁土(粘 $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$ )と少量露出
29. 10FR2/4 粘褐色土 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 1mm $\phi$  少量 同化部層露出 (19 $\phi$ ) 埋没
30. 10FR2/3 粘褐色土 粘性質 しまり層 壁土(粘 $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$ )と少量露出 (19 $\phi$ ) 埋没
31. 7. 53R4/2 粘褐色土  $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と少量露出 壁土と1段少量
32. 7. 53R2/3 粘褐色土 壁土(粘 $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$ )と少量 同化部層露出
33. 10FR2/4 土壌(砂質粘土) 粘性質 しまり層 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )と少量露出
34. 7. 53R2/3 土壌(砂質粘土)  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と1段少量
35. 10FR2/3 粘褐色土 1.81 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$  少量 壁土と同化部層露出
36. 7. 53R2/3 土壌(砂質粘土)  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と褐色粘質土と同化部層露出
37. 10FR2/4 粘褐色土 粘性質 しまり層 壁土(粘 $\phi$ 5 $\sim$ 10mm $\phi$ )少量 壁土と同化部・砂質粘土と少量露出
38. 7. 53R4/2 土壌(砂質粘土)  $\phi$ 2 $\sim$ 5mm $\phi$ 1段と壁土と砂質粘土と少量露出
39. 10FR2/4 土壌(砂質粘土) 1.81 $\phi$ 2 $\sim$ 10mm $\phi$  少量

第 215 図 第 72・74 号竪穴建物跡

概ね自然埋没と考えられる。カマドは北壁東寄りに付設されている。構築材は褐色粘質土であるが崩壊流失が著しく袖部や火床面の被熱度は確認できなかった。床面を12cm程掘り窪めた燃焼部と壁外に掘込まれた煙道部を確認した。壁溝はカマド下を除き全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡発掘時のピットは南東隅角の方形で浅いPO1のみである。掘方は中央部と建物隅角3カ所に浅い掘込みが確認された。遺物はカマド内とカマド前に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に2袋分である。



第 216 図 第 72 号竪穴建物跡

遺物（第 217 図、第 72 表）土師器環、須恵器環、須恵器蓋、須恵器長頸瓶、土師器甕、鉄製品が出土した。1～5 は土師器環である。1～3 は放射状の暗文が施されている。1・2 はわずかに外反し、腰をもつ、平底風である。3 は暗文に間隔がある。口縁が斜めにひろがりつつ立ちあがり、平底である。4・5 はわずかに内湾しつつ立ちあがる。6 は南比企産の須恵器環である。7 は南比企産の須恵器蓋摘み部で扁平な擬宝珠状である。8・9 は須恵器長頸瓶である。10・11 は「く」の字状口縁の土師器甕である。12 は鉄製品の鎌である。

時期 9 世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

特徴 本跡は第 74 号竪穴建物跡を減築してカマドを造り替えた改築建物跡とみられる。

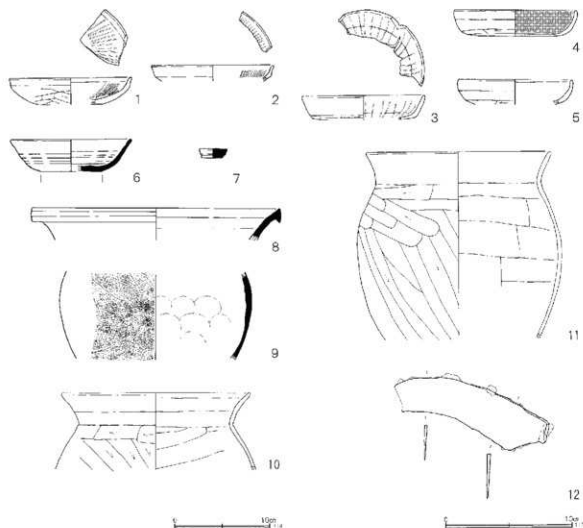
#### 第 74 号竪穴建物跡（第 215・218 図）

位置 BI—AM グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 第 72 号竪穴建物跡と重複し、本跡のほうが古い、元々本跡は第 72 号竪穴建物跡改築前の建物跡とみられる。

規模 長軸 3.18 m×短軸 0.52 m 以上、床面積 0.91 m<sup>2</sup> 以上、遺構確認面からの深さは 0.28 m、主軸方向は N-72°-E、形状タイプは II A→I B3c である。

概要 カマド煙道部に沿った平面形主軸が長軸となる長方形である。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。カマドは東壁中央に付設されている。構築材は褐色粘土質土であるが崩壊

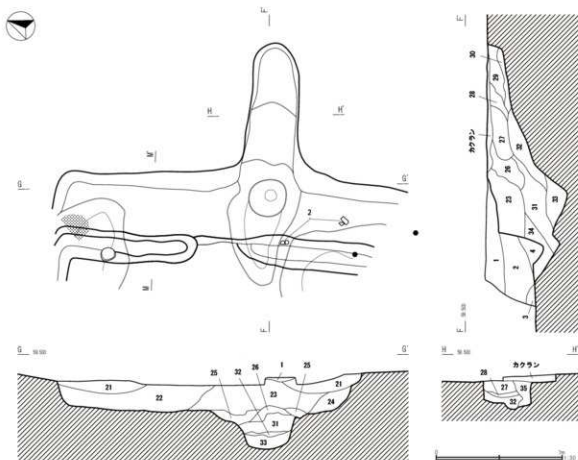


第 217 図 第 72 号竪穴建物跡出土遺物

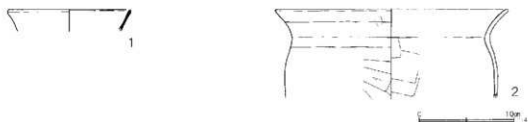
第 72 表 第 72 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(12.8)	(2.8)	-	AB/LM	褐色	良好	20%	体部へう削り 内面放射状縄文 平底流
2	土師器 杯	(12.8)	(1.7)	-	AB1	赤褐色	良好	口縁~体部片	体部へう削り 内面放射状縄文 平底流
3	土師器 杯	(12.8)	(2.4)	-	AB1	褐色	良好	口縁~体部片	体部へう削り 内面放射状縄文 平底
4	土師器 杯	12.8	2.8	-	AB1	赤褐色	良好	20%	体部へう削り 内面赤彩
5	土師器 杯	(11.8)	(2.4)	-	AB1	にぶい赤褐色	良好	90%	底部へう削り
6	須恵器 杯	(12.4)	(3.4)	(6.4)	ABFL	黄灰	良好	20%	南北金度 糸切縁全周へう削り 裏面内面磨料痕あり
7	須恵器 蓋	(3.0)	(1.0)	-	ADF	黄灰	良好	焼み部片	南北金度
8	須恵器 蓋縁破	(26.1)	(3.4)	-	ABFG	黄灰	良好	口縁部片	
9	須恵器 蓋縁破	-	(14.1)	-	ABF	灰	良好	胴部片	南北金度
10	土師器 罐	(19.8)	(8.3)	-	AB/M	にぶい赤褐色	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り
11	土師器 罐	19.4	(19.8)	-	AB/M	にぶい赤褐色	良好	口縁~胴部片	くの字に屈曲する 外面上部横位へう削り 中部縦位へう削り
12	鉄製品 鏝	長さ(12.4)cm 幅3.4cm 厚さ0.3cm 重さ46.7g							

流失が著しく袖部や火床面の被熱痕は確認できなかった。床面を 12cm 程掘り窪めた燃焼部と壁外に掘込まれた煙道部を確認した。壁溝はカマド下を除き全周する。床面は平坦でカマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる硬化部分を確認した。本跡発掘時のピットは南東隅角の方形で浅い P01 のみであ



第 218 図 第 74 号竪穴建物跡



第 219 図 第 74 号竪穴建物跡出土遺物

第 73 表 第 74 号竪穴建物跡出土遺物観察表

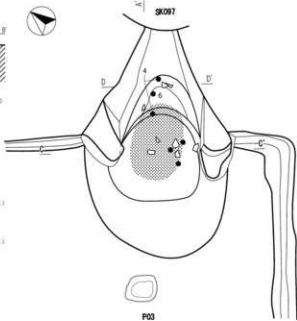
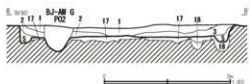
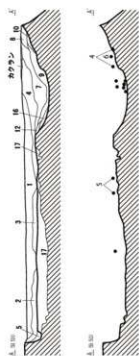
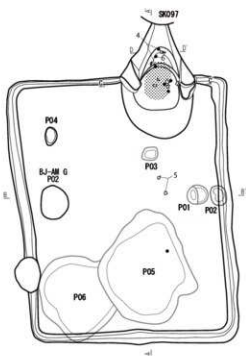
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	(12.6)	(2.3)	-	ABF	緑灰	良好	口縁部片	南比全産
2	土師器 甕	(24.4)	(9.5)	-	ABIX	こぶい赤褐	良好	口縁-胴部片	くの字に屈曲する 外周上部横位へラ削り

る。掘方は中央部と建物隅角3ヵ所に浅い掘込みが確認された。遺物は特に集中下箇所はみられない。遺物の総量はポリ大袋に1袋分である。

**遺物** (第 219 図、第 73 表) 須恵器坏、土師器甕が出土した。1は南比企産の須恵器坏である。2は土師器甕である。「く」の字裏で口縁付近を撫でている。

**時期** 9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

**特徴** 本跡は第72号竪穴建物跡の改築前の建物跡とみられる。



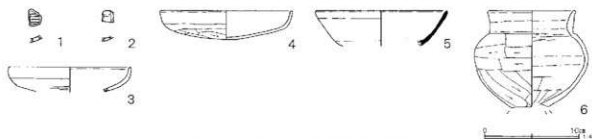
竪穴土層図解

1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱 L. 20 厚 1.8(φ10~10mm) 多量含 焼土粒と灰化粒少量
2. 10YR2/4 暗褐色土 L. 粒土 1.8(φ5~20mm) 多量含
3. 10YR4/6 暗褐色土 粘性弱 L. 20 厚 1.8(φ5~10mm) 多量含
4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性強 L. 20 厚 2.2~5mm<sup>2</sup> L. 粒土 8 と灰褐色砂質粘土 8 少量含
5. 2.5YR5/2 土赤・暗褐色土 L. 粒土 1.8(φ2~10mm) 多量含
6. 10YR4/6 暗褐色土 L. 粘多量 焼土 8 灰褐色砂質粘土 8 と灰化粒少量含
7. 2.5YR7/2 灰黄褐色土 φ5~20mm<sup>2</sup> 焼土 8 と灰褐色砂質粘土 8 少量含
8. 10B6/4 土赤・暗褐色土 焼土 1.8(φ2~10mm) 多量含 灰化粒少量含 (3<sup>+</sup>) 焼土粒
9. 10R3/4 暗赤褐色土 粘性弱 L. 20 厚 1.8(φ5~20mm) 少量含 灰化粒と灰少量含 (3<sup>+</sup>) 焼土粒
10. 10YR2/3 土赤・暗褐色土 φ2~5mm<sup>2</sup> 焼土 8 と L. 粘多量含 灰化粒少量含
11. 10YR3/3 土赤・暗褐色土 1.8(φ10~20mm) 多量含 焼土粒少量含
12. 2.5YR5/2 暗赤褐色土 φ2~5mm<sup>2</sup> 焼土 8 と灰化粒
13. 2.5YR6/4 土赤・暗褐色土 1.8(φ2~10mm) 多量含 焼土 8 少量含
14. 10YR2/3 灰黄褐色砂質粘土 粘性強 L. 20 厚 暗褐色土 8 と粘少量含 焼土 8 少量含 (3<sup>+</sup>) 焼土
15. 10YR4/1 暗赤褐色砂質粘土 粘性強 L. 20 厚 φ2~5mm<sup>2</sup> L. 粘少量含 (3<sup>+</sup>) 焼土
16. 10YR6/4 土赤・暗褐色土 1.8(φ5~20mm) 多量含 砂質粘土 8 少量含 (3<sup>+</sup>) 焼土粒
17. 2.5YR6/4 土赤・暗褐色土 1.8(φ2~10mm) 多量含 焼土 8 少量含 (1 層位)
18. 10YR4/3 土赤・暗褐色土 粘性弱 L. 20 厚 1.8(φ2~10mm) 多量含 焼土粒と灰化粒少量含
19. 10YR3/3 暗褐色土 φ2~5mm<sup>2</sup> L. 粘少量含 焼土 8 少量含



第 220 図 第 73 号竪穴建物跡





第 221 図 第 73 号竪穴建物跡出土遺物

第 74 表 第 73 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(0.8)	-	AB1	赤褐色	良好	体～底部片	体部・底部へうれり 内面放射状暗文
2	土師器 坏	-	(0.3)	-	AB1	こぶい赤褐色	良好	体～底部片	体部・底部へうれり 内面放射状暗文
3	土師器 坏	(12.9)	(2.4)	-	AB1K	赤褐色	良好	口縁～体部片	底部へうれり 丸底
4	土師器 坏	(13.6)	3.1	-	AB1	褐色	良好	20%	底部へうれり 丸底
5	須恵器 坏	(13.8)	(3.7)	-	ABF	灰白	良好	口縁～体部片	南比企産
6	土師器 台付甕	8.2	(14.2)	-	AB1	明赤褐色	良好	口縁～胴部片	外面上部横位へうれり 中部横位へうれり 下部斜位へうれり

#### 第 73 号竪穴建物跡 (第 220 図)

位置 BJ-1M グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 煙道部先端で第 97 号土坑と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸 4.22 m × 短軸 3.38 m、床面積 13.33 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.18 m、主軸方向は N - 47° - E、形状タイプは II B3f である。

概要 平面形は主軸が長軸となる長方形である。覆土は 1～3 層が一気に埋戻したブロック状堆積である。カマドは東壁南寄りに偏って付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みは床面から深さ 18cm、火床面には顕著な被熱痕がみられる。袖部は両袖とも遺存し、構築材は砂礫を混入する灰黄褐色粘質土である。煙道部は燃焼部から緩やかな勾配で立ち上がる。壁周溝はカマド下を除いて全周する。床面はほぼ平坦で、カマド前から本跡中央部にかけて顕著な硬化部分を確認した。本跡廃絶時のビットは深さ 24cm の P04 のみである。本跡西側半分に深さ 6～10cm の掘方が確認された。また、掘方ビットは 5 基確認され、西壁際の P05・06 はいずれも深さ 15～18cm の底面平坦な大形ビットである。遺物はカマド燃焼部内に集中がみられ、総量はポリ中袋に 2 袋分である。

遺物 (第 221 図、第 74 表) 土師器坏、須恵器坏、土師器台付甕が出土した。1～4 は土師器坏である。1・2 は放射状の暗文が施されている。3・4 は直立しつつ立ちあがり、丸底である。5 は南比企産の須恵器坏である。6 は土師器台付甕である。

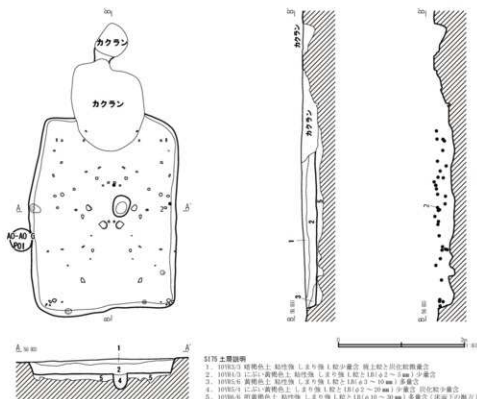
時期 8 世紀後半、宮下遺跡 II 期

#### 第 75 号竪穴建物跡 (第 222 図)

位置 A0-AN・A0 グリッドの台地平坦面に位置する。

重複 本跡南壁でビット A0-A0 グリッド P01 と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸 3.15 m × 短軸 2.35 m、床面積 5.73 m<sup>2</sup>、確認面からの壁高は 0.22 m、主軸方向は N - 90



第 222 図 第 75 号竪穴建物跡

第 75 表 第 75 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	-	(1.4)	-	AB1.1	こぶい楕	良好	縁一部断片	底部へラ削り、内面放射状暗文
2	須恵器 坏	(14.4)	(3.1)	-	ABF	灰白	良好	口縁断片	南比企産



第 223 図 第 75 号竪穴建物跡出土遺物

○ - E、形状タイプは O2c である。

**概要** 西壁を擾乱され、遺存状況はあまり良好ではない。カマドは確認できなかった。平面形は長軸を主軸として数値計測を行った。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。床面はほ

ぼ平坦で顕著な硬化面はみられない。壁周溝は確認されなかった。廃絶時のピットは本跡中央部に位置する小ピット 1 基のみである。本跡全域に深さ 7~10cm の掘方が確認された。遺物は本跡全域に散在し、特に集中した箇所はみられない。また、遺物の大半が流れ込みである縄文土器であった。

**遺物** (第 223 図、第 75 表) 土師器坏、須恵器坏が出土した。1 は土師器坏で、放射状の暗文が密集している。2 は南比企産の須恵器坏である。

**時期** 9 世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期

#### 第 76 号竪穴建物跡 (第 224 図)

**位置** B0-AR・AS グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 重複は無い。

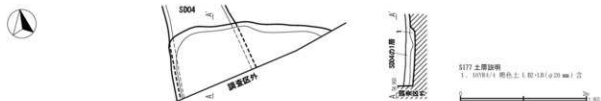


深さ 15～18cm の底面平坦な大形ピットである。土器は本跡東壁側に集中し、鍛冶関連遺物である遺物である鉄滓・椀形滓は第 1・2 鍛冶炉内、鍛造剥片・粒状滓は炉周辺の床面直上に集中している。

**遺物** (第 225 図、第 76 表) ロクロ土師器高台壇、鉄滓、鉄製品が出土した。1・2 は末野産のロクロ土師器高台壇である。1 は体部内面横方向の磨き後黒色処理を施している。2 は高台部で「八」の字状にひらいている。3 は鉄滓、4 は不明鉄製品である。

**時期** 11 世紀前半、宮下遺跡Ⅶ期

**特徴** 古代の集落最終段階Ⅶ期に帰属する鍛冶工房跡である。



第 226 図 第 77 号竪穴建物跡

### 第 77 号竪穴建物跡 (第 226 図)

**位置** AL-AQ グリッドの台地平坦面に位置する。

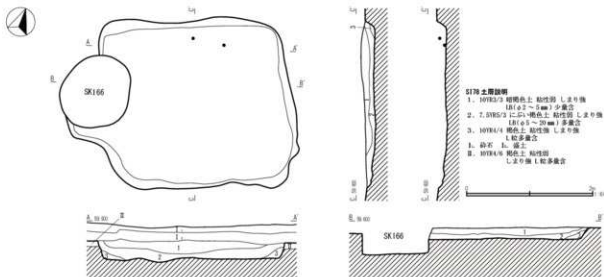
**重複** 本跡西側で第 4 号溝と重複し、本跡のほうが古い。また、北側が調査区外となり、本跡の大半が未調査となった。

**規模** 全容は不詳であるが、長軸 2.39 m 以上 × 短軸 0.76 m 以上、床面積 1.15 m<sup>2</sup> 以上、確認面からの壁高は 0.14 m、主軸方向は N-81°-W、形状タイプは O5e である。

**概要** 遺存状況は極めて悪く、カマドも確認できなかった。平面形は方形になるとみられ、覆土も掘込みが浅いため不詳である。床面はほぼ平坦であるが、全体に軟弱で硬化した部分は確認できなかった。また、壁周溝とピットも確認されず掘方も無かった。出土遺物は僅少で集中した箇所もみられなかった。

**遺物** 出土遺物はいずれも小破片で図示はできなかった。

**時期** 時期不明



第 227 図 第 78 号竪穴建物跡

第78号竪穴建物跡(第227図)

位置 Ⅷ-AL グリッドの台地平坦面に位置する。

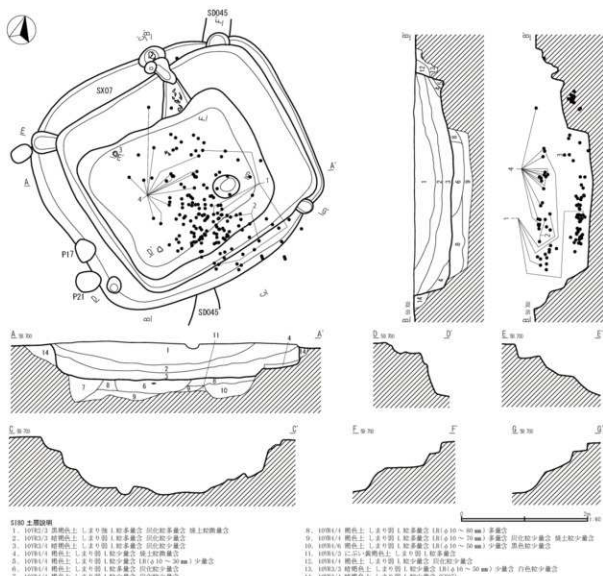
重複 西側で第166号土坑と重複し、本跡のほうが古い。

規模 長軸3.02m×短軸2.66m、床面積6.74㎡、確認面からの壁高は0.28m、主軸方向はN-70°-E、形状タイプはO2cである。

概要 西壁を第166号土坑に壊され、遺存状況はあまり良好ではない。カマドは確認できなかった。平面形は長軸を主軸として数値計測を行った。覆土はレンズ状に堆積しており、概ね自然埋没と考えられる。床面はほぼ平坦で顕著な硬化面はみられない。壁周溝、ピット、掘方は確認されなかった。出土遺物は僅少で集中した箇所もみられない。

遺物 出土遺物はいずれも小破片で図示はできなかった。

時期 時期不明



第228図 第80号竪穴建物跡・第7号性格不明遺構

※第 79 号竪穴建物跡の遺構挿図は第 143 図、説明文は 146 頁に掲載した。

### 第 80 号竪穴建物跡 (第 228 図)

**位置** Ⅲ—AS グリッドの台地平坦面に位置する。

**重複** 第 7 号性格不明遺構と容れ子状に重複し、本跡のほうが新しい。また、中央部で第 31 号溝と重複し、本跡のほうが古い。

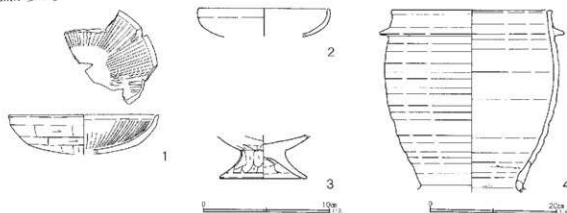
**規模** 長軸 3.57 m × 短軸 3.10 m、床面積 8.52 m<sup>2</sup>。遺構確認面からの深さは 0.58 m、主軸方向は N-40°-W、形状タイプは I B2f である。

**概要** 平面形はカマドに沿った主軸が短軸となる長方形である。覆土は上部の 1～5 層がレンズ状、下部の 6～10 層は一機に埋め戻したブロック状堆積である。本跡は四囲に柵状の段差を有する。改築建物跡が大きな方形の床下ビットか 2 軒の重複の可能性がある。カマドは北壁東寄りに付設され、燃焼部の約 1/3 が壁外へ突出し、掘込みはほとんど無く、火床面に所々被熱痕みられるが明瞭ではない。袖部は崩壊流失し形状として捉えることはできなかった。煙道部は燃焼部より幅を狭め約 35° の勾配で立ち上がる。壁溝溝は検出されなかった。床面は凹凸があり全体に軟弱な面である。本跡廃絶時のビットは南東側に位置する深さ 23cm の小ビット 1 基のみである。遺物はカマド内と本跡南側に集中がみられる。遺物の総量はポリ大袋に 1 袋分である。

**遺物 (第 229 図、第 77 表)** 土師器杯、土師器台付甕、土師質土器甗が出土した。1・2 は土師器杯である。1 は放射状の暗文が施されている。1 は口縁がわずかに外反し、腰をもって立ちあがる。平底風である。2 は口縁がわずかに内湾し、丸底である。3 は土師器台付甕の脚部である。4 は土師質土器甗である。胴部上半に鈎がついた羽釜であり、孔部がラッパ状に開く甗と考えた。ロクロ成形である。

**時期** 10 世紀前半、宮下遺跡 V 期

**特徴** 本跡は改築建物跡か、大きな方形の床下ビットを有するの、2 軒の重複なのか、形状に不鮮明な点が多い。



第 229 図 第 80 号竪穴建物跡出土遺物

第 77 表 第 80 号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 杯	(15.8)	(4.2)	-	AB0KL	赤	良好	40%	内面放射状暗文 平底風
2	土師器 杯	(13.8)	(3.6)	-	AB1K	赤	良好	20%	丸底
3	土師器 台付甕	-	(4.4)	(3.0)	AB1JMN	河赤褐	良好		脚部片
4	土師質土器 甗	(25.2)	(28.2)	-	AB0E0HJLN	赤	不良	90%	孔部がラッパ状に開く

## 2 掘立柱建物跡

宮下遺跡では16棟確認され、そのうちの3棟である第8・15・16号掘立柱建物跡は近世に帰属する。残りの13棟である第1～7・9～14号掘立柱建物跡はいずれも竪穴建物跡群と同じ古代に帰属すると考えられる。第5号掘立柱建物は総柱建物であるが、他の掘立柱建物跡は梁行2間×桁行3間か2間×2間の側柱建物跡である。第5号掘立柱建物跡の南西隅の柱穴P6が芯々を結ぶ線上からずれており、造り出し柱構造の可能性がある。また、第4号掘立柱建物跡が宮下編年Ⅱ期である第53号竪穴建物跡を切っている。柱掘方内から出土した遺物だけでは判断できないが、重複関係と建物間の距離や棟方向との比較から第4号掘立柱建物跡をはじめ大半の掘立柱建物跡はいずれも8世紀後半～9世紀前半（宮下遺跡、古代土器編年Ⅱ・Ⅲ期）に帰属すると考えられる。

建物間の距離と棟方向と主軸から推定した掘立柱建物跡と竪穴建物跡のセット関係は以下である。

第4号掘立柱建物跡と第55号竪穴建物跡（Ⅲ期）、第5号掘立柱建物と第62号竪穴建物跡（Ⅲ期）、第13号掘立柱建物跡と第72・74号竪穴建物跡（いずれもⅢ期）、第7・9・10・11・14号掘立柱建物跡と第58・59・60号竪穴建物跡（いずれもⅢ期）である。

### 第1号掘立柱建物跡（第230図）

**位置** BC-AIグリッドに位置する。

**概要** 2間×2間の側柱式掘立柱建物跡で、桁行3.98m、梁行3.83mで推定面積は15.2㎡を測る。柱間は東西方向北側が1.85-1.89m、南側が1.82-1.84mで、南北方向東側が1.96-2.1m、西側が1.95-2mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。柱穴の平面形態は円形で、深さは0.1～0.35mである。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期不明

### 第2号掘立柱建物跡（第231図）

**位置** AU-ATグリッドに位置する。

**概要** 2間以上×1間以上の側柱式掘立柱建物跡で、南側が調査区外となる。柱間は東西方向北側が1.8-2.33m、南北方向東側が2.17m、西側が2.4mを測る。主軸方位はN-60°-Eである。柱穴の平面形態は円形や方形で、深さは0.22～0.74mである。

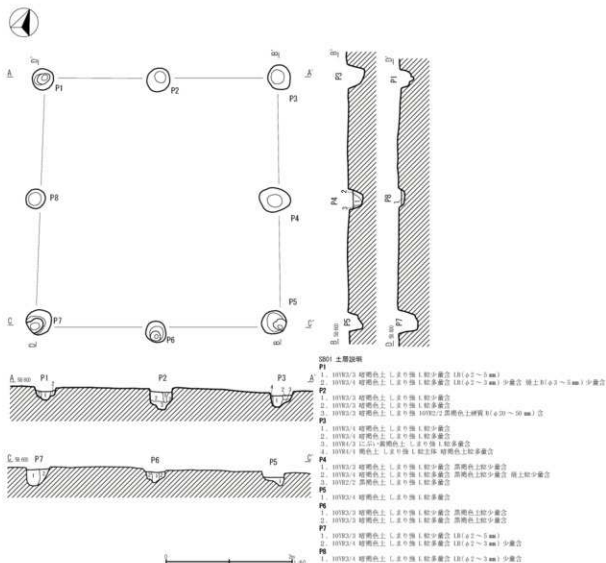
**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期不明

### 第3号掘立柱建物跡（第232図）

**位置** BE-AN・AOグリッドに位置する。

**概要** 2間×2間の棟持柱式掘立柱建物跡で、主軸方位はN-20°-Wである。北及び南の中央柱が妻側から北は0.44m、南は0.31m外側へ外れている。桁行3.54m、梁行3.52mで推定面積は12.5



第 230 図 第 1 号掘立柱建物跡

niを測る。棟持柱間は4.3mで、柱間は南北方向の東側が1.77 - 1.77m、西側が1.68 - 1.88mである。

柱穴の平面形態は円形や楕円形で、深さはP2の0.12mを除き0.2~0.45mで、第23号溝跡と重複する。

遺物 検出されなかった。

重複 第23号溝跡より古い

時期 時期不明

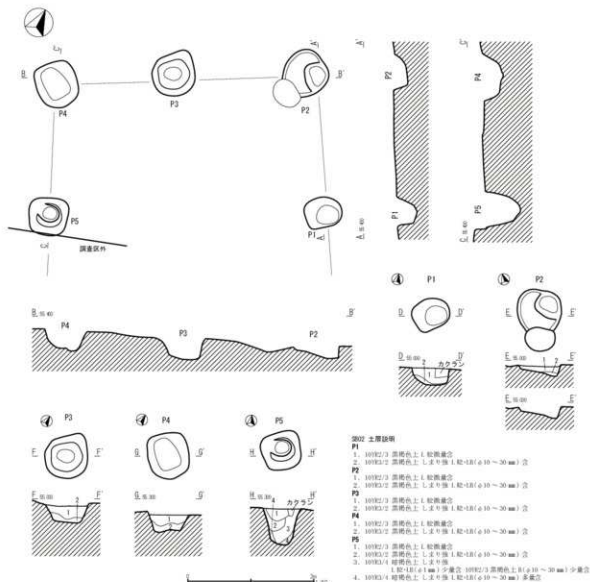
#### 第4号掘立柱建物跡(第233図)

位置 BJ - A0・APグリッドに位置する。

概要 3間×2間の棟持柱式掘立柱建物跡で、桁行6.1m、梁行3.45mで推定面積は21niを測る。

柱間は東西方向北側が2.1 - 1.89 - 2.37m、南側が2.24 - 1.96 - 1.83mで、南北方向東側が1.75 - 1.8m、西側が1.63 - 1.65mを測る。主軸方位はN - 66° - Eである。柱穴の平面形態は円形で、





**2002 土層説明**

- P1**  
 1. 10192/3 深褐色土上 軟弱層  
 2. 10193/2 深褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径
- P2**  
 1. 10192/3 深褐色土上 軟弱層  
 2. 10193/2 深褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径
- P3**  
 1. 10192/3 深褐色土上 軟弱層  
 2. 10193/2 深褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径
- P4**  
 1. 10192/3 深褐色土上 軟弱層  
 2. 10193/2 深褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径
- P5**  
 1. 10192/3 深褐色土上 軟弱層  
 2. 10193/2 深褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径  
 3. 10193/4 硬褐色土 しまり層  
 4. 10193/5 硬褐色土 しまり層 1. 縦-0.8 (φ 10 ~ 30 mm) 径  
 2. 1. 縦-1.0 (φ 1 mm) 径 少量 2. 10192/3 深褐色土 0.1 (φ 10 ~ 30 mm) 径少量

深さは 0.28 ~ 0.45 m である。第 53 号竪穴建物跡と重複する。

**遺物** (第 248 図、第 78 表) 須恵器環・蓋、土師器環が出土した。1 は土師器環である。口縁がわずかに内湾し立ちあがる。2 は須恵器環である。南比企産である。3 は須恵器蓋である。南比企産である。

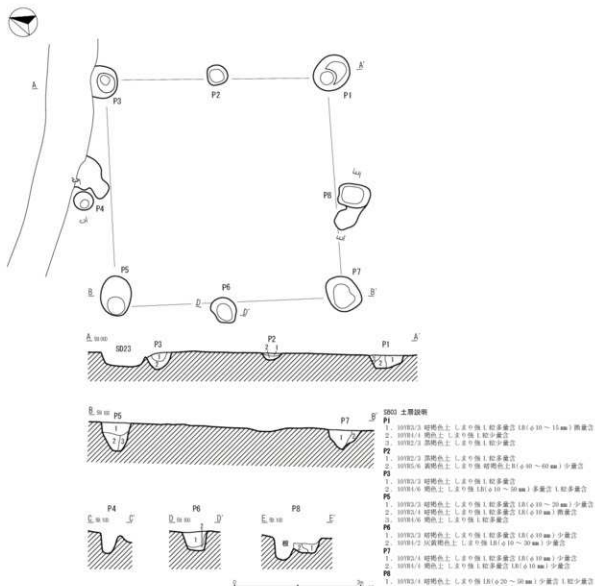
**重複** 第 53 号竪穴建物跡より新しい。

**時期** 9 世紀前半。

**第 5 号掘立柱建物跡 (第 234 図)**

**位置** BP - AQ・AR、BQ - AQ・AR グリッドに位置する。

**概要** 3 間 × 2 間の総柱式建物跡である。桁行 6.78 m、梁行 4.46 m で推定面積は 30 m<sup>2</sup> を測る。南東隅柱が北方向にずれているため、造出し柱構造と思われる。柱間は東西北側が 2.49 - 2.25 - 2.04 m、中央が 2.41 - 2.58 - 1.82、南側が 2.32 - 2.42 - 1.96 m で、南北方向東側から 2.01 - 2.04 m、



第 232 図 第 3 号掘立柱建物跡

2.34 - 2.3 m、2.28 - 2.25 m、西側が 2.36 - 2.2 m を測る。主軸方位は  $N - 80^{\circ} - W$  である。

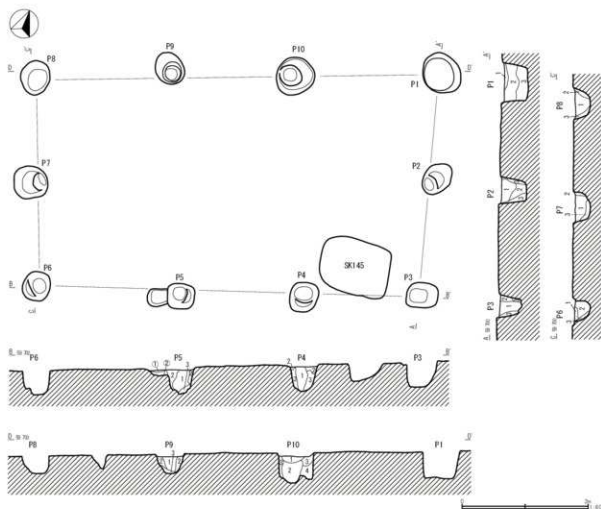
遺物 検出されなかった。

時期 時期不明

### 第 6 号掘立柱建物跡 (第 236 図)

位置 BP - A0、BQ - A0 グリッドに位置する。

概要 2間×2間と推定される側柱式掘立柱建物跡で、北西隅が第 337 号土坑に壊されている。桁・梁方向は不明であるが、東西 4.6 m、南北 4.4 m、推定面積は 20 m<sup>2</sup> である。柱間は東西方向北側が 1.95 m、南側が 2.55 - 2.05 m で、南北方向東側が 2.5 - 2.05 m、西側が 2.15 m を測る。主軸方位は  $N - 74^{\circ} - E$  である。柱穴の平面形態は円形や楕円形で、深さは 0.3 ~ 0.4 m である。第 336・337 号土坑と重複する。



3304 土層説明

P1

1. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～20mm) 多量含
2. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P2

1. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P3

1. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P4

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P5

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含
- ① 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
- ② 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含

P6

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P7

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P8

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P9

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含

P10

1. 10YR2/3 暗褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 同化殻少量含
2. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ2～3mm) 少量含
3. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～10mm) 少量含
4. 10YR1/4 褐色土 しまり強 1.8(φ5～20mm) 少量含

第 233 図 第 4 号掘立柱建物跡

遺物 土師器甕の細片を検出した。

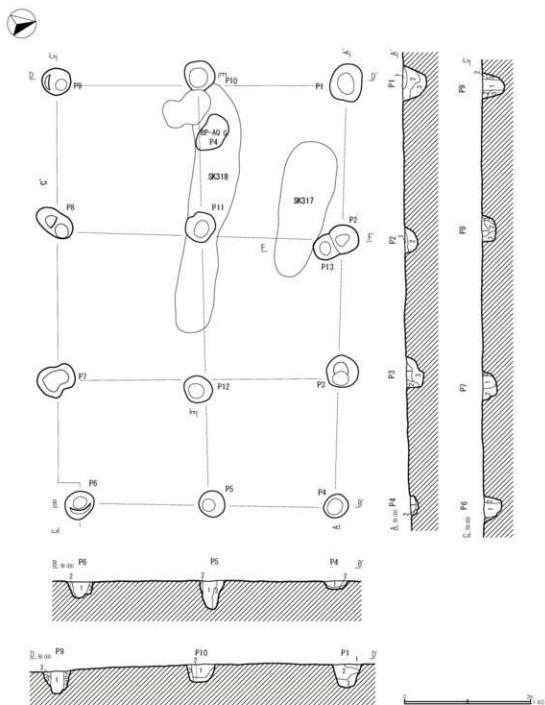
重複 第 336・337 号土坑より古い。

時期 時期不明

第 7 号掘立柱建物跡 (第 237 図)

位置 B0・AN・A0、BP・AN・A0 グリッドに位置する。

概要 2間×3間の総柱の側柱式掘立柱建物跡と考えられる。東から 2 列目の中央の柱穴と南西隅の

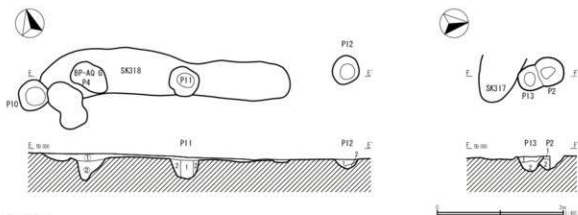


第234図 第5号掘立柱建物跡1

柱穴が溝と攪乱に壊されている。東西棟で桁行7.8m、梁行4.7mを測り、推定面積は36.6㎡。主軸方位はN-82°-Eである。梁間は東側で2.4-2.15m、東から3列目が2.43-2.25m、西側が2.25mである。桁間は北側が2.5-2.4-2.7mで、南側が2.5-2.54mである。柱穴の平面形態は円形で、深さはP10の0.08mを除き0.38~0.57mである。土層観察により柱の直径は約0.2mと推定される。第10号掘立柱建物跡と第72・73号溝跡と重複する。

**遺物** 土師器甕の破片を検出した。

**重複** 第72・73号溝跡より古く、第10号掘立柱建物跡より新しい。



#### S205 土層説明

- P10
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1. 軽少量
  2. H9K5-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~10mm)-濃褐色土 8(φ5~10mm) 少量
  3. H9K6-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 多量
- P11
1. H9K6-1 褐色土 φ2~10mmのIBと1. 軽多量
  2. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  3. H9K5-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  4. H9K6-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 多量
  5. H9K8-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量
- P12
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  2. H9K6-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量
- P13
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  2. H9K6-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量
- P2
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  2. H9K6-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量

#### P9

1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 φ2~5mmのIBと土 8少量
  2. H9K4-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 多量
  3. H9K5-2 濃い・黄褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 多量
- P10
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 φ2~5mmのIBと1. 軽少量
  2. H9K4-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 多量
  3. H9K5-2 濃い・黄褐色土 粘性質 しまり物 φ5~10mmのIBと1. 軽多量
- P11
1. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  2. H9K5-2 濃い・黄褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量
- P12
1. H9K3-2 暗褐色土 しまり物 1.8(φ2~5mm) 少量
  2. H9K4-1 褐色土 しまり物 1.8(φ5~10mm) 少量
- P13
1. H9K4-1 褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~10mm) 多量
  2. H9K5-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~10mm) 少量
- P11・P12・SK18・BP-A0 6 P4
- ①. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~10mm) 少量
  - ②. H9K3-2 暗褐色土 粘性質 しまり物 1.8(φ2~10mm) 少量
- ①・②は黄色線画の1. 軽少量 右付欄片と柱穴の出土 近隣の観り込み

第235図 第5号掘立柱建物跡2

時期 時期不明

#### 第8号掘立柱建物跡(第238図)

位置 BK-ALグリッドに位置する。

概要 2間×2間の側柱式掘立柱建物跡で、桁・梁方向は不明であるが、東西4.15m、南北4.04m、推定面積は16㎡である。南北方向東側が桁行4.1m、梁行3.9mで推定面積16㎡である。東西方向北側が2.0-2.15m、西側が2.25-1.9m、南北方向東側が2.3-1.74m、西側が2.04-1.8mを測る。主軸方位はN-61°-Eである。柱穴の平面形態は円形で、深さは0.14~0.3mである。また、柱穴の断面観察では覆土中に浅間Aテフラは確認されていない。なお、この建物内北東コーナー付近で検出されたピット(BK-ALグリッドピットP1)から、18世紀前半~中頃の肥前系陶器刷毛目碗と漆椀が重なった状態で出土した(第346・347図、第87表)。地鎮具を埋納したピットと思われる。

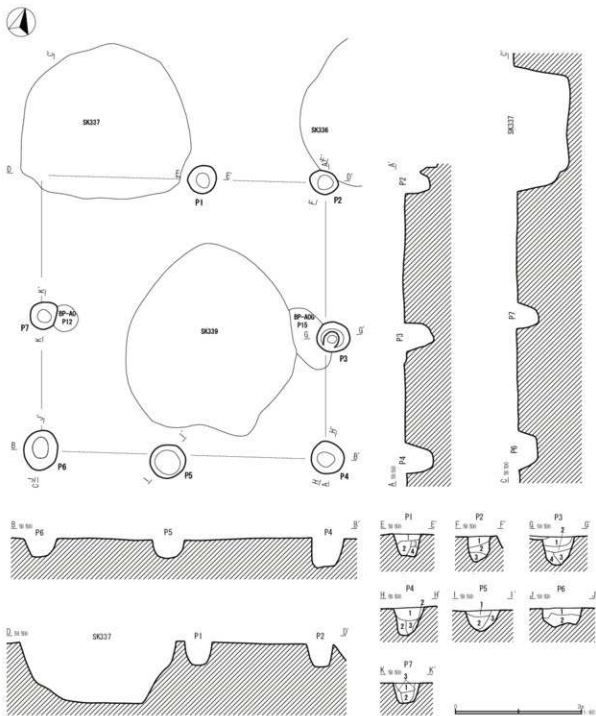
遺物 図化できなかったが、P4から瀬戸美濃系陶器腰鉾碗の破片を検出した。

時期 18世紀後半

#### 第9号掘立柱建物跡(第239図)

位置 B0-A0グリッドに位置する。

概要 2間×2間の側柱式掘立柱建物跡で、桁行5.1m、梁行4.9mの方形を呈し、推定面積は25㎡



**SK36 土层说明**

**P1**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量, 177稠黏土
2. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量, 1.8( $\phi 10$ mm) 多量, 1.粗多量
3. 10YR2/2 黑褐色土, L, 2.5中值, 1.粗少量
4. 10YR2/4 暗褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10$ mm) 多量, 1.粗多量

**P2**

1. 10YR2/2 黑褐色土, L, 2.5中值, 1.粗少量, 1.8( $\phi 10$ mm) 少量
2. 10YR2/3 黑褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量, 1.粗少量
3. 10YR2/4 暗褐色土, L, 2.5中值, 1.粗少量

**P3**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量, 1.8( $\phi 10$ mm) 少量, 177稠黏土
2. 10YR2/6 黄褐色土, L, 2.5中值, 2.5( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量, 1.粗少量
3. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量, 1.8( $\phi 10$ mm) 少量
4. 10YR2/4 暗褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 少量, 1.粗少量

**P4**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10$ mm) 多量, 1.粗多量, 1.77稠黏土
2. 10YR2/6 黄褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量, 1.粗多量
3. 10YR2/4 暗褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10$ mm) 少量, 1.粗多量

**P5**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗少量
2. 10YR2/2 黑褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量
3. 10YR2/6 黄褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量, 1.粗少量

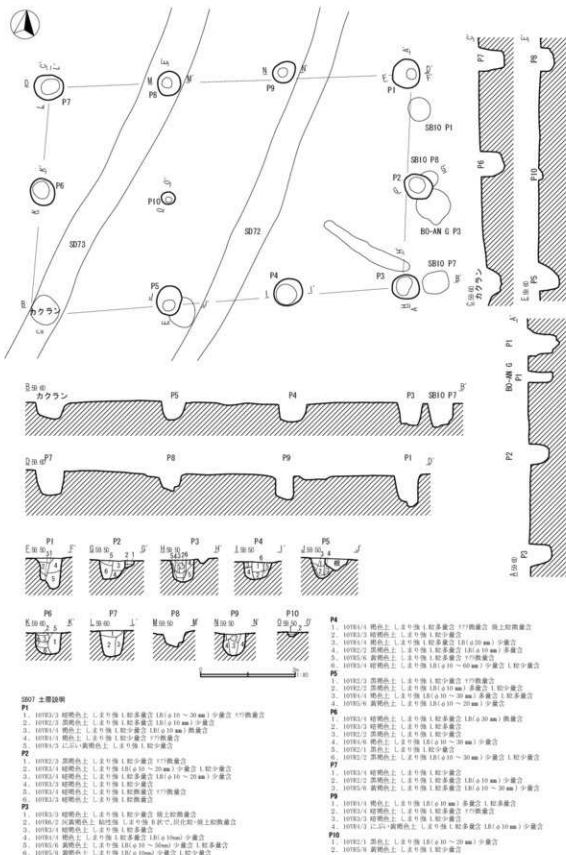
**P6**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗多量, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 少量, 177稠黏土
2. 10YR2/4 暗褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 16$ mm) 少量, 1.粗多量

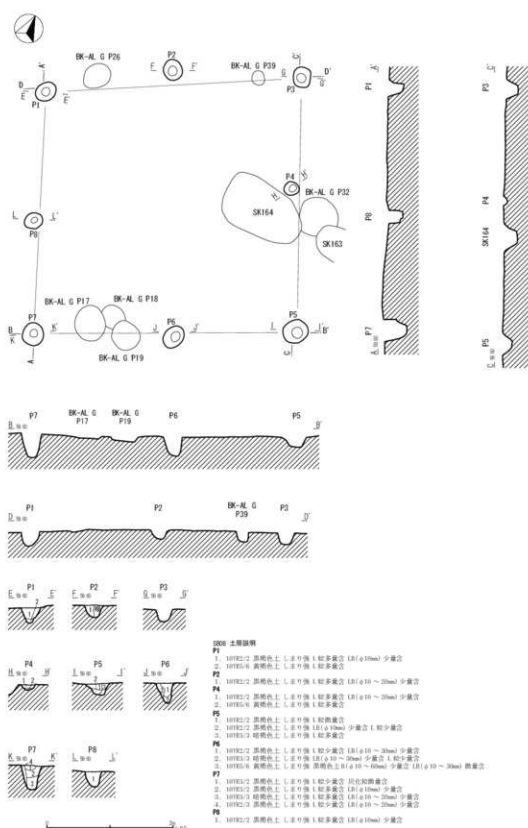
**P7**

1. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.粗少量, 1.8( $\phi 10$ mm) 少量, 177稠黏土
2. 10YR2/2 黑褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10 \sim 20$ mm) 少量, 1.粗少量
3. 10YR2/3 红褐色土, L, 2.5中值, 1.8( $\phi 10$ mm) 多量, 1.粗多量

第 236 图 第 6 号掘立柱建物跡

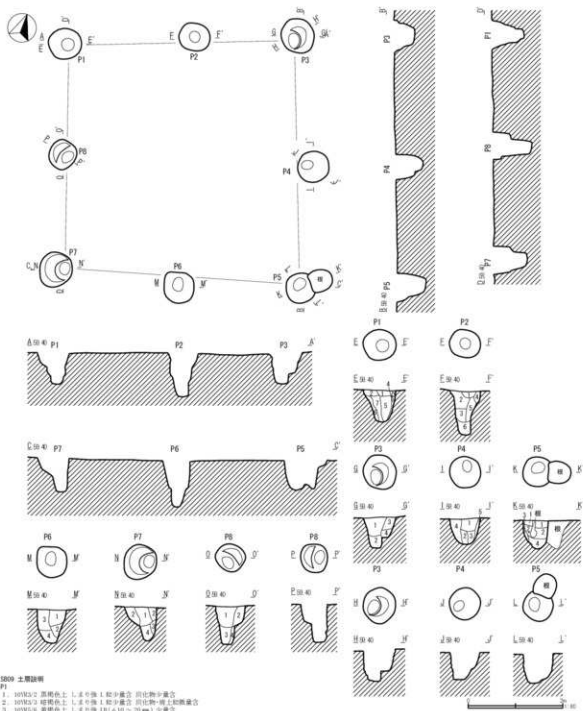


第 237 図 第 7 号掘立柱建物跡



第 238 图 第 8 号掘立柱建物跡





**S800 土壤剖面**

**P1**

1. 10YR2/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，同位物少量
2. 10YR2/2 红棕色土，上中层，1 处少量，同位物-坑上红棕色土
3. 10YR/6 黄棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量
4. 10YR2/2 红棕色土，上中层，13(φ5~20mm) 少量，1 处少量
5. 10YR2/2 灰棕色土，上中层，13(φ5~10mm) 少量，1 处少量
6. 10YR/6 黄棕色土，上中层，13(φ5~20mm) 少量，1 处少量
7. 10YR/4 红棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量，1 处少量

**P2**

1. 10YR/3 红棕色土，上中层，13(φ5~10mm) 少量，1 处少量，同位物-坑上红棕色土
2. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~10mm) 少量，同位物-坑上红棕色土
3. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量
4. 10YR/6 黄棕色土，上中层，1 处少量
5. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，同位物少量
6. 7. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量

**P3**

1. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，同位物少量
2. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~20mm) 少量
3. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，同位物少量，坑上红棕色土
4. 10YR/6 黄棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量，1 处少量

**P4**

1. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~10mm) 少量
2. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~20mm) 少量
3. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，同位物少量，坑上红棕色土
4. 10YR/6 黄棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量

**P5**

1. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~10mm) 少量
2. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~10mm) 少量
3. 10YR/6 黄棕色土，上中层，13(φ5~10mm) 少量
4. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，13(φ10~20mm) 少量

**P6**

1. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，13(φ10mm) 少量，坑上红棕色土
2. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，13(φ10~100mm) 少量
3. 10YR/4 红棕色土，上中层，1 处少量，坑上红棕色土
4. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，坑上红棕色土

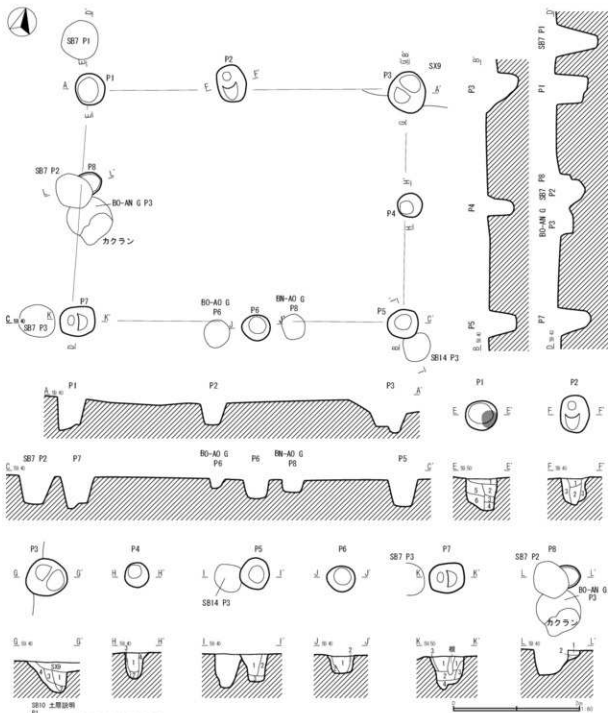
**P7**

1. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，坑上红棕色土
2. 10YR/4 红棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量，坑上红棕色土
3. 10YR/4 黄棕色土，上中层，1 处少量，13(φ5~10mm) 少量
4. 10YR/2 红棕色土，上中层，13(φ5~20mm) 少量，坑上红棕色土

**P8**

1. 10YR/2 红棕色土，上中层，1 处少量，坑上红棕色土
2. 10YR/4 红棕色土，上中层，13(φ10~20mm) 少量，坑上红棕色土
3. 10YR/2 灰棕色土，上中层，1 处少量，坑上红棕色土
4. 10YR/4 黄棕色土，上中层，1 处少量

**第 239 图 第 9 号掘立柱建物跡**



第 240 図 第 10 号掘立柱建物跡

SB10 土層説明

- P1**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位
  2. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位
  3. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ10~15mm) 散層位
  4. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10~30mm) 少量位
  5. 10R2/4 赤褐色土、しまり強、1. 20mm、多層位、1. 较多層位
  6. 10R2/4 褐色土、しまり強、1. 20mm、多層位、1. 较少層位
- P2**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位
  2. 10R2/1 褐色土、しまり強、1. 较少層位
  3. 10R1/2/1 褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10~20mm) 多層位
- P3**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位、1. 77散層位
  2. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ5~20mm) 少量位
  3. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ10~20mm) 少量位
  4. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ10~20mm) 多層位、1. 较多層位
  5. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ10~20mm) 多層位
- P4**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位
  2. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位
  3. 10R2/4 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10mm) 散層位
  4. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ5~10mm) 多層位

- P5**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10~20mm) 散層位、1. 77散層位
  2. 10R2/3 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ5~10mm) 少量位
  3. 10R2/4 赤褐色土、しまり強、1. 20mm、少量位、1. 较少層位
- P6**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10~15mm) 77散層位
  2. 10R2/4 赤褐色土、しまり強、1. 较多層位 (R1φ10~20mm) 多層位
- P7**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位 (R1φ10mm) 散層位、1. 77散層位
  2. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位
  3. 10R2/4 褐色土、しまり強、1. 20mm、多層位、1. 较多層位
  4. 10R2/4 赤褐色土、しまり強、1. 20mm、多層位、1. 较少層位
- P8**
1. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 较少層位、1. 77散層位
  2. 10R2/2 赤褐色土、しまり強、1. 20mm、少量位、1. 较少層位

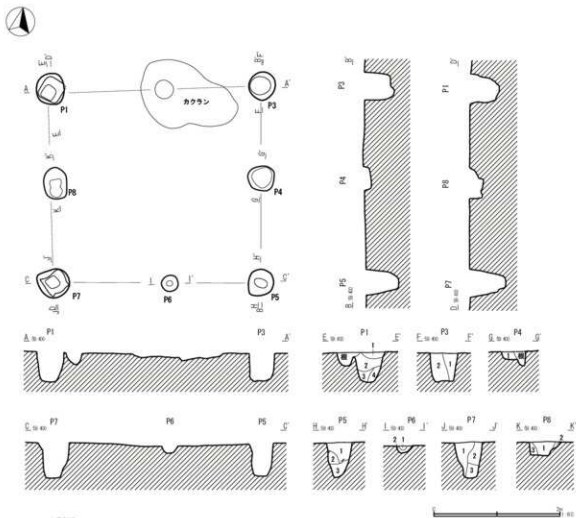


図11 土層説明

P01

1. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗少量含
2. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.5～10mm) 少量含
3. 10195/6 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含
4. 10195/6 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含

P03

1. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.5～10mm) 少量含
2. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含

P04

1. 10195/6 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含

P05

1. 10193/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 粘土・砂・砂粒物少量含
2. 10193/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.5～10mm) 少量含
3. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.5～10mm) 少量含

P06

1. 10192/2 蒸積土 しまり層 1.8(0.10mm) 少量含 1. 粗少量含
2. 10195/6 蒸積土 しまり層 1.8(0.5～10mm) 少量含 1. 粗少量含

P07

1. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含 蒸積土 1.8(0.5～10mm) 少量含
2. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗少量含 1.8(0.5～20mm) 少量含
3. 10195/6 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.10～20mm) 少量含

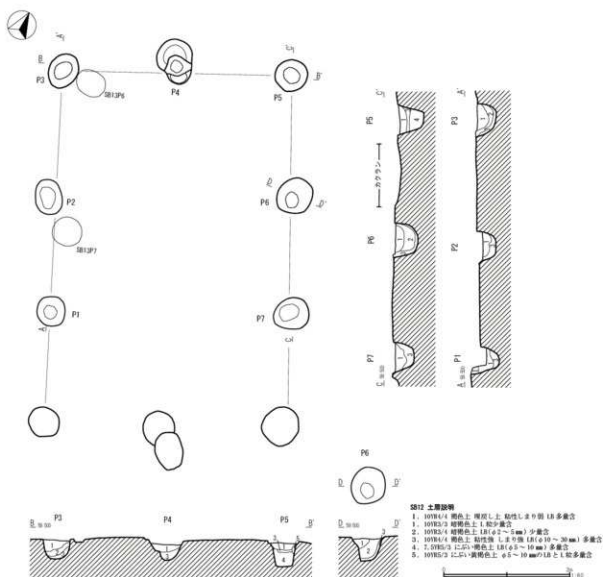
P08

1. 10192/2 蒸積土 しまり層 1. 粗多量含 1.8(0.5～20mm) 少量含
2. 10195/6 蒸積土 しまり層 1. 粗少量含
3. 10192/2 蒸積土 しまり層 1.8(0.5～10mm) 少量含

第241図 第11号掘立柱建物跡

である。主軸方位はN-69°-E。柱間は東西方向の北側が2.66-2.14m、南側が2.46-2.34mである。南北方向は東側が2.66-2.14mで西側が2.4-2.4mを測る。柱穴の平面形態は円形で直径0.65-0.75m、深さは四隅が0.65-0.7m、南北方向中央のP4が0.58m、P8が0.82m、東西方向中央のP2が0.93m、P6が1mを測る。これは今回の調査で確認された掘立柱建物跡の中で最も深い柱穴である。

遺物(第248図、第78表) 須恵器杯・埴、土師器杯が出土している。4は土師器杯である。口縁が内湾し立ちあがる。5・6は南比企産の須恵器杯である。5は底部が糸切り後周辺ヘラケズリである。7は須恵器埴である。



第 242 図 第 12 号掘立柱建物跡

時期 9 世紀初頭以降

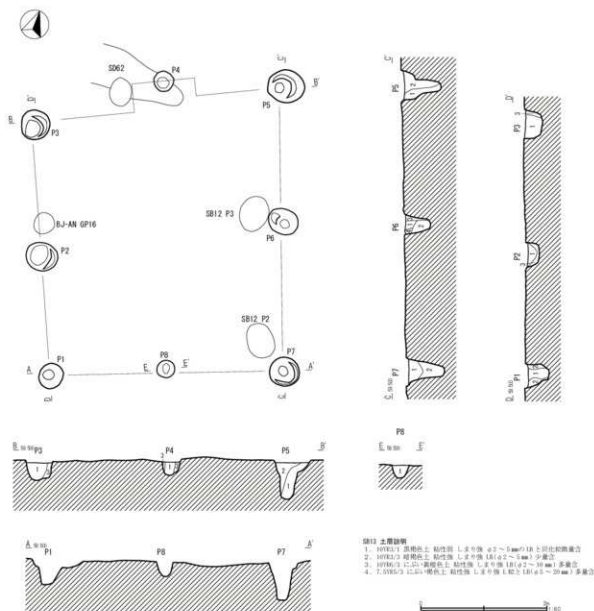
### 第 10 号掘立柱建物跡 (第 240 図)

位置 B0 - AN・A0 グリッドに位置する。

概要 2 間×2 間の側柱式掘立柱建物跡で、桁・梁方向は不明であるが、東西 5.1 m、南北 3.7 m、推定面積は 19 m<sup>2</sup>である。柱間は東西方向北側が 2.2 - 2.9 m、南側が 2.96 - 2.3 m で、南北方向東側が 1.88 - 1.84 m、西側が 1.52 - 2.18 m を測る。主軸方位は N - 73° - E である。柱穴の平面形態は円形や楕円形で、深さは P 6 の 0.3 m を除き 0.42 ~ 0.53 m である。第 7・14 号掘立柱建物跡、第 9 号性格不明遺構と重複する。

遺物 縄文土器・土師器製の細片、黒曜石の剥片を検出した。

重複 第 7 号掘立柱建物跡、第 9 号性格不明遺構より古く、第 14 号掘立柱建物跡より新しい。



第 243 図 第 13 号掘立柱建物跡

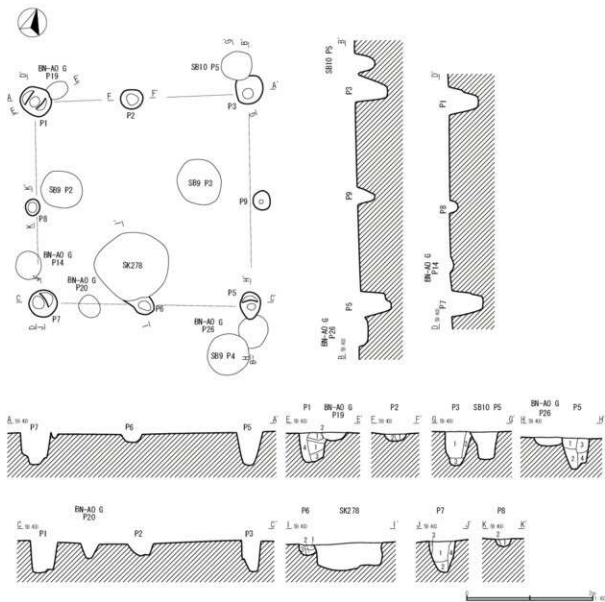
時期 時期不明

### 第 11 号掘立柱建物跡 (第 241 図)

位置 BN - AN・A0 グリッドに位置する。

概要 2 間×2 間の側柱式掘立柱建物跡で、東西方向北側中央の柱穴は攪乱により壊されている。桁行 3.3 m、梁行 3.0 m、推定面積は 10 m<sup>2</sup>である。柱間は東西方向南側が 1.88 - 1.48 mで、南北方向東側が 1.44 - 1.6 m、西側が 1.48 - 1.56 mを測る。主軸方位は N - 12° - W である。柱穴の平面形態は円形や楕円形で、深さは四隅が深く 0.47 ~ 0.55 m、P 4・6 が 0.10 m、P 8 が 0.22 m である。なお、P 1・7 の底面は方形を呈する。

遺物 (第 248 図、第 78 表) 8 は土師器坏である。口縁がわずかに内湾し立ちあがる。



SB14 土層説明

- P1**
1. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層、地上部・177階層迄
  2. 10YR5/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層
  3. 10YR3/3 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.10 ~ 10 mm) 多量
  4. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
- P2**
1. 10YR5/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.10 ~ 10 mm) 少量
  2. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層
- P3**
1. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
  2. 10YR2/2 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.10 ~ 10 mm) 少量
  3. 10YR5/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
- P5**
1. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.3 ~ 10 mm) 少量
  2. 10YR2/2 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
  3. 10YR3/3 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層
  4. 10YR3/4 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量

- P6**
1. 10YR3/4 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層、地上部・177階層迄
  2. 10YR3/3 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
  3. 10YR3/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層
- P7**
1. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.20 ~ 20 mm) 少量、地上部・177階層迄
  2. 10YR3/3 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
  3. 10YR5/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層 (LRI 6.10 ~ 20 mm) 少量
  4. 10YR2/2 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層 (LRI 6.5 ~ 30 mm) 多量、地上部・177階層迄
- P8**
1. 10YR3/3 暗褐色土、L. 中厚層、I. 肥少層、177階層迄
  2. 10YR3/6 黄褐色土、L. 中厚層、I. 肥多層

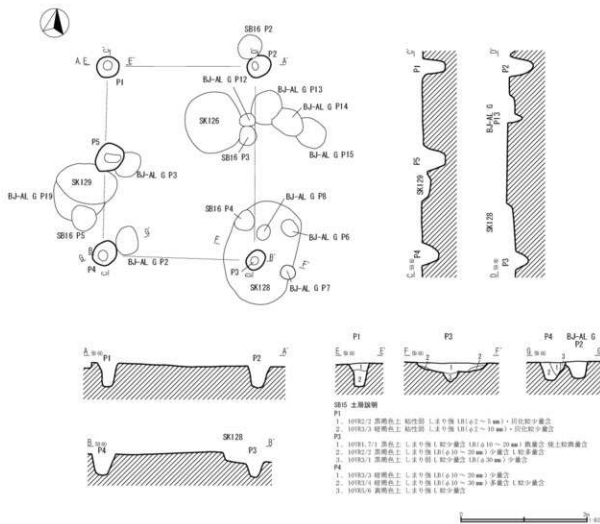
第 244 図 第 14 号掘立柱建物跡

時期 9 世紀初頭以降

第 12 号掘立柱建物跡 (第 242 図)

位置 BI - AN, BJ - AM・AN グリッドに位置する。

概要 3 間×2 間の側柱式掘立柱建物跡と推定される。南側の梁行の柱穴は試掘調査時に確認された



第245図 第15号掘立柱建物跡

もので上場のみを計測した。桁行5.55m、梁行3.66mと推定される。推定面積は20㎡である。柱間は東西方向北側が1.78～1.83mで、南北方向東側が1.94～1.76m、西側が2.02～1.84mを測る。柱穴の平面形態は円形・楕円形で、深さは0.28～0.4mである。主軸方位はN-29°-Wである。

遺物 須恵器坏・土師器甕・縄文土器の細片を検出した。

時期 時期不明。

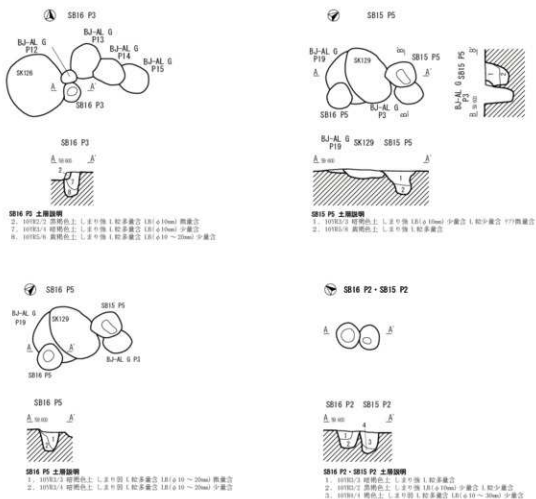
### 第13号掘立柱建物跡(第243図)

位置 BJ-AM・ANグリッドに位置する。

概要 2間×2間の側柱式掘立柱建物跡で桁行4.42m、梁行3.72mで、東西方向北側の中央の柱穴P4が中心より0.35m北へずれている。南北棟で推定面積は16.4㎡である。柱間は東西方向北側が2.18～1.86mで、南側が1.88～1.88mで、南北方向東側が2.16～2.32m、西側が2.02～1.88mを測る。主軸方位はN-24°-Wである。柱穴の平面形態は円形・楕円形で深さは南北方向の東側が深く0.42～0.63m、それ以外は0.22～0.38mである。P4が第62号溝跡と重複する。







第 247 図 第 15・16 号掘立柱建物跡

平面形態は円形や楕円形で、深さは四隅の柱穴が深く 0.46～0.51 m、四隅以外の柱穴が 0.12～0.2 m である。第 10 号掘立柱建物跡、第 278 号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

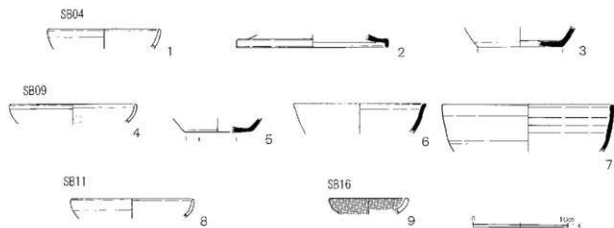
**重複** 第 10 号掘立柱建物跡・第 278 号土坑より古い。

**時期** 8 世紀第 4 四半期以前。

#### 第 15 号掘立柱建物跡 (第 245 図)

**位置** BJ - AK・AL グリッドに位置する。

**概要** 2 間×1 間の側柱式掘立柱建物跡で、桁行 3 m、梁行 2.34 m で推定面積は 7 m<sup>2</sup> である。南北方向東側の中央には柱穴は確認されなかった。南北方向西側が 1.5 - 1.5 m を測る。主軸方位は N - 10° W である。柱穴の平面形態は円形で、深さは 0.26～0.38 m である。第 128・129 号土坑、第 16 号掘立柱建物跡と重複する。また、柱穴の断面観察では覆土中に浅間 A テフラは確認されていない。



第 248 図 第 4・9・11・16 号掘立柱建物跡出土遺物

第 78 表 第 4・9・11・16 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 環	(12.0)	(2.1)	-	ABIK	褐色	良好	口縁部片	
2	須恵器 皿	(15.9)	(1.3)	-	ABF	灰黄	良好	口縁部片	南比全産
3	須恵器 環	-	(2.1)	(8.0)	ABF	こぶい黄	良好	底部片	南比全産
4	土師器 環	(13.3)	(2.0)	-	ABIJ	褐色	良好	口縁部片	内面指線注痕
5	須恵器 環	-	(1.5)	(8.8)	ABFG	灰白	良好	底部片	南比全産 未切後周辺へ少削り
6	須恵器 環	(14.0)	(3.2)	-	ABF	黄灰	良好	口縁部片	南比全産
7	須恵器 壺	(18.0)	(5.0)	-	ABGM	灰	良好	口縁部片	
8	土師器 環	(12.8)	(2.0)	-	ABIK	褐色	良好	口縁部片	
9	土師質土器 かわらけ	(8.2)	(1.6)	-	AJ	黄褐色	不貞	口縁一体部片	内外面に油煙付着

遺物 検出されなかった。

重複 第 16 号掘立柱建物跡・第 128 号土坑より古く、第 129 号土坑より新しい。

時期 本遺構より古い第 129 号土坑から 18 世紀代の瀬戸美濃系陶器片口の破片が出土し、また、浅間 A テフラが確認されていないことから、18 世紀後半と考えられる。

#### 第 16 号掘立柱建物跡 (第 246 図)

位置 BJ - AK・AL グリッドに位置する。

概要 3 間×1 間の側柱式掘立柱建物跡と推定される。桁行 4.2 m、梁行 2.58 m で推定面積 11.7 m<sup>2</sup> である。南北方向西側の 2 基の柱穴であるが、北西コーナー柱穴は第 71 号竪穴建物跡の覆土上面に擾乱があったため、また、その南の柱穴は第 159 号土坑と重複するため確認できなかった。南北方向東側が 1.42 - 1.42 - 1.36 m、西側が 1.42 m を測る。主軸方位は N-7° - W である。柱穴の平面形態は円形や楕円形で、深さは 0.2 ~ 0.47 m である。また、柱穴の断面観察では覆土中に浅間 A テフラは確認されていない。第 126・128・158 号土坑と重複する。

遺物 (第 248 図、第 78 表) 9 は在地産のかわらけである。内外面に油煙が付着する。

重複 第 126・128・158 号土坑より古く、第 15 号掘立柱建物跡より新しい。

時期 18 世紀後半

### 3 溝跡

#### 第1号溝跡(第249・264図)

位置 AS-A0、AT-A0グリッドに位置する。

規模 検出長7m、幅1.4～1.7m。確認面からの深さ0.13～0.15m。主軸方向はN-85°-E。

概要 東-西方向の流れで東側は第2号A溝跡と重複し、西側は攪乱により不明瞭である。断面は平凸レンズ状。覆土は砂質で浅間Aテフラを少量含む。

遺物 検出されなかった。

重複 第2号A溝跡より新しい。

時期 覆土に浅間Aテフラを含み、重複関係から19世紀代と考えられる。

#### 第2号A溝跡(第249・264図)

位置 AS・AT-A0グリッドに位置する。

規模 検出長は9.7m、幅は0.6～1.4mで、確認面からの深さは0.08～0.15m。主軸方向はN-67°-Eである。

概要 北東-南西方向の流れであり中央付近で第1号溝跡と重複し、西側で第2号B溝跡と重複する。断面は平凸レンズ状。覆土は砂質で浅間Aテフラを微量含む。

遺物 検出されなかった。

重複 第1号溝跡より古い。第2号B溝跡との関係は不明。

時期 18世紀末以降

#### 第2号B溝跡(第249・264図)

位置 AT-A0グリッドに位置する。

規模 検出長は2.2m、幅は0.3～0.4mを測る。確認面からの深さは0.08mである。主軸方向はN-30°-Eである。

概要 北東-南西方向の流れで、中央付近では第2号A溝跡と重複する。断面は薄い平凸レンズ状である。覆土は砂質で浅間Aテフラを微量含む。

遺物 検出されなかった。

重複 第1号溝跡より古い。第2号A溝跡との重複は不明。

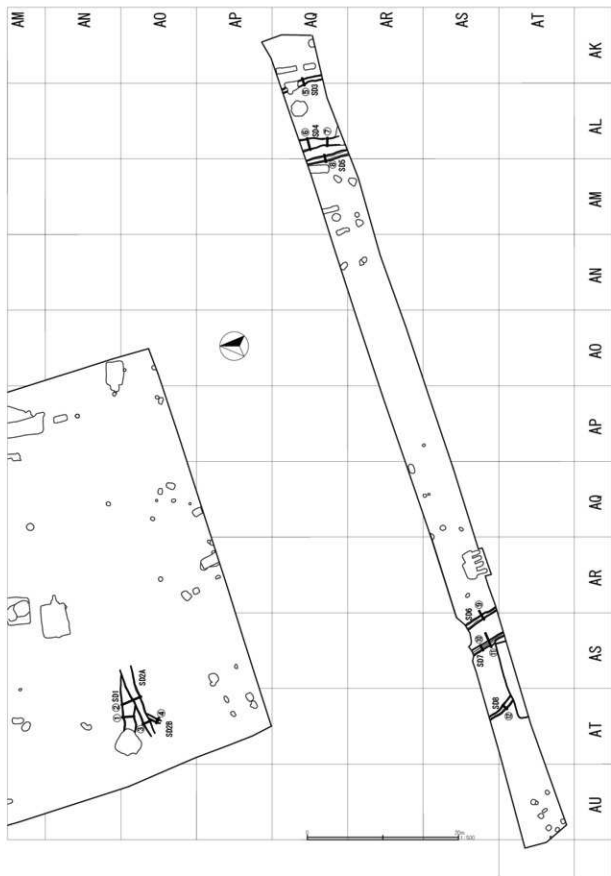
時期 18世紀末以降

#### 第3号溝跡(第249・264図)

位置 AK・AL-AQグリッドに位置する。

規模 検出長5.6m、幅0.5～0.8mを測る。確認面からの深さ0.18m。主軸方向はN-20°-Wである。

概要 北西-南東方向の流れで、遺構検出部北側を攪乱に壊されている。溝の南と北は調査区外となる。断面は逆台形状で、覆土上層に浅間Aテフラを少量含むが下層にテフラはない。



第 249 图 第 1 ~ 8 号溝跡

遺物（第270図、第79表） 1は在地産片口鉢の口縁部で15世紀後半のものである。このほか、土師器甕の細片が出土している。

時期 埋没段階の覆土上層に浅間Aテフラを含むことから、溝が掘られたのは18世紀後半と考えられる。

#### 第4号溝跡（第249・264図）

位置 AL-AQグリッドに位置する。

規模 検出長4.5m、幅0.9～1.4mを測る。確認面からの深さ0.1m。主軸方向はN-14°-W。

概要 北西-南東方向の流れで、北西から南東に進むに従い溝の幅が減少する。断面は薄い平凸レンズ状・浅い逆台形状、覆土は単層で浅い。南側で第77号竪穴建物跡と重複し、溝の南と北は調査区外となる。浅間Aテフラは含まない。

遺物 縄文土器、土師器甕・坏、須恵器坏の細片を検出した。

重複 第77号竪穴建物跡より新しい。

時期 18世紀後半

#### 第5号溝跡（第249・264図）

位置 AL・AM-AQグリッドに位置する。

規模 検出長は5.6m、幅は0.5～0.8mを測る。確認面からの深さは0.08mで、主軸方向はN-14°-Wである。

概要 北西-南東方向の流れで断面は平凸レンズ状、覆土は単層で浅い。北西部で溝の幅が減少する。溝の南と北は調査区外となる。

遺物 縄文土器、土師器甕、須恵器坏の細片を検出した。

時期 時期不明

#### 第6号溝跡（第249・264図）

位置 AR・AS-ASグリッドに位置する。

規模 検出長は5.5m、幅0.4～0.7mを測る。確認面からの深さは0.1mで、主軸方向はN-32°-Wである。

概要 北西-南東方向の流れで断面は平凸レンズ状、覆土は単層で浅く第7号溝跡と並行して検出された。溝の南と北は調査区外となる。この溝は、調査前に存在した現道の東側に敷設された道路側溝である。

遺物 検出されなかった。

時期 現代

#### 第7号溝跡（第249・264図）

位置 AS-AS-ATグリッドに位置する。

規模 検出長は5.3m、幅は0.4～0.8mを測る。確認面からの深さ0.1mで、主軸方向はN-32°

-Wである。

**概要** 北西-南東方向の流れで断面は平凸レンズ状、覆土は単層で浅く第6号溝跡と並行して検出された。溝の南と北は調査区外となる。この溝は、調査前に存在した現道の西側に敷設された道路側溝である。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 現代

#### 第8号溝跡(第249・264図)

**位置** AT-AS・ATグリッドに位置する。

**規模** 検出長は4.1m、幅は0.4~0.7mを測る。確認面からの深さは0.07mで、主軸方向はN-41°-Wである。

**概要** 東谷右岸の落ち際で検出されたもので、北西-南東方向の流れを持ち断面は平凸レンズ状、覆土は単層で浅い。溝の南と北は調査区外となるが、この調査区北側の東谷で検出された数条の溝に連結するものと思われる。

**遺物** 須恵器坏の底部破片を検出した。

**時期** 時期不明

#### 第9号溝跡(第250・264図)

**位置** 東谷内のAU-A0~AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は23.2m、幅は0.3~1.3mを測る。確認面からの深さは0.15mで、主軸方向はN-5°-Eである。

**概要** 南-北方向の流れで断面は横長のU字状、AU-A0グリッドで一度途切れ、北方向の谷頭に向かって浅くなる。第10・11・12号溝跡と重複し、東谷内の浅間Bテフラを含む層を掘込んでいる。そのため、埋没段階で覆土にそのテフラを微量含むことが土層観察で確認された。

**重複** 第10・11・12号溝跡より新しい。

**遺物(第270図、第79表)** 2は在地産片口鉢の口縁部で14世紀後半のものである。このほか、縄文土器・土師器甕・須恵器坏の細片を検出した。

**時期** 中世~近世

#### 第10号溝跡(第252・264図)

**位置** 東谷内のAU-A0~AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長19.6m、幅0.4~1mを測る。確認面からの深さ0.23~0.42mで、主軸方向はN-3°-Wである。

**概要** 南-北方向の流れであるが、北から約9mで南東方向に屈曲し約1メートル進んだ後、南方向に約3m進み、南西方向に屈曲し約1.5mで再び南方向へ進む。断面はU字状を呈し、北方の谷頭に向かって浅くなる。第9号溝跡と同様、東谷内の浅間Bテフラを含む層を掘込んでいる。そのため、埋没段階で覆土にそのテフラを微量含む。第9・11号溝跡と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第9・11号溝跡より古い。

**時期** 中世～近世

#### 第11号溝跡(第251・264図)

**位置** 東谷内のAU-A0～AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は22.5m、幅は0.4～1.5m。確認面からの深さ0.08～0.33mで、主軸方向はN-6°-Eである。

**概要** 南-北方向の流れであり、AU-A0グリッドで一度途切れるが、流れの方向を考え直線的な溝と判断した。北から約9mで南東方向に屈曲し約1メートル進んだ後、南方向に約3m進み、南西方向に屈曲し約1.5mで再び南方向へ進む。断面はU字状を呈し、北方の谷頭に向かって浅くなる。第9号溝跡と同様、東谷内の浅間Bテフラを含む層を掘込んでいる。そのため、埋没段階で覆土にそのテフラを微量含む。第9・10号溝跡と重複する。

**遺物** 須恵器坏、土師器裏の破片を検出した。

**重複** 第9号溝跡より古く、第10号溝跡より新しい。

**時期** 中世～近世

#### 第12号溝跡(第252・264図)

**位置** 東谷内のAU-APグリッドに位置する。

**規模** 検出長2.1m、幅0.4mを測る。確認面からの深さ0.08m。主軸方向はN-3°-W。

**概要** 南-北方向の流れである。北側はトレンチにより、南側は第9号溝跡と重複するため不明である。掘込みは浅く、断面は横長のU字状を呈する。第9号溝跡と同様、東谷内の浅間Bテフラを含む層を掘込んでいる。そのため、埋没段階で覆土にそのテフラを微量含む。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第9号溝跡より古い。

**時期** 中世～近世

#### 第13号溝跡(第253・265図)

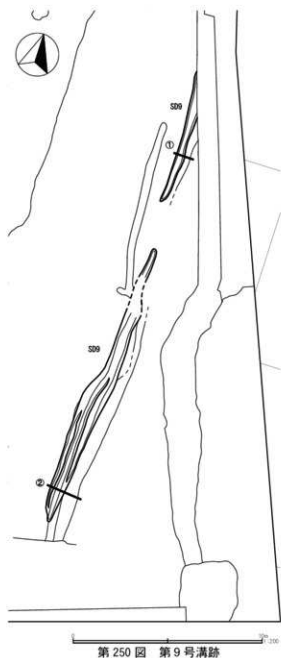
**位置** 東谷内のAU-A0・APグリッドに位置する。

**規模** 検出長は13.8m、幅は0.3～0.5mを測る。確認面からの深さ0.3mである。主軸方向はN-13°-Wである。

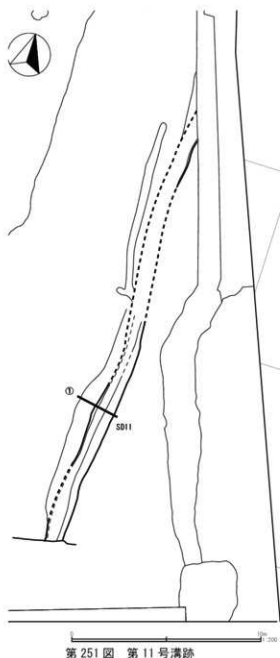
**概要** 東谷左岸で確認され南-北方向の流れである。AV-A0グリッドからAV-APグリッドにかけて、西側にややカーブする弓なり状に検出された。断面は北側がU字状で、南側が平凸レンズ状を呈し、第24・33号溝跡と重複する。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** 検出されなかった。



第250図 第9号溝跡



第251図 第11号溝跡

**重複** 第24・33号溝跡より古い。

**時期** 時期不明

#### 第14号溝跡（第253・265図）

**位置** 東谷内のAU - A0 ~ AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は11.4 m、幅は0.2 ~ 0.5 mを測る。確認面からの深さ0.08 mである。主軸方向はN - 20° - E。

**概要** 東谷のほぼ中央付近で確認され、南 - 北方向の流れである。AV - APグリッドからAV - AQグリッドにかけて、第13号溝跡と同様やや西側にカーブする弓なり状に検出された。掘込みは浅く断面は平



凸レンズ状で、第17・18号溝跡と重複する。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** (第270図、第79表) 3・4は、縄文時代後期安行式土器。3は、無文の底部で底径8cm。4は、台付部。隆帯をタガ状に貼付し、刻みを加えている。

**重複** 第17・18号溝跡より古い。

**時期** 時期不明

#### 第15号溝跡(第253・265図)

**位置** 東谷内のAU-AP・AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は6.5m、幅は0.4~0.5mを測る。確認面からの深さ0.1mで、主軸方向はN-36°-Wである。

**概要** 南-北方向の流れであるが、AV-AQグリッドで検出された。断面は逆台形状で、第14・16・18号溝跡と重複する。なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** (第270図、第79表) 5は縄文時代後期安行式土器。鉢の口縁部片。口縁上端に2条の微隆起線をタガ状に貼付し、瘤状の突起文を貼付している。

**重複** 第16・18号溝跡より古い。第14号溝跡との切り合い関係は不明。

**時期** 時期不明

#### 第16号溝跡(第253・265図)

**位置** 東谷内のAU-AP・AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長6.8m、幅0.4~0.6mを測る。確認面からの深さ0.2m。主軸方向はN-28°-W、及びN-0°-E。

**概要** 南-北方向の流れである。AV-AQグリッドで第16号溝跡と並行するように、東側にややカーブする弓なり状に検出された。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状で、第13・15・18号溝跡と重複する。なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第18号溝跡より古く、第13・15号溝跡より新しい。

**時期** 時期不明

#### 第17号溝跡(第253・265図)

**位置** 東谷内のAU-AP・AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は15.4m、幅は0.4~0.7mを測る。確認面からの深さ0.1~0.2mである。主軸方向はN-12°-Wである。

**概要** 南-北方向の流れである。AV-APグリッドで、西側にややカーブする弓なり状に検出された。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状で、第14・18号溝跡と重複する。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** (第270図、第79表) 6は、縄文時代後期安行式土器。無文の底部。推定底径8cm。7は、台付土器の胴部下半。無文。

**重複** 第18号溝跡より古く、第14号溝跡より新しい。

**時期** 時期不明

#### 第18号溝跡(第253・265図)

**位置** 東谷内のAU - AN ~ AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長は17.4m、幅は0.4 ~ 0.7m。確認面からの深さは0.12 ~ 0.2mである。主軸方向はN - 12° - W。

**概要** 概ね南 - 北方向の流れであるが、AV - ANグリッドからAV - A0グリッドまでの約17mは南 - 北方向の流れで、そこから南東方向に約5m進み、その後約1.5m南へ進み、そこから約7m南東方向に進み、AV - AQグリッドで南進する溝である。断面は逆台形状で、第14・16・17・19号溝跡と重複する。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** (第270図、第79表) 8は、縄文時代後期安行式土器。無文の底部。推定底径6cm。

**重複** 第19号溝跡より古く、第14・16・17号溝跡より新しい。

**時期** 時期不明

#### 第19号溝跡(第253・265図)

**位置** 東谷内のAV - AM ~ APに位置する。

**規模** 検出長は31.2m、幅は0.6 ~ 1.7m。確認面からの深さは0.25 ~ 0.3mで、主軸方向はN - 6° - Eである。

**概要** 東谷の右岸で確認され、概ね南 - 北方向の流れである。AW - AMグリッドからAW - A0グリッドまではほぼ直線的であるが、その後、南東方向に約3m進み、再び南方向に約1メートル進んで止まる。谷頭方向の北側は深さが次第に浅くなり、その行方は不明である。溝の断面は逆台形状で第18号溝跡と重複する。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第18号溝跡より新しい。

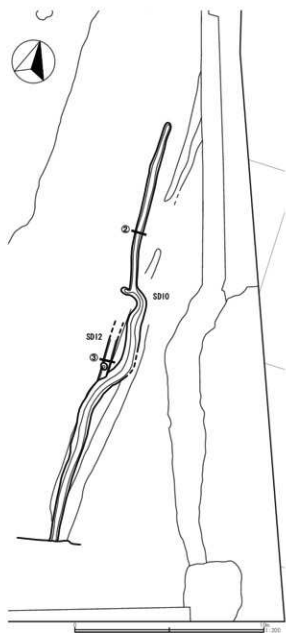
**時期** 時期不明

#### 第20号溝跡(第253・265図)

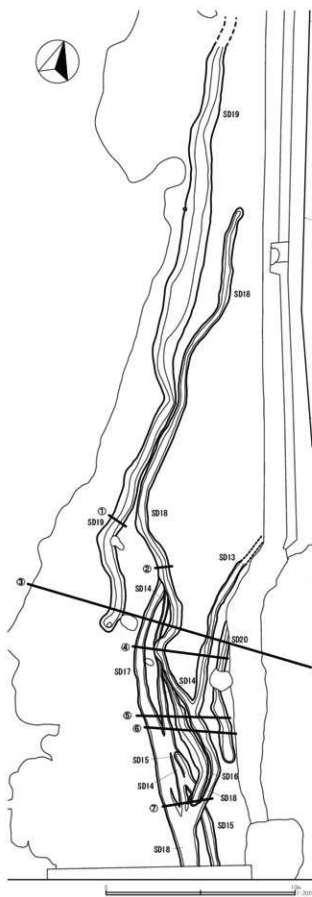
**位置** 東谷内のAU - APグリッドに位置する。

**規模** 検出長は6.9m、幅は0.4 ~ 0.8mを測る。確認面からの深さは0.25mで、主軸方向はN - 18° - Wである。

**概要** 東谷の左岸で確認され、概ね南 - 北方向の流れである。断面は逆台形状で、第13号溝跡と並行



第 252 图 第 10・12 号溝跡



第 253 图 第 13 ~ 20 号溝跡

するように西側にややカーブし弓なり状に検出された。

なお、この溝は東谷内の浅間Bテフラを含む層より下層で確認されている。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期不明

#### 第21号溝跡（第254・264図）

**位置** AW - AL・AM、AX - AMグリッドに位置する。

**規模** 検出長20.8m、幅0.6～1.4mを測る。確認面からの深さ0.12m。主軸方向はN - 81° - E、及びN - 9° - Eである。

**概要** 検出された溝の長い部分は概ね東 - 西方向の流れであるが、西側で南方向に直角に折れる。断面は平凸レンズ状で単一層、覆土には浅間Aテフラを含む。東側の調査区外壁面の断面観察でこの溝が確認されていることから、さらに東へ延びるものと考えられる。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀末以降

#### 第22号溝跡（第254・264図）

**位置** AW - AQ AX - A0～AQグリッドに位置する。

**規模** 検出長25.4m、幅0.07～1.1mを測る。確認面からの深さ0.05～0.25mで、主軸方向はN - 15° - Wである。

**概要** 南東 - 北西方向の流れであり、南側は調査区外になる。断面は平凸レンズ状で、覆土の下層まで浅間Aテフラを含み第15号竪穴建物跡と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第15号竪穴建物跡より新しい。

**時期** 18世紀末以降

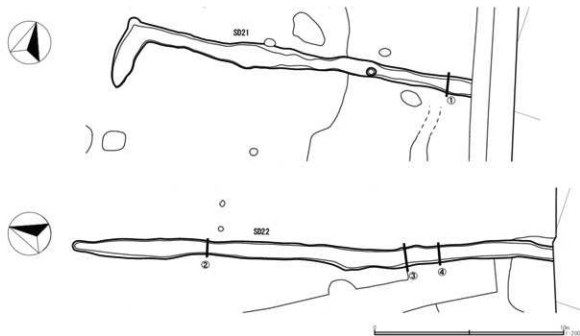
#### 第23号溝跡（第255・265図）

**位置** AX～BK - ANの各グリッドに位置する。

**規模** 東 - 西方向で直線的な溝で、検出長124.4m、幅0.6～2.1mを測る。確認面からの深さ0.26～0.45mで、主軸方向はN - 81° - Eである。

**概要** 後述する第24号溝跡と並行して検出された。総延長124mにも及び、さらに西側の調査区で確認された第69号溝跡や第71号溝跡につながるものと考えられる。断面は箱葉研・平凸レンズ状を呈し、覆土上層に浅間Aテフラを含む。また、数回掘り返しが行われたことが土層観察で確認されている。溝底面の標高は西側のBK - ANグリッド付近で59.20m、BH - ANで58.90m、BC - ANで58.25m、東側のAY - ANで56.78mとなり、東谷に向かってしだいに標高が低くなるのが判明した。BB - ANグリッド付近が最も深く、確認面からの深さ0.45m、幅1.5mを測る。

なお、この溝は旧公図に表わされている通称赤道とほぼ一致することから、この道の北側に敷設された



第254図 第21・22号溝跡

側溝と考えられる。

**遺物** (第270図、第79表) 香炉や在地産瓦質土器等を検出した。9は14世紀代の在地産甕の頭部で外面に凸線が巡る。10は18世紀代の瀬戸美濃系陶器香炉で、口縁端部が内側へ三角形に突出し、口縁部内面から外面にかけて灰軸が施される。このほか常滑系陶器甕の胴部破片が1点、縄文土器、土師器坏・甕、須恵器坏・甕の破片多数を検出した。

**重複** 第24・40・41・54・55号竪穴建物跡、第51号溝跡、第82・107・108・141・171号土坑、第3・4号炉穴と重複し、すべての遺構より新しい。

**時期** 18世紀末～現代

#### 第24号溝跡(第255・265図)

**位置** AZ～BB-AN、BC～BK-A0、BK-A0-AP、BJ-AP～AS、BI-AS-AUのグリッドに位置する。

**規模** 検出総延長175m、幅0.3～2.7mを測る。確認面からの深さは0.1～0.23m。主軸方向はN-81°-E、及びN-17°-Wである。

**概要** 前述の第23号溝跡と並行して検出された東-西方向の溝と、第34号溝跡と並行して検出された北西-南東方向の溝である。東-西の溝はBK-A0グリッドで南東方向に折れ調査区外へ続く。東-西方向の溝は掘込みが浅いため、4箇所で途切れている。断面は平凸レンズ状を呈し覆土に浅間Aテフラを含む。東-西方向の溝底面の標高は、西側のBK-A0グリッド付近で59.40m、BF-A0で58.90m、BD-A0で58.60m、東側のAZ-ANで57.40mとなり、東谷に向かってしだいに標高が低くなることが判明した。深さは浅いところで約0.1mである。

北西-南東方向の溝は、東-西のものより幅も広く深い。断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラを含む。また、数回掘り返しが行われたことが土層観察で確認されている。溝底面の標高は北側のBK

— A0 グリッド付近で 59.14 m、B1—A0 で 59.08 m、B1—A1 で 58.60 m、南側の B1—A1 で 58.40 m となり、南に向かってしだいに標高が低くなることが判明した。

なお、東—西方向の溝は旧公園に表わされている通称赤道とほぼ一致し、また、北西—南東方向の溝も赤道と一致することから、東—西方向の溝は道の南側に敷設された側溝で、北西—南東方向の溝はやはり赤道の東側に敷設された側溝と考えられる。

**遺物（第 270 図、第 79 表）** 染付碗や在地産瓦質土器等を検出した。11 は 14 世紀の在地産片口鉢で口縁部内面に浅い凹みが巡る。12 は肥前系磁器染付碗のくらわんか碗で 18 世紀代のもの。外面に梅樹文が描かれる。13 は常滑系陶器甕系の片口鉢で内面が描れている。このほか縄文土器、土師器杯・甕、須恵器杯・甕の破片を検出した。なお、肥前系磁器染付碗が第 7 号井戸（第 280 図 No.33）と接合している。

**重複** 東—西方向は第 55 号堅穴建物跡、第 71・79・80・108・144・143 号土坑と重複し、すべての遺構より新しい。また、北西—南東方向は第 33・36・40 号溝跡、第 115～118 号土坑と重複し、第 36 号溝跡と第 40 号溝跡を除きすべての遺構より新しい。第 36 号溝跡との重複関係不明であるが、第 40 号溝跡より古い。

**時期** 18 世紀末～現代

#### 第 25 号溝跡（第 255・265 図）

**位置** BB—AN、BC—AN グリッドに位置する。

**規模** 検出長は 11.5 m、幅は 0.3～0.4 m を測る。確認面からの深さは 0.1 m で、主軸方向は N—87°—E である。

**概要** 第 23・24 号溝跡と並行して検出された。流れは東—西方向で、掘込みが浅いため 1 箇所途切れている。断面は平凸レンズ状で単一層、覆土には浅間 A テフラを含む。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18 世紀末以降

#### 第 26 号溝跡（第 255・265・266 図）

**位置** BH—AN グリッドに位置する。

**規模** 検出長は 6.3 m、幅は 0.3～0.4 m。確認面からの深さは 0.1～0.18 m で、主軸方向は N—5°—E である。

**概要** 第 23 号溝跡に直交して検出された。断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間 A テフラは含まない。

**遺物** 縄文土器、土師器甕の細片を検出した。

**時期** 18 世紀後半

#### 第 27 号溝跡（第 255・266 図）

**位置** BH—A0、BG—A0・AP グリッドに位置する。

**規模** 検出長は 14 m、幅は 0.2～0.4 m を測る。確認面からの深さは 0.05 m で、主軸方向は N—7°—W である。

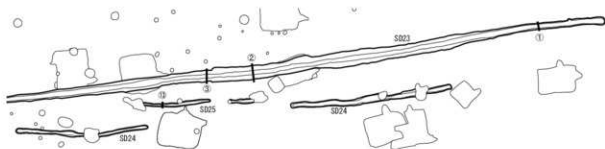


**概要** 第24号溝跡に直交するように確認された。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状、単一層で覆土には浅間Aテフラを含む。

なお、後述の第28・29号溝跡はこの溝に直交するように検出された。

**遺物** 縄文土器の細片を検出した。

**重複** 第24号溝跡と重複するが新旧関係は不明。



第255図 第23～40号溝跡

時期 18世紀末以降

#### 第28号溝跡（第255・266図）

位置 BH－APグリッドに位置する。

規模 検出長は7 m、幅は0.2～0.4 mを測る。確認面からの深さは0.04 mである。主軸方向はN－88°－Eである。

概要 第27号溝跡に直交するように確認された。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状で、覆土には浅間Aテフラを含む。

なお、後述の第29号溝跡とほぼ並行するように検出され、その間隔は10～11 mである。

遺物 縄文土器の細片を検出した。

時期 18世紀末以降

#### 第29号溝跡（第255・266図）

位置 BH－APグリッドに位置する。

規模 検出長は4.9 m、幅は0.3～0.4 mを測る。確認面からの深さは0.1 mで、主軸方向はN－82°－Eである。

概要 第27号溝跡に直交、第28号溝跡には並行するように確認された。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラを含まない。

遺物 検出されなかった。

時期 18世紀後半か

#### 第30号溝跡（第255・266図）

位置 BF－A0・AR、BG－AQグリッドに位置する。

規模 検出長14.3 m、幅0.3～0.8 mを測る。確認面からの深さは0.05～0.23 m。主軸方向はN－84°－W、及びN－13°－Wである。

概要 平面形態はクランク状で確認された。BF－ARグリッドの東－西方向は2 mで、そこからBF－AQグリッドへ向かって約5 m北上し、BG－AQグリッドで東－西方向に折れ西へ進む。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状、覆土に浅間Aテフラを含まない。溝底部の標高は西のBG－AQグリッド付近で59.60 m、BE－AQで59.36 m、BE－ARで58.66 mとなり、東に向かってしだいに標高が低くなるこ



とが判明した。

**遺物** 土師器甕の細片を検出した。

**時期** 18世紀後半

### 第31号溝跡（第255・266図）

**位置** BH-AQ～ATグリッドに位置する。

**規模** 検出長31.1m、幅0.5～1.1mを測る。確認面からの深さは0.05～0.12mで、主軸方向はN-12°-Wである。

**概要** 北西-南東方向の流れで、北西から南東に進むにつれて溝の幅が減少する。掘込みは浅く断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを含む。溝底部の標高は北のBG-AQグリッドの北端で59.66m、BG-ARで59.54m、BG-ATの南端で59.48mとなり、南に向かってしだいに標高が低くなることが判明した。第80号竪穴建物跡と重複する。

**遺物** 土師器甕、須恵器甕の細片を検出した。

**重複** 第80号竪穴建物跡より新しい。

**時期** 18世紀末以降

### 第32号溝跡（第255・265図）

**位置** BJ-BK-ANグリッドに位置する。

**規模** 検出長は8.9m、幅は0.4～0.6mを測る。確認面からの深さは0.45mで、主軸方向はN-87°-Wである。

**概要** 東-西方向の流れで、東側で第23号溝跡と重複し、西側は調査区外となるが北側の調査区で確認された第69号溝跡や第71号溝跡につながるものと考えられる。断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを含む。第23号溝跡、第141・142号土坑と重複する。

**遺物** 土師器甕、須恵器甕の細片を検出した。

**重複** 第23号溝跡、第141号土坑より古く、第142号土坑より新しい。

**時期** 18世紀末以降

### 第33号溝跡（第255・265・266・269図）

**位置** BK-AN-AOグリッドに位置する。

**規模** 検出長は16.4m、幅は0.4～0.8mを測る。確認面からの深さは0.08～0.15mで、主軸方向はN-17°-Wである。

**概要** 北西-南東方向の流れで、北側に向かうに従い幅が狭くなる。断面は平凸レンズ状で覆土最上層に浅間Aテフラを含み、南側で第24号溝跡と重複する。

**遺物** 土師器甕の細片を検出した。

**重複** 第24号溝跡より古い。

**時期** 18世紀後半

#### 第34号溝跡(第255・266図)

位置 BI・BJ-AT, BJ-AQ～AS, BK-AQグリッドに位置する。

規模 検出長41.6m、幅0.5～2mを測る。確認面からの深さ0.1m、主軸方向はN-21°-W、及びN-60°-Wである。

概要 第24号溝跡と並行して検出された。概ね北西-南東方向の流れであるが、北側のBJ-AQグリッドで幅が広くなり西側に曲がる。断面は平凸レンズ状で覆土には浅間Aテフラを含み、BI-ASグリッドで第35号溝跡、南側で第38号溝跡と重複する。

なお、この溝は旧公団に表わされている通称赤道とほぼ一致し、第24号溝跡と同様、赤道の西側に敷設された側溝と考えられる。

遺物 土師器甕の細片を検出した。

重複 第38号溝跡より古い。第35号溝跡との重複関係は不明。

時期 18世紀末～現代

#### 第35号溝跡(第255・266図)

位置 BJ-ASグリッドに位置する。

規模 北東-南西方向の流れで、検出長6m、幅0.4～0.7mを測る。確認面からの深さ0.23mで、主軸方向はN-27°-Eである。

概要 断面は平凸レンズ状、覆土は単一層で浅間Aテフラを含み、第34号溝跡と重複する。

遺物 検出されなかった。

重複 第34号溝跡との関係は不明。

時期 18世紀末以降

#### 第36号溝跡(第255・266図)

位置 BI-AS・ATグリッドに位置する。

規模 南-北方向の流れで、検出長9m、幅0.7～1.1mを測る。確認面からの深さ0.14～0.18mで、主軸方向はN-14°-Eである。

概要 断面は平凸レンズ状で、覆土単一層で浅間Aテフラを含む。第24号溝跡と重複するが試掘トレンチにより掘削されたため、重複関係は不明。

遺物 検出されなかった。

重複 第24号溝跡との関係は不明。

時期 18世紀末以降

#### 第37号溝跡(第255・266図)

位置 BJ-ATグリッドに位置する。

規模 東-西方向の流れで、検出長4.6m、幅0.7～1.2mを測る。確認面からの深さ0.08mで、主軸方向はN-88°-Eである。

**概要** 断面は平凸レンズ状、覆土は単一層で浅間Aテフラを含み、第34・38号溝跡と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第34・38号溝跡より古い。

**時期** 18世紀末以降

#### 第38号溝跡（第255・266図）

**位置** BI - AT・AUグリッドに位置する。

**規模** 南-北方向の流れで、検出長13.5m、幅0.4～0.6mを測る。確認面からの深さ0.08～0.17mで、主軸方向はN-12°-Wである。

**概要** 第24号溝跡と並行して検出され断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを含む。この溝は南に向かうに従い底面の標高が低くなる。第34・37・39号溝跡、第121号土坑と重複する。

なお、この溝は旧公図に表わされている通称赤道とほぼ一致し、第34号溝跡と同一方向で、第24号溝跡と並行するため、赤道の西側に敷設された側溝と考えられる。

**遺物** 条痕文系の土器片を検出した。

**重複** 第121号土坑より古く、第34・37・39号溝跡より新しい。

**時期** 18世紀末～現代

#### 第39号溝跡（第255・266図）

**位置** BJ - AT・AUグリッドに位置する。

**規模** おおよそ南-北方向の流れで、検出長8.2m、幅0.7～1.0mを測る。確認面からの深さ0.05～0.1mで、主軸方向はN-18°-Eである。

**概要** 断面は薄い平凸レンズ状、覆土は単一層で浅間Aテフラを含む。第38号溝跡、第155号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第38号溝跡、第155号土坑より古い。

**時期** 18世紀末以降

#### 第40号溝跡（第255・265・266図）

**位置** BG - AT、BH・BI - AU、グリッドに位置する。

**規模** 東-西方向の流れで、検出長18.5m、幅0.7～1.1mを測る。確認面からの深さ0.07～0.34mで、主軸方向はN-86°-Eである。

**概要** 断面は平凸レンズ状・逆台形状で、覆土上層・下層に浅間Aテフラを含む。溝底部の標高はBF - ATグリッド付近が最も高く59.38m、中央付近で59.22m、西側のBH - AUグリッド付近で58.84mと西谷に向かって低くなっている。第24号溝跡、第120号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第24号溝跡より新しい。第120号土坑との重複関係は不明。

時期 18世紀末～現代

#### 第41号溝跡(第256・264図)

位置 BL～B0-ARグリッドに位置する。

規模 検出長27.5m、幅0.5～0.7m測る。確認面からの深さ0.1mである。主軸方向はN-36°-E、及びN-85°-Wである。

概要 おおよそ東-西方向の流れであるが、BN-ARグリッドで南西方向に折れて約3m進み、その後、東-西方向の流れに戻る。B0-ARグリッドで試掘トレンチに掘削されたため、ここで途切れる。断面は薄い平凸レンズ状、覆土は単一層で浅間Aテフラを含む。第205・224・255号土坑と重複する。

遺物 縄文土器、土師器製の細片を検出した。

重複 第205・224号土坑より古く、第255号土坑より新しい

時期 18世紀末以降

#### 第42号溝跡(第257・268図)

位置 BK・BL-AU、BM・BN-ATグリッドに位置する。

規模 L字形の溝で検出長35.4m、幅0.3～0.9mを測る。確認面からの深さ0.05～0.2mで、主軸方向はN-19°-E、及びN-76°-Wである。

概要 西谷で確認され、断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを微量含み、第43・46・55号溝跡と重複する。西谷に形成された谷津田の北と東の水路跡である。

遺物 縄文土器、須恵器杯、土師器製の細片を検出した。

重複 第43・46・55号溝跡より新しい。

時期 18世紀末～現代

#### 第43号溝跡(第257・267・268図)

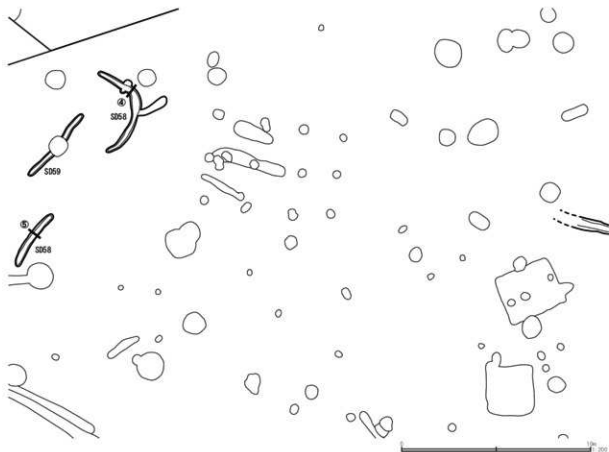
位置 BK・BL-AU、BM～B0-AT、B0～BR-AS、BS-AU、BU-AV・AW、B0・BP-AW、BP・BQ-AR、BR・BS-AVの各グリッドに位置する。

規模 検出長172.8m、幅0.2～1.4mを測る。確認面からの深さ0.05～0.22mで、軸方向はN-15°-E、及びN-62°-Wである。

概要 西谷内、及び西谷右岸で、大小の長方形を上下に重ねたような形で確認された。断面は平凸レンズ状、覆土上層に浅間Aテフラを含む。第42・45・48・49・50・55・56号溝跡と重複する。前述の第42号溝跡と同様、西谷に形成された谷津田の水路跡である。

なお、この溝の西側の一边は、旧公園に表わされている北東-南東方向を走る赤道とほぼ一致することから、この道の東側に敷設された側溝の役割も果たしていたと思われる。

遺物(第270図、第79表) 14は大窯4段階の瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で、16世紀末～17世紀初頭。腰部を除き内外面に鉄軸が施される。15・16は凝灰岩製の砥石で15には平タガネ痕、16には歯面タガネ痕が残る。このほか、ほうろく、縄文土器、須恵器杯・甕、土師器杯・甕の破片を検出した。



**重複** 第42号溝跡より古く第45・48・49・50・55・56号溝跡より新しい。

**時期** 18世紀末～現代

#### 第44号溝跡（第257・268図）

**位置** BN-AV・AWグリッドに位置する。

**規模** 弧状の溝で検出長9.5m、幅0.6～1mを測る。確認面からの深さ0.05mで、主軸方向はN-32°-E、及びN-39°-Wである。

**概要** 西谷右岸で確認され、断面は薄い平凸レンズ状である。覆土には浅間Aテフラは含まない。第49号溝跡と重複する。

**遺物** 縄文土器、須恵器坏、土師器甕の細片が検出された。

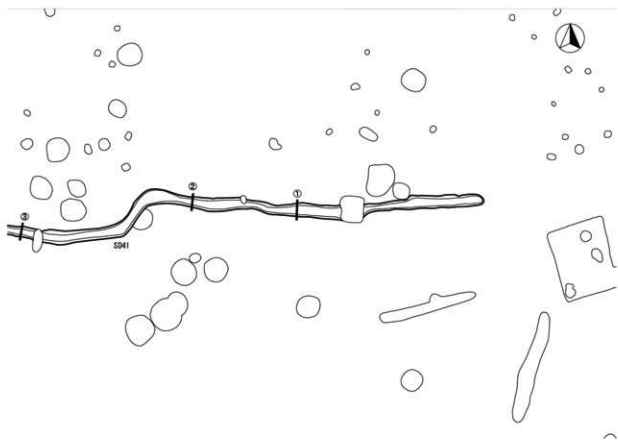
**重複** 第49号溝跡より新しい。

**時期** 覆土に浅間Aテフラを含まないが、この溝より古い第49号溝跡の覆土に浅間Aテフラを含み重複関係から現代と考えられる。

#### 第45号溝跡（第257・268図）

**位置** BM-AT～AV、BN-ATグリッドに位置する。

**規模** L字形の溝で検出長33.6m、幅0.3～0.8mを測る。確認面からの深さ0.6～0.3m。主軸方



第256図 第41・58・59号溝跡

向は $N-28^{\circ}-E$ 、及び $N-65^{\circ}-W$ である。

**概要** 西谷左岸から中央で確認され、断面は平凸レンズ状である。覆土には浅間Aテフラを含む。第43・46・47・48・55号溝跡と重複する。

**遺物** 須恵器坏・甕、土師器甕の細片を検出した。

**重複** 第43・47・48号溝跡より古く、第46・55号溝跡より新しい。

**時期** 18世紀末以降

#### 第46号溝跡（第257・267図）

**位置** BM-AU・AV、BN-AVグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長16.7m、幅0.4～0.8mを測る。確認面からの深さ0.04～0.1mで、主軸方向は $N-31^{\circ}-E$ である。

**概要** 西谷内で確認され、断面は薄い平凸レンズ状である。覆土は単一層で浅間Aテフラを含む。第42・45・47号溝跡と重複する。

**遺物** 須恵器甕、土師器甕の細片を検出した。

**重複** 第42・45・47号溝跡より古い。

**時期** 18世紀末以降

#### 第47号溝跡(第257・268図)

位置 BL～B0-AV、BP-AUグリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長39.2m、幅0.2～0.8mを測る。確認面からの深さ0.25mで、主軸方向はN-76°-Wである。

概要 西谷右岸で確認され、断面は平凸レンズ状である。覆土には上層・下層に浅間Aテフラを微量含む。第48・49号溝跡と重複する。

遺物 須恵器甕、土師器甕の細片を検出した。

重複 第48・49号溝跡より古い。

時期 18世紀末以降

#### 第48号溝跡(第257・268図)

位置 BM～B0-AV、B0～BR-AU、BR-ATグリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長55.6m、幅0.7～1.6mを測る。確認面からの深さ0.15～0.2mで、主軸方向はN-69°-Wである。

概要 西谷右岸で確認され、断面は平凸レンズ状、覆土には下層まで浅間Aテフラを含む。第43・45～49号溝跡と重複する。

遺物(第270図、第79表) 17は有孔円盤状土製品で断面は半円形、直径1.3cmで中央よりやや外側に直径2.2mmの孔が開けられている。18はかわらけである。このほか、縄文土器、須恵器杯・壺・甕、土師器台付甕・甕の破片を検出した。

重複 第43・49号溝跡より古く、第45・46・47号溝跡より新しい。

時期 18世紀末以降

#### 第49号溝跡(第257・264・268図)

位置 BL～BP-AV、BP～BR-AU、BS-AT、BR-AR～ATの各グリッドに位置する。

規模 L字形の溝で検出長97.1m、幅0.5～1.7mを測る。確認面からの深さ0.1～0.3m。主軸方向はN-13°-E、N-78°-E、及びN-69°-Wである。

概要 西谷内で確認され、断面は平凸レンズ状である。覆土は下層まで浅間Aテフラを含む。第43・44・52・56・57号溝跡と重複する。第43号溝跡同様、西谷に形成された谷津田の水路跡である。

なお、この溝の西側の一边は、旧公図に表わされている北東-南東方向を走る赤道と一致することから、この道の西側に敷設された側溝と考えられる。また、道の東側の側溝が第43号溝跡の西側の一边である。

遺物(第270図、第79表) 青磁碗や天目茶碗などが出土している。19は内面に草花文が彫られる龍泉窯系青磁碗で、12世紀中から13世紀代の所産である。20は古瀬戸後二期の瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で、内外面に鉄釉が施される。14世紀末から15世紀前半のものである。21は常滑系陶器甕であるが、内面が挿れており挿棒に転用している。22は不明鉄製品で、長さ2.4cm、幅7.5cm、厚さ1mmである。このほか、縄文土器、土師器甕、須恵器杯・甕の破片を検出した。

重複 第44・57号溝跡より古く、第52・56号溝跡より新しい。

時期 18世紀末～現代

#### 第50号溝跡（第257・268図）

位置 BR - AR ~ ATグリッドに位置する。

規模 L字形の溝で検出長15.1m、幅0.3～0.4mを測る。確認面からの深さ0.07m。主軸方向はN - 17° - E、N - 71° - Wである。

概要 西谷内で確認され、第43号溝跡の西側の一辺、第51・52号溝跡、第49号溝跡の西側の一辺と並行して確認された。断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを含まない。第43・51号溝跡と重複する。第43号溝跡同様、西谷に形成された谷津田の水路跡で、数回の掘り返しが行われたものと思われ、後述の第51・52号溝跡も水路の掘り返しである。

遺物 検出されなかった。

重複 第43号溝跡より古く第51号溝跡より新しい。

時期 重複関係から18世紀後半と思われる。

#### 第51号溝跡（第257・268図）

位置 BP - AS、BR - AR ~ AT、BS - AT、BR - AUの各グリッドに位置する。

規模 コの字形の溝で検出長36.9m、幅0.5～0.9mを測る。確認面からの深さ0.13mで、主軸方向はN - 18° - E、N - 69° - W、及びN - 64° - Wである。

概要 西谷内で確認され、第43号溝跡の西側の一辺、第50・52号溝跡、第49号溝跡の西側の一辺と並行して確認された。断面は平凸レンズ状で、覆土には浅間Aテフラを含まない。第50・52号溝跡と重複する。西谷に形成された谷津田の水路跡である。

遺物 検出されなかった。

重複 第50号溝跡より古く第52号溝跡より新しい。

時期 18世紀後半

#### 第52号溝跡（第257・268図）

位置 BR - AR ~ ATグリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長12.8m、幅0.8mを測る。確認面からの深さ0.16mで、主軸方向はN - 15° - Eである。

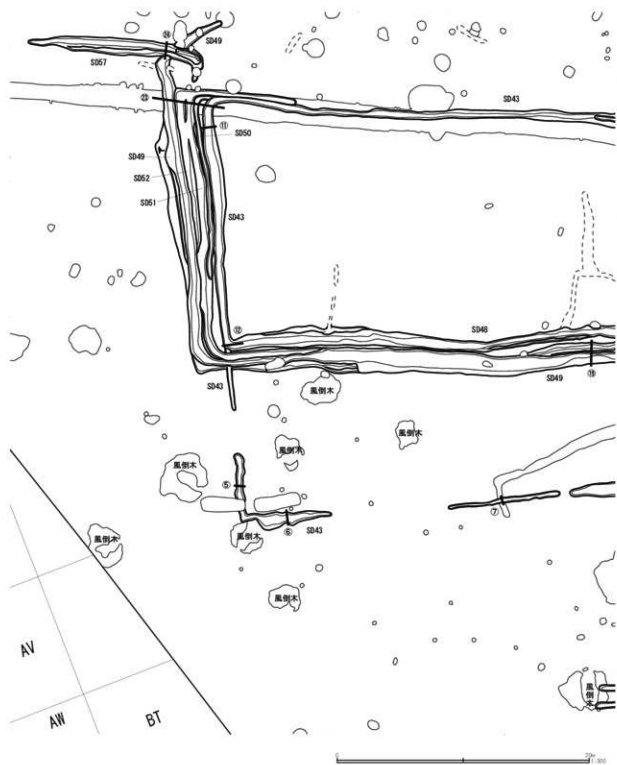
概要 西谷内で確認され、第43号溝跡の西側の一辺、第50・51号溝跡、第49号溝跡の西側の一辺と並行して確認された。断面は平凸レンズ状、覆土には浅間Aテフラを含まない。第49・51号溝跡と重複する。西谷に形成された谷津田の水路跡である。

遺物 検出されなかった。

重複 第49・51号溝跡より古い。

時期 18世紀後半



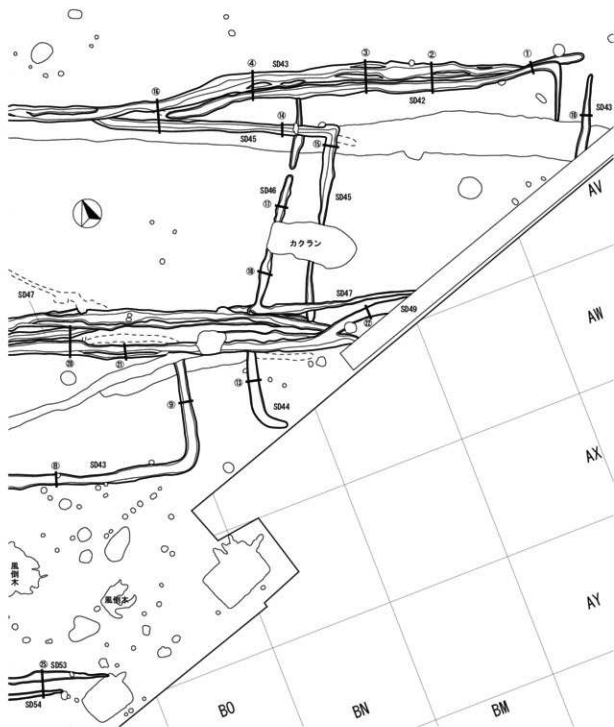


第53号溝跡 (第257・268図)

位置 BP・BQ - AX グリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長8.2mを測る。幅0.3～0.8m、確認面からの深さ0.15mで、主軸方向はN-72°-Wである。

概要 西谷右岸の台地上、第54号溝跡と並行して確認された。第54号溝跡との間の距離は約1mであ



第257図 第42～54号溝跡

る。断面は平凸レンズ状、覆土上層に浅間Aテフラを含み第51号竪穴建物跡と重複する。

**遺物** 土師器甕、須恵器甕の細片を検出した。

**重複** 第51号竪穴建物跡より新しい。

**時期** 覆土上層に浅間Aテフラを含むことから溝が掘られたのは18世紀後半と考えられる。

#### 第54号溝跡(第257・268図)

位置 BP・BQ - AXグリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長5.8m、幅0.3～0.4mを測る。確認面からの深さ0.05mで、主軸方向はN-75°-Wである。

概要 西谷右岸の台地上、第53号溝跡と並行して確認された。第53号溝跡との間の距離は約1mである。断面は薄い平凸レンズ状、覆土は単一層で浅間Aテフラを含む。

遺物 検出されなかった。

時期 18世紀末以降

#### 第55号溝跡(第258・259・260・267図)

位置 BK - AU・AV、BL - BN - AU、BN - BP - AT、BP - BR - AS、BR - BT - AR、BX - CD - AP、BY - CA - A0の各グリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長206mを測り、調査区内での最長の溝である。幅1.2～3.4m、確認面からの深さは0.3～1.24mで、主軸方向はN-66°-W、N-71°-Wである。

概要 この溝は西谷左岸の谷の落ち際で確認され、ここから谷頭に向かい台地上のBY - A0グリッドで南西に折れて直線的に進み、さらに調査区外へと延びる。断面は逆台形・V字状を呈し、数回の掘り返しが行われたことが土層観察で確認されている。溝底面の標高は最西端のCC - APグリッド付近で58.60m、溝が屈曲するBY - A0で58.34m、BW - APで58.00m、BS - AQで57.82m、BO - ASで57.68m、BL - AUで57.18m、最東端のBJ - AVで56.56mとなり、西谷の下流に向かって低くなることが判明した。

また、この溝のほぼ中央、BP・BQ - ASグリッドで溝底面の精査を行っていた際、底面に溝の掘削痕が確認された(第259図)。平面形態は三角形で、発掘調査で用いられる剣先スコップで掘削を行った際に残る痕のようである。掘込みの深さは3～5cmで、溝底面の南側に掘削方向が東へ向かう掘削痕3列、北側には掘削方向が西に向かうものが確認された。このことから、このグリッド周辺での溝の掘削は、時代を変えて少なくとも2回行われたことが判明した。掘削痕は東側に向かうものは残りが良く、西側に向かうものは残りが悪い。溝の南北の法面にはピットが確認されており、特にBQ - ARからCC - APグリッドにかけては多数の確認されている。ピットの規則性はないが、南側の法面に掘られたピットの基数が多く北側を上回る。こうした特徴を持つ溝は古代の遺跡で多く確認されており、そして、牧の囲い溝とされている場合が多い。なお、前述のとおり第55号溝跡は最低でも2回掘り返しを行っているが、それを前期・後期と分けて考えると、前期の第55号溝跡が埋まった後、第79号溝跡が掘削され同溝跡が埋まった後、後期第55号溝跡が掘削されていることが判明した。

遺物(第271・272図、第79表) 溝の規模の割に出土遺物は少ないが、在地産土器、常滑・瀬戸美濃の国産陶器、舶載青磁などが出土している。23～39は在地産土器、23～30はかわらけである。23・24は手づくね成形、25・26は不明、27～30がロクロ成形である。27の内面にはロクロ痕が顕著である。31～37は瓦質片口鉢である。31は口縁部外面に浅い横ナデ整形が施されるもので、14世紀前半。32は口縁部の断面が半月状で、口縁外面に強い回転工具痕が巡る鉢で14世紀後半。33・34は口縁部が膨

らむ鉢で、口唇部が若干内側に突出し外面に指頭痕が残る。33は14世紀代、34は15世紀前半のものである。38・39は土鍋で、38は口唇部が内側に突出し内耳は口唇部から口縁部屈曲部にかけて付けられている。両者ともに15世紀中から後半のもの。40～44・46は常滑系陶器である。40は13世紀後半の玉緑壺、41～43は甕で41が13世紀前半のものである。44・46は片口鉢である。44は山茶碗系の鉢で13世紀後半。46は15世紀前半の甕系の鉢で口唇部が外側に突出する。45は東海系の片口鉢である。47～50は瀬戸美濃系陶器ですべて古瀬戸後期の所産である。47は折縁中皿で15世紀後半。48・49は折縁深皿又は直縁大皿で15世紀代。50は瓶子又は梅瓶で14世紀中～15世紀後半である。51～54は龍泉窯系青磁である。51・52は13世紀代の蓮弁文碗。53は輪花皿で15世紀前半から16世紀前半。54は盤類である。55・56は金属製品で、55は湯釜の環付の部分で外側に孔が開いた耳が付けられている。56は椀形滓で60.3gある。57～60は砥石で57～59は凝灰岩製、57には櫛歯状工具痕が残り58・59には刃物痕が数条残る。3点とも被熱している。60は安山岩製の砥石で刃物痕が数条残る。

このほか、縄文土器、石斧、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、人物・形象埴輪などを検出した。

**重複** 第43・45・49・50・51・52・78・79号溝跡、第180・209・429・430・433・434・435・444号土坑、第4号井戸の各遺構と重複する。第43・45・49・50・51・52・78号溝跡、第180・429・430・433・434・435・444号土坑より古く、第209号土坑、第4号井戸より新しい。また、第79号溝跡との重複関係は前期第55号溝跡が第79号溝跡より古く、後期第55号溝跡が第79号溝跡より新しい。

**時期** 出土遺物に瀬戸美濃大窯製品を含まないことから16世紀以前、また、遺物の主体が14～15世紀後半のため、時期は14世紀から15世紀後半と考えられる。なお、遺構の重複関係から前期第55号溝跡が14世紀代、後期第55号溝跡が15世紀代の可能性もある。

#### 第56号溝跡（第261・264・268図）

**位置** BN～BQ－AVのグリッドに位置する。

**規模** L字形の溝で検出長27.4m、幅0.4～1mを測る。確認面からの深さ0.14～0.21mで、主軸方向はN-20°-E、N-65°-Wである。

**概要** 西谷右岸の台地上から西谷に向かって確認された。ほぼ東-西方向の溝はBP-AVグリッドで南方向に折れ約1m進み途切れる。断面は平凸レンズ状で第43・49号溝跡と重複する。なお、この溝と同時期の竪穴建物跡第50・51号竪穴建物跡が南方約20mで、第52号竪穴建物跡が南西30mでそれぞれ確認されており、第56号溝跡と関連するものと考えられる。

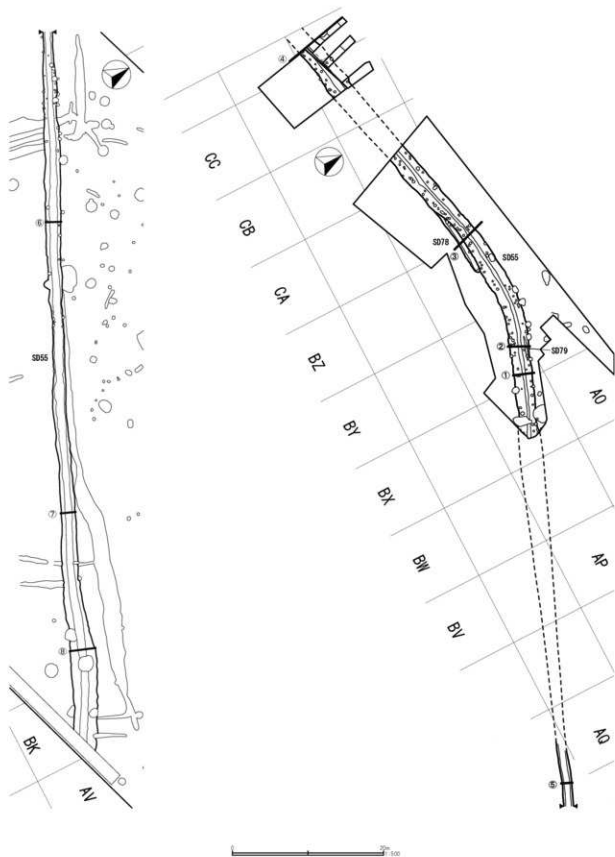
**遺物**（第273図、第79表） 須恵器坏・埴・甕・長頸瓶、灰軸陶器などが検出された。61～69は須恵器である。61は坏で62・63高台埴。64～66・69は甕、67・68は瓶である。70～74は灰軸陶器で、70は高台皿、71は小型の長頸瓶。72～74は長頸瓶である。灰軸陶器高台皿は黒笹90号窯式新段階である。

**重複** 第43・49号溝跡より古い。

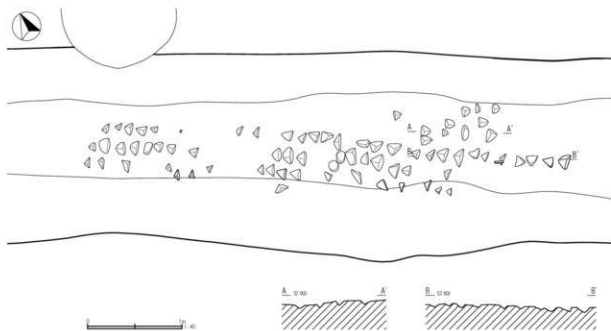
**時期** 9世紀後半、宮下遺跡IV期

#### 第57号溝跡（第257・268図）

**位置** BR・BS－ARグリッドに位置する。



第258图 第55·78·79号满跡



第259図 第55号溝跡 掘削痕

**規模** L字形の溝で検出長15.1m、幅0.5～1.3mを測る。確認面からの深さ0.23～0.3mで、主軸方向はN-20°-E、N-65°-Wである。

**概要** 西谷左岸の台地上で確認された。断面は平凸レンズ状で覆土に浅間Aテフラを含まない。最低でも2回の掘り返しが行われたことが、土層観察で確認された。第43号溝跡と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第43号溝跡より新しい。

**時期** 18世紀末～現代

#### 第58号溝跡（第256・264図）

**位置** BQ-AQ、BR-ARグリッドに位置する。

**規模** L字形の溝で検出長5.7m、幅0.3～0.6mを測る。確認面からの深さは0.05mで、主軸方向はN-60°-E、N-31°-Wである。

**概要** 西谷左岸の台地上、西谷内の第49号溝跡の延長上で確認された。BQ-ARグリッドで途切れBP-AQグリッドへ続き北西に折れる。この溝は旧公園に表わされている赤道と一致することから、赤道の東側の側溝の残存部と考えられる。

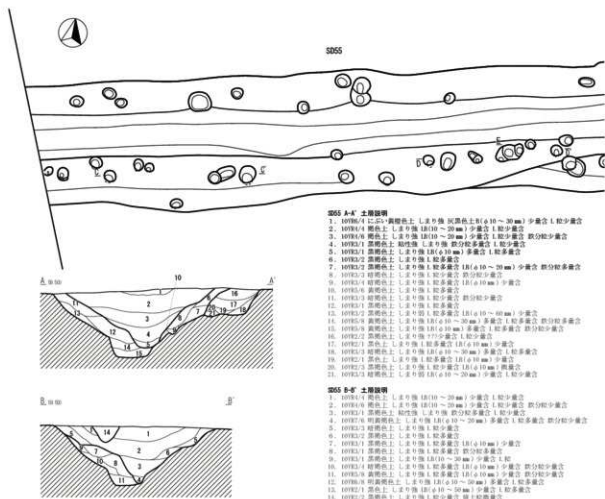
**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀末～現代

#### 第59号溝跡（第256図）

**位置** BQ-BR-AQグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長4.2m、幅0.3～0.4mを測る。確認面からの深さ0.05mで、主軸方向は



N-85°-Eである。

**概要** 西谷左岸の台地上、西谷内の第58号溝跡と並行して確認された。この溝は旧公園に表わされている赤道と一致することから、赤道の西側の側溝の残存部と考えられる。覆土に浅間Aテフラを含む。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀末~現代

### 第60号溝跡(第262・269図)

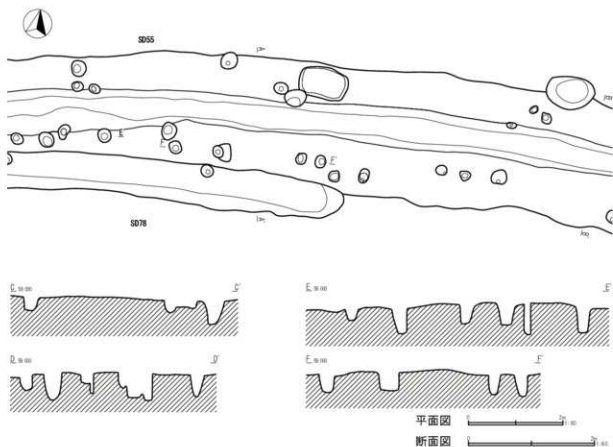
**位置** 8H-4K・ALグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長4.4m、幅0.2~0.5mを測る。確認面からの深さは0.06~0.1mで、主軸方向はN-5°-Wである。

**概要** 直線的な溝で第61号溝跡と並行して確認された。第61号溝跡との距離は0.7~1mである。断面は薄い平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラは含まない。

**遺物** 縄文土器の細片が検出された。

**時期** 18世紀後半



第260図 第55号溝跡ピット群

#### 第61号溝跡（第262・269図）

位置 BH - AK・AL グリッドに位置する。

規模 L字形の溝で検出長9.4m、幅0.2～0.5mを測る。確認面からの深さは0.05～0.15mで、主軸方向はN-6°-Wである。

概要 直線的な溝で第60号溝跡と並行して確認された。第60号溝跡との距離は0.7～1mである。断面は薄い平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラは含まない。

遺物 縄文土器の細片が検出された。

時期 18世紀後半

#### 第62号溝跡（第262・269図）

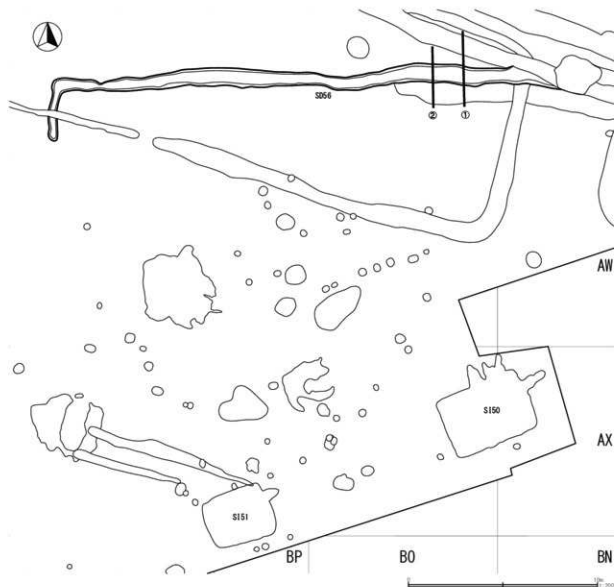
位置 BJ・BK - AM グリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長6.4m、幅0.3～0.7mを測る。確認面からの深さは0.05mで、主軸方向はN-85°-Eである。

概要 第7号井戸の北に隣接して確認された。断面は平凸レンズ状で覆土に浅間Aテフラは含まず、溝底面に砂粒が検出されている。なお、溝の西側延長上には第66号溝跡がある。第13号掘立柱建物跡P4と重複する

遺物（第273図、第79表） 75は18世紀前半の瀬戸美濃系陶器灯明皿で、削り込み高台と思われる。





第261図 第56号溝跡

口縁部外面から内面にかけて鉄軸が施される。76は瀬戸美濃系陶器の筒形香炉で三足が付けられ、口縁内面から体部外面にかけて鉄軸が施される。18世紀中頃のもの。この香炉は第7号井戸出土香炉と同一個体で、体部が本溝で底部が第7号井戸出土である。このほか、丹波系陶器播鉢が第7号井戸（第280図No.31）と接合している。

**重複** 第13号掘立柱建物跡よりも新しい。

**時期** 18世紀中～後半

#### 第63号溝跡（第262・269図）

**位置** BL - ALグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長1.8m、幅0.3～0.4mを測る。確認面からの深さは0.06mで、主軸方向はN-3°-Eである。

**概要** ほぼ南-北方向の流れを持ち第64号溝跡に直交するように確認された。断面は薄い平凸レンズ状で単一層、浅間Aテフラを微量含む。この溝の南方の延長上に第65号溝跡がある。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀末以降

#### 第64号溝跡（第262・269図）

**位置** BL・BN - ALグリッドに位置する。

**規模** クランク状を呈する溝で、検出長5.3m、幅0.4～0.6mを測る。確認面からの深さは0.05～0.15mで、主軸方向はN-84°-E、N-40°-Eである。

**概要** おおよそ東-西方向の流れを持ち第63・65号溝跡に直交するように確認された。断面は薄い平凸レンズ状で、浅間Aテフラは含まない。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀後半

#### 第65号溝跡（第262・269図）

**位置** BL - AL～ANグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長16.5m、幅0.5～0.8mを測る。確認面からの深さは0.08mで、主軸方向はN-4°-Wである。

**概要** おおよそ南-北方向の流れを持ち第69号溝跡の南-北方向の部分と並行して確認された。また、第66号溝跡と直交し重複する。断面は平凸レンズ状で、覆土上層に浅間Aテフラを多量含む。

**遺物**（第273図、第79表） 77は18世紀代の肥前系磁器染付碗くらわんか碗である。体部外面に文様が描かれるが、高台脇及び高台内に文様はない。第188・189・193・194号土坑と重複する。

**重複** 第66号溝跡、第188・189・193・194号土坑よりも新しい。

**時期** 18世紀末以降

#### 第66号溝跡（第262・269図）

**位置** BL - AMグリッドに位置する。

**規模** L字状の溝で検出長17.9m、幅0.3～0.4mを測る。確認面からの深さは0.1mで、主軸方向はN-88°-E、及びN-4°-Wである。

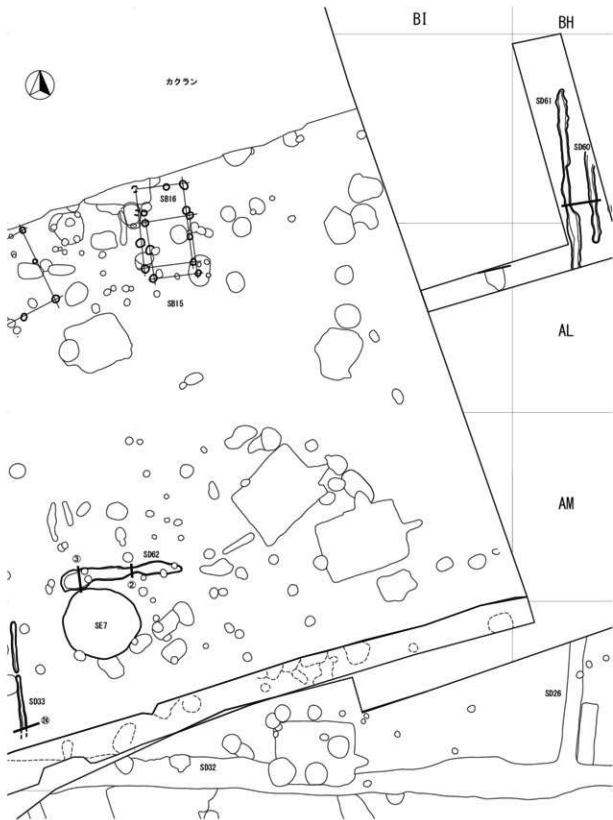
**概要** L字状の流れを持ち、西側でほぼ90度北に屈曲し途中途切れながら11.4m北進する。断面は薄い平凸レンズ状で単一層、覆土に浅間Aテフラは含まない。土層観察の結果、この北側の北進した部分が埋まった後、直線的な第65号溝跡が掘られていることが判明した。なお、この溝の東側の延長上に第62号溝跡が所在する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第65号溝跡、第190号土坑よりも古い。

**時期** 18世紀中～後半





第262図 第33・60～71号満跡

#### 第 67 号溝跡 (第 262・269 図)

位置 BL - AN グリッドに位置する。

規模 コの字状の溝で検出長 8.9 m、幅 0.3 ~ 0.4 m を測る。確認面からの深さは 0.03 ~ 0.14 m で、主軸方向は N - 12° - W、N - 89° - E、及び N - 42° - E である。

概要 台形状の流れを持ち、断面は薄い平凸レンズ状で単一層、覆土にテフラは含まない。

遺物 検出されなかった。

時期 時期不明

#### 第 68 号溝跡 (第 262・269 図)

位置 BM - AL グリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長 6.3 m を測る。幅は第 69 号溝跡と重複するため不明で、確認面からの深さ 0.06 ~ 0.08 m、主軸方向は N - 85° - E である。

概要 東 - 西方向の流れを持ち第 69 号溝跡と重複する。断面は薄い平凸レンズ状で、覆土に浅間 A テフラは含まない。

遺物 検出されなかった。

重複 第 69 号溝跡よりも古い。

時期 18 世紀中 ~ 後半

#### 第 69 号溝跡 (第 262・269 図)

位置 BL - AN、BM - AL ~ AN グリッドに位置する。

規模 検出長 36.3 m、幅 0.4 ~ 1 m を測る。確認面からの深さは 0.08 ~ 0.14 m で、主軸方向は N - 84° - E、N - 1° - E である。

概要 クランク状の流れを持ち BK - AN グリッドでは東側に進む。この延長上に第 23・32 号溝跡が確認されている。断面は平凸レンズ状で、土層観察の結果、掘り返しが行われていることが確認され、少なくとも 2 期に分かれることが判明した。前期の第 69 号溝跡は覆土には浅間 A テフラは含まれず、後期の同溝は浅間 A テフラを含む。

遺物 (第 273 図、第 79 表) 78 は肥前系磁器染付碗で 18 世紀前半。高台内の一重圏線内に □□ 口製の文字が描かれ「大明年製」と思われる。79 は瀬戸美濃系陶器のせんじと呼ばれる碗で、18 世紀中頃のものの。体部に鉄軸と灰軸が掛け分けられる。

重複 後期第 69 号溝跡は、第 68 号溝跡・後期第 71 号溝跡、第 187・191 号土坑よりも新しい。

時期 前期第 69 号溝跡が 18 世紀後半で、後期第 69 号溝跡が 18 世紀末以降と考えられる。

#### 第 70 号溝跡 (第 262・269 図)

位置 BM - AN グリッドに位置する。

規模 直線的な溝で検出長 1.7 m、幅 0.2 ~ 0.4 m を測る。確認面からの深さ 0.08 m で、主軸方向は N - 86° - E である。

**概要** 断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラは含まない。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀中頃か

#### 第71号溝跡（第262・269図）

**位置** BM - AN・A0、BN - AM・ANグリッドに位置する。

**規模** ほぼ直線的な溝で検出長29.3m、幅0.3～0.9mを測る。確認面からの深さは0.1～0.2mで、主軸方向はN-37°-W、N-86°-Wである。

**概要** この溝はBL-A0グリッドで北西方向に緩やかにカーブして直線的に進む。断面は平凸レンズ状で、土層観察の結果、掘り返しが行われていることが確認され、少なくとも2期に分かれることが判明した。前期の第71号溝跡は覆土には浅間Aテフラは含まれず、後期の同溝は浅間Aテフラを含む。後期第69号溝跡、第219号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 後期第69号溝跡より古く、第219号土坑より新しい。

**時期** 前期第71号溝跡が18世紀後半で、後期第71号溝跡が18世紀末以降と考えられる。

#### 第72号溝跡（第263・266図）

**位置** B0 - AM・AN、BP - AN～APグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長26.3m、幅0.4～0.9mを測る。確認面からの深さは0.05～0.15mで、主軸方向はN-13°Eである。

**概要** 後述する西側の第73号溝跡と並行して確認された。断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラを含む。第308・315号土坑と重複する。なお、この溝は旧公図に表わされている南-北方向の通称赤道と一致することから、道の東側に敷設された側溝と考えられる。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第308・315号土坑より新しい。

**時期** 現代

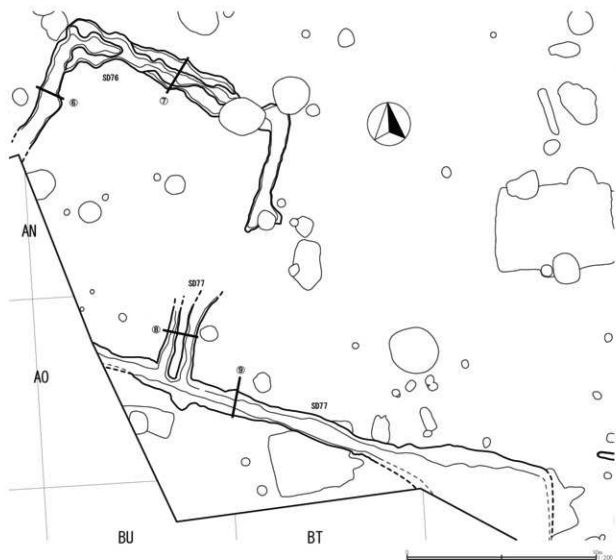
#### 第73号溝跡（第263・266図）

**位置** BP - AN～APグリッドに位置する。

**規模** 直線的な溝で検出長20.9m、幅0.4～0.8mを測る。確認面からの深さは0.05mで、主軸方向はN-13°Eである。

**概要** 西側の第73号溝跡と並行して確認された。断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラを含む。なお、この溝は前述の第72号溝跡とともに旧公図に表わされている南-北方向の通称赤道と一致することから、道の西側に敷設された側溝と考えられる。第7号掘立柱建物跡、第62号竪穴建物跡、第313・314号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。



重複 第7号掘立柱建物跡、第62号竪穴建物跡、第313・314号土坑より新しい。

時期 現代

#### 第74号溝跡（第263・266図）

位置 BQ・BR - ANグリッドに位置する。

規模 L字形の溝で検出長10m、幅0.2～0.3mを測る。確認面からの深さは0.05～0.13mで、主軸方向はN-8°-E、N-82°-Wである。

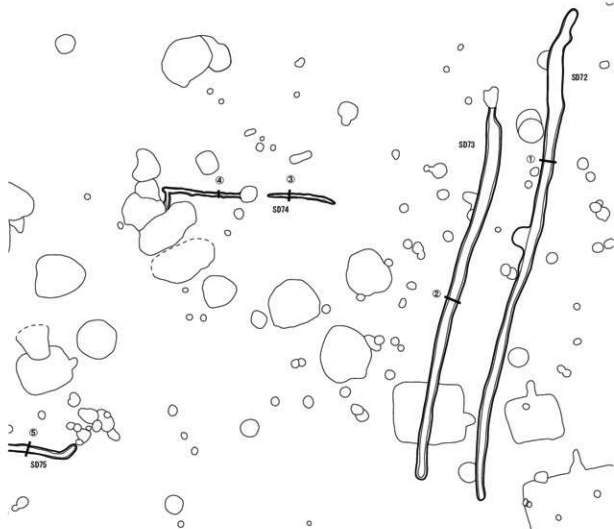
概要 この溝は東から約3.5m西へ進み、途中で途切れて西側に約4m進み南に折れ、攪乱に壊されている。断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラは含まない。第335号土坑と重複する。

遺物 検出されなかった。

重複 第335号土坑より古い。

時期 時期不明

#### 第75号溝跡（第263・266図）



第263図 第72～77号溝跡

**位置** BR・BS - APグリッドに位置する。

**規模** L字状の溝で検出長4.6m、幅0.2～0.3mを測る。確認面からの深さは0.07mで、主軸方向はN-53° - E、N-79° - Wである。

**概要** 断面は平凸レンズ状で、覆土に浅間Aテフラを含む。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 18世紀末以降

#### 第76号溝跡（第263・266図）

**位置** BS - A0・AP、BT・BU - A0グリッドに位置する。

**規模** T字状の溝で検出長31.8m、幅0.7～1.6mを測る。確認面からの深さは0.07～0.4mで、主軸方向はN-24° - E、N-65° - Wである。

**概要** この溝はBT - A0グリッドから南東方向に約26m進み、BR - APグリッドで南西方向の調査区外へ延びるものと思われる。また、BT - A0グリッドでは二条に分かれ北上することが断面観察で確認された。溝底部は凹凸があり一定せず、底面に鉄分の沈着はなく水が流れた痕跡が認められないことか



ら、島の地境溝と考えられる。断面は不定形で覆土に浅間Aテフラを含む。第65・70号竪穴建物跡、第382・397号土坑と重複する。なお、この溝の北側の第77号溝跡は同一の溝と考えられる。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第65・70号竪穴建物跡、第382・397号土坑より新しい。

**時期** 現代

#### 第77号溝跡（第263・266図）

**位置** BT-AM・AN、BU-AM・ANグリッドに位置する。

**規模** コの字状の溝で検出長24.5m、幅0.8～1.2mを測る。確認面からの深さは0.2mで、主軸方向はN-22°-E、N-72°-Wである。

**概要** コの字状に確認されたこの溝は、前述の第76号溝跡と同一と考えられ、溝底部には凹凸があり一定せず、底面に鉄分の沈着はなく水が流れた痕跡が認められないことから、第76号溝跡と共に方形に廻る島の地境溝と考えられる。断面は不定形で覆土に浅間Aテフラを含む。第394号土坑と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第394号土坑より新しい。

**時期** 現代

#### 第78号溝跡（第258・267図）

**位置** BZ・CA-APグリッドに位置する。

**規模** 検出長9.8m、幅0.82m以上で、確認面からの深さ0.3～0.4mを測る。主軸方向はN-85°-E。

**概要** ほぼ東西に流れの方向をもつ直線的な溝で、全体の形状は不明である。以前は第55号溝跡と同じ方向に存在していたものと考えられる。断面は幅広のU字状である。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第55号溝跡より古い。

**時期** 15世紀前半か

#### 第79号溝跡（第258・267図）

**位置** BY-APグリッドに位置する。

**規模** 検出長4.4m、幅0.56m以上で、確認面からの深さ0.31mを測る。主軸方向はN-70°-W。

**概要** ほぼ東西に流れの方向をもつ直線的な溝で、第55号溝跡の調査中に確認されたため全体の形状は不明である。以前は第55号溝跡と同じ方向に存在していたものと考えられる。断面は幅広のU字状である。第55号溝跡と重複するが、最初に掘られた第55号溝跡より新しく後に掘られた第55号溝跡に填されている。

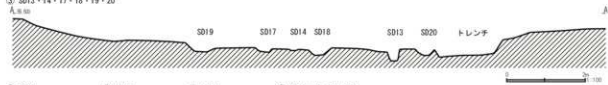
**遺物** 検出されなかった。

**重複** 前期第55号溝跡より新しく、後期第55号溝跡より新しい。

**時期** 15世紀代前半か



③ SD13・14・17・18・19・20



① SD19



② SD18



① SD23



④ SD13・17・18・20



⑤ SD14・16・17・18・20



② SD23



③ SD23



⑤ SD14・16・17・18・20



④ SD23・26



⑥ SD24



⑥ SD14・16・17・18・20



⑤ SD23・32



⑦ SD24



⑦ SD14・15・16・17・18



⑧ SD24・33



⑨ SD24



⑩ SD24



⑪ SD24・40



⑫ SD24・40



⑬ SD25



④ SD14・16・17・18・20 土質説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 石灰土上 灰(15～40mm)少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗色土 粘性弱 しまり強 砂質層 炭分粒数豊富
3. 10YR2/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 石灰土上 灰(10～20mm)少量 炭分粒数豊富
4. 10YR2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 石灰土上 灰(10～20mm)少量 炭分粒数豊富
5. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富 灰土上 灰(10～20mm)少量
6. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富 灰土上 灰(10～20mm)少量
7. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
8. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
9. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 石灰土上 灰(10～20mm)少量 炭分粒数豊富
10. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 石灰土上 灰(10～20mm)少量 炭分粒数豊富
11. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
12. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
13. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
14. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富
15. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 少量 Ar-B 多量 炭分粒数豊富

① SD23 土質説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

② SD23 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

③ SD23 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

④ SD23・26 土質説明

1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
3. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
4. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑤ SD23・32 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑧ SD24・33 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑨ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑩ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑪ SD24・40 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑫ SD24・40 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

⑬ SD25 土質説明

1. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量

④ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑦ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑧ SD24・33 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑨ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑩ SD24 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑪ SD24・40 土質説明

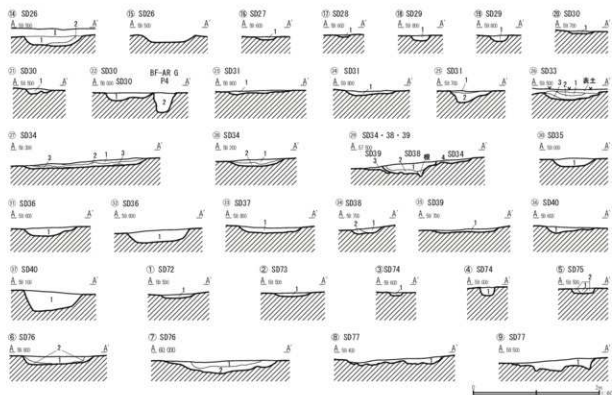
1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑫ SD24・40 土質説明

1. 10YR/3 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富
2. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量 炭分粒数豊富

⑬ SD25 土質説明

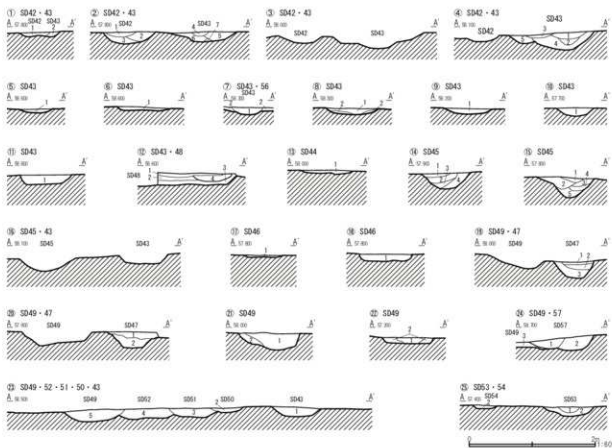
1. 10YR/1 暗褐色土 粘性弱 しまり強 Ar-B 少量



- ◎ S026 土層說明  
1. 原土層  
2. 100% 4 號粉土, 上中層 1 粒多量含 A-4 少量含  
3. 100% 9 號粉土, 上中層 1 粒 6.0~20mm 多量含 1 粒多量含
- ◎ S027 土層說明  
1. 100% 粉土,  $d_{15} \sim 10$ mm 以上 1 粒多量含 A-4 少量含
- ◎ S028 土層說明  
1. 100% 粉土, 1 粒多量含 A-4 少量含
- ◎ S029 土層說明  
1. 100% 粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含
- ◎ S029 土層說明  
1. 100% 粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含
- ◎ S030 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層  
1 粒多量含 1 粒(6.0~7.5mm) 多量含 1 粒 6 號含 A-4 少量含
- ◎ S030 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層  
1 粒多量含 1 粒(6.0~7.5mm) 多量含 1 粒 6 號含 A-4 少量含
- ◎ S030 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層  
1 粒多量含 1 粒(6.0~7.5mm) 多量含 1 粒 6 號含 A-4 少量含
- ◎ S031 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S031 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S031 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S032 土層說明  
1. 粉土, 上中層 1 粒 1 粒(6.0~7.5mm) 少量含  
2. 兩土, 1 粒(6.0~7.5mm) 多量含  
3. 2.5~5.0mm 以上, 1 粒少量含
- ◎ S034 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層  $d_{15} \sim 5$ mm 以上 1 粒少量含  
2. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層  $d_{15} \sim 5$ mm 以上 1 粒少量含  
3. 100% 2 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含
- ◎ S034-38-39 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含  
2. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含  
3. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S035 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S036 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S037 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S038 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S039 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S040 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S040 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S040 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S040 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S072 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S073 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S074 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S074 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S075 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S076 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S076 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含
- ◎ S077 土層說明  
1. 100% 4 號粉土, 粘性弱, 上中層 1 粒少量含 1 粒少量含 1 粒少量含

第 266 圖 第 26 ~ 31 · 33 ~ 40 · 72 ~ 77 号溝跡





① SD42-43 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含 177 顆集料  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 頂面上 8(10~20mm) 少量含 頂上 1 粒少量含

② SD42-43 土層說明  
 1. 10YK1/6 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 177 顆集料  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 頂面上 8(10~20mm) 少量含  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料  
 4. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料  
 5. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料  
 6. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 頂面上 8(10~20mm) 少量含 頂上 1 粒少量含  
 7. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 頂面上 8(10~20mm) 多量含

③ SD42-43 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料 8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含 頂上 1 粒少量含  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料  
 4. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料  
 5. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 頂面上 8(10~20mm) 多量含

④ SD43 土層說明  
 1. 10YK1/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑤ SD43 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑥ SD43-56 土層說明  
 1. 10YK1/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑦ SD43 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑧ SD43 土層說明  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含

⑨ SD43 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含 Ar-A 顆集料

⑩ SD43 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含 Ar-A 顆集料  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含 Ar-A 顆集料

⑪ SD43-46 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含 磨化粉少量含 砂質

⑫ SD43-46 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含 磨化粉少量含 砂質  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含 磨化粉少量含 砂質  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含 磨化粉少量含 砂質  
 4. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含 磨化粉少量含 砂質

⑬ SD44 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含 頂面上 1 粒少量含

⑭ SD45 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 頂面上 8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層

⑮ SD45 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含 頂面上 8(10~20mm) 少量含  
 4. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑯ SD45 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含 Ar-A 少量含  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含  
 4. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含  
 5. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1 粒少量含

⑰ SD46 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 顆集料

⑱ SD46 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 顆集料

⑲ SD47-48 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含

⑳ SD47-48 土層說明  
 1. 10YK1/2 頂面熱土 L 2 中層 頂上 1 粒少量含  
 2. 10YK1/2 頂面熱土 L 2 中層 頂上 1 粒少量含  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含

㉑ SD47-48 土層說明  
 1. 10YK1/2 頂面熱土 L 2 中層 頂上 1.8(10~20mm) 少量含 177 顆集料  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 177 顆集料 1 粒少量含

㉒ SD49 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 少量含

㉓ SD49 土層說明  
 2. 10YK3/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 少量含

㉔ SD49-57 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒 1 粒少量含  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 1 粒少量含

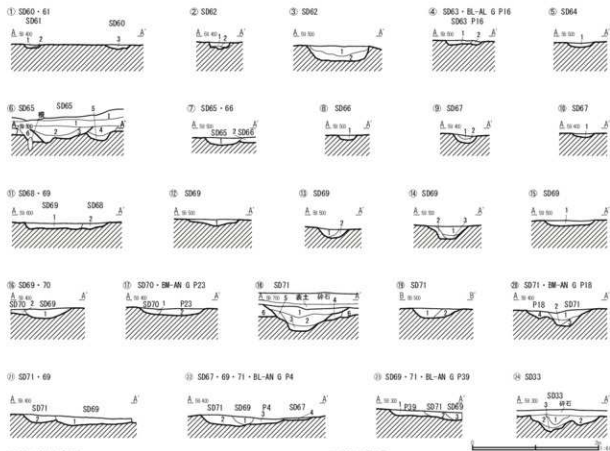
㉕ SD49-57 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒 177 顆集料 1.8(10~20mm) 少量含  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含  
 4. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含  
 5. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 磨化粉少量含 1 粒少量含

㉖ SD49-57 土層說明  
 1. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1 粒少量含 1.8(10~20mm) 多量含 磨化粉少量含  
 2. 10YK2/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 磨化粉少量含  
 3. 10YK2/2 頂面熱土 L 2 中層 1.8(10~20mm) 多量含 1 粒少量含 磨化粉少量含

㉗ SD53-54 土層說明  
 1. 10YK3/2 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 少量含

㉘ SD53-54 土層說明  
 2. 10YK1/4 頂面熱土 粘性質 L 2 中層 1.8(10~20mm) 少量含 Ar-A 少量含

第 268 圖 第 42 ~ 54 · 56 · 57 号溝跡



① SD60 - 61 土層說明

1. 10R2/4 結構土，黏性土，上中層，1 和少量，同化物粘集
2. 10R1/6 礫土，1 和少量
3. 10R3/4 礫土，1 和少量

② SD62 土層說明

1. 10R1/4 礫土，黏性土，上中層，1R(2~5mm) 少量
2. 10R2/3 2-5mm 礫土，黏性土，上中層，1 和 1R(5~10mm) 少量

③ SD63 - BL-AL G P16 土層說明

1. 10R2/4 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10mm) 少量)

④ SD64 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑤ SD65 土層說明

1. 4R/4
1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/4 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
3. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
4. 10R1/4 礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
5. 10R1/6 礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
6. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
7. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量

⑥ SD65 - 66 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/4 礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
3. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑦ SD66 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑧ SD67 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑨ SD68 - 69 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑩ SD69 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑪ SD69 - 70 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑫ SD70 - BH-AN G P23 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑬ SD71 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑭ SD71 - BH-AN G P16 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑮ SD71 - 69 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑯ SD67 - 69 - 71 - BL-AN G P4 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑰ SD69 - 71 - BL-AN G P39 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑱ SD73 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

⑳ SD69 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉑ SD69 - 50 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉒ SD70 - BH-AN G P23 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉓ SD71 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉔ SD71 - BH-AN G P16 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉕ SD71 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉖ SD71 - BH-AN G P16 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉗ SD69 - 50 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉘ SD67 - 69 - 71 - BL-AN G P4 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

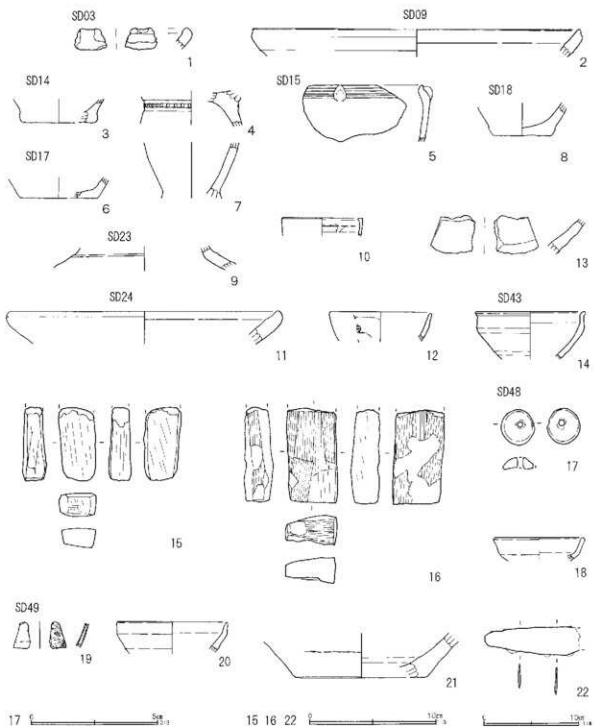
㉙ SD69 - 50 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)
2. 10R1/6 高礫土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

㉚ SD73 土層說明

1. 10R2/3 結構土，上中層，1 和少量 (R(10~20mm) 少量)

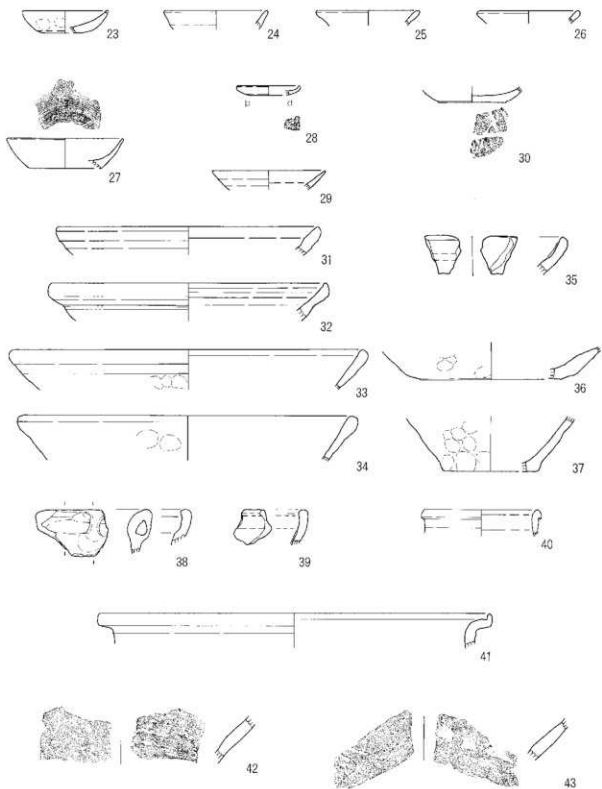
第 269 圖 第 33 · 60 ~ 71 号溝跡



第270图 第3·9·14·15·17·18·23·24·43·48·49号沟迹出土遗物

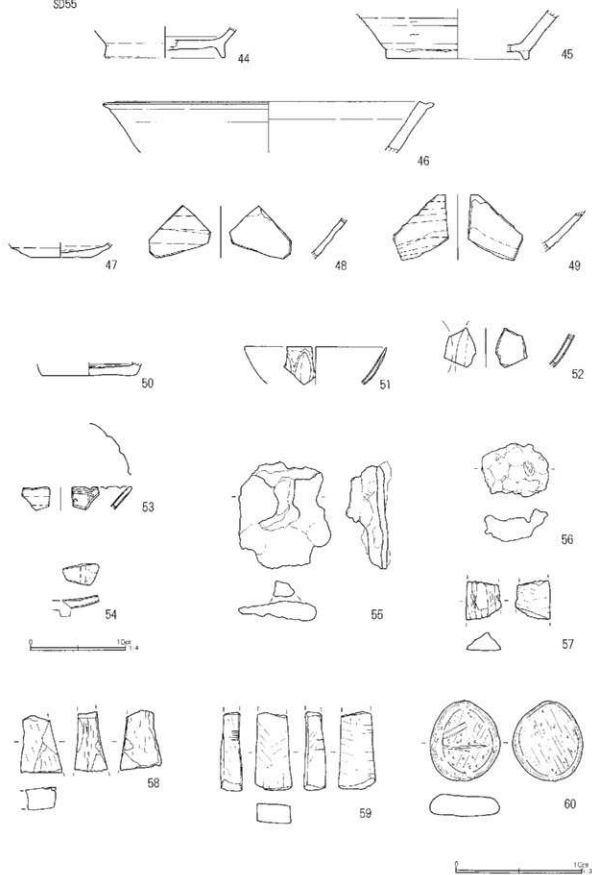


SD55

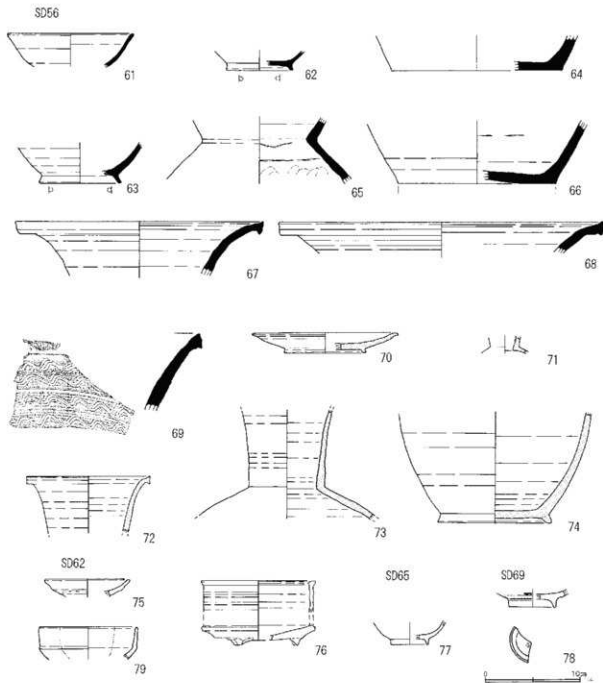


第 271 图 第 55 号满跡出土遺物 1

SD55



第 272 図 第 55 号満跡出土遺物 2



第 273 図 第 56 号溝跡出土遺物

第 79 表 溝跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	瓦質土器 片口鉢	-	(2.2)	-	ABEGH	にぶい黄褐色	良好	口縁部片	5c後 段樹塚C跡II期
2	瓦質土器 片口鉢	35.0	(3.0)	-	ABF	にぶい橙	良好	口縁部片	4c後 段樹塚A跡I期
3	縄文土器 深鉢	-	(2.5)	8.0	ABG/M	橙	良好	底部片	後期 変行式
4	縄文土器 台付鉢	-	(3.7)	-	ABM	橙	良好	接合部片	後期 変行式 表面が摩耗 文様が不明瞭
5	縄文土器 深鉢	-	(6.1)	-	AB	黒褐色	良好	口縁部片	後期 変行式
6	縄文土器 深鉢	-	(2.0)	(8.0)	ABG/M	褐色褐	良好	底部片	後期 変行式

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考	
7	縄文土器 台付土器	-	(8.2)	-	ABGH	浅黄橙	良好	接合部片	後期 変行式	
8	縄文土器 深鉢	-	(3.5)	(8.0)	ABGM	黄橙	良好	底面片	後期 変行式	
9	瓦質土器 壺	-	(2.6)	-	ABGHJ	にぶい黄橙	良好	頸部片	?4c代	
10	陶器 香炉	(8.6)	(1.8)	-	B	淡黄	良好	口縁部片	瀬戸美濃系 18c代	
11	瓦質土器 片口鉢	(28.0)	(3.5)	-	ABJM	にぶい褐	良好	口縁部片	?4c前 倉根原A類(1)~1期	
12	磁器 染付刷	18.6	(3.1)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 くらわんか編 18c 外巻輪樹文	
13	陶器 片口鉢	-	(4.0)	-	ABH	にぶい褐	良好	胴部片	常滑系 II期	
14	陶器 天目茶碗	(11.4)	(5.0)	-	AB	にぶい黄橙	良好	口縁~体部片	瀬戸美濃系 16c末~17初 大塚4段焼	
15	石製品 磁石	長さ(5.7)cm 幅2.9cm 厚さ1.8cm 重さ48.7g					石村蔵灰岩 磁器5面 平タガネ痕(左側) 磁熱の痕跡あり			
16	石製品 磁石	長さ(7.5)cm 幅4.1cm 厚さ2.3cm 重さ97.0g					石村蔵灰岩 磁器5面(右側) 帯染タガネ痕あり(裏・裏・左側・下面) 磁熱の痕跡あり			
17	土製品 有孔円盤状土製品	長さ1.4cm 幅1.3cm 厚さ0.5cm 重さ0.7g 孔径0.22cm					中央よりやや外側に穿孔			
18	土師質土器 かわらけ	(9.3)	(2.5)	-	AB	にぶい橙	良好	口縁~体部片		
19	磁器 青磁刷	-	(2.6)	-	B	青オリーブ灰	良好	体部片	鎌倉系系 12期 12c中~13c	
20	陶器 天目茶碗	(11.8)	(3.2)	-	AB	黒	良好	口縁~体部片	瀬戸美濃系 14c末~15c前 吉瀬戸後I期(13期~14期)	
21	陶器 壺	-	(4.8)	(14.0)	ABGM	にぶい褐	良好	底面片	常滑系 磁鉢に転用	
22	磁製品 不明	長さ(2.0)cm 幅7.5cm 厚さ0.1cm 重さ8.4g								
23	土師質土器 かわらけ	(9.2)	(2.4)	-	ABDM	橙	不良	25%	手づくね成形	
24	土師質土器 かわらけ	(11.0)	(2.0)	-	AB	橙	良好	口縁部片	手づくね成形	
25	土師質土器 かわらけ	(11.0)	(1.6)	-	ABD	橙	良好	口縁部片		
26	土師質土器 かわらけ	(10.4)	(1.4)	-	ABI	にぶい橙	不良	口縁部片		
27	土師質土器 かわらけ	(12.1)	(3.2)	(7.6)	ABHJL	橙	良好	50%	口タ口成形	
28	土師質土器 かわらけ	(6.8)	(1.0)	-	AB	橙	良好	50%	口タ口成形	
29	土師質土器 かわらけ	(11.9)	(2.0)	-	EJK	にぶい橙	良好	口縁~体部片	口タ口成形	
30	土師質土器 かわらけ	-	(1.7)	(7.0)	ABC	橙	良好	体~底面片	口タ口成形	
31	瓦質土器 片口鉢	(27.4)	(3.0)	-	ABGHW	淡黄	良好	口縁部片	?4c前 倉根原A 1期	
32	瓦質土器 片口鉢	(28.0)	(4.0)	-	ABGJ	褐灰	良好	口縁~体部片	?4c後 倉根原A類II期	
33	瓦質土器 片口鉢	(37.0)	(4.3)	-	ABGH	にぶい褐	良好	口縁~体部片	?4c代	
34	瓦質土器 片口鉢	(34.8)	(4.7)	-	ABGHK	にぶい黄橙	良好	口縁~体部片	?5c前 倉根原F類	
35	瓦質土器 片口鉢	-	(4.0)	-	ABGHJ	褐灰	良好	口縁部片		
36	瓦質土器 片口鉢	-	(3.9)	(15.0)	ABGJMW	褐灰	良好	底面片		
37	瓦質土器 片口鉢	-	(5.8)	(10.0)	ABGJL	褐灰	良好	底面片		
38	瓦質土器 土鍋	-	(4.7)	-	ABGJ	黄褐	良好	口縁部片	?5c中~後半 金井33号并戸No18に類似	
39	瓦質土器 土鍋	-	(3.7)	-	ABGJ	赤赤褐	不良	口縁部片	?5c中~後半 金井33号并戸No20に類似	
40	陶器 玉縁口縁壺	(11.6)	(2.8)	-	AB	黄褐	良好	口縁部片	常滑系 6a形式(1250~1275) 中田池A-2号出土壺に類似	
41	陶器 壺	(41.2)	(3.7)	-	ABCG	褐灰	良好	口縁~体部片	常滑系陶器 12c前 L字状口縁 常滑5形式(1220~1250)	
42	陶器 壺	-	(5.0)	-	ABGHN	にぶい赤褐	良好	胴部片	常滑系	
43	陶器 壺	-	(4.4)	-	ABGH	にぶい橙	良好	胴部片	常滑系	

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
44	陶器 片口鉢	-	(3.3)	(12.2)	ABQM	灰白	良好	底部片	常滑系 片口鉢 8a(1250~1275)
45	陶器 片口鉢	-	(5.4)	(15.0)	ABI	にじい黄緑	良好	底~底部片	常滑系
46	陶器 片口鉢	(32.0)	(5.4)	-	ABGNM	褐	良好	口縁部片	常滑系 片口鉢 115c前 常滑9形(1400~1450)
47	陶器 緑釉小皿	-	(1.6)	(8.4)	ABH	浅黄緑	良好	底~底部片	瀬戸変遷系 15c代 古瀬戸後期
48	陶器 緑釉深皿又は浅鉢大皿	-	(4.2)	-	AB	灰黄緑	良好	底部片	瀬戸変遷系 15c代 古瀬戸後期
49	陶器 緑釉深皿又は浅鉢大皿	-	(4.4)	-	ABG	にじい黄緑	良好	底部片	瀬戸変遷系 15c代 古瀬戸後期
50	陶器 椀子又は椀底	-	(1.4)	(10.0)	ABI	灰白	良好	底部片	瀬戸変遷系 14c中~15c後 古瀬戸後期
51	磁器 青磁碗	(15.0)	(4.0)	-	AB	青緑	良好	口縁~底部片	鎌倉系 13c代 15類
52	磁器 青磁碗	-	(3.5)	-	AB	黄緑	良好	底部片	鎌倉系 13c代 15類
53	磁器 青磁皿	-	(2.5)	-	AB	灰オリーブ	良好	口縁~底部片	鎌倉系輪花皿 15c前~16c前
54	磁器 青磁盤	-	(1.5)	-	AB	青緑	良好	底部片	鎌倉系 底部内面に蓮弁文を施す
55	鉄製品 湯釜	長さ(8.4)cm 幅(7.3)cm 高さ(3.0)cm 重さ177.4g						鍋縁 覆付部	
56	銅形洋	長さ4.3cm 幅5.3cm 高さ2.6cm 重さ60.3g							
57	石製品 磁石	長さ(3.1)cm 幅2.8cm 高さ1.4cm 重さ10.7g						石材緑灰岩 平面長方形 断面三角形 裏面平タガネ痕あり 磁石は裏面1箇のみ	
58	石製品 磁石	長さ(4.7)cm 幅(3.3)cm 高さ2.6cm 重さ40.3g						石材緑灰岩 万物流動象あり 磁石の痕跡あり	
59	石製品 磁石	長さ(5.3)cm 幅(2.0)cm 高さ1.7cm 重さ45.0g						石材緑灰岩 磁石4箇 左右側面数条刃物痕あり 磁石の痕跡あり	
60	石製品 磁石	長さ6.3cm 幅5.5cm 高さ1.8cm 重さ40.6g						石材安山岩	
61	須恵器 杯	(13.2)	(3.4)	-	ABQM	黄灰	良好	口縁部片	未野産
62	須恵器 高台埴	-	(2.1)	(7.0)	ABM	灰白	良好	底部片	未野産 糸切のみ
63	須恵器 高台埴	-	(4.3)	(8.6)	ABQLM	黄灰	良好	底部片	未野産 糸切のみ
64	須恵器 埴	-	(3.7)	(16.0)	ABQM	灰	良好	底部片	未野産
65	須恵器 埴	-	(7.0)	-	ABQLM	褐灰	良好	底部片	未野産
66	須恵器 埴	-	(6.7)	(16.5)	ABQM	黄灰	良好	底部片	未野産
67	須恵器 長頸瓶	(26.0)	(5.8)	-	ABQM	灰	良好	口縁部片	未野産
68	須恵器 長頸瓶	(34.0)	(3.3)	-	ABQM	褐灰	良好	口縁部片	未野産
69	須恵器 埴	-	(8.2)	-	ABQM	褐灰	不良	口縁部片	南比企産 柳輪波 伏文
70	灰釉陶器 高台皿	(14.8)	(2.1)	(8.6)	ABGH	灰白	良好	30%	6~90新設備か 遠江地域宮口窯跡群産 ヘラ切り 内面刷毛塗り 夾雑物・黒色粒少量
71	灰釉陶器 小皿	-	(2.0)	-	ABQM	褐灰	良好	底部片	6~90新設備か 三河地域二川窯跡群産 外面施釉 夾雑物 無量
72	灰釉陶器 長頸瓶	(13.0)	(6.0)	-	AB	灰黄	良好	口縁~底部片	6~90新設備か 遠江地域宮口窯跡群産 内外面刷毛塗り 夾雑物・黒色粒少量
73	灰釉陶器 長頸瓶	-	(11.6)	-	AB	灰黄	良好	底部片	6~90新設備か 遠江地域宮口窯跡群産 内外面刷毛塗り 夾雑物・黒色粒少量
74	灰釉陶器 瓶	-	(11.7)	(12.0)	AB	灰黄	良好	胴~底部片	6~90新設備か 遠江地域宮口窯跡群産 外面施釉 夾雑物・黒色粒少量
75	陶器 打明皿	(9.0)	(1.6)	-	AB	褐	良好	口縁~底部片	瀬戸変遷系 18c前 瀬戸市尾呂3号出土打明皿に類似
76	陶器 香炉	(12.1)	(6.8)	(9.3)	AB	極暗褐	良好	30%	瀬戸変遷系 18c中 瀬戸市尾呂3号4号出土の香炉に類似
77	磁器 染付碗	-	(2.6)	(4.0)	AB	灰白	良好	底~底部片	肥前系 18c くらわんか碗
78	磁器 染付碗	-	(1.9)	(4.8)	AB	灰白	良好	底~底部片	肥前系 18c前
79	陶器 甗(せんじ)	(10.4)	(3.4)	-	AB	褐	良好	口縁~底部片	瀬戸変遷系 18c中 瀬戸市かみた1号窯出土せんじに類似

## 4 土取り遺構

宮下遺跡では竪穴建物跡の掘削を利用した不定形な掘込みが14基検出された。一様に灰白色粘土塊やマンガン粒を含む黄褐色粘質土塊などを覆土中に多く混入するため、地山を採取する目的の遺構と判断し、土取り遺構と命名した。土取り遺構の掘削パターンは竪穴建物跡粗掘り直後と竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階の2種に分けられる。竪穴建物跡粗掘り直後の掘削は第4・7・8・10～14号土取り遺構の8基、竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階の掘削は第1～3・5・6・9号土取り遺構の6基である。地山から採取した土や粘土は竪穴建物跡のカマド構築材などに利用されたものとみられる。因みに現場知見でのカマド構築材と土取り遺構掘削最下層との関係を下記にまとめた。なお、構築材の判ったカマドは76基で、台地上作図(第23図)の基本層序から採取土層が判明したのはそのうちの34基である。マンガン粒を含むX層を用いたのが10基、XI-1層を用いたのが6基、XI-2層を用いたのが7基、XII層を用いたのが2基、灰白色粘土であるXIII層を用いたのが9基である。また、土取り遺構はいずれも竪穴建物跡と重複しており、規模の数値は建物跡床面を確認面として計測したものを記載した。

### 第1号土取り遺構(第274図)

**位置** AR-AM、AS-AMグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第37号竪穴建物跡及び第2号土取り遺構と重複し、いずれも本跡が新しい。

**規模** 長軸3.45m×短軸1.80m、第37号竪穴建物跡床面からの深さは0.73mである。

**概要** 第37号竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階からである建物跡覆土1層上面から掘込みを確認した。底面は灰白色粘土層であるXIII層を30cmほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。X層であるマンガン粒を含む黄褐色粘質土の採掘量は0.95m<sup>3</sup>、XIII層である灰白色粘土の採掘量は1.05m<sup>3</sup>であった。今回の調査中に現地ですべて実際にXIII層である灰白色粘土を採取し、切り藁と砂を混ぜてカマド復元を試みたが、上述した採取量だけでは1基造るのがギリギリである。灰白色粘土だけではなく、他の地山も混ぜて構築したことも考えられる。壁や底面に工具痕は観察できなかったが、壁の下部がオーバーハングしていることから手楯状の工具を使用して粘土を採取したのではないかと想定される。

**遺物(第275図、第80表)** 須臾器杯・高台塊・蓋が出土したが、約1世紀の年代差が生じている。本跡では新しい遺物を以て時期決定とした。

**時期** 9世紀後半、宮下遺跡IV期に帰属する。

### 第2号土取り遺構(第274図)

**位置** AR-AM、AS-AMグリッドの台地上に位置する。

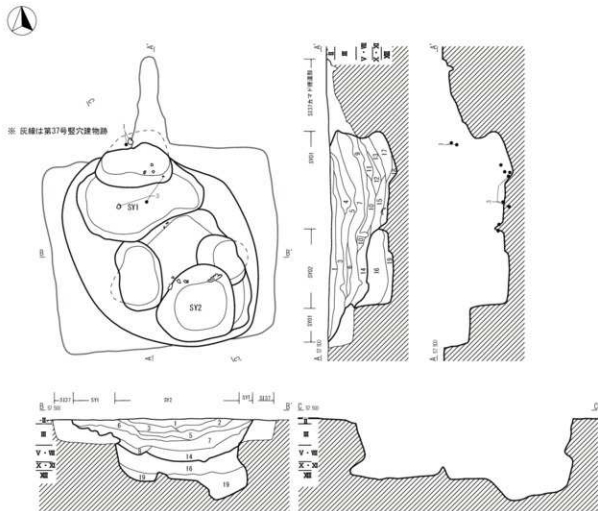
**重複** 第37号竪穴建物跡及び第1号土取り遺構と重複し、竪穴建物跡より新しく、第1号土取り遺構よりも古い。

**規模** 長軸1.75m以上×短軸1.96m、第37号竪穴建物跡床面からの深さは0.65mである。

**概要** 北側を第1号土取り遺構に大きく壊されているため、掘込み面は明確にできなかった。底面は灰白色粘土層であるⅫ層を30cmほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む黄褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。壁の下部がオーバーハングしている。

**遺物** 須恵器片が出土していたが細片のため図示はしなかった。

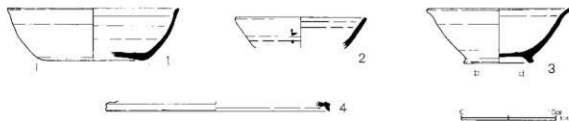
**時期** 大まかには8世紀後半から9世紀後半の間であるが、ここでは細片であるが須恵器片から9世紀前半の年代観を与える。



**SV1・Ⅱ 土層説明**

1. SV1E1 褐色土 Ⅰ粘多量含 礫土粘質層
2. SV1E2 暗褐色土 粘性弱 しまり強  $\phi 1 \sim 2 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 褐色細砂 (0a-0b) (10mm) 礫層
3. SV1E3 暗褐色土  $\phi 1 \sim 2 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 灰化物 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含
4. SV1E4 灰色土 粘性弱 Ⅰ粘多量含 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含 Ⅰ粘多量含
5. SV1E5 暗褐色土  $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ の灰化物とⅠ粘多量含 礫土粘少量含
6. SV1E6 灰色土 粘性弱 Ⅰ粘多量含 同位相と礫土粘質層
7. SV1E7 暗褐色土  $\phi 2 \sim 10 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 灰化物 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含 礫土粘質層
8. SV1E8 暗褐色土 灰化物 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含 礫土粘少量含 Ⅰ粘多量含
9. SV1E9 褐色土 礫層粘土少量含 礫土塊 ( $\phi 1 \sim 2 \text{mm}$ ) 少量含 同位相粘質層 Ⅰ粘多量含
10. SV1E10 明黄褐色土 粘性弱 しまり強  $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相粘質層
11. SV1E11 黄褐色土 粘性弱 しまり強  $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相と礫土粘少量含
12. SV1E12 褐色土  $\phi 2 \sim 10 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 同位相と礫土粘質層
13. SV1E13 灰色土 粘性弱 Ⅰ粘多量含 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相と礫土粘少量含
14. SV1E14 褐色土  $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相粘質層 礫土塊 ( $\phi 2 \sim 10 \text{mm}$ ) 少量含
15. SV1E15 明黄褐色土  $\phi 1 \sim 5 \text{mm}$ の灰化物とⅠ粘多量含 Ⅰ粘少量含
16. SV1E16 明黄褐色土 粘性弱 しまり強  $\phi 10 \sim 20 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相粘質層
17. SV1E17 灰色土 粘性弱 Ⅰ粘多量含 ( $\phi 5 \sim 20 \text{mm}$ ) 少量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相と礫土粘少量含
18. SV1E18 褐色土  $\phi 1 \sim 2 \text{mm}$ の灰化物とⅠ粘多量含 Ⅰ粘多量含
19. SV1E19 黄褐色土 粘性弱 しまり強  $\phi 10 \sim 20 \text{mm}$ のIRとⅠ粘多量含 礫土塊とし、暗褐色土少量含 同位相粘質層

第274図 第1・2号土取り遺構



第 275 図 第 1 号土取り遺構出土遺物

第 80 表 第 1 号土取り遺構出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵器 坏	(18.0)	(5.5)	(11.8)	NSFGM	灰白	良好	90%	東比企産
2	須恵器 坏	(13.6)	(3.3)	-	ABF	灰白	良好	口縁部片	東比企産 体部外置正位垂書「口」
3	須恵器 高台碗	14.9	5.8	7.2	NSGLM	黄灰	良好	90%	東野産 未切のみ
4	須恵器 蓋	(23.6)	(1.8)	-	ABFGM	黄灰	良好	口縁部片	東比企産

### 第 3 号土取り遺構（第 44 図）

位置 AY-A0 グリッドの台地上に位置する。

重複 第 10 号竪穴建物跡と重複し、本跡が新しい。

規模 長軸 1.58 m×短軸 1.10 m、第 10 号竪穴建物跡床面からの深さは 0.80 m である。

概要 第 10 号竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階からである建物跡覆土 2 層上面から掘込みを確認した。底面は灰白色粘土層である XIII 層を 30cm ほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。壁の下部がオーバーハングしており、底面は大きな 2 基のピット状に掘り込まれている。

遺物 検出されなかった。

時期 重複遺構から 10 世紀前半、宮下遺跡 V 期とみられる。

### 第 4 号土取り遺構（第 33 図）

位置 BA-AL・AM グリッドの台地上に位置する。

重複 第 5 号竪穴建物跡と重複し、本跡が古い。

規模 長軸 1.20 m×短軸 1.02 m、第 5 号竪穴建物跡床面からの深さは 0.82 m である。

概要 第 5 号竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階からである建物跡覆土 2 層上面から掘込みを確認した。底面は灰白色粘土層である XIII 層を 20cm ほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。

遺物 検出されなかった。

時期 重複遺構から 9 世紀後半、宮下遺跡 IV 期とみられる。



#### 第5号土取り遺構(第74図)

位置 BB-AM・ANグリッドの台地上に位置する。

重複 第21号竪穴建物跡と重複し、本跡が新しい。

規模 長軸1.04m×短軸0.91m、第21号竪穴建物跡床面からの深さは0.63mである。

概要 第21号竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階からである建物跡覆土2層上面から掘込みを確認した。建物跡北西隅角壁際に掘込まれ、南に向けて大きくオーバーハングしている。底面は灰白色粘土層であるⅫ層を20cmほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む黄褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。

遺物 検出されなかった。

時期 重複遺構から9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期とみられる。

#### 第6号土取り遺構(第117図)

位置 BC-ANグリッドの台地上に位置する。

重複 第40号竪穴建物跡と重複し、本跡が新しい。

規模 長軸1.45m×短軸1.20m、第40号竪穴建物跡床面からの深さは0.50mである。

概要 第40号竪穴建物跡の西壁際の床面直下で確認されたため、建物跡粗掘り直後に掘削されたものと考えられる。底面はマンガン粒を含む黄褐色粘質土層であるⅪ層中である。形状は長方形で箱形である。

遺物 検出されなかった。

時期 重複遺構から9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期とみられる。

#### 第7号土取り遺構(第131図)

位置 BC-ARグリッドの台地上に位置する。

重複 第45号竪穴建物跡と重複し、本跡が古い。

規模 長軸1.25m×短軸0.88m、第45号竪穴建物跡床面からの深さは0.53mである。

概要 第45号竪穴建物跡の北西隅角の床面直下で確認されたため、建物跡粗掘り直後に掘削されたものと考えられる。底面はマンガン粒を含む黄褐色粘質土層であるⅪ層中である。形状は長方形で箱形である。

遺物 礫が1点出土している。

時期 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期とみられる。

#### 第8号土取り遺構(第182図)

位置 B0-AP、BP-APグリッドの台地上に位置する。

重複 第60号竪穴建物跡と重複し、本跡が古い。

規模 長軸1.60m×短軸1.49m、第60号竪穴建物跡床面からの深さは0.83mである。

概要 第60号竪穴建物跡の北東隅角の床面直下で確認されたため、建物跡粗掘り直後に掘削されたものと考えられる。底面は灰白色粘土層であるⅫ層を10cmほど掘り抜いており、マンガン粒を含む黄褐色粘

質土塊などが覆土中に多量混入している。形状は方形で箱形である。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期とみられる。

#### 第9号土取り遺構（第187図）

**位置** BP-A0・APグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第62号竪穴建物跡と重複し、本跡が新しい。

**規模** 長軸1.28m×短軸1.10m、第62号竪穴建物跡床面からの深さは0.82mである。

**概要** 第62号竪穴建物跡廃絶後の埋没途中段階である建物跡覆土1層上面から掘込みを確認した。底面は灰白色粘土層であるXIII層を40cmほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。底面は平坦で壁の下部がオーバーハングしている。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀前半、宮下遺跡Ⅲ期とみられる。

#### 第10号土取り遺構（第156図）

**位置** BP-AX・AYグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第51号竪穴建物跡と重複し、本跡が古い。

**規模** 長軸0.90m×短軸0.60m、第51号竪穴建物跡床面からの深さは0.46mである。

**概要** 形状は長方形箱形である。第51号竪穴建物跡のカマド燃焼部直下で確認されたため、建物跡掘り直後に掘削されたものとする。底面は灰白色粘土層上面であるが採取目的層はその直上のマンガン粒を含む褐色粘質土層であるXI層であったとみられる。なお、重複する第51号竪穴建物跡のカマド構築材はマンガン粒を含む黄褐色粘質土である。覆土は一機に埋め戻されたブロック堆積である。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期とみられる。

#### 第11号土取り遺構（第156図）

**位置** BP-AX・AYグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第51号竪穴建物跡と重複し、本跡が古い。

**規模** 長軸1.07m×短軸1.03m、第51号竪穴建物跡床面からの深さは0.48mである。

**概要** 形状は方形箱形である。第51号竪穴建物跡の床面直下で確認されたため、建物跡掘り直後に掘削されたものとする。底面は灰白色粘土層上面であるが採取目的層はその直上のマンガン粒を含む褐色粘質土層であるXI層であったとみられる。なお、重複する第51号竪穴建物跡のカマド構築材はマンガン粒を含む褐色粘質土である。覆土は一機に埋め戻されたブロック堆積である。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡Ⅳ期とみられる。

#### 第12号土取り遺構（第159図）

**位置** BR-AY、BS-AYグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第52号竪穴建物跡及び第13・14号土取り遺構と重複し、本跡が最も新しい。

**規模** 長軸1.16m×短軸0.98m、第52号竪穴建物跡床面からの深さは0.65mである。

**概要** 第52号竪穴建物跡の床面直下で確認されたため、建物跡掘り直後に掘削されたものとする。底面はマンガン粒を含む褐色粘質土層であるXI層中である。形状は不整形である。覆土は一気に埋め戻されたブロック堆積である。3基の土取り遺構は重複関係が明確であるため廃絶時に使用されていた北壁付設カマドの構築材は第12号土取り遺構から採取されたとみられる。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡IV期とみられる。

#### 第13号土取り遺構（第159図）

**位置** BR-AY、BS-AYグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第52号竪穴建物跡及び第13・14号土取り遺構と重複し、2番目に新しい。

**規模** 長軸1.05m×短軸0.95m、第52号竪穴建物跡床面からの深さは0.62mである。

**概要** 第52号竪穴建物跡の床面直下で確認されたため、建物跡掘り直後に掘削されたものとする。底面はマンガン粒を含む褐色粘質土層であるXI層中である。形状は不整形である。覆土は一気に埋め戻されたブロック堆積である。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡IV期とみられる。

#### 第14号土取り遺構（第159図）

**位置** BR-AY、BS-AYグリッドの台地上に位置する。

**重複** 第52号竪穴建物跡及び第13・14号土取り遺構と重複し、竪穴建物跡より新しく他の土取り遺構より古い。

**規模** 長軸1.02m×短軸0.90m、第52号竪穴建物跡床面からの深さは0.70mである。

**概要** 第52号竪穴建物跡の掘方直下で確認されたため、建物跡掘り直後に掘削されたものとする。底面は灰白色粘土層であるXIII層を10cmほど掘り抜いており、灰白色粘土塊やマンガン粒を含む褐色粘質土塊などが覆土中に多量混入している。方形で箱形の形状で重複する他の土取り遺構より綺麗な定形である。覆土は一気に埋め戻されたブロック堆積である。3基の土取り遺構は重複関係が明確であるため、袖部は崩壊し形状として捉えることはできなかった。改築前の東壁付設カマドの構築材は第14号土取り遺構から採取された可能性が高い。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 重複遺構から9世紀後半、宮下遺跡IV期とみられる。

## 5 井戸跡

### 第1号井戸跡(第276図)

**位置** BB-AIグリッドに位置する。

**規模** 直径1.6m、短径1.3mを測る。確認面からの深さは1.16mである。

**概要** 第17号竪穴建物跡の南0.2mに隣接して確認され、平面形態は円形である。断面は筒状で底部からの立ち上がり部が丸みを帯びる。覆土はレンズ状堆積のため自然埋没と考えられる。底面の標高は57.22mである。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期は不明である。

### 第2号井戸跡(第276図)

**位置** BR-ASグリッドに位置する。

**規模** 長径1.63m、短径1.3mを測る。確認面からの深さは1.46mである。

**概要** 西谷の中で確認され平面形態は円形である。断面は逆台形状で、確認面から0.95m下方付近の上部はオーバーハングしている。西谷埋土の黒色土から掘られ、下部はローム層を掘り抜いている。覆土は上下2層であることから、埋め戻されたものと考えられる。底面の標高は57.95mである。

**遺物** 長径20cm大の石を検出した。

**時期** 時期は不明である。

### 第3号井戸跡(第276図)

**位置** AL-AQグリッドに位置する。

**規模** 長径2.3m、短径1.9mを測る。確認面からの深さ0.7mである。

**概要** 平面形態は不整楕円形で、断面は逆台形状である。土層観察では覆土に直径3～10cmのロームブロックを多量含むため、埋め戻されていることが確認された。底面の標高は54.08mである。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期は不明である。

### 第4号井戸跡(第276図)

**位置** BL-AUグリッドに位置する。

**規模** 検出長径2.25m、短径2mを測る。確認面からの深さ2mである。

**概要** 第55号溝跡の調査中に確認された。第55号溝跡と重複するため上部を溝に壊されている。平面形態は不明であるが円形と思われ、断面はロート状で覆土は粘性が強い。底面の形態が方形のため、井戸側が設置されていた可能性がある。最下層で人頭大の礫が確認され、このほか礫が多数出土している。井戸の下部は灰白色粘土層(いわゆる川本粘土層)を掘り抜いている。底面の標高は55.66mである。



時期 15世紀以前。

#### 第5号井戸跡(第277図)

位置 BL-AVグリッドに位置する。

規模 長径1.85m、短径1.7mを測る。深さ1.5mである。

概要 西谷第55号溝跡の南約1.8mで確認した。断面はロート状で、井戸の覆土上部の土層観察では粘性は確認されなかった。下部は崩落したため不明である。確認面の約0.15m下から灰白色粘土層のため粘土層を掘り抜いている。底面の標高は55.40mである。

遺物 人頭大の礫を検出した。

時期 時期は不明である。

#### 第6号井戸跡(第277図)

位置 BN-APグリッドに位置する。

規模 長径2.4m、短径2.05mを測る。確認面からの深さ2.13mである。

概要 平面形態は楕円形で断面はロート状、覆土はレンズ状堆積で自然埋没と思われる。井戸の底部は滞水層である灰白色粘土層まで掘り抜いている。井戸の上部には平面形態がドーナツ状の平場が確認され、この平場の立ち上がり付近にはピットが3基確認された。井戸P1-P2間は2.24m、P2-P3間は2m、P3-P1間は1.68mである。また、P2・P3は、内側の立ち上がりが井戸に向かって傾斜していることが判明したことから、覆屋または水汲み用の構造物等が想定される。底面の標高は54.64mである。

遺物 須恵器甕の破片を検出した。

時期 時期は不明である。

#### 第7号井戸跡(第278図)

位置 BJ-AN、BK-AM・ANグリッドに位置する。

規模 長径4.24m、短径3.67mを測る。確認面からの深さ2.5m以上であり、湧水による崩落の危険があるため底面までの調査は不可能であった。

概要 第62号溝跡の南に隣接して確認され、平面形態は円形に近く断面はロート状である。覆土は最上層の黒褐色土に浅間Aテフラ微量、以下は暗褐色土、褐色土でローム粒子、ロームブロックを多量含み、拳大の礫、炭化物を多量含む。また、ロート状のくびれた部分以下はロームブロックを主体とする。

遺物(第279・280図、第81表) 1~8は在地産土器で、1~6はロクロ成形かわらけである。6を除き口径は10cm前後で、2の見込みには強いロクロ痕が残る。6の口縁部内外面には油煙が付着する。7・8はほうろくで、体部外面にススが付着する。8には内耳が三箇所あり、口唇部直下から底部にかけて付けられている。三つとも内耳の左右に挿れた痕があり、紐等で吊して使用していたことが窺える。9~23は瀬戸美濃系陶器である。9~13は碗で、9・10は尾呂茶碗である。9は高台周辺を除き鉄

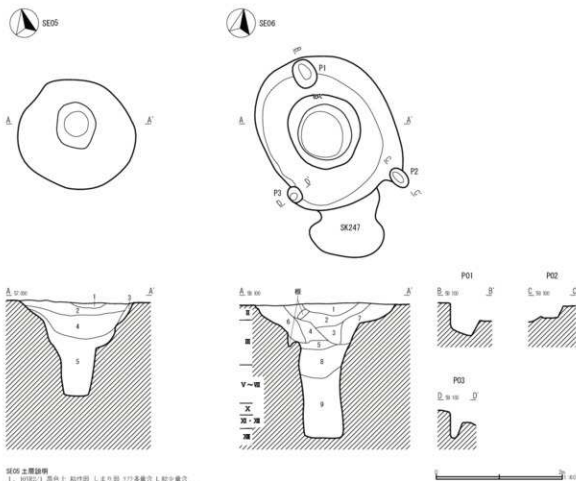


図275 土層説明

1. H012/1 黒色土、粘性質、しまり部、177号多量遺、灰土少量遺
2. H012/1 黒色土、粘性質、しまり部、1号少量遺、鉄土少量遺
3. H018/6 褐色土、粘性質、しまり部、1号少量遺、鉄土少量遺
4. H012/1 黒色土、粘性質、しまり部、灰褐色土少量遺
5. H012/1 黒色土、粘性質、しまり部、1号少量遺

図276 土層説明

1. H012/1 黒褐色土、しまり部、14号少量遺、白色粒少量遺、177号少量遺、鉄土少量遺
2. H013/4 緑褐色土、しまり部、14号少量遺、黄土少量遺、黒色粒少量遺
3. H013/4 緑褐色土、しまり部、14号少量遺、黄土少量遺、鉄土少量遺
4. H013/4 緑褐色土、しまり部、14号少量遺、黄土少量遺、鉄土少量遺
5. H013/2 緑褐色土、しまり部、14号少量遺、黒色粒少量遺
6. H014/6 褐色土、しまり部、14号少量遺、黄土少量遺
7. H018/2 に近い黄褐色土、しまり部、14号少量遺、黄土少量遺、白色粒少量遺、鉄土少量遺
8. H013/4 緑褐色土、しまり部、14号少量遺、黒色粒少量遺
9. T.0100/3 に近い褐色土、しまり部、14号少量遺

第277図 第5・6号井戸跡

軸を施したあと口縁部内外面に灰軸が掛けられ、10は内外面に灰軸を施したあと口縁部内外面にうのふ軸が掛けられる。9は18世紀前半、10が18世紀代である。11・12は丸碗でともに内外面に灰軸が施され12が18世紀中頃である。13は体部が半球形の鉄絵湯呑形の碗で高台周辺を除き灰軸が施される。14は小坏で高台周辺を除き灰軸が施される。13が18世紀後半、14は18世紀代である。15～18は皿である。15・16は輪赤皿で見込み中央がコテの押圧により凹み、見込み周縁の釉がドーナツ状に拭い取られる。高台周辺を除き15は灰軸16には長石釉が施される。17は型打ちの菊皿で外面から内面にかけて黄瀬戸釉が施され、体部内面に緑釉を流し掛ける。18は高台周辺を除き灰軸が施される丸皿で、見込みに重ね焼き痕が残る。17・18ともに17世紀末～18世紀前半のものである。19は黄瀬戸鉢で見込みにダンゴトチの痕が残る。全面に黄瀬戸釉を施したあと高台内の釉を拭い取り、見込みに緑釉を流し掛ける。20～22は片口で、20・21は小型の片口である。20は口縁部が内傾し体

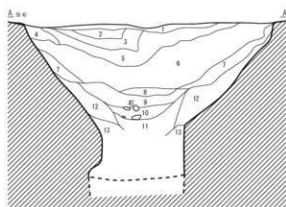
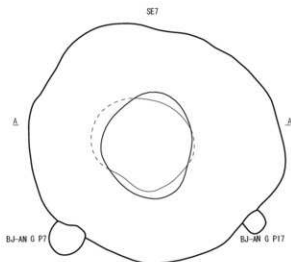


図277 土層図解

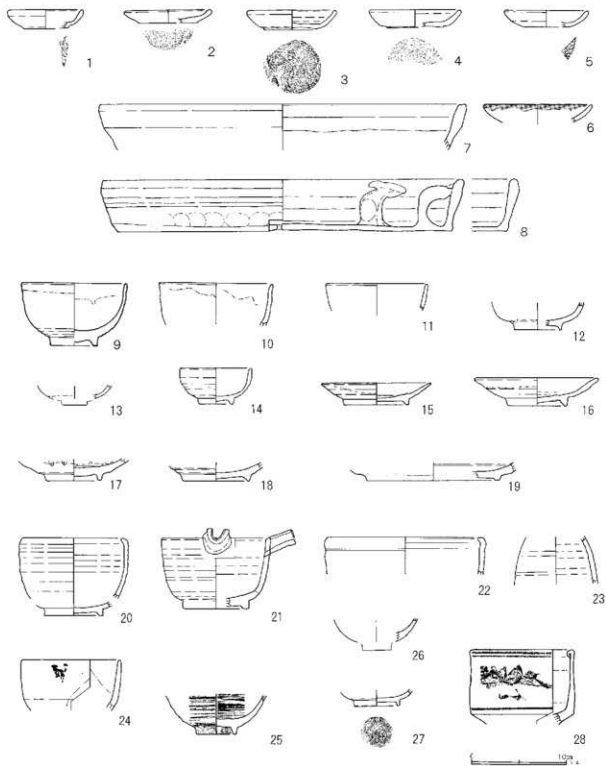
1. 1978(1) 黒褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
2. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
3. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
4. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
5. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
6. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
7. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
8. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
9. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
10. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
11. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
12. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量
13. 1978(1) 褐色土 1.0m<sup>2</sup> 土厚 1.0m 多量



第 278 図 第 7 号井戸跡

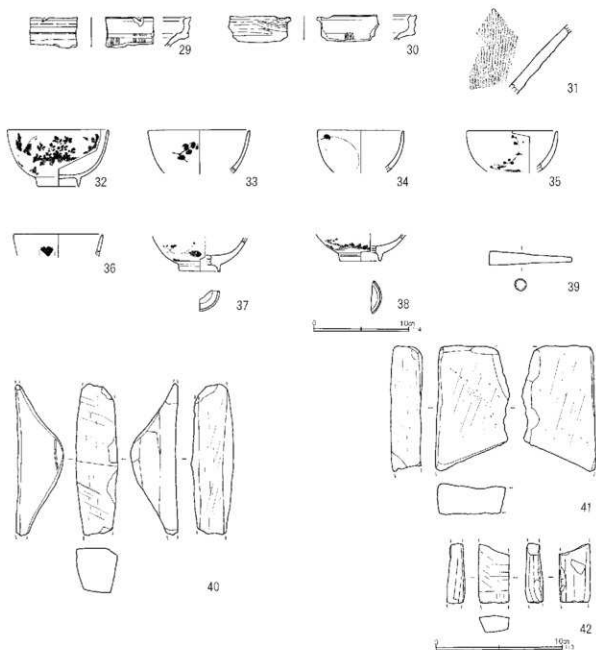
部外面上方はロクロによる凹凸が著しい。高台周辺を除き灰釉が施され、底部内面には重ね焼き痕が残る。21 は口縁部が直立するもので、片口部は口縁部を切って付けられている。高台周辺を除き鉛釉が施される。22 は口縁端部が内側に張り出し小突起が形成され、口縁部外面には沈線が巡る。内外面に鉛釉が施される。20 が 18 世紀中頃、21・22 が 18 世紀後半である。23 は通い徳利で貧乏徳利とも呼ばれるもので、体部外面下方はヘラ削り調整され、体部外面上方及び内面にはロクロ痕が残る。内外面に長石釉が施される 18 世紀後半のものである。24～28 は肥前系陶器である。24～27 は碗で、24 は外面に崩れた山水文が描かれる筒形碗。25 は内面に白土による渦巻状の刷毛目、外面には横方向の刷毛目が施される碗である。26 は内外面に透明釉が施される呉器手碗。27 は京焼風陶器碗で高台内に直径 1 cm の円刻があり「小松吉」の刻印が押印されている。24 が 18 世紀前半、25 は 17 世紀末～18 世紀前半、26・27 は 18 世紀代である。28 は外面に山水文が描かれる香炉で、口縁端部が内側に折り返され内面に





第 279 図 第 7 号井戸跡出土遺物 1

は鉄軸が施されている。18 世紀前半。29～31 は丹波系陶器挿鉢である。緑帯外側には二条の沈線が巡り、緑帯外面から内面にかけて鉄泥が施される。現存の柿目は 4 本である。29・30 が 18 世紀前半。32～38 は肥前系磁器染付碗である。32 は高台がシャープな U 字状で高台高が高い碗である。器肉が薄く



第280図 第7号井戸跡出土遺物2

丁寧な作りで、体部外面に型紙摺りによる花文、濃みにより地面が描かれている。33・34の外面には梅樹文、35には雪輪梅樹文、36はコンニャク判による菊花文、37は草花文、38は雪文・菱文がそれぞれ描かれる。39は銅製のキセル吸口である。40～42は砥石で、いずれも被熱しており40～42には平タガネ痕が残る。40・42は凝灰岩製、41は安山岩製である。このほか、瀬戸美濃の筒形香炉がある（第273図No.76）。香炉は第62号溝跡出土香炉と同一個体で、体部が第62号溝跡で底部が本井戸出土である。また、31の丹波系陶器搗鉢は第62号溝跡と、33の肥前系磁器染付碗は第24号溝跡出土遺物と接合した。

時期 18世紀後半

第81表 第7号井戸跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師質土器 かむらけ	8.0	2.0	4.6	ABJM	橙	良好	20%	
2	土師質土器 かむらけ	(8.2)	1.3	(6.0)	ABD	浅黄橙	良好	40%	底部糸切り ロク口回転方向は反時計回り
3	土師質土器 かむらけ	9.0	2.1	5.7	ABHK	浅黄橙	良好	100%	底部糸切り ロク口回転方向は反時計回り
4	土師質土器 かむらけ	(8.9)	(1.9)	(6.0)	ABHK	浅黄橙	良好	40%	底部糸切り ロク口回転方向は反時計回り
5	土師質土器 かむらけ	(8.8)	(1.7)	(5.0)	ABK	浅黄橙	良好	20%	
6	土師質土器 かむらけ	(11.4)	(1.9)	-	ABD1	橙	良好	口縁~体部片	口縁部内外面に油塗り着
7	瓦質土器 ほうろく	(9.0)	(4.9)	-	ABIM	黄褐	良好	口縁~体部片	体部内面に輪積み痕
8	瓦質土器 ほうろく	38.0	5.5	35.3	ABJLM	黄褐	良好	30%	3C 底部中央に直径4mmの孔あり
9	陶器 甕呂茶碗	11.0	6.6	5.0	AB	黄褐	良好	40%	瀬戸美濃系 18c前 瀬戸市尾呂3-4号窯出土陶に類似
10	陶器 甕呂茶碗	12.0	(4.2)	-	AB	黄褐	良好	口縁~体部片	瀬戸美濃系 18c
11	陶器 丸瓶	(10.5)	(2.9)	-	ABH	灰白	良好	口縁~体部片	瀬戸美濃系
12	陶器 丸瓶	-	(2.9)	5.0	AB	淡黄	良好	底部~体部片	瀬戸美濃系 18c中
13	陶器 半球形碗	-	(1.4)	-	AB	灰白	良好	體部片	瀬戸美濃系 鉢縁湯呑形碗 18c後
14	陶器 小杯	(7.3)	(3.8)	(3.7)	AB	オリーブ黄	良好	40%	瀬戸美濃系 18c代
15	陶器 輪壳皿	(11.5)	(2.3)	(6.8)	AB	淡黄	良好	30%	瀬戸美濃系 18c前 瀬戸市空井倉窯出土輪壳皿に類似
16	陶器 輪壳皿	12.9	3.0	6.4	AB	淡黄	良好	70%	瀬戸美濃系 18c中 瀬戸市市左衛門窯器下層出土輪壳皿に類似
17	陶器 菊皿	-	(2.3)	6.0	ABD	淡黄	良好	底部片	瀬戸美濃系 17c末~18c前 瀬戸市かみた塚採集遺物に類似あり
18	陶器 丸皿	-	(2.0)	(7.0)	AB	浅黄	良好	体~底部片	瀬戸美濃系 17c末~18c前
19	陶器 黄瀬戸鉢	-	(1.9)	(14.0)	AB	灰白	良好	底部片	瀬戸美濃系
20	陶器 片口	10.6	(8.2)	6.2	AB	浅黄	良好	40%	瀬戸美濃系 18c中
21	陶器 片口	11.3	7.5	7.0	ABG	橙	良好	40%	瀬戸美濃系 18c後 瀬戸市定助窯出土片口に類似
22	陶器 片口	16.5	(3.9)	-	AB	黄褐	良好	口縁部片	瀬戸美濃系 18c後 瀬戸市かみた1号窯に類似あり
23	陶器 徳利	-	(5.0)	-	AB	灰白	良好	胴部片	瀬戸美濃系 18c後
24	陶器 染付碗	(10.6)	(5.4)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 圓形碗 18c前
25	陶器 刺毛目碗	-	(4.3)	4.2	AB	にじい赤褐	良好	50%	肥前系 17c末~18c前 みこみ谷の目輪八平
26	陶器 須器手碗	-	(2.4)	-	AB	にじい黄橙	良好	體部片	肥前系陶器 18c代
27	陶器 丸碗	-	(1.7)	(4.8)	AB	淡黄	良好	底部片	肥前系 京焼風陶器碗 18c代「小松吉」の刷印
28	陶器 染付香炉	(11.0)	(7.9)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 18c前
29	陶器 磁鉢	-	(3.1)	-	ABGM	褐	良好	口縁部片	丹波系 18c前
30	陶器 磁鉢	-	(2.6)	-	AB	褐	良好	口縁部片	丹波系 18c前
31	陶器 磁鉢	-	(7.2)	-	ABGM	にじい赤褐	良好	体部片	丹波系
32	磁器 染付碗	(10.6)	6.0	(4.4)	AB	灰白	良好	50%	肥前系 17c末~18c中 東京大学医学部付属病院中央診療棟地点 F34-11出土陶に類似
33	磁器 染付碗	(10.8)	(4.4)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外面に梅樹文
34	磁器 染付碗	(9.2)	4.5	-	A	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外面に梅樹文
35	磁器 染付碗	(9.6)	(4.4)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外面に雲輪梅樹文
36	磁器 染付碗	(8.4)	(2.4)	-	AB	灰白	良好	口縁~体部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外周にコンヤク割で菊文
37	磁器 染付碗	-	(3.7)	4.3	AB	灰白	良好	体~底部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外周に草文
38	磁器 染付碗	-	(2.0)	4.4	AB	明緑灰	良好	体~底部片	肥前系 18c くらわんか碗 体部外周に雲文・菱文
39	銅製品 半セトル	〈重量〉=cm 〈重量〉=cm 〈径口〉長さ5.6cm 口径径0.3cm 小口径: 1cm 重さ4.7g		径口のみ残存					
40	石製品 磁石	長さ(12.0)cm 幅(3.3)cm 厚さ3.7cm 重さ160.7g		石材凝灰岩 磁石2面(表・裏) 平タガネ痕(右側面) 磁石の痕跡あり					
41	石製品 磁石	長さ(9.9)cm 幅(5.0)cm 厚さ2.5cm 重さ198.0g		石材安山岩 磁石2面 磁石の痕跡あり 平タガネ痕(左側面)					
42	石製品 磁石	長さ(4.7)cm 幅(2.5)cm 厚さ(1.4)cm 重さ2.0g		石材凝灰岩 磁石1面 平タガネ痕あり(左側面・裏面) 磁石の痕跡あり					

## 6 炉穴

### 第1号炉穴(第281図)

**位置** BG-ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.07 m、短軸0.87 m、確認面からの深さ0.21 m。主軸方向はN-56° Eである。

**概要** 第2号炉穴の西側に隣接して確認され、平面形態は楕円形で断面は幅広のU字状である。上層では28 cm×23 cm、厚さ10 cmの楕円形の石や礫が出土しており、いずれも被熱している。断面観察では中層に多量の焼土粒子・微量のテフラを含む、硬質の褐色土が確認された。火床は炉穴の東側に偏っている。

**遺物** 大型の石、及び礫多数を検出した。

**時期** 時期不明。

### 第2号炉穴(第281図)

**位置** BG-ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸2.62 m、短軸1.66 m、0.71 m、確認面からの深さ0.3 m。主軸方向はN-6° -Eである。

**概要** 第1号炉穴の東側に隣接して確認され、平面形態は洋梨形で断面は長軸方向が幅広のU字状、短軸方向はU字状である。洋梨の頂部に相当する北側に燃焼部があり、焼土及び焼土粒子を多量含む層が幅50 cm、奥行き70 cm、厚さ30 cmで検出された。断面観察では、この焼土層の上層にテフラを含む硬質の黒褐色土の堆積が、厚さ10~20 cmで確認された。遺物は南側の円形部に集中し、縄文早期の深鉢・スクレイパー・石斧・礫多数を検出した。

**遺物(第284図 第82表)** 1~6は、縄文時代早期野島式土器。1は、無文の口縁部片。表裏面に擦痕状の調整痕が残る。胎土に微量の繊維を含む。2は、表裏面に条痕が施された口縁部片。口縁は緩やかな波状を呈する。胎土に微量の繊維を含む。3は、無文の口縁部片。口唇部は丸頭状を呈する。指頭による成形痕を残す。胎土に微量の繊維を含む。4は、微隆起線を貼付した口縁部片。胎土に微量の繊維を含む。5は、屈曲する胴部片で表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。6は、無文の胴部下半の破片。内面に縦位の条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。7は石材がチャートのスクレイパーである。8は二次加工剥片である。石材はガラス質黒色安山岩で、側縁に微細な剥離痕がみられる。9は打製石斧である。石材はホルンフェルスで、分割した礫の縁辺を加工している。

**時期** 縄文時代早期野島式期

### 第3号炉穴(第281図)

**位置** BG-ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.72 m以上、短軸0.81 m以上、確認面からの深さ0.15 m。主軸方向はN-57° -Wである。

**概要** 第4・5号炉穴の西側に隣接して確認され、平面形態は楕円形と思われ断面は幅広のU字状である。上層を第23号溝跡に填されており内容は不明であるが、断面観察では炉穴北西部でテフラ・焼土を含む硬質の明赤褐色土が、厚さ5~14 cmで確認されている。

**遺物** 条痕文系の土器の細片を検出した。

**重複** 第23号溝跡より古い。

**時期** 縄文時代早期後半

#### 第4号炉穴（第281図）

**位置** BG - AN・A0グリッドに位置する。

**規模** 長軸2.13 m、短軸0.8 m、確認面からの深さ0.15～0.52 m。主軸方向はN-9°-Wである。

**概要** 第3号炉穴の東側に近接して確認され第5号炉穴と南側で重複し、上層を第23号溝跡に壊されている。平面形態は洋梨形で焼成部の断面はU字状、上方は若干オーバーハングする。長軸方向は北側の焼成部が深く焚口部に向かってしだいに浅くなる。焼成部の底面及び北側の壁面が非常に良く焼けており、非常に堅く赤褐色を呈する。焚口部の断面観察では、厚さ22～32 cmで焼土粒子を含む硬質の黒褐色土の堆積が確認された。

**遺物** 条痕文系土器の細片及び礫を検出した。

**重複** 第23号溝跡より古く第5号炉穴より新しい。

**時期** 縄文時代早期後半

#### 第5号炉穴（第281図）

**位置** BG - A0グリッドに位置する。

**規模** 長軸1.56 m以上、短軸0.96 m、確認面からの深さ0.4 mを測る。主軸方向はN-77°-Eである。

**概要** 第3号炉穴の南側に近接して確認され第4号炉穴と東側で、南側で第79号土坑と重複する。平面形態は楕円形と思われ、断面は西側の燃焼部でU字状、焚口部は第4号炉穴に壊されているため不明である。焼成部の底面及び西側の壁面が非常に良く焼けており、非常に堅く赤褐色を呈する。断面観察ではその東側に焼土粒子・テフラを含む、硬質の黒褐色土の堆積が確認された。

**遺物** 礫を検出した。

**重複** 第4号炉穴、第79号土坑より古い。

**時期** 縄文時代早期後半

#### 第6号炉穴（第282図）

**位置** BJ・BK - ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.28 m、短軸0.76 m、確認面からの深さ0.1 mを測る。主軸方向はN-°-51-Eである。

**概要** 第7号井戸の南東に近接して確認され、BJ - ANグリッドビットP 17と重複する。平面形態は楕円形で断面は平凸レンズ状である。焼土は炉穴の西側に偏って確認され、断面観察では赤褐色土で厚さは10 cmであった。この上層に黒色土ブロック・テフラを含み、硬質の黒褐色土の堆積が確認された。

**遺物** 条痕文系土器の細片及び礫を検出した。

**重複** BJ - ANグリッドビットP 17より古い。

**時期** 縄文時代早期後半

#### 第7号炉穴（第282図）

**位置** BK-ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.52 m以上、短軸0.92 m、確認面からの深さ0.15 m。主軸方向はN-50°-Wである。

**概要** 第7号井戸と重複して確認された。平面形態は楕円形と思われ、断面は平凸レンズ状である。焼土は炉穴の東側にあり、断面観察では厚さ14 cmで、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む暗赤褐色土・橙褐色土が確認された。

**遺物** 被熱した礫を検出した。

**重複** 第7号井戸より古い。

**時期** 時期不明。

#### 第8号炉穴（第282図）

**位置** BN-ANグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.09 m、短軸1.01 m、確認面からの深さ0.19 mを測る。主軸方向はN-16°-Wである。

**概要** 平面形態は円形に近く西北部を擾乱により壊されている。炉穴の深さが浅いことから上部は耕作等により削平されたと思われる残存していない。焼土は炉穴全体にアムーバー状に広がり、断面観察では、焼土粒子多量・テフラ微量含む硬質の黒褐色土が確認された。

**遺物** 礫を検出した。

**時期** 時期不明。

#### 第9号炉穴（第282図）

**位置** B0-AMグリッドに位置する。

**規模** 長軸0.63 m以上、短軸0.58 m、確認面からの深さ0.13 m。主軸方向はN-10°-Wである。

**概要** 平面形態は円形に近く南部でB0-AMグリッドビットP 18と重複する。炉穴の深さが浅いことから上部は削平されたと思われる残存していない。焼土は炉穴の全体にアムーバー状に広がり、断面観察では、黒色土ブロックを含む硬質の赤褐色土が確認された。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** B0-AMグリッドビットP 18より古い。

**時期** 時期不明。

#### 第10号炉穴（第282図）

**位置** BT-ALグリッドに位置する。

**規模** 長軸1.51 m、短軸0.93 m、確認面からの深さ0.11 mを測る。主軸方向はN-57°-Eである。

**概要** 平面形態は洋梨形で断面は幅広のU字状である。火床面は炉穴の南西部にあり平面はアムーバー状に焼土が広がり、断面観察では、この上層に黒色土ブロック・テフラを含む硬質の黒褐色土の堆積が確認された。

**遺物** 条痕文系土器の破片及び礫が出土している。

時期 縄文時代早期後半

#### 第11号炉穴(第282図)

位置 AT - AK グリッドに位置する。

規模 長軸 2.55 m、短軸 0.5 m、確認面からの深さ 0.08 mを測る。主軸方向はN - 32° - Wである。

概要 平面形態は撥状で、焼土は炉穴の全体に広がる。炉穴の深さが浅いことから上部は削平されたと思われる残存していない。断面観察では炉穴の北西部が良く焼けており火床が確認されている。

遺物 検出されなかった。

時期 時期不明

#### 第12号炉穴(第283図)

位置 BG - A0・AP グリッドに位置する。

規模 長軸 0.61 m、短軸 0.41 m、確認面からの深さ 0.05 mを測る。主軸方向はN - 59° - Wである。

概要 平面形態は楕円形で、炉穴の底部が残存したものと思われる、上部は耕作等により削平されたと考えられる。焼土の厚さは薄いほぼ全面に見られる。

遺物 検出されなかった。

時期 時期不明

#### 第13号炉穴(第283図)

位置 BR - AL グリッドに位置する。

規模 長軸 0.73 m、短軸 0.57 m、確認面からの深さ 0.07 mを測る。主軸方向はN - 16° - Eである。

概要 平面形態は楕円形で、西側と東側を根や攪乱により壊され、炉穴の底部が残存したものと思われる。焼土の範囲は炉穴の北側に偏り、断面観察では焼土粒子を多量含むにふい明赤褐色土が確認された。

遺物 検出されなかった。

時期 時期不明。

#### 第14号炉穴(第283図)

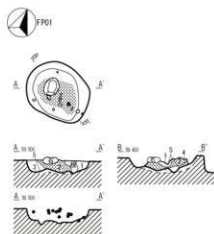
位置 BR - AR グリッドに位置する。

規模 長軸 1.18 m、短軸 0.7 m、深さ 0.23 mを測る。主軸方向はN - 55° - Wである。

概要 平面形態は楕円形で、断面は箱形で、焼土範囲は炉穴の北西部に偏っている。根による攪乱が著しいが、断面観察で上層に硬質の黒褐色土ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土が確認され、下層は焼土粒子・炭化物を含む硬質の暗褐色土であった。

遺物 被熱した片岩を検出した。

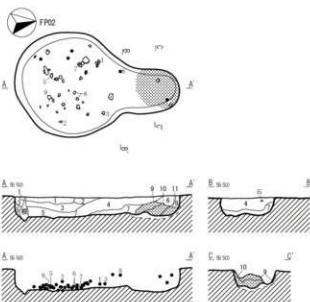
時期 時期不明。



**FP01 土層説明**

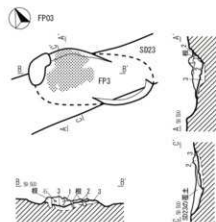
1. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、粒少層含む
2. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、777少層含む、粒少層含む、同化物質層含む
3. 1970/1 におい、黄褐色土上、しまり物、粒多量含む
4. 1970/2 焼成土上、しまり物、粒少層含む、焼土粒多量含む
5. 1970/1 焼成土上、しまり物、粒(φ10～20mm)少層含む

断面面中の破線は被熱によってローム地山が赤褐色に変化した部分を示した。



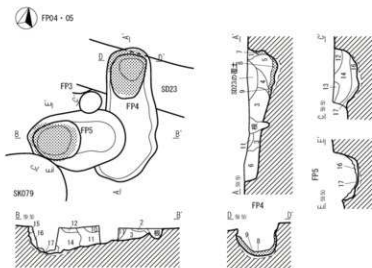
**FP02 土層説明**

1. 1970/1 焼成土上、しまり物、黄褐色土上(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む、777焼成土
2. 1970/2 焼成土上、しまり物、黄褐色土上(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む
3. 1970/1 焼成土上、しまり物、粒(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む
4. 1970/2 焼成土上、しまり物、粒多量含む、粒(φ10～20mm)少層含む、777少層含む、焼土粒多量含む
5. 1970/3 焼成土上、しまり物、黄褐色土上(φ10～20mm)少層含む、粒(φ10mm)少層含む、777焼成土
6. 1. 1970/1 焼成土上、しまり物、黄褐色土上(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む、焼土粒多量含む、同化物質層含む
7. 1970/1 焼成土上、しまり物、黄褐色土上(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む
8. 1970/1 焼成土上、しまり物、粒少層含む、焼土粒多量含む
9. 1970/1 焼成土上、粒(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む
10. 1970/1 明赤褐色土上、しまり物、焼土上主体とし、777焼成土、粒多量含む
11. 1970/2 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、同化物質、粒少層含む



**FP03 土層説明**

1. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒少層含む、777焼成土
2. 1970/1 明赤褐色土上、しまり物、焼土上主体とし、777少層含む
3. 1970/1 焼成土上、焼土の被熱で褐色に変化、焼土粒少層含む



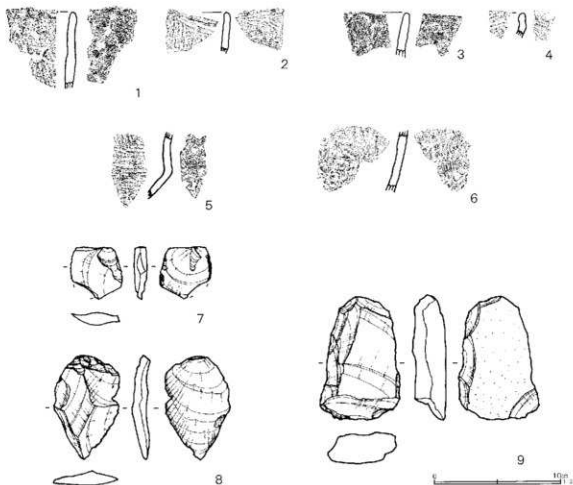
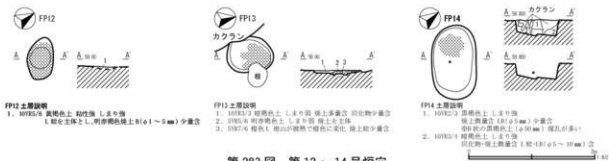
**FP04・05 土層説明**

1. 1970/1 焼成土上、しまり物、粒少層含む、777少層含む
2. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、同化物質層含む
3. 1970/2 黄褐色土上、しまり物、粒少層含む、粒(φ10mm)少層含む、焼土粒少層含む
4. 1970/1 焼成土上、しまり物、粒(φ10mm)少層含む、粒少層含む
5. 1970/1 黄褐色土上、しまり物、粒(φ10～20mm)焼成土、粒少層含む
6. 1970/1 黄褐色土上、しまり物、粒(φ10～20mm)焼成土、粒少層含む
7. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土多量含む、同化物質含む
8. 1970/1 明赤褐色土上、しまり物、焼土上主体とし、777焼成土、粒多量含む
9. 1970/1 焼成土上、焼土の被熱で褐色に変化、焼土粒多量含む
10. 2. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、同化物質層含む
11. 1970/2 黄褐色土上、しまり物、粒少層含む、粒(φ10mm)少層含む、焼土粒少層含む
12. 1970/1 焼成土上、しまり物、777焼成土、粒少層含む
13. 1970/1 焼成土上、しまり物、777焼成土、粒少層含む
14. 1970/1 焼成土上、しまり物、777焼成土
15. 1970/2 黄褐色土上、しまり物、粒(φ10～20mm)少層含む、粒少層含む、777焼成土、粒多量含む
16. 1970/1 明赤褐色土上、しまり物、焼土上主体とし、777焼成土、粒多量含む
17. 1970/1 黄褐色土上、しまり物、粒少層含む
18. 1970/1 明赤褐色土上、しまり物、焼土上主体とし、777焼成土、粒多量含む
19. 1970/1 焼成土上、しまり物、焼土粒多量含む、同化物質、粒少層含む

第281図 第1～5号炉穴







第82表 第2号炉穴出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	野鳥式
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	野鳥式
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	野鳥式
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	にぶい赤褐色	良好	口縁部片	野鳥式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	にぶい赤褐色	良好	胴部片	野鳥式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH	黒	良好	胴部片	野鳥式
7	石器 スクレイバー	長さ4.1cm	幅4.1cm	厚さ1.0cm	重量10.8g				石材チャート
8	石器 二次加工 削片	長さ8.2cm	幅5.2cm	厚さ1.1cm	重量22.6g				石材ガラス質黒色変山岩
9	石器 打製石斧	長さ9.8cm	幅6.3cm	厚さ2.6cm	重量124.4g				石材ホルンフェルス

## 7 火葬跡

2基の火葬跡が確認された。2基は約10mの間隔をもって近接し、長方形でほぼ同一の長軸方向を指す。いずれも覆土中に多量の焼土と灰を含み、第1号火葬跡から被熱骨が出土し、(独)国立科学博物館人類研究部の梶ヶ山真理氏より鑑定いただき、結果は本頁末尾に掲載した。

### 第1号火葬跡(第285図)

**位置** AT—AMグリッドの台地緩斜面に位置する。すぐ西側が東谷となる。

**規模** 長軸1.48m×短軸0.93m、確認面からの深さは0.10～0.18m、主軸方向はN-18°-W。

**概要** 平面形状は長方形で断面は中央南寄りが若干窪む皿状である。火葬跡によく見受けられるT字状に突出する煙出しは見られない。覆土は3層に分けられ、1層は細かい炭と焼土を含む赤褐色土、2層は炭化物を多量に含む赤黒色土、3層は径2～10mm大の炭と灰・焼土を含む暗赤褐色土である。壁面や底面の所々に顕著な被熱痕が確認された。

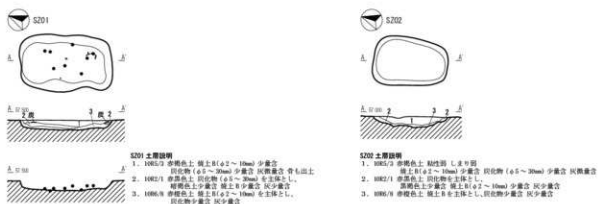
**遺物(図版104 火葬跡骨)** 2層中から被熱を受けた骨片が出土した。礫や炭が検出されたが、帰属時期を決定できる遺物は出土せず、時期は不明である。

### 第2号火葬跡(第285図)

**位置** AI—AMグリッドの台地緩斜面に位置する。すぐ西側が東谷となる。

**規模** 長軸1.20m×短軸0.76m、確認面からの深さは0.12～0.18m、主軸方向はN-15°-Wで、隣接する第1号火葬跡に規模も主軸方向も近似している。

**概要** 1号火葬跡の10m西側に確認され、平面形状はやや歪な長方形で断面は中央が窪む皿状である。やはり、T字状に突出する煙出しは見られず覆土も多量の焼土と灰、雑木とみられる細かい炭を含む。帰属時期を決定できる遺物は出土せず、時期は不明である。



第285図 第1・2号火葬跡

### 宮下遺跡出土火葬骨

(独)国立科学博物館人類研究部

梶ヶ山 真理

宮下遺跡第1号火葬跡から出土した火葬骨は、ウシカウマの足根骨の破片の可能性が高い。外側の緻密質は灰白色を呈し厚さは薄い。内部の海面質は黒色で、燃焼温度が500度～800度の低温であったと思われる。

## 8 土坑

宮下遺跡では447基の土坑が検出された。分布は調査区全体にわたり、時代とともに分布集中箇所と密度が移行する傾向がみられる。時期も縄文時代から近世まで幅広く基数も多いため、個々の計測値などは一覧表にまとめた。また、ここでは時期別に仕分けて平面・断面形状で分類を試みた。分類基準は以下の通りである。(第286～324図、第83表)

平面形が円形またはそれに近いものをⅠ、楕円形をⅡ、方形または隅丸方形をⅢ、長方形または隅丸長方形をⅣ、不整形をⅤとした。断面形が底は平坦で壁はオーバーハングをA、底は平坦で壁は垂直をB、底は平坦で壁は斜めをC、底が丸いU字状をD、浅いレンズ状または皿状をE、その他をFとした。本文中での土坑形状別分類は上記の2項目を組み合わせで表記した。

	V	IV	III	II	I	
	不整形	長方形	方形	楕円形	円形	平面形
F	E	D	C	B	A	
その他	底レンズ状	底丸い	壁斜め	壁垂直	壁オーバーハング	断面形

第286図 土坑形状分類模式図

### 1. 縄文時代

今回の調査で竪穴建物跡は確認されなかったが、土坑や炉穴など縄文時代の各時期にわたっての生活痕跡が記録された。

早期後半、前期、中期、後期前半に帰属する土坑が合計83基確認された。

早期後半は野島式期の範疇に属する土坑が78基で縄文時代の大半を占める。野島式期の土坑覆土には径1mm大の白色軽石を含む硬質黒色土塊が混入するという特徴をもつ。本遺跡から西へ1.2km離れた百済木遺跡でも当該期の土坑や炉穴が多数検出され、同様の覆土が報告されている。

形状を見ると円形で底面が平坦、壁面が垂直気味に立ち上がるⅠBタイプと楕円形で底面が平坦、上部にかけて壁面がやや開き気味になるⅡCタイプが合わせて早期全体の3/4を占める。特に定形である円形を基調としたⅠB・ⅠCタイプ、

楕円形を基調としたⅡB・ⅡCタイプは当該期の土坑形状を特徴付けるものである。なかでもⅠBタイプの第100・301・350号土坑、ⅡBタイプの第135号土坑、ⅡCタイプ第の130・131・134・269・389・390号土坑、ⅣBタイプの第136号土坑は深鉢形土器や石器など遺物出土量が多く、覆土中に硬質黒色土塊が混入するという特徴がみられる。

前期は関山式期の範疇に属するもので第154・165号土坑の2基がそれにあたる。第154号土坑はⅠBタイプ、第165号土坑はⅡBタイプで円形基調が前時代から引き継がれている。

中期は加曾利EⅠ式期に帰属する第7号土坑で、ほぼ完形の深鉢形土器が横位で出土した。形状は楕円形で底面が平坦、壁が垂直気味に立ち上がるⅡBタイプである。

後期は初頭の称名寺式期の第449号土坑と堀之内Ⅰ式期の第297号土坑の2基が確認された。タイプ別分類を試みたがいずれも定形ではない形状となっている。

### 2. 古墳時代

古墳時代に帰属するのは第218号土坑の1基だけである。前期五領式に比定される脚部に円形透かし窓を有する高環が出土した。形状は円形であるⅠBタイプである。

### 3. 古代

古代に帰属する土坑が108基確認された。うち、宮下遺跡の古代土器編年で時期区分できた土坑が72基で、他36基は土師器甕などの古代土器細片で時期区分はできなかった。時期判明したものを時期ごとに区分するとⅡ期が27基、Ⅲ期が36基、Ⅳ期が7基、Ⅵ期が2基である。圧倒的にⅡ・Ⅲ期に基数が集中する。これは竪穴建物跡の軒数と比例する。形状分類は平面形が円形であるⅠタイプが大半で、ⅠAタイプが3基、ⅠBタイプが49基、ⅠCタイプが17基、ⅠEタイプが3基の合計72基、楕円形であるⅡタイプが19基、方形または長方形であるⅢ・Ⅳタイプは5基である。なかでもⅠBタイプの第32・263号土坑は土師器杯・甕、須恵器杯など遺物出土が多く、覆土は締まりが強い黒褐色土である。同タイプでほかに第273号土坑から刀子、第349号土坑から韃の羽口が出土している。ⅡBタイプの第25・170号土坑は土師器杯など遺物出土が多く、覆土はやはり締まりが強い黒褐色土である。ⅢBタイプの第10号土坑は方形の小形炭窯である。炭は雑木ばかりで一緒に出土した土師器甕からⅢ期9世紀前半に帰属する。

分布は古代集落を構成する竪穴建物跡や掘立柱建物跡周辺に集中する傾向がみられる。

### 4. 中世

中世に帰属する土坑が8基確認された。分布は中世の牧を区分する第55号溝周辺に偏る傾向がみられる。タイプ別には大きく2種に分類される。第144・227・326号土坑は円形であるⅠB・ⅠCタイプに分類され、いずれも多数の被熱礫と多量の炭化粒を覆土に混入する特徴を持つ。第384・385・398・444号土坑は長方形箱形のⅣBタイプで、いずれも底面に厚さ2～6cmの炭化物層を有する特徴を持つ。残る第203号土坑はⅠBタイプに分類され、13世紀の青磁碗が出土している。

また、第144・227・385号土坑より常滑焼甕、第444号土坑より在地片口鉢が出土している。

### 5. 近世

近世に帰属する土坑が77基確認された。時期判別した根拠は覆土中から18・19世紀代所産の陶磁器が出土したことと天明3年(西暦1783年)に降下した浅間山A軽石(As-A)が一定量混入していることとした。浅間山A軽石が混入する土坑は52基で、そのうちの2割より近世所産の陶磁器が出土した。近世土坑を形状分類した結果、他の時代に比べて長方形基調であるⅣタイプが全体の3割を占めるのが特徴である。また、縄文時代、古代と引き継がれた円形基調であるⅠタイプも全体の4割を占める。いずれのタイプも覆土は暗褐色土または褐色土を基調とし、締まりに欠け一気に埋め戻したブロック堆積が6割以上を占める。近世土坑は耕作に伴うものが多数を占める結果だとみられる。

近世土坑は今回の調査区全域に散在するが、分布の偏在箇所から2グループに分けられる。近世に帰属する第15・16号掘立柱建物跡や第7号井戸が所在するBM-AMグリッドを中心とした調査区北西側とBI-ASグリッドを中心とした調査区南西側である。前者は近世集落に伴い、後者は畠地耕作に伴うものとみられる。

### 遺物(第325～333図、第84表)

第7号土坑 1は、加曾利E1式土器。器形はキャリバー形を呈し、器高23.4cm、口径18.0cm、底径8.6cmを測る。口唇部は一部欠損するが、3単位の小突起と1単位の環状把手が付く。口縁部を隆帯で4単位の楕円に区画し、隆帯内に沈線を楕円に施し、区画内を縦位の沈線で充填している。頸部から胴部は、単筋RL縄文が斜位に施文されている。

第11号土坑 1は18世紀代の三足が付く瀬戸美濃系陶器筒形香炉で、底部周辺を除き灰褐色が施

される。

第16号土坑 1は石簇である。基部は平坦で先端が欠損する。

第18号土坑 1は銅製のキセルで羅宇の木質が残存している。

第21号土坑 1は瀬戸美濃系磁器の小坏で19世紀代のものである。

第25号土坑 1は土師器坏である。口縁部がやや直立しつつ立ち上がり、底部が丸底である。

第31号土坑 1は須恵器鉢である。南比企産である。胴部下半～底部にかけてヘラ削りが見られる。

第32号土坑 1は土師器甕の底部破片である。

第63号土坑 1は打製石斧である。石材は黒色頁岩で刃部のみ残存する。

第69号土坑 1は、早期条痕文系土器（野島）。斜位に条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。2は石皿である。石材は安山岩で大部分が欠損し、一部のみが残存している。

第71号土坑 1は打製石斧である。石材はホルンフェルスで分割礫を片側から加工している。

第79号土坑 1は打製石斧である。石材はホルンフェルスで分割礫を片側から加工している。

第80号土坑 1～3は縄文時代早期野島式土器。1は縦位に、2は斜位に条痕が施されている。3は、刻みを加えた細隆起線を貼付する口縁部片。細隆起線で構成される文様区画内には沈線が充填されている。裏面は条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。

第90号土坑 1は瀬戸美濃系陶器腰鏝碗で体部外面下方に鉄軸、口縁部外面から内面にかけて灰軸が施される。19世紀前半。

第100号土坑 1～7は、縄文時代早期野島式土器。1は、微隆起線が斜位に貼付され、区画内に沈線を充填している。樺杖のモチーフをとる口縁部片。裏面には、条痕が施されている。胎土に微量に

繊維を含む。2～7は、器面に条痕が施されている。いずれも胎土に繊維を微量に含む。8は石皿である。石材は安山岩で一部のみ残存している。

第108号土坑 1・2は、早期条痕文系土器。表裏面に条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。

第114号土坑 1は、縄文時代中期の無文土器。胎土に細かい長石等の細かい砂粒を多く含む。

第119号土坑 1は、縄文時代中期の無文土器。底部付近の破片で、胎土に長石等の砂粒を多く含む。

第130号土坑 1～7は、縄文時代早期野島式土器。1は、細い集合沈線を地文に、太い沈線を横位に施文している。裏面は条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。2・3・5～7は、表裏面に条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。4は、縦位に鋭い沈線が施文されている。胎土に微量に繊維を含む。8は打製石斧である。石材はホルンフェルスで分割礫の縁辺を片側からのみ加工している。9は磨石である。石材は閃緑岩で楕円礫をそのまま用いている。

第131号土坑 1・2は、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に粗い条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第132号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第134号土坑 1は打製石斧である。石材は黒色頁岩である。

第135号土坑 1・2は、縄文時代早期条痕文系土器。条痕が表面は斜位に、裏面は縦位に施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第137号土坑 1・2は、縄文時代早期条痕文系土器。1は、表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。2は、尖底部。表面に条痕が縦位に施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第144号土坑 1は土師器坏である。口縁部が

やや直立しつづつ腰をもって立ち上がり、底部が平底風である。内面に放射状の暗文が施されている。2は須恵器坏である。南比企産で、底部外面にヘラ書きされている。底部内面に摩耗痕がみられる。

第150号土坑 1は石鏡である。石材はチャートで、無茎で基部を抉っている。

第151号土坑 1は土師質土器羽釜である。ロク口整形で銜部分のみが残存している。

第154号土坑 1は、縄文時代前期関山式土器。単節RL縄文が斜位に施文されている。胎土に繊維をサンドイッチ状に含む。

第159号土坑 1は瀬戸美濃系陶器端反碗で、内外面に鉄軸が施される。18世紀前半。

第162号土坑 1は瀬戸美濃系陶器腰鑄碗の口縁部で、内外面に灰軸が施される。

第163号土坑 1は鉄製の鎌である。刃部の一部である。

第164号土坑 1は在地産のかわらけ。2は肥前系陶器の京焼風陶器丸碗で、内外面に透明釉が施される。3は瀬戸美濃系陶器片口で、口縁部が肥厚して上面に平坦面が形成され、内側に若干張り出す。口縁部外面に沈線が走りロク口痕が顕著である。内外面に灰軸が施される。18世紀後半～19世紀前半。4は志戸呂系陶器徳利で、内面のロク口痕が顕著で外面に鉄軸が施される。18世紀代。5は鉄釘で長さ4cmを測る。6は楕形滓である。

第165号土坑 1は磨石である。石材は閃緑岩で楕円礫の自然面をそのまま利用している。上半部を欠損している。2は、縄文時代前期関山式土器。単節LR縄文が斜位に施文されている。胎土に繊維を含む。

第168号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。表面に条痕を施している。胎土に微量の繊維を含む。

第172号土坑 1は、縄文時代中期曾利式土器。櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。

第185号土坑 1は在地産のかわらけである。

第198号土坑 1はくらわんか碗と呼ばれる肥前系磁器染付丸碗で、外面には梅樹文が描かれる。18世紀代。

第203号土坑 1は龍泉窯系青磁蓮弁文碗で外面に蓮弁が彫られる。13世紀代

第206号土坑 1は、縄文時代中期加曾利E式土器。地文に燃糸文を縦位に施文し、半截竹管により整形された隆帯を2本垂下させている。2は、縄文時代中期加曾利E式土器。地文に燃糸文を縦位に施文し、隆帯による蛇行懸垂文を1本垂下させている。

第218号土坑 1は土師器高坏である。裾広がり脚部で、器面が粗く整形痕が不明瞭であった。わずかに一部で横方向に磨きが見えた程度である。不規則な透孔が5孔みられる。古墳時代前期五領式に比定されると考えられる。

第222号土坑 1～3は須恵器坏である。南比企産で底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。1は底部内面に摩耗痕がみられる。2は底部外面にヘラ書きされている。

第223号土坑 1は打製石斧である。石材はホルンフェルスである。両側縁に加工し、刃部は加工していない。スクレイパーとも考えられるが、今回は打製石斧とした。

第241号土坑 1は、縄文時代早期野島式土器。角頭状を呈する口縁部片。表面は条痕を施し、2本の浅い沈線により弧状のモチーフが施文されている。胎土に微量の繊維を含む。

第243号土坑 1～5は土師器坏である。口縁部がやや直立しつづつ腰をもって立ち上がり、底部が平底風である。1～4は内面に放射状の暗文が施されている。6は須恵器坏である。

7～11は須恵器坏である。7～11は南比企産である。12は須恵器長頸瓶である。

第251号土坑 1～3は、縄文時代早期条痕文

系土器。1は、角頭状を呈する口縁部片。条痕が、表面には口端部は短く斜位に、口縁部は縦位に、裏面には縦位に施されている。胎土に微量の繊維を含む。2・3は尖底となる胴部の破片。2は横位に、3は縦位に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。4・5は打製石斧である。分割礫を用いて主に片側からのみ加工している。4の石材はホルンフェルスで、5は黒色頁岩である。6はスクレイパーである。大型の剥片を利用し、縁辺をそのまま刃部としている。

第263号土坑 1は須恵器坏である。2は土師器坏である。口縁部が広がるように立ち上がり、底部が平底である。

第264号土坑 1は打製石斧である。分割礫を用いて平面形が長楕円形になるように入念に加工している。所々擦痕が見えるが、これは使用と装着によるものと考えられる。石材は頁岩である。

第266号土坑 1は、表裏面に条痕が施されている。胎土に繊維を微量に含む。

第269号土坑 1～7は、縄文時代早期野島式土器。1は、無文。表面に指頭による成形の痕跡が残る。胎土に微量の繊維を含む。2は、1条の細隆起線をタガ状に貼付し、口縁部文様帯の下端を区画し、さらに縦位に細隆起線を貼付し、区画している。区画内には綾形状に鋭い集合沈線が斜位に充填施文されている。胎土に微量の繊維を含む。3は、口唇部が角頭状を呈する口縁部片。口唇部直下より縦位に条痕が施されている。胎土に繊維を含む。4は、1条の細隆起線をタガ状に貼付し口縁部文様帯の下端を区画し、さらに縦位に細隆起線を貼付し、区画内を2条の細隆起線により樺状に区画している。区画内は、綾形状に鋭い集合沈線が斜位に充填施文されている。胎土に微量の繊維を含む。6は、細隆帯を樺状に貼付し、区画内を鋭い沈線に充填している。胎土に微量の繊維を含む。7は、尖底部付近の破片。5は、口

縁部から胴部下半が残る大形の破片。口唇部は丸頭状を呈し、山形の丸い小突起が付く。口唇部直下は無文となり、口縁部以下に条痕が施される。基本的に条痕は、口縁部から14cm程まで縦位に、5cm程の無文部を挟み、以下胴部下半は横位・斜位に施されている。この条痕は、幅7mm程で4条単位の細かい条線であり、貝殻以外の施工具が用いられている。胎土に微量の繊維を含む。8は石鏃である。石材は黒曜石で、無茎で基部が平坦である。9は磨石である。石材は閃緑岩で、一部のみ残存している。平坦面に使用によるわずかな痕跡がある。10は打製石斧である。石材はホルンフェルスで、分割礫を用いて片側からのみ加工している。刃部は欠損している。11は礫器である。石材はホルンフェルスである。

第270号土坑 1は石皿である。石材は閃緑岩で扁平礫をそのまま用いている。上半部が欠損する。

第273号土坑 1は鉄製の刀子である。

第275号土坑 1は石皿である。石材は閃緑岩で扁平な礫をそのまま利用している。平坦面は使用により摩耗している。

第278号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に条痕が施されている。胎土に微量に繊維を含む。

第282号土坑 1～3は、縄文時代早期野島式土器。1は、内削状の口唇部を呈する。表面は、条痕が横位に施され、裏面は、口縁部が横位で、以下縦位に施される。胎土に微量の繊維を含む。2・3は、細隆起線を幾何的に貼付し、区画内に沈線を充填している。3の細隆起線には刻み加えられている。胎土に微量の繊維を含む。4は石鏃である。無茎で基部が欠けている。5・6は閃緑岩の磨石である。平坦面を使用し、中央は敲打によって凹んでいる。6は縁辺にも敲打痕と摩耗痕がみられる。

第288号土坑 1・2は磨石である。石材は閃緑岩で縁辺の一部に敲打痕がみられる。2は上半



部が欠損する。被熱の痕跡がある。

第290号土坑 1・2は、縄文時代早期条痕文系土器。1は、表裏面に斜位に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。2は、無文。胎土に微量の繊維を含む。

第301号土坑 1～4は、縄文時代早期野島式土器。1は、口縁が波状となり、口唇部が外削状を呈する。無文で、指頭による整形痕が残る。胎土に微量の繊維を含む。2は、刻みの加えられた2条の細隆起線を貼付し、綾杉状の集合沈線を充填している。胎土に微量の繊維を含む。3・4は、表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。5は石錐である。石材はチャートで錐部は欠損している。6は打製石斧である。石材はホルンフェルスで分割礫を用いて片側から加工している。最大長と最大幅がほぼ同じであり、装着痕も見られないため、礫器の可能性もある。

第304号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に細かい条痕が縦位に施されている。胎土に微量の繊維を含む。2は磨石である。石材は安山岩で楕円礫の一部のみ残存している。

第327号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。波状口縁の波頂部。条痕が斜位に施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第328号土坑 1は打製石斧である。石材は黒色頁岩で分割礫を用いて片側ずつ加工している。撥形である。

第349号土坑 1は羽口である。滓部の一部のみが残存している。

第350号土坑 1は、縄文時代早期野島式土器。微隆起線を幾何的に貼付し、区画内に細かい集合沈線を充填している。胎土に微量の繊維を含む。

第366号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。口唇部上端が、棒状工具の連続押圧により細かい波状を呈する。表裏面とも横位の条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第377号土坑 1は、縄文時代早期野島式土器。やや太い沈線で文様を区画し、区画内に細い沈線を充填している。胎土に繊維を微量含む。

第379号土坑 1・2は縄文時代早期野島式土器。1は、口唇部直下に細い角棒状工具による連続刺突を巡らせ、同様の工具による刺突列を口唇部から垂下させ口縁部文様帯を区画している。刺突列に沿って沈線が施文されている。胎土に微量の繊維を含む。2は、口唇部直下に連続刺突が加えられ、幾何学的な沈線で口縁部文様が施文される。胎土に微量の繊維を含む。

第380号土坑 1は、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に細かい条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。

第381号土坑 1は磨石である。平坦面を使用し、中央が敲打によって凹んでいる。一部が欠損している。被熱の痕跡がみられる。

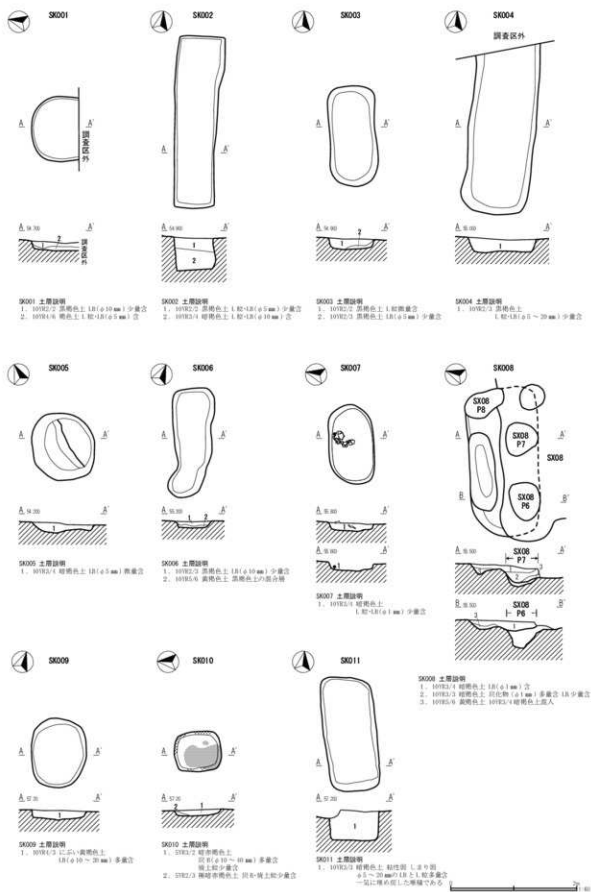
第425号土坑 1はいわゆる定角式石斧の磨製石斧である。石材はトレモラ閃石岩で大部分が欠損し、一部のみ残存している。

第442号土坑 1は砥石である。凝灰岩製で平面・断面形が長方形をしている。砥面は4面であり、両側縁に櫛歯タガネ痕がみられる。刃物痕が多数みられる。

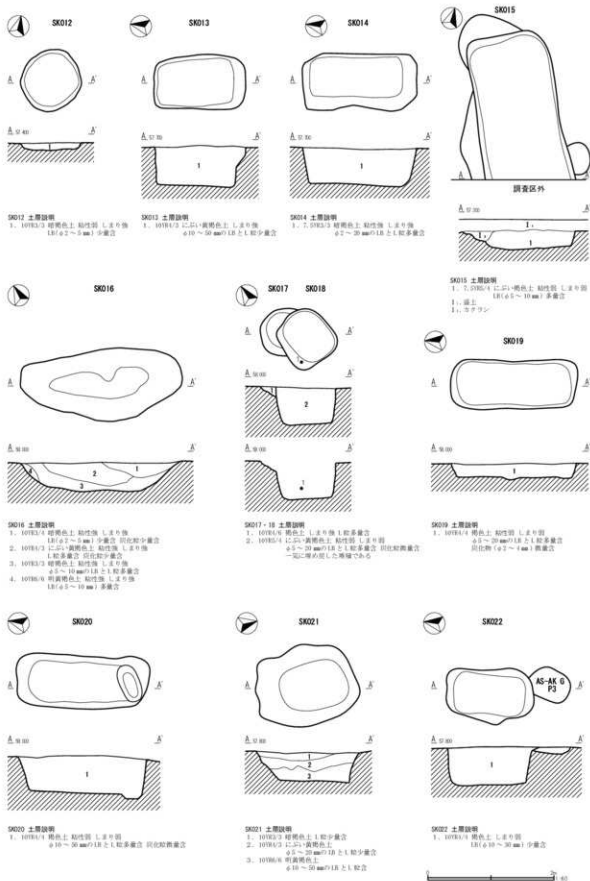
第444号土坑 1は在地産片口鉢で外面には指頭痕が残り、内面は濡れている。

第449号土坑 1～4は、縄文時代後期称名寺式土器。1は、口唇部下に1条の隆帯をタガ状に貼付し、胴部に沈線による区画文を施文している。2は、浅鉢の口縁部片。口縁部に2条の平行沈線が施文されている。3は、無文。4は、沈線が横位に施文されている。

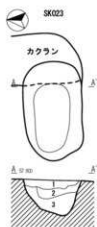
第450号土坑 1は17世紀後半の瀬戸美濃系陶器煙硝播で、口縁端部が内側に折り返される。口縁部内面から外面にかけて鉄釉が施され、内面は濡れている。



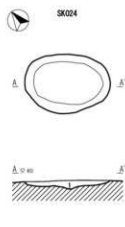
第 287 图 第 1 ~ 11 号土坑



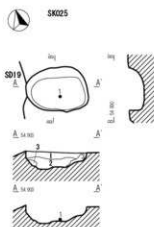
第288図 第12~22号土坑



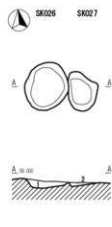
- SK023 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
灰化物散在
  2. 10194/1 褐色土
  3. T.10161/3 緑色土、粘性强



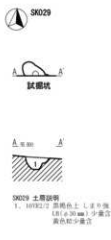
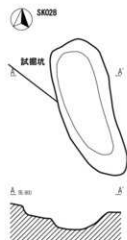
- SK024 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
 $\phi 2 \sim 5$ mmのL石とL粘多量



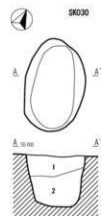
- SK025 土層説明**
1. 10192/1 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量
  2. 10192/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L石 $\phi 10 \sim 20$ mm、少量
  3. 10192/3 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
白色L石 $\phi 10$ mm、少量



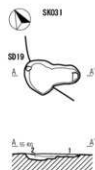
- SK026・27 土層説明**
1. 10192/1 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量
  2. 10194/2 灰褐色土、しまり強、  
L石 $\phi 20 \sim 30$ mm、少量



- SK029 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、しまり強、  
L石 $\phi 20$ mm、少量
  2. 10192/3 赤褐色土、少量



- SK030 土層説明**
1. 10192/1 赤褐色土、しまり強、  
L粘少量
  2. 10192/2 赤褐色土、しまり強、  
L石 $\phi 10 \sim 30$ mm、少量



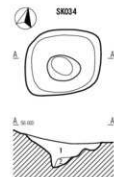
- SK031 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
骨土少量
  2. 10194/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量



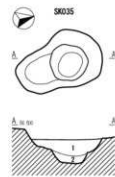
- SK032 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量
  2. 10192/3 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
 $\phi 30 \sim 50$ mmのL石とL粘少量



- SK033 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、しまり強、  
赤色粘少量



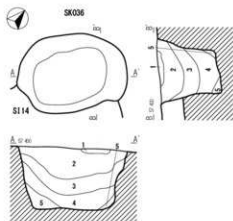
- SK034 土層説明**
1. 10192/2 赤褐色土、しまり強、  
L石 $\phi 20 \sim 30$ mm、少量
  2. 10192/3 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L石 $\phi 10 \sim 50$ mm、少量
  3. 10192/4 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
白色L石 $\phi 50 \sim 70$ mm、少量



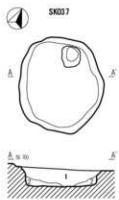
- SK035 土層説明**
1. 10192/3 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量
  2. 10192/4 赤褐色土、粘性强、しまり強、  
L粘少量



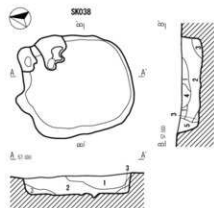
第 289 図 第 23 ～ 35 号土坑



- SK036 土層説明**
1. 10192/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  2. 10192/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  3. 10192/3 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  4. 10192/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  5. 10192/5 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含



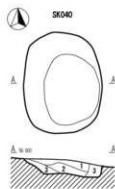
- SK037 土層説明**
1. 10193/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  2. 10193/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  3. 10193/3 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  4. 10193/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含



- SK038 土層説明**
1. 10192/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  2. 10192/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  3. 10192/3 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  4. 10192/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  5. 10192/5 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含



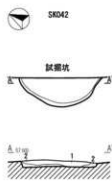
- SK039 土層説明**
1. 10193/3 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含
  2. 10193/4 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含



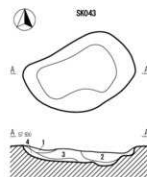
- SK040 土層説明**
1. 10194/1 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含
  2. 10194/2 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含
  3. 10194/3 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含
  4. 10194/4 黄褐色土、L.200mm、L.100-150少量含



- SK041 土層説明**
1. 10194/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含



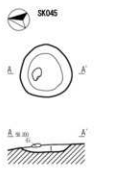
- SK042 土層説明**
1. 10192/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  2. 10192/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含



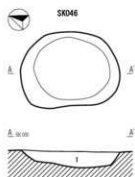
- SK043 土層説明**
1. 10192/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  2. 10192/3 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  3. 10192/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  4. 10192/5 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含
  5. 10192/6 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含



- SK044 土層説明**
1. 10194/2 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  2. 10194/3 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  3. 10194/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  4. 10194/5 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  5. 10194/6 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  6. 10194/7 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含
  7. 10194/8 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150多量含

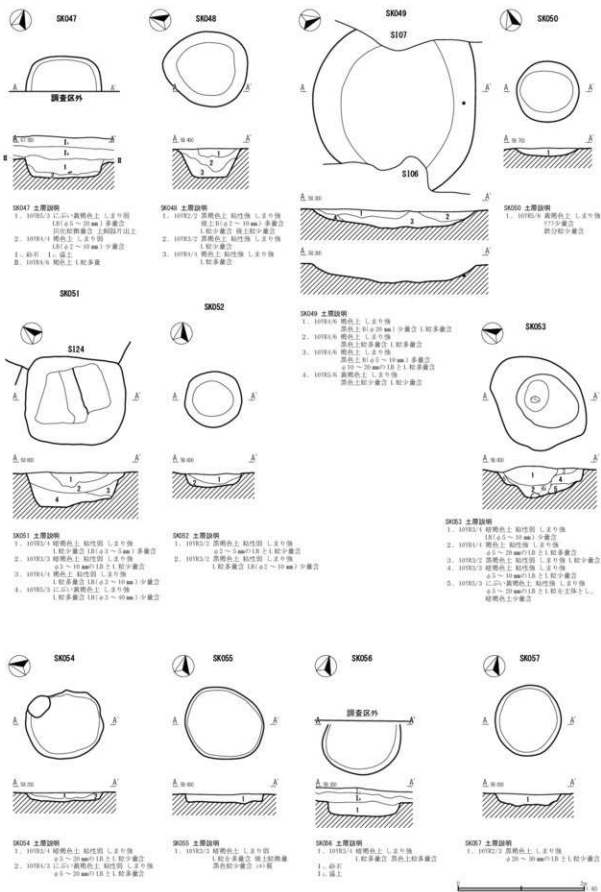


- SK045 土層説明**
1. 10193/1 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含



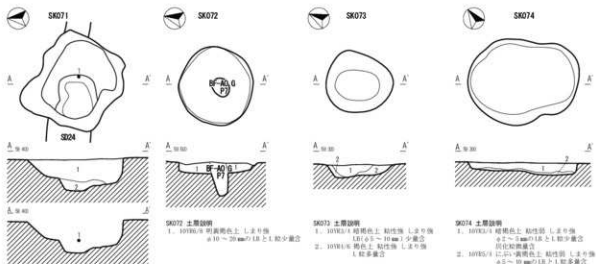
- SK046 土層説明**
1. 2.1014/4 黄褐色土、粘性弱、L.200mm、L.100-150少量含

第290图 第36~46号土坑



第 291 图 第 47 ~ 57 号土坑





**SK071 土層説明**

1. 101R/4 褐色土、土中層  
φ10～20mm/1層と1.较多層位
2. 101R/3 上2.5-黄褐色土、粘性強、土中層  
φ10～30mm/1層と主体土中層

**SK072 土層説明**

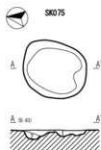
1. 101R/6 黄褐色土、土中層  
φ10～20mm/1層と1.较多層位

**SK073 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、粘性強、土中層  
1層(φ10～30mm)少量位
2. 101R/6 褐色土、粘性強、土中層  
1.较多層位

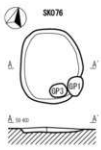
**SK074 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、粘性強、土中層  
φ2～3mm/1層と1.较多層位  
灰化粘層位
2. 101R/4 上2.5-黄褐色土、粘性強、土中層  
φ5～10mm/1層と1.较多層位



**SK075 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、土中層  
1層(φ10～20mm)少量位
2. 101R/3 上2.5-黄褐色土、土中層  
1層(φ10～30mm)少量位



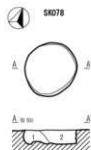
**SK076 土層説明**

1. 101R/4 褐色土、粘性強、土中層  
φ5～10mm/1層と1.较多層位



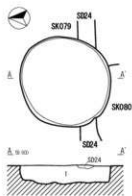
**SK077 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、土中層  
φ5～10mm/1層と1.较多層位



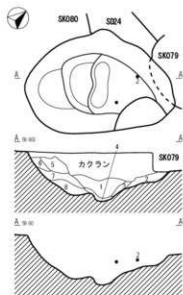
**SK078 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、土中層  
1.较多層位 1層(φ10mm)少量位
2. 101R/3 黄褐色土、土中層  
1.较多層位 1層(φ10mm)少量位



**SK079 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、粘性強  
1.较多層位  
1層(φ10～30mm)少量位  
粘土粘層位



**SK080 土層説明**

1. 101R/2 黄褐色土、土中層  
2層と中心に1.较多層位
2. 101R/6 褐色土、土中層  
φ10～20mm/1層と1.较多層位
3. 101R/3 黄褐色土、土中層  
1.较多層位
4. 101R/6 黄褐色土、土中層  
1層(φ10～30mm)少量位
5. 101R/4 褐色土、土中層  
粘性強土層(φ10～30mm)少量位
6. 101R/6 黄褐色土、土中層  
1層(φ10～30mm)少量位
7. 101R/6 黄褐色土、土中層  
φ10mm/1層と1.较多層位
8. 101R/6 褐色土、土中層  
1層(φ10～30mm)少量位



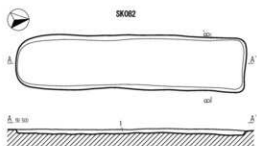
**SK081 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、粘性強、土中層  
1層(φ2～5mm)少量位  
灰化粘層位
2. 101R/3 黄褐色土、粘性強、土中層  
1.较多層位 3層(粘性強)
3. 101R/2 黄褐色土、土中層  
1層(φ2～5mm)少量位



第293図 第71～81号土坑

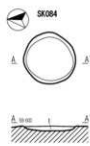




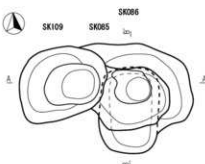
SK002 土層說明  
1. 101R3/4 暗褐色土、砂多層位  
1. 砂多層位 坡上和溝底位



SK003 土層說明  
1. 101R3/3 暗褐色土、土多層位  
1. 砂多層位  
1.5 (φ 1.5 ~ 4.0 mm) 少量位

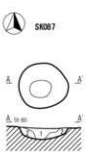
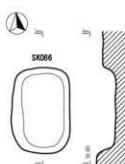


SK004 土層說明  
3. 101R3/3 暗褐色土、土多層位  
1. 砂多層位  
1.5 (φ 1.5 ~ 2.0 mm) 少量位  
坡上和溝底位

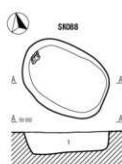


SK005・006・109 土層說明

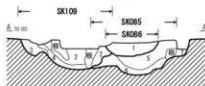
1. 101R3/4 暗褐色土、土多層位  
高褐色土、厚(φ 10 ~ 30 mm) 多層位  
砂多層位 1.5 (φ 10 mm) 少量位  
砂多層位
2. 101R2/3 暗褐色土、土多層位  
砂多層位
3. 101R3/9 黃褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位  
1.5 (φ 10 ~ 30 mm) 少量位
4. 101R4/6 褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位
5. 101R4/6 褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位
6. 101R2/4 以 2:1 黃褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位
7. 101R4/6 褐色土、土多層位  
1.5 (φ 10 ~ 30 mm) 少量位



SK007 土層說明  
1. 101R3/4 暗褐色土、粘性部、土多層位  
1.5 (φ 1.5 ~ 4.0 mm) 少量位  
2. 101R3/3 暗褐色土、粘性部、土多層位  
φ 2 ~ 10 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位

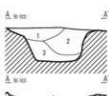


SK008 土層說明  
1. 101R3/1 褐色土、土多層位  
高褐色土多層位  
1. 砂多層位、141 質



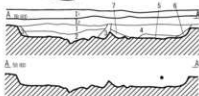
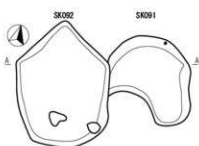
SK005・006・109 土層說明

1. 101R3/4 暗褐色土、土多層位  
高褐色土、厚(φ 10 ~ 30 mm) 多層位  
砂多層位 1.5 (φ 10 mm) 少量位  
砂多層位
2. 101R2/3 暗褐色土、土多層位  
砂多層位
3. 101R3/9 黃褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位  
1.5 (φ 10 ~ 30 mm) 少量位
4. 101R4/6 褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位
5. 101R4/6 褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位
6. 101R2/4 以 2:1 黃褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位
7. 101R4/6 褐色土、土多層位  
1.5 (φ 10 ~ 30 mm) 少量位



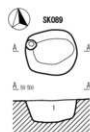
SK009 土層說明

1. 101R3/3 暗褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位  
砂多層位
2. 101R3/3 暗褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位  
砂多層位
3. 101R3/4 暗褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位  
砂多層位



SK001・002 土層說明

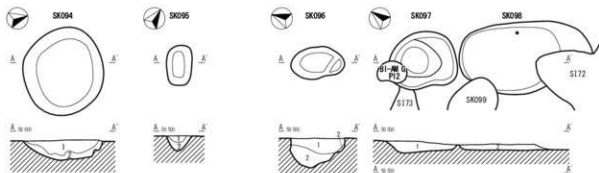
1. 101R2/3 褐色土、土多層位  
1. 砂多層位  
1.5 (φ 10 ~ 20 mm) 少量位
2. 101R1/6 褐色土、土多層位  
1. 砂多層位 1.5 (φ 10 mm) 少量位
3. 101R2/4 暗褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位  
φ 10 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位
4. 101R3/4 暗褐色土、土多層位、1. 砂少量位  
1.5 (φ 10 ~ 20 mm) 少量位
5. 101R1/6 褐色土、土多層位、1. 砂少量位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位
6. 101R1/6 褐色土、土多層位、1. 砂少量位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位
7. 101R2/4 暗褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂少量位



SK009 土層說明  
1. 101R1/1 褐色土、土多層位  
φ 10 ~ 30 mm 砂 1.5 土、1. 砂多層位  
高褐色土多層位、141 質



SK003 土層說明  
1. 101R3/3 暗褐色土、粘性部、土多層位  
1.5 (φ 1.5 ~ 4.0 mm) 少量位



SK004 土層説明

1. 1078/4 褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量
2. 1078/3 土砂、黄褐色土、  
φ3~10mm/L1とL1较多量

SK095 土層説明

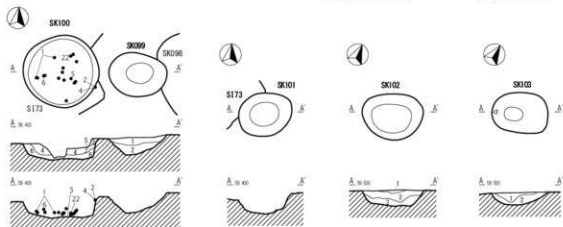
1. 1078/3 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量
2. 1078/4 褐色土、L1较多量

SK096 土層説明

1. 1078/4 褐色土、粘性弱、土量中強  
φ3~20mm/L1とL1少量
2. 1078/3 土砂、黄褐色土、粘性弱、土量中強  
φ3~20mm/L1とL1较多量

SK097・098 土層説明

1. 1078/3 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1少量
2. 1078/2 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量



SK099・100 土層説明

1. 1078/3 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
φ2~3mm/L1とL1少量
2. 1078/4 褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ3~10~20mm)少量
3. 1078/4 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量

SK101

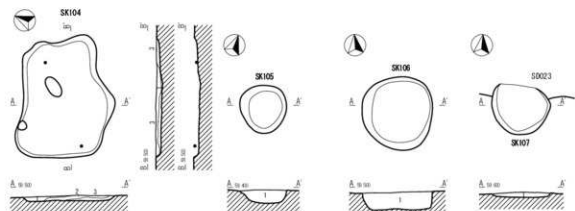
4. 1078/2 黄褐色土、粘性弱、土量中強  
黄色硬質砂(φ20~30mm)を主体とし、  
φ2~10mm/L1(砂)を混じり、粘土状の層を  
形成し、土量中強
5. 1078/2 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~10mm)少量  
粘土粒に付着物あり
6. 1078/6 褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ3~20mm)少量  
粘土粒にφ2~3mm)黄褐色土

SK102 土層説明

1. 1078/2 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1少量
2. 1078/4 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量
3. 1078/4 褐色土、  
L1(φ2~3mm)少量

SK103 土層説明

1. 1078/2 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量
2. 1078/4 褐色土、  
L1(φ2~3mm)少量



SK104 土層説明

1. 1078/3 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~3mm)少量
2. 1078/4 暗褐色土、  
φ2~10mm/L1とL1少量
3. 1078/4 褐色土、L1较多量

SK105 土層説明

1. 1078/3 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ2~10mm)少量

SK106 土層説明

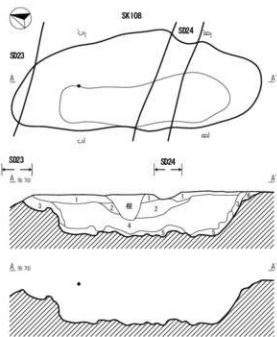
1. 1078/3 黄褐色土、土量中強  
L1少量
2. 1078/2 暗褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ3~20mm)少量  
粘土粒に付着物あり

SK107 土層説明

1. 1078/4 褐色土、粘性弱、土量中強  
L1(φ3~20mm)少量

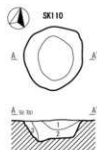


第 295 图 第 94 ~ 107 号土坑



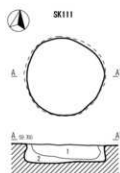
SK108 土層說明

1. 10R2/2 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
2. 10R2/3 黑褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
3. 10R2/4 褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
4. 10R2/5 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
5. 10R2/6 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
6. 10R2/7 黑褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
7. 10R2/8 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
8. 10R2/9 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
9. 10R2/10 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
10. 10R2/11 褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
11. 10R2/12 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
12. 10R2/13 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
13. 10R2/14 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
14. 10R2/15 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
15. 10R2/16 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭



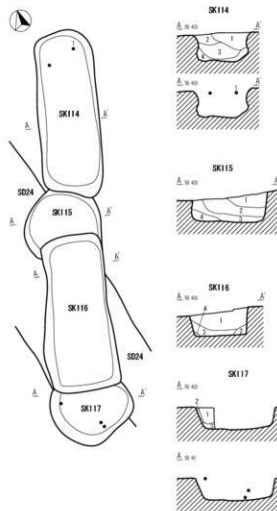
SK110 土層說明

1. 10R3/2 黑褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
2. 10R3/3 褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
3. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭



SK111 土層說明

1. 10R3/2 黑褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭
2. 10R3/3 黑褐色土, 土中夾有 1 粒少量炭



SK114 土層說明

1. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
2. 10R3/5 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
3. 10R3/6 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
4. 10R3/7 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭

SK115 土層說明

1. 10R3/4 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
2. 10R3/5 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
3. 10R3/6 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
4. 10R3/7 黑褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭

SK116 土層說明

1. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
2. 10R3/5 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
3. 10R3/6 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
4. 10R3/7 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭

SK117 土層說明

1. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
2. 10R3/5 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭
3. 10R3/6 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭



SK112 土層說明

1. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭

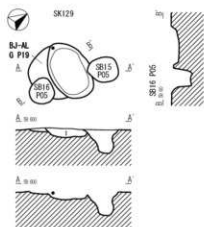


SK113 土層說明

1. 10R3/4 褐色土, 土中夾有 1 粒多量炭

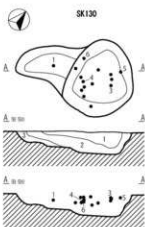
第 296 圖 第 108・110~117 号土坑





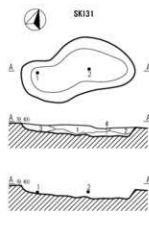
SK129 土層説明

1. 10192/4 赤褐色土、粘性質、L、中層  
φ 10 ~ 20 mm<sup>2</sup> L.B. 土、L. 粘多量



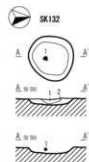
SK130 土層説明

1. 10192/2 赤褐色土、粘性質、L、中層  
φ 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 褐色硬質 8 粘多量  
φ 2 ~ 5 mm<sup>2</sup> L.B. 土層上粘・砂化粘多量
2. 10193/3 赤褐色土、粘性質、L、中層  
褐色硬質 φ 10 ~ 20 mm<sup>2</sup> 少量  
L.B. (φ 2 ~ 10 mm) 少量
3. 10194/6 褐色土、粘性質、L、中層、L. 粘多量



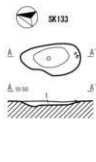
SK131 土層説明

1. 10192/2 赤褐色土、粘性質、L、中層  
φ 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 褐色硬質 8 粘多量  
L. 粘少量、土層上粘・砂化粘多量
2. 10193/3 赤褐色土、粘性質、L、中層  
φ 2 ~ 5 mm<sup>2</sup> L.B. 土、L. 粘少量  
φ 10 ~ 20 mm<sup>2</sup> 褐色硬質 8 粘多量  
土層上粘・砂化粘多量
3. 10194/6 褐色土、  
φ 2 ~ 5 mm<sup>2</sup> L.B. 土、L. 粘多量
4. 10195/4 L.B. 土、L. 粘少量  
φ 2 ~ 10 mm<sup>2</sup> L.B. 土、L. 粘多量



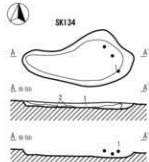
SK132 土層説明

1. 10192/3 赤褐色土、粘性質、L、中層  
L.B. (φ 2 ~ 5 mm) 少量
2. 10194/6 褐色土、粘性質、L、中層  
L.B. (φ 2 ~ 10 mm) 多量



SK133 土層説明

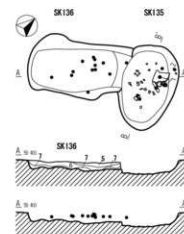
1. 10192/4 赤褐色土、粘性質、L、中層  
L.B. (φ 2 ~ 5 mm) 少量



SK134 土層説明

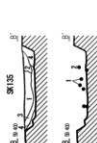
1. 10192/3 赤褐色土、粘性質、L、中層  
L.B. (φ 2 ~ 5 mm) 少量
2. 10194/6 褐色土、粘性質、L、中層  
L. 粘多量

※SK136は欠番



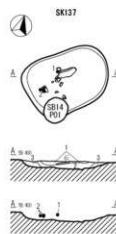
SK135・136 土層説明

1. 10192/2 赤褐色土、L、中層  
硬質土層 φ 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 多量
2. 10193/3 赤褐色土、L、中層  
硬質土層 φ 5 ~ 10 mm<sup>2</sup> 多量  
L. 粘少量
3. 10194/4 褐色土、粘性質、L、中層  
φ 5 ~ 20 mm<sup>2</sup> 褐色硬質土、L. 粘少量
4. 10194/4 褐色土、粘性質、L、中層  
φ 5 ~ 20 mm<sup>2</sup> L.B. 土、L. 粘多量



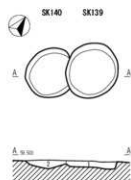
SK135

5. 10192/2 赤褐色土、L、中層  
硬質土層 φ 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 多量  
L. 粘少量
6. 10193/3 赤褐色土、L、中層  
φ 5 ~ 20 mm<sup>2</sup> 褐色硬質土、L. 粘少量
7. 10194/4 褐色土、粘性質、L、中層、L. 粘多量



SK137 土層説明

1. 10194/4 褐色土、L. 粘多量
2. 10192/3 赤褐色土、L、中層  
φ 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 褐色硬質土、L. 粘多量
3. 10194/6 褐色土、粘性質、L、中層  
L.B. (φ 5 ~ 10 mm) 多量

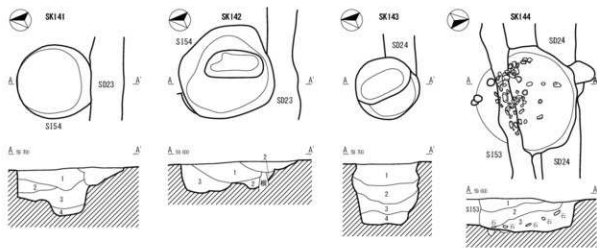


SK139・140 土層説明

1. 10193/4 赤褐色土、L、中層  
L. 粘多量
2. 10192/2 赤褐色土、L、中層  
L. 粘多量  
L.B. (φ 10 mm) 少量



第 298 図 第 129 ~ 137・139・140 号土坑

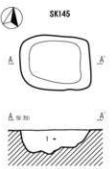


- SK141 土層説明**
1. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
I (φ 10 ~ 120 mm) 少量  
I 砂少量
  2. 101R/3 粘褐色土、粘褐色 L、L中層  
I (φ 10 ~ 40 mm) 少量  
I 砂少量
  3. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
I 砂少量、777少量
  4. 101R/6 黄褐色土、粘褐色 L、L中層  
φ 10 ~ 20 mm 7.1.2 と I 砂少量

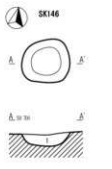
- SK142 土層説明**
1. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
I 砂少量 I (φ 10 mm) 少量  
777少量、地上物残存
  2. 101R/3 2.5.1、黄褐色土、L、L中層  
I 砂少量 I (φ 10 mm) 少量
  3. 101R/6 黄褐色土、L、L中層  
I 砂少量  
I (φ 10 ~ 20 mm) 少量

- SK143 土層説明**
1. 101R/6 褐色土、L、L中層  
I (φ 10 ~ 30 mm) 少量  
地上物残存
  2. 101R/6 黄褐色土、L、L中層  
I 砂少量 I (φ 10 mm) 少量
  3. 101R/6 褐色土、L、L中層  
I 砂少量  
I (φ 10 ~ 20 mm) 少量
  4. 101R/6 黄褐色土、L、L中層  
I (φ 10 ~ 100 mm) 少量

- SK144 土層説明**
1. 101R/4 101R/4、L、L中層  
φ 5 ~ 10 mm 7.1.2 と I 砂少量  
2. 101R/4 2.5.1、黄褐色土、L、L中層  
I (φ 10 ~ 40 mm) 少量  
3. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
I (φ 5 ~ 20 mm) 少量  
7.1.2 (φ 100 ~ 200 mm) 少量



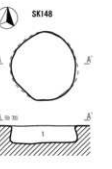
- SK145 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、粘褐色 L、L中層  
I (φ 5 ~ 20 mm) 少量



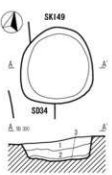
- SK146 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、粘褐色 L、L中層  
φ 2 ~ 5 mm 7.1.2 と I 砂少量



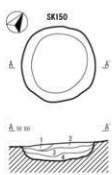
- SK147 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、粘褐色 L、L中層  
I (φ 5 ~ 20 mm) 少量



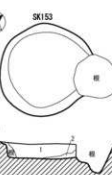
- SK148 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、L、L中層  
I (φ 10 ~ 20 mm) 少量



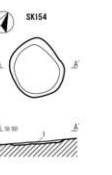
- SK149 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量  
I (φ 10 ~ 30 mm) 少量  
赤色粘多量、777少量
  2. 101R/4 粘褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量、赤色粘多量  
777少量 (A=4)
  3. 101R/4 粘褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量、赤色粘多量



- SK150 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量  
I (φ 10 ~ 30 mm) 少量
  2. 101R/4 褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量、赤色粘少量
  3. 101R/4 粘褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量、赤色粘少量  
777少量 (A=4)
  4. 101R/3 粘褐色土、L、L中層 24 質  
I 砂少量、赤色粘多量  
777少量



- SK153 土層説明**
1. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量  
I (φ 10 ~ 30 mm) 少量  
赤色粘多量
  2. 101R/3 粘褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量



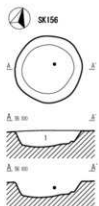
- SK154 土層説明**
1. 101R/4 褐色土、L、L中層  
24 質 I 砂少量  
I (φ 10 ~ 30 mm) 少量  
赤色粘多量



第 299 図 第 141 ~ 150、153・154 号土坑



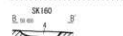
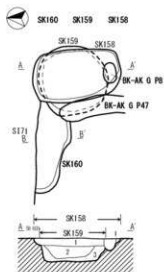
**SK155 土層説明**  
 1. 10193/1 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/2 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層



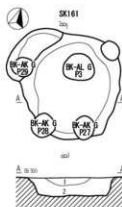
**SK156 土層説明**  
 1. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/5 硬褐色土、L、M、F層



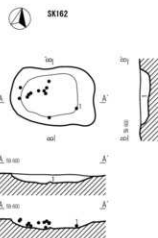
**SK157 土層説明**  
 1. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/5 硬褐色土、L、M、F層



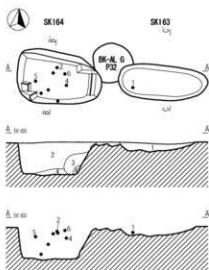
**SK158 - 159 - 160 土層説明**  
 1. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/5 硬褐色土、L、M、F層  
 4. 10193/6 硬褐色土、L、M、F層  
 5. 10193/7 硬褐色土、L、M、F層



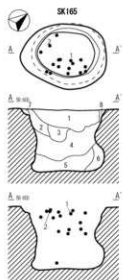
**SK161 土層説明**  
 1. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/5 硬褐色土、L、M、F層



**SK162 土層説明**  
 1. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層



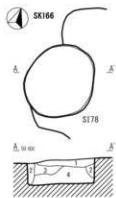
**SK163 - 164 土層説明**  
 1. 10193/6 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/7 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/8 硬褐色土、L、M、F層  
 4. 10193/9 硬褐色土、L、M、F層



**SK165 土層説明**  
 1. 10193/1 硬褐色土、L、M、F層  
 2. 10193/2 硬褐色土、L、M、F層  
 3. 10193/3 硬褐色土、L、M、F層  
 4. 10193/4 硬褐色土、L、M、F層  
 5. 10193/5 硬褐色土、L、M、F層  
 6. 10193/6 硬褐色土、L、M、F層  
 7. 10193/7 硬褐色土、L、M、F層  
 8. 10193/8 硬褐色土、L、M、F層

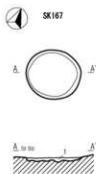


第 300 図 第 155 ~ 165 号土坑



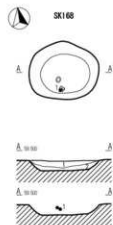
SK166 土層剖面

1. 101K1/4 暗褐色土 黏性弱 土中厚  
LRI: 0.5 ~ 10 mm<sup>2</sup> 少量含
2. 101K1/4 褐色土 黏性強 土中厚  
LRI: 0.10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 多量含
3. 101K1/6 褐色土  
0.7 ~ 5 mm<sup>2</sup> LRI 之 1 较多量含
4. 101K1/4 褐色土  
LRI: 0.10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 少量含



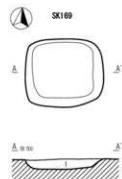
SK167 土層剖面

1. 101K1/3 暗褐色土 黏性弱 土中厚  
LRI: 0.2 ~ 2 mm<sup>2</sup> 少量含  
以此判斷層含



SK168 土層剖面

1. 101K1/3 暗褐色土 黏性弱 土中厚  
LRI: 0.2 ~ 2 mm<sup>2</sup> 少量含
2. 101K1/4 褐色土 黏性弱 土中厚  
0.2 ~ 10 mm<sup>2</sup> LRI 之 1 较多量含



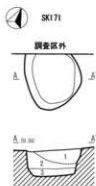
SK169 土層剖面

1. 101K1/3 暗褐色土 黏性弱 土中厚  
LRI: 0.2 ~ 10 mm<sup>2</sup> 少量含



SK170 土層剖面

1. 101K1/1 深褐色土 黏性弱 土中厚  
1 较多量含 以此判斷層含
2. 101K1/4 暗褐色土 黏性弱 土中厚  
LRI: 0.2 ~ 5 mm<sup>2</sup> 少量含
3. 磁土  
101K1/6 褐色土 黏性弱 土中厚  
1 较多量含



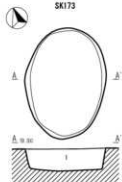
SK171 土層剖面

1. 101K1/3 暗褐色土 土中厚  
0.10 ~ 50 mm<sup>2</sup> LRI 之 1 较多量含
2. 101K1/3 暗褐色土 土中厚 1 较多量含
3. 101K1/4 褐色土 土中厚  
0.10 ~ 20 mm<sup>2</sup> LRI 之 1 较多量含



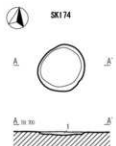
SK172 土層剖面

1. 101K1/2 深褐色土 1 较多量含  
層上 白色粉心數量含
2. 101K1/2 深褐色土 1 较多量含
3. 101K1/2 深褐色土  
0.10 mm<sup>2</sup> LRI 之 1 较多量含
4. 101K1/2 深褐色土 LRI: 0.10 mm<sup>2</sup> 含



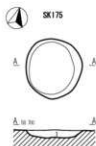
SK173 土層剖面

1. 101K1/2 深褐色土  
LRI: 0.10 ~ 20 mm<sup>2</sup> 少量含



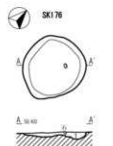
SK174 土層剖面

1. 101K1/4 暗褐色土 土中厚  
1 较多量含  
LRI: 0.30 ~ 20 mm<sup>2</sup> 少量含  
144頁 177多量含



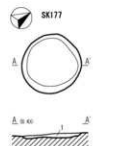
SK175 土層剖面

1. 101K1/3 暗褐色土 土中厚  
1.0 多量含 177多量含  
磁土较多量含 144頁



SK176 土層剖面

1. 101K1/4 暗褐色土 土中厚  
1 较多量含 177多量含  
144頁



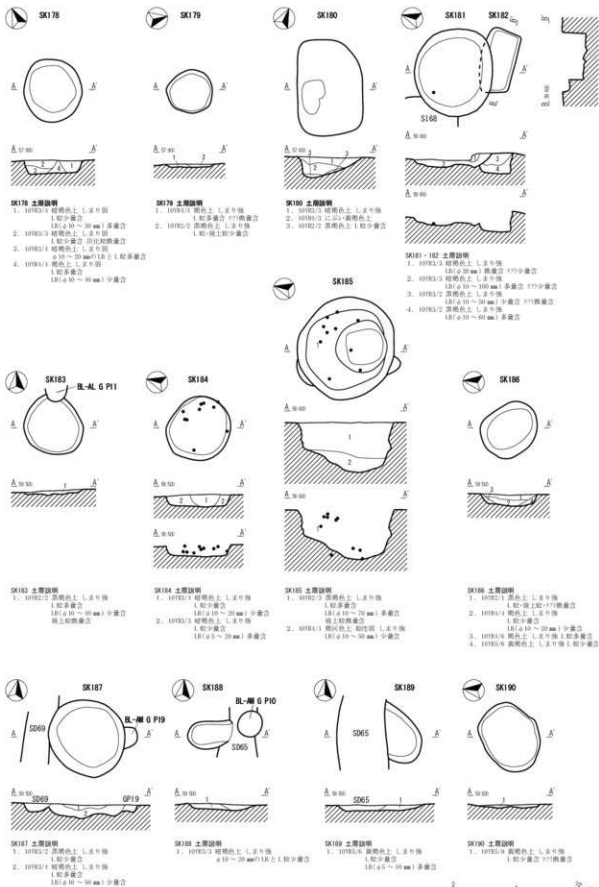
SK177 土層剖面

1. 101K1/4 暗褐色土 土中厚  
1 较多量含  
LRI: 0.10 ~ 30 mm<sup>2</sup> 少量含 144頁

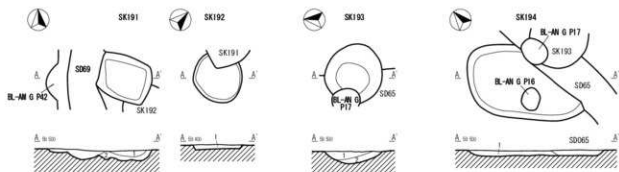


第 301 圖 第 166 ~ 177 号土坑





第 302 图 第 178 ~ 190 号土坑



**SK191 土層説明**

1. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
L 取少量  
LB( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量含
2. 101R/3 2.5:1 黄褐色土、しまり強  
L 取少量  
LB( $\phi 5 \sim 20$ mm) 少量含

**SK192 土層説明**

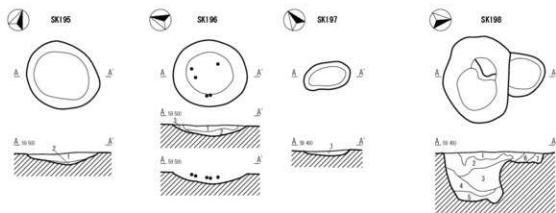
1. 101R/3 2.5:1 黄褐色土、しまり強  
L 取少量

**SK193 土層説明**

1. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
P7 多量含 L 取少量
2. 101R/3 黄褐色土、しまり強  
L 取少量  
LB( $\phi 5 \sim 10$ mm) 多量含

**SK194 土層説明**

1. 101R/3 黄褐色土、しまり強  
L 取少量  
LB( $\phi 10 \sim 20$ mm) 少量含



**SK195 土層説明**

1. 101R/4 粘褐色土、しまり強  
L 取少量
2. 101R/5 黄褐色土、しまり強  
L 取少量

**SK196 土層説明**

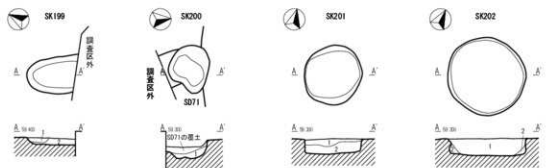
1. 101R/2 深褐色土、しまり強  
L 取少量  
磁土粒・P7 少量含
2. 101R/4 黄褐色土、しまり強  
L 取少量
3. 101R/3 2.5:1 黄褐色土、しまり強  
L 取少量

**SK197 土層説明**

1. 101R/2 粘褐色土、しまり強  
 $\phi 10 \sim 20$ mm P1B 土 L 取少量

**SK198 土層説明**

1. 101R/4 粘褐色土、しまり強  
L 取少量 LB( $\phi 10 \sim 20$ mm) 多量含  
磁褐色土少量含
2. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
LB( $\phi 10 \sim 20$ mm) 主体土上、  
磁褐色土少量含
3. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
L 取少量 LB( $\phi 5 \sim 10$ mm) 多量含
4. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
L 取少量 LB( $\phi 5 \sim 20$ mm) 少量含
5. 101R/6 中黄褐色土、しまり強  
LB( $\phi 10 \sim 20$ mm) 主体土上、  
L 取少量 粘褐色土少量含
6. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
L 取少量 LB( $\phi 5 \sim 10$ mm) 少量含
7. 101R/5 黄褐色土、しまり強 L 取少量



**SK199 土層説明**

1. 101R/4 粘褐色土、しまり強  
 $\phi 2 \sim 5$ mm P1B 土 L 取少量
2. 101R/4 粘褐色土、しまり強  
 $\phi 10 \sim 20$ mm P1B 土 L 取少量

**SK200 土層説明**

1. 101R/3 粘褐色土、しまり強  
 $\phi 5 \sim 20$ mm P1B 土 L 取少量

**SK201 土層説明**

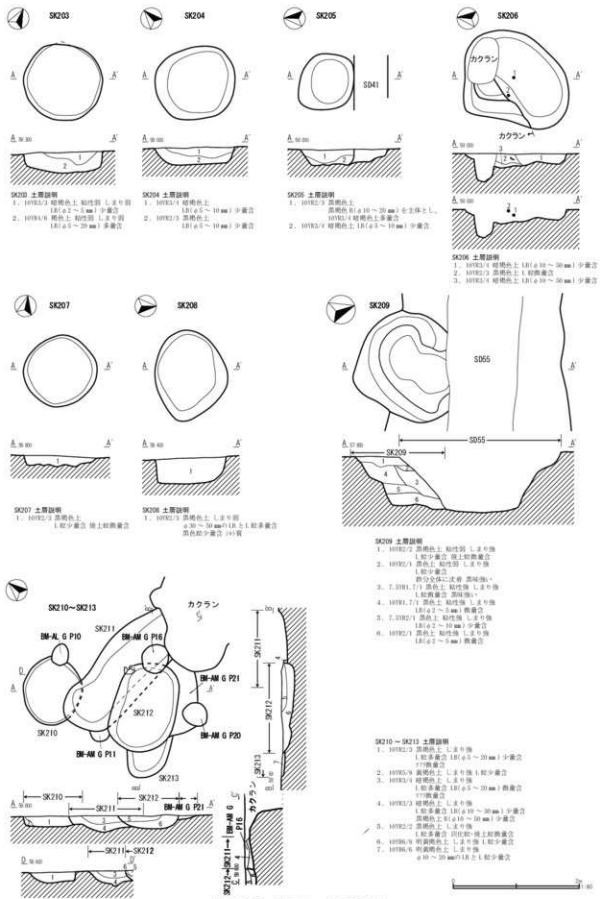
1. 101R/4 褐色土、粘性弱、しまり強  
 $\phi 2 \sim 5$ mm P1B 土 L 取少量
2. 101R/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB( $\phi 2 \sim 5$ mm) 少量含

**SK202 土層説明**

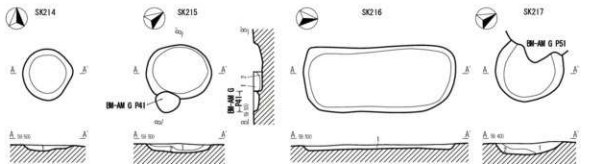
1. 101R/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB( $\phi 5 \sim 20$ mm) 少量含
2. 101R/3 2.5:1 黄褐色土、粘性弱、しまり強  
 $\phi 5 \sim 20$ mm P1B 土 L 取少量



第 303 図 第 191 ~ 202 号土坑



第 304 図 第 203 ~ 213 号土坑



SK214 土層説明

1. 10192/2 黄褐色土、土中石物  
1. 粘土層位  
LR(φ 10 ~ 20 mm) 少量

SK215 土層説明

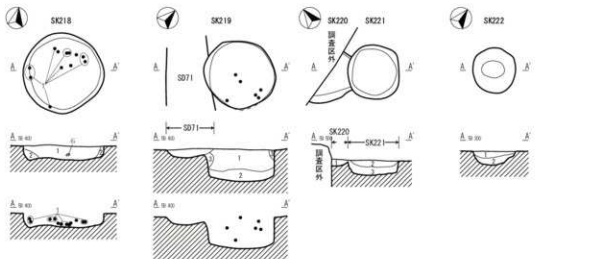
1. 10192/3 暗褐色土、土中石物  
1. 粘土層位 LR(φ 5 ~ 10 mm) 少量
2. 10193/3 黄褐色土、土中石物  
1. 粘土層位 LR(φ 10 mm) 少量

SK216 土層説明

1. 10192/3 比色I-黄褐色土、土中石物  
φ 5 ~ 10 mm/1.8 ± 1.8 少量

SK217 土層説明

1. 10192/3 暗褐色土、土中石物  
1. 粘土層位  
LR(φ 10 ~ 20 mm) 少量
2. 10193/3 比色I-黄褐色土、土中石物  
1. 粘土層位  
LR(φ 5 ~ 20 mm) 少量



SK218 土層説明

1. 10192/2 黄褐色土、土中石物  
1. 粘土層位  
LR(φ 5 ~ 20 mm) 少量
2. 10192/3 黄褐色土、土中石物  
φ 10 ~ 20 mm/1.8 ± 1.8 少量

SK219 土層説明

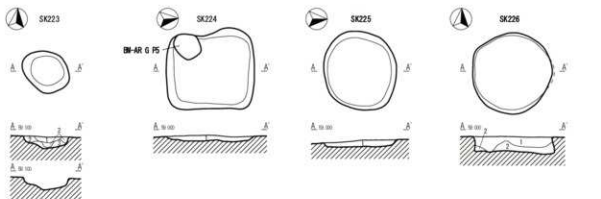
1. 10192/1 原色土、土中石物  
φ 5 ~ 10 mm/1.8 ± 1.8 少量  
粘土層位
2. 10193/1 原色土、土中石物  
1. 粘土層位 LR(φ 10 ~ 20 mm) 少量  
粘土層位
3. 10193/6 黄褐色土、土中石物  
原色土 LR(φ 10 ~ 20 mm) 少量  
1. 粘土層位

SK220-221 土層説明

1. 10192/3 暗褐色土、粘性物、土中石物  
1. 粘土層位、粘土層位、土中石物
2. 10193/2 黄褐色土、粘性物、土中石物  
1. 粘土層位
3. 10193/3 比色I-黄褐色土、粘性物、土中石物  
φ 2 ~ 2 mm/1.8 ± 1.8 少量

SK222 土層説明

1. 10192/3 暗褐色土、粘性物、土中石物  
LR(φ 2 ~ 2 mm) 少量  
粘土層位
2. 10193/6 比色I-黄褐色土、粘性物、土中石物  
φ 5 ~ 10 mm/1.8 ± 1.8 少量



SK223 土層説明

1. 10193/4 黄褐色土、原色土 LR(φ 10 mm) 少量  
LR(φ 5 ~ 10 mm) 少量
2. 10193/4 暗褐色土、LR(φ 5 mm) 少量
3. 10194/3 比色I-黄褐色土、LR(φ 10 mm) 少量

SK224 土層説明

1. 10192/2 黄褐色土、原色土 LR(φ 5 ~ 10 mm) 少量

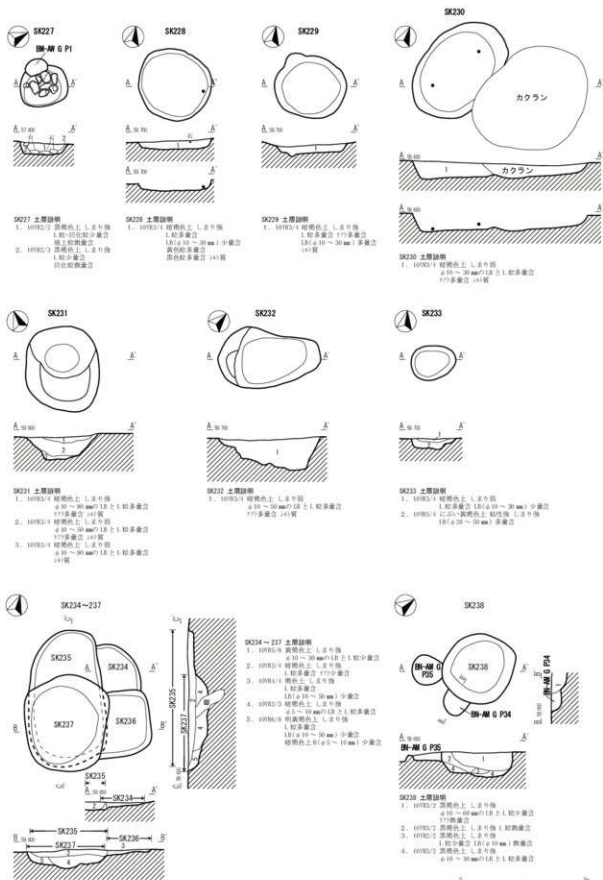
SK225 土層説明

1. 10192/2 黄褐色土、原色土 LR(φ 5 ~ 10 mm) 少量

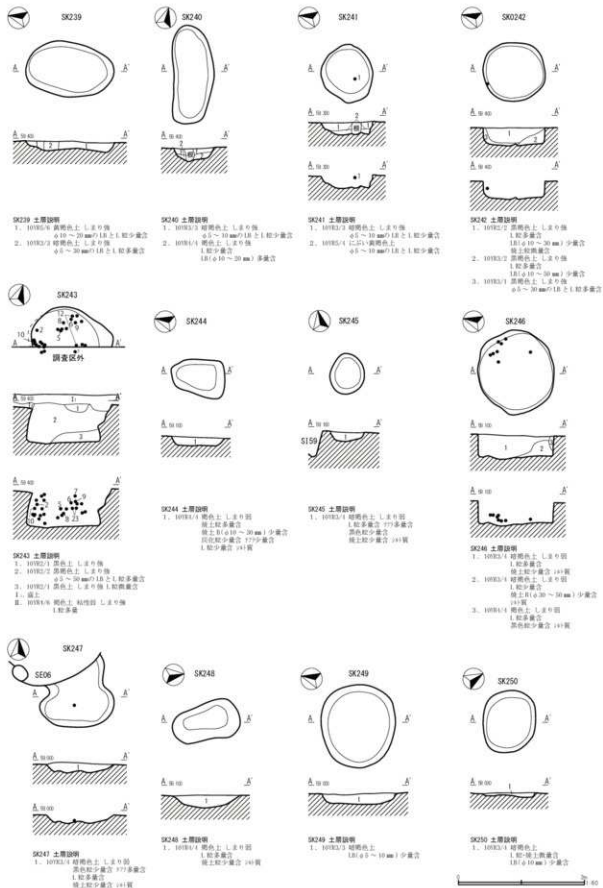
SK226 土層説明

1. 10192/2 黄褐色土、1. 粘土層位  
2. 10193/3 黄褐色土、LR(φ 5 ~ 20 mm) 少量

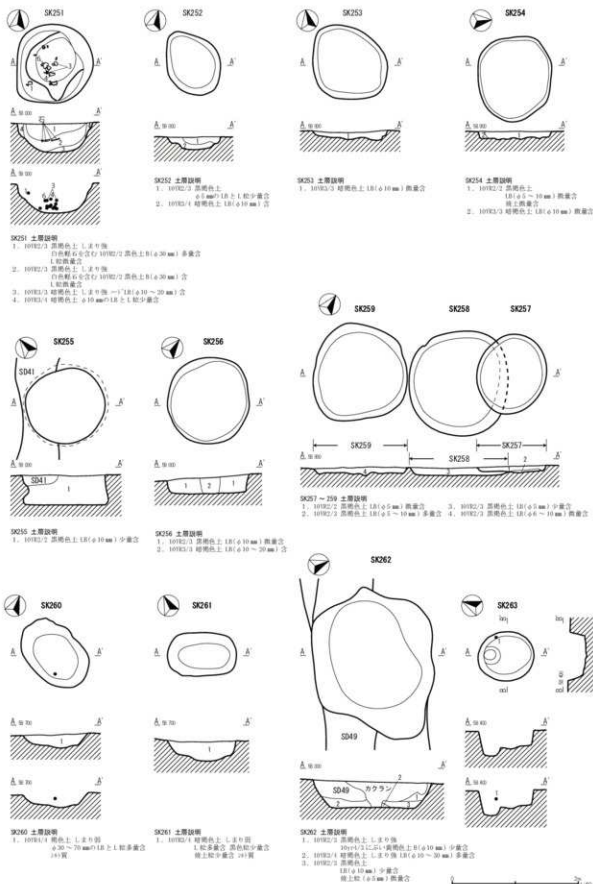
第 305 图 第 214 ~ 226 号土坑



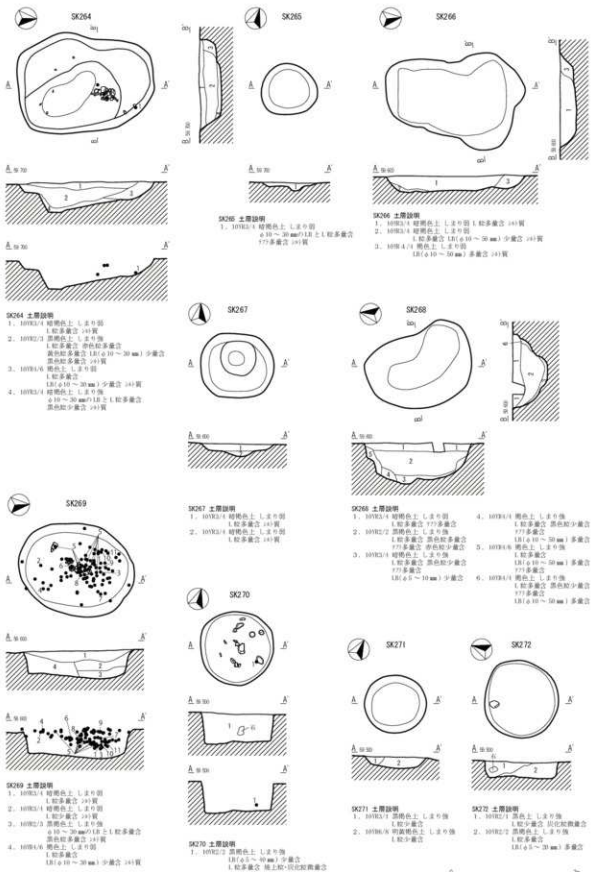
第 306 図 第 227 ~ 238 号土坑



第 307 图 第 239 ~ 250 号土坑

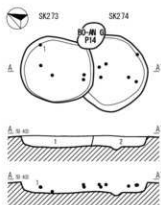


第 308 図 第 251 ~ 263 号土坑

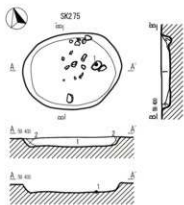


第 309 图 第 264 ~ 272 号土坑

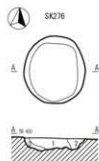




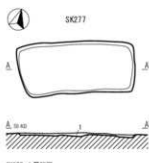
**SK273・274 土層説明**  
 1. 10193/3 灰褐色土、しまり地  
 φ 20 ~ 20 mm の 1.0 と 1. 粘土層  
 2. 10193/2 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 1 ~ 10 mm) 少量粘土、1. 粘土層



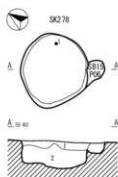
**SK275 土層説明**  
 1. 10192/3 灰褐色土、しまり地、1. 粘土層  
 2. 10192/4 灰褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土  
 灰褐色土、1.0 (φ 1 ~ 10 mm) 少量粘土



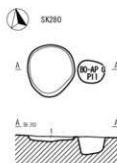
**SK276 土層説明**  
 1. 10192/4 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 10 ~ 100 mm) 少量粘土  
 1. 粘土層、1.0 (φ 10 ~ 100 mm) 少量粘土  
 2. 10192/3 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土、1. 粘土層  
 3. 10192/4 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 10 ~ 20 mm) 少量粘土、1. 粘土層



**SK277 土層説明**  
 1. 10192/4 灰褐色土、しまり地  
 φ 10 ~ 30 mm の 1.0 と 1. 粘土層

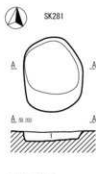


**SK279 土層説明**  
 1. 10192/3 灰褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土  
 2. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 10 ~ 20 mm) 少量粘土  
 1. 粘土層

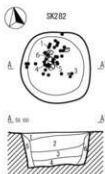


**SK280 土層説明**  
 1. 10191/4 褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土  
 (1) 質

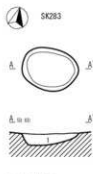
**SK278 土層説明**  
 1. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土  
 2. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 φ 10 ~ 30 mm の 1.0 と 1. 粘土層



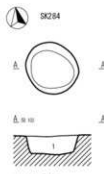
**SK281 土層説明**  
 1. 10191/4 褐色土、しまり地  
 灰褐色少量粘土  
 1. 粘土層  
 (1) 質



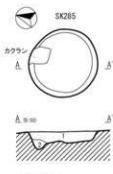
**SK282 土層説明**  
 1. 10192/3 灰褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、(1) 質  
 2. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 灰土粘土層、(1) 質  
 3. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 灰土粘土層、1. 粘土層  
 灰土粘土層、1. 粘土層  
 灰土粘土層、(1) 質



**SK283 土層説明**  
 1. 10191/3 褐色土、しまり地  
 1. 粘土層  
 1.0 (φ 10 ~ 20 mm) 少量粘土  
 灰褐色少量粘土、(1) 質  
 4. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 φ 10 ~ 30 mm の 1.0 と 1. 粘土層  
 灰土粘土層、(1) 質  
 5. 10191/4 褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、(1) 質  
 6. 10191/4 褐色土、しまり地  
 1. 粘土層、(1) 質

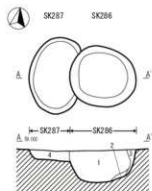


**SK284 土層説明**  
 1. 10192/2 灰褐色土、しまり地  
 灰土粘土層  
 1. 粘土層  
 硬くしまった褐色土が  
 灰土に入っている



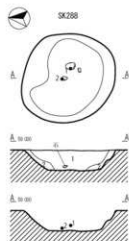
**SK285 土層説明**  
 1. 10192/3 灰褐色土  
 1. 粘土層  
 1.0 (φ 1 ~ 10 mm) 少量粘土  
 2. 10192/3 灰褐色土、しまり地  
 1.0 (φ 1 ~ 20 mm) 少量粘土

第 310 図 第 273 ~ 285 号土坑



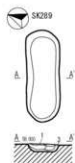
**SK286・287 土層説明**

1. 101K2/2 赤褐色土 しまり地  
白色軽石散入の赤褐色土B  
(φ30～50mm) 少量立
2. 101K2/3 赤褐色土 しまり地  
白色軽石散入の赤褐色土B  
(φ30～50mm) 少量立
3. 101K3/1 暗褐色土 L1(φ10mm) 少量立
4. 101K3/2 暗褐色土 L1(φ10mm) 少量立  
白色軽石散入の赤褐色土B  
(φ30～50mm) 少量立



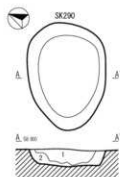
**SK288 土層説明**

1. 101K2/2 赤褐色土 しまり地  
白色軽石散入の赤褐色土B  
(φ30～50mm) 少量立
2. 101K2/3 赤褐色土 しまり地  
L1(φ5～10mm) 少量立



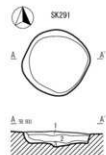
**SK289 土層説明**

1. 101K2/2 暗褐色土
2. 101K2/3 暗褐色土 L1(φ10～20mm) 少量立
3. 101K3/2 暗褐色土 L1(暗褐色土)



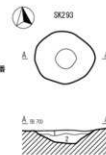
**SK290 土層説明**

1. 101K2/2 暗褐色土 しまり地  
白色軽石散入の赤褐色土B  
(φ30～50mm) 少量立
2. 101K3/2 暗褐色土  
L1(φ10mm) 少量立



**SK291 土層説明**

1. 101K2/2 赤褐色土 L1(暗褐色土) 白色軽石立
2. 101K2/3 赤褐色土 L1(φ10mm) 少量立
3. 101K3/2 赤褐色土 L1(φ10mm) 少量立



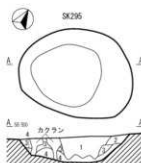
**SK292 土層説明**

1. 101K3/1 暗褐色土 L1(φ10mm) 少量立
2. 101K3/2 暗褐色土  
L1(φ50mm) 少量立



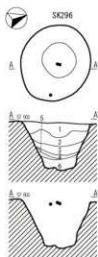
**SK294 土層説明**

1. 101K2/2 赤褐色土  
L1(φ10mm) 少量立
2. 101K3/2 L1(暗褐色土)  
L1(φ10～20mm) 少量立



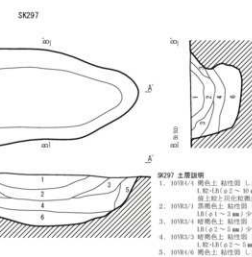
**SK295 土層説明**

1. 101K2/2 赤褐色土 しまり地  
L1(φ10mm) 少量立
2. 101K3/1 暗褐色土  
L1(少量立)
3. 101K3/2 L1(暗褐色土)散入  
赤褐色土散入
4. 101K3/3 暗褐色土 L1(φ10mm) 少量立



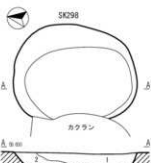
**SK296 土層説明**

1. 101K3/1/1 赤褐色土 粘性強 しまり地  
φ10～20mm/L1(少量立)
2. 101K3/2 赤褐色土 粘性弱 しまり地  
φ10～20mm/L1(少量立)  
L1(少量立)
3. 101K3/3 赤褐色土 粘性強 しまり地  
φ10mm/L1(少量立)



**SK297 土層説明**

1. 101K4/1 赤褐色土 粘性強 しまり地  
L1(φ10～20mm) 少量立
2. 101K4/2 赤褐色土 粘性強 しまり地  
L1(少量立)
3. 101K4/3 赤褐色土 粘性強 しまり地  
φ10mm/L1(少量立)
4. 101K4/4 赤褐色土 粘性強 しまり地  
L1(φ10～20mm) 少量立
5. 101K4/5 赤褐色土 粘性強 しまり地  
L1(少量立)
6. 101K4/6 赤褐色土 粘性強 しまり地  
L1(φ10mm) L1(少量立)

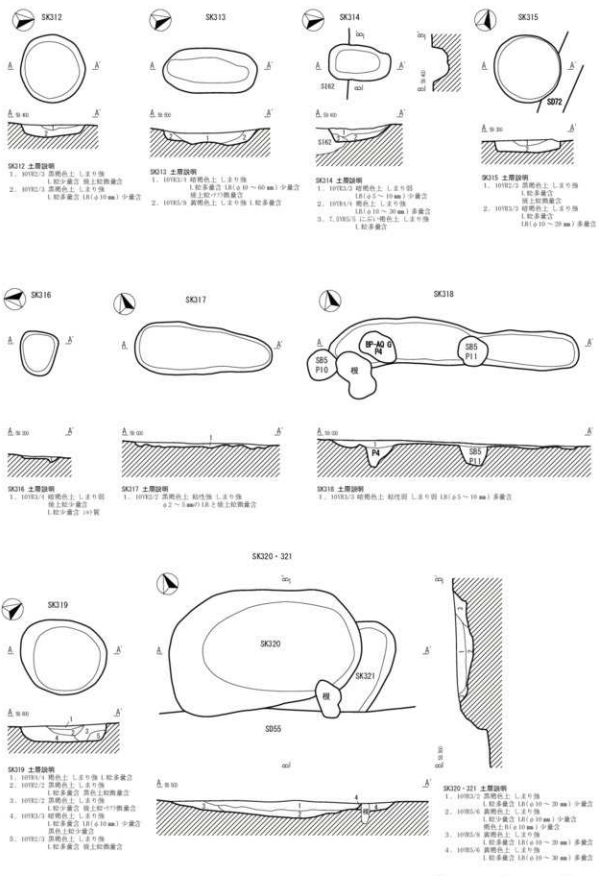


**SK298 土層説明**

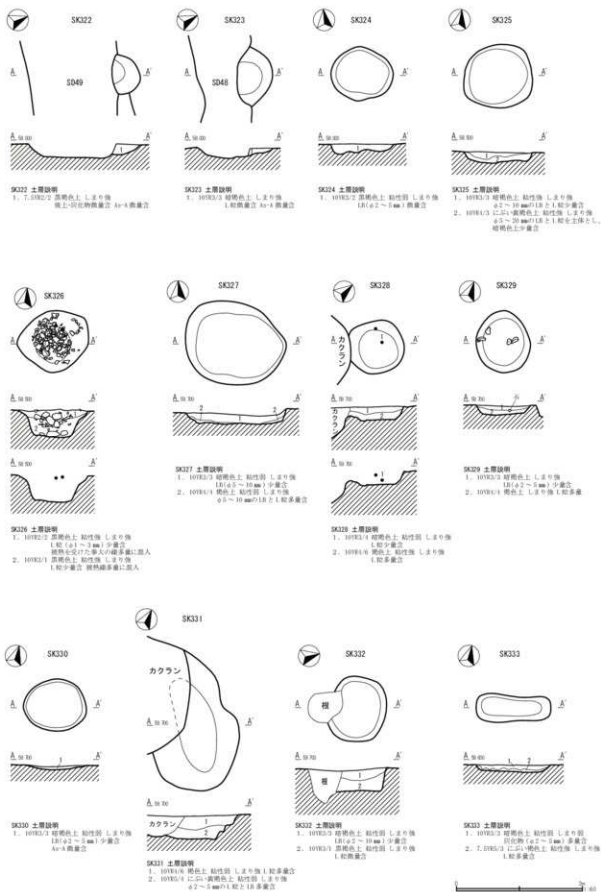
1. 101K4/1 赤褐色土 しまり地  
L1(少量立) 4層
2. 101K4/2 赤褐色土 しまり地  
L1(φ10～20mm) 少量立

第311図 第286～291・293～298号土坑

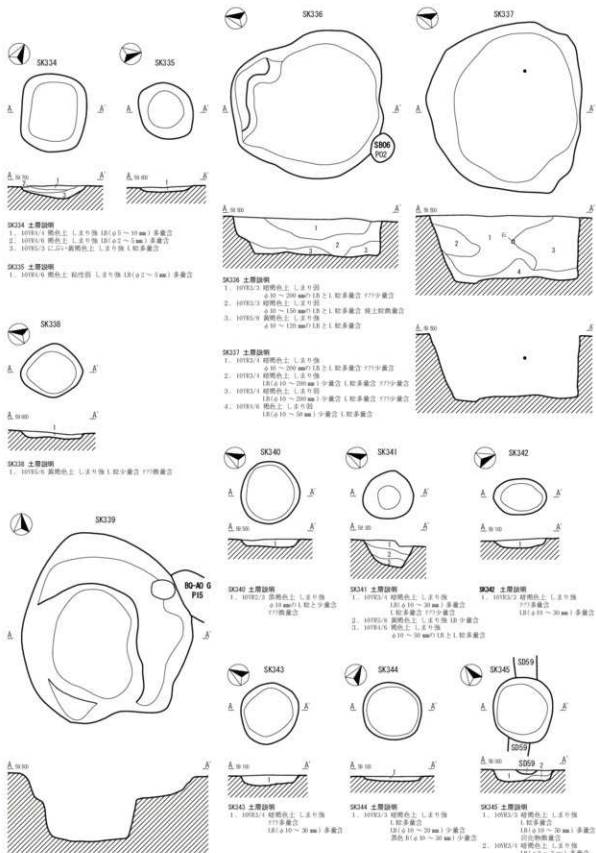




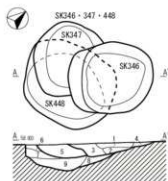
第 313 图 第 312 ~ 321 号土坑



第314図 第322~333号土坑

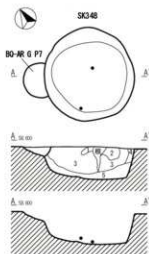


第 315 图 第 334 ~ 345 号土坑



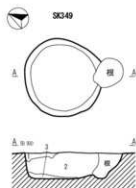
**SK346-347-448 土層説明**

1. 10193/4 褐色土、しまり強
2. 10193/6 均質褐色土、しまり強  
1.8(φ10~20mm)多量全土体之中心
3. 10193/6 褐色土、しまり強
4. 10193/6 均質褐色土、しまり強  
φ10~10mm<sup>1</sup>1.8以上、1.0多量  
均質土上層(φ10~20mm)多量
5. 10193/2 均質褐色土、しまり強
6. 10193/4 褐色土、しまり強、1.0多量
7. 10193/9 均質褐色土、しまり強  
177多量、1.8(φ10~20mm)多量
8. 10193/9 均質褐色土、しまり強
9. 10193/2 均質褐色土、しまり強  
1.8(φ10~20mm)少量、177均量
10. 10193/2 均質褐色土、しまり強  
177多量、1.0多量、1.8(φ10~20mm)少量



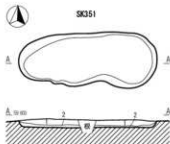
**SK348 土層説明**

1. 10193/1 均質褐色土、しまり強、1.0多量
2. 10193/2 均質褐色土、しまり強、1.0少量
3. 10193/2 均質褐色土、しまり強  
1.0多量、土上均質褐色土
4. 10193/1 褐色土、しまり強、1.0少量
5. 10193/1 褐色土、しまり強  
均質土上層(φ10~20mm)少量



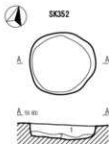
**SK349 土層説明**

1. 10193/1 均質褐色土、しまり強、1.8(φ5mm)均量
2. 10193/4 褐色土、しまり強、1.8(φ2~5mm)多量
3. 10193/2 均質褐色土、しまり強、1.0均量



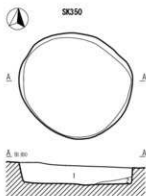
**SK351 土層説明**

1. 10193/2 均質褐色土、粘性弱、しまり強、1.0少量
2. 10193/4 褐色土、粘性弱、しまり強、1.0多量



**SK352 土層説明**

1. 10193/2 均質褐色土、粘性弱、しまり強  
1.8(φ5~20mm)少量、1.0少量
2. 10193/3 12.5以上均質褐色土、粘性強、しまり強  
φ5~20mm<sup>1</sup>1.8以上、1.0全土体之中心、  
均質土上少量



**SK350 土層説明**

1. 10193/4 均質褐色土、粘性弱、しまり強  
1.8(φ10~20mm)少量
2. 10193/4 褐色土、粘性強、しまり強、1.0多量



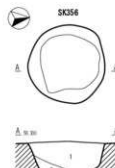
**SK353 土層説明**

1. 10193/6 褐色土、しまり強  
φ10mm<sup>1</sup>1.8以上、1.0少量
2. 10193/9 均質褐色土、しまり強  
1.0多量  
1.8(φ10~20mm)少量



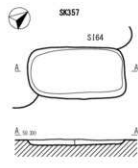
**SK354 土層説明**

1. 10193/4 褐色土、しまり強、1.0少量
2. 10193/1 均質褐色土、しまり強  
1.0少量
3. 10193/2 均質褐色土、しまり強  
1.0少量、1.8(φ20mm)均量



**SK356 土層説明**

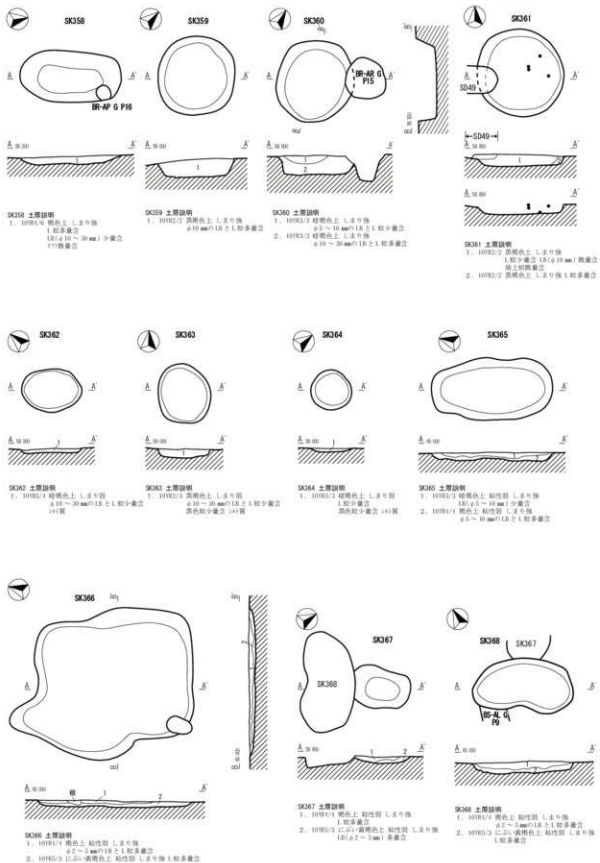
1. 10193/3 均質褐色土、しまり強  
1.0多量  
1.8(φ10~120mm)多量  
177均量
2. 10193/1 均質褐色土、しまり強  
1.0少量、1.8(φ10mm)少量



**SK357 土層説明**

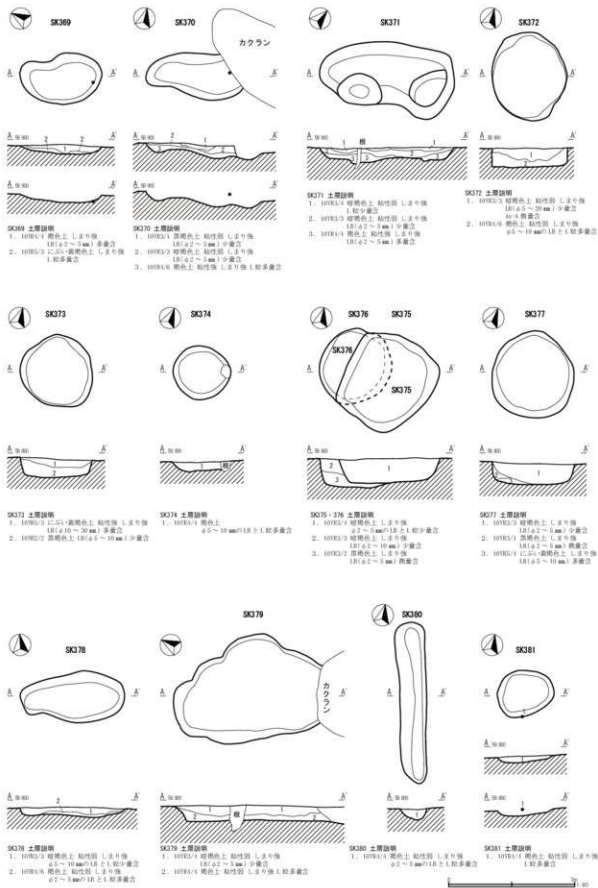
1. 10193/4 褐色土、しまり強  
177均土上、1.0少量

第 316 図 第 346 ~ 354 · 356 · 357 · 448 号土坑



第 317 图 第 358 ~ 368 号土坑





第 318 図 第 369 ~ 381 号土坑



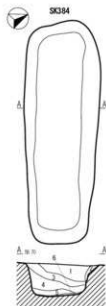
**SK382 土層説明**

1. 1019K/2 赤褐色土、しまり層  
LRI(φ 10 mm) 少量含む 同化物・焼土粒少量含む



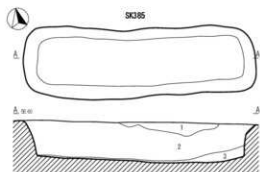
**SK383 土層説明**

1. 1019K/3 土色・黄褐色土、しまり層 Ar-A 少量
2. 1019K/2 赤褐色土、しまり層
3. 1019K/2 赤褐色土、しまり層
4. 1019K/3 褐色土、φ 30 mm L 少量含む



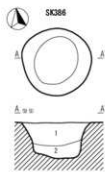
**SK384 土層説明**

1. 1019K/4 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 20 mm) 少量含む
2. 1019K/5 土色・黄褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む、  
赤褐色土少量含む
3. 1019K/3 暗褐色土  
φ 2 ~ 10 mm LRI と赤褐色土少量含む
4. 1019K/6 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む
5. 1019K/3 暗褐色土  
φ 2 ~ 10 mm LRI と赤褐色土少量含む
6. 1019K/7 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) L 少量含む



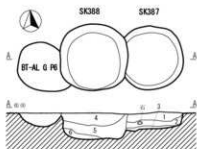
**SK385 土層説明**

1. 1019K/3 暗褐色土、粘性土、しまり層 LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む 赤褐色土少量含む
2. 1019K/4 褐色土、粘性土、しまり層 LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む
3. 1019K/7 褐色土、粘性土、しまり層 φ 2 ~ 3 mm の LRI と砂粒少量含む



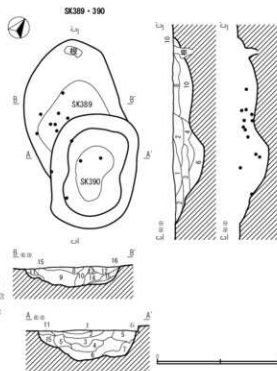
**SK386 土層説明**

1. 1019K/4 暗褐色土、しまり層  
LRI 少量含む 赤褐色土少量含む
2. 1019K/4 暗褐色土、しまり層  
LRI 少量含む LRI(φ 10 ~ 20 mm) 少量含む



**SK387・388 土層説明**

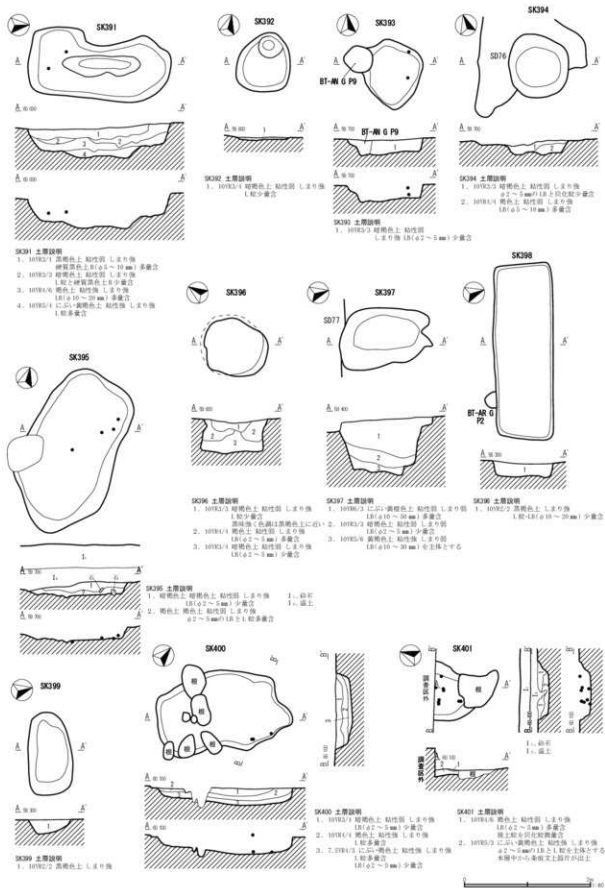
1. 1019K/4 褐色土、粘性土、しまり層  
φ 2 ~ 10 mm の LRI と LRI 少量含む Ar-A 少量含む
2. 1019K/4 土色・黄褐色土、粘性土、しまり層  
φ 10 ~ 20 mm の LRI と LRI 少量含む Ar-A 少量含む
3. 1019K/3 褐色土、粘性土、しまり層 LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む
4. 1019K/4 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む Ar-A 少量含む
5. 1019K/3 暗褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 10 ~ 20 mm) 少量含む Ar-A 少量含む
6. 1019K/3 土色・黄褐色土、粘性土、しまり層  
φ 10 ~ 20 mm の LRI と LRI 少量含む



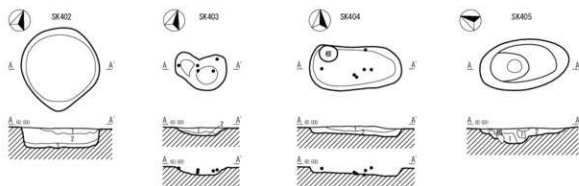
**SK389・390 土層説明**

1. 1019K/4 暗褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
2. 1019K/2 暗褐色土、粘性土、しまり層  
より赤褐色土中心  
φ 2 ~ 3 mm の LRI と LRI 少量含む
3. 1019K/4 褐色土、LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
4. 1019K/3 赤褐色土、粘性土、しまり層  
焼土・赤褐色土 L 少量含む  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む  
LRI 少量含む
5. 1019K/2 土色・黄褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) の LRI と LRI 少量含む
6. 1019K/6 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) LRI と LRI 少量含む
7. 1019K/2 土色・黄褐色土、粘性土、しまり層  
φ 2 ~ 3 mm の LRI と LRI 少量含む
8. 1019K/2 暗褐色土、粘性土、しまり層  
φ 2 ~ 3 mm の LRI と LRI 少量含む
9. 1019K/2 暗褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) LRI と LRI 少量含む
10. 1019K/6 褐色土、LRI(φ 2 ~ 10 mm) 少量含む
11. 1019K/4 暗褐色土、粘性土、しまり層
12. 1019K/6 褐色土、LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
13. 1019K/6 黄褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
14. 1019K/2 土色・黄褐色土  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
15. 1019K/4 褐色土、粘性土、しまり層  
LRI(φ 2 ~ 3 mm) 少量含む
16. 1019K/6 黄褐色土、粘性土、しまり層  
φ 2 ~ 3 mm の LRI と LRI 少量含む

第 319 図 第 382 ~ 390 号土坑



第 320 图 第 391~401 号土坑



**SK402 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
2. 10191/3 紅褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭、空堀心跡あり
3. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚、1.0cm少量炭

**SK403 土層説明**

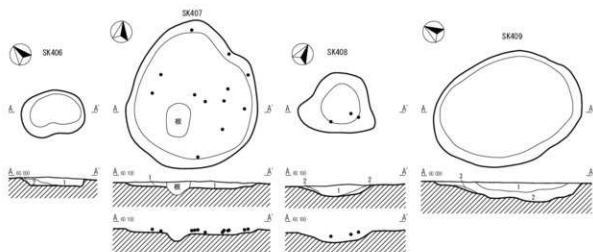
1. 10191/3 暗褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
2. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭

**SK404 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭、暗褐色土に少量炭、  
空堀知れぬ炭
2. 10191/3 白土・黄褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭、同化物 (a.1 ~ 2mm) 少量炭

**SK405 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、  
a.3mm/1.8と1.0cm少量炭
2. 10191/3 白土・黄褐色土、  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭



**SK406 土層説明**

1. 10191/3 紅褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
2. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭

**SK407 土層説明**

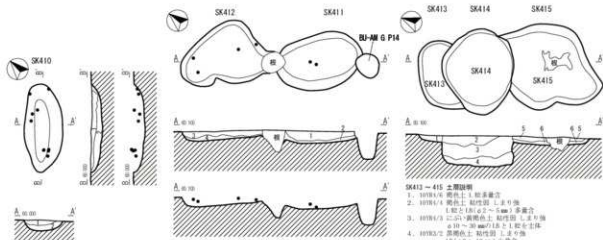
1. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭

**SK408 土層説明**

1. 10191/3 暗褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭
2. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0cm少量炭

**SK409 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
2. 10191/3 暗褐色土、1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
3. 10191/2 白土・黄褐色土、1.0cm少量炭



**SK410 土層説明**

1. 10191/4 暗褐色土、粘性弱、1.5m厚  
177(a.2)黄褐色土、1.5m厚、中心部  
2. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
a.2 ~ 5mm/1.8と1.0cm少量炭  
空堀心跡なし、土層

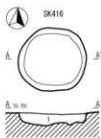
**SK411 ~ 412 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚、1.0cm少量炭
2. 10191/3 白土・黄褐色土、粘性弱、1.5m厚、1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
3. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚、1.0cm少量炭
4. 10191/4 白土・黄褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭、1.0cm少量炭

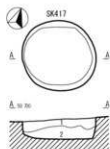
**SK413 ~ 415 土層説明**

1. 10191/4 褐色土、1.0cm少量炭
2. 10191/4 褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.0と1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
3. 10191/3 白土・黄褐色土、粘性弱、1.5m厚  
a.10 ~ 30mm/1.8と1.0cm少量炭
4. 10191/3 黄褐色土、粘性弱、1.5m厚  
1.8(a.2) ~ 19mm) 少量炭
5. 10191/4 褐色土、1.0cm少量炭
6. 7. 10191/4 明褐色土、1.0cm少量炭

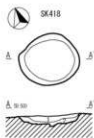
第 321 図 第 402 ~ 415 号土坑



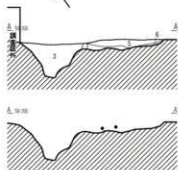
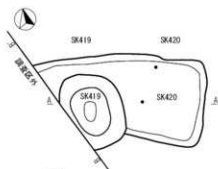
SK416 土層説明  
1. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ10~30mm)少量含



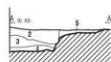
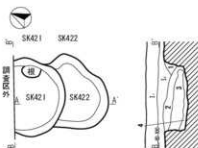
SK417 土層説明  
1. 101R1/4 褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ10~30mm)少量含  
2. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ5~10mm)少量含



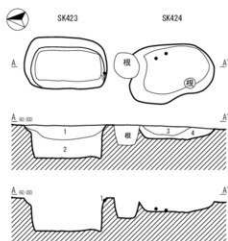
SK418 土層説明  
1. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~5mm)少量含  
2. 101R1/3 二ヶ子層褐色土、粘性弱、しまり強  
φ2~5mm/LB 2.1 粒少量含



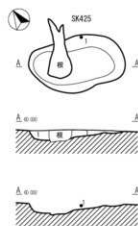
SK419・420 土層説明  
1. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~10mm)少量含  
2. 101R2/3 二ヶ子層褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ5~10mm)少量含  
3. 101R1/4 褐色土  
LB(φ2~10mm)少量含  
4. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ10~30mm)少量含  
5. 101R2/1 泥褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~3mm)少量含  
6. 101R1/4 褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~10mm)少量含  
7. 101R2/2 泥褐色土、粘性弱、しまり強  
1. 粘土  
2. 腐土



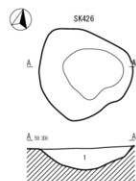
SK421・422 土層説明  
1. 101R1/6 褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ5~10mm)少量含  
2. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~5mm)少量含  
3. 101R2/4 二ヶ子層褐色土、粘性弱、しまり強  
φ5~20mm/LB 2.1 粒土主体  
4. 101R2/1 泥褐色土、粘性弱、しまり強  
LB(φ2~5mm)少量含  
5. 101R1/4 褐色土、粘性弱、しまり強  
φ2~5mm/LB 2.1 粒土少量含  
1. 粘土  
2. 腐土



SK423・424 土層説明  
1. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強 LB(φ2~5mm)少量含  
2. 101R2/4 粘褐色土、粘性弱、しまり強 LB(φ2~5mm)少量含  
3. 101R2/3 粘褐色土、粘性弱、しまり強 LB(φ2~5mm)少量含  
4. 101R1/6 褐色土、粘性弱、しまり強 LB(φ2~10mm)少量含

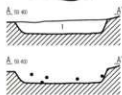
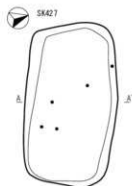


SK425 土層説明  
1. 101R1/4 褐色土、粘性弱、しまり強  
φ5~10mm/LB 2.1 粒少量含

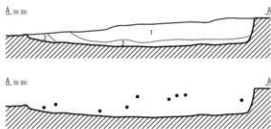
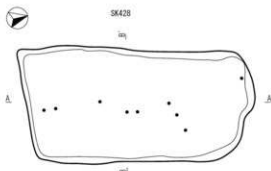


SK426 土層説明  
1. 101R2/4 粘褐色土、しまり強  
1. 粘少量含、褐色粒少量含(14)粒

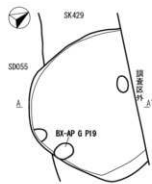
第 322 図 第 416 ~ 426 号土坑



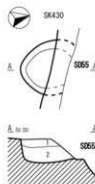
SK427 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
② 10 ~ 20 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含  
④ 質



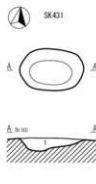
SK428 土層説明  
1. 10YR2/3 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 灰色粗多量含 ④ 質  
2. 10YR2/3 暗褐色土、L、中層  
L、粗少量含 灰色粗多量含 ④ 質  
3. 10YR3/3 暗褐色土、L、中層  
② 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含  
④ 質  
4. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
② 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含  
④ 質



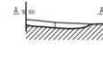
SK429 土層説明  
1. 10YR3/3 暗褐色土、L、中層 L、粗少量含 ⑦ 77少量含 ④ 質  
2. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
10 ~ 30 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含 ⑦ 77多量含  
灰色粗多量含 ④ 質  
3. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
② 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含 ④ 質  
4. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 L土(φ 10 ~ 20 mm) 少量含 ⑦ 77少量含 ④ 質



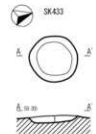
SK430 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含  
S土(φ 10 ~ 20 mm) 少量含  
⑦ 77少量含 ④ 質  
2. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗少量含 ④ 質



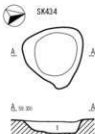
SK431 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 灰色粗少量含 ④ 質



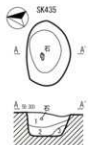
SK432 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含  
灰色粗多量含 ④ 質



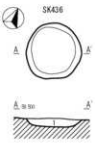
SK433 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含  
灰色粗多量含 ④ 質



SK434 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 ⑦ 77多量含  
灰色粗多量含 ④ 質



SK435 土層説明  
1. 10YR2/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 L土(φ 10 ~ 30 mm) 少量含  
⑦ 77多量含 ④ 質  
2. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
② 10 ~ 30 mm<sup>2</sup> L土、L、粗多量含 ④ 質  
3. 10YR3/4 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含  
L土(φ 10 ~ 20 mm) 少量含 ④ 質



SK436 土層説明  
1. 10YR2/3 暗褐色土、L、中層  
L、粗多量含 ⑦ 77少量含  
灰色粗少量含 ④ 質



第 323 图 第 427 ~ 436 号土坑



第 83 表 土坑計測表

No.	位置	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
001	AK-AQ	I B	0.75以上	0.89	0.13	なし		不詳	
002	AK-AQ	IV B	2.73	0.67	0.50	漆器碎片、土師器・埴、 縄文土器、礎		18世紀末以降	A1-A層土層入
003	AK-AQ	IV B	1.60	0.72	0.18	漆器碎片、土師器、礎		18世紀末以降	A1-A層土層入
004	AK-AQ	IV B	2.67以上	1.06	0.18	漆器碎片、土師器、 縄文土器、礎		18世紀末以降	A1-A層土層入
005	AK-AQ	I C	1.16	1.02	0.13	土師器		9世紀	
006	AK-AQ	IV B	1.71	0.59	0.10	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
007	AK-AQ	I B	1.27	0.78	0.17	縄文土器		18世紀末以降	加賀社1式 ほぼ寄居の厚鉢
008	AK-AQ	IV B	2.35	1.09	0.14	なし		18世紀末以降	古時代か
009	AK-AQ	I B	1.11	0.87	0.14	なし		不詳	
010	AK-AQ	III B	0.75	0.64	0.09	く字口継土師器		古代中期	方形の厚鉢、原は残本
011	AK-AQ	IV B	1.62	0.85	0.47	新戸常連瓦葺		18世紀	
012	AK-AQ	I B	0.88	0.97	0.11	なし		不詳	
013	AK-AQ	IV B	1.46	0.86	0.64	漆器器身碎片、土師器		18世紀末以降	A1-A層土層入
014	AK-AL	IV C	1.81	0.82	0.57	指環		18世紀末以降	A1-A層土層入
015	AK-AP	IV B	2.12以上	1.28	0.29	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
016	AK-AJ	II C	2.57	1.14	0.45	石皿		不詳	
017	AK-AJ	I C	0.74	0.33以上	0.14	なし		8X18より古い	不詳
018	AK-AJ	III B	0.80	0.86	0.37	礎		8X17より新しい	縄器出土
019	AK-AJ	IV B	2.01	0.74	0.23	漆器土製片、礎		18世紀末以降	A1-A層土層入
020	AK-AJ	IV C	2.08	0.84	0.59	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
021	AK-AR	II C	1.66	1.32	0.46	新戸常連瓦葺		19世紀	A1-A層土層入
022	AK-AR	IV B	1.26	0.86	0.60	土師器、礎		18世紀末以降	A1-A層土層入
023	AK-AT-AR	II C	1.58	0.94	0.52	なし		不詳	原を埋め込まれる
024	AK-AR	II B	1.26	0.94	0.19	なし		不詳	
025	AK-AP	II B	0.90	0.68	0.23	土師器片		古代中期	下層は黒色土で覆い、この層より土師器出土
026	AK-AJ	I C	0.78	0.68	0.12	なし		不詳	
027	AK-AJ	I C	0.65	0.49	0.04	なし		不詳	
028	AK-AL	II C	2.27	0.89	0.31	なし		不詳	
029	AK-AL	IV C	0.27以上	0.23	0.19	礎		不詳	
030	AK-AR	II C	1.48	0.96	0.79	なし		不詳	
031	AK-AR	IV B	0.88	0.54	0.19	漆器器身		1019より古い	古代中期
032	AK-AP	I B	0.52	0.50	0.19	土師器		不詳	古代中期
033	AK-AL	II E	2.14	1.17	0.20	なし		不詳	
034	AK-AR	III F	1.26	1.03	0.29	なし		不詳	
035	AK-AP	II C	1.39	0.93	0.45	なし		不詳	
036	AK-AQ	IV C	1.73	1.25	0.98	なし		1114より新しい	不詳
037	AK-AP	I B	1.48	1.33	0.28	漆器器身、土師器片		不詳	古代中期
038	AK-AP	I B	1.60	1.60	0.29	漆器器身		不詳	古代中期
039	AK-AT-AR	II C	1.42	1.01	0.28	なし		不詳	
040	AK-AT-AR	II C	1.60	1.25	0.22	なし		不詳	
041	AK-AP	III B	1.58	1.39	0.19	土師器台付		不詳	古代中期
042	AK-AQ	I B	0.46以上	1.39	0.09	なし		不詳	
043	AK-AP	I C	1.71	1.10	0.18	土師器、熱線		不詳	古代中期
044	AK-AP	IV D	1.54	1.09	0.80	なし		不詳	
045	AK-AQ	I C	0.84	0.87	0.12	土師器		不詳	古代中期
046	AK-AQ	II C	1.58	1.18	0.26	土師器、礎		不詳	古代中期
047	AK-AP	IV B	1.20	0.54以上	0.29	土師器・埴、土師器器蓋		古代中期	南側1/2以上が調査区外となる
048	AK-AQ	I C	1.33	1.19	0.46	なし		1118より新しい	不詳
049	AK-AL	I E	1.91以上	2.59	0.37	漆器器身・埴、土師器		1108・107より古い	古代中期
050	AK-AR	I E	0.89	0.96	0.13	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
051	AK-AR	III C	1.59	1.39	0.55	なし		1124より新しい	不詳
052	AK-AL	I B	0.80	0.89	0.20	なし		不詳	方形土坑
053	AK-AR	I D	1.72	1.37	0.44	礎		不詳	
054	AK-AQ	I B	1.24	1.09	0.15	なし		不詳	
055	AK-AT	I B	1.28	1.14	0.12	なし		不詳	
056	AK-AL	I B	1.28	0.81以上	0.22	なし		不詳	北側が調査区外となる
057	AK-AR	I B	1.13	1.06	0.16	なし		不詳	
058	AK-AR	I B	0.84	0.81	0.28	漆器器身、土師器		1141より新しい	古代中期
059	AK-AR	I B	1.07	0.96	0.56	漆器器身、土師器、瓦葺		1141より新しい	古代中期
060	AK-AR	I C	0.89	0.85	0.32	なし		不詳	
061	AK-AR	I C	1.51	0.89	0.23	なし		1146より新しい	不詳
062	AK-AR	I C	0.79	0.58	0.45	なし		不詳	
063	AK-AR	II B	1.38	1.09	0.18	打製石片		不詳	
064	AK-AR	I B	0.81	0.89	0.13	なし		不詳	
065	AK-AR	I F	1.68	1.38	0.29	なし		不詳	
066	AK-AR	I F	1.11	0.90	0.12	縄文土器		1067・105より新しく、 107より古い	野鳥式
067	AK-AR	I B	1.06	0.97	0.08	なし		1066より古い	不詳
068	AK-AR	I B	1.07	0.96	0.19	なし		不詳	
069	AK-AR	II C	2.31	1.75	0.62	縄文土器、石皿、 漆器器身、土師器		古代中期	
070	AK-AR	I B	1.14	1.08	0.16	なし		不詳	
071	AK-AR	III B	1.40	1.24	0.49	打製石片		1074より新しい	18世紀末以降
072	AK-AR	I B	1.27	1.19	0.18	なし		107より古い	不詳
073	AK-AR	I C	1.07	0.97	0.17	なし		不詳	
074	AK-AR	II B	1.24	1.29	0.18	礎		不詳	
075	AK-AR	I F	1.04	0.88	0.19	なし		不詳	
076	AK-AR	I B	1.19	1.00	0.08	なし		107より古い	不詳
077	AK-AR	I B	1.46	1.29	0.15	なし		不詳	
078	AK-AR	I B	0.89	0.80	0.22	なし		不詳	
079	AK-AR	I B	1.48	1.42	0.29	打製石片、縄文土器		1075・1080より新しく、 1074より古い	野鳥式
080	AK-AR	II D	2.39	1.54	0.65	縄文土器		1074・1079より古い	野鳥式



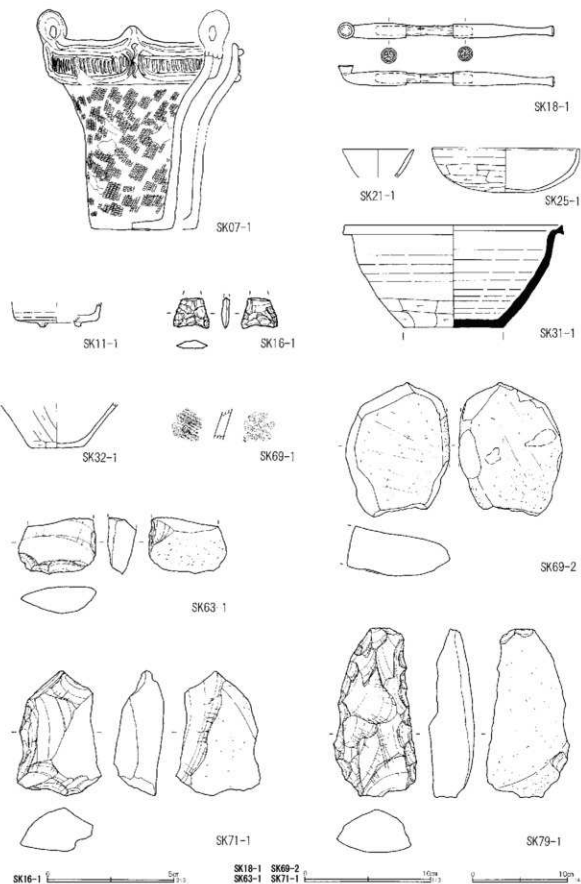
No.	位置	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
081	B0-A0	I B	1.27	1.21	0.23	なし		不詳	
082	B0-A0	IV B	3.45	0.65	0.06	なし	0223より古い	不詳	長方形の大型土坑
083	B0-A0	I B	0.99	0.95	0.19	なし		不詳	
084	B0-A0	I B	0.83	0.82	0.07	縄文土器		不詳	野鳥式
085	B0-A0	I B	1.43以上	1.36	0.56	なし	SK86・SK109より古い	不詳	
086	B0-A0	IV B	1.36	0.92	0.28	なし	SK85・SK109より新しい	不詳	
087	B0-A0	I C	0.79	0.71	0.18	なし		不詳	
088	B0-A7	II C	1.43	1.07	0.31	跡石片岩多量		不詳	
089	B0-A0	I C	0.81	0.72	0.34	なし		不詳	
090	B1-AX	II C	1.73以上	1.23	0.54	縄文土器、須恵器片、土師器、新戸式土器、須恵器、新戸式土器、須恵器、新戸式土器		18世紀末以降	A1-A多量混入
091	B1-AK・AL	V B	1.40	1.38	0.20	なし	SK92より古い	不詳	
092	B1-AK・AL	V B	2.01	1.46	0.21	なし	SK91より新しい	不詳	
093	B1-AL	I B	1.80	0.96	0.17	なし		不詳	
094	B1-AL	I C	1.38	1.28	0.32	縄文土器、土師器、縄		古代	
095	B1-AL	II D	0.63	0.40	0.24	須恵器		古代	
096	B1-AL	II D	0.85	0.51	0.40	なし		不詳	
097	B1-AM	I C	1.21	0.81以上	0.18	なし	0173より新しく、P15より古い	不詳	
098	B1-AM	II B	1.55以上	1.15	0.99	縄文土器、土師器、縄	0172・SK99より古い	古代	
099	B1-AM	II C	0.82	0.69	0.27	なし	SK98より新しい	不詳	
100	B1-AM	I B	1.21	1.14	0.30	縄文土器、石器	0173より古い	野鳥式	黒褐色土を多量にまじり有り
101	B1-AM	II C	0.87	0.70	0.26	なし	0173より新しい	不詳	
102	B1-AM	II C	0.97	0.73	0.25	縄文土器		野鳥式	
103	B1-AM	II C	0.89	0.64	0.19	縄文土器、土師器、須恵器片		古代中期	
104	B1-AM	IV B	1.90	1.46	0.09	縄文土器		野鳥式	
105	B1-BJ-AM	I C	0.75	0.75	0.21	土師器、須恵器、須恵器片、土師器		古代中期	
106	B1-AN	I C	1.15	1.12	0.27	縄文土器	0154より新しい	古代中期	
107	B1-A0	I B	0.92	0.72以上	0.08	土師器	0223より古い	18世紀末以降	A1-A層土混入
108	B1-A0	II C	4.01	1.56	0.65	縄文土器、縄	0223・04より古い	野鳥式	最下層黒褐色土を黒褐色土を多量にまじり有り
109	B1-A0	II D	1.46以上	1.13	0.35	なし	SK87より新しく、SK86より古い	不詳	
110	B1-A0	I C	1.11	0.84	0.29	なし		不詳	
111	B1-AP	I A	1.30	1.28	0.29	須恵器、土師器		古代	
112	B1-AP	I C	0.84	0.83	0.11	土師器、縄		古代中期	
113	B1-AP	I B	0.80	0.75	0.08	土師器		古代中期	
114	B1-AS	IV B	2.59	0.97	0.45	縄文土器	SK115より新しい	18世紀末以降	A1-A層土混入
115	B1-AS	I B	1.24	0.77以上	0.40	なし	0204・SK114・SK118より古い	不詳	
116	B1-AS	IV B	2.49	1.04	0.37	なし	SK115・SK117より新しく、SK124より古い	18世紀末以降	A1-A層土混入
117	B1-AS	I C	1.33	0.87以上	0.34	土師器、須恵器片、縄	0224・SK116より古い	古代前期	
118	B1-AS・AT	IV B	1.29以上	1.20	0.48	石片、須恵器、土師器	0334・SK119・SK151より古い	近世	
119	B1・BJ-AT	III B	1.33	1.03	0.48	縄文土器	SK118より新しく、SK162より古い	18世紀末以降	A1-A層土混入
120	B1-AU	II B	1.48	1.12	0.13	なし	0240より新しい	不詳	
121	B1-AU	I B	1.10	0.99	0.23	なし	0238より新しい	不詳	
122	B1-AK	II C	0.78以上	0.73	0.10	縄文土器	P4より古い	野鳥式	北側が調査区外となる
123	B1-AK	V B	1.54	0.80以上	0.06	なし	P7より新しい	不詳	北側が調査区外となる
124	B1-AM	I B	0.91	0.77	0.14	縄文土器	P11(6a)より古い	野鳥式	
125	B1-AK・AL	I B	1.01	1.00	0.20	縄文土器、須恵器片、土師器		18世紀末以降	A1-A層土混入
126	B1-AL	I B	0.97	0.90	0.15	縄文土器	0167より新しい	18世紀末以降	A1-A層土混入
127	B1-AL	II B	1.09	0.90	0.10	須恵器片、土師器		古代	
128	B1-AL	II B	1.65	1.12	0.14	土師器	0159より新しく、0159より古い	18世紀後半	A1-A層土混入
129	B1-AL	II B	0.97	0.64	0.14	新戸式土器、須恵器片、土師器		18世紀中～後半	
130	B1-AM	II C	1.80	0.87	0.16	石片、磨石、縄文土器、土師器		野鳥式	
131	B1-AM	II C	1.80	0.86	0.23	縄文土器		野鳥式	
132	B1-AM	I B	0.71	0.68	0.10	縄文土器		野鳥式	
133	B1-AM	II C	0.96	0.50	0.06	縄文土器、須恵器片、縄		古代中期	
134	B1-AM	II C	1.78	0.88	0.07	石片、縄文土器		野鳥式	
135	B1-AN	II B	1.26	0.85	0.17	縄文土器、黒曜石片、縄	SK136より新しい	野鳥式	
136	B1-AN	IV B	1.51以上	0.86	0.13	縄文土器	SK135より古い	野鳥式	
137	B1-AN	II B	1.35	0.95	0.10	縄文土器、黒曜石片、縄	SK140より古い	野鳥式	
138									欠番
139	B1-AN	I B	0.81	0.82	0.09	なし	SK140より新しい	不詳	
140	B1-AN	I B	0.82	0.76	0.13	土師器	SK139より古い	古代	
141	B1・BJ-AN	I F	1.18	1.16	0.74	須恵器片、土師器	0154より新しく、0202より古い	18世紀末以降	A1-A層土混入
142	B1-AN	I B	1.54	1.47	0.46	縄文土器、須恵器片、土師器、縄	0154より新しく、0223より古い	古代	
143	B1・BJ-A0	I B	0.99	0.97	0.97	須恵器片、縄		9世紀	
144	B1-A0	I B	1.69	1.60以上	0.53	黒曜石多量、須恵器片、土師器	0153より新しく、0274より古い	中世	中世の大型円形土坑で、黒曜石多量
145	B1-A0	IV D	1.12	0.86	0.36	須恵器片、土師器		古代中期	
146	B1-A0	I C	0.77	0.70	0.19	なし		不詳	
147	B1-BK-A0	I B	1.01	0.88	0.23	須恵器片、土師器		古代中期	
148	B1-AP	I A	1.10	1.10	0.27	須恵器片、土師器		18世紀後半	調査位置付
149	B1-AS	I B	1.30	1.18	0.30	なし	0234より古い	不詳	

No.	位置	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
150	B1-AS	I C	1.19	1.17	0.28	石鏝		18世紀末以降	A-F-A層土混入
151	B1-AS-AT	I C	1.32	1.30	0.52	羽簀	BK18より新しく、 S24・S41より古い	18世紀末以降	A-F-A層土混入
152	B1-AS-AT	I C	1.32	0.45以上	0.45	なし	BK19・S24より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
153	B1-AT	I C	1.52	1.41	0.24	透き器片		古代前期	
154	B1-B1-A1	I B	0.91	0.78	0.04	縄文土器		断山式	
155	B1-A1	II C	1.13	0.87	0.11	なし	S219より古い	不詳	
156	B1-A1	I C	1.07	1.07	0.26	鏝		不詳	
157	B1-A1-AP	I C	0.98	0.93	0.28	なし		不詳	
158	B1-BK-AK	II B	1.40	0.83	0.13	なし	B171・SK159より新しく、 P8より古い	18世紀末以降	A-F-A層土混入
159	B1-BK-AK	I B	1.10	1.07	0.37	縄文土器、土師器鍔、 瀬戸黄瀬系陶器丸瓶、 肥前系陶器(毛目瓶)	BK158・P8より古い	18世紀中～後半	A-F-A層土混入
160	BK-AK-AL	V B	1.47以上	0.56以上	0.08	なし	B171より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
161	BK-AK-AL	I C	1.46	1.57	0.29	縄文土器、土師器鍔	P3、 P27・28・29 より古い	18世紀後半	
162	BK-AL	II C	1.31	0.91	0.13	瀬戸黄瀬系陶器線筒埴 ほうろく、肥前磁器器		18世紀後半	
163	BK-AL	II B	1.42	0.58	0.13	磁器品	P32より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
164	BK-AL	II B	1.35	0.83	0.51	かわらけ、 瀬戸黄瀬系陶器向口、 肥前系陶器丸瓶、 志戸系陶器漆器、鉄釘、 銅釘	P32より新しい	18世紀後半	
165	BK-AL	II B	1.27	1.04	0.97	縄文土器、石皿、磨石		断山式	断山式骨杖
166	BK-A1	I B	1.22	1.08	0.79	なし	B178より新しい	不詳	
167	BK-AM	I B	0.87	0.78	0.05	なし		不詳	
168	BK-AM	I C	1.19	0.92	0.15	縄文土器、鏝		野鳥式	
169	BK-AN	III C	1.24	1.09	0.16	透き器片、土師器鍔、 縄文土器、鏝		古代中期	
170	BK-AN	II B	0.46以上	0.70	0.20	土師器鍔		古代前期	南側の調査区外となる
171	BK-AN	II B	1.01	0.80	0.41	なし	S232より古い	不詳	北側の調査区外となる
172	BK-AO	I C	0.57	0.56	0.45	縄文土器、土師器片・鏝		古代前期	
173	BK-AP	II B	1.77	1.28	0.35	透き器片、土師器鍔		古代前期	
174	BK-AS	I B	0.77	0.70	0.05	土師器鍔		古代	
175	BK-AS	I C	0.95	0.89	0.12	土師器鍔		古代	
176	BK-AT	I B	1.06	0.95	0.06	透き器鍔、土師器鍔		古代	
177	BK-AT	I B	0.95	0.84	0.07	なし		18世紀末以降	A-F-A層土混入
178	BK-AU	I B	1.00	0.92	0.20	なし	S243より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
179	BK-AU	I B	0.74	0.69	0.05	鏝	S242より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
180	BK-AV	IV C	1.52	1.04	0.32	なし		18世紀末以降	A-F-A層土混入
181	BK-AL	I C	1.41	1.26	0.11	土師器鍔	BK18より新しい	18世紀末以降	A-F-A層土混入
182	BK-AL	IV B	1.00	0.57	0.34	縄文土器	BK18より古い	18世紀末以降	A-F-A層土混入
183	BK-AL	I B	0.89	0.89	0.06	なし	P11より古い	不詳	
184	BK-AM	I B	1.05	0.98	0.19	透き器鍔、土師器片・鏝		古代	
185	BK-AM	I D	1.86	1.50	0.80	かわらけ、ほうろく、 瀬戸黄瀬系陶器丸瓶、 肥前系陶器(毛目瓶)		18世紀後半	
186	BK-AM	I C	0.95	0.78	0.18	土師器鍔、鏝		古代	
187	BK-AM	I C	1.28	1.16	0.21	なし	P19より新しく、 S263(18末以降)より古い	18世紀中～後半	
188	BK-AM	II B	0.70以上	0.44	0.09	なし	S263(18末以降) より古い	18世紀後半	A-F-A層土混入
189	BK-AM	II B	0.89以上	0.66	0.09	なし	S265(18末以降) より古い	18世紀後半	A-F-A層土混入
190	BK-AM	II B	1.10	0.91	0.05	なし	S266(18末以降) より新しい	19世紀	A-F-A層土混入
191	BK-AM	IV B	0.85以上	0.70	0.16	なし	BK192より新しく、 S268(18末以降)より古い	18世紀中～後半	
192	BK-AM	I B	0.84	0.77	0.07	なし	BK191より古い	18世紀中	
193	BK-AM	I E	0.96	0.91	0.20	なし	S265より新しい	19世紀	A-F-A層土混入
194	BK-AN	II B	1.31以上	1.18	0.08	なし	S265より古い	18世紀後半	A-F-A層土混入
195	BK-AN	I C	1.19	1.01	0.19	縄文土器		野鳥式	
196	BK-AN	I E	1.18	1.05	0.17	土師器鍔、縄文土器、鏝		古代	
197	BK-AN	II B	0.76	0.43	0.07	なし	P25より古い	不詳	
198	BK-AN	V F	1.37	1.04	0.78	縄文土器、 肥前系磁器漆器付くわらん小瓶、 瀬戸黄瀬系陶器線筒埴		18世紀後半	
199	BK-AN	II B	0.76以上	0.58	0.11	なし		不詳	南側の調査区外となる
200	BK-AN	I B	0.76	0.66	0.10	土師器鍔		18世紀末以降	A-F-A層土混入
201	BK-AO	I B	1.00	0.82	0.24	透き器片		古代前期	
202	BK-AP	I B	1.24	1.21	0.26	透き器片、土師器鍔		古代前期	
203	BK-AP	I B	1.24	1.21	0.32	陶器系 青磁湯井文箱 15号		13世紀	
204	BK-AQ	I C	1.27	1.14	0.27	なし		不詳	
205	BK-AQ	I C	0.87	0.85	0.24	なし		不詳	
206	BK-AQ	II C	1.87	1.41	0.21	縄文土器、透き器片、 土師器鍔		古代中期	
207	BK-AR	I B	1.13	1.08	0.17	透き器片、土師器片		古代前期	
208	BK-AT	II C	1.45	1.19	0.41	なし		不詳	
209	BK-AU	II C	1.78	1.65	0.77	なし		不詳	
210	BM-AL	I B	1.10	0.95	0.17	なし		18世紀末以降	A-F-A層土混入
211	BM-AM	II C	2.17以上	0.91	0.24	土師器鍔	BK219より新しく、 BK17より古い	18世紀末以降	A-F-A層土混入
212	BM-AM	IV C	1.44	1.00	0.20	なし	BK211・B17より新しい	19世紀	A-F-A層土混入

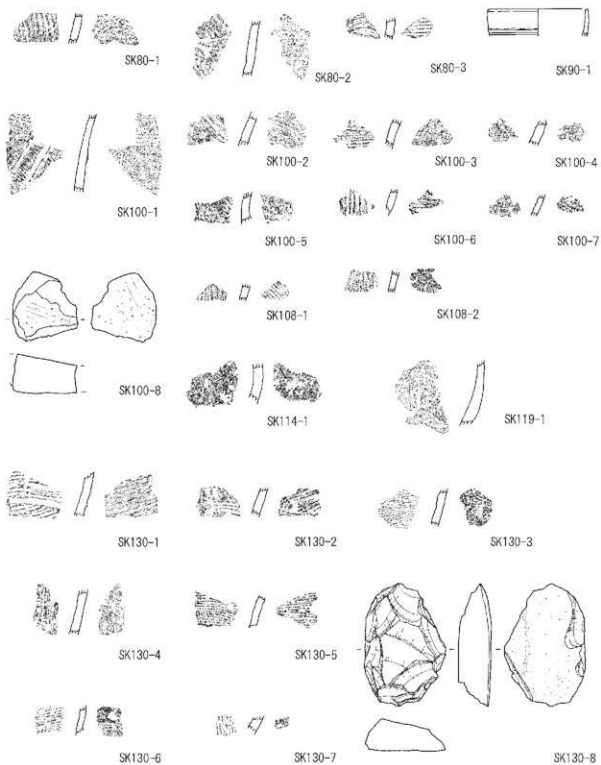
No.	位置	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
213	SW-AP	円形	0.42以上	0.53	0.04	なし	SK212より古い	18世紀後半	
214	SW-AP	円形	0.62	0.80	0.09	なし		不詳	
215	SW-AP	円形	1.04	0.86	0.14	縄文土器、土師器		不詳	
216	SW-AP	円形	2.47	1.03	0.06	なし		19世紀	
217	SW-AP	円形	1.08	0.90以上	0.17	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
218	SW-AP	円形	1.29	1.27	0.22	土師器鉢・脚部円形透かし、 鏝		五瓣式	
219	SW-AP	円形	1.16	1.06	0.51	須恵器鉢、土師器鉢、 黒曜石割片、縄文土器	SK71(19C末以降)より 古い	古代中期	
220	SW-AP	V形	0.94	0.45以上	0.11	なし		不詳	
221	SW-AP	円形	0.86	0.61	0.24	なし		不詳	
222	SW-AP	円形	0.73	0.68	0.22	須恵器鉢、土師器鉢		19世紀前半	
223	SW-AP	円形	0.80	0.63	0.18	打製石斧		不詳	
224	SW-AP	円形	1.41	1.18	0.09	取手		不詳	
225	SW-AP	円形	1.21	1.18	0.19	土師器鉢		古代	
226	SW-AP	円形	1.29	1.29	0.23	土師器鉢		古代中期	
227	SW-AP	円形	0.79	0.62	0.27	胡麻種子、常滑焼	PIより古い	中世	
228	SW-AJ	円形	1.18	1.11	0.13	縄文土器		野島式	
229	SW-AJ	円形	1.14	0.97	0.12	なし		不詳	
230	SW-AJ	円形	1.25	1.20	0.28	燧石、黒曜石		不詳	
231	SW-AJ	円形	1.38	1.17	0.35	土師器鉢		古代	後面を埋められる
232	SW-AR	円形	1.63	0.96	0.50	なし		不詳	
233	SW-AR	円形	0.70	0.58	0.15	なし		不詳	
234	SW-AR	円形	0.71以上	0.60以上	0.10	なし	SK235・236より古い	18世紀後半	
235	SW-AR	円形	0.71以上	1.11	0.11	なし	SK237より新しい、 SK236より新しく、 SK237より新しく、 SK237より古い	18世紀末以降	A1-A層土層入
236	SW-AR	円形	1.09	0.70以上	0.06	なし	SK236より新しく、 SK237より古い	18世紀後半	
237	SW-AR	円形	1.53	1.35	0.30	縄文土器		18世紀後半	
238	SW-AR	円形	1.25	1.06	0.39	なし		不詳	
239	SW-AR	円形	1.41	0.96	0.14	なし		不詳	
240	SW-AR	円形	1.56	0.63	0.16	なし		不詳	
241	SW-AR	円形	0.97	0.81	0.19	縄文土器、土師器		古代	
242	SW-AP	円形	0.97	0.92	0.28	須恵器鉢、土師器鉢、 黒曜石割片		古代中期	断面の形状
243	SW-AP	円形	1.36	0.63以上	0.65	須恵器鉢・高須瓶・壺・甕、 土師器鉢・甕		古代中期	断面の形状
244	SW-AP	円形	0.86	0.60	0.14	なし		不詳	
245	SW-AP	円形	0.84	0.59	0.14	なし		不詳	
246	SW-AP	円形	1.24	1.21	0.35	土師器鉢・杯		古代中期	
247	SW-AP	V形	1.19	0.85以上	0.14	須恵器鉢、土師器鉢・杯		古代	
248	SW-AP	円形	1.08	0.61	0.20	なし		不詳	
249	SW-AP	円形	1.32	1.17	0.17	なし		不詳	
250	SW-AP	円形	0.88	0.83	0.68	土師器鉢・杯、縄文土器、 鏝		古代中期	
251	SW-AP	円形	1.37	1.25	0.45	縄文土器、石斧、 黒曜石割片、鏝		野島式	
252	SW-AP	円形	1.10	0.86	0.19	須恵器鉢、土師器鉢、 燧石		古代中期	
253	SW-AP	円形	1.37	1.13	0.10	須恵器鉢、土師器鉢		古代中期	
254	SW-AP	円形	1.36	1.15	0.12	須恵器鉢、土師器鉢		古代中期	
255	SW-AP	円形	1.36	1.27	0.47	須恵器鉢、土師器鉢・杯	SK241より古い	古代中期	
256	SW-AP	円形	1.38	1.30	0.23	土師器鉢、鏝		古代中期	
257	SW-AP	円形	1.27	1.01	0.16	なし	SK258より新しい	不詳	
258	SW-AP	円形	1.73	1.61	0.12	なし	SK257より古い	不詳	
259	SW-AP	円形	1.56	1.51	0.10	なし		不詳	
260	SW-AS	円形	1.22	0.83	0.22	土師器鉢、チャート割片、 鏝		古代中期	
261	SW-AS	円形	1.10	0.69	0.32	なし		不詳	
262	SW-AY	円形	2.52	1.95	0.42	なし	SK249より古い	不詳	
263	SW-AP	円形	0.89	0.78	0.27	須恵器鉢		古代中期	
264	SW-AP	円形	2.18	1.46	0.42	縄文土器、打製石斧		野島式	
265	SW-AP	円形	0.89	0.82	0.07	なし		不詳	
266	SW-AP	円形	2.21	1.55	0.25	縄文土器、須恵器鉢、 土師器鉢		古代中期	
267	SW-AL	円形	1.18	1.01	0.12	縄文土器、黒曜石割片、 鏝		野島式	
268	SW-AL	円形	1.71	1.29	0.58	なし		不詳	
269	SW-AL	円形	1.85	1.47	0.44	縄文土器、石斧、石鏝、 燧石、黒曜石割片		野島式	
270	SW-AM	円形	1.18	1.16	0.49	須恵器鉢、土師器鉢、 磨石、野		古代中期	
271	SW-AM	円形	1.00	0.91	0.17	なし		不詳	
272	SW-AM	円形	1.28	1.21	0.24	須恵器鉢・燧石、土師器鉢		古代中期	
273	SW-AR	円形	1.16	1.12	0.18	須恵器鉢、土師器鉢・杯、 刀子、鏝	SK274より新しい	古代中期	
274	SW-AM	円形	1.22	0.86以上	0.16	縄文土器、土師器鉢、 黒曜石割片	SK273より古い	古代中期	
275	SW-AN	円形	1.57	1.18	0.16	石鏝、縄文土器、土師器鉢		古代中期	
276	SW-AN	円形	1.97	0.88	0.21	縄文土器、土師器鉢、 鏝		18世紀末以降	A1-A層土層入
277	SW-AN	円形	1.86	0.86	0.06	なし		不詳	
278	SW-AD	円形	1.16	1.10	0.42	縄文土器、須恵器鉢、 割片	SK185より新しい	18世紀末以降	A1-A層土層入
279	SW-AP	円形	0.80	0.80	0.19	須恵器鉢、土師器鉢		古代中期	
280	SW-AP	円形	0.83	0.75	0.08	縄文土器、土師器鉢		古代中期	
281	SW-AP	円形	1.19	0.94	0.14	なし		不詳	
282	SW-AP	円形	1.18	1.11	0.52	縄文土器、石鏝、磨石、 黒曜石割片		野島式	
283	SW-AP	円形	0.90	0.68	0.18	なし		不詳	
284	SW-AP	円形	0.85	0.80	0.29	なし		縄文時代早期の 土層層入	
285	SW-AP	円形	1.10	1.06	0.18	縄文土器、須恵器鉢、 土師器鉢・杯		古代中期	
286	SW-AP	円形	1.05	0.96	0.50	なし	SK287より新しい	不詳	

No.	位置	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
287	BO-AQ	II B	1.22	0.72	0.14	なし	25765より古い	不明	
288	BO-AQ	I C	1.40	1.43	0.32	縄文土器 磨石		野鳥式	
289	BO-AQ	II B	1.46	0.51	0.13	なし		不明	
290	BO-AQ	II C	1.71	1.24	0.28	縄文土器 縄		野鳥式	
291	BO-AQ	I B	1.89	1.05	0.21	なし		不明	
292									欠番
293	BO-AS	I C	0.96	0.84	0.20	土器碎片 縄		古代	
294	BO-AS	III B	0.83	0.87	0.08	なし		不明	
295	BO-AS	II C	1.88	1.37	0.41	なし		不明	中央部の埋戻される
296	BO-AV	I C	1.26	1.10	0.77	遺棄破片 土器碎片		古代中期	
297	BO-AR	II C	2.94	1.53	0.81	縄文土器 縄		縄文内式	
298	BO-AR	II C	1.96	1.45以上	0.22	縄文土器 縄		野鳥式	
299	BO-AR	I B	1.12	1.06	0.34	なし		不明	
300	BO-AL	II C	1.88	1.87	0.40	縄文土器 磨盤 縄文土器 打製石片 石鏝 黒曜石刮削		野鳥式	
301	BO-AL	I B	1.01	0.94	0.37	なし		不明	
302	BO-AL	V D	1.51	1.30	0.60	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
303	BO-AL	II C	1.34	0.91	0.34	刮削		不明	
304	BO-AL	I C	1.59	1.05	0.79	縄文土器 磨石		野鳥式	
305	BO-AL	I B	0.79	0.77	0.13	なし		不明	1168・3039より新しい
306	BO-AL	I B	0.76	0.70以上	0.14	なし		不明	1164より新しく、 3035より古い
307	BO-AM	I B	0.84	0.82	0.23	遺棄破片 土器破片		古代中期	
308	BO-AM	I B	1.07	0.55以上	0.10	なし		3077より古い	
309	BO-AM	II B	1.25	0.48以上	0.22	縄文土器		野鳥式	
310	BO-AM	I B	1.33	1.29	0.28	縄文土器 遺棄破片 縄		3039より新しい	掘削直後
311	BO-AM	I B	0.80	0.74	0.25	土器破片		18世紀末以降	A1-A層土層入
312	BO-AO	I B	1.08	1.02	0.19	縄文土器 遺棄破片 土器破片		古代中期	
313	BO-AO	II C	1.50	0.71	0.27	なし		3073より古い	18世紀末以降
314	BO-AO	II C	0.96	0.55	0.20	なし		3102より新しく、 3073より古い	不明
315	BO-AP	I B	1.08	1.05	0.19	遺棄破片 土器破片		古代中期	
316	BO-AP	II B	0.71	0.58	0.03	なし		不明	
317	BO-AP	II B	2.18	0.83	0.07	土器破片		古代	
318	BO-AQ	V F	3.96	0.70	0.09	なし		305P18、305P11、 P4より新しい	不明
319	BO-AS	I C	1.40	1.18	0.25	なし		不明	
320	BO-AS	II C	3.06	1.91	0.27	縄文土器		3037より新しい	野鳥式
321	BO-AS	II C	1.48以上	0.50以上	0.11	なし		3030より古い	縄文時代早期
322	BO-AU	I C	0.83	0.44以上	0.17	なし		3049より古い	18世紀末以降
323	BO-AU	I C	0.95	0.56以上	0.08	なし		3048より古い	A1-A層土層入
324	BO-AR	I B	0.88	0.85	0.13	縄文土器 遺棄破片		古代中期	
325	BO-AR	I B	1.07	1.01	0.17	土器破片・縄、縄土塊		古代中期	
326	BO-AR	I C	1.11	0.93	0.11	割れ種多量、骨滓塊		中世	
327	BO-AL	I C	1.83	1.31	0.18	縄文土器		野鳥式	
328	BO-AL	I C	0.85以上	0.80	0.20	縄文土器 打製石片		不明	掘削後の埋戻される
329	BO-AL	I B	0.97	0.85	0.14	縄文土器 黒曜石刮削		野鳥式	
330	BO-AM	I E	1.00	0.83	0.05	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
331	BO-AM	II C	2.25	1.39	0.38	なし		不明	掘削後の埋戻される
332	BO-AM	I B	1.04	0.71以上	0.33	縄文土器 遺棄破片 土器破片 黒曜石刮削		古代中期	
333	BO-AM	II C	1.18	0.45	0.11	なし		不明	
334	BO-AM	III C	1.23	1.12	0.21	縄文土器 縄		野鳥式	
335	BO-AM	I C	0.89	0.80	0.07	なし		3074より古い	不明
336	BO-AM	I B	2.55	2.26	0.57	遺棄破片 縄		3066より新しい	18世紀末以降
337	BO-AO	I C	2.61	2.44	1.01	神戸市遺跡館蔵天目茶碗、 遺棄破片 土器破片		3066より新しい	A1-A層土層入
338	BO-AO	I B	0.99	0.80	0.09	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
339	BO-AO	I C	2.93	2.72	1.04	なし		不明	
340	BO-AP	I B	0.99	0.90	0.14	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
341	BO-AP	II C	0.80	0.78	0.19	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
342	BO-AQ	II C	0.84	0.59	0.13	なし		不明	
343	BO-AQ	I B	0.97	0.85	0.16	なし		不明	
344	BO-AG	I B	0.94	0.82	0.07	縄		不明	
345	BO-AG	I B	1.01	0.94	0.18	縄		3059より古い	不明
346	BO-AR	II C	1.35	1.13	0.15	縄		3046より新しい	不明
347	BO-AR	I C	1.13	1.11	0.22	なし		3036より古い	不明
348	BO-AR	I B	1.47	1.41	0.41	縄文土器 縄		77より古い	野鳥式 黒褐色土・T-1多量しまり よく堅い
349	BO-AL	I B	1.26	1.20	0.42	土器破片 刮削 刮削		古代中期	
350	BO-AM	I B	1.79	1.63	0.20	縄文土器 縄		野鳥式	
351	BO-AM	I B	2.18	0.89	0.12	縄文土器		野鳥式	
352	BO-AM	I B	1.04	0.99	0.23	縄		18世紀末以降	A1-A層土層入
353	BO-AG	II C	1.09	0.50以上	0.19	なし		3036より新しい	不明
354	BO-AG	II C	1.25	0.75	0.18	縄文土器 遺棄破片		3035より古い	古代中期
355									欠番
356	BO-AP	I C	1.24	1.20	0.55	縄文土器		18世紀末以降	A1-A層土層入
357	BO-AP	V B	1.54	0.82	0.08	土器破片 縄		3164より新しい	18世紀末以降
358	BO-AP	II C	1.80	0.80	0.11	なし		18世紀末以降	A1-A層土層入
359	BO-AR	I C	1.27	1.20	0.28	土器破片 縄		古代	
360	BO-AR	I C	1.28	1.21	0.31	遺棄破片 縄		316より古い	古代
361	BO-AR	I C	1.48	0.20	0.19	遺棄破片 縄		3049より古い	古代中期
362	BO-AL	II B	0.86	0.89	0.06	なし		不明	
363	BO-AL	I B	0.94	0.83	0.13	土器破片 縄		古代	
364	BO-AY	I B	0.65	0.64	0.05	なし		不明	
365	BO-AL	II C	1.83	0.95	0.13	縄文土器 縄		野鳥式	

No.	位置	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	出土遺物	重複関係	時期	備考
366	B5-AL	II C	2.46	2.38	0.10	縄文土器		野鳥式	
367	B5-AL	II C	0.99	0.65	0.10	縄文土器		不詳	
368	B5-AL	II B	1.60	0.84	0.20	縄文土器		野鳥式	
369	B5-AL	II C	1.39	0.78	0.13	縄文土器		野鳥式	
370	B5-AL	II C	1.38以上	0.73	0.20	縄文土器 縄		野鳥式	
371	B5-AM	II C	2.13	1.12	0.18	縄文土器		野鳥式	
372	B5-AM	I B	1.40	1.19	0.30	なし		18世紀末以降	A5-A層土器入
373	B5-AM	I B	1.18	1.10	0.30	土師器 縄		古代中期	
374	B5-AM	I B	0.82	0.86	0.13	縄文土器		野鳥式	
375	B5-AM	III B	1.50	1.31	0.36	なし		8K376より新しい	
376	B5-AM	I B	1.20	1.11	0.43	縄文土器		8K375より古い	野鳥式
377	B5-AM	I B	1.38	1.30	0.33	縄文土器 縄		野鳥式	
378	B5-AM	II B	1.66	0.82	0.15	縄文土器 縄		野鳥式	
379	B3-AN	II C	2.27以上	1.68	0.23	縄文土器		野鳥式	遺物を埋め込まれる
380	B5-AN	II C	2.55	0.46	0.16	縄文土器 縄		野鳥式	
381	B5-AN	I B	0.89	0.73	0.10	縄文土器 磨石		野鳥式	
382	B5-AP	I B	1.36	0.97以上	0.41	滑石器片 土師器		5077より古い	古代中期
383	B5-AS	II C	1.10	0.69	0.13	なし		18世紀末以降	A5-A層土器入
384	B5-AV	IV B	3.51	1.12	0.51	弥生遺物 滑石器片		5043より古い	中世 高方形の大型土坑
385	B5-AV	IV B	3.69	1.06	0.64	弥生遺物 滑石器片		中世	高方形の大型土坑
386	B5-AW	I C	1.10	1.07	0.58	土師器		古代中期	
387	B7-AL	I B	0.88以上	1.01	0.25	なし		8K388より古い	18世紀末以降
388	B7-AL	I C	1.67	1.06	0.42	縄		8K387・96より新しい	A5-A層土器入
389	B7-AM	II C	1.21以上	1.53	0.32	縄文土器 縄		8K390より古い	野鳥式
390	B7-AM	II C	1.81	1.35	0.49	縄文土器 磨石 黒曜石割片		8K389より新しい	野鳥式
391	B7-AM	II C	2.27	0.94	0.44	縄文土器 磨石 黒曜石割片		野鳥式	
392	B7-AM	I B	0.88	0.85	0.04	黒曜石割片		不詳	
393	B7-AM	V C	1.10	0.93	0.23	縄文土器 縄		野鳥式	
394	B7-AM	I C	1.04	0.96	0.23	なし		5076より古い	不詳
395	B7-AM	I C	2.88	1.66	0.21	縄文土器 縄		古代中期	
396	B7-AD	I A	1.10	0.95	0.46	土師器		野鳥式	
397	B7-AD	II C	1.54	0.96	0.05	なし		5077より古い	不詳
398	B7-AP	IV B	2.78	0.94	0.21	なし		5075より古い	中世か 高方形の大型土坑
399	B7-AS	II C	1.31	0.69	0.20	なし		不詳	
400	B9-AL	IV B	2.19	1.20	0.28	縄文土器 縄 黒曜石割片		野鳥式	
401	B9-AL	V C	0.92以上	0.93	0.09	縄文土器 磨石 黒曜石割片		野鳥式	北側が調査区外となる
402	B9-AM	I B	1.34	1.21	0.30	縄文土器 縄 黒曜石割片		野鳥式	
403	B9-AM	V C	0.81	0.52	0.17	縄文土器 縄		野鳥式	
404	B9-AM	II B	1.46	0.67	0.12	縄文土器 縄		野鳥式	
405	B9-AM	II C	1.43	0.79	0.23	なし		不詳	
406	B9-AM	II C	1.00	0.89	0.13	縄文土器 縄		野鳥式	
407	B9-AM	II C	2.34	1.10	0.19	縄文土器 縄		野鳥式	
408	B9-AM	V E	1.14	0.97	0.18	縄文土器 縄		野鳥式	
409	B9-AM	II C	2.40	1.78	0.27	縄文土器 縄		野鳥式	
410	B9-AM	II C	1.40	0.81	0.17	縄文土器 磨石		野鳥式	
411	B9-AM	I B	1.28	0.88	0.19	縄文土器 縄		PI4より古い	野鳥式
412	B9-AM	I B	1.18	1.00	0.13	縄文土器 黒曜石割片		不詳	
413	B9-AM	I B	1.16	0.38以上	0.10	なし		8K413より古い	不詳
414	B9-AM	I B	1.37	1.14	0.49	縄文土器 縄		8K413・8K415より新しい	野鳥式
415	B9-AM	II C	1.58以上	1.38	0.12	なし		8K414より古い	不詳
416	B9-AN	I B	1.88	1.00	0.18	縄文土器 縄		野鳥式	
417	B9-AN	I B	1.17	1.17	0.35	縄文土器		野鳥式	
418	B9-AD	I B	0.96	0.82	0.17	土師器		古代	
419	B9-AD	I C	2.34以上	1.31	0.40	なし		8K420より古い	古代中期
420	B9-AD	IV B	1.24	0.84以上	0.55	滑石器片 土師器 縄		8K419より新しい	18世紀末以降
421	B9-AL	I B	1.15	0.79以上	0.35	縄文土器 縄		8K427より新しい	野鳥式
422	B9-AL	I B	1.36	0.80以上	0.05	なし		8K421より古い	不詳
423	B9-AM	IV B	1.31	0.89	0.51	土師器 滑石器片		野鳥式	
424	B9-AM	II C	1.35	0.99	0.19	縄文土器 縄		野鳥式	
425	B9-AM	II C	1.53	0.80	0.11	磨石 滑石器片		縄文時代早期か	
426	B9-AN	V E	1.49	1.20	0.34	土師器片 磨石		古代中期	
427	B3-AN	IV C	2.57	1.46	0.20	縄文土器 縄		野鳥式	
428	B3-AN	IV B	3.64	1.78	0.36	縄文土器 縄		野鳥式	
429	B3-AP	I B	2.41	1.66以上	0.32	なし		5055・PI9より古い	不詳 北側が調査区外となる
430	B3-AP	I B	0.75以上	0.87	0.38	なし		5055より古い	不詳
431	B3-AD	I C	1.01	0.68	0.18	なし		不詳	
432	B3-AD	I B	1.02以上	0.67	0.09	なし		不詳	
433	B3-AD	I C	0.77	0.73	0.11	なし		不詳	
434	B3-AD	V E	0.95	0.88	0.19	なし		不詳	
435	B3-AD	II C	1.63	0.70	0.35	なし		不詳	
436	B3-AM	I B	0.88	0.68	0.13	なし		不詳	
437	B3-AP	I B	1.01	0.99	0.29	なし		縄文時代早期	
438	B3-AD	I C	1.05	0.82	0.13	なし		5075より古い	不詳
439	B3-AD	II B	0.78	0.46	0.09	なし		8K394より新しい	不詳
440	B3-AD	II C	0.89	0.61	0.20	なし		PI2より新しい	不詳
441	B3-AP	I C	0.92	0.24以上	0.64	なし		5114より新しい	不詳
442	B3-AK	I B	1.28	0.71以上	0.07	磨石		8171より新しい	高世
443	B3-AM	I C	1.01	0.25以上	0.18	なし		8171より新しい	高世
444	B7-AD	IV B	1.06	0.87	0.45	滑石器 縄		5056より新しい	中世
445	B4-AP	I B	1.01	0.91	0.08	なし		不詳	
446	B4-AP	I C	0.81	0.78	0.31	なし		不詳	
447	B0-AN	I B	0.73	0.60	0.14	土師器 滑石器片		819より新しい	遺跡か
448	B2-AP	I C	1.49	1.23	0.42	なし		8K347より古い	不詳
449	B3-AL	I E	2.49	1.87	0.80	縄文土器 縄		野鳥式	
450	B9-AD	I C	2.15	2.10	0.29	新石器 滑石器片 磨石		18世紀後半	

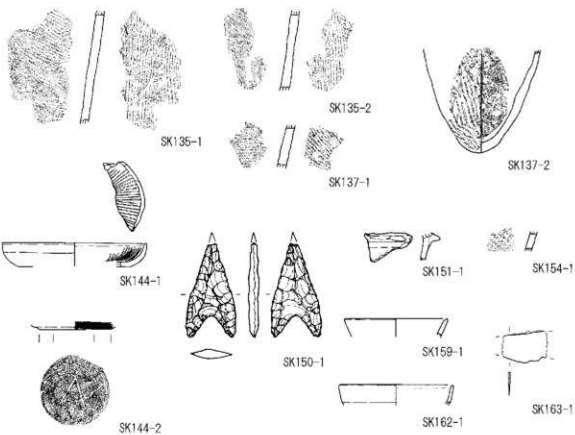
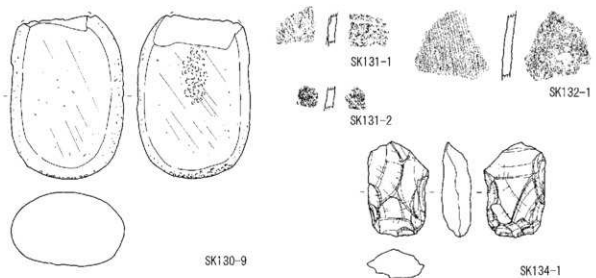


第 325 图 第 7 · 11 · 16 · 18 · 21 · 25 · 31 · 32 · 63 · 69 · 71 · 79 号土坑出土文物



SK100-8 SK130-8 0 10cm 100cm

第 326 图 第 80 · 90 · 100 · 108 · 114 · 119 · 130 号土坑出土遗物



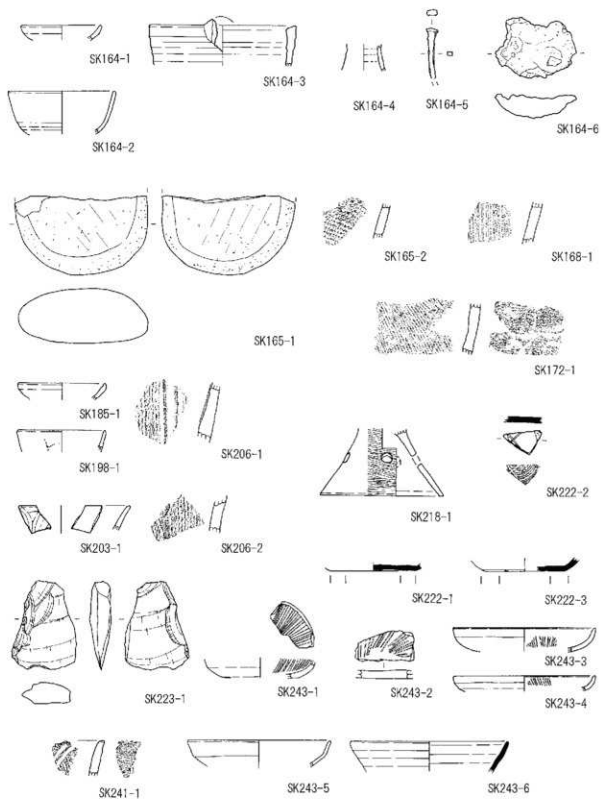
SK150-1 0 1cm

SK130-9  
SK134-1 0 1cm

0 1cm

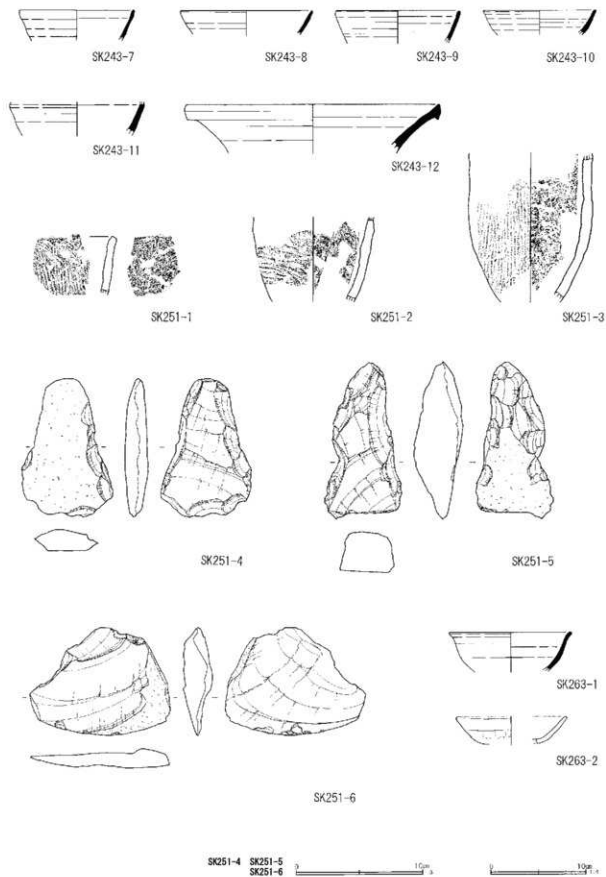
第 327 图 第 130 ~ 132 · 134 · 135 · 137 · 144 · 150 · 151 · 154 · 159 · 162 · 163 号土坑出土遗物



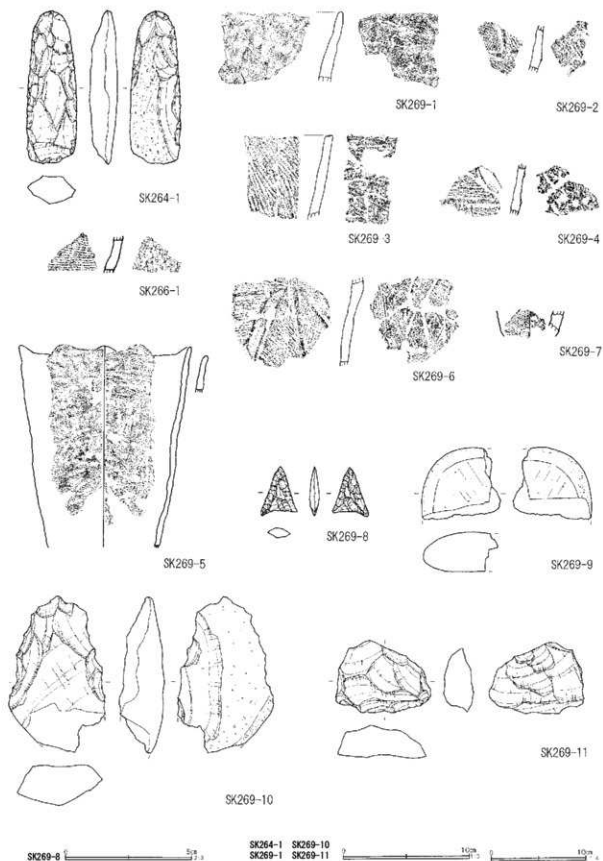


SK164-5 SK165-1  
SK164-6 SK223-1 0 5cm 10cm

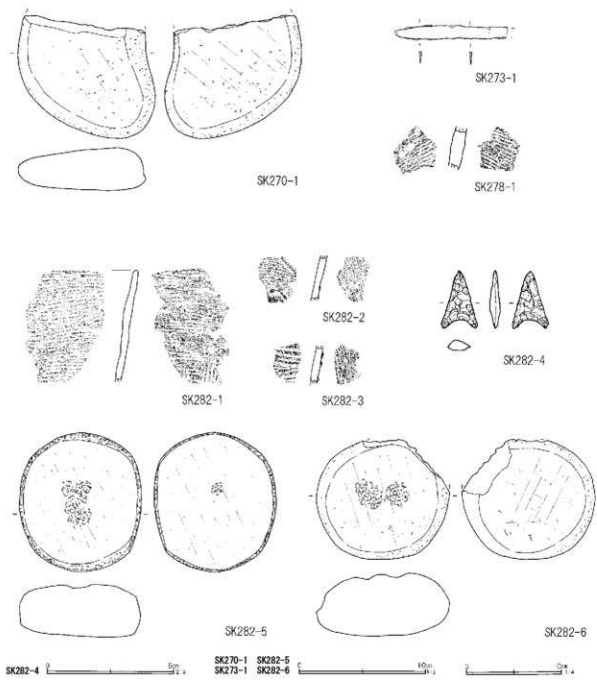
第328图 第164·165·168·172·185·198·203·206·218·222·223·241·243号土坑出土遗物



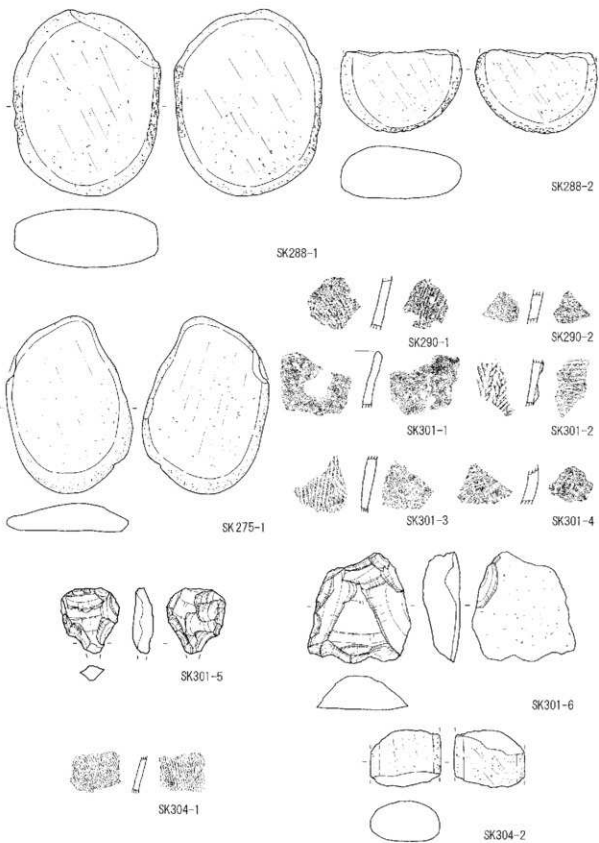
第 329 图 第 243·251·263 号土坑出土遗物



第 330 图 第 264 · 266 · 269 号土坑出土遗物

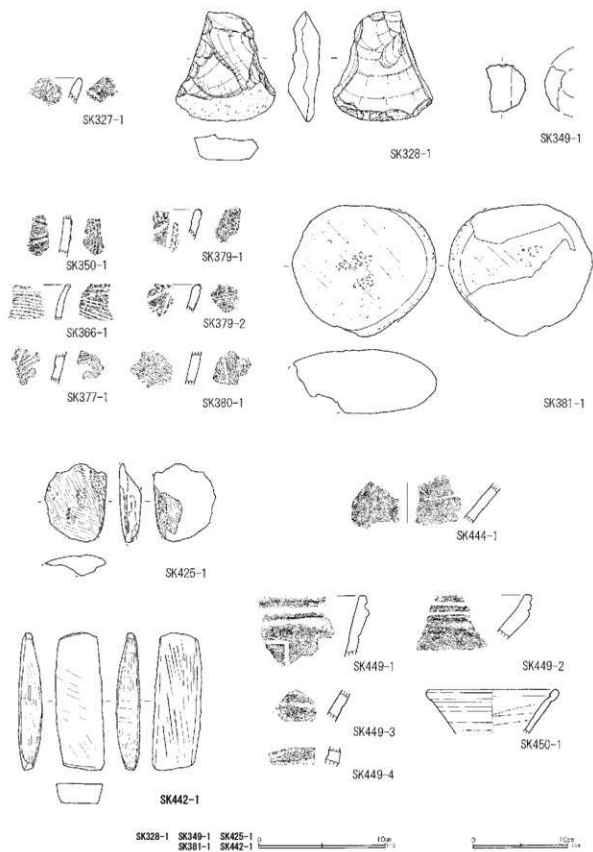


第331图 第270·273·278·282号土坑出土遗物



SK301-5 5cm SK288-1 SK288-2 SK301-6 SK275-1 SK304-2 10cm 10cm

第 332 图 第 275 · 288 · 290 · 301 · 304 号土坑出土文物



第333图 第327·328·349·350·366·377·379·380·381·425·442·444·449·450号土坑出土遗物

第 84 表 土坑出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
SK007-1	縄文土器 深鉢	18.0	23.4	8.6	ABK	赤	良好	約5%	加量料付1式
SK011-1	陶器 香炉	-	(2.6)	(3.0)	ABDF	暗赤褐	良好	鉢一底部分	瀬戸窯業系 16c
SK016-1	石鏡 石鏡	長さ(1.2)cm	幅1.4cm	厚さ0.3cm	重さ0.5g				石材チャート
SK018-1	銅製品 牛ヤセル	(横径)長さ4.3cm 幅0.7cm(縦口)	高さ1.3cm 幅0.7cm(縦口)	厚さ1.3cm	小口径1.8cm	(厚平)	長さ3.7cm		
SK021-1	粗砂 白磁土片	7.6	(3.0)	-	AB	灰白	良好	口縁一底部分	瀬戸窯業系 19c
SK025-1	土師器 坪	15.2	4.7	-	AB1	にぶい黄褐	良好	約5%	体部一底部分へラ削り 表面
SK031-1	埴輪器 鉢	23.0	16.8	10.5	ABFGM	灰	良好	約5%	明土金成
SK032-1	土師器 埴	-	(4.7)	(3.7)	AB1F	暗褐	良好	約一底部分	
SK062-1	石鏡 打製石鏡	長さ(4.4)cm	幅6.3cm	厚さ2.7cm	重さ63.0g				石材黒色頁岩
SK069-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHMM	暗赤褐	良好	胴部分	野島式
SK069-2	石鏡 石鏡	長さ(14.1)cm	幅(10.0)cm	厚さ(5.2)cm	重さ1000.0g				石材安山岩
SK071-1	石鏡 打製石鏡	長さ9.8cm	幅6.4cm	厚さ3.9cm	重さ210.0g				石材ホルンフォルス
SK078-1	石鏡 打製石鏡	長さ13.3cm	幅6.9cm	厚さ3.5cm	重さ290.0g				石材ホルンフォルス
SK080-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい黄	良好	胴部分	野島式 第324回SK080-2と同一個体
SK080-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい黄	良好	胴部分	野島式 第324回SK080-1と同一個体
SK080-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	赤	良好	胴部分	野島式
SK090-1	陶器 磨績組	10.4	(2.9)	-	AB	灰白	良好	口縁一底部分	瀬戸窯業系 19c 前 瀬戸市古瀬戸南門出土磨績組に類似
SK100-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHW	にぶい黄褐	良好	胴部分	野島式
SK100-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	暗赤	良好	胴部分	野島式
SK100-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABEHM	にぶい黄	良好	胴部分	野島式
SK100-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHM	暗褐	良好	胴部分	野島式
SK100-5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	黄褐	良好	胴部分	野島式
SK100-6	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	灰褐	良好	胴部分	野島式
SK100-7	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	暗赤褐	良好	胴部分	野島式
SK100-8	石鏡 石鏡	長さ5.4cm	幅5.1cm	厚さ1.1cm	重さ100.0g				石材安山岩
SK108-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい黄褐	良好	胴部分	多岐文系
SK108-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	暗赤褐	良好	胴部分	多岐文系
SK114-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	赤	良好	胴部分	多岐文系
SK119-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	赤	良好	胴部分	多岐文系
SK130-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	にぶい赤褐	良好	胴部分	野島式
SK130-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	灰褐	良好	胴部分	野島式
SK130-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	灰褐	良好	胴部分	野島式
SK130-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	灰褐	良好	胴部分	野島式
SK130-5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	灰褐	良好	胴部分	野島式
SK130-6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	赤	良好	胴部分	野島式
SK130-7	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	にぶい赤褐	良好	胴部分	野島式
SK130-8	石鏡 打製石鏡	長さ9.7cm	幅6.4cm	厚さ2.6cm	重さ190.0g				石材ホルンフォルス
SK130-9	石鏡 磨石	長さ(12.8)cm	幅8.2cm	厚さ0.5cm	重さ1100.0g				石材閃緑岩
SK130-9-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい黄	良好	胴部分	多岐文系
SK131-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	暗赤	良好	胴部分	多岐文系
SK132-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	にぶい赤褐	良好	胴部分	多岐文系
SK134-1	石鏡 打製石鏡	長さ7.5cm	幅4.8cm	厚さ2.3cm	重さ95.0g				石材黒色頁岩
SK135-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB01	にぶい赤褐	良好	胴部分	多岐文系
SK135-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB01	赤褐	良好	胴部分	多岐文系
SK137-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1M	暗赤褐	良好	胴部分	多岐文系
SK137-2	縄文土器 深鉢	-	(10.9)	-	AB1M	暗褐	良好	胴一底部分	
SK144-1	土師器 坪	(15.2)	(2.5)	-	ABLW	明赤褐	良好	約5%	体部へラ削り 平直裏 内面放射状割文
SK144-2	埴輪器 坪	-	(0.8)	7.6	ABFGM	黄灰	良好	底部分	明土金成 未切後辺へラ削り 底部分裏へラ書き「7」 底部分内面厚割あり
SK150-1	石鏡 石鏡	長さ(3.7)cm	幅2.9cm	厚さ0.4cm	重さ2.3g				石材チャート
SK151-1	土師器土器 皿蓋	-	(2.6)	-	ABD0	にぶい黄褐	不良	胴部分	
SK151-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	暗赤褐	良好	胴部分	野島式
SK159-1	陶器 厚灰版	(10.8)	(2.0)	-	AB	暗褐	良好	口縁一底部分	瀬戸窯業系 16c前
SK162-1	陶器 磨績組	11.9	(2.2)	-	AB	灰白	良好	口縁部分	瀬戸窯業系
SK163-1	鉄製品 鉄鏝	長さ(3.0)cm	幅2.5cm	厚さ0.7cm	重さ4.7g				
SK164-1	土師器土器 かわひけ	8.3	(1.6)	-	ABK	にぶい黄褐	良好	口縁一底部分	
SK164-2	陶器 丸函	(11.2)	(4.6)	-	AB1	黄灰	良好	口縁一底部分	野島系 京橋陶器 16c
SK164-3	陶器 片口	15.4	(4.3)	-	AB	灰白	良好	口縁一底部分	瀬戸窯業系 16c後～19c前 瀬戸市古瀬戸小西原出土片口に類似
SK164-4	陶器 埴利	-	(2.9)	-	ABG	暗赤	良好	胴部分	北戸系 18c
SK164-5	鉄製品 釘	長さ(4.9)cm	幅0.9cm	厚さ0.3cm	重さ2.1g				
SK164-6	銅形準	長さ5.5cm	幅6.4cm	厚さ1.9cm	重さ68.3g				
SK165-1	石鏡 磨石	長さ(6.2)cm	幅10.4cm	厚さ4.3cm	重さ410.0g				石材閃緑岩
SK165-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	赤	良好	胴部分	野山式
SK168-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	暗赤	良好	胴部分	多岐文系
SK172-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	BH1M	黄灰	良好	胴部分	野山式
SK185-1	土師器土器 かわひけ	9.0	(1.8)	-	AB1K	灰白	良好	口縁一底部分	
SK188-1	陶器 空付丸函	9.2	(2.3)	-	AB	暗赤褐	良好	口縁部分	野島系組 くらわん盆 18c 外側に磨擦文
SK203-1	市川遺文土器	-	(2.6)	-	AB	オリーブ灰	良好	口縁一底部分	鎌倉系 15世紀 13c代
SK206-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1	赤	良好	胴部分	加量料付式
SK206-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	暗赤褐	良好	胴部分	加量料付式
SK218-1	土師器 高坪	-	(7.1)	13.0	ABGM	にぶい黄褐	良好	胴部分	古瀬戸伏前型5式
SK222-1	埴輪器 坪	-	(0.8)	(0.9)	ABFGM	灰白	良好	底部分	明土金成 未切後辺へラ削り 底部分内面厚割あり
SK222-2	埴輪器 坪	-	-	-	ABFGM	灰白	良好	底部分	明土金成 未切後辺へラ削り 底部分裏へラ書き「口」
SK222-3	埴輪器 坪	-	(1.4)	(0.8)	ABFGM	黄灰	良好	体一底部分	明土金成 未切後辺へラ削り

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
SK273-1	石製 打製石斧	長さ7.0cm	幅5.1cm	厚さ1.7cm	重さ50.0g				石村ホルンフェルス
SK241-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK243-1	土師器 杯	-	(2.1)	-	AB1	にふい焼	良好	体一部破片	底部へう割り 内面放射線文 平度黒
SK243-2	土師器 杯	-	(1.0)	-	AB1	にふい焼	良好	底部片	底部へう割り 内面放射線文 平度黒
SK243-3	土師器 杯	(14.9)	(2.6)	-	AB1J	にふい焼	良好	1/5	底部へう割り 内面放射線文 平度黒
SK243-4	土師器 杯	(14.9)	(1.6)	-	AB1J	胡赤焼	良好	口縁部片	底部へう割り 内面放射線文 平度黒
SK243-5	土師器 杯	(15.0)	(2.8)	-	AB1M	焼	良好	口縁一体部片	平度黒
SK243-6	埴輪器 埴	(16.6)	(3.2)	-	AB1M	赤	普通	口縁部片	木野原
SK243-7	埴輪器 杯	(12.0)	(3.1)	-	ABF1	黄灰	良好	口縁部片	南庄金産
SK243-8	埴輪器 杯	(13.8)	(2.6)	-	ABF9	焼	不良	口縁部片	南庄金産
SK243-9	埴輪器 杯	(13.0)	(3.5)	-	ABF	灰白	良好	口縁一体部片	南庄金産
SK243-10	埴輪器 杯	(11.8)	(2.6)	-	F1M8	灰	良好	口縁部片	南庄金産 口縁部自然剥片着
SK243-11	埴輪器 杯	-	(3.7)	-	ABF1	灰	良好	体部片	南庄金産
SK243-12	埴輪器 高短冊	(26.6)	(5.2)	-	ABCM	焼	良好	口縁部片	南庄金産
SK251-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	胡赤焼	良好	口縁部片	多岐文系
SK251-2	縄文土器 深鉢	-	(8.0)	-	ABM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK251-3	縄文土器 深鉢	-	(15.7)	-	ABLM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK251-4	石製 打製石斧	長さ10.8cm	幅7.1cm	厚さ1.8cm	重さ150.0g				石村ホルンフェルス
SK251-5	石製 打製石斧	長さ12.3cm	幅6.1cm	厚さ3.8cm	重さ240.0g				石村黒色黄石
SK251-6	石製 スクレイパー	長さ8.5cm	幅11.0cm	厚さ2.3cm	重さ178.0g				
SK263-1	埴輪器 杯	(12.0)	(4.2)	-	ABFM1	灰	良好	口縁一体部片	南庄金産
SK263-2	土師器 杯	(11.6)	(2.9)	-	ABH1	胡赤焼	良好	15%	底部へう割り 平度
SK264-1	石製 打製石斧	長さ12.1cm	幅4.0cm	厚さ2.2cm	重さ133.1g				石村黄岩
SK269-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK269-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHM	焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK269-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1	焼	良好	胴部片	野鳥式 第310段X269-2之間一箇体カ
SK269-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	AG1	焼	良好	胴部片	野鳥式 第310段X269-2之間一箇体カ
SK269-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1	焼	良好	胴部片	野鳥式 第310段X269-2之間一箇体カ
SK269-5	縄文土器 深鉢	-	(12.2)	-	AB1M	にふい焼	良好	口縁一胴部片	野鳥式
SK269-6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDH1K	焼	良好	胴部片	野鳥式 第310段X269-2之間一箇体カ
SK269-7	縄文土器 深鉢	-	(2.6)	-	AGH1	焼	良好	底部片	野鳥式
SK269-8	石製 石鏃	長さ2.8cm	幅1.4cm	厚さ0.4cm	重さ0.3g				石村黒色黄石
SK269-9	石製 磨石	長さ(5.0)cm	幅0.1cm	厚さ3.1cm	重さ125.0g				石村四間塚
SK269-10	石製 打製石斧	長さ12.3cm	幅7.6cm	厚さ3.5cm	重さ170.0g				石村ホルンフェルス
SK269-11	石製 磨石	長さ5.7cm	幅7.5cm	厚さ2.6cm	重さ120.0g				石村ホルンフェルス
SK270-1	石製 石鏃	長さ(13.0)cm	幅14.5cm	厚さ4.5cm	重さ1280.0g				石村四間塚
SK271-1	鉄製 刀子	長さ(8.0)cm	幅(0.5-1.0)cm	厚さ0.1cm	重さ5.7g				
SK279-1	石製 石鏃	長さ18.7cm	幅13.4cm	厚さ3.2cm	重さ1116.0g				石村四間塚
SK279-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK281-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHM	赤焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK281-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1	赤焼	良好	胴部片	野鳥式
SK281-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	赤焼	良好	胴部片	野鳥式
SK282-4	石製 石鏃	長さ2.3cm	幅1.4cm	厚さ0.4cm	重さ3.7g				石村チャート
SK282-5	石製 磨石	長さ10.8cm	幅9.4cm	厚さ4.1cm	重さ685.0g				石村四間塚
SK282-6	石製 磨石	長さ(9.4)cm	幅10.4cm	厚さ5.0cm	重さ680.0g				石村四間塚
SK284-1	石製 磨石	長さ14.6cm	幅11.5cm	厚さ4.6cm	重さ1170.0g				石村四間塚
SK284-2	石製 磨石	長さ(8.0)cm	幅(5.0)cm	厚さ4.1cm	重さ380.0g				石村四間塚 焼跡の痕跡あり
SK290-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK290-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDM	黒焼	良好	胴部片	多岐文系
SK301-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDH1K	焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK301-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	灰焼	良好	胴部片	野鳥式
SK301-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ADGH1	焼	良好	胴部片	野鳥式
SK301-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	焼	良好	胴部片	野鳥式
SK301-5	石製 石鏃	長さ(2.6)cm	幅(2.3cm)	厚さ0.8cm	重さ249.0g				石村チャート
SK301-6	石製 打製石斧	長さ8.7cm	幅1.1cm	厚さ2.8cm	重さ218.0g				石村ホルンフェルス
SK304-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK304-2	石製 磨石	長さ(4.5)cm	幅(6.5cm)	厚さ3.3cm	重さ318.0g				石村山田庄
SK327-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1J	にふい焼	良好	口縁部片	多岐文系
SK328-1	石製 打製石斧	長さ8.7cm	幅7.8cm	厚さ2.5cm	重さ150.0g				石村黒色黄岩
SK348-1	片白磁引口	長さ(5.0)cm	幅(4.2)cm	外径(7.0)cm	内径(3.0)cm				
SK350-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	胡焼	良好	胴部片	野鳥式
SK366-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	にふい焼	良好	口縁部片	多岐文系
SK377-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にふい焼	良好	胴部片	野鳥式
SK379-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK379-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	AGH1	黒焼	良好	口縁部片	野鳥式
SK380-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	焼	良好	胴部片	多岐文系
SK381-1	石製 磨石	長さ(10.3)cm	幅(11.3)cm	厚さ5.0cm	重さ540.0g				焼跡の痕跡あり
SK425-1	石製 磨製石斧	長さ(6.2)cm	幅(4.9)cm	厚さ(1.7)cm	重さ48.0g				石村トシモツ石
SK442-1	石製 砥石	長さ10.9cm	幅3.8cm	厚さ1.8cm	重さ110.1g				地形右側縁部 幅縁夕方欠 平面長方形 断面長方形 刀物 痕跡多数 6個縁部 石村黒色黄岩一部黒色化
SK444-1	瓦質土器 片白鉢	-	(4.4)	-	ABDH1M	にふい焼	不良	体部片	
SK449-1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDK	にふい焼	良好	口縁部片	知名寺式
SK449-2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDK	にふい焼	良好	口縁部片	知名寺式
SK449-3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG	焼	良好	胴部片	知名寺式
SK449-4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	にふい焼	良好	胴部片	知名寺式
SK450-1	陶製 埴輪器	(13.3)	(4.7)	-	AB	焼	良好	口縁一体部片	瀬戸黄瀬黒 17号 瀬戸市志呂黄瀬黒出土埋藏場に類似



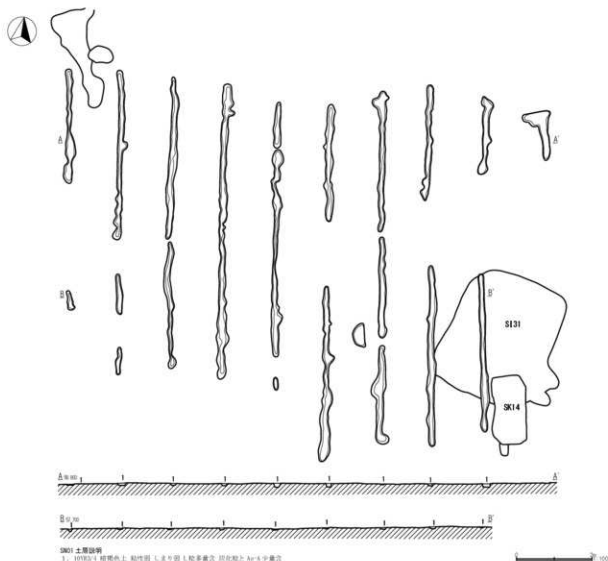
## 9 畝跡

### 第1号畝跡（第334図）

**位置** AR - AK, AS - AK・AL, AT - AK・ALグリッドに位置する。

**規模** 畝が確認された範囲は東西12.9 m、南北10.3 mで、南北方向に途切れながらであるが10条の畝を確認した。畝の最長の長さは9.8 m、幅0.1～0.25 m、畝間は約1.2 mである。確認面からの深さ0.02～0.1 m、主軸方向はN-10°-W、面積は約133 m<sup>2</sup>である。

**概要** 畝の畝方向は台地の斜面に対して直行する、南-北方向のものである。覆土は暗褐色土でローム粒子多量、浅間Aテフラを少量含む。東谷付近の地籍図を見ると谷には南北方向の現道があり、この道路の東側に接して東西方向に長辺、南北に短辺をもつ短冊形の14区画が見て取れる。畝跡はこの短冊形区画のほぼ中央の区画に該当し、区画内の中央から東側にかけて、短辺の方向と同じ南-北方向に耕作されている。なお、宮下遺跡Ⅱで確認された畝跡の耕作方向は東西方向であり、当調査区のものとは



第334図 第1号畝跡

耕作方向を異にする。

遺物 1は瀬戸美濃系磁器染付碗で、戦前のものである。

重複 第31号竪穴建物跡より新しい。

時期 現代



第335図 第1号畠跡出土遺物

第85表 第1号畠跡遺構出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	磁器 碗	(11.0)	(3.1)	-	B	灰白	良好	口縁部欠	瀬戸美濃系磁器染付 戦前

## 10 性格不明遺構

### 第1号性格不明遺構 (第336図)

位置 AV・AW - AP・AQ グリッドに位置する。

規模 長軸5m以上、短軸1.32m、深さ0.5mを測る。長軸方向はN-20°-Wである。

概要 東谷の右岸に所在し、谷の黒色土の掘削中に確認された。平面形態は不整形で、長軸方向の断面は薄い平凸レンズ状である。南側で第2号性格不明遺構と重複し、北側で第5号性格不明遺構に隣接する。短軸方向の土層断面観察では、焼土粒子・炭化物を含む層が互層になって堆積していたことが確認され、遺構底面は谷側に向かって傾斜していることが判明した。そのため、遺構の南側の壁は不明であるが、南北方向に横長で谷の斜面を利用した炭窯の可能性はある。

遺物 検出されなかった。

重複 第2号性格不明遺構と重複するが新旧関係は不明である。

時期 時期不明

### 第2号性格不明遺構 (第337図)

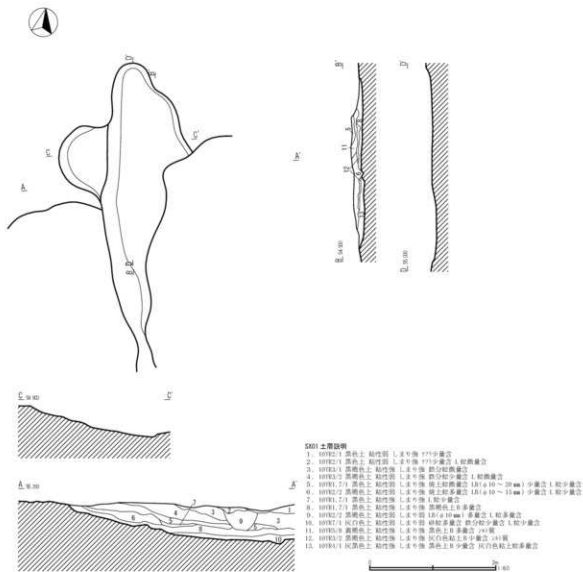
位置 AV・AW - AQ グリッドに位置する。

規模 西側の短い隅丸方形が長軸3.84m、短軸0.74m、深さ0.15m、東側の長い隅丸長方形が長軸5.20m、短軸2.40m、深さ0.23mを測る。長軸方向はともにN-20°-Wである。

概要 東谷の右岸に所在し、谷の黒色土の掘削中に確認された。北東部で第1号性格不明遺構と重複し、平面形態は台形状で、隅丸長方形が二つ重なった状態であった。長軸方向の断面は薄い平凸レンズ状である。谷に直交する東西方向の土層断面観察では、焼土・炭化物を含む層の上に黄褐色ローム層が確認された。この黄褐色ローム層は天井部であった可能性があり、また、炭化物・焼土粒子を含む薄い層が第2号性格不明遺構の東側の谷底まで広がっていたことが確認されている。これらのことから第2号性格不明遺構は南北方向に横長で谷の斜面を利用した炭窯であった可能性があり、焚口は谷側だったと考えられる。そして、少なくとも2基が存在していたと考えられる。

遺物 検出されなかった。

重複 第1号性格不明遺構と重複するが新旧関係は不明である。



第 336 図 第 1 号性格不明遺構

時期 時期不明

### 第 3 号性格不明遺構 (第 338 図)

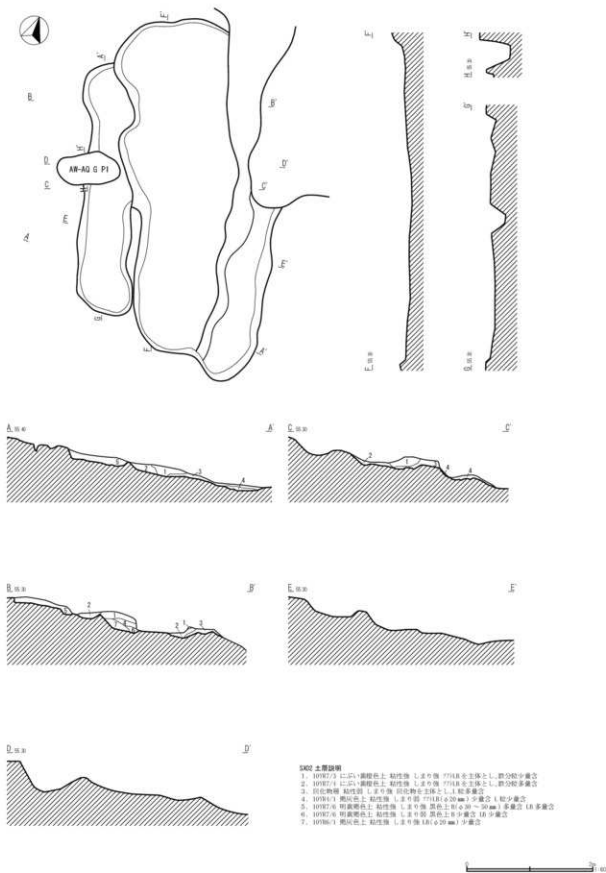
位置 AU - AP グリッドに位置する。

規模 長軸 3.46 m、短軸 1.4 m、深さ 0.2 m を測る。長軸方向は N - 43° - W である。

概要 東谷の左岸で確認された。平面形態は長楕円形で、長軸方向の断面は薄い平凸レンズ状である。短軸方向の土層観察では焼土粒子・炭化物を含む層が確認され、遺構底部は谷側に向かって傾斜していることが判明した。そのため第 1 号性格不明遺構同様、谷の斜面を利用した横長の炭窯の可能性がある。

遺物 検出されなかった。

重複 AU - AP グリッドビット P 1 と重複し、ビットより新しい。



第 337 圖 第 2 号性格不明遺構

時期 時期不明

#### 第4号性格不明遺構（第339図）

位置 AP - AMグリッドに位置する。

規模 長軸1.81 m、短軸1.1～0.18 m、深さ0.19 mである。長軸方向はN-2° - E、N-61° - Eである。

概要 平面形態はL字形で断面は平凸レンズ状である。覆土は黄褐色土でローム粒子を主体とする。遺構全体から礫が散在して出土し、その多くが被熱している。しかし、遺構の底面は焼けた痕跡は確認されず、また、覆土に焼土及び焼土粒子等は検出されなかった。

遺物（第345図 第86表） 縄文土器片、礫を検出した。1は、縄文時代後期の無文土器。擦痕状の整形痕が観察される。胎土に長石等の砂礫をやや多く含み、焼成は良好。

時期 時期不明

#### 第5号性格不明遺構（第340図）

位置 AW - APグリッドに位置する。

規模 長軸4.74 m、短軸2 m、深さ0.3 m。長軸方向はN-17° - Wである。

概要 東谷の右岸に所在し、谷の黒色土の掘削中に確認された。平面形態は隅丸長方形で、断面は薄い平凸レンズ状である。調査中はこの遺構から焼土や炭化物が検出されている。また、平面形態が第2号性格不明遺構に類似することから、炭窯の可能性はある。

遺物 検出されなかった。

時期 時期不明

#### 第6号性格不明遺構（第341図）

位置 BD - A0グリッドに位置する。

規模 長軸4.16 m、短軸3 m以上、深さ0.52 m。長軸方向はN-33° - Wである。

概要 平面形態は楕円形と思われる断面は平凸レンズ状である。断面観察では、ロームブロック・ローム粒子を多量含む層がレンズ状に堆積している。東側で第42号竪穴建物跡と重複する。

遺物 検出されなかった。

重複 第42号竪穴建物跡より古い。

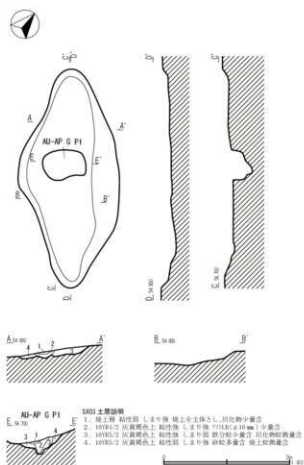
時期 9世紀前半以前

#### 第7号性格不明遺構（第228図）

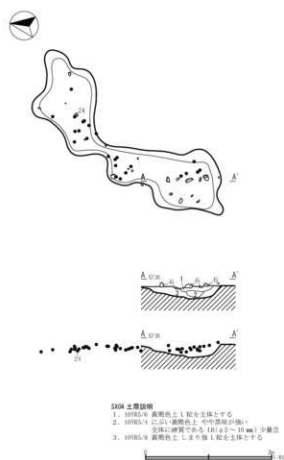
位置 BH - ASグリッドに位置する。

規模 長軸4.24 m、短軸3.84 m、深さ0.36 m以上。長軸方向はN-49° - Eである。

概要 平面形態は隅丸方形と思われる。断面は第80号竪穴建物跡に壊されているため不明である。第



第 338 図 第 3 号性格不明遺構



第 339 図 第 4 号性格不明遺構

80 号竪穴建物跡に壊されて残った部分の断面観察では、ローム粒子・炭化物粒子を含む褐色土が確認された。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第 80 号竪穴建物跡より古い。

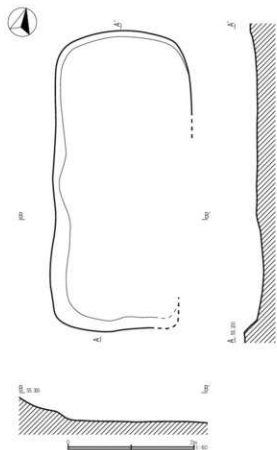
**時期** 10 世紀前半以前

### 第 8 号性格不明遺構 (第 342 図)

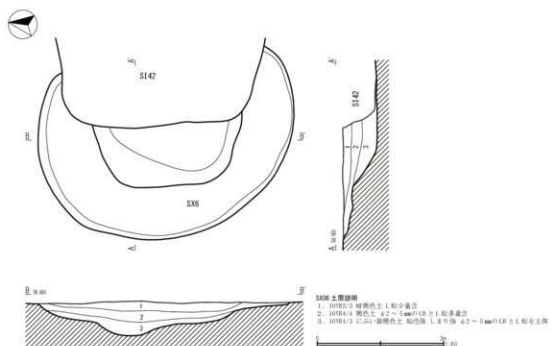
**位置** AR - AS グリッドに位置する。

**規模** 燃焼部の長軸 3.65 m、短軸 1.25 m、深さ 0.22。長軸方向は N - 73° - E である。

**概要** 平面形態はロストル式平窯に近似している。東西方向に長軸を持つ長方形部分は燃焼部とみられ、覆土中に多量の炭が検出された。その南側に手指状に 4 条の小溝が燃焼部南壁から 1.25 ~ 1.10 m の長さで直線的に延びる。ロストル式で通風の煙道部とみられ、幅は約 0.50 m、深さは 0.12 ~ 0.20 m で小溝にいたる手前の燃焼部底面に顕著な披熱痕を確認した。小溝先端には径 0.28 ~ 0.36 m で深さ 0.40 ~ 0.50 m の小ピットが掘り込まれ、節を抜いた径 0.08 ~ 0.11 m 長さ 0.30 ~ 0.40 m の竹筒が垂

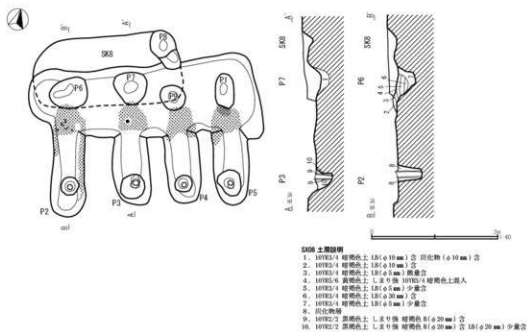


第 340 圖 第 5 号性格不明遺構



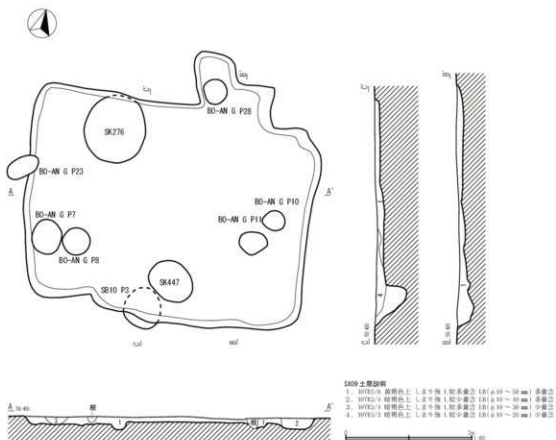
第 341 圖 第 6 号性格不明遺構

S36 土層説明  
 1. 0YR2/3 暗棕色土 L 和少量古  
 2. 0YR4/4 暗棕色土 a2 2~3mm<sup>2</sup>LR 土 L 和少量古  
 3. 0YR4/3 (C10) 黄棕色土 黏性強 L 土半強 a2 2~5mm<sup>2</sup>LR 土 L 和少量古



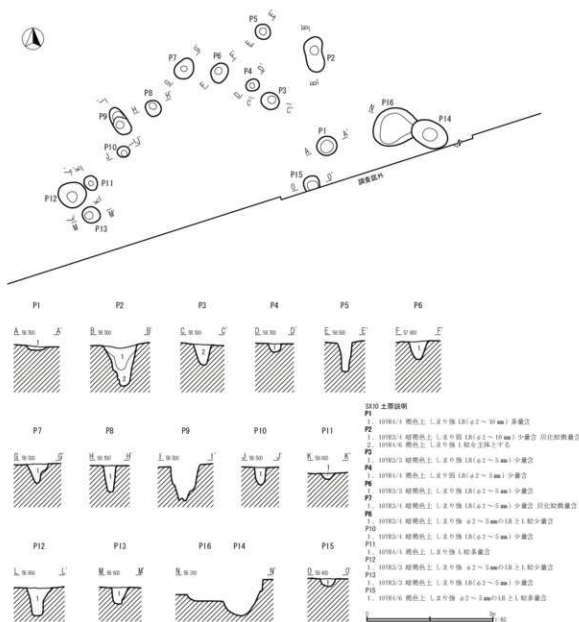
第 342 図 第 8 号性格不明遺構

※第 7 号性格不明遺構の遺構挿図は第 228 図に掲載した。



第 343 図 第 9 号性格不明遺構





第 344 図 第 10 号性格不明遺構

直に埋め込まれている。竹筒内面には黒いタールが付着し、中に炭化粒が充填されていた。

**遺物** 炭以外は検出されなかった。

**重複** 本跡北西で第 8 号土坑と重複し、本跡のほうが古い。

**時期** 不明。竹の有機質が遺存していたことから、遡っても近代ぐらいのものと考えられる。

#### 第 9 号性格不明遺構 (第 343 図)

**位置** B0 - AN グリッドに位置する。

**規模** 長軸 4.5 m、短軸 3.46 m、深さ 0.11 m。長軸方向は N - 72° - E である。

**概要** 平面形態は不整長方形で、断面は幅広の平凸レンズ状である。調査当初は方形の大型土坑2基と、小型土坑数基が重複しているものと想定し、土層セクションを残しながら調査を進めたが、その断面観察ではロームブロック・ローム粒子を多量含む黄褐色土と、同ブロック・同粒子を含む暗褐色土であったことが判明し、方形の大型土坑と想定したものの重複関係は、覆土が浅かったため不明であった。このほか、第10号掘立柱建物跡P3、第276・447号土坑、B0-ANグリッドビットP7・8・10・11・23・28と重複する。

**遺物** 検出されなかった。

**重複** 第276・447号土坑、B0-ANグリッドビットP7・8・10・11より古く、第10号掘立柱建物跡P3、B0-ANグリッドビットP23・28より新しい。

**時期** 重複する第276・447号土坑から縄文土器・土師器製の破片が出土しているが、いずれも小破片のため年代決定には至らず、時期は不明である。

#### 第10号性格不明遺構（第344・345図）

**位置** BA・BB-ASグリッドに位置する。

**規模** 円形や楕円形のビット16基が半径3.2mの範囲で半円形に巡る。

**概要** 調査当初は縄文時代の住居跡の円形に巡るビットの一部と推定し調査を進めたが、中央部付近には炉跡や焼土等は確認されなかった。同様の柱穴列は宮下遺跡Ⅱでも確認され、縄文時代の住居と推定しているが、炉跡や焼土は確認されていない。当調査区で確認された円形柱穴列のP1は0.32×0.3mの円形で深さ0.12m、P2は0.55×0.29mの不整楕円形で深さ0.65m、P3は0.3×0.26mの円形で深さ0.32m、P4は0.21×0.18mの楕円形で深さ0.13m、P5は0.26×0.23mの円形で深さ0.41m、P6は0.31×0.25mの楕円形で深さ0.29m、P7は0.35×0.27mの楕円形で深さ0.31m、P8は0.26×0.25mの円形で深さ0.25m、P9は0.48×0.24mの楕円形で深さ0.55m、P10は0.21×0.17mの楕円形で深さ0.27m、P11は0.24×0.20mの楕円形で深さ0.1m、P12は0.45×0.4mの楕円形で深さ0.44m、P13は0.28×0.26mの円形で深さ0.26m、P14は0.6×0.41mの楕円形で深さ0.38m、P15はその一部が調査区外になるため全容は明らかでないが、直径は0.25mで深さ0.12m、P16は0.7×0.6mの不整楕円形で深さ0.1mである。その覆土はP1・P2の下層・P4・9・11・14・16を除き、すべてのビットがロームブロックを含む締まりある暗褐色土であった。

**遺物** 検出されなかった。

**時期** 時期不明



第345図 第4号性格不明遺構出土遺物

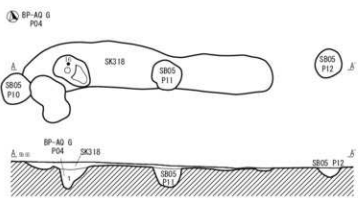
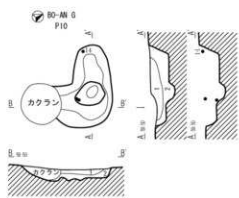
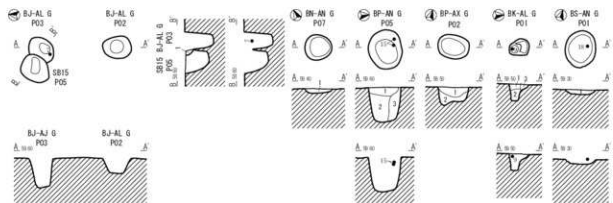
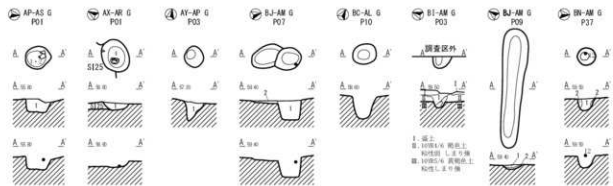
第86表 第4号性格不明遺構出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABSH	にぶい糖	良好	断片	形名未定

## 11 ビット

ビットは1,392基で調査区の北西区域に集中する傾向があり、BJ～BP-AL～A0グリッドで多く確認された。掘立柱建物跡としたもの以外は規則性が捉えきれず、建物跡は想定できなかった。平面形態は円形・不整形円形・楕円形・長楕円形などさまざまであるが、遺物が出土し時期を特定できるビットは少ない。出土遺物は縄文土器・スクレイパー・土師器坏・土製紡錘車・かわらけ・ほうろく・陶器碗などである。また、確認されたビットの基数が膨大なことから、ここでは遺物を検出したビットを掲載した。(第346図)

**遺物(第347図、第87表)** 1・2はAP-ASグリッドP1出土の縄文土器である。1は、縄文時代後期称名寺式土器。外反する口縁部に、沈線でJ字状のモチーフを施文している。2は、縄文時代後期称名寺式土器。やや外反する口縁部下に1条の沈線をタガ状に巡らせ、そこから2条の沈線を垂下させ区画している。3はAY-APグリッドP3出土の土師器坏である。口縁が広がるように斜めに立ち上がり、底部は平底である。4はAX-ARグリッドP1出土の土師器坏である。口縁がわずかに内湾しつつ立ち上がり、丸底である。底部外面に墨書が施されている。5はBC-ALグリッドP10出土の肥前系磁器染付油瓶で外面に草花文が描かれる。6はBI-AMグリッドP3出土の縄文時代後期安行式土器。外反する口縁部が無文となる。頸部に2条の平行沈線を施文し、沈線間を縦位の短沈線で充填している。平行沈線上には、丸棒状工具による刺突が加えられている。7はBJ-ALグリッドP3出土の肥前系陶器刷毛目碗で、外面に白土による波状の刷毛目文を施し内面は無文である。18世紀前半～中頃。8はBJ-AMグリッドP9出土の縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。9はBK-ALグリッドP1出土の肥前系陶器刷毛目碗で、内外面に白土による打刷毛目文が施される。見込み中央が凹み高台端部に砂が溶着している。18世紀前半～中頃。なお、調査時にはこの刷毛目碗の下に漆椀が重なった状態で出土した。漆椀の木質部は腐食して残存していなかったが、黒漆の被膜のみが残っていた。10はBK-AMグリッドP7出土の近世とみられる在産かわらけである。11はBM-AMグリッドP10出土で、縄文時代早期条痕文系土器。表裏面に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。12はBN-AMグリッドP37出土の丹波系陶器搗鉢である。外面はロクロ痕が顕著で、現存の節目は8本である。13はBN-ANグリッドP7出土の縄文時代早期野島式土器。斜位に2条の微隆起線文を貼付し、集合沈線を斜位に施文している。胎土に微量の繊維を含む。14はBP-ANグリッドP10出土の縄文時代後期称名寺式土器。2条の鋭い沈線が横位に施文され、上部に細い車筋RL縄文が帯状に施文されている。15はBP-ANグリッドP5出土のロクロ土師器坏である。体部外面に横方向に磨き、体部内面は黒色処理後横方向に磨いている。16はBP-AQグリッドP4出土の在産ほうろくで、口縁部内外面が工具により磨かれている。体部外面にはススが附着する。17はBP-AXグリッドP2出土の土製紡錘車である。全面を黒色処理後磨いている。裏面に文字のようなものが刻まれている。18はBS-ANグリッドP1出土の縄文時代早期野島式土器。縦位に集合沈線を施文した後、やや太い沈線で二重の円文を施文している。胎土に微量の繊維を含む。

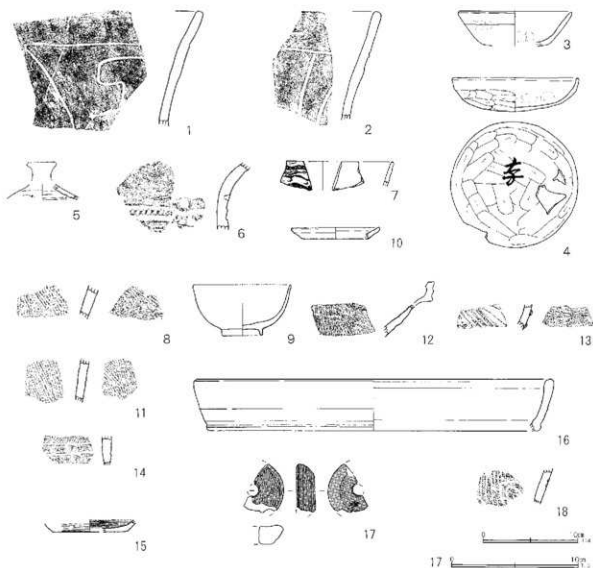


- AP-AS G P01**  
1. SB05-2 凝結土 しまり強 傾上 同比較し 1 較少量
- AX-AP G P01**  
1. BP03-2 凝結土 しまり強 1R(φ2~5mm) 少量 傾上 較少量
- AY-AP G P03**  
1. 10YK/4 褐色土 しまり強 1R(φ2~5mm) 少量 傾上 較少量
- BJ-AM G P07**  
1. 10YK/2 凝結土 粘性弱 しまり強 φ2~5mm 穴付 1R 少量  
2. 10YK/6 褐色土 粘性弱 しまり強 1 較少量
- BJ-AL G P03**  
1. 10YK/2 凝結土 粘性弱 しまり強 1 較少量  
2. 10YK/4 褐色土 粘性弱 しまり強 1 較少量
- BJ-AL G P02**  
1. 10YK/2 凝結土 粘性弱 しまり強 1 較少量  
2. 10YK/4 褐色土 粘性弱 しまり強 1 較少量
- BH-AN G P07**  
1. 10YK/2 凝結土 しまり強 1 較少量  
2. 10YK/6 黄褐色土 しまり強 1R(φ5~10mm) 少量 1 較少量

- BP-AG G P04**  
1. 10YK/2 凝結土 しまり強 1 較少量 77 程度
- BP-AN G P05**  
1. 10YK/2 凝結土 しまり強 1 較少量  
2. 10YK/2 凝結土 しまり強 1 較少量 1R(φ10mm) 少量  
3. 10YK/6 黄褐色土 しまり強 1 較少量 1R(φ10~30mm) 少量
- BP-AX G P02**  
1. 10YK/2 凝結土 粘性弱 しまり強 φ2~5mm の 1R と 1 較少量 Ar-A 程度  
2. 10YK/1 褐色土 粘性弱 しまり強 1R(φ2~5mm) 少量
- BK-AL G P01**  
1. 10YK/2 凝結土 しまり強 1R(φ10~20mm) 少量 1 較少量  
2. 10YK/6 黄褐色土 しまり強 1 較少量
- BS-AN G P01**  
1. 10YK/2 凝結土 粘性弱 しまり強 1 較少量



第 346 図 ビット



第 347 図 ビット出土遺物

第 87 表 ビット出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABOK	にぶい黄褐色	良好	口縁～胴部片	地名寺式
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIX	にぶい黄褐色	良好	口縁～胴部片	地名寺式
3	土師器 杯	(11.8)	(3.6)	-	ABCI	暗褐色	良好	2/5	底部へう削り 平底 内面指線圧痕 $\alpha$
4	土師器 杯	13.0	3.6	-	ABIK	褐色	良好	9/10	底部・底部へう削り 丸底 内面指線圧痕 底部外面磨書「寺」
5	粗埴 油瓶	-	(1.8)	-	AB	灰白	良好	胴部片	肥前系遠付 18c～19c前
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGIM	暗黄褐色	良好	胴部片	後期 安行式
7	陶器 刷毛目煎	-	(2.7)	-	B	黒褐色	良好	口縁部片	肥前系 18c前～中
8	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHJK	暗赤褐色	良好	胴部片	糸倉文系
9	陶器 刷毛目煎	10.3	5.3	4.2	B	褐色	良好	9/10	肥前系 打刷毛目 18c前～中
10	土師質土器 かわらけ	(8.1)	(1.2)	(7.8)	ABH	にぶい褐色	良好	口縁～底部片	底部糸切り 近世
11	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABHJ	にぶい黄褐色	良好	胴部片	糸倉文系
12	陶器 磁鉢	-	(3.5)	-	AB	褐色	良好	胴部片	丹波系 現存の磨目は8本
13	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABLN	暗褐色	良好	胴部片	野島式
14	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	褐色	良好	胴部片	地名寺式
15	コクロ土師器 瓶	-	(1.3)	(8.0)	AB	褐色	不良	体～底部片	糸切り後全部へう削り
16	瓦質土器 ほうろく	(18.0)	(3.4)	(35.0)	AB	黒褐色	良好	口縁～底部片	18c
17	土製品 紡錘車	長さ(3.8)cm	幅(3.2)cm	厚さ1.5cm		重さ12.6g 押定径(5.0)cm 孔径(1.0)cm			安曇ミナガ 裏面に刻書「万」
18	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	にぶい褐色	良好	胴部片	野島式

## 12 谷地形

宮下遺跡は江南台地の北東端縁辺部に位置し、遺跡の南側には東-西方向で幅約50m開析谷がある。今回の調査で確認された2箇所(箇)の谷地形は、この開析谷に流れ込む小河川によって作り出されたものである。なお、平成20年から21年にかけて実施された第三次調査(宮下遺跡Ⅱ)の調査でも開析谷に流れ込む谷地形が1箇所確認されている。

### 東谷(第349・350図)

**位置** AS-AS・AT、AT-AS・AT、AV-AJ～AQ、AW-AJ～AQ、AX-AE・AJ～AL、AY-AEの各グリッドに位置する。

**規模** 概ね北-南方向の流れで、AX・AY-AEグリッドで谷頭が確認された。AW-AJグリッドからAW-APグリッドまでは直線的で、AV-APグリッドからAS-AS、AT-ATグリッドにかけて東方向に屈曲する。全長は160m以上と推定され、幅は8.4m～16m、確認面からの深さは最も深いところで0.88mである。また、AS-AS、AT-ATグリッドでは幅が8.4mで、谷の幅が最も狭い箇所である。最も高い北端と最も低い南端では約4mの高低差がある。

**概要** 調査区の東側で確認され、断面は平凸レンズ状である。北から南に傾斜する地形に対し並行して走行している。確認面はローム層で太い溝状に落ち込んだ地形に黒褐色土・黒色土が堆積している。上層の約0.3mは黒褐色土であり、浅間Bテフラ(As-B)を多量に含む。この土層中及び下層から縄文後期・晩期の土器や、奈良・平安時代の土師器・須恵器などが出土している。なお、50・51は浅間Bテフラを含む土層より上層からの出土である。なお、西谷では谷内に谷津田が確認されているが、東谷では確認されなかった。東谷は幅が狭く流れが一定していなかったため、谷津田には向いていなかったものと考えられる。

**遺物(第351～353図、第88表)** 1～6は、縄文時代後期安行1式土器。1は、波状口縁を呈し、山形波頂両端に瘤が付き、波頂部下縦長の貼付文が配置されている。口唇部にヘラ状工具による刻目文を巡らす。胴部は摩耗しており文様はわかりづらいが、沈線区画の刺突列が施文されている。2も同様の文様構成となる。3は屈曲する口唇部に2条の沈線を施文し、縦長の瘤状貼付文を貼付している。4は、平縁の深鉢口縁部で、縦長の瘤状の貼付文が配置されている。胴部の文様は摩耗しており不明。小さな瘤状の貼付文が配置されている。5は、折返し状を呈する平縁の口縁部片。折返し部に刺突列が施文されている。6は、平縁の深鉢口縁部。口唇部直下に縦長の瘤状の貼付文を配置し、沈線区画の刺突列を施文している。胴部は摩耗し文様はわかりづらいが、口縁部と同様の文様構成が施文されている。7・8は打製石斧である。7の石材はホルンフェルスである。8の石材は砂岩である。9・11は磨石である。9の石材は閃緑岩である。11の石材は砂岩である。10は石皿である。石材は閃緑岩である。12・13は土師器環である。12・13は口縁が直立しつづ立ちあがる。底部は丸底である。14～31は須恵器環である。14・15は底部が糸切後全面ヘラ削りである。16～25は底部が糸切後周辺ヘラ削りである。25は底部外面にヘラ書きされている。31は底部が糸切後無調整である。32・33・35は未還元の須恵器環と皿である。34は須恵器塊である。36・37は須恵器高台塊である。38は土師器鉢である。口縁が斜めに

広がるように立ちあがる。39・40はロクロ土師器の埴である。内面を黒色処理後横方向に磨いている。41は灰軸陶器長頸瓶である。42は須恵器甕である。末野産で胴部外面に叩き目工具痕がみえ、内面は円形状の工具痕がみえる。43は須恵器広口長頸瓶南比企産である。胴部は細身で長頭の口縁部はラッパ状に開く。平常宮土器分類による「壺G」に比定され、Ⅱ期に帰属する。44は須恵器甕である。末野産で胴部から底部まで残存し、内面に指頭圧痕が多数みえる。45は土師質土器土釜である。46は土師器鉢である。47・48は土師器甕である。47は口縁が「コ」の字状に外反する。48は「く」の字よりも「コ」の字甕に近いものである。49は土師器台付甕の脚部である。50は13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗で、外面に片切彫りで蓮弁文が彫られ見込みと体部の境に沈線が巡る。高台周辺を除き青緑釉が施される。51は鉄製品である。板状のものを両側面と下半部で折り畳み、それぞれ鋸で留めている。

### 西谷（第348図）

位置 BJ - AU・AV, BK・BL - AT ~ AV, BM - AT ~ AW, BN ~ BP - AJ ~ AV, BQ - AR ~ AW, BR ~ BT - AR ~ AU, BU - AR・ASの各グリッドに位置する。

規模 北西-南東方向の流れで、ほぼ直線的である。谷の左岸に一箇所、右岸に二箇所小さな支谷が入っている。谷幅は支谷がないところで19.6 m ~ 25.2 m、支谷の箇所は北西から28.8 m、35 m、南東部が推定37 mである。確認面からの深さは最も深いところで0.84 mである。最も高い北西端と最も低い南東端では約0.9 mの高低差がある。

概要 調査区の西側で確認され、断面は平凸レンズ状である。北東から南西に傾斜する地形に対し直交して走行している。確認面はローム層で幅広の溝状に落ち込んだ地形に黒色土が堆積している。東谷では覆土から浅間Bテフラが確認されているが、西谷では確認されていない。この黒色土から縄文中期・後期の土器や、奈良・平安時代の土師器・須恵器、瀬戸美濃系陶器などが出土している。なお、西谷内には幅約22 m、長さ約80 mの江戸時代と思われる谷津田の水路跡が確認されている。発掘調査を実施した冬場でも湧水が著しかったことから、この湧水を利用した田が広がっていたと考えられる。

遺物（第354図、第89表） 1 ~ 5・7は、縄文中期中期加曽利E式土器。1は、胴部片で低い隆帯を横位に貼付し隆帯に沿って沈線を施文した後、縦位に沈線を施文している。2は、胴部片で、1条の沈線が垂下している。3は、胴部片で、1条の沈線が横位に施文されている。4は、単節LR縄文が斜位に施文されている。5は、屈曲する口唇部下に1条の沈線を巡らせている。6は、後期称名寺式土器。沈線がJ字状に施文されている。7は、地文に単節RL縄文を施文し、1条の沈線を垂下させている。8は、磨製石斧である。石材は緑色凝灰岩で、片刃に近く、乳棒状石斧である。基部が欠損している。9は磨石である。石材は砂岩で、右半分が欠損する。10は須恵器坏である。南比企産で、底部が糸切後周辺へラ削りである。底部はへラ書きされている。11は土師器坏である。内面に放射状暗文が施されている。口縁は直立しつつ腰をもって立ちあがる。12は須恵器長頸瓶の底部である。13・14は瀬戸美濃系陶器で、13は口縁部内外面に灰釉が施される古瀬戸緑釉小皿である。古瀬戸後Ⅲ期（15世紀前半）のもの。14は17世紀末~18世紀前半の内外面にロクロ痕が顕著な丸碗で、内外面に鉄釉が施される。

西谷25トレンチ北壁断面

X=58.0

X=57.0

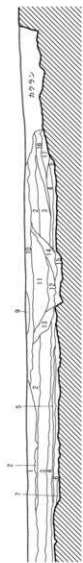
X=56.0



X=58.0

X=57.0

X=56.0



西谷27トレンチ東壁断面

X=58.0

X=57.0



X=58.0

X=57.0

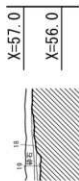


第348図 西谷土層断面図

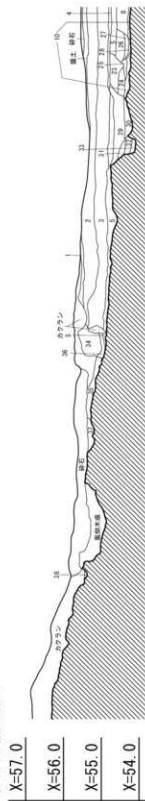




東谷北壁断面



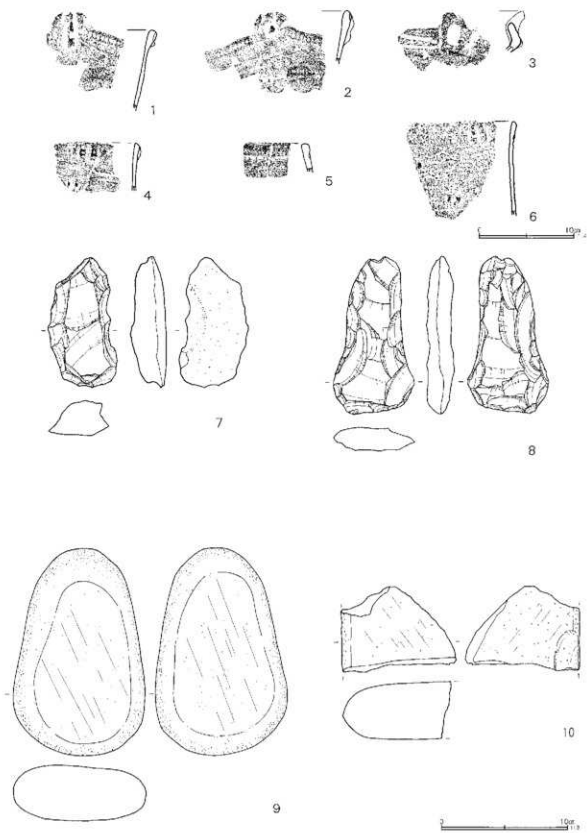
東谷南壁断面



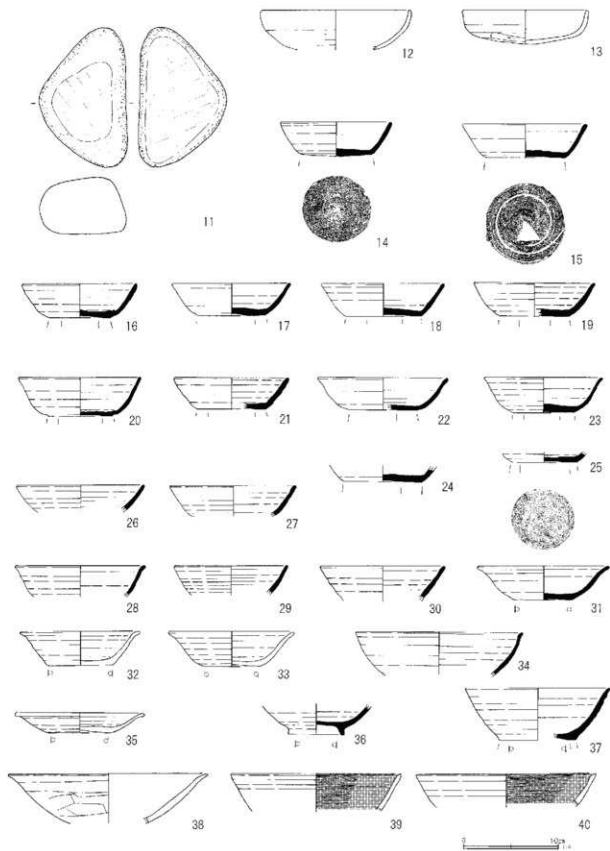
第 349 図 東谷土層断面図 1



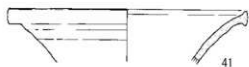




第 351 図 東谷出土遺物 1



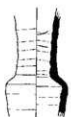
第 352 図 東谷出土遺物 2



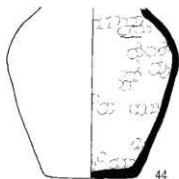
41



42



43



44



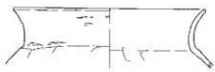
45



46



47



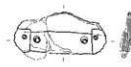
48



49



50



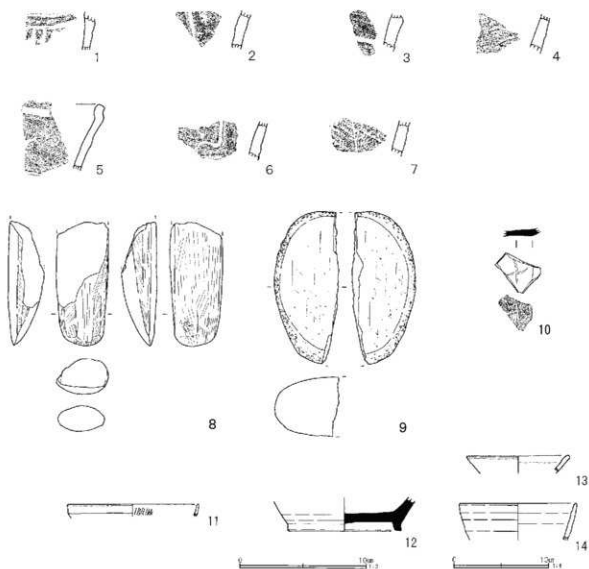
51



第 353 図 東谷出土遺物 3

第 88 表 東谷出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	こぶい黄褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	灰黄褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	こぶい褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	灰黄褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	褐色	良好	口縁部片	後期 安行 1 式 表面荒れている
7	石器 打製石斧	長さ 10.3cm	幅 5.5cm	厚さ 2.8cm	重さ 165.0g				石材ホルンフェルス
8	石器 打製石斧	長さ 12.4cm	幅 6.4cm	厚さ 2.2cm	重さ 198.0g				石材砂岩 磨形
9	石器 磨石	長さ 22.0cm	幅 14.0cm	厚さ 5.9cm	重さ 2860.0g				石材閃緑岩
10	石器 石皿	長さ (9.0)cm	幅 (12.1)cm	厚さ 6.0cm	重さ 950.0g				石材閃緑岩
11	石器 磨石	長さ 14.8cm	幅 9.4cm	厚さ 6.0cm	重さ 1160.0g				石材砂岩
12	土師器 杯	(15.6)	(4.2)	-	ABIK	褐色	良好	口縁～体部片	底部へう削り 丸底
13	土師器 杯	13.0	3.6	-	ABIK	褐色	良好	90%	底部へう削り 丸底
14	須恵器 杯	11.6	3.6	7.6	ABFI	灰	良好	80%	甕比企産 糸切後全面へう削り 口縁部自然釉付着
15	須恵器 杯	13.0	3.6	8.4	ABCFI	灰	良好	70%	甕比企産 糸切後全面へう削り 口縁部自然釉付着 底部内面磨粒痕あり
16	須恵器 杯	(12.2)	3.6	8.4	ABCFH	灰白	良好	70%	甕比企産 糸切り後周辺へう削り
17	須恵器 杯	(12.4)	3.4	7.2	ABFHMN	灰	良好	70%	甕比企産 糸切後周辺へう削り
18	須恵器 杯	(12.8)	3.5	(8.0)	ABFIN	灰	良好	60%	甕比企産 糸切後周辺へう削り
19	須恵器 杯	(12.7)	3.5	(7.4)	AFIN	黄灰	普通	40%	甕比企産 糸切後周辺へう削り
20	須恵器 杯	(12.8)	4.1	(8.6)	ABFI	灰白	良好	30%	甕比企産 糸切後周辺へう削り
21	須恵器 杯	12.0	3.4	(7.2)	ABFIN	灰黄	良好	40%	甕比企産 糸切後周辺へう削り 底部内面磨粒痕あり
22	須恵器 杯	(13.8)	3.4	(7.0)	AFIN	灰	普通	30%	甕比企産 糸切後周辺へう削り
23	須恵器 杯	(12.4)	3.7	6.8	ABFIN	灰	良好	60%	甕比企産 糸切り後周辺へう削り
24	須恵器 杯	-	(1.7)	(8.2)	ABFIN	灰	良好	底部片	甕比企産 糸切後周辺へう削り 底部内面磨粒痕あり
25	須恵器 杯	-	(1.2)	7.0	ABFHM	灰	良好	底部片	甕比企産 糸切後周辺へう削り 底部内面へう書き「十」あり
26	須恵器 杯	(13.4)	(2.8)	-	ABIN	灰	良好	口縁～体部片	甕比企産
27	須恵器 杯	(13.2)	(3.3)	-	ABFN	灰	良好	口縁～体部片	甕比企産 口縁部自然釉付着
28	須恵器 杯	(13.6)	(3.3)	-	ABFN	黄灰	良好	口縁～体部片	甕比企産
29	須恵器 杯	(11.8)	(3.1)	-	ABF	灰	良好	口縁～体部片	甕比企産 口縁部自然釉付着
30	須恵器 杯	(13.0)	(3.7)	-	ABFIN	灰	良好	口縁～体部片	甕比企産
31	須恵器 杯	(13.8)	3.6	8.0	ABFHMN	灰	良好	90%	未野産 糸切のみ
32	須恵器 杯	(12.8)	3.6	(8.8)	ABGMN	こぶい黄褐色	不良	90%	未野産 糸切のみ 二次焼成あり 未還元で酸化焙焼成のまま
33	須恵器 杯	(13.2)	3.7	(8.6)	ABHMN	褐色	普通	70%	未野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
34	須恵器 壺	(17.8)	(4.6)	-	ABFI	灰	良好	口縁～体部片	甕比企産
35	須恵器 皿	(13.3)	2.1	(8.0)	ABCI	こぶい黄褐色	不良	40%	未野産 糸切のみ 未還元で酸化焙焼成のまま
36	須恵器 高台碗	-	(3.2)	(8.0)	ABHN	灰	不良	体～底部片	未野産 糸切のみ
37	須恵器 高台碗	(15.2)	(5.5)	-	ABIN	灰	普通	90%	未野産 糸切のみ
38	土師器 鉢	(21.0)	(5.2)	-	ABI	褐色	良好	口縁～体部片	体部～底部へう削り 丸底
39	ロクロ土師器 埴	(17.8)	(4.0)	-	ABI	こぶい黄褐色	不良	口縁部片	内面横位ミガキ 内面内黒処理
40	ロクロ土師器 埴	(18.9)	(3.5)	-	ABDI	こぶい黄褐色	不良	口縁部片	内面横位ミガキ 内面内黒処理
41	灰釉陶器 長頸瓶	(25.0)	(5.6)	-	AB	黄褐色	良好	口縁部片	
42	須恵器 壺	-	(18.2)	-	ABGLM	黄灰	良好	胴部片	未野産
43	須恵器 広口長頸瓶	-	(11.3)	-	AB	灰	良好	胴～胴部片	甕比企産 胴部から頸部への継ぎ目に接合痕 頸部内面に粘土起痕
44	須恵器 壺	-	(27.5)	(14.4)	ABGLM	黄灰	良好	90%	未野産
45	土師土器 土甕	(18.4)	(11.8)	-	ABIL	黄褐色	不良	口縁～胴部片	
46	土師器 鉢	(18.8)	(12.9)	(8.2)	ABIM	明赤褐色	良好	90%	
47	土師器 壺	(18.2)	(4.3)	-	ABIM	明赤褐色	良好	口縁部片	
48	土師器 壺	(20.1)	(6.2)	-	ABIM	褐色	良好	口縁部片	
49	土師器 台付壺	-	(4.0)	(8.2)	ABIK	明赤褐色	良好	胴部片	
50	磁器 青磁碗	-	(3.8)	(5.7)	AB	灰オリーブ	良好	体～底部片	鎌倉系 5 群 13c 代 蓮井文
51	灰製品 板状金具	長さ (3.7)cm	幅 7.2cm	厚さ 0.9cm	重さ 20.9g				



第 354 図 西谷出土遺物

第 89 表 西谷出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGK	橙	良好	胴部片	加蓋利瓦式
2	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	橙	良好	胴部片	加蓋利瓦式
3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGK	橙	良好	胴部片	加蓋利瓦式
4	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	にぶい橘	良好	胴部片	加蓋利瓦式
5	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	橙	良好	口縁部片	加蓋利瓦式
6	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGJ	明赤褐	良好	胴部片	胎名寺式
7	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGK	にぶい黄褐	良好	胴部片	加蓋利瓦式
8	石器 磨製石斧	長さ(9.8)cm	幅4.1cm	厚さ(2.9)cm				重さ150.0g	石材緑色凝灰岩 乳棒状石斧
9	石器 磨石	長さ11.9cm	幅4.9cm	厚さ4.5cm				重さ396.9g	石材砂岩 破砕している
10	須恵器 埴	-	-	-	ABI	黄灰	良好	底部片	熊比企塚 糸切後周辺へ少崩り 底部外面割傷「×」
11	土師器 埴	(20.9)	(2.1)	-	ABI	明赤褐	良好	口縁片	体部内面放射状線文
12	須恵器 長頸瓶	-	(3.8)	(12.0)	AB	黄灰	良好	底部片	
13	陶器 縁輪小皿	(16.6)	(1.8)	-	ABO	黄黄橙	良好	口縁一休部片	瀬戸美濃系 吉徳田(1420-40)
14	陶器 丸罎	(12.2)	(3.6)	-	AB	黄褐	良好	口縁一休部片	瀬戸美濃系 17c末~18c初 瀬戸市市左衛門岡出土丸罎に類似

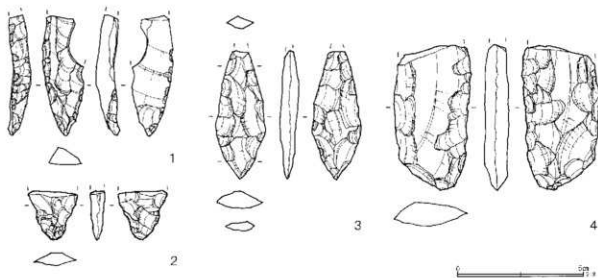
### 13 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物および遺構外出土遺物を掲載する。縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶磁器、土製品、金属製品、石製品が出土している。

遺物（第355～365図、第90表） 1はナイフ形石器である。二側縁加工のものである。上半部は欠損している。2～4は槍先形尖頭器である。2の石材は黒曜石で、基部のみ残存している。3の石材は黒色頁岩で、左右対称に両面加工されていて、先端部が欠損している。4の石材はガラス質黒色安山岩で上半部を欠損しているが、素材剥片の大きさ・加工の状態から大型のものと考えられる。また、末端は一端欠損したものを再加工したと考えられ、スクレイパーの可能性もあるが、加工が平坦加工であり、今回は槍先形尖頭器と捉えた。

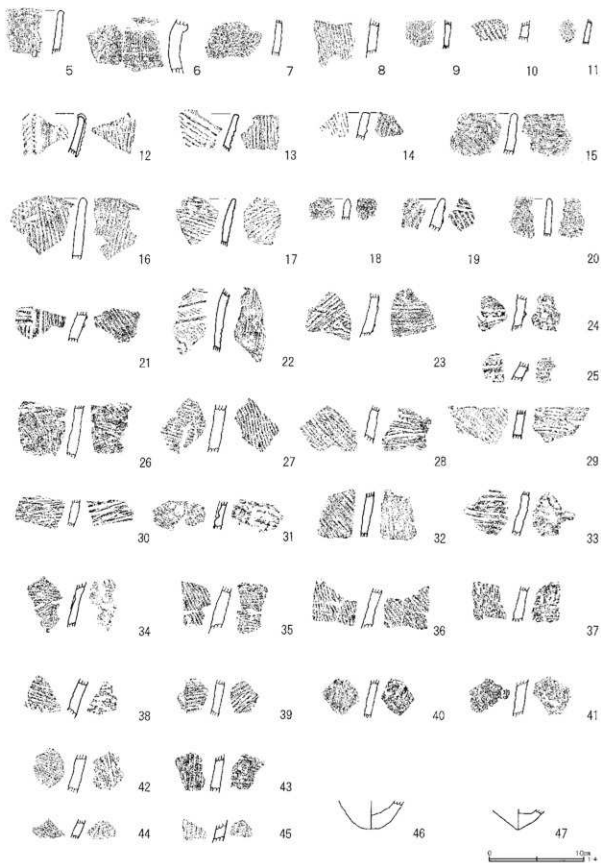
5～11は、縄文時代早期条痕系土器。5は、口唇部が角頭状を呈し、口唇部直下が指頭による成形が加えられ無文帯となっている。口縁部には捺糸Rが縦位に施文されている。

6は、口唇部が丸頭状を呈し、肥厚外反する。口唇部は無文となり、口縁部には捺糸Rが縦位に施文されている。7は、無文の胴部下半の破片。8は捺糸Rが、9は捺糸Lが縦位に施文されている胴部破片。10・11は、単筋RL縄文が斜位に施文されている胴部破片。12～55は、縄文時代早期条痕系土器。12は、波状口縁を呈し、刻みの加えられた細隆起線を2条縦位に貼付している。隆起間を無文とし、外側に綾杉状に集合沈線を斜位に充填している。胎土に微量の繊維を含む。13は、口唇部が角頭状を呈し、微隆起線を斜位に貼付し、並行して集合沈線も斜位に施文している。胎土に繊維を微量に含む。14は、口唇部が角頭状を呈し、集合沈線が斜位に施文されている。胎土に繊維をやや多く含む。15は、無文の口縁部片。口唇部直下は横位、口縁部は斜位に器面調整が行われている。胎土に微量の繊維を含む。16は、山形の波状口縁で、口唇部が丸頭状を呈す。表裏面に縦位に条痕が施されている。胎土に微量の繊維を含む。17は表裏面に斜位に条痕が施された口縁部片。胎土に繊維を微量に含む。18・20は、無文の口縁部片。胎土に微量の繊維を含む。19は、表面が摩耗しているが、2条の細隆起線が斜位に

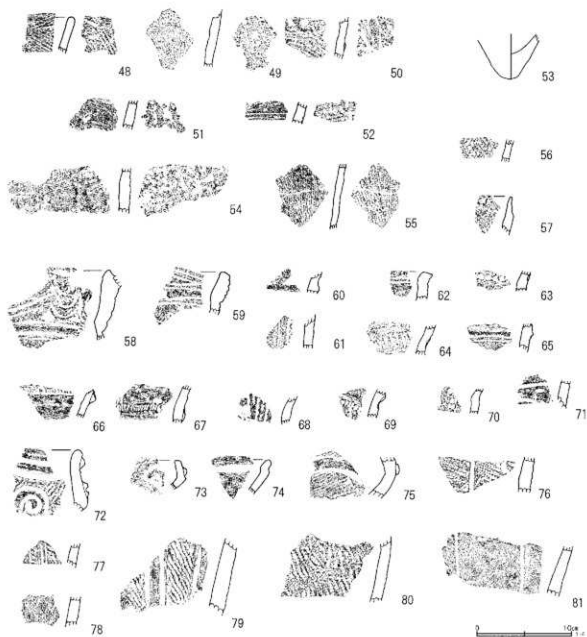


第355図 遺構外出土遺物 1



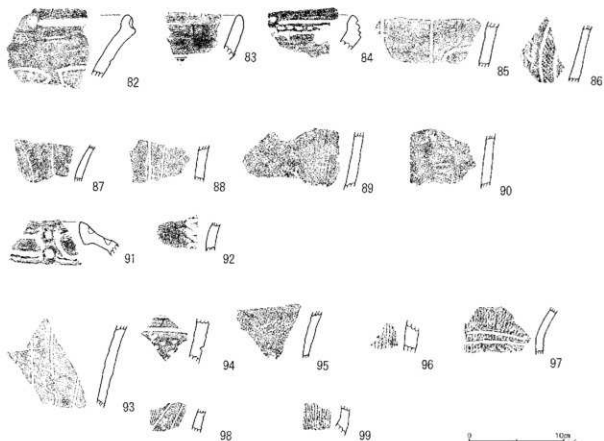


第 356 図 遺構外出土遺物 2



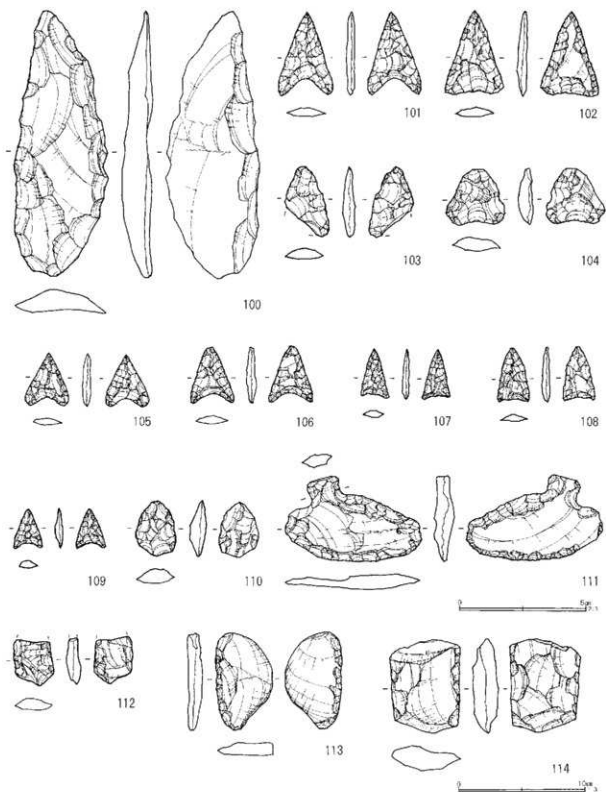
第 357 図 遺構外出土遺物 3

貼付されている口縁部片。胎土に微量の繊維を含む。21は、細隆起線を縦位に1条貼付し、横位に2条の細隆起線を貼付し口縁部文様を区画し、集合沈線を充填している。胎土に微量の繊維を含む。22は、細隆起線を斜位に幾何的に貼付し、区画内を斜位の集合沈線を充填している。胎土に微量の繊維を含む。23は、微隆起線文を櫛状に貼付している。胎土に繊維を微量に含む。24は、刻みを加えられた1本の隆起線が横位に貼付されている。胎土に微量の繊維を含む。25は、刻みを加えた細隆起線を横位に2条貼付している。胎土に微量の繊維を含む。26～40・42～45・49・51・52・55は、表裏面に条痕の施された胴部片。胎土に繊維を含む。41は無文土器。胎土に繊維をやや多く含む。46は丸底状を呈する、無文の底部。胎土に繊維をやや多く含む。47・53は、やや尖底状を呈する無文の底部。胎土に繊維を含む。48は、口唇部が丸頭状を呈する口縁部片。表裏面に斜位の条痕が施されている。胎土に繊維を含む。



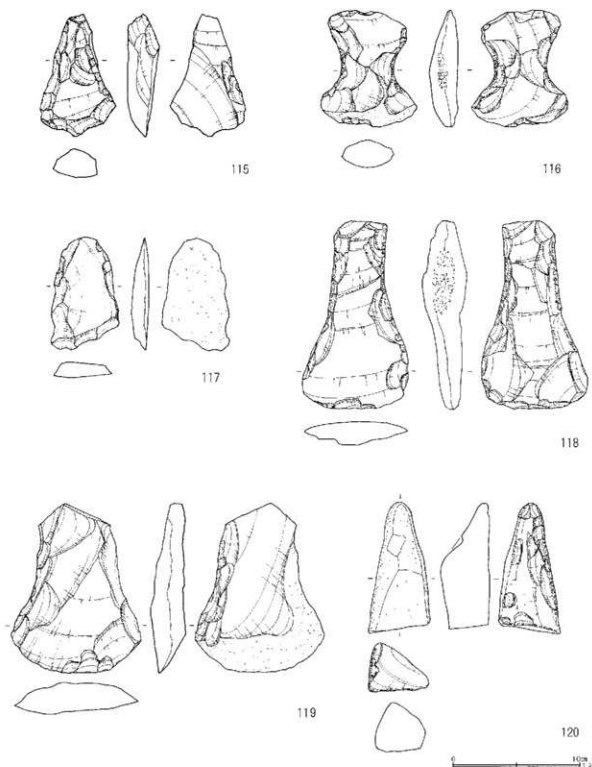
第358図 遺構外出土遺物4

雑を微量に含む。50は、細隆起線が弧状に貼付されている。胎土に繊維を多く含む。54は、4条単位の細かい条痕が縦位に施された後、横位に同様の工具で条痕が施されている。貝殻以外による施文具が用いられている。56は、縄文時代前期関山式土器。単節LR縄文を斜位に施文している。胎土に繊維をサンドイッチ状に含む。57は、前期諸磯式土器の口縁部片。単節RL縄文を斜位に施文している。58～60は縄文時代中期五領ヶ台式土器。58は、山形の波状口縁を呈し、2条の沈線を波状に口唇下に巡らせ、波頂下に三角印刻文を2つ配している。59は、波状口縁を呈し、屈曲してやや肥厚する幅狭の口縁部に、沈線で文様を施文している。60は、三角印刻文が施されている口縁部片。61～70は縄文時代中期勝坂式土器。61は、断面四角を呈する隆帯を縦位に貼付し、隆帯に沿うように2条の沈線を施文している。62は、角頭状を呈する口唇部直下に、細い三角押文を2条横位に施文している。63は、角押文が1条横位に施文された胴部片。64は、幅広の連続爪形文が横位に施文されている。65は、横位の隆帯下に、細い三角押文が2条施文されている。66は、横位の隆帯上に連続爪形文が施文されている。67は、横位の隆帯下に、連続爪形文が密に施文されている。68は、細い三角押文が縦位に施文されている。69は、断面三角形を呈する隆帯脇に、連続爪形文が施文されている。70は、連続爪形文が施文されている。71～81は縄文時代中期加曾利E式土器。71は、沈線と列点状の単沈線により文様を構成する。72は、キャリバー形を呈する深鉢の口縁部。地文に単節RLの縄文を施文し、口唇部直下に隆帯を横位に貼付し、隆帯両脇に沈線を施文している。口縁部文様には、隆帯を渦巻状に貼付している。73は、屈曲する浅鉢の口縁部片。半円状の隆帯を貼付している。74は、浅鉢の屈曲する口縁部片。75は、



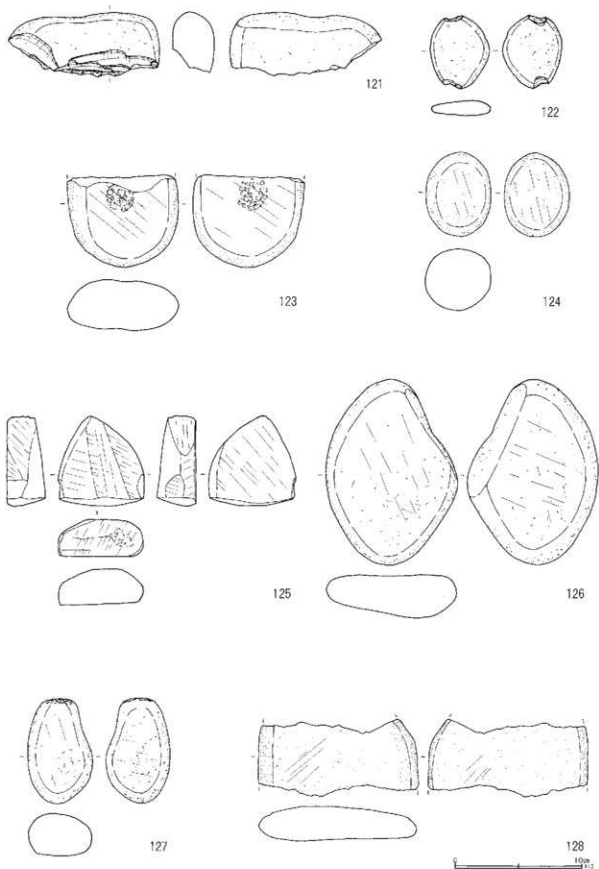
第 359 図 遺構外出土遺物 5

キャリバー形を呈する深鉢の口縁部。細い単筋RL縄文を地文に、隆帯を楕円区画に貼付している。76は、単筋RLの縄文を地文に、1条の沈線と蛇行沈線を垂下させている。77は、2条の沈線を垂下させている。

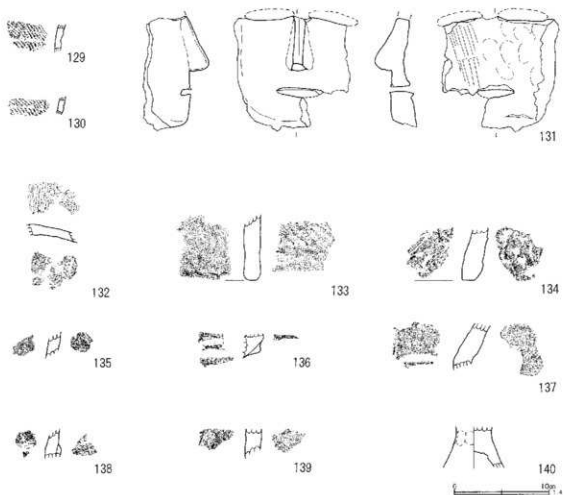


第 360 図 遺構外出土遺物 6

78 は、細い燃糸文 L が縦位に施文されている。79 は、単節 RL の縄文を地文に、2 条 1 組の沈線を垂下させ、沈線間の縄文を磨消している。80 は、単節 LR の縄文を縦位に施文している。81 は、間隔の空いた 2 条の沈線を垂下させている。94 は、曾利式土器。94 は、2 条の沈線を垂下させ、列点状の刺突を



第361図 遺構外出土遺物7

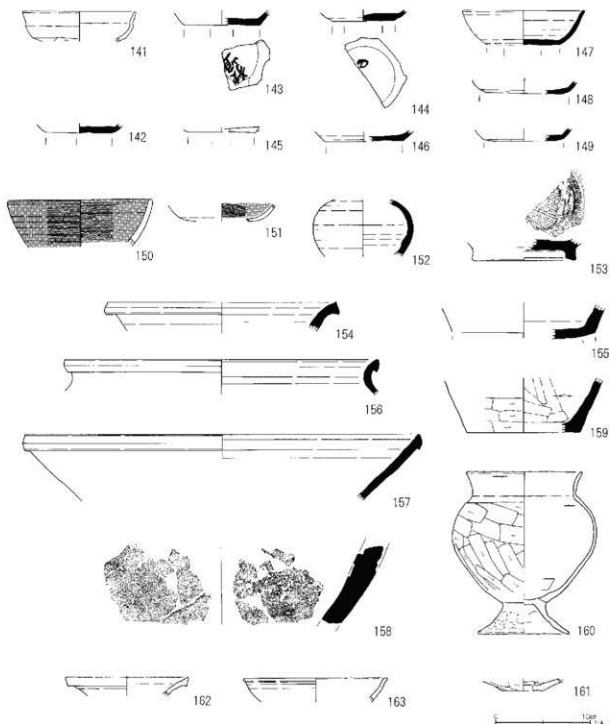


第 362 図 遺構外出土遺物 8

加えている。96・97・99 は、縄文時代中期連弧文土器。96・99 は、燃糸文 L が縦位に施文されている。97 は、燃糸文 R が縦位に施文され、2 条の沈線が横位に施文されている。82～90・93・95・98 は縄文時代後期称名寺式土器。82 は、口唇部直下に円形刺突と沈線を巡らせ、胴部に沈線で区画文を施文している。83 は、口唇部下を幅狭い無文帯とし、1 条の沈線を横位に施文している。84 は、屈曲する浅鉢の口縁部片。屈曲する口縁部に 2 条の沈線を巡らせ、沈線間に刺突を加えている。85 は、沈線を 2 条垂下させ、区画内に蛇行する沈線を施文している。86 は、沈線間に細い単節 RL 縄文を充填している。87・88 は、沈線が垂下する胴部片。89・90 は、無文の胴部片。93 は、2 条の沈線を垂下させ、沈線間に蛇行する沈線を 1 条施文している。95 は、4 条の沈線が斜位に施文されている。98 は、沈線区画に細い単節 RL 縄文が充填されている。91・92 は縄文時代後期堀之内式土器。91 は、内側に屈曲する口縁部片。沈線を楕円状に施文し、単隆帯を縦位に貼付し、丸棒状工具による刺突を縦位に 2 つ加えている。92 は、蛇行する沈線が施文されている。

100 は尖頭器である。大型の剥片を用いて主に片側に加工したものである。石材は黒色頁岩、素材・製作方法から今回は縄文時代のもと考えた。

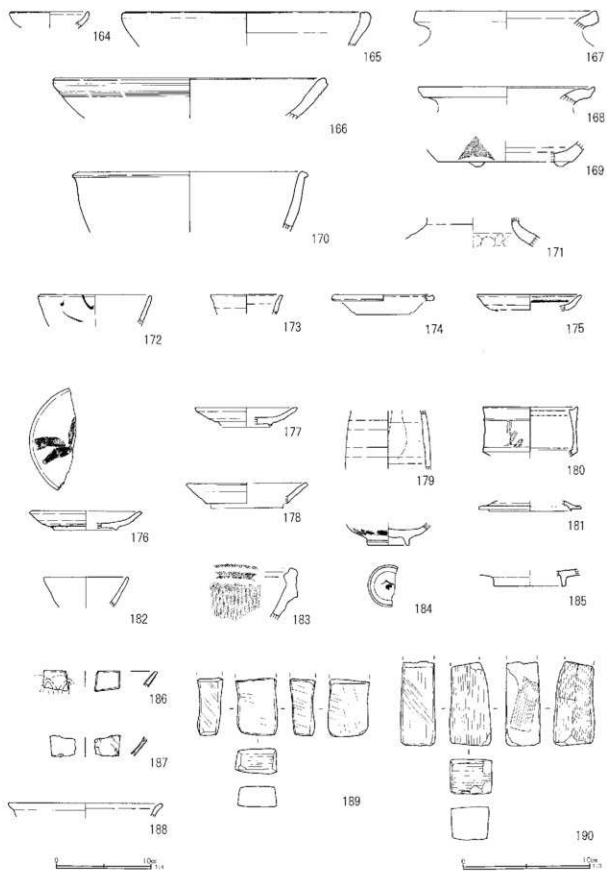
101～110 は石鏃である。101～109 は凸基無茎で、101・105・106・109 は基部が明確に抉れているもの、



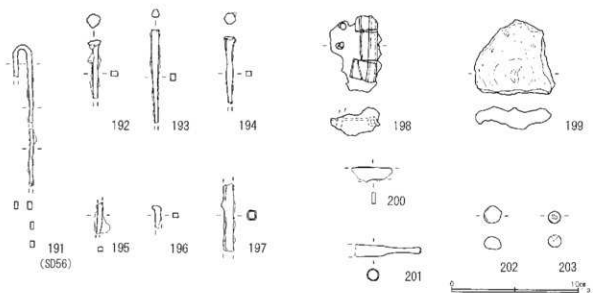
第 363 図 遺構外出土遺物 9

102・107・108 は基部がわずかに抉れているものである。110 は基部が丸くなるものである。111 は石匙である。石材はチャートで、いわゆる横型石匙である。112・113 はスクレイパーである。114～119 は打製石斧である。116 は分銅形、118 は撻形、115・117 は分割した礫に片側のみ加工したものである。120 はスタンプ型石器である。細長い礫をそのまま二つに分割し、その面を使用している。121 は礫器である。石材は頁岩であり、楕円礫の片側を加工して刃部になっている。122 は石錘である。石材は砂岩





第 364 图 遺構外出土遺物 10



第 365 図 遺構外出土遺物 11

で小型の扁平礫の長軸を凹ませた打欠石錘である。123～125、127は磨石である。125は平面形が三角形で使用面が5面のものである。縄文時代ではなく中・近世の砥石の可能性もあったが、刃物傷が観察されないことからこの時期のものとして捉えた。126・128は石皿である。楕円礫をそのまま使用している。129・130は裏の胴部破片である。外面に粘土紐が明確に残り、0段多条のRL縄文を縦方向に施文している。同一個体で、弥生時代後期後半の吉ヶ谷式土器と考えられる。131～139は埴輪である。131は人物埴輪の顔部分である。132は人物埴輪の頭部の髷部分で、133は家形埴輪の一部と考えられる。134・135は形象埴輪である。136、137は朝顔形埴輪である。136は突帯部分である。138・139は円筒埴輪である。138は突帯部分である。140は土師器高坏である。脚部の一部が残存している。形状、製作技法から古墳時代後半鬼高期のもと考えられる。141は土師器坏である。口縁から体部にかけて緩やかなS字を描くように立ちあがり、底部は平底風である。142～144、146～149は須恵器坏である。145は土師器坏である。142～147は底部が糸切り後周辺ヘラ削りである。143・144は底部外面に墨書がある。150・151はロクロ土師器坏である。150は内外面が、151は内面のみが黒色処理後横方向に磨いている。152～154は須恵器瓶である。154は口縁部片、152は胴部片、153・155は底部片である。156は須恵器壺の口縁部片、157～159は須恵器甕である。160は土師器台付甕である。161は土師器甕の底部片である。162は灰軸陶器長頸瓶の口縁部片である。163は灰軸陶器坏の口縁部片である。

164～169は在地産の土器で、164はかわらけ、165は瓦質の土鍋で、口縁端部が内側に突出し口唇部中央が凹む。15世紀中頃のもの。166は片口鉢である。口唇部中央が凹み口縁部外面には回転工具痕が巡る。14世紀後半。167は14世紀代と思われる瓦質甕の口縁部で、口縁部内面は若干凹む。168は器種不明の瓦質土器で端部が大きく外反し斜め上方に延びる。甕と考えて実測したが、燗台裾部の可能性もある。169は火鉢で18世紀以降のもの。外面には回転工具による文様が施される。170・171は常滑系陶器である。170は口縁端部が外側に張り出す片口で、常滑第6a形式のものである。13世紀後半。171は玉縁口縁壺の肩部で内面に指頭痕が残る。172～180は瀬戸美濃系陶器である。172は胎土が陶

器質のいわゆる陶胎染付の碗で外面に須須で草花文が描かれる。18世紀後半から19世紀前半。173は口縁部が外反する小碗で内外面に灰釉が施される。174～178は皿である。174は大窯第4段階末の折縁皿で内外面に灰釉が施される。175は17世紀前半の鉄絵皿で口縁部内面に二条の圈線が描かれ、内外面に長石釉が施される。176は見込みに蘭竹文が鉄で描かれる皿で、内面と高台内に円錐ピンの痕が残る。高台周辺を除き灰釉が施される。177は丸皿で高台周辺を除き灰釉が施される。178は口縁部が外反する反り皿で内外面に灰釉が施される。176～178は17世紀中頃のものである。179は徳利で貧乏徳利と呼ばれる。内面はロク口痕が明瞭で外面と内面の一部に灰釉が施される。18～19世紀。180は筒形香炉で口縁端部の断面が三角形を呈する。外面には丸ノミによる半菊文が彫られる。口縁部内面から腰部にかけて灰釉が施される。181は志戸呂系陶器の蓋である。笠の端部は水平方向に引き出され、かえりの断面は三角形に近く低い。笠部上面に灰釉が施される。18世紀代。182は18世紀代の信楽系陶器小杉茶碗である。183は18世紀後半の堺・明石系陶器挿鉢である。口縁部に緑帯が形成され外面には二条の沈線が巡り、口縁部内側に小突起が形成される。184・185は肥前系磁器である。184はくらわんか碗と呼ばれる碗で、外面に雪輪梅樹文、高台内には崩れた岩波文が描かれる。18世紀代。185は高台高が高い中皿で、高台内が深く削り込まれる。19世紀のもの。186～188は龍泉窯系青磁である。186は蓮弁文碗で外面に片切彫りで蓮弁が彫られる。187は体部内面に柳描きによる飛雲文を施す碗である。186が13世紀代、187が12世紀中～13世紀である。188は口縁部が外反する鉢で15～16世紀である。189・190は砥石である。平面・断面形は長方形である。砥面は189が4面、190が2面であり、櫛歯状ガナ痕が残されている。191～203は金属製品で、191～200は鉄製品である。191は鑷子状金具である。発掘段階で遺構外グリッドで取り上げたが、実際は第56号溝跡覆土上層から出土した遺物である。ここでは遺構外出土遺物で取り扱い、調査のまとめでは上述の溝跡出土遺物として扱った。192から195は釘である。196・197は棒状金具である。198は金具で蝶番状に見えるものである。199は椀形滓である。200は刀子である。201は鋼製品でキセルの吸口である。202・203は弾丸と考えられるもので、202が11g、203が4.1gである。

第90表 遺構外出土遺物観察表

No.	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	S155	石器 ナイフ形石器	長さ(4.8)cm	幅1.6cm	厚さ0.9cm	重さ3.2g				石材チャート
2	B1-AN G	石器 楕円形尖頭器	長さ(2.0)cm	幅(2.0)cm	厚さ0.6cm	重さ1.5g				石材黒色頁岩 旧石器時代
3	BS-AN G	石器 楕円形尖頭器	長さ(5.1)cm	幅2.0cm	厚さ0.8cm	重さ6.6g				石材黒色頁岩 旧石器時代
4	B1-AL G	石器 楕円形尖頭器	長さ(5.8)cm	幅3.1cm	厚さ1.0cm	重さ23.4g				石材ガラス質黒色安山岩 旧石器時代
5	AZ-AP G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	明赤褐色	良好	口縁部片	弥生文系
6	S135	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	こぶい褐色	良好	口縁部片	弥生文系 夏島式ナ
7	S118	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG	褐色	良好	胴部片	弥生文系
8	S134	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABOK	褐色	良好	胴部片	弥生文系
9	AZ-AP G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGHK	こぶい褐色	良好	胴部片	縄間式
10	BK-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIK	こぶい褐色	良好	胴部片	弥生文系
11	S114	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	こぶい褐色	良好	胴部片	弥生文系
12	BS-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIL	褐色	良好	口縁部片	弥生文系 第356図11と同一個体 波状口縁
13	B1-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABIL	褐色	良好	口縁部片	弥生文系 第356図12と同一個体 波状口縁
14	B1-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1/JL	明赤褐色	良好	口縁部片	弥生文系
15	B1-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABKLM	こぶい褐色	良好	口縁部片	弥生文系
16	B1-AT G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KN	褐色	良好	口縁部片	弥生文系
17	B1-AD G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABCM	こぶい黄褐色	良好	口縁部片	弥生文系
18	B1-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	こぶい褐色	良好	口縁部片	弥生文系
19	B1-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AD1M	褐色	良好	口縁部片	弥生文系
20	BC-AD G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABKLM	こぶい褐色	良好	口縁部片	弥生文系

No.	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
21	90-AK G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	銅部片	多岐文系
22	5169	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
23	99-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	明赤褐色	良好	銅部片	多岐文系
24	91-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
25	98-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1J	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
26	91-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1	褐色	良好	銅部片	多岐文系
27	9F-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	銅部片	多岐文系
28	9A-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1	褐色	良好	銅部片	多岐文系
29	9P-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG1L	明褐色	良好	銅部片	多岐文系
30	9H-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1L	褐色	良好	銅部片	多岐文系
31	91-AM G P3	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG1LM	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
32	91-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	明褐色	良好	銅部片	多岐文系
33	9P-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
34	91-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1MN	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
35	9A-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	褐色	良好	銅部片	多岐文系
36	9A-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	銅部片	多岐文系
37	9P-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	褐色	良好	銅部片	多岐文系
38	9J-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JK	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
39	90-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
40	90-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	A1LM	褐色	良好	銅部片	多岐文系
41	9P-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABLM	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
42	9P-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	褐色	良好	銅部片	多岐文系
43	9P-AO G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
44	9K-AP G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABD1M	明赤褐色	良好	銅部片	多岐文系
45	9J-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABJ	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
46	9P-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG1KM	明赤褐色	良好	底部片	多岐文系
47	9J-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	褐色	良好	底部片	多岐文系
48	9S-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	紅褐色	良好	口縁部片	多岐文系
49	AS-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
50	5143	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABK	明赤褐色	良好	銅部片	多岐文系
51	AS-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
52	90-AS G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGM	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
53	9N-AR G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	底部片	多岐文系
54	90-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABG1	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
55	90-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABL	紅褐色	良好	銅部片	多岐文系
56	9J-AU G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	明赤褐色	良好	銅部片	岡山式
57	9J-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1	紅褐色	良好	口縁部片	群馬式
58	9P-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1MN	紅褐色	良好	口縁部片	五箇ヶ台式
59	9P-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1MN	紅褐色	良好	口縁部片	五箇ヶ台式
60	9P-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	紅褐色	良好	口縁部片	五箇ヶ台式
61	9P-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1MN	赤褐色	良好	銅部片	群馬式
62	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	紅褐色	良好	口縁部片	群馬式
63	5135	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	紅褐色	良好	銅部片	群馬式
64	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	紅褐色	良好	銅部片	群馬式
65	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	紅褐色	良好	口縁部片	群馬式
66	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	明赤褐色	良好	口縁部片	群馬式
67	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	明赤褐色	良好	銅部片	群馬式
68	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	銅部片	群馬式
69	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1	褐色	良好	銅部片	群馬式
70	5132	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	銅部片	群馬式
71	9P-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
72	9B-AP G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABM	黄褐色	良好	口縁部片	加賀利氏式
73	9A-AP G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	口縁部片	加賀利氏式
74	9M-AU G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1LM	明赤褐色	良好	口縁部片	加賀利氏式
75	9R-AT G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	口縁部片	加賀利氏式
76	90-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
77	9N-AR G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB	紅褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
78	5180	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
79	9M-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
80	91-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
81	91-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	明赤褐色	良好	銅部片	加賀利氏式
82	91-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	褐色	良好	口縁部片	地名寺式
83	9J-AL G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABOK	褐色	良好	口縁部片	地名寺式
84	9P-AR G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	紅褐色	良好	口縁部片	地名寺式

No.	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
85	BP-AF G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
86	BN-AV G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AH1M	焼	良好	銅部片	特名寺式
87	AN-AR G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1M	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
88	S175	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABDH1M	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
89	AS-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1K	焼	良好	銅部片	特名寺式
90	AS-AN G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	焼	良好	銅部片	特名寺式
91	AN-AR G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1KM	にぶい焼	良好	口縁部片	特名寺式
92	BN-AS G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
93	S175	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGH1M	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
94	S175	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	にぶい焼	良好	銅部片	資料式
95	S160	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1M	透黄焼	良好	銅部片	特名寺式
96	ZB-AM G	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABGK	焼	良好	銅部片	透黄文系
97	BS-AF G	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1JK	焼	良好	銅部片	加蓋判式に付る透黄文系
98	S146	縄文土器 深鉢	-	-	-	ABH1KM	にぶい焼	良好	銅部片	特名寺式
99	S163	縄文土器 深鉢	-	-	-	AB1KM	焼	良好	銅部片	透黄文系
100	S113	石器 尖頭鏃	長さ11.6cm	幅3.8cm	厚さ1.2cm					石材黒色頁岩
101	AV-AP G	石器 石鏃	長さ23.3cm	幅2.1cm	厚さ0.4cm					石材チャート
102	AZ-AC G	石器 石鏃	長さ23.4cm	幅2.4cm	厚さ0.4cm					石材チャート
103	AP-AN G	石器 石鏃	長さ22.8cm	幅(1.8)cm	厚さ0.5cm					石材チャート
104	BR-AN G	石器 石鏃	長さ22.2cm	幅2.4cm	厚さ0.6cm					石材黒燧石
105	SD43	石器 石鏃	長さ22.1cm	幅1.6cm	厚さ0.4cm					石材チャート
106	BE-AP G	石器 石鏃	長さ22.2cm	幅1.7cm	厚さ0.4cm					石材チャート
107	BR-AN G	石器 石鏃	長さ22.9cm	幅1.1cm	厚さ0.3cm					石材黒燧石
108	AZ-AP G	石器 石鏃	長さ22.1cm	幅1.3cm	厚さ0.3cm					石材チャート
109	S169	石器 石鏃	長さ21.6cm	幅1.1cm	厚さ0.3cm					石材黒燧石
110	S173	石器 石鏃	長さ22.2cm	幅1.6cm	厚さ0.7cm					石材チャート
111	BN-AT G	石器 石鏃	長さ23.5cm	幅3.4cm	厚さ0.8cm					石材チャート 模型石
112	BI-AM G	石器 スクレイバー	長さ(3.7)cm	幅3.9cm	厚さ1.1cm					石材ガラス質黒色安山岩
113	SK216	石器 スクレイバー	長さ27.7cm	幅4.5cm	厚さ1.2cm					石材ガラス質黒色安山岩
114	BS-AN G	石器 打製石片	長さ7.4cm	幅3.5cm	厚さ2.9cm					石材砂岩
115	BR-AD G	石器 打製石片	長さ9.7cm	幅3.9cm	厚さ2.5cm					石材頁岩
116	BS-AS G	石器 打製石片	長さ9.2cm	幅7.6cm	厚さ2.3cm					石材ホルンフェルス 分銅形
117	BJ-AD G	石器 打製石片	長さ8.8cm	幅3.5cm	厚さ1.4cm					石材頁岩
118	BS-AP G	石器 打製石片	長さ24.9cm	幅8.4cm	厚さ3.5cm					石材ホルンフェルス 磨形
119	S119	石器 打製石片	長さ17.9cm	幅13.7cm	厚さ3.7cm					石材ホルンフェルス
120	BB-AP G	石器 スラング型石鏃	長さ13.9cm	幅5.5cm	厚さ5.2cm					石材砂岩
121	BB-AP G	石器 鏃	長さ11.9cm	幅5.1cm	厚さ3.3cm					石材頁岩
122	AP-AN G	石器 石鏃	長さ5.8cm	幅4.8cm	厚さ1.2cm					石材砂岩
123	ZC-AP G	石器 磨石	長さ27.3cm	幅8.8cm	厚さ4.9cm					石材閃緑岩
124	AS-AN G	石器 磨石	長さ26.7cm	幅3.1cm	厚さ4.8cm					石材安山岩
125	ZB-AM G	石器 磨石	長さ27.1cm	幅8.6cm	厚さ3.1cm					石材砂岩
126	AZ-AQ G	石器 石皿	長さ18.6cm	幅13.8cm	厚さ4.6cm					長さ1765.9g
127	AV-AM G	石器 磨石	長さ28.3cm	幅5.1cm	厚さ3.3cm					石材閃緑岩
128	BR-AS G	石器 石皿	長さ(8.2)cm	幅17.8cm	厚さ3.7cm					石材安山岩 焼熱の痕跡あり
129	S175	弥生土器 甕	-	-	-	ABGKN	焼	良好	銅部片	沓ヶ谷式 9段 多量の乳
130	S175	弥生土器 甕	-	-	-	ABGKN	焼	良好	銅部片	沓ヶ谷式 9段 多量の乳
131	SD55 CC-AP G	埴輪 人物埴輪	長さ(8.1)cm 厚さ(5.1)cm	幅(9.1)cm 長さ169.1g		ABGLM	明赤焼	良好	埴輪片	人物埴輪 外面ナナ 内面テテ ハケ首(7本・2=四角)
132	SD55 CA-AP G	埴輪 人物埴輪	-	-	-	ABHM	透黄焼	良好	埴輪片	人物の顔・髪部
133	SD55 CA-AP G	埴輪 形象埴輪	-	-	-	ABGH1M	透黄焼	良好	埴輪片	形象埴輪
134	SD49	埴輪 形象埴輪	-	-	-	ABGM	焼	良好	埴輪片	
135	SD55 CA-AP G	埴輪 形象埴輪	-	-	-	ABG	にぶい赤焼	良好	銅部片	
136	SD55 CA-AP G	埴輪 顔形埴輪	-	-	-	ABDGHM	焼	良好	口縁部片	
137	SD55 CA-AP G	埴輪 顔形埴輪	-	-	-	ABM	透黄焼	良好	埴輪片	
138	SD55 CA-AP G	埴輪 内筒埴輪	-	-	-	ABHM	透黄焼	良好	銅部片	
139	SD55 CA-AP G	埴輪 内筒埴輪	-	-	-	AB	にぶい焼	良好	銅部片	
140	SD55 CA-AP G	土師器 高坪	-	(4.4)	-	ABGH1M	焼	良好	埴輪片	表面が荒れていて形状が不明瞭
141	AV-AP G	土師器 高坪	(11.9)	(3.2)	-	AB1K	焼	良好	口縁一部份片	
142	BR-AP G	深鉢器 坪	-	(1.0)	(7.0)	ABFG	灰黄	良好	底部片	南土企業 未切後周辺へラ削り 底部内面磨製痕あり
143	AN-AP G	深鉢器 坪	-	(1.6)	(8.0)	ABFG	灰黄	良好	底部片	南土企業 未切後周辺へラ削り 底部外面磨製「□□(装飾)」
144	SD55	深鉢器 坪	-	(1.2)	(8.0)	ABFGM	灰黄	良好	底部片	南土企業 未切後周辺へラ削り 底部外面磨製「□(装飾)」
145	AN-AM G	土師器 坪	-	(0.6)	(7.0)	AB	灰白	普通	底部片	南土企業 未切後周辺へラ削り

No.	出土位置	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
146	9H-AQ G	清漆器 杯	-	(1.1)	(8.0)	ABF	灰	良好	底部片	南比企産 糸切後全面へう附り 底部内面磨粒あり
147	9H-AL G	清漆器 杯	(12.8)	3.6	(7.6)	AB1	灰	良好	40%	南比企産 糸切後面へう附り 底部内面磨粒あり
148	9S-AP G	清漆器 杯	-	(1.5)	(8.0)	ABF	緑灰黄	良好	底部片	南比企産 底部内面磨粒あり
149	9H-AQ G	清漆器 杯	-	(1.3)	(8.0)	ABFM	緑灰	良好	底部片	南比企産 底部内面磨粒あり
150	5099 9H-AP G 5011 9H-AP G	口口土師器 壺	(15.2)	(5.0)	-	AB1	黄	普通	口縁一体部片	内外面黒色処理後横位ミガキ
151	90-AH G	口口土師器 壺	-	(1.9)	-	AB01	黄灰黄	良好	体一底部片	本野産 内面内裏処理 内面横位ミガキ
152	5D48	清漆器 瓶	-	(6.0)	-	AB	緑灰	良好	胴部片	
153	5D48	清漆器 瓶	-	(2.2)	(10.6)	ABFGHM	緑灰	良好	底部片	
154	9H-AU G	清漆器 瓶	(24.0)	(3.2)	-	AB	緑灰	良好	口縁部片	
155	9C-AO G	清漆器 長頸瓶	-	(3.7)	(15.0)	ABFG	緑灰	良好	底部片	
156	AT-AT G	清漆器 壺	(33.0)	(3.7)	-	ABGLM	緑灰黄	不良	口縁部片	
157	5D49	清漆器 壺	-	(5.8)	(12.0)	ABGM	灰	良好	底部片	本野産
158	9V-AP G	清漆器 壺	(41.7)	(7.0)	-	ABCM	黄灰	良好	口縁部片	
159	5X04	清漆器 壺	-	(8.2)	-	ABGHJMN	こぶい黄緑	良好	胴部片	本野産
160	一括	土師器 台付壺	12.2	17.1	9.5	AB1K	緑	良好	30%	外面上部横位へう附り 下部縦位へう附り
161	9I-AN G	土師器 瓶	-	(1.3)	4.0	AB1K	こぶい赤褐	良好	底部片	
162	9Y-AO G	灰釉陶器 長頸瓶	(13.0)	(2.0)	-	AB	こぶい黄	良好	口縁部片	二川原跡群産 外部磨粒
163	一括	灰釉陶器 壺	(15.0)	(2.6)	-	AB	灰白	良好	口縁部片	9-99跡 宮口墓跡群産 内外面磨粒
164	9C-AO G	土師器土師 かわらじ	(8.2)	(1.7)	-	AB0E1	こぶい黄	良好	口縁一体部片	
165	5D56	瓦質土師 土師	(25.0)	(3.2)	-	ABGLM	こぶい黄緑	不良	口縁部片	15c中
166	9C-AM G	瓦質土師 片口鉢	(28.5)	(4.6)	-	ABGLM	緑灰	良好	口縁一体部片	14c後半
167	9D-AN G	瓦質土師 壺	19.9	(1.9)	-	AB1	こぶい黄緑	良好	口縁部片	武蔵型輪帯器 14c代
168	5122	瓦質土師 器種不明	18.6	(1.8)	-	ABCM	こぶい黄緑	良好	-	
169	9H-AK G	瓦質土師 火鉢	-	(2.2)	(14.0)	ABK	こぶい黄緑	良好	体一底部片	18c~
170	9S-AS G	陶器 片口鉢	(24.0)	(6.3)	-	ABGM	緑灰	良好	口縁部片	常滑系1群 13c後 常滑6a形式(1250→1974代)
171	5124	陶器 玉縁口鉢蓋	-	(3.1)	-	ABG	こぶい褐	良好	胴一胴部片	常滑系
172	9I-AR G	陶器 染付丸瓶	11.8	(3.3)	-	AB	黄黄	良好	口縁部片	瀬戸黄美系 18c後~19c前
173	5179	陶器 小瓶	(7.5)	(2.1)	-	AB	黄黄	良好	口縁部片	瀬戸黄美系
174	9P-AR G	陶器 折縁皿	(10.4)	(0.6)	-	AB	灰オリーブ	良好	口縁部片	瀬戸黄美系 17c前 大塚4c
175	一括	陶器 折縁皿	11.9	(1.7)	-	ABG	灰白	良好	口縁一体部片	瀬戸黄美系 17c前
176	9P-AR G	陶器 折縁皿	11.3	2.0	6.6	AB	黄黄	良好	30%	瀬戸黄美系 17c中 瀬戸六穴田1号窯出土 折縁皿に類似
177	9P-AN G	陶器 大皿	(10.8)	(2.0)	-	AB	黄黄	良好	口縁一体部片	瀬戸黄美系 17c中
178	9V-AP G	陶器 反り皿	(12.6)	(2.1)	-	AB	黄黄	良好	口縁一体部片	瀬戸黄美系 17c中
179	一括	陶器 徳利	-	(6.2)	-	AB	灰オリーブ	良好	胴部片	瀬戸黄美系 18~19c
180	9H-AS G	陶器 香炉	(10.0)	(5.2)	-	AB	黄黄	良好	口縁一胴部片	瀬戸黄美系 18c前
181	9I-AS G	陶器 蓋	笠部径(10.3)	(1.1)	-	AB	黄黄	良好	笠部片	志戸呂系 18c代
182	9K-AM G	陶器 小杉茶碗	(8.8)	(3.1)	-	AB	黄黄	良好	口縁一体部片	京都・信楽系陶器 18c
183	一括	陶器 徳利	-	(5.4)	-	ABGH	こぶい赤褐	良好	口縁部片	湯・明石系 18c後
184	北相淵遺区 2 A4-A1 G	磁器 染付碗	-	(2.5)	4.4	AB	灰白	良好	体一底部片	肥前系 18cくらわん少産 雲輪梅紋文
185	9R-AL G	磁器 中皿	-	(1.8)	(7.8)	AB	明緑灰	良好	底部片	肥前系磁器 19c 高台縁が高い皿で高台内が深く傾け込まれる 高台縁部を磨き透明釉が施される
186	9L-AQ G	磁器 青磁碗	-	(1.7)	-	B	灰オリーブ	良好	口縁部片	鎌倉系系15群 13c代
187	AT-AU G	磁器 青磁碗	-	(2.0)	-	AB	灰オリーブ	良好	体部片	鎌倉系系 13群 12c中~13c
188	一括	磁器 青磁鉢	(16.2)	(1.5)	-	AB	灰オリーブ	良好	口縁部片	鎌倉系系 15~16c
189	9K-AN G	石製品 磁石	長さ(4.5)cm	幅3.3cm	厚さ2.0cm	重さ46.4g				石材疑灰岩 磁器下面に磨痕状工痕あり
190	9Z-AM G	石製品 磁石	長さ(6.7)cm	幅3.2cm	厚さ2.8cm	重さ121.8g				石材疑灰岩 磁器一部 黒色化
191	90-AF G	鉄製品 鍔子状金具	長さ(6.2)cm	幅1.8cm	厚さ0.6cm	重さ5.8g				5056層土層出土遺物
192	9R-AS G	鉄製品 釘	長さ(4.6)cm	幅1.0cm	厚さ0.5cm	重さ3.5g				
193	一括	鉄製品 釘	長さ(7.3)cm	幅0.8cm	厚さ0.6cm	重さ5.4g				
194	9L-AF G	鉄製品 釘	長さ(5.2)cm	幅1.0cm	厚さ0.4cm	重さ5.0g				
195	一括	鉄製品 釘	長さ(2.5)cm	幅1.3cm	厚さ0.4cm	重さ2.4g				
196	一括	鉄製品 鍔状金具	長さ(1.8)cm	幅0.7cm	厚さ0.4cm	重さ0.7g				
197	9J-AR G	鉄製品 鍔状金具	長さ(5.4)cm	幅1.2cm	厚さ0.6cm	重さ5.1g				
198	5K14	鉄製品 鍔蓋	長さ6.1cm	幅4.1cm	厚さ2.2cm	重さ25.0g				
199	9S-AS G	銅形澤	長さ6.9cm	幅(3.3)cm	厚さ1.8cm	重さ83.3g				
200	9I-AN G	鉄製品 刀子	長さ(3.2)cm	幅(0.4~1.2)cm	厚さ0.3cm	重さ2.3g				
201	一括	銅製品 キセル	(厚さ)~9cm (腹平)~9cm (口幅)長さ5.2cm 口径0.9cm 小口径0.8cm 重さ3.2g							吸口のみ残存
202	9Q-AO G	鉛土製の合金 彈丸	長さ21.4cm	幅1.4cm	厚さ1.1cm	重さ11.0g				
203	9X-AQ G	鉛土製の合金 彈丸	長さ0.9cm	幅0.9cm	厚さ0.9cm	重さ4.1g				

## V 調査のまとめ

宮下遺跡の調査は今回で4回目となるが、今回の調査では、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が検出されている。中でも8世紀中頃から11世紀前半までの間に営まれた集落が確認され、また、第1次調査で指摘されていた古代の鍛冶工房跡が確認されたことは特筆される。ここでは旧石器時代の遺物、縄文時代早期後半条痕文期の集落の様相、古代の集落変遷と生業の在り方、文字資料の分析、中・近世の土地利用について述べてみたい。

### 1 旧石器時代の様相

今回の調査では、旧石器時代の遺物が4点出土した。出土位置は調査区の中央より西側に集中する傾向がある。そのため、調査区全体で7箇所の旧石器調査用のテストピットを設置し、基本層序XIII層まで掘削したが、剥片や砕片などの石器集中部は確認できなかった。

出土した石器はナイフ形石器1点、槍先形尖頭器3点である。第355図1のナイフ形石器はチャートを用いて縦長剥片を二側縁加工しており、上半部を欠損するが5cm以上のものと推測される。時期はV期(約2万年前)である。第355図2～4の槍先形尖頭器は両面加工で、断面が凸レンズ状を呈するものである。2・3は平面形態が左右対称の木葉形、4は残存部分から槍先形尖頭器としては大きく、他の器種の可能性もあったが、今回は素材・製作方法から槍先形尖頭器と考えた。石材は2が黒曜石、3が黒色頁岩、4がガラス質安山岩である。時期はVI期(約1万7千年前)である(村松 1995)。

本遺跡を含む江南台地上には、後期旧石器時代前半から細石刃文化期まで多数の遺跡が散在するが、その中には細石刃文化期の遺跡として著名な白草遺跡が存在している。そのほとんどで石器が単独で出土、または石器集中が小規模に出土する遺跡が多く、白草遺跡のように石器集中部が多数ある遺跡は少ない。これが江南台地の特徴かどうかは今後の検討が必要である。

### 2 縄文時代の様相

本遺跡の縄文時代の遺構・遺物は、早期前半から後期後半までが確認されている。中でも早期後半の野島式の土器に属する遺構・遺物が大半を占める。今回はこの時期の遺構について検討し、さらに野島式期を含む条痕文期について周辺遺跡の検討を行った。

今回の調査区では縄文時代の竪穴建物跡は1軒も検出されなかったが、早期後半から後期前半にかけての土坑83基・炉穴14基が確認されている。その内訳は、早期後半の野島式期の土坑78基・炉穴14基、前期岡山式期の土坑2基、中期後半加曾利E1式期の土坑1基、後期初頭称名寺式期の土坑1基、後期前半堀之内I式期の土坑1基である。

当調査区での野島式期の遺構覆土は図版48の第100号土坑土層断面2で確認できるように白色軽石粒と硬質黒色土塊が大量に混入するという特徴的なものであった。遺構調査時も掘削用具の刃先を何度も研磨する必要があった。土坑の形態は、円形で箱型に掘り込まれたI B類や楕円形で逆台形に掘り込まれたII C類が多い。遺物は煮炊具としての土器、石鏃・尖頭器などの狩猟具、打製・磨製石斧などの伐採・土掘具、磨石・石皿などの食糧加工具が多数出土している。

## V 調査のまとめ

宮下遺跡の調査は今回で4回目となるが、今回の調査では、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が検出されている。中でも8世紀中頃から11世紀前半までの間に営まれた集落が確認され、また、第1次調査で指摘されていた古代の鍛冶工房跡が確認されたことは特筆される。ここでは旧石器時代の遺物、縄文時代早期後半条痕文期の集落の様相、古代の集落変遷と生業の在り方、文字資料の分析、中・近世の土地利用について述べてみたい。

### 1 旧石器時代の様相

今回の調査では、旧石器時代の遺物が4点出土した。出土位置は調査区の中央より西側に集中する傾向がある。そのため、調査区全体で7箇所の旧石器調査用のテストピットを設置し、基本層序XIII層まで掘削したが、剥片や砕片などの石器集中部は確認できなかった。

出土した石器はナイフ形石器1点、槍先形尖頭器3点である。第355図1のナイフ形石器はチャートを用いて縦長剥片を二側縁加工しており、上半部を欠損するが5cm以上のものと推測される。時期はV期(約2万年前)である。第355図2～4の槍先形尖頭器は両面加工で、断面が凸レンズ状を呈するものである。2・3は平面形態が左右対称の木葉形、4は残存部分から槍先形尖頭器としては大きく、他の器種の可能性もあったが、今回は素材・製作方法から槍先形尖頭器と考えた。石材は2が黒曜石、3が黒色頁岩、4がガラス質安山岩である。時期はVI期(約1万7千年前)である(村松 1995)。

本遺跡を含む江南台地上には、後期旧石器時代前半から細石刃文化期まで多数の遺跡が散在するが、その中には細石刃文化期の遺跡として著名な白草遺跡が存在している。そのほとんどで石器が単独で出土、または石器集中が小規模に出土する遺跡が多く、白草遺跡のように石器集中部が多数ある遺跡は少ない。これが江南台地の特徴かどうかは今後の検討が必要である。

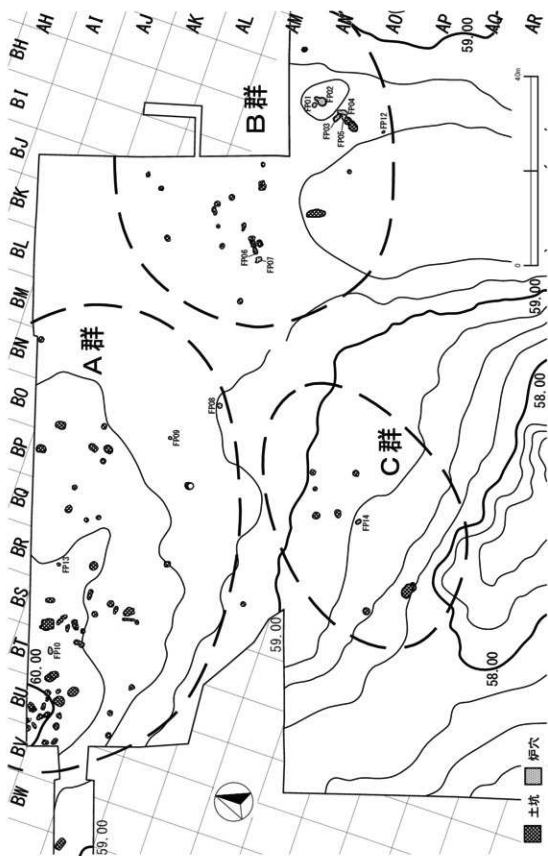
### 2 縄文時代の様相

本遺跡の縄文時代の遺構・遺物は、早期前半から後期後半までが確認されている。中でも早期後半の野島式の土器に属する遺構・遺物が大半を占める。今回はこの時期の遺構について検討し、さらに野島式期を含む条痕文期について周辺遺跡の検討を行った。

今回の調査区では縄文時代の竪穴建物跡は1軒も検出されなかったが、早期後半から後期前半にかけての土坑83基・炉穴14基が確認されている。その内訳は、早期後半の野島式期の土坑78基・炉穴14基、前期岡山式期の土坑2基、中期後半加曾利E1式期の土坑1基、後期初頭称名寺式期の土坑1基、後期前半堀之内I式期の土坑1基である。

当調査区での野島式期の遺構覆土は図版48の第100号土坑土層断面2で確認できるように白色軽石粒と硬質黒色土塊が大量に混入するという特徴的なものであった。遺構調査時も掘削用具の刃先を何度も研磨する必要があった。土坑の形態は、円形で箱型に掘り込まれたI B類や楕円形で逆台形に掘り込まれたII C類が多い。遺物は煮炊具としての土器、石鏃・尖頭器などの狩猟具、打製・磨製石斧などの伐採・土掘具、磨石・石皿などの食糧加工具が多数出土している。





第366図 桑須文期の遺構分布

遺構は調査区の中央から西側に偏在し、また、標高 59 m 以上の平坦部分に集中する傾向があり、土坑と炉穴で構成された A 群～C 群の 3 群に分けられる（第 366 図）。

A 群は北西側に位置し、SK 228・264・267・269・298・300・301・304・309・327～329・334・350・351・365・366・368～371・374・376～381・389～391・393・400～404・406～417・421・424・425 の各土坑と F P 8～10・13 で、土坑 52 基と炉穴 4 基が長径約 90m の楕円形の範囲に分布している。特に BR-AM グリッドから BS-AN グリッドにかけて密集する傾向がある。

B 群は北東側に位置し、SK 66・79・80・84・100・102・108・124・130～132・134～137・168・195 の各土坑と F P 1～7・12 で、土坑 17 基と炉穴 8 基である。A 群よりも規模は小さく直径約 60m の円形の範囲に分布しており、中心には遺構の空白地帯がある。B 群は炉穴が 2 基以上隣接して数箇所に点在し、土坑は I B 類と II C 類で占められ、特に BI-AM グリッドから BL-AN グリッドにかけて偏在している。

C 群は A 群の南側に位置し、SK 251・282・284・288・290・348・320・321 と F P 14 の土坑 8 基と炉穴 1 基である。B 群より規模は小さく長径約 40 m、短径約 30 m の楕円形の範囲に分布している。

平成 20 年～21 年にかけて実施された宮下遺跡第 3 次調査（『宮下遺跡 II』）では、縄文時代早期後半の条痕文期、中期阿玉台式期・勝坂式期・加曾利 E 式期、後期称名寺式～堀之内式期の遺構が確認されている。条痕文期の遺構は竪穴建物跡 1 軒・土坑 1 基であった。しかし、今回と同様の遺構覆土は確認できず、遺物の種類・量も少ない、当該期の集落の中心は当調査区であったと考えられる。

宮下遺跡の条痕文期の特徴は、竪穴建物跡が存在せず特徴的な覆土を含む多数の土坑と屋外調理施設の炉穴があること、集落立地が谷から上がった平坦面に形成され、遺構分布が一定範囲に集中すること、豊富な種類の道具が出土していることである。本遺跡周辺では、熊谷市の富士山遺跡・北方遺跡、深谷市の白草遺跡・四反歩遺跡・百済木遺跡でも類似する傾向にある。このような集落形成の要因として気候が温暖化し、縄文海進が進んだことがあげられる。早期前半の燃糸文期に集落が形成され定住化が進んだが、気候変動や食糧獲得手段の不熟さから再び移動生活に戻ったと言われている（鈴木 2016）。実際、本遺跡を含む江南台地でも燃糸文期に遺跡数が増加し、押型文・沈線文期に遺跡数が減少する。早期後半の条痕文期は縄文時代前期に再び定住化に向かう過渡期であり、竪穴建物跡を伴わずに集落を形成したものと考えられる。

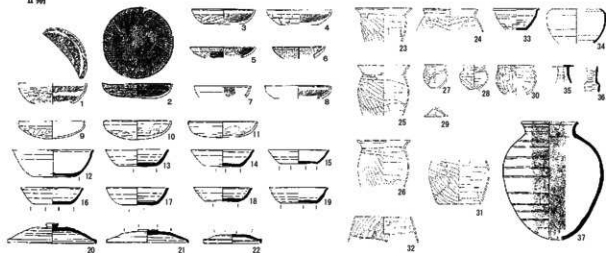
### 3 古代の土器編年

今回の調査では古代の竪穴建物跡が 80 軒検出されている。時期は 8 世紀中頃から 11 世紀前半の間であり、近隣の古代の遺跡でこれだけ多数の竪穴建物跡が長期間にわたって存続する事例は少ない。そのため、出土した土器を 7 期に区分し集落の変遷を検討した。時期区分の年代観については I 期がロクロ成形土師器の甲斐型埴と須志器短頸壺の蓋、II 期が平城宮土器編年ⅤG に比定される広口長頸瓶、IV 期が猿投窯黒黒Ⅸ 90 号窯式併行期に比定される灰釉陶器埴・皿と武蔵型とする「コ」の字状口縁の薄手土師器甕、V 期が羽釜の出現、VI 期がロクロ土師器小皿、VII 期が足長高台埴と木器及び漆器を模倣した黒色土器と土釜の出現を根拠とした。また、古代の周辺遺跡である『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡 総括報告書 I』の第 V 章土器編年時期（以下、西別府編年）を基本とし、『熊野遺跡（A・C・

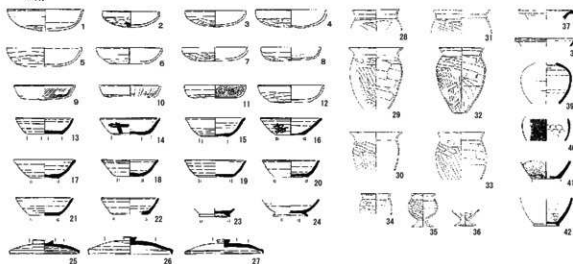
I期



II期



III期



坏・埴・皿類 S = 1/8

甕類 羽釜等 S = 1/16

I期: 1~5・8・12・15~18(S119), 6・7・9~11・13・14(S113)

II期: 1・23(S114), 2・5~7・9~11・25・26・30・37(S147), 3・34(S128), 4・15・16(S135), 8(S153), 12~14(S169), 17~19・22~27(S154), 20・21(S17), 24~31(S120), 28(S173), 29(S164), 32(S124), 33(S131), 35(S138), 36(S16)

III期: 1・5・23(S121), 2~4・7・25・29~41(S132), 6・19(S129), 8・22~31~39(S162), 9・12~13~30(S160), 10~11~33~38~40(S172), 14~35(S161), 15(S166), 16~18(S14), 20~28(S140), 21~24~34~36~37~42(S142), 26~32(S156), 27(S158)

第367图 古代の土器編年図1

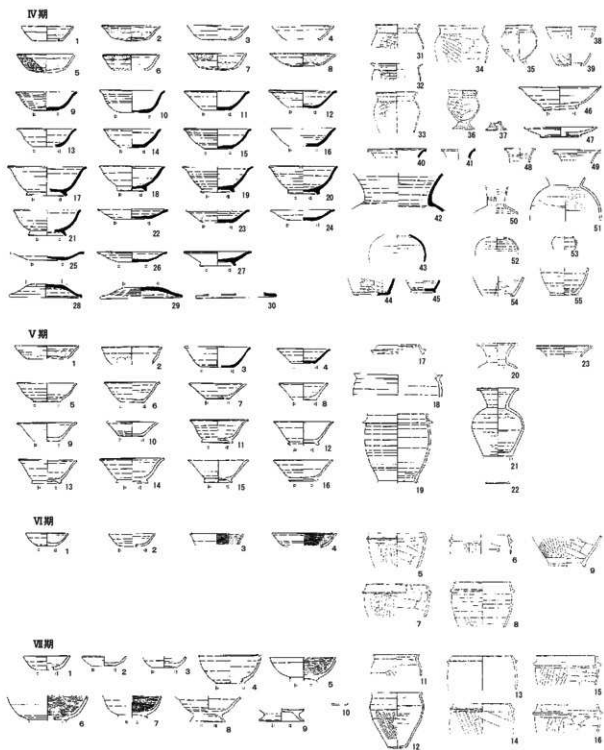
D区』第Ⅶ章土器編年時期（以下、熊野編年）、『幡羅遺跡Ⅶ—総括報告書一』の第Ⅴ章土器編年時期（以下、幡羅編年）を参考とした。

I期：8世紀中頃、西別府編年3期、熊野編年Ⅱ・Ⅲ期、幡羅編年Ⅲ・Ⅳ期に相当（第367図I期1～18）  
器種は土師器環・埴・甕、須恵器環・皿・甕・甗・瓶がある。食膳具は土師器と須恵器の割合が半々である。金属器を模倣した暗文土器（1）には放射状暗文が施される。土師器環は北武蔵型環が大半でまだ丸底が多い。5は油煙が付着し小振りでも肉厚な器形である。灯明具である油環とみられる。6・7は盤状環の系譜である口クロ成形の甲斐型土師器埴で内面黒色処理されている。須恵器無台環は南比企窯産が大半で末野窯産もわずかに存在する。底部調整は回転糸切り後周辺へら削りが多く、わずかであるが全面へら削りも存在する。14は須恵器短頸壺の蓋である。煮炊具は胴部外面をへら削り調整する武蔵型甕が主体で、削り調整に古様相な縦位（15）と新様相な斜位（16）が見られ、当該期以降は後者が主流となる。17は土師器甕で胴部が大きく膨らむ。18は須恵器甗で外面叩き整形されている。

Ⅱ期：8世紀後半、西別府編年4期、熊野編年Ⅲ・Ⅳ期、幡羅編年Ⅴ期に相当（第367図Ⅱ期1～37）  
器種は土師器環・埴・甕・甗、須恵器環・埴・高台環・皿・高盤・蓋・鉢・鉄鉢形・甕・甗・瓶、カマド形土器があり、当該期が最も多様化している。食膳具は土師器と須恵器の割合が半々である。土師器環は北武蔵型環が大半で丸底がまだ残る。暗文環は内面に螺旋状や放射状の暗文を施しているものが多い。6は口縁部が短くS字状に屈曲し内外面黒色研磨された比企型環である。須恵器環は底部調整が回転糸切り後周辺回転へら削り調整するものが大半であり、南比企窯産でI期と同様に変化は見られない。12は須恵器埴で体部下端と底部全面を回転へら削り調整する特異なものである。須恵器蓋はつまみが扁平な擬宝珠状と環状がある。煮炊具は武蔵型の「く」の字状口縁土師器甕である。7世紀末で消滅する傾向にある土師器甗が本遺跡ではまだ残る。32はカマド形土器で釜口と焚口が作り出されており、底が無い形状である。33は須恵器鉢で当該期から出現する。34は須恵器鉄鉢形土器、37は須恵器大甕である。35は須恵器高盤で当該期まで残る。36は南比企窯産の須恵器広口長頸瓶である。平城宮土器分類の壺Gに比定され、熊谷市円山遺跡でも確認されている。年代は8世紀中頃から9世紀初頃のごく短い時期に限定され、携帯用水筒との説もあるがここでは仏花瓶に分類した。

Ⅲ期：9世紀前半、西別府編年5期、熊野編年Ⅴ期、幡羅編年Ⅵ期に相当（第367図Ⅲ期1～42）  
器種は土師器環・甕、須恵器環・高台埴・皿・蓋・甕・瓶がある。食膳具は須恵器の割合が多くなり、全体の7割近くを占める。土師器環は平底化が進む。暗文環は暗文が粗雑となり当該期以降なくなる。須恵器環は底部調整が回転糸切り後無調整で末野窯産のものが多くなる。また、口径・底径比が広がる。煮炊具は武蔵型の「く」の字状口縁土師器甕が主体であるが、「コ」の字状口縁に近いものも現れる。台付甕は口縁がわずかに外反するもので、小型甕も「コ」の字状口縁に近いものも見られる。37～42は須恵器瓶である。

Ⅳ期：9世紀後半、西別府編年6期、熊野編年Ⅵ・Ⅶ、幡羅編年Ⅶ期に相当（第368図Ⅳ期1～55）  
器種は土師器環・鉢・甕、須恵器環・高台埴・皿・蓋・甕・瓶、灰釉陶器埴・皿・瓶がある。食膳具は須恵器が主体になり、それを補填するように土師器、搬入品である灰釉陶器が見られる。土師器環・皿は平底となり、指頭押圧痕を残し体部が直線的に立ち上がるものが主体となる。須恵器無台環・高台埴・無台皿・高台皿は焼成不良のものが多く、口縁部が外反する特徴がある。底部調整は回転糸切り後無調



坏・碗・皿類 S = 1/8

甕類 羽釜等 S = 1/16

IV期: 1・2・17・31・37(SI 5), 3・12・13・25・26・42・43・45・49(SI 46), 4・8・14・15・21・27(SI 50),  
 9・11・19・20・23・24・33・41・46・51・54(SI 17), 16・29・30(SI 52), 18・22・32・44・53(SI 8),  
 28・52(SI 51), 34~36・38~40(SI 45), 47・48・50・53・55(SD56)

V期: 1・3・5(SI 10), 4・8・10・13~16(SI 22), 6・7・11・12・17・18・20~23(SI 18), 19(SI 80)

VI期: 1~4・9(SI 41), 5~7(SI 33), 8(SI 57)

VII期: 1・5・6・10(SI 3), 2・3(SI 49), 4・13~16(SI 44), 7・9(SI 76), 8(SI 31), 11(SI 18),  
 12(SI 22)

第 368 図 古代の土器編年図 2

整のものが大半で、須恵器高台壇と高台皿は灰釉陶器の模倣である。坏・埴は口径・底径比が1:2となる。須恵器蓋はつまみのない無紐でロクロ目が顕著である。末野窯産が圧倒的に多く南比企業産は減少する。煮炊具は武蔵型の「コ」の字状口縁土師器甕が主体である。小型甕及び台付甕にも「コ」の字状口縁のものが見られる。土師器鉢は体部に稜を持ち口縁がわずかに外反するもので、体部外面はヘラ削り整形である。当該期では灰釉陶器が多く出現し、46は灰釉陶器高台壇、47は高台皿である。いずれも景徳窯編年黒笹90号窯式新段階と併行期で胎土と施釉から遠江地域産のものと考えられる。

V期：10世紀前半、西別府編年7・8期、幡羅編年IX期に相当（第368図 V期1～23）

器種は土師器坏、須恵器坏、須恵系土師質土器壇・高台壇、土師質土器羽釜・甗・瓶、灰釉陶器瓶がある。当該期で羽釜と須恵系土師質土器が出現する。土師器と須恵器の坏は残るが僅少であり、食膳具の大半は酸化焰焼成の須恵系土師質土器が占める。胎土に夾雑物が多く作りの粗雑な末野窯産である。須恵系土師質土器の食膳具は器高と口径比が1:2前後で器高の深い埴が多くなり、特に高台壇が多く見られる。煮炊具は土師質土器羽釜・鈔付甗が主体を占め、IV期以前まで継続された武蔵型土師器甕は見られなくなる。いずれもロクロ成形で外面のヘラ削り調整は見られない。20～22は土師質土器瓶である。23は灰釉陶器瓶の口縁部である。

VI期：10世紀後半、西別府編年9期、幡羅編年X期に相当（第368図 VI期1～9）

器種はロクロ土師器小皿・埴、土師質土器羽釜・甗がある。食膳具はV期の須恵系土師質土器に替って胎土が緻密な酸化焰焼成のロクロ土師器となり、黒色土器も出現する。1・2は中世かわらけに似た小皿である。3・4は器高が低く口縁が緩やかに外反する内面黒色処理したロクロ土師器坏である。土師質土器羽釜はロクロ成形（8）と非ロクロ成形（5～7）があり、いずれも外面をヘラ削り調整する。土師質土器甗（9）は非ロクロ成形である。当該期では土師器と還元焰焼成された須恵器が見られなくなる。

VII期：11世紀前半、西別府編年10期、幡羅編年XI期に相当（第368図 VII期1～16）

器種はロクロ土師器小皿・高台壇、土師質土器土釜・羽釜、灰釉陶器小瓶がある。当該期で足長高台壇と土釜が出現する。また、VI期に引き続き食膳具は酸化焰焼成のロクロ土師器（1～9）である。1～3はロクロ土師器小皿、8・9は「ハ」の字状に開く足長高台壇である。内面黒色処理したロクロ土師器埴（5～7）は体部が内湾し口縁部が外反しない形状で、木器及び漆器を模倣したものへ移行する。11・12は土師質土器土釜である。13～16は土師質土器羽釜で非ロクロ成形が多く、ロクロ成形のものでもロクロ回転力が弱い傾向が見られる。VI期のように口縁が内湾するもの（13・14）と、15・16のように口縁部がほぼ直立し、上方がわずかに内湾するものがある。羽釜と土釜は造りが粗雑で大振りなものと傾向が見られる。10は灰釉陶器小瓶の口縁部である。

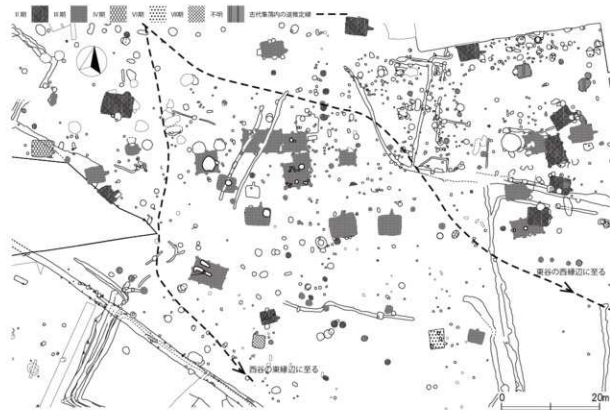
## 4 古代の集落変遷

古代の集落は8世紀中頃から11世紀前半まで絶えることなく三百年の永きにわたって営まれていたことが確認された。ここでは前述した古代の土器編年に基づき、宮下遺跡の1次から3次までの調査成果も加えて集落変遷を7区分で追っていきたい。1次調査では古代の精神炉とタタキ状の床面を伴った鍛冶工房跡1軒、2間×2間以上の総柱建物跡1棟が検出され、鍛冶工房跡から10世紀後半の土器と

ともに炉壁や多数の羽口片と総重量 5.5kg もある大量の鉄滓が出土した。2 次調査では 9 世紀後半から 10 世紀後半までの竪穴建物跡が 8 軒確認され、墨書土器も出土している。3 次調査である宮下遺跡Ⅱでは 8 世紀前半から 10 世紀前半までの竪穴建物跡 16 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 9 基、土取り遺構 1 基が検出された。なお、今回の調査で検出された第 1～3・5 号性格不明遺構は古代の炭窯の可能性があるが、出土遺物が皆無で判然とせず古代遺構から除外した。また、古代の遺構から出土した生業関連遺物を時期別に集計し、素材によって、鉄・銅製品、土製品、石製品、土器片再利用品で分け、さらに、素材ごとに農具や工具など用途別に分類を行い、刀子・口金・攝子は工具としてまとめた。また、生業の時期変遷が解り易い鉄・銅製品の時期別集成も加味して古代生業の分析を試みた。なお、文字資料である墨書、刻書は次項である「5 宮下遺跡の墨書・刻書土器」にその詳細を譲る。

### (1) 集落構成と分布

I 期は集落の初現段階である。構成は竪穴建物跡 4 軒（今回調査 3 軒）でいずれも調査区東側に位置する。II 期は前段階に比べて飛躍的に集落が膨らむ時期である。構成は竪穴建物跡 27 軒（同 22 軒）、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 27 基である。集落の分布状況は調査区北側に偏る傾向がみられ、荒川寄りの台地北側縁辺に近い位置である。III 期はさらに大きくなり集落の最隆盛段階である。構成は竪穴建物跡 36 軒（同 29 軒）、掘立柱建物跡 9 棟、土坑 43 基（同 36 基）、土取り遺構 5 基である。集落の分布状況は調査区全体に散在し、I・II 期のような偏在傾向はみられない。IV 期は前段階に比べて集落は 1/3 以下に減少する。構成は竪穴建物跡 11 軒（同 10 軒）、掘立柱建物跡 1 棟、溝 1 条、土坑 7 基、土取り遺構 8 基である。集落の分布状況は調査区中央と西側の 2 グループに分かれて偏在する。V 期は前段階に比べて集落はさらに減少し、構成は竪穴建物跡 8 軒（同 5 軒）、土坑 2 基、土取り遺構 1 基である。集



第 369 図 調査区北西側古代の遺構 時期別配置図

落の分布状況は調査区中央に集中する傾向がみられる。VI期はさらに集落規模が減少し、古代集落のなかで最小となる。構成は竪穴建物跡5軒（同3軒）だけである。集落の分布状況は調査区中央と西側の2グループに分かれて偏在する。VII期は古代集落の最終段階で、規模は前段階に比べてやや持ち直している。構成は竪穴建物跡7軒（同6軒）、土坑2基である。集落の分布状況は調査区全域に散在する。VI期以前の集落とは違い、建物間の距離が離れており最も近くても24mを測る。

## （2）竪穴建物跡の形状及びカマド

I期は竪穴建物跡4軒でカマド煙道部に沿った主軸は3軒がほぼ同一である。建物形状は主軸が長軸になる長方形で短辺に付設されたカマドが北方位を天とした右寄りのII Bタイプが3軒である。床面積は最少3.84～最大14.40㎡とバラツキがあり、平均は9.12㎡である。宮下遺跡で検出された8世紀中頃から11世紀前半の古代に帰属する竪穴建物の大半は床面積3.78～19.24㎡の小型で明確な主柱穴を持たない。上屋の桁と梁を壁で支える所謂壁立式の竪穴建物であった可能性が考えられる。床面下の掘方で壁際隅角に浅い掘り込みを持つものが全体の約半分を占めるが、これも壁立式と関連があるとみられる。床面積の平均は各期とも10㎡強で大差無い。5㎡以下の極小なカマド付設建物が7軒確認された。明らかに厨房専用の釜屋とみられ、掘立柱建物跡など他遺構との組み合わせが興味深い。カマドは3軒が同じ位置に付設され、燃焼部はあまり壁外に突出しない。構築材は1軒が台地の地山XII層である灰白色粘土を用いているが、他3軒はそれより上のXI-2層であるマンガン粒を含む灰黄褐色粘質土を用いている。S I 19はカマド煙道部に土師器甕を容れ子状に使用したり他の建物より特異である。主軸方向はN-50°～60°-Eを指すbタイプが当該期の2/3を占める。

II期の建物形状は前段階に引き続きII Bタイプが10軒と最も多く全体の5割近くを占める。カマド付設位置は東壁が当該期の半分以上を占める。また、カマド改築建物跡は3軒でいずれも東壁付設のI Bタイプから北壁付設のII Aタイプなどに改築している。当初の付設場所から新たにカマドを構築し直したものをカマド改築建物とした。複数のカマドを廃絶時まで同時使用していた状況は本遺跡では確認できなかったが、S I 28に付設された複数基のカマドは同時使用だった可能性がある。カマド燃焼部が壁外に半分がそれ以上に突出するのが大半である。構築材はX層であるマンガン粒を含む褐色粘質土を主体とするものが半近くを占め、焼土塊の観察で藁状のササや粗砂などの混入も確認された。次に構築材として多いのが地山XIII層である灰白色粘土である。また、S I 6はカマド両袖の芯と支脚に細長い河原石を使用、S I 62も両袖の芯に河原石を使用、S I 54は土師器甕2個体以上を容れ子状に重

第91表 宮下遺跡 生業関連遺物組成表（第3次調査分も含む）

竪穴軒数	鉄・銅製品					土・石製品					墨書刻書ヘラ書	仏具	遺物合計			
	農具	工具	武器狩猟具	建築具	紡錘具	その他不明	灯明具	紡錘具	漁労具	鍛冶具				土器	土器片	土器片
I	4		1				2					1			4	
II	27			2			5	1	6			9	2	13	2	40
III	35	1	10	竊!	4	雜草具!	10	1	4			9	3	20		64
IV	11	1	8	罌子?	11		5	9		7	5	3	2	12		65
V	8	1, 種!	2		4	1						1		1		11
VI	5	2		1												3
VII	7				1	2			3							6
不明	2															



ねてカマド焚口に懸架している。床面積は最少6.80～最大14.18㎡で前段階よりバラツキは少なくなり、平均は11.12㎡である。主軸方向はN-70°～90°-Eを指すcタイプが当該期の1/3を占める。

Ⅲ期の建物形状は前段階に引き続きⅡBタイプが7軒と最も多く全体の3割近くを占める。カマド付設置位置は東壁と北壁がほぼ半々である。また、カマド改築建物跡は3軒で東壁付設のⅠBタイプから北壁付設のⅡAタイプなどにそれぞれ改築している。S I 36は掘方形状から拡張建物跡とみられる。カマド燃焼部が壁外に半分かそれ以上に突出するのが大半である。構築材はⅪ-1層である褐色粘質土を主体とするものが半分近くを占め、次に多いのがⅩ層であるマンガン粒を含む褐色粘質土である。また、S I 34とS I 54は土師器裏2個体以上を容れ子状に重ねてカマド焚口に懸架している。床面積は最少3.78～最大19.24㎡とバラツキがあり、平均は10.13㎡である。竪穴建物跡の床面積は各期ともバラツキが見られる。しかし平均床面積は各期いずれも10㎡前後と同じである。扉戸の単位として竪穴建物跡は小形のものであるS I 63(4.67㎡)と大形のものであるS I 65(9.83㎡)の組み合わせのようなセット関係があった可能性も考えられる。主軸方向はcタイプが当該期の1/3を占める。

Ⅳ期の建物形状は前段階に引き続きⅡA及びⅡBタイプが8軒と最も多く全体の3割近くを占める。カマド付設置位置は東壁が圧倒的に多い。また、カマド改築建物跡は3軒でS I 50は3回の改築が行われている。カマド燃焼部が壁外に半分かそれ以上に突出するのが大半で、構築材はⅪ-1層である褐色粘質土を主体とするものが半分近くを占める。また、S I 5はカマド袖の芯と支脚に細長い河原石を使用、S I 8も袖の芯に河原石を使用している。床面積は最少7.57～最大14.09㎡で前段階よりバラツキは少なくなり、平均は10.52㎡である。主軸方向はcタイプが当該期の半分を占める。

Ⅴ期の建物形状はバラツキがあり一定ではない。カマド改築建物跡はS I 10の1軒で、東壁から北壁に造り替えている。カマド燃焼部が壁外に半分突出するのが大半である。構築材はⅪ-2層であるマンガン粒を含む灰黄褐色粘質土を主体とするものが大半である。床面積は最少3.83～最大15.09㎡とバラツキがあり、平均は9.15㎡である。主軸方向はcタイプが多い。

Ⅵ期は建物形状がいずれもⅠBタイプで企画性が窺え、カマド改築建物跡は無い。カマド付設置位置は東壁が圧倒的に多い。カマド燃焼部が壁外に半分突出するのが大半である。構築材はⅪ-2層であるマンガン粒を含む灰黄褐色粘質土を主体とするものが大半である。S I 33は袖の芯に河原石を使用し、カマド南脇で支脚に利用したとみられる細長い河原石が出土している。床面積を計測できたのはS I 57だけで、10.60㎡である。主軸方向はcタイプが多い。

Ⅶ期は建物形状が前段階に引き続きⅠBタイプが9割近くを占め、各期を通じて形状の企画統一率が最も高い。カマド付設置位置は東壁が圧倒的に多い。床面積は最少5.93～最大17.14㎡とバラツキがあり、平均は10.10㎡である。主軸方向はcタイプが当該期の2/3以上を占める。カマド燃焼部が壁外に半分かそれ以上に突出するのが大半である。構築材はⅪ-2層であるマンガン粒を含む灰黄褐色粘質土とⅫ層である灰白色粘質土を主体とするものが大半である。S I 12・44・49はカマド芯材に緑泥片岩の板石を用いており、これは当該期だけの特徴である。

### (3) 竪穴建物跡の付帯設備

Ⅰ期で棚状施設を有するのはS I 19の1軒だけである。壁周溝の有無は2軒ずつに分かれる。主柱穴状に配置されるビットは検出されなかった。

Ⅱ期は本遺跡中最大床面積のS I 69はカマドと対峙する壁面に張り出しピットを有し、埋納ピットであるP 2から完形の須恵器甕が正位で出土した。地鎮祭祀に関わるものとみられ底部外面に「道口(円力)」の墨書が記されている。特異な他施設と相まって首長的人物の存在を想起させる建物跡である。壁周溝は大半の竪穴建物跡で確認された。3方向の壁に沿って走る間仕切り状の小溝がS I 53で確認され、拡張建物の可能性も考えられる。S I 20の北東隅角に壁外に突出する張り出しが確認された。カマドと対峙する壁際にピットを有する竪穴建物跡が当該期の1/4で確認された。S I 67の方形大形ピット底面から粘土が確認された。竪穴建物の隅角に浅い掘方ピットが半数で確認された。

Ⅲ期のS I 21・34・59は床面から一段上がった壁外に平坦部を造り出す所謂棚状施設をもつ竪穴建物跡で、時期別にみるとⅠ～Ⅲ期までで当該期が圧倒的に多い。他の2基はⅠ期がS I 19、Ⅱ期がS I 53である。S I 21・34・59は床面から一段上がった壁外に平坦部を造り出す所謂棚状施設をもつ竪穴建物跡で、時期別にみるとⅠ～Ⅲ期までで当該期が圧倒的に多い。壁周溝は半分以上の竪穴建物跡で確認された。S I 58は間仕切り溝を有する。当該期に帰属する12軒のうち方形基調の大形ピットを有する竪穴建物が多く、6軒を数える。カマドと対峙する壁際にピットを有する竪穴建物跡が4軒確認された。また、竪穴建物の隅角に浅い掘方ピットが半数で確認された。

Ⅳ期は7割以上が壁周溝を有する。当該期に帰属する11軒のうち方形基調の大形ピットを有するものが6軒を数え、極めて多い。工房に関連する可能性もある。カマドと対峙する壁際にピットを有する竪穴建物跡が2軒確認された。また、竪穴建物の隅角に浅い掘方ピットが3軒で確認された。S I 52で「上」の墨書土器も含めて甕が3点重なった状況で出土し、祭祀儀礼の可能性が考えられる

Ⅴ期は棚状施設も壁周溝も確認されなかった。

Ⅵ期は棚状施設も壁周溝も確認されなかった。S I 41は方形基調の大形ピット、S I 57はカマドと対峙する壁際ピットを有する。

Ⅶ期は壁周溝が6軒のうち2軒で確認された。棚状施設は見られない。主柱穴状に配置されるピットは存在せず、S I 49は北東隅角に張り出しが検出された。S I 44は南西隅角と北壁際に深い方形ピットが検出され、S I 3・12のように床面下の掘方ピットの多さが際立つ。

#### (4) 竪穴建物跡と掘立柱建物跡のセット関係

Ⅱ期の掘立柱建物跡はS B 12の1棟で、重複関係及び棟方向などから南南西8mに位置するS I 53とセット関係にあるとみられる。

Ⅲ期の掘立柱建物跡はS B 4・5・6・7・9・10・11・13・14の9棟で重複関係及び棟方向などから竪穴建物跡との一戸当たりのセット関係を以下に試算してみた。S B 4とS I 55、S B 5とS I 62、S B 6とS I 63・65、S B 7とS I 60・61、S B 9・14とS I 59、S B 10とS I 66、S B 11とS I 58、S B 13とS I 72・74のセット関係とみられる。また、S I 58とS I 61から出土した砥石が接合した。S I 58第178図13は床面直上とS I 61第178図7は床面より10cm上で、両者は25m距離である。S I 53(Ⅱ期)・54・55の3軒は近接し、S I 53第165図9とS I 54覆土中、S I 55第171図6とS I 53覆土中の遺物がそれぞれ接合した。S I 53・54は主軸方向が同一で、S I 53を埋め戻してS B 4を構築していることから遺構変遷は古い順にS I 53→S I 54→S I 55・S B 4となる。また、遺構間の20m～25mの距離感は房戸一戸の居住空間を想起できる可能性をもつ。竪穴

建物跡の床面積は各期ともバラツキが見られるが、平均床面積は各期いずれも10㎡前後と同じである。房戸の単位として竪穴建物跡は小形のものであるS I 63(4.67㎡)と大形のものであるS I 65(9.83㎡)の組み合わせのようなセット関係が多かった可能性も考えられる。5㎡以下の極小なカマド付設建物跡が7軒確認された。厨房専用の釜屋とみられ、掘立柱建物跡など他遺構との組み合わせが興味深い。

IV期の掘立柱建物跡はS B 1とS I 6がセット関係になるとみられる。

#### (5) 溝・土取り遺構・土坑の分布

竪穴建物跡と掘立柱建物跡以外の遺構分布について概観する。古代に帰属する溝はS D 56だけである。土取り遺構が14基、古代に帰属する108基の土坑のうち、宮下遺跡の土器編年で時期区分できた土坑が72基である。他は土師器裏の細片で明確な時期決定は出来なかった。

I期は確認されなかった。II期は土坑が27基である。竪穴建物跡と掘立柱建物跡が密集する調査区西側に集中する。S K 25・32から土師器環など多くの遺物が出土した。III期は土取り遺構が5基、土坑が36基である。土取り遺構に集中箇所は見られないが、土坑は前段階と同じく調査区西側に集中する。B0-AM・ANグリッドに位置するS K 270～275は南北方向に1～2mの間隔で一線に並び、当該期建物跡の軸や棟方向と直交する。また、B1-APグリッドに位置するS K 111～113・148、B2-ARグリッドに位置するS K 359～361はいずれもほぼ等間隔に直線的にならび、その方向は集落内における道の想定線に沿ってくる。S K 170から土師器環・裏、S K 273から刀子、S K 349から輪の羽口が出土している。IV期は溝が1条、土取り遺構が8基、土坑が7基である。S D 56は調査区南西端に位置し、S I 50・51の北側を区画するようにL字に走行する。S D 56からは灰釉陶器や攝子などIV期に帰属する遺物が大量に出土している。土取り遺構は調査区南西端に集中する。土坑分布に集中は見られずS K 263から土師器環・裏、須恵器環などが出土している。V期、VI期とも確認されなかった。VII期は土坑が2基である。

#### (6) 工房跡と生業関連遺物

工房跡とみられる竪穴建物跡は今回の調査と1次～3次調査分を合計すると12軒確認された。内訳は鍛冶関連が5軒、紡織関連が7軒、職種不明が4軒である。鍛錬鍛冶は今回の調査で検出された4軒で、うち3軒は火室型に分類される鍛冶炉である。1次調査で検出された鍛冶工房は鍛冶炉が円形土坑状で炉壁や大形の輪羽口が出土していることから製錬炉を有していた可能性がある。

I期は明確な工房跡はなかったが、S I 19から完形の灯明具が2点と砥石が出土している。灯明具はいずれも器肉が厚く、口径が小振りな形状から灯明具専用で作成された油環の可能性があり、何らかの工房跡であった可能性も考えられる。

II期は竪穴建物跡のうちS I 64がカマドと併行して地床炉を有し、紡織に関連した工房跡とみられ、S I 47は掘り込みが80cm以上と深く、建物中央から須恵器大甕が立位で出土したことから職種不明ながら工房跡と判断した。当該期の生業関連遺物を概観すると建築具である釘がS I 28・47から1点ずつ、灯明具は油煙付着の環がS I 20から2点、S I 24・28・64から1点ずつ、紡織具は石製紡績車がS I 38から1点、漁労具は土錘がS I 35から6点、砥石はS I 67から3点、S I 20・28・53・54・64・68から1点ずつ、筆記具は転用硯がS I 53・54から1点ずつ、仏具は当該期にしか存在せず、鉄鉢形須恵器がS I 28から1点、平城宮土器分類における壺Gに比定される広口長頸瓶が東谷から1点である。

壺Gは携帯用水筒の説もあるがここでは仏具とした。カマド形土器がS I 24から出土し、祭祀に使われた可能性も考えられる。土器に墨書、刻書、ヘラ書きした文字資料が多数確認され、なかでもⅡ・Ⅲ・Ⅳ期に集中している。当該期の共通な墨書は「卜之」でS I 20・24・54・68、第3次調査のS I 18から出土している。

Ⅲ期は竪穴建物跡のうちS I 39は鍛冶炉が確認されなかったが、床面直上で鉄滓と鍛造剥片が検出された鍛冶工房跡と判断した。S I 27・59・74と第3次調査のS I 7・12・14はカマドと併行して地床炉を有し紡織に関連した工房跡、S I 47は建物中央から須恵器大甕が立位で出土したことから職種不明ながら工房跡と判断した。当該期の生業関連遺物は農具である鎌がS I 72から1点、工具である刀子がS I 58号から3点、S I 56から2点、S I 29・59・60・SK 273と第3次調査のS I 12から1点ずつ、武具・狩猟具である鉄鏃が第3次調査のS I 12から1点、建築具である釘がS I 40から2点、S I 29・62から1点ずつ、腰帯具である丸鞆がS I 66から1点、灯明具はS I 6・27・32から2点ずつ、S I 21・23・43・59から1点ずつ、紡錘具は石製紡錘車がS I 4から1点、漁労具は土錘がS I 40から1点と第3次調査で3点、砥石はS I 29から2点、S I 40・58・62・65・66から1点ずつと第3次調査で2点、筆記具は転用硯がS I 32・43・61から1点ずつである。腰帯具や転用硯などの出土から集落における役人の存在も想起される。当該期は2種の共通な墨書が確認され、「十」がS I 55・61、「万」がS I 29・60である。墨書土器が複数出土した遺構としてS I 29が3点、S I 60が4点である。

Ⅳ期は集落が急激に減少した割に工房跡の占める割合が大きくなる。竪穴建物跡のうちS I 17・46はカマドと併行して鍛冶炉を有し羽口や鉄滓・鍛造剥片など鍛冶関連遺物が多量に出土した鍛冶工房跡、S I 45はカマドと併行して地床炉を有し紡織に関連した工房跡、S I 50は床下に方形箱形の大形ピット及び改築後のカマドを複数有することから職種不明ながら工房跡と判断した。当該期の生業関連遺物は農具である鎌がS I 8から1点、工具である刀子がS I 17から2点、S I 46から2点、S I 50・52から1点ずつ、他に工具として分類した鎌子がS I 50とS D 56から1点ずつ、建築具である釘がS I 50から4点、S I 17・46から3点ずつ、S I 45から1点、不明鉄製品がS I 8・17・46から合計5点、灯明具はS I 50から3点、S I 17・52から2点ずつ、S I 8・46・70から1点ずつ、鍛冶関連遺物はS I 46から輪羽口5点とS I 17から輪羽口2点・鉄床石1点、紡錘具は坯底部転用紡錘車がS I 5・17・46から1点ずつ、砥石はS I 17から3点、S I 45・50・52から1点ずつ、筆記具は転用硯がS I 50・70から1点ずつである。

Ⅴ期は工房跡と判断できる竪穴建物跡は確認されなかったがS I 10から多数の鉄製品と砥石が出土した。鉄製品は農具である鎌が1点、穂摘具が1点、工具である刀子が2点、建築具である釘が4点、砥石が1点と多彩である。鉄滓・鍛造剥片などは検出されなかったが集落内で専業を担っていた可能性はある。また、S I 22は粘土塊を混入する大形ピットを有し職種不明ながら工房跡と判断した。当該期の他の生業関連遺物は宮下遺跡ⅡのS I 11から鉄製紡錘車が1点である。

Ⅵ期は集落が減少した割に再び工房跡が占める割合が大きくなる。1次調査で古代の精練炉とタタキ状の床面を伴った鍛冶工房跡1軒が検出された。工房跡から10世紀後半の土器とともに炉壁や多数の羽口片と総量5.5kgもある大量の鉄滓が出土した。S I 57はカマドと併行して地床炉を有し、紡織に関連した工房跡とみられる。当該期の生業関連遺物は農具である鎌がS I 41から2点、建築具である

釘がS I 41から1点、鍛冶関連遺物である鑄羽口と鉄滓が出土した。

Ⅶ期は竪穴建物跡7軒のうち3軒が工房跡になり一層專業化が進む。S I 76はカマドと併行して3基の鍛冶炉を有し鉄滓・鍛造剥片が出土した鍛冶工房跡である。S I 12は粘土塊・焼土塊を混入するピットと小溝を組み合わせた特異施設を有し、S I 49はカマドと併行して地床炉・粘土充填ピットを有することから職種不明ながらそれぞれ工房跡と判断した。当該期の生業関連遺物は鉄製紡錘車がS I 31から1点、漁労具は土鍾がS I 44から3点、不明鉄製品がS I 12・13・76から1点ずつである。

#### (7) 竪穴建物跡廃絶後の窪地

S I 18の上層から大量の土器が検出された。S I 18のカマド内や床面直上から出土した土器より百年近く新しいⅦ期に帰属する土器群で、廃絶後床面から40cm埋没した段階での投棄である。帰属土器と投棄方向から20m北東側に位置するS I 12から投棄されたと推察される。Ⅱ期に帰属するS I 53のように廃絶後あまり時間をおかずに埋め戻して新しい建物を構築する場合と長期間窪地とする場合とが見て取れる。他にも上層とカマド内出土土器の時期差が大きい遺構はS I 7・13・19である。S I 8・50・62の3軒は焼土や炭化材の出土状況から、いずれも廃絶後の意図的な焼却によるものとみられる。炭化材の上にはローム土など一気に堆積した土層が見て取れる。他に竪穴建物廃絶後の利用のされ方は土取り遺構がある。14基の土取り遺構のうち5基は埋没途中の窪地段階で掘削されている。S Y 1とS I 37が重複し、両者には約百年近くの時期差が生じている。
































































#### (8) 集落内における道の想定

Ⅱ・Ⅲ期の建物跡が密集する調査区北西側で集落内の道を推察した。Ⅱ期の建物跡も相まった密集地に幅10mほどの空間ベルトが見られ、ここではⅡ・Ⅲ期に通じた道跡を想定し第369図に示した。本遺跡が立地する台地北側は急峻な勾配となり、日常の道としては使いづらい。台地南側に開析された小支谷の緩斜面を利用して下る道が最近まで3本通っており、浸食された幅広い谷へと繋がる。谷は現在も水田として使われ、谷頭までの奥行は約1kmを測る。恐らく当時も谷沿いに東へ下る道が通っていたと思われ、そのまま台地裾を回り込んで北側の荒川右岸沖積低地に広がる条里水田に至ったと考えられる。

#### (9) 集落変遷の小結

以上のような調査成果から古代集落の画期はⅢ期からⅣ期への移行期、Ⅵ期からⅦ期への2回であると考えられる。8世紀中頃に出現した集落は当初から半農半工の性格を持っていたものとみられる。Ⅱ・Ⅲ期も同じような性格付けの集落で、8世紀後半から9世紀前半まで隆盛を極める。Ⅱ期の鉄鉢形須恵器などの仏具やⅢ期の多量の釘出土などから西へ約1.2km離れた寺内廃寺に関連する集落とみられる。9世紀前半を境に急激な集落衰退が生じる。一例として興味深いのがS I 42の様相である。帰属はⅣ期としたが出土遺物はいずれも流れ込みのもので、ローム地山をカマドの袖として造り出す段階まで竪穴建物を構築しながら、それ以降の使用痕跡が全く見られない。構築途中で廃棄せざる負えない要因がⅢ期からⅣ期への移行期に生じ、背景に大きな社会変革や地震など自然災害の影響があったものと考えられる。寺内廃寺の最隆盛期は9世紀後半であるとされているため、集落衰退後も工房を主体に集落は継続される。集落最終段階のⅦ期も工房を主体とし、前段階に比べて竪穴形状の企画統一率が最も高く、調査区全域にほぼ等間隔に分布するため集落自体が規則性をもって形成し直されたともとれる。Ⅶ期以

第 92 表 鉄・銅製品時期別集成表（第 1 次・3 次調査分も含む）

古代時期区分	工房跡			鉄・銅製品					
	鍛冶	織紡関連	職種不明	農具	工具	武器 狩猟具	建築具	紡錘具	その他 不明
I									
II		1					 		
III	1	3	1		         宮下 II 	    宮下 II 			
IV	2	1	1		         	          		    	
V				 	 	   			
VI	1	1		 					
VII	1	1	2						  

降は集落の痕跡は確認できない。遺構が台地に痕跡を残さない平地式に変わったのか、集落自体が沖積低地に移ったのか興味深いところである。

第93表 竪穴建物跡一覧表

番号	グリッド	形状	規模(m, m)				竪穴主軸方位	時期	備考
			長軸	短軸	深さ	床面積			
1	A1-AK A1-AK	IIA3c	3.71	3.49	0.21	10.16	N90° E	II	
2	A1-AK A2-AK・AL	IIB2b	3.52	2.94	0.22	8.93	N50° E	II	
3	A2-AK・AL	I B5c	3.77	1.46以上	0.18	4.87以上	N72° E	III	
4	BA-AL	II B5c	2.85以上	2.62	0.10	6.55以上	N90° E	III	紡錘具、磨き土器出土
5	BA-AL・AM	I C3c	3.95	3.41	0.27	10.18	N71° E	IV	S14重様、紡錘具出土
6	BA-AL BB-AL	I B2d	4.01	2.97	0.17	9.55	N28° W	IV	打明具2出土
7	BB-AL	I B2e	3.19	2.85	0.64	6.80	N85° W	IV	
8	A1-AN	I B→II C2a	3.94	2.65	0.27	9.54	N3° W	IV	陶片鏡、農具出土
9	A2-AN	III D1b	2.22	2.06	0.14	3.83	N50° E	V	
10	A1-AO	II C→I B4c	4.20	4.16	0.34	15.09	N78° E	V	S13重様、農具2、工具2、建築具4、磁石、へう書き土器出土
11	A1-AP	II A2c	3.20	2.51	0.29	7.28	N74° E	II	
12	A2-AO	I B2c	3.86	2.97	0.20	9.87	N80° E	III	織物不詳工屑跡
13	A1-AQ	II A5d	3.19	2.14以上	0.26	5.31以上	N18° W	I	工具出土
14	A1-AQ・AR	I B5f	3.75	2.55以上	0.38	7.47以上	N43° E	II	
15	AR-AQ AR-AQ	I C5c	2.34以上	1.91以上	0.21	3.55以上	N74° E	II	
16	A2-AN・AO	I B→III 2a	3.98	3.40	0.67	10.56	N10° W	II	へう書き土器出土
17	BA-AN・AO	I B2d	4.08	3.14	0.55	9.57	N16° W	IV	鋸加工痕跡、磨石1基、引口や鉄滓多量、工具3、建築具3、打明具2、磁石、紡錘具、磨き土器出土
18	A2-AQ BA-AQ	II A2c	3.29	3.18	0.45	9.93	N87° E	V	接書3、へう書き・刷書土器4出土。(9期の産物か)
19	BB-AQ・AP	II B3b	5.09	3.61	0.47	14.40	N62° E	I	榎片施設、打明具2、磁石出土
20	BC-AO	I A3a	4.48	3.52	0.56	10.21	N10° E	II	打明具1、磁石、磨き土器出土
21	BB-AR・AN	III B3a	4.00	3.40	0.55	10.61	N5° W	III	S15重様、榎片施設、打明具出土
22	A1-AR	I B2c	3.59	3.04	0.07	9.80	N74° E	V	織物不詳工屑跡
23	A1-AO	II A1c	2.91	1.88	0.55	3.78	N88° E	III	打明具出土
24	BA-AN BB-AN	II B2c	3.67	2.79	0.42	7.98	N70° E	II	打明具、磨き土器2出土
25	A1-AR A1-AR	II B1b	2.55	2.20	0.16	3.94	N50° E	I	
26	A2-AP	I B2f	3.70	2.61	0.05	8.94	N31° W	III	
27	AQ-AK	II A1c	2.54	2.32	0.22	4.77	N89° E	III	地床炉(紡錘工原か)、打明具2出土
28	AQ-AL	II B3c	4.56	3.62	0.45	14.09	N80° E	II	建築具、打明具、磁石、へう書き土器2、仏具2出土
29	AP-AL AQ-AL	I B→II A3d	4.24	3.12	0.29	11.95	N15° W	III	工具、建築具、磁石2、磨き土器3出土
30	AQ-AL AR-AL	II B3c	4.14	3.06	0.29	10.23	N75° E	II	拡張建物か
31	AR-AL AS-AL	I B2e	3.36	2.69	0.11	7.61	N73° W	III	紡錘具出土
32	AQ-A1 AR-A1	I D1a	2.84	2.38	0.67	4.37	N5° W	III	打明具1、転用鏡、磨き土器出土
33	AP-AM	I B5f	3.40以上	2.53	0.08	4.87以上	N65° W	VI	
34	AT-AL・AM AU-AL・AM	I B3d	4.48	3.75	0.43	14.26	N13° W	II	榎片施設
35	AR-AR・AN AS-AR・AN	II B3c	4.45	3.50	0.52	12.56	N85° E	II	魚骨具4、へう書き土器出土
36	AP-AL	II B3c	4.13	3.75	0.24	13.65	N81° E	III	拡張建物か
37	AR-AM AS-AM	I A2a	3.61	2.98	0.36	8.71	N3° E	II	S11・2重様、磨き土器出土
38	AQ-AL AR-AL	II B2c	3.82	3.00	0.48	8.57	N75° E	II	紡錘具出土
39	AP-AK AR-AL	05d	3.36	0.71以上	0.48	1.81以上	N14° W	III	炊釜・煎造り片検出、本遺跡最古の鋸加工痕跡か

番号	グリッド	形状	規模 (m, m)				壁穴主軸方位	時期	備考
			長軸	短軸	深さ	床面積			
40	BC-AN	I B3c	4.21	3.66	0.47	12.63	N81° E	Ⅱ	516遺構、建築員2、漁舟具、磁石、墨書土器出土
41	BD-AN	I B5c	4.27以上	3.35	0.30	13.33以上	N88° E	Ⅵ	農具2、建築員出土
42	BC-AO BD-AO	I B2a	4.01	3.38	0.48	9.55	90° W	Ⅱ	
43	BD-AP BE-AP	I B3c	4.64	3.72	0.35	13.63	N72° E	Ⅱ	陶埴不詳工房跡、打明瓦、転用礎出土
44	BC-AQ	I B4c	5.05	3.89	0.21	17.14	N80° E	Ⅴ	漁舟具3出土
45	BC-AR	I A3c	4.45	3.94	0.17	14.09	N87° E	Ⅳ	517遺構、地床伊(防堀工房か)、工具、建築員、磁石、墨書土器出土
46	BD-AQ-AR	I C2c	3.69	2.67	0.24	7.57	N76° E	Ⅳ	鍛冶工房跡、鍛冶炉1基、羽口や鉄滓多量、工具2、建築員3、打明瓦、紡錘具出土
47	BD-AR	I D2e	3.38	2.86	0.83	6.56	N89° W	Ⅱ	須雲器大塚、建築員出土
48	BD-AR	I B2b	3.17	2.65	0.20	7.55	N87° E	Ⅱ	
49	BD-AQ BD-AR	I B3b	4.59	3.03	0.17	10.67	N50° E	Ⅴ	地床伊(防堀工房か)
50	BK-AX BO-AX	II C→I B→I A3b	4.83	3.37	0.45	13.03	N67° E	Ⅳ	炭材焼跡、陶埴不詳工房跡、工具、建築員4、打明瓦3、磁石、転用礎出土
51	BP-AX-AY	II C2c	3.60	2.87	0.30	8.59	N71° E	Ⅳ	S110・11重複
52	BS-AY BS-AY	II B→I B3b	4.50	3.16	0.30	11.84	N58° E	Ⅳ	S112・13・14重複、坪3点量なり、工具、打明瓦2、磁石、墨書土器出土
53	BJ-AO	I B→I A3a	4.28	3.60	0.38	12.55	N10° W	Ⅱ	礎状施設、磁石、転用礎出土
54	BI-AN BJ-AN	I B3c	4.20	3.37	0.36	11.86	N89° E	Ⅱ	磁石、転用礎、墨書土器出土
55	BI-AN-AO BK-AO	II A3c	4.38	3.20	0.49	12.02	N73° E	Ⅱ	墨書土器出土
56	BK-AR	I A2a	3.25	2.47	0.41	6.75	90° E	Ⅱ	工具2出土
57	BK-AR BL-AR	I B3c	3.84	2.89	0.03	10.60	N73° E	Ⅵ	地床伊(防堀工房か)
58	BM-AO BN-AP	I B3a	4.70	3.88	0.53	14.98	N9° W	Ⅱ	工具3、磁石出土
59	BM-AP BN-AP	I A4a	5.45	4.18	0.40	19.24	N20° W	Ⅱ	地床伊(防堀工房か)、礎状施設、工具、打明瓦出土
60	BO-AP BP-AP	I B4a	5.24	3.51	0.30	15.48	90° W	Ⅱ	518遺構、工具、墨書4・ヘラ書き土器出土
61	BP-AO-AP	I A1a	2.83	2.30	0.33	4.94	90° W	Ⅱ	転用礎、墨書土器出土
62	BP-AO BP-AP	II B2e	3.73	3.27	0.24	9.96	N87° W	Ⅱ	519遺構、炭材焼跡、坪2点量なり、建築員、磁石出土
63	BR-AO	II B1c	2.81	2.39	0.25	4.67	N70° E	Ⅱ	
64	BR-AP BS-AP	II B5b	3.83	2.15以上	0.37	5.81以上	N54° E	Ⅱ	地床伊(防堀工房か)、打明瓦、磁石、ヘラ書き土器出土
65	BS-AP	II A2b	3.71	3.27	0.16	9.83	N68° E	Ⅱ	磁石出土
66	BP-AL-AM	II B3c	4.55	3.18	0.36	11.86	N77° E	Ⅱ	燻葺具、磁石出土
67	BK-AL	I B→I A3a	4.54	3.43	0.32	14.16	90° W	Ⅱ	磁石出土
68	BL-AL	II B5b	4.35	3.15以上	0.12	12.30以上	N66° E	Ⅱ	磁石、墨書土器出土
69	BR-AN BS-AN	I B4a	6.30	4.44	0.32	23.85	90° E	Ⅱ	最大の床面積建物跡、地積用土器埋納ピット係出ピット、墨書土器出土
70	BT-AO-AP	II B3c	4.42	3.44	0.26	11.79	N83° E	Ⅳ	打明瓦、転用礎出土
71	BJ-AX BK-AX	05c	3.53	0.97以上	0.26	2.36以上	N88° E	Ⅱ	
72	BI-AM BJ-AM	II A→I B3d	4.01	3.33	0.39	11.67	N20° W	Ⅱ	拡張建物か、農具出土
73	BJ-AM	II B3f	4.22	3.38	0.18	13.33	N47° E	Ⅱ	
74	BI-AM	II A→I B3c	3.18	0.52以上	0.28	0.91以上	N72° E	Ⅱ	地床伊(防堀工房か)
75	AO-AN-AO	02c	3.15	2.35	0.22	5.73	N90° E	Ⅱ	
76	BO-AR-AS	II C2a	2.69	2.54	0.07	5.93	90° E	Ⅴ	鍛冶工房跡、鍛冶炉3基、鉄滓出土
77	AL-AQ	05e	2.38以上	0.76以上	0.14	1.15以上	N81° W	不明	
78	BK-AL	02c	3.02	2.66	0.28	6.74	N70° E	不明	
79	BD-AR	03e	4.00	3.81	0.18	13.33	N89° W	Ⅱ	
80	BH-AS	I B2f	3.57	3.10	0.58	8.52	N40° W	Ⅴ	S107と容れ子杖に重複



## 5 宮下遺跡の墨書・刻書土器

宮下遺跡出土の墨書・刻書土器は、今回の第4次調査では第370図で示す31点を検出した。内訳は文字・記号の形状が明確なもの17点、痕跡から推定できるもの6点、不明なもの・筆痕らし・墨痕等8点である。過去の第1～3次調査の検出例を加えると、確認された墨書・刻書土器は全部で40点となり、確認された文字・記号は推定できるものを含めると、22種類に及ぶ。刻書については、焼成前に書かれたものをヘラ書、焼成後に書かれたものを線刻とした。今回調査ではヘラ書については7点、線刻については2点確認し、そのうち線刻画については別項とした。また、紙数の都合により本項ではヘラ書は取り扱わないこととした。

以下、第370図について若干の考察を行った。行頭の数字は図版で示す数字と対応する。

- ① 積読は「□□（狄嶋カ）」である。須恵器坏の底部外面に記されている。

字体は整っており、二文字が確認できる。一文字目はイ偏であるが、旁は草書風に記される「火」の上部に二画加わる。二文字目は山偏であるが、旁は「且」の上部に「ク」が加わる。推測にすぎないが、いずれも旁の上部に加筆の特徴が共通していることから独自化した文字の可能性があり、基礎となった文字は「狄嶋」と考えられる。この場合、元来「狄」は北方にいる異民族を指し示す言葉である。「嶋」は、元来は石の山を示す言葉で、転じて険しい巖しいといった意味を持つ。想像をたくましくすれば、当地の北方面にいた狄＝蝦夷の阻害を目的とした古代の蝦夷征討に係る呪句とも読める。北武蔵地域の住人は蝦夷征討に駆り出され、また櫛戸等として現地へ移住していることが指摘されており、このことと関係している可能性がある。または、単に人や物、場所などの名称か。

- ② 積読は「道□（円カ）」である。須恵器坏の底部外面に記されている。

遺存状態が悪いが、やや草書風の整った字体で記され、「道円」または「道内」とも読める。二文字目の三画目が飛び出ているようにもみえるが、四画目は横線で書かれており、二股に分かれないことから、ここでは「道円」としておきたい。「道円」を僧名とみるならば、道忠に連なる僧名の可能性も窺える。出土地点は第69号竪穴建物跡の埋納ビットであり、祭祀行為に係る墨書である。

- ③ 積読は「朝方」である。須恵器坏の底部外面中央に記されている。

「朝」は偏が小さいが、旁が大きく記され字形のバランスがとられている。意味は朝万呂等の人名とみられるが、素直に読めば「あさま」とも読める。

- ④ 積読は「小□（被カ）」である。須恵器坏の底部外面に記されている。

底部中央に達筆で記されている。二文字目は上部のみ遺存するが、筆致から「被」を想定した。「小被」であれば、読みは「おぶすま」であり、郡名を記したのと考えられる。

- ⑤ 積読は「□上（主上カ）」または「□□上」である。須恵器坏の体部外面に横位で記されている。

遺存状態が悪く明確に読み取れなかった。出土地点である第52号竪穴建物跡は祭祀の痕跡がみられる。

- ⑥ 積読は「田□（北カ）」である。須恵器坏の体部外面に横位で記されている。

筆致から横位に記されたものと推測した。二文字目は不明瞭であるが、「北」と記されたものであれば場所を示すものとみられる。

① 第363図143  
出土位置 AW-AP G

狹  
嶋

② 第209図 3  
出土位置 S169

道  
河

③ 第94図 9  
出土位置 S129

朝  
万

④ 第184図11  
出土位置 S160

小  
山

⑤ 第162図 4  
出土位置 S152

主  
上

⑥ 第112図 1  
出土位置 S137

界

⑦ 第168図 3  
出土位置 S154

上  
之

⑧ 第83図 8  
出土位置 S124

上  
之

⑨ 第73図 5  
出土位置 S120

上  
之

⑩ 第206図 6  
出土位置 S168

上  
之

⑪ 第186図 1  
出土位置 S161

下  
三

外面

内面

⑫ 第171図 1  
出土位置 S155

十

⑬ 第94図10  
出土位置 S129

ナ

⑭ 第347図 4  
出土位置 AX-AR G P1

孝

⑮ 第32図 1  
出土位置 S14

路

⑯ 第101図 3  
出土位置 S132

河

⑰ 第162図 3  
出土位置 S152

上

⑱ 第65図32  
出土位置 S18

六

⑲ 第83図 7  
出土位置 S124

六

⑳ 第184図15  
出土位置 S160

万

㉑ 第133図 9  
出土位置 S145

上

㉒ 第61図 4  
出土位置 S117

上

㉓ 第275図 2  
出土位置 S12

上

㉔ 第184図10  
出土位置 S160

上

㉕ 第119図 1  
出土位置 S140

一

㉖ 第65図33  
出土位置 S18

一

㉗ 第65図11  
出土位置 S18

一

㉘ 第94図 8  
出土位置 S129

卯

㉙ 第363図144  
出土位置 S055

卯

㉚ 第184図 9  
出土位置 S160

上

㉛ 第347図17  
出土位置 BP-AX G P2

上

参考 1

号

参考 2

上

参考 3

上

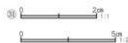
参考 4

上

参考 5

上

参考 1：埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会発掘文化財調査報告書第 1 集『宮下遺跡 II』第 25 図 5 を再トレース  
参考 2：埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 301 集『下田町遺跡 II』第 69 図 21 を再トレース  
参考 3：千葉県文化財センター調査報告第 358 集 - 印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡 - 第 61 図 10 を再トレース  
参考 4：千葉県文化財センター調査報告第 358 集 - 印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡 - 第 61 図 11 を再トレース  
参考 5：千葉県文化財センター調査報告第 358 集 - 印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡 - 第 61 図 13 を再トレース



第 370 図 墨書・刻書集成図

⑦・⑧・⑨・⑩ 4 点ともに積読は「卜之」であり、須恵器坯の底部外面に記されている。

字形をみれば、⑦「卜之」（底部外面調整全周ヘラ削り）と、類似する⑧～⑩「レ之」（底部外面調整周辺ヘラ削り）に分けられるが、⑦に古い要素があるため、「卜」→「レ」への字形の変化があったと

みられ、積読を「卜之」と推察した。なお、二文字目は第1画目の点をいずれも欠くが、運筆から「之」と判断した。「卜之」は本遺跡の特徴的な文字であるため、類例として第370図参考2～5を示した。市内では、宮下遺跡第3次調査第18号竪穴建物跡及び下田町遺跡第89号井戸跡から同種の文字(参考2)が出土している。また、千葉県印西市鳴神山遺跡1033号竪穴建物跡等において、「支」と積読されている墨書(参考3～5)と字形及び特徴が共通する。本遺跡例も含めいずれも一文字とするには縦に長く、サイズとしては縦二文字分であることが共通する。一・二画目は「十」とはならず、「卜」となる。本遺跡では「之」とした下部は「ス」に近い字形であり、最終画の払い、前面の終点付近からの入りであり「又」とはならない。また、上部の「卜」と下部の「ス」は間が狭いか触れている等の特徴を有している。

⑪ 外面の積読は「十」、内面の積読は「三」である。須恵器環の体部外面は正位、体部内面は横位で記されている。

外面の「十」は太字であり、筆致から正位に記されたものと判断できる。類例は本遺跡では⑫に求められ、付近の遺跡では内面の「三」は細字であり、筆致から横位に記されたものと推測した。

⑫ 積読は「十」である。須恵器環の体部外面に正位で記されている。

外面の「十」は太字であり、筆致から正位に記されたものと判断できる。

⑬ 積読は「ナ」または「×」である。須恵器環の底部外面に記されている。

「×」または「ナ」と判断したが、この須恵器環は底部外面の調整が回転糸切離し後無調整であり、9世紀ごろ成立したとされるカタカナであっても时期的な矛盾はない。なお、「ナ」と判断された墨書土器は武蔵国内ではわずかだが、常総方面では確認例がある。

⑭ 積読は「寺」である。土師器環の底部外面に記されている。

底部に達筆で記されている。最終画の点は跳ねている。どの「寺」を示すかは不明であるが、本遺跡からは、鉄鉢型土器や僧名の可能性を示す⑯「道口(円カ)」墨書が出土している。

⑮ 積読は「器」である。須恵器環の体部外面に正位で記されている。

文字の意味どおり何かしらのための「器」を示す文字と思われる。近隣の類例墨書は西別府祭祀遺跡から「器佛」が確認されている。

⑯ 積読は「口(井カ)」である。土師器環の底部外面に記されている。

遺存状態が悪く断定はできないものの、補正画像からは鳥居の形をした記号状にもみることができる。推定となるが、呪符に関わる記号の可能性を疑っておきたい。

⑰ 積読は「上」である。須恵器環の体部外面に正位で記されている。

体部外面に大きく記されている。「上」は本遺跡では1点のみであるが、全国的かつ確認件数も多い文字である。出土地点である第52号竪穴建物跡は祭祀の痕跡がみられる。

⑱ 積読は「口(木カ)」である。須恵器高台壇の底部外面に記されている。

底部に大きく記されている。「木」は多く確認されている文字であり、古代武蔵国エリアからは110点以上確認されている。近隣では熊谷市北島遺跡、飯塚北遺跡、根給遺跡、本庄市東五十子遺跡、深谷市大寄遺跡、鶴ヶ島市横田遺跡、鳩山町広町遺跡で出土例があるほか、特に市内の諏訪木遺跡で50点以上確認されている。ここでは集団の表徴を示すものと考えておきたい。

- ⑱ 積読は「□」である。土師器杯の底部外面に記されている。  
遺存状態が悪く、全体像は不明である。遺存する一画目の横線、下部の左右の払い、中央の垂線と跳ねから、「木・本・奉・水」などの可能性がある。
- ⑲ 積読は「□（万カ）」である。須恵器杯の体部外面に横位で記されている。  
字形が縦長であり、旁のみ遺存した文字とみられるが、「万」一字の可能性もある。
- ⑳ 積読は「□」である。須恵器高台杯の底部外面に記されている。  
字形の右下半部が遺存する。部分的に「可」や「寸」が含まれる字形と推察される。
- ㉑ 積読は「□」である。土師器杯の底部内面に記されている。  
三画目以降が不明瞭であり、字形の推定が困難である。
- ㉒ 積読は「□」である。須恵器杯の体部外面に正位で記されている。  
筆致から正位に記されたものとみられるが、字形の推定は困難である。
- ㉓ 積読は「□」である。土師器杯の体部または底部内面に記されている。  
文字の上部が欠損しており、下部の二本の縦線が細字で記されている。運筆をみると左側は止め、右側は払いとなる。文字種は不明である。
- ㉔ 積読は「□」である。須恵器杯の底部外面に記されている。  
詳細は不明ながら、筆の入りの箇所と推定される。
- ㉕ 積読は「□」である。須恵系土師質土器杯の体部または底部内面に記されている。  
詳細は不明である。筆の入りの箇所として図示したが、筆の払いの部分の可能性もある。
- ㉖ 積読は「□」である。向き不明ながら須恵器杯の体部外面に記される。  
詳細は不明である。筆の払いの箇所として図示したが、筆の入りの部分の可能性もある。
- ㉗ 積読は「□（記号カ）」である。須恵器杯の体部外面に正位で記されている。  
錫杖の頭部のような形状であり、記号状の文字とみられる。類例は㉔が挙げられるが、このほかは管見にふれる限り確認できなかった。
- ㉘ 積読は「□（記号カ）」である。須恵器杯の底部外面に記されている。  
記号状の文字とみられ、類例は㉔が挙げられる。
- ㉙ 積読は「×」である。土師器杯の底部外面に記されている。  
「×」であり、記号状の文字とみられるが、筆慣らしの痕跡の可能性もある。
- ㉚ 積読は「万」である。土製紡錘車の底面に刻まれている。  
ミガキが施され、精緻につくられた紡錘車の底面に、小振りで細く線刻されている。三画目は二画目にくっついておらず、字形は縦長である。この字形は㉔「□（万カ）」と似通った印象を受ける。  
過去の調査事例を合わせて文字別の点数をみると、「卜之」及び「足刀」が5点ずつ確認され、他の文字より数量の点では際立つことから本遺跡における特徴的な文字といえる。「卜之」は第三次調査で1点確認されていたが、独自化している文字であることから意味不明との取扱いであった。本調査によって類例が増加したことから「卜之」として取り扱う。類例については前述のとおりである。近似する特徴をもつ文字が他地域でも確認されている点は注意したい。依然として文字自体の意味を見出すのは困難であるが、同一集落内で一定数検出されていることから、集団の標識文字として機能したのと考え

ておきたい。

第370図参考1で示した「足刀」は『宮下遺跡Ⅱ』にて、文字の意味から詳細な考察がなされている。今回は視点を換え、表音文字としての「足刀」を考察してみたい。様々な読み方が可能であるが、「あと」と読めば、古代の氏族である「阿刀氏」につながる。古代氏族辞典によれば、阿刀の表記には足刀も充てられており、「あと」と読むことに差し支えはない。阿刀氏は仏教に関わりが強く、出雲系氏族とされ鍛冶の技術を持つ物部氏に連なる。本遺跡は、仏教的痕跡があること、釘等の建築に係る鉄製品の生産が行われていること、本遺跡の古代における存続期間等から、近接地に所在する古代寺院である寺内廃寺と無関係ではないだろう。また、千代に近接する板井地区には延喜式内社の論社である出雲乃伊波比神社が所在し、出雲系氏族が奉斎したことも併せて考慮すると、「足刀」は阿刀氏を示すものとして集団の標識文字としての機能があったと考えておきたい。

江南台地周辺の古代の遺跡は、製鉄に係るものが目立つ傾向にあるが、生産を担った人々自体の特定は困難で不明な点が多い。しかし、文字を記す行為の原因は不明なものの、集団の標識文字として墨書が土器に記されたのであれば、本遺跡の墨書は、当地域における製鉄を担った集団に係る資料として、僅かではあるが一定の指標となるものと思われる。また、第52号及び第69号竪穴建物跡遺物出土例からは、土器への墨書行為の一端を垣間みることができた。

## 6 第52号竪穴建物跡出土の線刻画について

第162図14は第52号竪穴建物跡出土のやや扁平な長方形を呈する凝灰岩製の甌石であり、およそ半分を欠損している。破損部付近には双方向からの穿孔がみられ、上・下端面を除く四面に線刻がみられた。線刻は、押擦による摩耗がないことから、甌石としての使用を止めた後に施されたものと考えられる。全体的に線刻の刻みは浅く、不明瞭な箇所が多いが、表面及び左側面は遺存状態が比較的良好であった。特徴を記すと、上位に円状の沈線がみられ、垂下する平行線が左右に「八」字状に開く。「八」字状の中央には横・斜位の沈線が少数刻まれ、円の上方と「八」字状の外側に横・斜位の短沈線が複数刻まれるが、主軸方向を遡る等により中央の沈線とはつながりを欠く。線刻が遺存する面からは同様の特徴が、断片ながらもうかがえることから、同じモチーフの線刻であったと推察され、画像が描かれたものと思われる。想像をたくましくすれば、円の上方と「八」字状の外側に短沈線により後光が表現され、「八」字状の沈線は袈裟・僧袈支等の纏う服装やシワを表し、円状の沈線と周辺の沈線は顔や頭部の表現を示すものと思われるが、総体としては稚拙な画像といえる。

出土位置をみると、カマドの周辺である。また共伴遺物をみれば、須恵器1点が近接し、やや離れるが、重なった須恵器坏3点みられ、いずれも伏せた状態で出土している。そのうち、第162図3・4(遺物図)は墨書土器であり、第370図④・⑤(墨書図)が該当する。坏の特異な状態での出土状況からは、何らかの祭祀行為が想起される。本遺物の線刻画はカマド神を模したものである可能性があり、土器への墨書行為もこれに伴う。また、カマド神が仏像に類似した表現であることからは、当時の神仏混淆の習俗を示すことや、住居改築・廃棄時のカマド廃棄に伴う祭祀例として、好例であると思われる。

## 7 中・近世の様相

### (1) 第55号溝について

当調査区で確認された遺構の中に「IV遺構と遺物 3溝跡」で述べた、長さ206mを測る長大な区画溝、SD55がある。調査当初は館等の堀跡と考えたため、現在、遺跡周辺に残る地名から館跡を推定することにした。遺跡周辺の千代地区の地名を見ると、当調査区の東側に「押出(おしだし)」西側に「北方(きたかた)」南側に「東原」、南西に「南方(みなみかた)」北側に三本地区の「駒形」「山下」の地名が残されている。このうち、「北方」はきたやかた=北館、「南方」はみなみやかた=南館とも考えられ、また「押出」は館等から武士たちが押し出すところという意味があることがわかった。文禄4年(1595)に作成された検地帳「武州男衆部之千代村御縄打水帳」の田方・畑方には「宮上」「うしろ」「植木」「天神のうしろ」「宮之下」「たんだ」「畠中」「夕喜塚」「にし」「まい」「さかいほり」「竹之中」「やしきそい」「くねきわ竹之中」「にしの内」と記され、屋敷方には「ミナミかた」「きたかた」の地名が記されている。このうち現在でも残っている地名は「植木」「宮之下」「ミナミかた」「きたかた」のみである。

本遺跡の北隣に所在する「駒形」は、以前、駒形神社が鎮座していた場所であり、現在は三本地区に所在する渡唐神社に明治40年(1907)合祀されている。ちなみに、駒形神社には「昔、万吉村の権田某が所有していた栗毛の駿馬を熊谷次郎直実の所望により譲り、直実が一の谷の合戦で活躍した後、馬は故郷に戻り息絶えた。そこで村人が権田栗毛と呼んで手厚く葬り、神社を創建した」という伝承が残っている。このように、地名から考えると館跡等の存在が少なからず浮かび上がるが、SD55は直線的で館跡に見られるような屈曲が認められず、また、土塁の痕跡も確認されていない。そして、溝の法面には数多くのピットが掘られている状態であった。出土遺物は14～15世紀後半のものであるが、SD55は最低でも2回の掘り返しが行われ、SD79との重複関係から14世紀代と15世紀後半までと2時期に分けられる可能性がある。

ところで、宮下遺跡は江南台地の北東端縁辺部に立地し、東-西方向の尾根状に張り出した台地の先端部に位置する。また、本遺跡の南側には東-西方向の幅約50mの開析谷が位置し、その上流は植木沼・三角沼へと続く。1/2,500の地形図(江南町都市計画図4、平成8年9月修正)を見ると、東側の台地の先端部から西へ約250m付近では、標高55～58mの等高線が、南側の開析谷から北側に向かって入り込む地形(東谷)が観察され、そこからさらに西へ約180mの地点では、標高57～59mの等高線が北西に向かって入り込む地形(西谷)が観察される。SD55はこの西谷の左岸に位置し、谷と台地との切れ目で谷を取り囲むように確認されている。また、本遺跡の西に隣接する県道深谷・東松山線の西、北方地内では県道から西へ約120m付近で、標高59・60mの等高線が南から北に向かって入り込む地形があり、ここにも谷の存在が考えられる。そして、この北方地内の谷と当調査区の西谷に挟まれた台地部には、南側に舌状に飛び出す平場が形成されていることが判明した。

なお、SD55の延長部を調査するため、県道付近で地中レーダー探査を実施したが、その結果、この溝は県道を越えて、さらに西へ延びることが確認された(第391図)。西谷内におけるSD55が谷を取り囲むように検出された状況から、溝は北方地内の谷に南下する可能性がある。また、SD55は断面形態が逆台形・V字状を呈しており、東京都町田市木曽森野遺跡や同八王子市宇津木台遺跡などで確

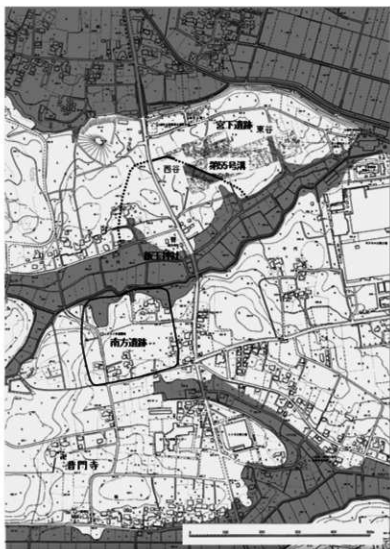
認められた古代の溝に類似する。両遺跡の溝は牧の囲い溝と考えられており、その断面は逆台形・V字状で溝内に多数のビットが検出されている。さらに、このように台地を区切る古代牧の溝は、群馬県安中市中野谷遺跡群内中原遺跡・下宿東遺跡でも確認されている。また、本遺跡と同じ江南台地上の円山遺跡では、竪穴建物跡から「有」の鉄製烙印が検出され、古代から牛馬が飼育されていたことが確認されている。これらのことから、中世においても同様に台地を区切る溝が存在していたと想定される。そして、創建は不詳であるが、本遺跡の北隣にかつて馬の守護神として駒形神社が鎮座していたことから、S D 55 は中世における牧の囲い溝であり、溝に囲まれた部分は牧と推定される。

一方、本遺跡の南側には、東一西方向の開析谷の南に接して上杉

館の伝承を持つ南方遺跡が所在する。南方遺跡は昭和 57 年 (1982) と平成 25 年 (2013) の 2 次にわたって発掘調査が実施され、特に 2 次調査では東一西方向の溝跡が 2 条、掘立柱建物跡 2 棟が確認されている。溝跡はその断面が幅広の U 字・V 字状を呈し、14 世紀代の在産片口鉢が検出されている。また、掘立柱建物跡のうち 1 棟は 4 間×2 間の総柱建物跡であったことが確認されている。出土遺物は溝跡出土のものが中心で、年代的には当調査区の S D 55 の前半の時期に相当する。

さらに、南方遺跡の周辺には、遺跡の鬼門の方角である北東方向約 300 m に飯玉神社が鎮座し、裏鬼門の方角である南西方向約 300 m には天台宗の普門寺が位置する。飯玉神社及び普門寺の創建は共に不詳であるが、飯玉神社の祭神は食物の神である豊受姫命と伝え、江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の千代村の項に「本地十一面観音を安ず、伊奈備前守が文禄度の檢地に、社地を除きたり」と記されている。また、普門寺は「天台宗、大里郡三ツ木村安徳寺の門徒、千代山葉王院と号す、当寺もと葉師庵と号せしを天和 2 年 (1682) 取り立て一寺となす」と記されている。このことから、飯玉神社は 16 世紀末以前の創建で、普門寺の前身である葉師庵は 17 世紀末以前に庵を結んでいたことがわかる。

ところで、地域の中世を物語る史料の一つとして板碑があるが、平成 15 年に刊行された『江南町の



第 371 図 第 55 号溝とその周辺図

板碑Ⅰには、千代地区で22基の板碑が収録されている。その内、南方で確認されたものが17基あり、実に千代地区の約80%の板碑が南方に集中していることがわかった。板碑は文化3年(1806)に地内で出土した康永2年(1343)銘をはじめ、応永21年(1414)、長享2年(1488)の紀年銘があるものが3基あり、年号不明のものが14基ある。

以上のように、遺構や出土遺物・板碑・周辺寺社の存在から類推すると、14世紀代の南方には、堀に囲まれた居館を構えていた集団が存在していたと推定される。また、居館の北に位置する台地上には本遺跡側から南へ舌状に飛び出す平場があり、そして、これを取り囲むように掘られたSD 55が存在する。この溝からは居館と同時期の遺物が出土しており、その断面形態や法面に多数のビットが掘られている状態から、牧の囲い溝と推定した。さらに、本遺跡から南方遺跡の居館への直線距離は約500mで、牧と推定した平場の中心部からは約400mである。このように、牧と南方遺跡の居館が目と鼻の先であることを考え合わせると、当時、南方の居館に居住していた集団が、当調査区で確認されたSD 55で囲まれた牧の経営に当たっていた可能性が高いと言える。

## (2) 近世の屋敷について

当調査区では、江戸時代の掘立柱建物跡が3棟確認されている。この建物跡SB 8・15・16はBJ・BK-ALグリットに集中しており、また、建物群を取り囲むように溝が確認されている(第372図)。溝の掘り込みは浅かったが、土層観察から掘り返しが行われているものが多いことがわかった。掘り返し以前の溝(前期)は覆土に浅間Aテフラ(以下、テフラ)を含まず、掘り返した後の溝(後期)は覆土にテフラを含むことが判明した。覆土にテフラを含まない遺構は、SB 8・15・16、SD 26・32・60～62・64・L字状の66・67・68・前期SD 69・70・前期SD 71、SE 7である。SE 7はその最上層にテフラを微量含むが、それより下層にはテフラは含まないため、埋没の最終段階でテフラが混入したものと考えられる。

第372図を見ると建物群の東側に南-北方向の溝SD 60とその南延長上にSD 26があり、南側には東-西方向のSD 32・前期SD 69、西側に南-北方向の前期SD 69がある。SD 26と前期SD 69の間は約44mである。また、その内側には東側に南-北方向のSD 61、南側に東-西方向のSD 62・66、西側に南-北方向のSD 66が存在する。SD 61とSD 66の間は約41mである。そして、SD 62は掘り込みが浅かったため、その東側への延長部分は不明であるが、東へ延びていた可能性もある。これらのことから、建物を中心として二重の溝がコの字状に巡っていたと推定される。なお、東側のSD 60と61の間は約1m、南側のSD 62・66とSD 32・69の間は約10m、西側のSD 66と前期SD 69の間は約2mである。

二重の溝で囲まれた調査区では江戸時代と考えられる土坑のうち、覆土にテフラを含まない土坑は建物跡付近とSD 66の南西側コーナー付近で確認されており、建物群の南側では確認されていない。そのため、この部分は屋敷の人々が農作業等を行った前庭であった可能性が高い。庭の南には今回の調査区で確認された井戸のなかで最も規模が大きい、直径が4m、深さが2.5m以上を測るSE 7が確認されており、18世紀中頃から後半の遺物が検出されている。井戸は調査を実施した冬場で最も湧水が著しく、最下層までの調査は不可能であった。そのため、当時でも井戸の水は四季を通じて潤れなかったも





第 372 図 浅間 A テフラを含まない遺構

のと思われ、飲料用はもちろんのこと、畠等の農作物育成に寄与していたものと考えられる。また、溝の主軸方向と建物の主軸方向をみると S B 15・16 はほぼ同一方向であるが、S B 8 は同一ではなかったため、若干の時期差があるものと思われる。そして、建物群の北側は攪乱により壊されていたため詳細は不明であるが、ここに主屋が存在していた可能性もある。

一方、調査区の南西部の西谷に目を向けると、ここでは周囲を溝で囲まれた谷津田が確

認されている。溝は「IV遺構と遺物 3 溝跡」で谷津田の水路と推定したが、断面観察ではテフラを含む覆土であることが判明している。しかし、田の耕作は春先に畦取りを行って田を耕し、田に水を引いたあと作付けを行うという作業を毎年繰り返して行くことから、テフラ降下前から谷津田は耕作されていたと考えられる。この溝からは 12 世紀中頃から 13 世紀代の龍泉窯系青磁碗や 14 世紀末から 15 世紀前半の古瀬戸天目茶碗、16 世紀末から 17 世紀初頭の瀬戸美濃天目茶碗等が検出されており、古くからこの谷津田は耕作されていた可能性もある。さらに、「第 55 号溝について」の項で述べたように、本遺跡の南側には東-西方向で幅約 50 m の開析谷が存在する。延宝 6 年 (1678) の「御正村他四ヶ村と千代村・三ツ本村野論につき裁許状絵図」は、入会地の利用を巡る野論について幕府が下した裁許状であるが、この絵図の中には千代村の宮下周辺も描かれており、本遺跡の南側に位置する開析谷には上流の植木沼・三角沼付近まで田の表現が用いられている。これにより、遺跡の南側の開析谷は 17 世紀の後半にはすでに耕作されていたことがわかり、屋敷に居住していた人々は西谷の耕作や開析谷内の耕作を行っていたとも考えられる。

なお、当該調査区の東隣で平成 20 年から 21 年にかけて実施された宮下遺跡第 3 次調査では、建物跡は確認されなかったが、コの字状に囲まれた溝の内側で井戸跡 2 基・土坑 11 基が確認され、18 世紀中頃から後半の陶磁器類が多数検出されている。そのため、本遺跡には 18 世紀代の屋敷が 2 軒存在していたと推定される。

ところで、18 世紀代に千代村を知行していたのは、折井市左衛門、本田安之助、田中出羽守の三人であったことが、明和元年 (1764) の「千代村明細帳」(以下、「明細帳」)からわかる。「明細帳」の折井氏の知行分には「寺ヶヶ所 武蔵国大里郡三本村 安徳寺門徒 普門寺 是者葉師面地之内」と記されており、田中氏の知行分には「田五畝歩 畑八畝歩 飯玉大明神社地 是ハ伊奈満蔵様御除キニ申入り候」と記されている。このことから、折井氏の知行地は宮下の南西、普門寺が所在する山之神や南方周辺で、田中氏の知行地は飯玉神社が所在する北方や宮下周辺と考えられる。また、寛政 9 年 (1797) の「地所並びに御林地差戻しの旨申付並びに水帳写」には本田氏領である千代村内の東原御林の管理が、成沢村名主から千代村名主へと変更されていることが記されている。そのため、本田氏の知行地は宮下の南側に所在する東原周辺と考えられる。ちなみに、「明細帳」に記されている三氏の千代村内の石高は、折

井氏が75石、本田氏が13石、田中氏が29石とあり、千代村全体の石高は117石となっている。また、村の戸数と人口は、折井氏の知行地が25軒で82人、本田氏が4軒で18人、田中氏が20軒で72人となっており、18世紀中頃の千代村には49軒の家があり人口は172人であったことがわかる。

これらのことから、18世紀代の千代村宮下は田中氏の知行地であった可能性が高く、また、田中氏の知行地における20軒のうちの2軒が、当調査区と第3次調査で確認された屋敷跡が該当するものと推定される。

一方、溝で囲まれた調査区周辺で覆土にテフラを含む遺構（第373図）は、溝ではSD 63・L字状に確認されたSD 66の南—北方向を壊して直線的に掘られたSD 65・後期SD 69・同SD 71や調査区を東—西に横切るSD 23・24がある。特に、西側のSD 65と後期SD 69は並行しており、旧公図に表わされていた赤道と同様、2条の溝は道の側溝と考えられる。土坑は建物跡周辺とSD 65と後期SD 71に挟まれた部分に集中して確認されている。SB 8は覆土にテフラを含む土坑とは重複していないため存続期間は不明であるが、SB 15・16は柱穴の上部が覆土にテフラを含む土坑に壊されていることから、18世紀末以降には存在していなかったことがわかる。また、今回の調査区で確認された最も規模の大きいSE 7が、テフラ降下後の18世紀末には使用されていないことを考えると、SB 8も他の建物と同様、18世紀末以降には存在していなかったと想定される。



第373図 浅間Aテフラを含む遺構

これらのことから、18世紀末以降、この屋敷に居住していた人は相続人がいないため絶えてしまった、または、宮下の地を離れ別の場所に移ったものと想定される。ところで、相続人がなくなった百姓の土地は、知行地をおさめている領主持ちの御林に組み込まれることもあったという。千代村の史料ではないが、寛政4年(1792)の「野畑三反余を御林地に致すにつき申付」には、野原村の名主が新田百姓であった五左衛門が所有していた野畑等を、相続人がいないため土地を

取り上げて、御林に組み入れることを領主に願い出ていることが記されている。このように、相続人がいないと土地が荒廃するため、名主等が領主に願い出て御林にすることは、各村々でも行われていたようである。また、村人が燃料等に使用するため木の伐採を行う百姓林(百姓山)や、農地の肥料となる草を採取する秣場(馬草場)になり、入会地として村の管理下に置かれたとも考えられる。

このようなことから、覆土にテフラを含む18世紀末以降のSD 63・65・後期SD 69・同71は、山林の林道や秣場へ続く道に敷設された側溝であり、旧公図に表わされている赤道の側溝であるSD 23・24・43・49・72・73の各溝も同様の使われ方をしていたと思われる。その後、SD 63・65・後期SD 69・同71が付随する道は、その役目を果たし不要となったため、赤道の側溝であるSD 23・24・43・49・72・73の各溝が付随する道のみが残り、旧公図が作成された時点では存在していなかったのである。

## 主要引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2013『愛知県史』別編 窯業3(中世・近世 常滑系)
- 愛知県瀬戸市 1988『瀬戸市史』陶磁史篇 六
- 赤熊浩一 1989『金井遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集
- 荒井秀規 2006『龍神と墨書土器』『古代の信仰と社会』六一書房
- 新井 端 2011『円山遺跡』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 安中市教育委員会 1994『中野谷遺跡群—県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究辞典』
- 大成可乃 2011『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)』『東京大学構内遺跡調査研究年報7』
- 金谷町役場 2003『金谷町史』資料編四 考古・窯業史
- 金子直行他 1993『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 金子直行 2016『2 埼玉県の縄文時代』『埼玉の考古学入門』(株)さいたま出版会
- 川口 潤 1993『白草遺跡1・北窪場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 木戸春夫・赤熊浩一 2002『稲荷前遺跡B区II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第277集
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 熊谷市教育委員会 2015『熊谷市史』資料編1 考古
- 江南町 1995『江南町史』資料編1 考古
- 江南町 2001『江南町史』資料編3 近世
- 江南町 2001『江南町史』資料編4 近代・現代
- 江南町 2003『江南町の板碑』江南町史報告編1
- 江南町 2004『江南町史』通史編 上巻
- 江南町 2007『江南町史』自然編3 地形・地質
- 小林健一 2004『縄文社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』(株)六一書房
- 埼玉県 1997『埼玉県史』資料編10 近世1 地誌
- 酒井清治 1987『武蔵国における須恵器年代の再検討』『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
- 坂本太郎・平野邦雄監修 1990『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館
- 篠崎暁・平田重之 1989『白樹原・楡下遺跡』1(阿保地の館跡)中世編 白樹原・楡下遺跡調査会報告書 第1集
- 鈴木啓介 2016『縄文時代早期の定住化までの過程を探る—早期前葉を中心に—』『定住化までの長い道のり』平成27年度東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係普及関連事業公開セミナー
- 高島英之 2008『上野国の牧』『牧の考古学』高志書院
- 田中広明 2012『弘仁の大地震と地域社会』『研究紀要』第26号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 2014『古代の開発と地域の編成』『古代の開発と地域の力』高志書院
- 知久祐昭 2012『幡羅遺跡Ⅶ—総括報告書1—』埼玉県深谷市教育委員会
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』高志書院
- 富田和夫 1992『稲荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第120集
- 富田和夫 1994『稲荷前遺跡(B・C区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第145集
- 富田和夫 2000『大奇遺跡1』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
- 富田和夫 2002『熊野遺跡(A・C・D区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
- 富野幸雄 2016『1 埼玉県の旧石器時代』『埼玉の考古学入門』(株)さいたま出版会
- 日本考古学協会編 2011『日本考古学協会2011年樹木大会研究発表資料集』一般社団法人日本考古学協会
- 八王子市館町遺跡調査団 1987『館町遺跡』Ⅲ
- 平川 南 2000『墨書土器とその字形—古代村落における文字の実相』『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 窪岡孝志 1989『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集
- 藤澤良祐 2002『瀬戸・美濃大窯の再検討』『研究紀要』第10輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』
- 福田 聖 2002『大奇遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
- 町田市木曾森野遺跡調査会 1989『東京都町田市木曾森野遺跡 歴史時代編』
- 町田市木曾森野遺跡調査会 1995『東京都町田市木曾森野遺跡 歴史時代編』2
- 松崎元樹 2008『武蔵多摩郡地域のさをさぐる』『牧の考古学』高志書院
- 水口由紀子 2016『武蔵・上野の土器』『中世武士と土器 かわらけ』高志書院
- 村松 篤 1995『埼玉県北部地域の様相』『埼玉考古』別冊5 埼玉考古学会
- 村松 篤 2003『白済木遺跡』川本町遺跡調査会
- 横田賢次郎・森田 務 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4
- 吉野 健・長谷川一郎・原野直祐 2010『宮下遺跡II』埼玉県熊谷市宮下遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 吉野 健 2013『西別府祭祀遺跡 西別府廃寺 西別府遺跡 総括報告書1』埼玉県熊谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書 第15集

## VI 附編

### 1 宮下遺跡の地形・地質

清水康守・小川政之・引間章夫・小勝幸夫

#### 1. はじめに

宮下遺跡は江南台地上に位置している。江南台地は、荒川の右岸にその大部分が位置している。その西端は、寄居町の折原で標高は150～160m、これより東の旧江南町の方へ連続している。江南台地は東西に細長い形をしている。北側には10～20mの崖線があり、寄居面の台地とそれと比高差がほとんどない沖積面と接している。南側は西端より続く外秩父山地と市野川の谷まで、その東側は比企丘陵と和田川の谷を挟んで向き合っている。

江南台地には、南に和田川、北に吉野川と東西に流れる川がある。これはこの台地が、扇状地として形成され、その扇状地上の河川が寄居の扇頂から東へ流れていた名残と考えたと説明がつく。

本遺跡の地質については、主に関東ローム層について、行田市教育委員会の松本富雄氏に、現地でご討論いただいた。ここに感謝したい。

#### 2. 遺跡周辺の地形

遺跡は西方に位置する県道47号線の東に、東西に延びる台地上に位置している(第374・376図)。南側には江南台地に入る谷地がほぼ東西に伸びている。北側には寄居面と江南台地の間に入る谷がやはり東西に位置している(第374図)。この谷の西の端はゴルフコースで改変されている。

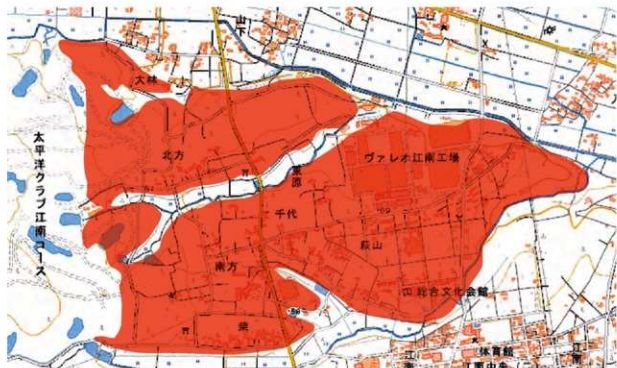
発掘区の台地面の標高は西で60mと高く、東へ57mと低くなっている。迅速測図(第375図)で見ると発掘区の中央付近に袋状の凹地が認められる。この凹地はローム層の上の黒色表土が凹地状に分布するところに一致するようにみえる。



第374図 宮下遺跡調査地点 5000分1



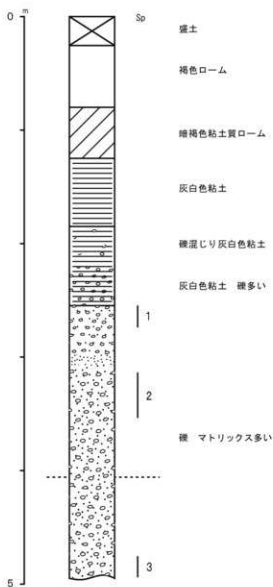
第 375 図 迅速測図 ※「熊谷」を使用



第 376 図 宮下遺跡周辺の江南台地 ※国土地理院「電子国土 Web 版」を一部改編



第 377 図 台地構成層の様子



第 378 図 台地構成層の地質柱状図

### 3. 宮下遺跡の地質

宮下遺跡の位置する台地の北東端に工事のための崖ができていた（第 377・378 図）。この崖で、台地構成層の礫層から上の地層がみられた。この礫層を江南台地礫層と呼ぶ。礫層の礫は大礫・中礫・小礫・細礫よりなり、大礫の量は少ない。マトリックスは砂と泥よりなっている。礫のインプリケーションが明瞭に認められる層準も見られた。

礫層の上には、灰白色の粘土層が重なってくる。この粘土層の中部には褐色～ウグイス色になるところも見られる。粘土層上には暗褐色の粘土質ローム層があり、この上に褐色ローム層が位置している。これらのローム層の詳細は、発掘区の旧石器調査用のテストビットで述べる。

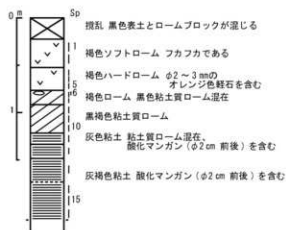
#### (1) 関東ローム層の層序

発掘区において、旧石器の確認のため、4m×4mのテストビット（以下、TP）を開けた。配置は第 374 図に示した。計 7 基設定した TP の壁面を精査すると、非常に良く似た関東ローム層の堆積がみられる（第 379・381・382 図）。第 380 図に示したように、最も東の TP-1 で、最上部の黒色表土とロームブロックが混じる擾乱があった。その下にフカフカで褐色のソフトローム、褐色ハードロームと続いている。褐色ハードローム中にはφ2～3mmの風化したオレンジ色軽石が含まれていた。これの多い部分が第 386 図の黄色軽石である。その下には、褐色ロームと暗褐色粘土質ロームが混在する層がある。最下部の関東ローム層は暗褐色粘土質ロームである。

暗褐色粘土質ロームの下には灰白色粘土層が堆積している。灰白色粘土の最上部は暗褐色粘土質ロームが混じっており、風化帯の様相を呈している。この層の中には酸化マンガンのφ2cm前後のサイズで含まれている。これは横方向に連続しているように見え、地下水の作用で出来たことを



第 379 図 TP-1 南壁



第 380 図 TP-1 の地質柱状図



第 381 図 TP-5 南壁



第 382 図 TP-6 南壁

うかがわせるものになっている。

## (2) 東谷

発掘区の東部には南北に近い方向の埋没谷（以下、東谷）が検出された。東谷は黒色の粘土質シルト層で埋積されている（第 383・384 図）。東谷の地質は上部から褐色粘土質シルトが 10 cm、この中には灰色軽石を含んでいる。黒灰褐色粘土質シルトが 85 cm、褐黒色粘土質シルトが 20 cm、灰褐色粘土質シルトが 15 cm あり、この中には厚さ 1~2 cm の灰色細粒軽石層が含まれていた。この下には、黒色粘土質シルトが 20 cm あり、この下の溝の底には 15 cm の暗灰色中粒~粗粒砂が位置し、この中には下の褐灰色シルト質粘土の礫が含まれていた。この層は東谷に水が流れていたときに堆積したものである。東谷の底には台地のローム層の下に位置する褐灰色シルト質粘土が位置していた。

## (3) 黒色表土層

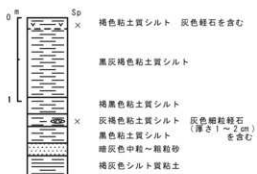
発掘区の中央部に黒色表土層が厚く堆積しているところがあった。この層は中央付近で厚く垂れ下がるように分布していた（第 385 図）。この表土層の下には砂などはなく更新統（洪積層）がくる。よって、もともとの凹地に表土が厚く形成されたものである。

## 4. 自然科学分析

遺跡の関東ローム層と完新世（沖積世）の火山灰について、詳細を知るために粒度分析、鉱物分析を



第 383 図 東谷土層



第 384 図 東谷の地質柱状図



第 385 図 黒色表土層

実施した。分析方法の詳細は省略するが、以下簡単に述べる。

採取した試料を良く乾燥させ、20 g前後を秤量する。これに水を加え、蒸発皿中で指でこする。これは鉱物である砂についた粘土分を洗うためである。粘土分を捨てながら、濁り水が出なくなるまで、指でこする。これを、標準篩（礫、極粗粒砂～極細粒砂まで5段階の砂）に分ける。粒度分けされた試料はよく乾燥させ、重量を測定し粒度分析をする。分けた細粒砂について、重液にプロモホルムを使い、重液分離をし、重鉱物と軽鉱物に分ける。各々、重量を秤量し、重鉱物比求める。重鉱物と軽鉱物のプレバートを作り、偏光顕微鏡で鉱物の同定をする。同定した重鉱物は重鉱物組成、軽鉱物は火山ガラスの組成に焦点を絞り検討した。

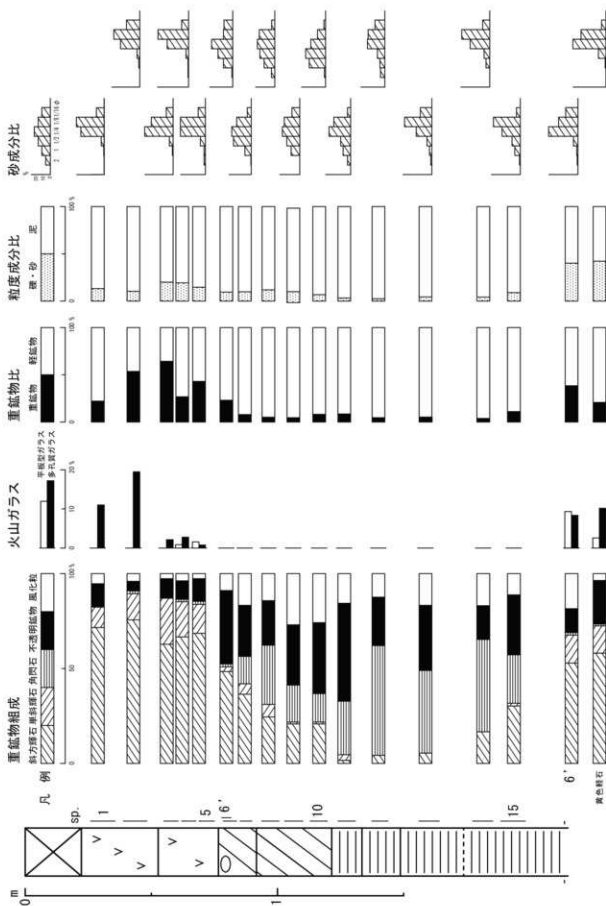
なお、礫種分析も実施した。

#### (1) 関東ローム層の分析

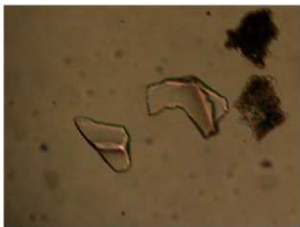
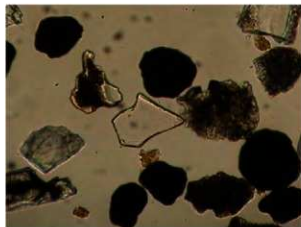
第386図は関東ローム層とその下の灰白色粘土層の上部を分析したものである。砂分比をみると、褐色の関東ローム層が10～20%前後と多く、黒褐色の粘土質ローム層が次いで10%前後となる。灰白色粘土層は5%以下の値を示す。第386図の右端に示した砂成分の粒度分析は、褐色の関東ローム層が中粒砂・細粒砂が各々30から40%前後と多く、粗粒な成分が少ない。黒褐色の粘土質ローム層は中粒砂成分が20から30%と最も多く粗粒成分・細粒成分が少なくなる。灰白色粘土層は細粒成分が多くなり、数%ほどの低い値となる。粗粒成分は主に岩片よりなり、その大部分はチャートである。チャートは礫層の礫の主要な礫種の一つであり、礫層からの再堆積を考えさせるものである。

重鉱物比は、赤褐色の関東ローム層が30～40%前後となるものが多い。黒褐色の粘土質ローム層や灰色粘土層は数%となり、一桁の値を示している。





第 386 図 奥東ローム層の諸分析



第 387 図 平板状火山ガラス ※中央に 1 個 (左)、中央 2 個の火山ガラス (右)



第 388 図 大宮台地の A T の火山ガラス  
※中央に 4 個の火山ガラス (バブルウォール型)

が最も多くみられる。

火山ガラス組成をみると、褐色の関東ローム層に含まれていて、その他の層には存在しない。しかし、上下の混交がみられる黒褐色の粘土質ローム層の上部には含まれてくる。褐色の関東ローム層には軽石型の多孔質のものや繊維状のものが多くみられた。一方、平板状の火山ガラスも少量だが含まれていた (第 387 図)。しかしこのガラスは大宮台地や武蔵野台地の大里ローム層の基底に位置する A T のものとは違うものである (第 388 図)。第 387 図と第 388 図のいずれも砂粒のサイズは細粒砂のものである。A T のガラスはバブルウォール型の非常に薄いものであり、ここで見られた厚い平板状ガラスとは違うものである。よって、ここには A T はなく、おそらく大里ローム層上部の火山ガラスに対比できる。褐色の関東ローム層は大里ローム層上部にあたるものと考えられる。

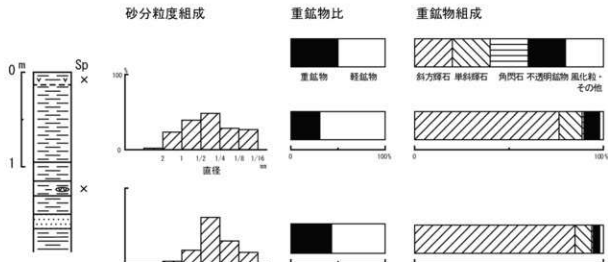
この遺跡に大里ローム層下部が見られないのは、平坦な江南台地に降灰があったが、これが風などにより、浸食されたためであろう。このため、黒色帯の上の大里ローム層が欠如し、旧石器等の遺物も検出できなかったものと考えられる。

## (2) 完新世の火山灰の分析

東谷には灰白色の軽石層がみられた。遺跡の最上部の表土中にも灰白色の軽石層があった。

両火山灰とも軽石よりなるもので、粗粒な粒子をみると角張っており、降灰によってもたらされたも

重鉱物組成をみると供給火山を推定することで、重要である。赤褐色の関東ローム層は斜方輝石の量が 50% を超えるものが大部分であり、次に単斜輝石となる。両輝石でその量比が前述のものは、大里ローム層の特徴であり、浅間火山が供給源だといえる。暗褐色の粘土質ローム層は角閃石の量が、上から 30% ~ 15% と多くなる。また、黒色不透明鉱物の量も増加している。このような特徴は荒川以北から群馬県にかけての中部ローム層の特徴に一致している。灰白色粘土層は角閃石



第 389 図 完新世の火山灰

のであることが分かる。重鉱物組成をみると、斜方輝石が多く、次いで単斜輝石となる両輝石型の輝石の量比から見ても浅間山を起源とするものである。砂分の粒度組成をみると、両者とも中粒砂が多く上のものは次に粗粒砂、下のは細粒砂になる。上の火山灰の方が粗く、これには2mm以上の粒子が含まれている。以上のことから、上は天明三年(1783年)噴火のA s - Aで、下は天仁元年(1108年)噴火のA s - Bである。

なお、縄文時代早期の遺構である第5号炉穴(FP5)の覆土中に、火山灰が認められた。この火山灰は中粒砂が多く37%、ついで細粒砂、極細粒砂となる組成のものである。粗粒砂(6.9%)を双眼実体顕微鏡で見ると、長石・灰褐色安山岩・輝石の順に多くなる組成を示している。

中粒砂をみると輝石が増え、磁鉄鉱がみられることが分かった。よって、この火山灰は両輝石タイプの浅間山起源のものと考えられる。白色の軽石がないことから、噴火した火山砂が降灰した火山灰であるといえる。

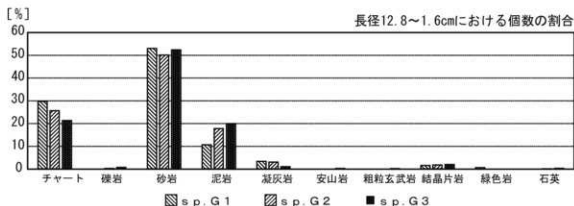
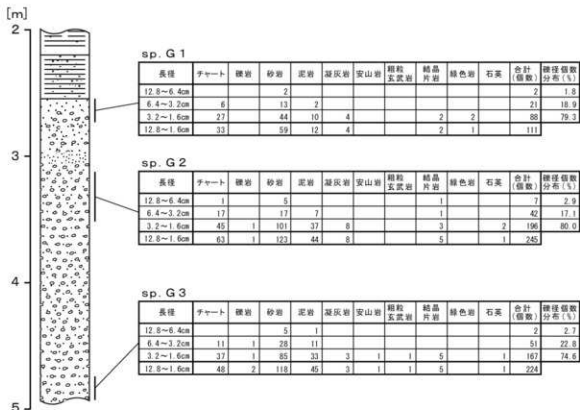
### (3) 江南台地礫層の礫種組成

江南台地構成層の礫層から礫種分析試料として、sp. G 1、sp. G 2、sp. G 3の3試料を採取した(第390図)。そこで、長径1.6cm以上の全部の礫について礫種組成分析を行った。なお、試料は、sp. G 1が20×50×10cm(縦×横×奥)、sp. G 2が40×50×10cm、sp. G 3が20×50×10cmの範囲で、砂・泥を含めて採取した。

分析方法として、まず試料の水洗後、スケールを使い、手で全部の礫を順次長径が12.8～6.4cm、6.4～3.2cm、3.2～1.6cm、1.6cm以下になるように分けた。また、礫種の同定は、主に双眼実体顕微鏡(倍率7～45倍)による肉眼観察で行った。なお、表面が鉄汚染を受けたものも多く、そのためハンマーで割り破断面を観察した。

次に礫種組成分析結果を長径12.8～6.4cm、6.4～3.2cm、3.2～1.6cmと、それぞれを合計した12.8～1.6cmについての各粒径ごとの個数表と、12.8～1.6cmの礫種の割合のグラフを第390図に示す。

礫種組成を長径12.8～1.6cmの分析した礫全体でみると、砂岩(53.2～50.2%)がほぼ半数で最



第 390 図 個数による礫種組成と礫径個数分布 グラフは長径12.8~1.6cmにおける個数の割合

も多く、次にチャート (29.7~21.4%)、泥岩 (20.1~10.8%) が多くなり堆積岩を主体とし、この3種類で約94%となる。また、このことは3試料とも同様である。なお、泥岩は灰色で軟らかいものが多い。

他に灰白色、白色で全体的に鉱物粒が見えないが石英や長石の極微小粒子が見られたものを凝灰岩としたが少量 (3.6~1.3%) 含まれ、また結晶片岩も少量 (2.2~1.8%) 含まれる。安山岩、粗粒玄武岩、緑色岩は1個で極希である。

以上の礫種組成から堆積岩の砂岩、チャートを主体とすることから、これらの礫はかつての荒川により供給されたといえる。ただし、現在の江南台地近辺の荒川河床礫は砂岩・チャートを主体とし、粘板岩、ホルンフェルス、緑色岩が見られ、江南台地礫層中の礫にはこれが見られないという結果となった。

## 2 宮下遺跡における地中レーダー探査

株式会社 中野技術

### (1) 探査の経緯

宮下遺跡における地中レーダー探査は出土遺構の状況から、その重要性を鑑み熊谷市宮下遺跡調査会の依頼により株式会社 中野技術が平成 29 年 2 月 4 日に実施した。今回の地中レーダー探査は、開発者の工法変更による発掘調査範囲の絞りこみのため、第 5 号溝跡の規模・範囲の確認及び埴輪片出土によって想定された古墳の存在確認を目的に行った。本報告については、熊谷市教育委員会 蔵持が、探査後に提出された報告書を基にして、必要と思われる図面を抽出し、概要を記載した。探査データは熊谷市宮下遺跡調査会より引継いで熊谷市教育委員会が保管している。

### (2) 地中レーダー探査について

地中レーダー探査（以下、GPR 探査）は、地表面のアンテナからマイクロ波（電磁波）を地中に放射し、地下の反射体から地上に戻ってきた反射波を受信することで、地中の異常物や変化、地層の境界面を明らかにする物理的探査である。電波は、主として地面の乾湿の度合いにより到達深度と伝搬速度が異なる。また、地中での挙動である反射、屈折、回折、減衰などの状況も違う。遺跡探査では、そのような差異の生じることを利用して土壌を判別、遺構や遺物の存在や規模を限定しようとするものであるが、周囲と違う材質であれば石や粘土等でも大きな反射をもたらす原因となるため、反射の強弱からだけでは遺構の性格を決められず、またその材質までの特定はされない。

GPR 探査は、調査対象区域に測線を設定しアンテナを走査する。測線上を走査することにより得られた地層の断面画像と平面図を作成するタイムスライス（以下、TS）という手法を用いる。時間で記録された断面から特定の時間幅（深度）のデータを取り出し平面図を作成していく。平面的にすることで遺構などのプランを判読することが容易となるが、遺構探査結果の判読には断面図と断面図から得られる TS 平面図を照合し判断することが必要となる。使用機器は以下の通りである。

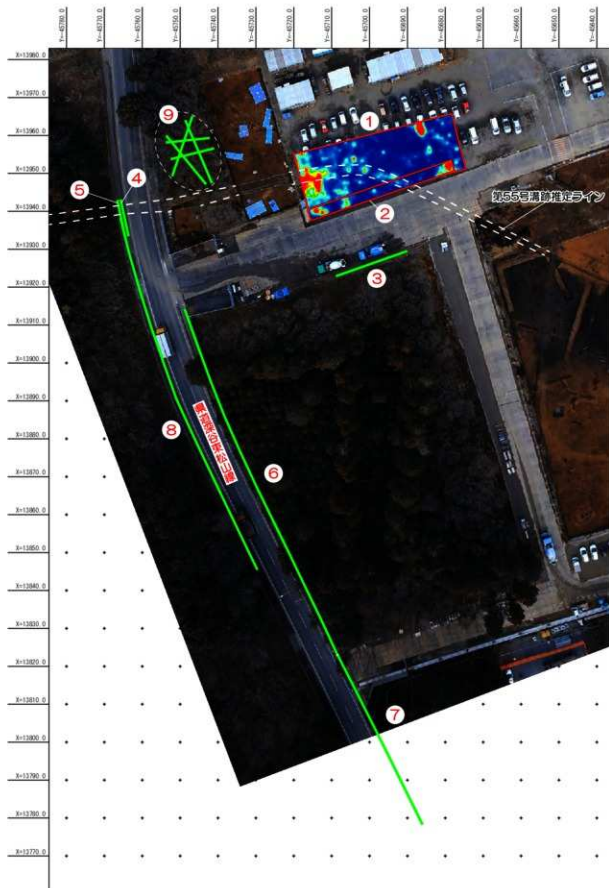
- 使用機器 コントロールユニット：SIR-3000（GSSI 社製）  
アンテナ：50400S（GSSI 社製）周波数 400MHz  
データ解析：GPR-SliceV7（Dean Goodman 氏開発）

### (3) GPR 探査の概要

GPR 探査実施日の天候は快晴で地表面は乾燥している状態である。測定位置は事前に熊谷市宮下遺跡調査会担当者が決定し、測線観測は（株）東京航業研究所の協力を得て行った。測線の配置は第 391 図のとおりである。

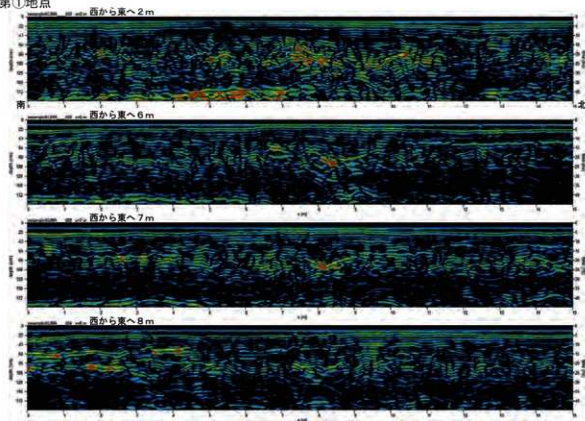
#### ・各区の探査内容

- ①：測定方向 - 南→北・東西 43 m 南北 15 m・総測線数 44 線
- ②：測定方向 - 西→東・東西 40 m 南北 4 m・総測線数 4 線
- ③：測定方向 - 西→東・測線数 1 線・測線長 20 m

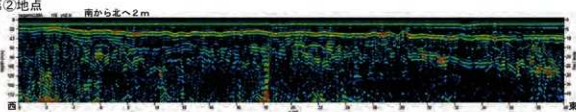


第 391 図 地中レーダー探査位置図

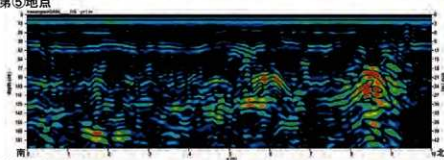
第①地点



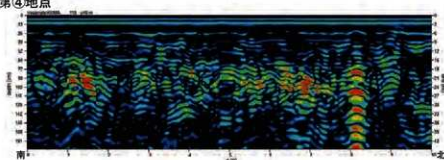
第②地点



第⑤地点



第④地点



第392図 地点別断面図(抜粋)

- ④：測定方向-南→北・測線数1線・測線長10m
- ⑤：測定方向-南→北・測線数1線・測線長10m
- ⑥：測定方向-南→北・測線数1線・測線長100m
- ⑦：測定方向-北→南・測線数1線・測線長50m
- ⑧：測定方向-北→南・測線数1線・測線長100m
- ⑨：測定方向-任意・総測線数5線・測線長11～17m

#### (4) 探査結果の概要

第391図に示す箇所において、第①～⑨地点の探査を実施した。第①・②地点は平面・断面図を得るために1mピッチで走査し、第③～⑨地点は断面図を得るため1測線による線的な走査を行った。

##### 第①・②地点

第①・②地点の現状は砂利敷き駐車場であり、アンテナ走査の状況としてはあまり良くなかった。第①地点はTS平面図及び断面図から、表土より深さ40cmで強い反射が確認され、上幅3m、推定深度1.3m～1.5mの落ち込みが確認された。同様の反射が随所でみられ、第55号溝跡の方向と照らし合わせるとほぼ一致することからこの落ち込みは溝遺構であると推定することができる。これらと第⑤地点の結果をつなぎ合せ、第391図に推定ラインとして示した。

##### 第③地点

第②地点に平行して設定した測線からは、遺構とみられる変化は確認されず、遺構存在の可能性は低い。

##### 第④・⑤地点

県道に沿って設定した測線から、第④地点については確認できなかったものの、第⑤地点については明瞭な落ち込みが確認され、位置をみると第55号溝跡の延長箇所にあたる。

##### 第⑥・⑦・⑧地点

県道に沿って設定した測線からは、埋設管を除くと変化は確認されず、遺構存在の可能性は低い。

##### 第⑨地点

任意に設定した測線からは、遺構とみられる変化は確認されず、遺構存在の可能性は低い。

#### (5) 小結

本探査により、第⑤地点の結果から第55号溝跡は、調査区よりさらに西側へ延長する長大な溝であることが判明した。また、同溝跡より南へ約180mの間は、第⑥・⑦・⑧地点の結果から、並行する溝跡はない可能性が示された。このことは、第55号溝跡の性格を考える上での成果といえる。なお、第①・②地点の探査により溝跡が検出されたことから、その後の調査対象に加えて発掘調査を実施した。第⑨地点では、未検出の遺構、特に古墳の存在を想定しての探査であったが、遺構とみられる変化が確認されないことから、第55号溝跡で検出された埴輪が未検出の古墳由来ではなく、権現坂埴輪窯跡からの流れ込みの可能性が高いことが判明した。以上のことから、本探査は発掘調査の成果を高めたものと考えられる。



# 写真図版





調査区全景（合成写真 上が北）

図版 2



調査区遠景1(南から)



調査区遠景2(上が南)

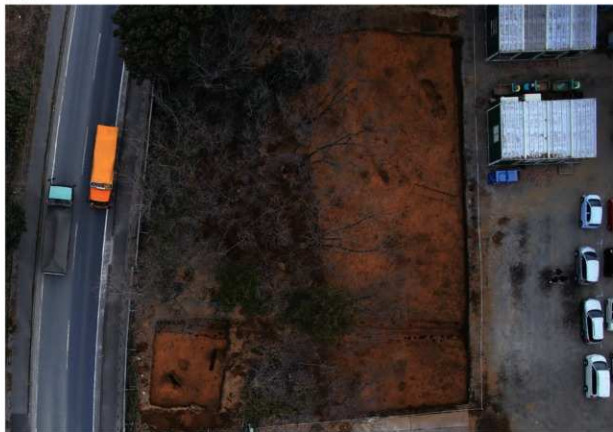


(BB-A0 G ~ BT-AU G 周辺) 空中写真 (上が南西)



(AP-A0 G ~ BA-A0 G 周辺) 空中写真 (上が東)

図版 4



(CB-AM G ~ CB-AQ G 周辺) 空中写真 (上が北)



(BN-AJ G ~ CB-AP G 周辺) 空中写真 (上が北)



(B1-AL G ~ BP-AN G 周辺) 空中写真 (上が北)



(B0-AN G ~ BV-AP G 周辺) 空中写真 (上が北)

図版 6



(BL-AS G ~ BT-AV G 周辺) 空中写真 (上が北)



(BA-AP G ~ BL-AR G 周辺) 空中写真 (上が北)





(AR-AN G ~ BE-AP G 周辺) 空中写真 (上が北)



(AR-AL G ~ AR-AM G 周辺) 空中写真 (上が東)

図版 8



(AP-AV G ~ AV-AM G 周辺) 空中写真 (上が北)



(AK-AP G ~ AV-AT G 周辺) 空中写真 (上が北)



第1号竪穴建物跡 (西から)



第1号竪穴建物跡掘方 (西から)



第2号竪穴建物跡掘方 (南西から)



第2号竪穴建物跡遺物出土状況 (南西から)



第3号竪穴建物跡掘方 (北から)



第3号竪穴建物跡遺物出土状況 (西から)



第4号竪穴建物跡遺物出土状況1 (西から)



第4号竪穴建物跡遺物出土状況2 (西から)

図版 10



第5号竪穴建物跡掘方（西から）



第5号竪穴建物跡遺物出土状況1（西から）



第5号竪穴建物跡遺物出土状況2（西から）



第5号竪穴建物跡遺物出土状況1（南東から）



第6号竪穴建物跡遺物出土状況2（南東から）



第6号竪穴建物跡遺物出土状況3（東から）



第7号竪穴建物跡掘方（西から）



第7号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）



第8号竪穴建物跡掘方（西から）



第8号竪穴建物跡遺物出土状況1（西から）



第8号竪穴建物跡遺物出土状況2（西から）



第9号竪穴建物跡掘方（南西から）



第9号竪穴建物跡遺物出土状況（南西から）



第10号竪穴建物跡掘方（西から）



第10号竪穴建物跡遺物出土状況1（西から）



第10号竪穴建物跡遺物出土状況2（南西から）

図版 12



第11号竪穴建物跡遺物出土状況1 (南西から)



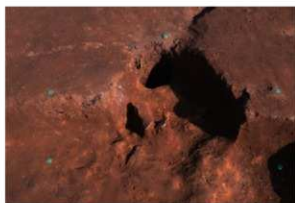
第11号竪穴建物跡遺物出土状況2 (南西から)



第12号竪穴建物跡 (西から)



第12号竪穴建物跡遺物出土状況1 (南から)



第12号竪穴建物跡遺物出土状況2 (西から)



第12号竪穴建物跡露出状況 (西から)



第13号竪穴建物跡 (南東から)



第13号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第 14 号竪穴建物跡 (南西から)



第 14 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 14 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南西から)



第 14 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (北西から)



第 16 号竪穴建物跡掘方 (北から)



第 16 号竪穴建物跡 (西から)



第 16 号竪穴建物跡掘方 (南から)



第 16 号竪穴建物跡遺物出土状況 (西から)

図版 14



第 17 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 17 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 17 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)



第 17 号竪穴建物跡鍛冶炉と鉄床石出土状況 (北東から)



第 18 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 19 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 19 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南西から)



第 19 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南東から)





第 20 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)



第 20 号竪穴建物跡カマド (南から)



第 21 号竪穴建物跡 (南西から)



第 21 号竪穴建物跡遺物出土状況 (西から)



第 22 号竪穴建物跡掘方 (北から)



第 22 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (北から)



第 22 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 22 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (北から)

図版 16



第 23 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 23 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)



第 24 号竪穴建物跡遺物出土状況 4 (南から)



第 25 号竪穴建物跡 (南西から)



第 26 号竪穴建物跡 (南東から)



第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)



第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 27 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (東から)



第 27 号竪穴建物跡炉遺物出土状況 (北から)



第 27 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 28 号竪穴建物跡掘方 (北から)



第 28 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 28 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)

図版 18



第 29 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 29 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 29 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (北から)



第 29 号竪穴建物跡掘方 P03 土層断面 (北から)



第 29 号竪穴建物跡掘方遺物出土状況 1 (西から)



第 29 号竪穴建物跡掘方 P04 遺物出土状況 2 (西から)



第 30 号竪穴建物跡 (西から)



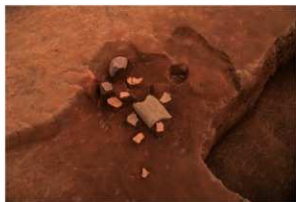
第 30 号竪穴建物跡カマド (西から)



第 31 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 31 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 31 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)



第 32 号竪穴建物跡 (北から)



第 32 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 32 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 33 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (北西から)



第 33 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北西から)

図版 20



第 34 号竪穴建物跡掘方 (南から)



第 34 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 34 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 34 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南から)



第 35 号竪穴建物跡 (西から)



第 35 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 35 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 35 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 36 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 36 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 36 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 37 号竪穴建物跡 (南から)



第 38 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 38 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 38 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南から)



第 38 号竪穴建物跡遺物出土状況 4 (西から)

図版 22



第 39 号竪穴建物跡 (北から)



第 39 号竪穴建物跡土層断面 (西から)



第 40 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 40 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 40 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 41 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 41 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 41 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)





第 42 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 42 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (東から)



第 43 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 43 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 44 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 44 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 44 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 44 号竪穴建物跡 P01 遺物出土状況 (北から)

図版 24



第 46 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 46 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 46 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)



第 46 号竪穴建物跡遺物出土状況 4 (西から)



第 46 号竪穴建物跡鍛冶炉鉄滓出土状況 (西から)



第 46 号竪穴建物跡鍛冶炉 (西から)



第 46 号竪穴建物跡 P10 遺物出土状況 (南から)



第 46 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 45 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 45 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 45 号竪穴建物跡炉土層断面 (西から)



第 47 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 47 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 47 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (西から)



第 48 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南西から)



第 48 号竪穴建物跡カマド (南西から)

図版 26



第 49 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 49 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南西から)



第 49 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南西から)



第 50 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南東から)



第 50 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 50 号竪穴建物跡掘方 (南から)



第 51 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 51 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北西から)



第 52 号竪穴建物跡掘方 (南西から)



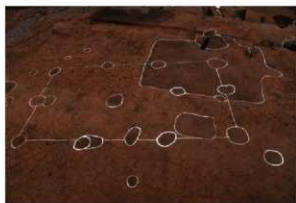
第 52 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 52 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 52 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南西から)



第 53 号竪穴建物跡・第 4 号掘立柱建物跡検出状況 (南東から)



第 53 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 53 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 53 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)

図版 28



第 54 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 54 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 54 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南から)



第 55 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 55 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 55 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 56 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 56 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 57 号竪穴建物跡 (西から)



第 57 号竪穴建物跡 P01 遺物出土状況 (西から)



第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 58 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 58 号竪穴建物跡掘方 (南から)



第 59 号竪穴建物跡掘方 (南から)



第 59 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 59 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)

図版 30



第 60 号竪穴建物跡掘方 (東から)



第 60 号竪穴建物跡棚状遺構と粘土構築物 (南から)



第 60 号竪穴建物跡カマド土層断面 (南から)



第 60 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 60 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 61 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南から)



第 61 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (南から)



第 61 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (南から)





第 62 号竪穴建物跡 (西から)



第 62 号竪穴建物跡掘方 (西から)



第 62 号竪穴建物跡遺物出土状況 (西から)



第 62 号竪穴建物跡カマド袖石出土状況 (西から)



第 63 号竪穴建物跡 (西から)



第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北西から)



第 64 号竪穴建物跡遺物出土状況 3 (北西から)

図版 32



第 65 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南西から)



第 65 号竪穴建物跡カマド (南西から)



第 66 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



第 66 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 67 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (西から)



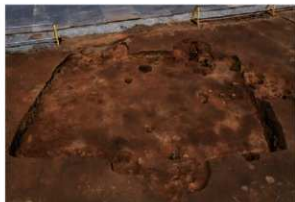
第 67 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (西から)



第 68 号竪穴建物跡掘方 (北西から)



第 68 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南東から)



第 69 号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)



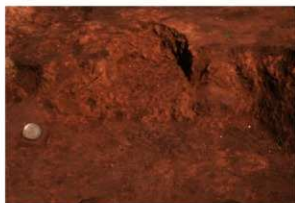
第 69 号竪穴建物跡掘出ビット P01 遺物出土状況 (西から)



第 69 号竪穴建物跡土器埋納ビット P02 遺物出土状況 (南から)



第 70 号竪穴建物跡 (西から)



第 70 号竪穴建物跡カマド (西から)



第 70 号竪穴建物跡遺物出土状況 1 (北から)



第 70 号竪穴建物跡遺物出土状況 2 (北から)



第 71 号竪穴建物跡 (北西から)

図版 34



第72号竪穴建物跡(南から)



第72・74号竪穴建物跡掘方(南から)



第72号竪穴建物跡北東隅角壁周溝土層断面(南から)



第72・74号竪穴建物跡遺物出土状況1(西から)



第72・74号竪穴建物跡遺物出土状況2(南から)



第72号竪穴建物跡遺物出土状況1(西から)



第72号竪穴建物跡遺物出土状況2(南から)



第74号竪穴建物跡カマド南脇遺構出土状況(西から)



第73号竪穴建物跡遺物出土状況1 (南西から)



第73号竪穴建物跡遺物出土状況2 (南西から)



第75号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)



第76号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)



第76号竪穴建物跡鍛冶炉1 検出状況 (南から)



第76号竪穴建物跡鍛冶炉2 検出状況 (南から)



第76号竪穴建物跡鍛冶炉2 土層断面 (南東から)



第76号竪穴建物跡 (南から)

図版 36



第77号竪穴建物跡土層断面（西から）



第77号竪穴建物跡（南から）



第78号竪穴建物跡（北から）



第79号竪穴建物跡（西から）



第79号竪穴建物跡南壁隙土層断面（西から）



第80号竪穴建物跡掘方（南から）



第80号竪穴建物跡遺物出土状況1（南から）



第80号竪穴建物跡遺物出土状況2（南から）



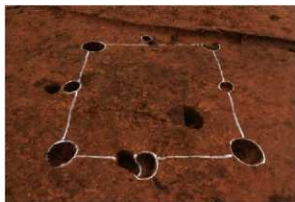
第1号掘立柱建物跡検出状況（北から）



第1号掘立柱建物跡（北から）



第2号掘立柱建物跡（北西から）



第3号掘立柱建物跡（南から）



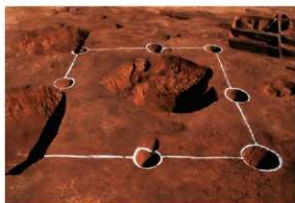
第4号掘立柱建物跡・第53号竪穴建物跡検出状況（西から）



第4号掘立柱建物跡（南から）

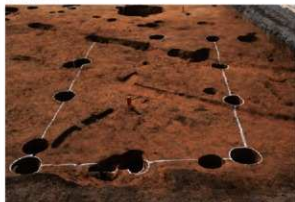


第5号掘立柱建物跡（北から）

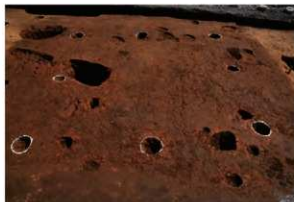


第6号掘立柱建物跡（西から）

図版 38



第7号掘立柱建物跡（東から）



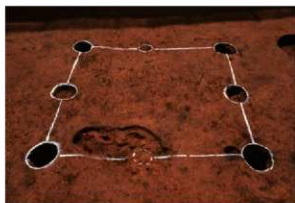
第8号掘立柱建物跡（北から）



第9号掘立柱建物跡（北から）



第10号掘立柱建物跡（北から）



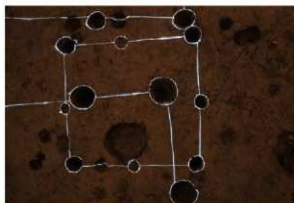
第11号掘立柱建物跡（北から）



第12号掘立柱建物跡（北から）



第13号掘立柱建物跡（北から）



第14号掘立柱建物跡（上が北西）





第9・10・11号溝跡 (南から)



第9・10・11号溝跡 (北から)



第18号溝跡 (南から)



第23・24号溝跡 (東から)



第55号溝跡1 (BX-CC-AP G 上から)



第55号溝跡2 (BQ-BT-AR・AS G 北から)



第55号溝跡3 (BK-BP-AS-AV G 南から)



第55号溝跡底面の工具痕 (BP・BQ-AS G 西から)

図版 40



第 55 号溝跡土層断面 (西から)



第 55 号溝跡遺物出土状況 1 (BX-AP G 南から)



第 55 号溝跡遺物出土状況 2 (BX-AP G 西から)



第 43 - 49 ~ 52 号溝跡 (上が南西)



第 56 号溝跡遺物出土状況 1 (から)



第 56 号溝跡遺物出土状況 2 (北から)



第 56 号溝跡土層断面 (東から)



第1・2号土取り遺構（南から）



第1・2号土取り遺構土層断面（西から）



第1・2号土取り遺構遺物出土状況（北から）



第3号土取り遺構（南から）



第4号土取り遺構（西から）



第5号土取り遺構土層断面（東から）



第5号土取り遺構（東から）



第6号土取り遺構（南から）



第7号土取り遺構跡出土状況 (西から)



第8号土取り遺構 (東から)



第9号土取り遺構 (西から)



第9号土取り遺構遺物出土状況 (西から)



第10号土取り遺構 (北から)



第11号土取り遺構 (北から)



第12・13・14号土取り遺構 (西から)



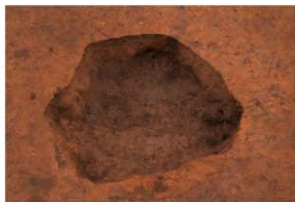
第13号土取り遺構土層断面 (北から)



第1号井戸跡 (西から)



第2号井戸跡 (西から)



第3号井戸跡 (北から)



第4号井戸跡 (西から)



第5号井戸跡 (西から)



第6号井戸跡 (北から)



第7号井戸跡 (北から)



第7号井戸跡遺物出土状況 (北から)



第1～5号炉穴（西から）



第1号炉穴遺物出土状況（南から）



第2号炉穴（西から）



第2号炉穴土層断面（南から）



第2号炉穴遺物出土状況1（西から）



第2号炉穴遺物出土状況2（東から）



第3号炉穴（南から）



第4号炉穴（南から）



第5号炉穴（北から）



第5号炉穴土層断面（北から）



第6号炉穴（西から）



第6号炉穴土層断面（南から）



第6号炉穴遺物出土状況（南から）



第7号炉穴（東から）



第7号炉穴床面断割（西から）



第7号炉穴土層断面（西から）

図版 46



第9号炉穴（北東から）



第8号炉穴遺物出土状況（西から）



第9号炉穴（東から）



第10号炉穴（南から）



第10号炉穴遺物出土状況（南から）



第11号炉穴（東から）



第12号炉穴（東から）



第13号炉穴（東から）





第1号火葬跡（東から）



第1号火葬跡遺物出土状況（東から）



第2号火葬跡（東から）



第2号火葬跡炭・灰・焼土出土状況（東から）



第7号土坑遺物出土状況1（南から）



第7号土坑遺物出土状況2（東から）



第10号土坑土層断面（南から）



第11号土坑（西から）

図版 48



第18号土坑遺物出土状況（北から）



第25号土坑遺物出土状況（南から）



第31号土坑遺物出土状況（南から）



第32号土坑遺物出土状況（南から）



第71号土坑遺物出土状況（南から）



第100号土坑土層断面1（北から）



第100号土坑土層断面2（近接 北から）



第100号土坑遺物出土状況（北から）



第 130 号土坑遺物出土状況 (北から)



第 135 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 136 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 137 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 144 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 168 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 218 号土坑遺物出土状況 (北から)



第 251 号土坑遺物出土状況 (東から)

図版 50



第 264 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 269 号土坑遺物出土状況 1 (東から)



第 269 号土坑遺物出土状況 2 (東から)



第 270 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 273 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 275 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 282 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 288 号土坑遺物出土状況 (東から)



第 301 号土坑遺物出土状況 (南から)



第 304 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 329 号土坑遺物出土状況 (南から)



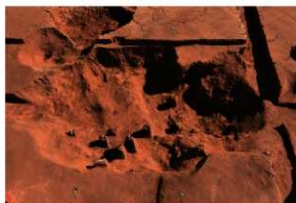
第 375・376 号土坑 (西から)



第 389 号土坑土層断面 (北から)



第 390 号土坑土層断面 (南から)



第 389・390 号土坑遺物出土状況 (西から)



第 423 号土坑 (東から)



第1号畠跡 (北から)



第1号性格不明遺構 (東から)



第2号性格不明遺構 (南から)



第3号性格不明遺構 (南西から)



第4号性格不明遺構 (東から)



第5号性格不明遺構 (東から)



第8号性格不明遺構 (北から)



第9号性格不明遺構 (東から)



AP-AS G P01 遺物出土状況 (南から)



AX-AR G P01 遺物出土状況 (西から)



BK-AL G P01 遺物出土状況 1 (東から)



BK-AL G P01 遺物出土状況 2 (東から)



東谷 (上が東)



西谷 (上が北)



東谷南壁土層断面 (北から)



東谷北壁土層断面 (南から)



西谷中央部トレンチ土層断面 1 (西から)



西谷中央部トレンチ土層断面 2 (東から)





第 26 图 1



第 26 图 2



第 26 图 3



第 28 图 1



第 28 图 2



第 28 图 4



第 28 图 5



第 28 图 6



第 28 图 7



第 30 图 5



第 30 图 1



第 30 图 2



第 30 图 3



第 30 图 6



第 32 图 1



第 32 图 2



第 30 图 7



第 32 图 3



第 32 图 4



第 32 图 7

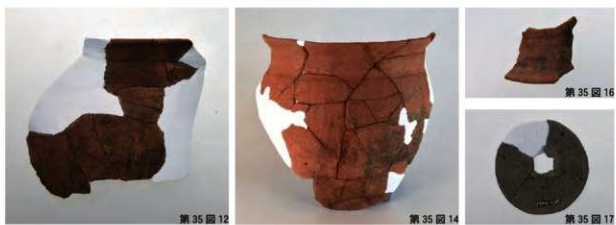


第 32 图 6



第 32 图 5

图版 56





第 39 图 1



第 39 图 3



第 39 图 4



第 37 图 5



第 37 图 6



第 39 图 6



第 39 图 5



第 41 图 3



第 41 图 4



第 41 图 5



第 41 图 7



第 41 图 10



第 41 图 12



第 41 图 11



第 41 图 13



第 41 图 14



第 41 图 8



第 41 图 9



第 41 图 15

图版 58



第 41 图 2



第 41 图 16



第 43 图 2



第 43 图 1



第 46 图 1



第 46 图 2



第 46 图 4



第 46 图 5



第 46 图 6



第 46 图 7



第 46 图 10



第 46 图 11



第 46 图 12



第 46 图 14



第 48 图 1



第 50 图 2



第 50 图 3



第 46 图 24



第 46 图 15



第 50 图 5



第 50 图 4



第 50 图 6



第 52 图 1



第 52 图 2



第 52 图 3



第 52 图 4



第 52 图 5



第 52 图 6



第 52 图 7



第 52 图 8



第 52 图 14



第 52 图 13



第 52 图 10



第 54 图 1



第 54 图 2



第 54 图 3



第 54 图 4



第 54 图 5



第 54 图 6



第 54 图 7



第 54 图 8



第 54 图 9







第 61 図 18



第 61 図 19



第 61 図 20



第 62 図 21



第 62 図 22



第 62 図 23



第 64 図 24



第 64 図 25



第 62 図 37



第 62 図 36



第 62 図 38



第 62 図 39 表



第 62 図 39 裏





第 65 图 1



第 65 图 2



第 65 图 4



第 65 图 6



第 65 图 7



第 65 图 8



第 65 图 9



第 65 图 10



第 65 图 11



第 65 图 12



第 65 图 13



第 65 图 14



第 65 图 15



第 65 图 16



第 65 图 17



第 65 图 18



第 65 图 19



第 65 图 20



第 65 图 21



第 65 图 22



第 65 图 23



第 65 图 26



第 65 图 31



第 65 图 33

図版 64



第 66 図 41



第 66 図 35



第 66 図 36



第 66 図 39



第 66 図 40



第 66 図 37



第 66 図 34



第 66 図 43



第 66 図 42



第 69 図 1



第 69 図 2



第 69 図 3



第 69 図 1



第 69 図 4



第 69 図 5



第 69 图 6



第 69 图 7



第 69 图 8



第 69 图 9



第 69 图 12



第 69 图 15



第 69 图 13



第 69 图 14



第 70 图 16



第 70 图 18



第 70 图 17



第 73 图 1



第 73 图 2



第 73 图 4



第 73 图 6



第 73 图 7



第 73 图 12



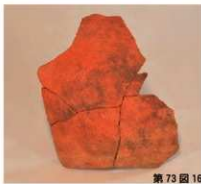
第 73 图 10



第 73 图 11



第 73 图 13





第 79 图 4



第 79 图 9



第 79 图 10



第 79 图 11



第 79 图 12



第 79 图 14



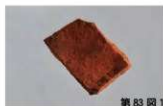
第 79 图 15



第 79 图 16



第 81 图 1



第 83 图 1



第 81 图 1



第 83 图 2



第 83 图 3



第 83 图 4



第 83 图 5



第 83 图 7



第 83 图 10



第 83 图 11



第 83 图 12



第 83 图 13

図版 68





第 91 图 19



第 94 图 1



第 91 图 16



第 91 图 17



第 94 图 2



第 94 图 3



第 94 图 5



第 94 图 4



第 94 图 6



第 94 图 7



第 94 图 8



第 94 图 9



第 94 图 10



第 94 图 11



第 94 图 14



第 94 图 17



第 94 图 15



第 94 图 16



第 94 图 19

図版 70







第 101 图 11



第 103 图 1



第 103 图 2



第 106 图 3



第 103 图 3



第 106 图 1



第 106 图 4



第 106 图 6



第 106 图 7



第 106 图 5



第 108 图 1



第 108 图 2



第 108 图 4



第 108 图 3



第 108 图 7



第 108 图 1



第 108 图 6



第 108 图 8

图版 72



第 108 图 5



第 108 图 9



第 108 图 10



第 108 图 5



第 108 图 11



第 108 图 12



第 108 图 13



第 108 图 14



第 108 图 15



第 108 图 16



第 110 图 1



第 110 图 2



第 110 图 3



第 110 图 4



第 110 图 5



第 110 图 6



第 110 图 7



第 110 图 9



第 110 图 10



第 110 图 11



第 110 图 13



第 110 图 14



第 112 图 1



第 112 图 2



第 112 图 3



第 114 图 1



第 114 图 2



第 114 图 3



第 114 图 4



第 114 图 5



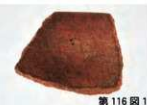
第 114 图 8



第 114 图 7



第 114 图 9



第 116 图 1



第 116 图 2



第 116 图 3



第 119 图 1



第 119 图 2



第 119 图 4



第 119 图 5



第 119 图 6



第 119 图 7



第 119 图 10



第 122 图 1



第 122 图 3



第 122 图 5



第 122 图 2



第 122 图 4



第 122 图 5

図版 74





第127图3



第127图4



第127图5



第127图6



第127图7



第127图8



第127图9



第127图10



第130图1



第127图11



第130图2



第130图3



第130图4



第130图5



第130图6



第130图7

图版 76



第 130 图 9



第 130 图 10



第 130 图 13



第 130 图 11



第 130 图 12



第 130 图 13



第 130 图 14



第 130 图 15



第 130 图 16



第 133 图 1



第 133 图 2



第 133 图 3



第 133 图 4



第 133 图 7



第 133 图 12



第 133 图 14



第 133 图 11



第 133 图 9



第 133 图 16



第 133 图 17



第 133 图 18



第 133 图 19



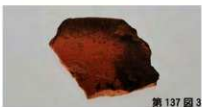
第 134 图 23



第 137 图 1



第 137 图 2



第 137 图 3



第 137 图 4



第 137 图 5



第 137 图 6



第 137 图 7



第 137 图 9



第 137 图 11



第 137 图 13



第 137 图 14



第 137 图 16



第 137 图 17



第 137 图 18



第 137 图 19



第 137 图 20



第 137 图 21



第 137 图 23



第 137 图 22



第 137 图 24



第 138 图 26



第 138 图 28



第 138 图 28



第 137 图 25



第 138 图 29



第 138 图 30



第 144 图 1



第 144 图 2



第 144 图 3



第 144 图 4



第 144 图 5



第 144 图 1



第 144 图 6



第 144 图 7





第 144 图 8



第 144 图 9



第 144 图 10



第 144 图 11



第 144 图 12



第 144 图 15



第 144 图 18



第 144 图 19



第 144 图 20



第 144 图 21



第 144 图 22



第 144 图 17



第 148 图 1



第 148 图 2

図版 80



第 151 図 1



第 151 図 2



第 151 図 3



第 151 図 4



第 151 図 9



第 145 図 24



第 151 图 6



第 151 图 7



第 151 图 5



第 155 图 2



第 155 图 1



第 155 图 3



第 155 图 4



第 155 图 5



第 155 图 1



第 155 图 3



第 155 图 6



第 155 图 8



第 155 图 9



第 155 图 10



第 155 图 11



第 155 图 12



第 155 图 13



第 155 图 15



第 155 图 16



第 155 图 17

图版 82





第 162 图 1



第 162 图 2



第 162 图 3



第 162 图 1



第 162 图 2



第 162 图 4



第 162 图 5



第 162 图 6



第 162 图 7



第 162 图 8



第 162 图 9



第 162 图 10



第 158 图 9



第 162 图 11



第 162 图 12



第 162 图 14



第 165 图 1



第 165 图 2



第 165 图 1



第 165 图 4

图版 84





第 168 图 12



第 168 图 13



第 168 图 14



第 168 图 15



第 168 图 16



第 171 图 1



第 173 图 4



第 171 图 4



第 171 图 6



第 173 图 4



第 173 图 2



第 171 图 8



第 173 图 5



第 175 图 1







第 181 图 13



第 181 图 14



第 181 图 15



第 181 图 17



第 181 图 18



第 181 图 19



第 184 图 1



第 184 图 2



第 184 图 3



第 184 图 4



第 184 图 1



第 184 图 2



第 184 图 5



第 184 图 7



第 184 图 8



第 184 图 9



第 184 图 10



第 184 图 11



第 184 图 12



第 184 図 13



第 184 図 15



第 184 図 18



第 184 図 20



第 184 図 16



第 186 図 2



第 186 図 4



第 186 図 1



第 186 図 3



第 186 図 5



第 189 図 1



第 189 図 2



第 186 図 6



第 189 図 3



第 189 図 4



第 189 図 5



第 189 図 7



第 189 図 9



第 189 図 8



第 189 图 10



第 191 图 1



第 194 图 1



第 189 图 12



第 191 图 2



第 194 图 2



第 194 图 3



第 194 图 4



第 194 图 10



第 194 图 5



第 194 图 4



第 194 图 6



第 194 图 7



第 194 图 9



第 194 图 11



第 197 图 1



第 197 图 2



第 197 图 3



第 197 图 4



第 197 图 5



第 200 图 1

图版 90



第 200 图 2



第 200 图 3



第 200 图 5



第 197 图 6



第 203 图 8



第 203 图 9



第 203 图 10



第 203 图 1



第 203 图 2



第 203 图 3



第 203 图 4



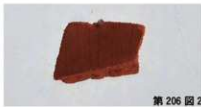
第 203 图 5



第 203 图 7



第 206 图 1



第 206 图 2



第 206 图 3



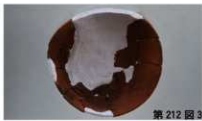
第 206 图 4



第 206 图 5



第 206 图 6





第 217 图 10



第 217 图 11



第 221 图 6



第 221 图 1



第 221 图 2



第 221 图 3



第 221 图 4



第 221 图 5



第 219 图 1



第 219 图 2



第 223 图 1



第 223 图 2



第 225 图 1



第 225 图 2



第 229 图 4



第 146 图 1



第 229 图 1



第 229 图 2



第 229 图 3



第 229 图 4



第 248 図 1 ~ 3



第 248 図 4 ~ 7



第 270 図 1 · 2 · 9 · 10, 11 ~ 14, 17 · 19, 18 · 20 · 21



第 248 図 8



第 270 図 4



第 271 図 23 ~ 26 · 28, 29 · 30 ~ 27



第 271 図 31 ~ 34, 35, 39 · 36 ~ 38



第 271 図 40 ~ 42, 43 · 第 272 図 44



第 270 図 3 · 5 · 8, 6 · 7



第 272 図 51 ~ 54



第 272 図 45 ~ 47, 48 ~ 50



第 272 図 57 ~ 59



第 270 図 15 · 16



第 272 図 60



第 273 図 61 · 62 · 67 · 66 · 63 · 64 · 68



第 273 図 65



第 273 図 70



第 273 図 69 · 71 · 72 · 74 · 73



第 275 図 1



第 275 図 2



第 273 図 75 ~ 78 · 79



第 275 図 3



第 275 図 4





第 279 图 2·1·3、4·5、6·7



第 279 图 10~13、14·17·18、19



第 279 图 20·21、22·23



第 279 图 9



第 280 图 32



第 280 图 29~31·33、34·35、36~38



第 279 图 15·16



第 279 图 15·16



第 279 图 24~26、27·28



第 280 图 40~42



第 279 図 8



第 325 図 25-1



第 325 図 69-1・32-1・21-1・11-1,  
71-1・16-1・63-1・79-1・69-2



第 328 図 172-1・165-2・168-1・206-1・2・241-1,  
185-1・164-1・243-4・3・222-2・1・3,  
218-1・164-2・203-1・198-1・164-3・4, 165-1・223-1



第 330 図 269-1・6・2・4, 269-3・266-1・269-7～11



第 329 図 251-3・2・5, 251-1, 243-12・8・251-6・4



第 325 図 7-1



第 326 図 80-1 ~ 3 · 90-1 · 100-1 · 2, 100-3 ~ 6, 100-7 · 108-1 · 2 · 114-1 · 119-1,  
130-8 · 1 ~ 3, 100-8 · 130-4 ~ 7



第 325 図 31-1



第 327 図 144-1



第 327 図 131-1 · 132-1 · 137-1 · 135-2 · 131-2 · 135-1,  
154-1 · 150-1, 137-2 · 130-9 · 134-1 · 151-1,  
162-1 · 159-1 · 144-2



第 330 図 269-5



第 330 図 264-1



第 331 図 282-1 · 2 · 270-1, 282-3, 278-1 · 282-4 ~ 6

図版 98



第 332 図 290-1・2・391-1・301-2・3, 301-4・304-1・301-5,  
301-6・275-1・288-1, 304-2・288-2



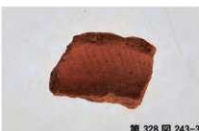
第 333 図 327-1・350-1・379-1・366-1・379-2・377-1・380-1,  
449-1~4, 381-1・328-1・425-1・422-1・450-1・349-1



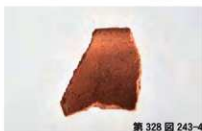
第 328 図 243-1



第 328 図 243-2



第 328 図 243-3



第 328 図 243-4



第 328 図 243-5



第 284 図 1~5, 6~9



第 328 図 243-6



第 329 図 243-10



第 329 図 263-1



第 329 图 263-2



第 335 图 1



第 345 图 1



第 347 图 1 · 2



第 347 图 9



第 347 图 6 · 8 · 11, 13 · 14 · 18



第 347 图 9



第 347 图 5 · 7 · 10 · 12, 15 · 17 · 16



第 347 图 4



第 352 图 12



第 352 图 13

図版 100



第 352 図 14



第 352 図 15



第 352 図 16



第 352 図 17



第 352 図 18



第 352 図 19



第 352 図 20



第 352 図 21



第 352 図 22



第 352 図 23



第 352 図 25



第 352 図 24



第 352 図 26



第 352 図 27



第 352 図 28



第 352 図 29



第 352 図 30



第 352 図 31



第 352 図 32



第 352 図 33



第 352 図 34



第 352 図 35



第 352 図 36



第 352 図 37



第 351 図 1~3, 4~6



第 351 図 8・7, 10・9



第 352 図 11・38, 40・39



第 353 図 41~43, 45・47・48, 46・44・49・50



第 354 図 8・9, 12~14



第 354 図 10



第 354 図 11



第 355 図 1~4



第 354 図 1~4, 5~7

图版 102



第 356 图 5-9, 10-11, 14-16, 18-20, 21-23, 25



第 356 图 26-28, 30-31, 33-39, 44-45, 40-43, 46-47



第 356 图 12-13, 17, 32-29, 22



第 357 图 48-52, 55-54, 53-56, 57, 58-65, 66-69



第 357 图 70-74, 75-78, 79-81



第 358 图 82-85, 87-92, 88-90, 89-86, 91-94, 93-95-97, 98-99



第 359 图 100-104, 105-110, 112-114



第 360 图 117-116, 119-118



第 361 图 126





第 361 图 121 · 123, 124 · 125 · 128



第 360 图 115



第 359 图 111



第 360 图 120



第 361 图 122



第 362 图 131



第 362 图 134 · 137 · 140, 133 · 136 · 139, 129 · 130 · 132 · 135 · 138



第 363 图 143



第 363 图 141



第 363 图 144



第 363 图 147



第 363 图 150



第 363 图 157 · 154 · 156, 163 · 162, 148 · 142 · 151 · 152 · 158, 146 · 145 · 161, 149 · 159 · 155 · 153



第 363 图 160



第 364 图 170~172, 173, 174~176



第 364 图 177~180, 181 - 185, 182~184



第 364 图 164~166, 167~169



第 364 图 186~188



第 364 图 189 - 190



火葬跡骨



火葬跡骨



第46 図 17・16・19・第62 図 30・32・31・第91 図  
18・第94 図 22, 第122 図 8・第134 図 20・第138  
図 31~33・第145 図 23・第155 図 27・26, 第189 図  
11・第328 図 164-5・第365 図 193・194・192・195



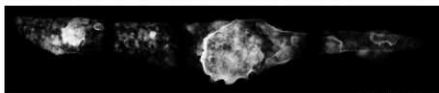
第46 図 23・21・第52 図 12・第62 図 27・26,  
第94 図 21・第138 図 34・35, 第155 図 24・第162 図 13,  
第173 図 7・6・第178 図 12・11・10,  
第181 図 20・第184 図 21・第331 図 273-1・第365 図 200



X線  
第155 図 26



X線 第91 図 18



X線 第155 図 24



X線 第365 図 200



X線 第52 図 12



X線 第94 図 21



X線 第162 図 13



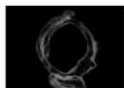
第41 図 18・第46 図 18・第50 図 7・第52 図 11・第62 図 29,  
第62 図 28・第134 図 21・第138 図 37・36・第155 図 29, 第270 図 22・第225 図 4



X線 第41 図 18



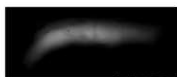
X線 第50 図 7



X線 第134 図 21



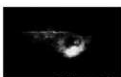
X線 第52 図 11



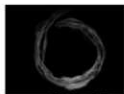
X線 第62 図 29



X線 第46 図 18



X線 第178 図 10



X線 第62 図 28



X線 第155 図 29

図版 106



第 41 図 19・第 122 図 9、第 122 図 10・第 217 図 12・第 327 図 163-1



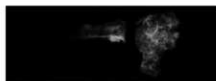
X線 第 155 図 25



X線  
第 365 図 191



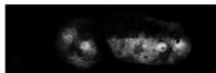
第 200 図 4・第 365 図 203・202、第 325 図 18-1・第 280 図 39・第 365 図 201



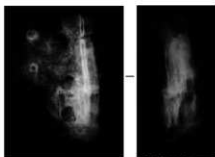
X線 第 46 図 22



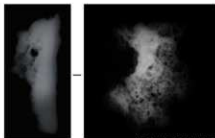
X線 第 46 図 20



X線 第 353 図 51



X線 第 365 図 198



X線 第 272 図 55



第 46 図 20・第 365 図 198・第 98 図 7・第 46 図 22、

第 353 図 51・第 41 図 17・第 119 図 9・8・第 155 図 28・第 365 図 196・197、

第 155 図 25・第 365 図 191・第 138 図 27・第 272 図 55



第 62 图 34 · 第 138 图 40 · 45 · 42, 第 134 图 22 · 第 138 图 47 · 41 · 46,  
第 138 图 39, 第 272 图 56 · 第 62 图 35 · 第 328 图 164-6 · 第 365 图 199



第 62 图 33



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 F-6 5mm



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 F-6 1mm



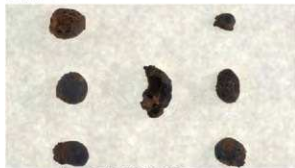
第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 F-6 3mm



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-6 1mm



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-6 3mm



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 5mm(1)



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 5mm(2)



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 1mm(1)



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 1mm(2)



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 3mm(1)



第 46 号竖穴建物跡 粒状滓 D-5 3mm(2)



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-7 1mm



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-7 3mm

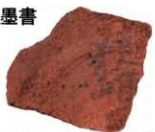


第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-7 5mm



第 46 号竖穴建物跡 鍛造剥片 D-6 5mm

墨書



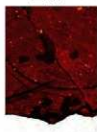
第 363 図① 補正前



同左 補正後



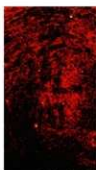
第 184 図④ 補正前



同左 補正後



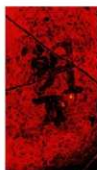
第 209 図② 補正前



同左 補正後



第 94 図③ 補正前



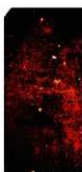
同左 補正後



同右 補正済



第 162 図⑤ 補正前



同左 補正後



第 112 図⑥補正前



同左 補正後



第 168 図⑦ 補正前



同左 補正後



第 83 図⑧ 補正前



同左 補正後



第 73 図⑨ 補正前



同左 補正後



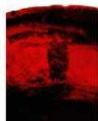
第 206 図⑩ 補正前



同左 補正後



第 186 图①外面 修正前



同左 修正後



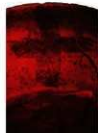
第 186 图①内面 修正前



同左 修正後



第 171 图② 修正前



同左 修正後



第 94 图③ 修正前



同左 修正後



第 347 图④ 修正前



同左 修正後



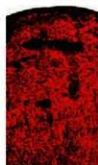
第 32 图⑤ 修正前



同左 修正後



第 101 图⑥ 修正前



同左 修正後



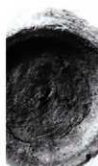
第 162 图⑦ 修正前



同左 修正後



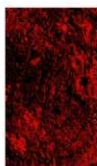
第 65 图⑧ 修正前



同左 修正後



第 83 图⑨ 修正前



同左 修正後





第 184 図② 補正前 同左 補正後



第 133 図② 補正前



同左 補正後



第 119 図② 補正前



同左 補正後



第 61 図② 補正前



同左 補正後



第 275 図② 補正前



同左 補正後



第 184 図③ 補正前



同左 補正後



第 65 図② 補正前



同左 補正後



第 65 図③ 補正前



同左 補正後



第 94 図② 補正前



同左 補正後



第 363 図② 補正前



同左 補正後

刻書



第 184 図③ 補正前



同左 補正後



第 347 図③



第 162 图 14 第 52 号竖穴建物跡出土隸刻磁石

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みやしたいせき							
書名	宮下遺跡Ⅲ							
副書名	—							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編集者名	藏持 俊輔 大野 美知子 島村 範久 武部 喜充							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2018(平成30)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやしたいせき 宮下遺跡	<small>みやがやしせんたいみやしたいせき</small> 熊谷市千代字宮下 703番1,704番1～6, 705番1,706番1～13, 711番1,712番1, 716番1,717番, 718番1,719番1, 722番1, <small>みやがやしせんたいみやしたいせき</small> 字押出 123番1～7, 124番1～10	11202	65-013	36° 07' 29"	139° 19' 38"	20160122 ～ 20170531	31,183.79	物流センター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮下遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 室町時代	竪穴建物跡80軒 掘立柱建物跡16棟 溝跡80条 土取り遺構14基 井戸跡7基 炉穴14基 火葬跡2基 土坑447基 畠跡1箇所 性格不明遺構10基 谷状地形2箇所 ビット1392基	縄文土器・須恵器・土師器・形象埴輪・土製品・石器・石製品・鉄製品・鍛冶滓・銅製品	縄文時代早期の条痕文系土器及び炉穴・土坑を検出した。古代は、本調査成果の主体であり、集落として8世紀中頃から11世紀にかけて存続したことが判明し、9世紀頃の小鍛冶工房跡も検出している。発掘成果から寺内廃寺に関わる集落の可能性がうかがえた。また、神像を線刻したとみられる砥石が出土した。 14～15世紀の長大な大溝が確認され、構造及び周辺地名から牧施設の可能性がある。			

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書

宮下遺跡Ⅲ

平成30年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷 株式会社